KAIZO

改造

七月號

志賀直哉著

(最新刊)

山科の記憶

現代作家中に在つて志賀氏程藝術に精進する徒があらうか。時流にこびず、表現の奇をてらはず飽くまでも事實を凝視し道徳的内省の上に、一言一句もゆるかせにせず浮彫して行く氏のリアリズムの手法は、藝術の法悦境たる無我の世界を描出せしめてゐる。眞に藝術的な作品に觸れんと欲する人々には、志賀氏の作品を薦むるに躊躇しない。「暗夜行路」に心醉せる讀者は亦、氏が短篇作家として如何に秀れた藝術的才能にめぐまれてゐるかを知るであらう。

内容

四六判極美装
二百四十二頁
定價一圓五拾錢
送料二十錢

創作集 壽々
定價二圓五拾錢
送料二十二錢

創作集 雨蛙
定價二圓五拾錢
送料二十二錢

改造社
東京市内麹町區内幸町
幸ビルデイング一階
振替東京 八四〇二番
電話銀座（一五四四）一七〇五 三五四四 二八六番


SALOMETHYL
Analgesic and Counter Irritant
Sole Distributors
TANABE & Co. Ltd.
サロメチール
痛みある患部に塗擦して即効ある
外用鎭痛藥
單に患部に塗擦するのみにて、上皮より直ちに吸收され、快き温熱感を與へ、劇甚なる疼痛は極めて愉快に消失す。
その効力頗る迅速、注射又は劇藥にあらずしてサロメチールの如く即効ある鎭痛藥は他に殆んど類例を有せず。
ロイマチス
神經痛
肩凝・腰痛
運動競技による
打撲・筋痛
二五瓦……一圓
七五瓦……二圓五十錢
各地藥店にあり
株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

改造　七月特別創作號　目次

久米正雄著

木靴

著者の言葉

此の木靴は、吾らが愛する、シャルル・ルイ・フイリツプの親爺が、作つたものではない。が、もとを訊せば幾らか佛蘭西出來の匂ひが、無いとは云へない。尠くとも此の國でサボタージュといふ一番面白い勞働運動が輸入されて、電車でさへその木靴を穿いたことがあるのだから、私がその影響を受けて、それに似たものを自ら作り、且つ悠々と穿いて歩いたとて、人は咎めはしないだらう。事實、これらの木靴は、此の一兩年の湘南の閑居で、充分怠業氣分の中に、作るともなく作つたものだ。が、元來木靴と云ふものは、さう云ふ氣持で作つた方が、面白いものが出來ると見えて、自分でも相應に氣に入つたものが、少し溜つて來たので、或ひは同好の士もあるかと思ひ、茲に賣り出して見る事にした。穿き心地はそんなに惡くない積りだ。それに、作つた時の氣持でいろ〳〵な形があるから、選り取りは自在だ。自家穿きは勿論だが、中には婦人用のもあれば、大衆向きなのさへある。形は變つて居るが、どれにも、製作者の刻印は打ち込んである積りだ。世上には、ゴム靴でなければ、此の時代に適合しないから、こんな木靴は無用だと云ふ人があるかも知れない。が、時には、まアかう云ふものを穿いて見て呉れ給へ。ちよいと洒落れてゐて、ちよいとプロヴアンスの地味があつて、ちよいと古風で、ちよいと愛すべきものが無いとは限らないから。………

最新刊 ◆ 四六判上製 三六八頁 ◆ 定價貳圓 送料十八錢

發兌 東京市麹町區内幸町 幸ビルディング一階 振替東京八四〇二番

改造社


カルピス
滋強飲料

蔣介石を戒む

蔣介石を代表とする南方革命軍はとにかく或る主張の下に軍旅を進めてをるだけに、そして多年訓練せる手兵と、革命の思想にもえ、革命の事業に理解ある青年士官を多く有してをるだけに相當の成果を齎らすべく期待される。しかし今日までの成功には共產黨一派の共同戰線が與つて大きなる力であつたことは否めない。思想的にも——ただしは物的にも——しかるに今や蔣はこの共同者と一絕し、あやしげなる三民主義で國民革命を決行せんとしてゐる。三民主義なるものに近代的の理想なく、また近代的大衆によびかけ、動かすなにものもない。彼等は中國の「自由平等」を獲得するのが窮極の目的で、それが爲めに「打倒帝國主義」の一枚看板を振り廻はしてゐる。しかしその自由平等なるものがどれほどの共鳴を現代に克ち得るかを思ふとき此國民革命がどれほど成功するかを直覺直斷し得る。殊に近時に至り蔣が北方軍閥との妥協氣分が滿溢してきたのは此革命の前途が必ず大失敗に終るであらうことを裏書するものだ。內に對して根本的主張を疏へすものは、列强へ對しても權威を保維することは出來ない。自己の功名に專らであり目急であるものは意義ある大業を遂げることは出來ない。殊に革軍の旗印の一つであつた「打倒北方軍閥」に對し一脈の妥協氣分を漂はしきたところに此國民革命軍への感激性は露と消えた。深刻に進むべき大旆と理想とがなかつた此革命はかくしてすべての中旆、小旗に至るまで鮮かな光を失ひ、すべての點に於て去勢されんとしてゐる。苦難を厭ふ色が見えたとき其大業の峠は見えたのだ。我々は彼等が四十年の苦節を妥協苟安に資らんとする腑甲斐なさを憫むものだ。蔣が共產派を逐ふたのは丁度我民衆黨が衛多左翼の最新鋭を失ひたるにも髣髴して今では何もののピリットひびき突くものを持ち合はしてゐない。陳、李、劉、孫科の徒と離れ、それこそ「頭腦混亂」の狹い持主の同志のみでどれほどの成果を擧げ得るであらうか。

中國國民黨は我國の既成政黨ほど低調なものではないが、しかしすべての政綱が時代にそはず、低調平板で、疎枝大葉であることは事實である。そして血みどろの被壓迫階級の辛慘に意識せる權威ある主張がない。從つてその結果に歷史的意義がどれほど期待さるるかも問題である。蔣介石は今や昔日のことを打ち忘れて新軍閥の頭目となり了つた。だが、我々の眼は閻、張に對し彼がいかなる態度に出るかに光る。みいら取りは既に半ばみいらになりかけてゐる。一步退けばもうそこは奈落の淵だ。曾つて「十萬の軍を失ふも介石を失ふを願はず」と孫文より重期された彼に我々は悵然たる感慨の湧くを悲しむ。だが、彼の前路は尙ほ展開の餘地あればこれ位の苦言を呈するにとどめる。終に我當局は支那領土より一日も早く撤兵すべきである。一日を寬ふすれば彼我の溝渠はますく深み行くばかりであるから。

マルクス無神論と其歪曲

佐野學

(一)政治闘爭の一環としての宗教克服

(1)無神論の政治的意味

マルクスの『ヘーゲル法律哲學批判』の冒頭には次の有名な言葉がある。

『宗教の批判はあらゆる批判の前提である』

『眞理の彼岸が消滅した後、此岸の眞理を設定することは歷史の任務である。人間の自己外化の神聖な姿が假面を剝がれた後、その神聖ならぬ姿における自己外化の假面を剝ぐことが、歷史に仕へる哲學の先づ第一の任務である。かくて天國の批判は地上の批判に、宗教の批判は法律の批判に、神學の批判は政治の批判に變じてくる。』

實際、無產階級は自己階級解放のための——そして自己階級と、、、、、、、、、、、、、、、、——、、、、、、、世界觀、、、、、、、、、、、あるマルクス主義に到達するために、先づ舊世界觀の強大な部分である一切の有神的觀念を克服せねばならぬ。無神論は唯物論を哲學的基礎とするマルクス主義の當然の歸結である。神又は佛といふ超自然的超人間的力を假定することは、舊來の階級社會の社會的經濟的根據と照應して、あらゆる流派の觀念論と結び付き、且つ大衆の間になほ深く信仰となつて滲み入つてゐる。無產階級は此蜘蛛の巢から脫却した後に始めて『政治の批判』の理論的實踐的任務を果たすことができる。

日本の無產階級は昨年以來、はじめて一般的な政治過程に入つたと言ひ得る。階級闘爭が政治的地盤の上に廣汎且つ深刻に展開し始めてゐる。かゝる客觀的現實の急激な變化はわが國の社會主義の陣營內において、舊來の單純な經驗主義の基礎に立つてゐた折衷論的見解を一淸算し、、、、、、、、の正統的方面——唯物辨證法、、、、、、

、、——、力強く基礎附けようとしてゐる。しかし言ふまでもなく、、、、、、、、。吾々は哲學、歴史、政治、經濟、階級等の諸方面に於て一層精力的、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

宗教はわが社會主義者の最も多く取り殘してゐた方面であつた。しかし宗教の本質と是に對する戰術を明確に決定することは、一般に社會主義的世界觀を確立する上に必要であるのみならず、また一の政治的必要でもある。社會主義は一切の超人間的、非人間的範疇を、、、る。神佛から出發する宗教と、精神又は思惟といふ、、、、、、、哲學上の觀念論とは、無産階級の世界觀の敵である。これらのものの階級的性質を看破しなければ明確な政治的認識を獲得することができない。更に今日の歴史的段階の下にわが無産階級が負ふてゐる政治的任務は特に宗教に對する明確の態度を要求する。わが無産階級の直接當面の歴史的任務は所謂ブルジョア、デモクラシーの獲得にある。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。この闘爭は必然に一層高い闘爭と結びつく。然るに宗教は吾國においても勞働者の一部や大多數の貧農や小市民の間に深く喰ひ入つて居り、寺院と僧侶とは中世的機構を保ちつつ、しかも直接間接にブルジョアの利益に奉仕して居り、他方に於て怜悧なる若くは狡猾なるわがブルジョアは此中世的機構に一種の綜合を施して宗教法案なるものまでを案出し、宗教を一層强烈な階級的支配の要具にしようとしてゐる。歐羅巴では世界戰爭後においてマルクス主義の陣營内においてすら宗教的思想が部分的に擴がつて居り、後に述ぶる如くカント的マルクス主義者マックス、アドラーの如きは斯くの如き非マルクス的思想を理論的に基礎付けようと試み居る。わが國においても斯くの如き思想が小ブルジョア分子に依つて無産階級運動の内部に持ち込まれる日があるであらうし、他方において反動主義者が宗教を意識的に利用しようとする意圖も既に見受けられる。わが無産階級は宗教の階級的政治的意義を理解することを知り、これと政治的に戰ふ道を知らねばならぬ。

(2) いかに戰ふか？

しかしマルクス主義は宗教が一定の社會關係の所産であることを知る。此故に單純なる理論的宣傳を以て宗教を絶滅しようと欲するブルジョア自由主義者や無政府主義者に反對し、むしろ斯くの如き幻想を生み出す社會的根據自體と戰ふことを力說する。宗教の克服は階級闘爭の具體的實踐と連關せしめねばならぬのであつて、こゝに宗教のブルジョア的克服とプロレタリヤ的克服との限界が有る。レーニンはこの點に關して次の如く言つてゐる。『(社會主義と宗教』一九〇五年の論文。)

『吾々はいかなる場合に於ても急進ブルジョア民主々義者のように、宗教問題を抽象的に、觀念論的に、『理性』から、階級闘爭の外に、提起してはならない。勞働大衆の無制限の壓迫と野蠻化との上に築かれてゐる社會に於て、純粹にプロパガンダを以て宗教的偏見を打破し得ると信ずるのは馬鹿々々しいことである。人類を壓してゐる宗教の重壓がこの社會内部の經濟的壓迫の産物であり反映であることを忘れるのはブルジョア的狹隘であらう。資本の暗黑な暴力と戰ふことに依つ

て啓蒙せずして、單に小册子やプロパガンダに依つてプロレタリアートを啓蒙することはできない。被壓迫階級が地上に樂園を作るために此の現實の、、、鬪爭に一致することは、プロレタリヤが天上に樂園についての意見の一致をするよりも一層重要である。』

エンゲルスはマルクスと同じくフオイエルバツハの唯物的自然觀人間觀から深い影響を受けたが、しかもフオイエルバツハが宗教一般を否定するのでなくて一の『高尙な』愛の宗教を見出さうとした不徹底を非難し、階級對立の社會において其全く空想であることを說明した。(『フオイエルバツハ論』)だが彼は宗教を一擧に廢除することを唱道した自稱無神論者デューリングの過激な主張にも痛棒を加へたのである。(『反デューリング論』)ラテン系の諸國の無政府主義者やブランキスト、ドイツのモスト一派等は宗教に對して極度の革命的文句を弄したが、かくの如きは警察力を以て舊教徒の政治的進出を妨害しようとして却て失敗したビスマルクの『文化鬪爭』と其無効果である點に於て相等しい。

各國におけるマルクス主義的政黨がその綱領のなかに特に無神論を書き入れてゐないのは、一般的階級鬪爭のなかに於て此問題を解決せねばならぬとする以上の理由に基いてゐる。ロシヤ共產黨の綱領のなかには、『一般的政治的範圍』の項のなかに宗教について次の如き規定がある。

『宗教に關して黨は教會と國家との分離、教會と學校との分離といふが如き、ブルジョア民主々義者の綱領の揭げてゐる手段だけで滿足するものでない。……黨は大衆の一般的經濟的の全活動の領域における計畫的、目的意識的の秩序の實現のみが宗教的偏見の死滅を結果することを確信する。黨は廣汎に組織された科學的、啓蒙的、反宗教的宣傳を通じて、勞働大衆を宗教的偏見から事實上に解放し、搾取階級と宗教的宣傳團體との間の紐帶を斷ち切ることに努力する。しかし其際信仰者の感情を害することを注意深く避けねばならぬ、何となれば斯くの如きは單に宗教的狂信を打ち堅めるに過ぎないから。』

マルクス主義は宗教克服の基礎的戰術として『宗教は私事なり』といふ原則を有してゐる。これは宗教が各個人の自由であるとか、宗教は放擲しておけばよいといふ意味でない。宗教が國家に對する關係に於て私事たることの政治的要求である。國家が宗教的團體と關係せざること、信教の自由を完全に認むること、學校と教會とを分離すること等の要求である。各國の日和見主義者はこの原則を、宗教は各個人の私事であるといふ風にゆがめた。昨年採用された墺太利社會黨の綱領は明白に『宗教は各個人の私事である』と規定した。既にマルクスはゴータ政綱批評に於て宗教を私事と見るが如き非政治的思想を嘲笑したが、その思想は日和見主義の諸黨に依りて裏切られつつある。

(二)奴隸の思想としての神性觀念

(1)唯物論と無神論

マルクス主義の哲學的基礎は唯物論である。從つて無神論は必然に其世界觀の一部分である。唯物論といふ言葉は屢々ブルジョア哲學者を胴慄ひさせるが、哲學上の唯物論は勿論、ブルジョアの現實の生活原理たる所謂物質主義——牛飮馬食主義——とは異つてゐる。唯物論

は一切の超自然力、超人間力を否定し、世界の目的論的説明を否定し、あらゆる實有、あらゆる現實を物質の運動に還元し、世界がそれ自體にて生成し生長することを證明する唯一の科學的な世界觀である。精神、思惟といふような神秘なる創造者を假定する觀念論は必然に信仰と結びついてゐる。思惟と實有との自同性は唯物論に依つてのみ說明せられ得る。感覺と思惟とは同一の根源を持ち、同一の發展の異れる段階を表はしてゐるものであり、物質の感覺性と精神性とは自然一般の發展史の過程の異れる表現である。觀念論者は唯物論を指して形而上學だと言ふが、唯物論がその認識論を思惟と感覺との同種性に基礎付ける限り、それは唯一のアンチ形而上學である。觀念論は哲學と科學との必然的連結を基礎付けることができず、その哲學は根本に於て宗教と同じく信仰の事柄となる。

唯物論は昔から不可避的に觀念論の敵であると同時に超自然力の信仰に敵對するのである。宗教反對は全唯物論に共通する。從つて無神論を缺くマルクス主義なるものはない。

いかなる新學說も、それがいかに獨創的であつても突然に天から降るものでない。マルクスとエンゲルスは既存の三つの主要な思惟材料——ドイツの哲學、イギリスの經濟學、フランスの社會主義を——採つて無産階級の實踐原理たる科學的社會主義を建設した。彼等のスツルム・ウンド・ドラング時代に特に強烈なフオイエルバツハの唯物的自然觀人間觀が影響したことはメーリングの編んだ『遺稿集』のなかの初期論文を見れば明かである。フオイエルバツハは『神は自己に似せて人間を作つた』といふ傳統思想を顚倒して『人間は自己に似せて神を作つた』といふ論綱を確立した。この思想は獨佛年報時代のマルクス、エンゲルスのどの論文にも現れてゐる。

(2) 上部建築としての宗教

しかしマルクス主義が一切の舊唯物論と異る點は唯物論が歴史に、社會科學に適用されたことに在る。マルクスが『フオイエルバツハ・テーゼ』に簡潔に規定した如く、舊唯物論は行動的方面になると忽ち觀念論を持ち込んでゐたのである。マルクス主義に至つて始めて自然と歴史とが因果法則に從つて合法則的に發展する過程として把握せられた。エンゲルスのいふ如く、舊唯物論も歴史哲學も歴史の究極原因を歴史上に働いてゐる觀念的衝動力と決めてかゝつてゐたのであるが、『この衝動力の衝動力』を成すものが何であるかを研究しなかつた。『行動する人々とその指導者——謂はゆる偉人——の頭腦の中に、明瞭に乃至は不明瞭に、直接に乃至は觀念的な姿となつて、甚しきは天上界の形をとつて、意識的動因として反映してゐるところの起動的原因を解明すること——これこそ全體としての歴史、並に個々の時代および個々の國の歴史を支配してゐる法則の發見に、吾々を導き得る唯一の道である。』(『フオイエルバツハ論』)そしてこの歴史最終の起動力が物質的生産關係に外ならないことを發見したのがマルクス、エンゲルスの劃期的な功績なのである。宗教といふ精神的所産も單にフオイエルバツハの如く之を人間の所産と見るだけでは足りない。宗教もイデオロギー一般とひとしく、社會的存在に依つて、根本的には物質的生産關係に依つて決定される。『意識とは意識された存在に外ならぬ、そして人間の存在とはその現實の生活過程である』『宗教はそれ獨得の

歴史を、發展を有しない』(ドイッチェ、イデオロギー)『古い生活關係の解體と共に古い思想が解體する』『近世の宗教の自由とは心意の領域における自由競爭の支配に外ならぬ。』(共產黨宣言)資本主義社會に宗教の存續するのは、資本主義自體の作り出す無政府的生産の盲目な力が人間の頭腦に一の對抗すべからざる外力として反映するからである。『今日のブルジョア社會においては、人間に彼等自身の創造せる經濟關係によつて、彼等自身の生産せる生産手段によつて、恰も或る外部的な力によつての如くに、支配される。だからそこには宗教的反射作用の事實的基礎が存續してゐるのであつて、この基礎と相俟つて宗教的反射そのものもまた存續する。』(反デューリング論)宗教が現實に消滅するのは『社會が全生産手段、、、、、、、、、、によつて自分自身並にあらゆる成員を奴隷狀態から解放する』(同上)が如き生産關係の成立する社會に於てのみ可能である。

(3) 宗教は民衆のための阿片

マルクスは『宗教的苦難は一つには現實的苦難の表現であると共に又一つには現實的苦痛に對する抗辯である。……宗教は民衆のための阿片である』と書いてゐる。(『ヘーゲル法律哲學の批判』)大衆の眼に不可抗な超自然力として映る神なるものの實體は、實は人間社會の生産關係特に階級關係の反映に外ならない。レーニンは次の如く言ふ。(『社會主義と宗教』)

『勞働者の經濟的壓迫は不可避的にあらゆる種類の、、、壓迫と社會的窮乏とを作り出し、大衆の精神的道德的生活を野蠻と萎縮とに導く。……、、は他人のための永久なる勞働、窮乏と孤獨とに依つて抑壓されてゐる大衆を至る所で惱ましてゐる一種の精神的壓迫である。搾取者に對する鬪爭における被壓迫階級の無力は不可避的に彼岸におけるより善き生活への信仰を導き出す、それは丁度、自然との鬪爭における野蠻人の無力が神々、惡魔、奇蹟其他の信仰を呼びおこすのと同じである。生涯中、働いて窮乏に苦しむ人間に對して、宗教は屈從と忍耐とを教へ、天國での報ひの希望を以て慰める。だが他人の勞働で生活してゐる人間に對しては、宗教は地上での幸福を教へる。宗教は民衆のための阿片である。、、、資本の奴隷の人間的容貌や最小の人間的生存欲をも滅ぼしてしまふ惡酒である。だが自己が奴隷であることを意識し自己の解放のために起ちあがつたところの奴隷は、もはや半分奴隷でなくなつたものである。大工業によつて教育され都市生活によつて啓蒙された、階級意識ある近世勞働者は、宗教的偏見を輕侮するに至り、天國を坊主やブルジョア信者にまかせておき、地上のより善き生活のために鬪爭するに至る。今日の勞働者は、、、、の方へ來りつつある。、、、、、宗教的迷妄を破る科學であり、勞働者を彼岸の生活の信仰から解放し、地上の善き生活のための眞の鬪爭に彼等を結合するのである。』

レーニンは『勞働者の黨の宗教に對する關係について』(一九〇九年)といふ論文にも、資本主義社會における不意の失業、窮乏、零落が大衆の恐怖を惹き起し、それが大衆の間に宗教の根源として作用することを鮮明に叙述してゐる。

今一つレーニンを引用しよう。彼が一九一三年にゴルキイに與へた手紙に次の一節がある。(カメネフ編『ゴルキイへの手紙』)

『神とは（歷史的にも實際的にも）何よりも先づ人間の魯鈍な被壓迫性と外界の自然と階級抑壓とを通して生み出された諸々の觀念を——この被壓迫性を强固にし、階級鬪爭をごまかし去らうとする諸々の觀念の複合なのだ。神性の觀念のかくの如き淵源とかくの如き事實上の意義とに拘らず、民主々義及びプロレタリアートの鬪爭が、一個の宗敎的思想の他の宗敎的思想に對する鬪爭といふ形態をとつてゐた時代が、なるほど歷史上にあつた。

だがかゝる時代は久しい過去に流れ去つた。

ヨーロッパに於てもロシヤに於ても、一切の神の觀念は、最も洗練された最も善意な神性の觀念の辯護乃至是認と雖も——今日は終に反動の是認なのである。』

この手紙は一九〇五年のロシヤ革命慘敗後の反動時代にゴルキイやルナチヤルスキーが『神を作る運動』といふ反動的な宗敎的運動を試みたことに對しての非難である。

レーニンの宗敎に關する論文は六つほどしかないが、その微細な點までマルクス、エンゲルスの思想の繼承、發展であつて、宗敎が資本主義社會における物質的根源、その奴隸的性質は、彼から最も鮮明に學ぶことができる。

(4)トルストイ主義の階級的性質

マルクス主義者は人間の思想がその生活過程に依つて規定され制約されると解する。また如何なる思想も時間と空間との制限から自由であることはできない。歷史の上に立つが如き外觀を有する偉大な思想も當該歷史時代の生産關係からの制約を脫することはできない。例へばトルストイは偉大な人道主義者であり、大藝術家であり、その思想は將來の人類に光明を與へるものだと思ふ人がある。決して然らず。彼の思想は實はロシヤの現實の、否、ロシヤの過去の反映であり、且つ家長的なロシヤ村落の民農の生活觀の代表者であつたといふことができる。レーニンが一九〇八年に書いた『ロシヤ革命の鏡としてのトルストイ』といふ論文は、何等かの思想、何等かの宗敎が結局、その屬する生活關係によりて規定されることについての模型的な分析であるから、こゝにそれを讀まう。

レーニンは先づトルストイが矛盾した二方面を具へてゐることを數へる。一方は偉大な天才藝術家であり、他方はキリスト信者の痴人である。

『トルストイは一方では資本主義的搾取を忌憚なく批判し、政府の暴力、裁判と行政との喜劇の假面を剝ぎ、富の增大、文化の成果と貧困の增大、勞働大衆の苦痛との間の矛盾を曝露してゐる。他方では、愚かにも惡に抗するに暴力を以てする勿れと說敎してゐる。一方では最も醒めたる現實主義に立つてあらゆる假面を剝いでゐるが、他方では世界中での最も卑しむべきこと即ち宗敎の說敎人である。』

だがトルストイの見解のかゝる矛盾は偶然でなくて、十九世紀後半のロシヤの生活が經驗した矛盾を代表するのである。

『トルストイの見解の矛盾は近世の勞働者運動や近世の社會主義から判斷すべきでなく、家長的なロシヤの村落のなかに起らざるを得なかつたところの、資本主義の襲來に對する抗議、大衆の土地喪失と窮乏に對する抗議といふ見地から判斷すべきである。……

『トルストイは、ロシヤにおけるブルジョア革命の爆發に際してロシヤの農民大衆のなかにおこつた思想と氣分とを表現する限りに於て、偉大である。トルストイは、我國の革命の特殊性がブルジョア的農民革命であることを表現する點に於て、獨創的である。この觀點から見れば、トルストイの見解の矛盾は、農民の此革命に際しての矛盾多き條件の現實的反映である。……

『公の教會、地主、政府を拒み、土地所有のあらゆる古き形式を破り警察的階級的國家の代りに自由の小農の共同體を作り上げようとする努力――これが一九〇五年の革命時代における農民の歴史的地歩を赤き糸の如く貫いてゐる努力であつた。そしてトルストイの著作の精神的内容はこの農民の努力と應じて抽象的な「キリスト教的無政府主義」の形をとつたのである。』

トルストイの思想の階級的根源は以上の如くである。だが農民のかかる獨善的態度が反動的であることと照應して、トルストイの思想自體も社會進歩の觀點、歴史の進行の觀點からは同じく反動的のものと見る外はないのであつて、ロシヤ及び外國のトルストイ主義者の消極性、反動性もこの點から説明せられ得るのである。

(三)カント主義によるマルクス無神論の歪曲

(1)宗教的社會主義の潮流

マルクス以前の空想的社會主義は將來の社會秩序を資本主義生産方法の必然的發展の成果として觀察せず、むしろ倫理的基準に立つて世界を改善しようと欲してゐたのである。その限りに於て、マルクス以前の何れの社會主義にも宗教的色彩が有る。サン・シモン等のことは言ふまでもない。ラッサールすらも其のフイヒテ流の理想主義のために科學的社會主義からなほ離れてゐる。マルクスが『吾等の哲學者』と呼んだチーツゲンすらも『社會主義の諸傾向は一の新しい宗教への材料を含む。しかしそれは古い宗教の如く情意のものでなく頭腦のものである』『社會的勞働が意識的計畫的に組織されたものが近代人の渴望する聖地である』といふ文句を弄してゐる。ウイルヘルム、リーブクネヒトは『キリスト教は過去の亡靈であり』『吾黨は科學の黨である科學は宗教に敵對する』と考へてゐたが、『社會主義は感情の事項としてはキリスト教の最大の強味を持ち、悟性の事項としては科學の最大の強味を持つ』といふ演説もした。ルナチャルスキーも曾つては『宗教的無神論』なるものを唱へて『人間の最高の潛在性』の發揚と崇拜とを説教したことがある。これらの人々は確信的なマルクス主義者であつて、勿論こゝに述べるカント主義の亞流ではなく、傳來宗教に無條件に敵對したのであるが、しかも宗教自體の根本的否定者であつたと言ふこともできぬと考へられる。他方に於て公然の宗教的社會主義なるものは前世紀末から引き續いて發展して居り、ドイツでは世界戰爭後に社會民主黨や勞働組合や青年運動のなかに勢力を扶植してゐる。ドイツ社會民主黨の一指導者ラードブルヒは、勞働者は教會や僧侶に反抗してゐるが、そのことは勞働者が宗教に對して痛々しい渴望を感じてゐる證據である、彼岸の宗教を捨て、此岸の宗教を創造せねばならぬ、といふ意見である。(彼岸の宗教も此岸の宗教も、宗教であ

ろ以上、民衆のための阿片であるのに相違はない。」ボーナスといふ人は『社會主義月報』誌にのせた一文で、マルクスとキリストとを比較し、前者の革命説を非難し、勞働運動の未來は暴力なくして勝利するが如き精神の力を準備したり、信任したりすることに在ると書いてゐる。エレーンベルヒとなる人は同じく『社會主義月報』誌上の一文で、自然科學的世界觀と批判の精神とがブルジョア科學の最も悪いところであるが、幸福なことには勞働者の全部がその毒に犯されてゐるわけでなく、聖書を自然學科的世界觀を以て批評して自己の感情を頽廢させてゐるのは勞働階級の少部分に止つてゐる、教會が今まで社會主義に反對してゐた結果、勞働者は宗教に無關心であつた、教會は今まで農民や小市民のことだけ知つて勞働者のことを知らなかつた、これから勞働者もキリスト教信者になるだらう、といふような馬鹿々々しいことを書いてゐる。そして彼等は彼等の新しい宗教を『社會主義的宗教』と呼んでゐる。（ドイツ近代の宗教的社會主義についてはゾエーク＝ツク「近代の宗教的社會主義」一九二六年なる書物あり。）

嘗つてエンゲルスは次の如く言つた。『無神論は歐羅巴の勞働者黨にとつて充分に自明のこととなつた。……これらの黨は神を簡單に捨てゝしまつた。彼等は現實生活のなかに生活し且つ思惟する。從つて彼等は唯物論者である』と。しかし大衆の間には迷信がまだ殘つて居り歐羅巴の黨にも上述の如き宗教的社會主義の風潮がおこつてゐる。しかし之を以て何人もエンゲルスの樂觀主義を非難することはできない。それは單純に歐羅巴の多くの黨が勞働者黨でなくなつたからである。「宗教的社會主義の風潮の再起した社會的根據は歐羅巴資本主義の動搖と廢頽とが小ブルジョアを恐怖と不安とに駈り立てゝゐるからに外ならない。

(2) マックス、アドラーのカント主義

以上の如き宗教的社會主義の風潮と照應して、カント主義の立場からマルクス的無神論を歪曲しようとするものに墺太利社會主義の最も有力な代表者マックス、アドラーがある。カントを以てマルクスを修補する運動は既に前世期末からベルンスタインを先頭として始まつてゐたのであるが、アドラーはむしろカントを以てマルクスを骨抜きにしようとするものである。彼はカント的マルクス主義者といふよりも寧ろマルクス的カント主義者であるといふことができる。

アドラーは政治的領域に於ては形式的デモクラシー、階級協調、ブルジョア平和主義の確信者であるが（彼の『マルクス主義の國家觀』をみよ。）哲學的領域においてはエンゲルスが無力命令を冷笑したカントの無上命令から、特定の歴史的段階を無視する不特定の『倫理的理想』から、倫理的判斷の根本形式としての當爲から出發する。所謂倫理學上の諸問題は人間精神の最も古い傳統に屬し、多くの點に於て其の最も遲れた迷妄を反映してゐると考へられるが、アドラーは倫理學を社會主義的に基礎附けることをせずして、逆に古い倫理學を以て社會主義を基礎附けようとするものである。彼はいふ『若し道義的理想が存しないとすれば、プロレタリアートが結局、工業的封建制度の一組織――そこでは實に今日よりもより善き賃銀、淸潔な住宅、短き勞働時間、疾病、災害、老年及び勞働不能等、等に對する充分の保險の存した場合が少くない――を以て滿足し得ない筈はないでないか』と。（『マ

ルクス主義の諸問題」）しかしマルクス主義は永久的、終局的、超時間的なる最高道德原理としての『倫理的理想』なるものを認めることができない。一切の道德原理は結局、當時の經濟的社會的關係の所產である。道德が經濟關係を決定するのでなく、經濟關係が道德を決定するのである。エンゲルスは『反デューリング論』のなかで、善惡の觀念が時代により、民族により非常に變化することを指摘し、現に吾々の前にはキリスト的封建的道德、ブルジョア道德、プロレタリヤ道德の三大群が同時に且つ併んで行はれて居り、そして未來により長く殘りゆくものはプロレタリヤ道德であることを明白に述べてゐる。絕對善、絕對惡なるものは存し得ない。善も惡も相對的であり、社會關係の變化に伴ふて變化するのである。

永遠なる道德や宗教があるように見える。『共產黨宣言』は之を說明して次の如くいふ、『過去のすべての歷史は異つた時代に異つた姿をする階級反對のなかに動いてゐた。だが如何なる形態であつたにせよ、社會の一部分が他の部分を搾取することはあらゆる過去の世紀に共通なる事實であつた。（この階級反對といふ共通的事實があつた故に）あらゆる世紀の社會意識はあらゆる種々雜多のものがあつたにも拘らず何等かの共通の意識形態のなかに動いてゐたのは不思議でない。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、』と。

マルクス主義は人間が社會生活に於て一定の目的を定立して是を追求することを否定するものでない。否、目的を追求する人間の活動は歷史の缺くべからざる因素である。倫理的理想は超世界的な計畫や目的論的世界から生ずるのでなく、一定の社會關係の下における歷史的必然の結果として與へられるものである。それは必然性を排斥せずして必然性によりて規定される。社會人における目的の成立は社會的過程に依りて決定され、後者は更に經濟的生活過程によりて規定される。人間はむしろ一定の歷史的條件の下に於て、必然に物質的條件から制約される一定の目的又は理想を定立することを餘儀なくせられる。一定の目的を追求する人間がなければ、歷史がなく、生きた社會生活がない。例へば、、、、は人類の絕對理想といふわけではない。、、、、資本主義的社會の後に、、、、、、すべき經濟的社會秩序である。同時に、、、、は勞働階級の理想であり、その意識的目的であり、そして此目的は物質的現實が必然に規定してゐるものである。

マルクス主義は道德を以上の如く解する。是に反し、アドラーは道德的理想の永遠と無變化とを主張する。かくの如き社會主義の倫理的基礎附けは必然に神に門戶を開くものである。そして實際においてアドラーは著書『カント認識批判における社會學的』（一九二四年）においてマルクス無神論の完全なる否定に乘り上げたのである。（デボーリンはこの書物をマルクス主義の立場から徹底的に批評した。デボーリン「修正主義の最後の智慧」（「マルクス主義の旗の下に」第一號一九二五年）、次の個所は同文に負ふところ多し。）

(3) 先驗的構成としての『社會化した人間』

アドラーはマルクスの『社會化した人間』といふ概念を以て後の偉大な發見、劃期的な學問的功績であると讚へてゐる。しかし此點から直にアドラーの歪曲がはじまるのである。アドラーは『社會化した人間』を以てカント的意味における一の先驗的普遍的形式的概念にして

しまふのである。

マルクスにとつて人間とは抽象的な個人又は種屬でない。『人間的本質とは社會關係の總體』を指し、『新唯物論の立場は人類社會又は社會化された人間』といふのであるが、それは一定關係に屬する歴史的人間なのである。しかるにアドラーに在つては『社會化された人間』は一種の抽象的な實體、一の神秘的な巨人、一の純粋な精神的實體である。彼にありては、社會化された人間とはカントの先驗的意識の主體となつてゐる。社會における個々人が普遍的内容を持つて居り、各個人のなかに社會が含まれてゐることは正にマルクスの教へてくれる所であつて、個々人の抱くあらゆる表象、概念、思想は社會的内容を有してゐる。しかしマルクスの社會化した主體といふ概念はどこまでも經驗的であり、且つ個體概念を無視するものでない。マルクスにありては形式的抽象的な普遍が先行するのでなく、個體の集合したものが普遍なのである。フオイエルバツハに從へば、單なる普遍としての普遍は思惟のなかにのみ存する。人類は人間のなかに存し、そして各人が人間である。個體のみが分割すべからざるものであり、統一であり全部である。だが人間の本質は我と汝、人間と人間との統一のうちにのみ存する。一人は他人を通じてのみ世界を認識する。(ヨードル『フオイエルバツハ』二十五頁以下) かようなフオイエルバツハの見解は、後々までもマルクスに影響してゐたと思ふ。しかるにアドラーの意味する、社會化した人間は生きた、具體的な、經驗的な、現實的な歴史的人間でなくして、一のアプリオリであり、形式的先驗的範疇であり普遍としての普遍なのであつて、フオイエルバツハの人間ともマルクスの人間とも全く違つたものである。カントの先驗意識が一の超個人的意識である如く、アドラーの謂ふ社會的人間も純粋の超歴史的、超經驗的、形式的範疇であつて、マルクスの本來の意味は全くゆがめられてゐる。かゝる觀念論の亡靈を作り出すことから、宗教へ轉移することはホンの一歩であり、又アドラーもそれを行つてゐる。

アドラーはカントに從つて三つの意識又は意識の三つの機能を承認してゐる。第一は認識の機能、第二は意思の機能、第三は信仰の機能である。彼に從へば、信仰の機能又は宗教の機能は人間性の一要素であり、信仰は社會化された人間の意識の一の必然且つ普遍妥當の形式であつて、それなくしては意識一般は考へられないのであると。アドラーが觀念論者としてかくも反動的な結論に達したことは未だなかつた。信仰は今や決定的要素であり、理論的認識にも實踐的行動にも其の基礎として働く。人間は純粋の精神的實體であつて、各個の現實に先行する先驗的意識の負擔者であり、宗教は社會化した人間の精神や顯現であるとせられる。

かうしてアドラーは今や明白に宗教の必然を承認するに至つたのであるが、歴史から因果性、必然性の概念を投げ捨て、カントの『自然の意圖』といふ思想に從ひ、合目的性の概念をとり入れるに至つてゐる。彼にとつて極めて自然な道行であると言へば言へる。アドラーはカントに從つて、歴史は豫定された意圖に從つて理性の進歩することであると考へる。彼は次の如く言つてゐる。

『進歩の本來の意義は自然主義の考ふる如く、動物が人間になつたといふことでなく、人間が神的なものになることである。』

『信仰の本來の目的は無限の理性的發展に在る、その經驗的表現が人間の進化である。神と不死とは此無限性と不可離な信仰の構成部分の理論的に可能であり實踐的に必然の條件である。』

『認識批判論が進步の概念を宗教的信仰に還元するとき、屢々非常に攻擊を被るが、それは現代にまで引續いてゐる自然主義的進化思想が一の思惟必然になつてゐる偏見からである。』

『信仰は宗教的意識の存在形態である。』

『宗教意識は進步を意味する發展理念の一根本契機である。』

アドラーはカントの神の概念を承認し、神がなければ人間の生活はあらゆる意味を失ふであらう、神はあらゆる成果の保障である云々と言つてゐる。カントは、神を以て實踐理性のポスチユラートであるとなし、これを認識の對象とすることを拒んだのであるが、しかしカントの『批判的』の神も既成宗教の神も空想の所產であることに於て別に異つたことはない。レーニンは嘗つてゴルキイの『神を作る』運動を揶揄して、神を探すことを神を作ることの差異は、黃色の惡魔と青色の惡魔との差異にすぎないと言つたが、この言葉はアドラーにもあてはまる。

アドラーは信仰なき社會主義は考へられない、といふ。マルクス主義は歷史的進步の必然といふ意味で社會主義を語るべきでなく、社會主義の實現の可能に關する信仰が社會主義への根本要素である。信仰がなければプロレタリアートは勝利しないといふのである。

(4) 自然、人間及び必然性

アドラーの觀念論がマルクス主義と全く相容れないものであり、その宗教論がマルクス的無神論を完全に歪曲するものであることは全く明白である。アドラーはマルクス主義の哲學的基礎たる唯物論と全く背反する。彼は歷史における『物質的』なるものは自然科學におけるそれとは全く異ると考へ、『此物質的なるものはもはや物的なものでなく、人間的のものであり、精神的のものである』とも言つてゐる。社會も彼にとりては一の精神的なものである。彼は物質的形式をすべて心的內容に依據せしむる。然し心的內容を最終審判者として社會を說明するとは不可能である。心的內容それ自身が更に說明さるべきものであり、それは社會の經濟的構造に依つて決定せられる。自然は人間の社會關係の發展する土臺であり、自然は人間相互の社會關係を媒介するばかりでなく、自然と人間との間に行はれる交互作用が社會生活の重要な契機であることはマルクスの指摘した通りであつて、人間は自己以外の自然に働きかけ、それを變更することに依つて自己を變更する。社會は社會化せる人間のみでない。それは同時に社會化せる自然でもある。人間が物に結びつく關係が各社會の組織形態を決定する。アドラーは人間中心主義者であるが、しかも人間の能働性は彼の如き神秘的な觀念論に依りて說明することはできぬ。マルクス、エンゲルスは人間の意思、目的を定立する能力、人間の熱情を充分に評價してゐる。人間が歷史を作るといふことはマルクス主義の根本原理の一つであるが、マルクス、エンゲルスの明かにしたのは社會生活の『衝動力の衝動力』が物質的生產關係に外ならないことである。アドラーはカントの內在的合同的性の範疇に屈服してゐるが、自然及び歷史の進行は必然性を以て規律せられて居るのであり、『自然必然性の認識に基

いて自己及び外的自然を支配する事に依つて自由が成立する』（エンゲルス）のである。人間の目的定立が必然性を排斥せずして、必然性に依りて規定せられ、その限りに於て人間の努力が歴史進歩の缺くべからざる因素であることは曩に述べた。客觀的現實の自己運動と、この運動過程の科學的認識と、この科學的認識に立つた人間の此運動過程への意識的働きかけと、この三者の不可離な結合のなかにマルクス主義者の理論と實踐との精髓が存してゐる。アドラーの見解は觀念論一般と同じく、理論と實踐とが二つに裂けてゐる。要するにヂーツゲンが早く既に言つてゐるように『新カント派の名の下にマルクス主義の背骨を折り、以前に克服されたブルジョア古典哲學の二元的世界觀をプロレタリヤ陣營內部に持ち込まうとするのは一の反動的風潮』なのである。

（四）フロイドとマルクス

近代科學の成果を攝取してマルクス主義を豐かにしようとする試みは各種の方面で行はれる、又行はるべきでもある。マルクス、エンゲルス自身すら新しい科學の成果を以て自己の學說を補ふことをしたのはモルガンの研究を敬意を以て採用したとでも分る。然し最近代に於て、それが屢々失敗したことは、例へばロシヤのボグダノフがマツハやアヴエナリウスをとり入れた經驗批判論を以てマルクス主義の修補を企て、結局バークレー流の主觀的現象論に逆戾りしたるが如くである。フロイドの精神分析學（プシアナリーゼ）は近代科學の最も重要な成果の一つであるが、これをマルクス主義に結びつけようとして失敗したものにクリツシエ『フロイドとマルクス』（一九二四年）がある。

クリツシエはフロイドを以てマルクス的無神論をゆがめようとした。彼は宗教は人間社會の生産關係に基くものでなく、人間の持つてゐる最も奧深い衝動的素質が宗教形成の第一位の力であると考へる。『生産關係すらも此衝動力によりて建設され、それに制約せられる。』宗教は人間に不可抗に內在する、決して取り除くことのできない衝動から生れる。それは謎の如き最奧の衝動力であるが、それを否定することができない。この衝動的素質といふ見地からすれば、宗教の形態上の變化が認められるだけで、生産關係の變化に依り、階級關係の消滅に依り、宗教自體が死滅するといふことは有り得ない。各個の大衆運動のなかには神秘的な內的衝動力が動いてゐる。プロレタリアートの連帶的心理は人間自然の素質であつて、新しい宗教、人間的なる宗教、共同生活態宗教の形成さるべき根源がそこに存してゐる、といふのである。

以上の見解はマルクス主義と全く相容れることができぬ。時間と時代とを無視して人間の心理を考ふることは不可能である。宗教は歷史的に見て常に階級支配の要具であり、必ずこれに對應する組織を持つてゐた。階級反抗の事實を離れて宗教の發生、發達、消滅の事實を觀察することができない。人間的宗教なる理論が汎神論に變化するのは容易なことであり、そして汎神論から既成宗教の信仰に變化することも容易である。要するにフロイド說を以てマルクス的無神論を修補することはできない。それは純粹にブルジョア的試み以外のものでない。

フロイド自身はエドイポス・コンプレックスなる假定に據つて宗教の起源を說明しようとしてゐる。（エドイポスとは知らずして父を殺し母と婚したギリシヤ傳說中の一主人公の名。）始原の社會に於て息子は母親に、、、感じ父親を嫉妬する、娘は逆に父親に、、、感じ母親を嫉妬する、息子たちは相計つて父親を殺すに至る、然し息子たちは父親に感じたと同樣の嫉妬を相互に感じ合ふ、此事からして終に族外婚（エキソガミー）の慣習が生ずるに至る、他方に於て息子たちは其殺した父親に對する心の苛責を感ずる、彼等は嘗つての憎惡の對象であつたものを尊敬の對象に代へる。父親の象徵は社會形成の要素となり、これからしてトーテミズムがおこり、族父の祖先崇拜となり、宗教の最初の形態が生じる、といふのである。このエドイポス・コンプレックスはフロイドの公式の一つであるが、實際上に於て妄想以外の何物に値するだらうか？

フロイド派の一人コルナイの『精神分析學と社會學』は眞に馬鹿々々しき反動的結論に達してゐる。例へば、プロレタリアート大衆の、、主義は、數千年間、文化的に低い水準におかれてゐたプロレタリアートが滿たすことのできなかつた性慾の蓄積が本源的な力を以て爆發するものである、『萬國のプロレタリアートよ、團結せよ』といふ言葉は同性愛の階級的表現である。、、、對する憎惡は母親に對する性慾衝動から父親を憎んだ息子の最古の感情からであり、アナキストの爆彈はその父親殺しの象徵である、といふが如くである。

フロイド主義者は大抵、陰鬱なる宿命論者である。彼等は、、、、、の來は不可避であるが、それは社會の發展でなくて老衰であり、高級の文化を有する諸民族は將來に於て野蠻粗野なる民族に依りて征服されるであらうといふ悲觀的な豫言をしてゐる。

フロイドの學說が醫學と心理學とに偉大な貢獻をしたことは疑ひない。しかし社會關係の領域における彼等の成果は以上の如く妄想的であり、反動的である。最近代におけるヨウロッパ殊にオーストリのブルジョア社會科學は多く悲觀的懷疑的色彩があるが（スペングラーやヴァンヒンガーを考へ合はせよ）、それはヨウロッパ資本主義の頽廢に伴ふブルジョアジーの生活觀の反映でもあるのである。吾々はフロイド說の社會的方面についての應用から學びとるべきものを有しない。また心理的分析から出發して社會現象を說明する企て自身が本來的に無理でもある。（社會主義の立場よりするフロイド說の詳細な批評はユリネッツ「精神分析とマルクス主義」（「マルクス主義の旗の下に」第一號を見よ。）

社交の階級理論

新明正道

(一)

我等の生活に働いてゐるところの種々の歴史的論理のなかで、最も重要なものとはいへないが、注目に値するものとして、生活自體のなかから發展するその自己超越性を指摘することが出來る。私は、生活の自己超越性の意味として、生活がイデエに轉向する傾向を擧げたいのである。この生活のイデエへの轉向は、例へば生活の基底をなす經濟が、此れに相應するところの所謂觀念形態を開展させる經過において理解することが出來やう。しかし、こゝでは、稍ゝ別の視角から眺めて、經濟としての下層構造にせよ、此の上に築かれてゆく上層構造にせよ、總てこれ生活であるとなし、此等の生活全般の領域にわたつて、夫れ夫れの領域のなかでイデエへの轉向の現象が發生するものと見るのである。この意味からいふと、イデエといふ代りに、形式といふ言葉を用ひた方が反つて妥當かも知れぬ。生活そのものは、經濟から學問、藝術にいたるまで、その相互の間に一定の系列關係を有してゐながら、我等の行爲の意味においては、直接的なそして具體的な活動的なものである點においては同一である。我等は此の活動的な姿を示すために、これをヘラクリッスの把握したやうな流轉的な世界であると謂つても差支ないであらう。我等の生存の根抵から迸り出る生活的要求は、完全に機能的な停滯を知らぬ世界を形成してゐる。しかもかくの如き生活は、その流轉的な展開のうちに、その本質と相反對するとしか考へられない固定的な形式を發生せしめてくる。そしてこの形式のなかへ生活の勢力を發現させてゆくのである。形式は生活が自ら自己を變へたところの産物であつて、比喩を更に重ねると、それは生活の凝結體である。それは生活から生じたものであるが、形式としての存在が與へられて了ふと、その本質は生活そのものとは、或る程度まで間隔を有する存在となる。そこには最早流轉してやまない生活の意義は放棄されざるを得ぬ。それは生活のなかに獨自の地位を占めてくるのである。此の形式を、生活そのものから遠ざかつた間隔において、イデエと呼ぶことを許すならば、かくの如きイデエへ生活がその道程において轉向するといふことは、如何なる生活の領域においても等しく認められ得る事象と考ふべきである。

最も廣大でまた重要である經濟生活の領域についてみるに、此の論理は生活からイデエとしての經濟を創り出す。イデエとしての經濟には歷史的階段によつて特異の場合を生ずるが、その最も代表的なものとして、我等は貨幣を中心として形成されたそれを擧げなければならぬ。此の經濟はその形式的な構成によつて、直接的な具體的な經濟とは極めて鮮かな對照をなすものである。此のイデエ的な形成をもつ經濟において支配的勢力を振ふものは、生活ではなくて、イデエである。導かれた結果からみると、正にこれは生活の錯倒である。生活は自ら此れを拘束する緊縛を産み出して、その膝下に跪伏するにいたつたものである。しかも、この矛盾的な新しい狀態に向つて、生活は自づから轉向して行かざるを得ない。學問の生活領域においても、之に平行する現象が認められる。學問的な活動は、その性質上最初からイデエ的なものと看做されてゐるが、必ずしもさうでなく、當初のその活動は、「試み」と「失敗」の連鎖を示してゐて、それだけ固定的な體系によつて束縛されては居らぬ。イデエとして超越的な意味を有つ眞理やその體系が生ずるのは、此の活動においてイデエへの轉向が發展した後のことである。此の他、藝術や宗教の如き生活領域について考へてみても、全然同一の組制を示さないまでも、此の傾向が顯著に發現することは否定することが出來ないのである。

しかし、此處では、右に述べた諸領域が問題でない。私は此等の生活領域を通し、そのなかに實現する社會の結合において、この轉向が果して認められるか、認められるとしたならば、その表現は如何なる態樣を採るものであるか、を考慮するのが目的である。直接的な具體的な社會の結合は、その本來の性質上何等他の生活領域と異つてはゐない。我等の社會に對する感情、階級に對する感情は、それ自身最も生動的な活動の意圖を含んでゐる。此の領域は、波瀾重疊たる海洋に似てゐる。我等の生活全體の具體的象徵としてそれが屢ゝ用ひられることによつても、その根本的な流動性が是認されるであらう。してみるとこの最も强烈なる生活の領域において、單にそのイデへの轉向が存在せなければならないばかりでなく、轉向そのものが特に代表的な規模のものをなすと考へるのが、謬りであるといへやうか。社會的結合として見た人間の生活においても、依然として生活の論理的な展開があるのである。そしてこれを示すものとして我等は先づ社會を表明する表章（トオテム、其の他の）の世界を考へることであらう。社會も亦た超越化の傾向を有つてゐるのである。しかし、社會的結合は他の生活領域の典型として、最も如實にイデエの世界を法則的に示すことの出來る特別な超越化的轉向を生ずるものである。そしてこの特異の現象こそ、即ち社交と呼ばるゝものに他ならぬ。社交は現在一般人によつて、明確には考へられてはゐないが、社會とは別種のものであると看做されてゐる。かくの如く鑑別されるのが常である社交が社會の超越的な表現であるとなすのは、一見不思議であるが、既に述べたやうに、凡てイデエに轉向した生活が必ず生活そのものから遊離して了ふものであることを思ふと、兩者の間の接合點が抹消されてゐるだけ、社交が社會生活の超越性を完全に表現してゐると見ることができるのである。社交的な社會のみが但し害のない社會であると見る見解に無理とはいはれない。しかし我等は、社交を社會結合における超越化

の傾向の歸着點として考へたのであつて、如何ほど社交が社會結合に對して超越的な意義を有つものであるか、その普通に發見される構成の特色は如何であるか。又たこの現象が社會結合に關係する人間生活全體の進行において如何なる歴史的な意味をつけられるかについて眼を注がなくては、社交の意義を明らかにすることができないのである。私は、此の問題の解釋を進めることによつて此のイデエの轉向にに含まれてゐる社會の悲劇的な要素をも明らかにしなければならぬ。

（二）

社交と社會とを別物として見る我等の視覺は、他の機會においてまた、これを全然同一に扱つて了ふものである。我等が社會において形象的な廣大な關係を考へないで、分析的に細胞的な關係を思念する時は社會が社交に極めて接近したもの丶やうにも見えて來るのである。此の錯覺によつて、我等は時とすると、社交が社會の基礎を成すもの丶如くに信じて了ふ。しかし、事實はこの逆である。我等は社會を經て初めて社交を知る。我等は社交の快感によつて社會を建設するにいたるものではないのである。社交は社會をその母胎としてゐる。然らば社交は如何にして社會から發生してくるものであらうか。生活のイデエへの轉向が此處にも支配するものであることはいふを俟たないが、我等は更にこの內容をなす經緯を透視することが必要である。

生活そのものから超越した形式は、それが經濟的なものであつても學問的なものであつても、皆な一樣にある遊戲的な性質を有つものである。生活そのもの丶圈を遠ざかることによつて成立する形式に、此の色彩が與へられるのは、必然的である。社交も亦たその成立した形式において、此の例に洩れないで遊戲的な性質を帶びてくる。そして、完成された社交の典型は、この遊戲的な性質を越えて、そのなかに、社交の實生活に對して、嘲笑又は冷眼視の意味をさへ湛へてくるものである。こ丶にいたつて、社會と社交とは全く相容れない對立を現はさざるを得ぬ。しかし此の極端な對立だけをみると、兩者の間に必然的な連絡を辿る術がないのであるが、これは社會の存在すると同時に、かくの如く與へられてゐたものでない。社交は社會から發生してきたのである。そして、我等は、この過程を圖式的に確かめることが出來るのである。此の過程は、生活の發展と結びついてゐる。抽象的にいふと、生活は先づ生活として與へられ、更にこれはその內部的な發展によつて（より多き生活）に成る。そして、此の（より多き生活）は、その豐饒性の結果として「生活よりもより多きもの」に進んで行く。此の生活の發展の最後の段階は、生活から生活以上のものの生ずることを示す。これこそ超越的なイデエである。社會について考へると、社會は先づ「より多くの社會」となり、次いで「社會よりより多きもの」、即ち社交を生ぜしめるのである。生活の發展が生活の論理を表明する。社會の發展が社交にまでイデエへの轉向を餘儀なくさせる——此處に、社會の論理の說明が與へられる。しかし、これは形式的な說明である。我等は更に此の轉向を裏付ける內容的な意味を考へねばならぬ。

內容的な說明を與へるに際して、我等は、經濟や學問における超越的なイデエの本來の作用を考へるのが理解に便利である。經濟において貨幣の、又た學問において概念の演ずる役割については、何人もそ

れが生活自體における實際的な相互作用の理想的な發現を保證するにあることを看取出來るであらう。それ自身生活の脈搏を直接に受けてはゐない貨幣や概念の如き形式は、その究極の發展においては、反つて、夫れ夫れの生活領域に障害を與へることがある。しかも、それは元々反對に生活領域における障害を除き去るために現はれてきたものに他ならぬ。我等は、これと同一の事實を社會の領域においても追蹤することが出來る筈である。

社會の實際的生活に捲き込まれてゐる人間は、種々の本能と目的によつて動かされてゐる。そして、此の關係は、一定の社會生活を營む各人の經濟的基礎が同一である場合を考へてみても、なほ各人の個人的能力の差違によつて複雜化せられ、その結果としてそのまゝでは決して各人の希望通りの圓滑な關係を實現することは出來ないと謂はねばならぬ。此れは、彼等の間に個人主義的な傾向の明確に發達してゐない場合でも、妥當するのである。社會は必然的に個人間の軋轢又は衝突を包擁する。かくの如き社會とは反馳する傾向、分離又は反對の傾向は、實際の場合において社會の結合に明暗を與へる積極的な役割を有するものであるが、それでも、なほ、此の要素の介在は社會にとつて歡迎すべきものではない。彼等は出來得るならば、かくの如き雜音を排除した融和的な關係を樹てやうと希望する。玆に、社會の直接的相互作用を調節する手段が求められる。社會に發生する客觀的な表章は、この要求の無意識的なる物である。しかし、彼等は更に進んで或る程度まで意識的になほ此の要求を實現しやうとする。社交はこの産物に屬するのである。社交は全然人工的な産物であつて、それは社會人の合意的に認めたところの一定の規定を前提としてでなくては成立せぬ。此の規定は社交界の儀禮として、知られてゐるものである。我等が社交の社會への作用を知らうとする場合には、社交界の儀禮を見るに若くものはない。その內容にいたつては、時代によつて種々の條件を加へられて一定してゐない點もあるが、大體は殆んど同樣である。その多くは、出來得る限り、その關係に立ち入る人々の個人的に目立つところの能力、又は性質を排除して、平等的な無內容的な人格のみを社交人の資格の標準として認めてゐる。人間間に衝突又は軋轢を生ずる可能性をもつ凡ての個人的特質は、社交の前に消滅しなければならぬ。この結果、社交は、その範域のなかでは、實生活の風波を超越した一個の理想的世界を構成するものである。各人は實生活の閑暇を偸んで此の世界に、出入しそこで實生活の重荷から解放され、間接に實生活そのものゝ進行において障害となるものを多少なりとも破碎しやうとする。この效果は滿足には成就せられないが、各人の志向をこの超越的な世界に導き入れることによつて、社交は社會に對して救濟的意味を有つものであることは明らかである。社會における反對的な要素が、社會の生活の發展によつて、即ちそれが「より多くの生活」と成るとともに、自づから量的に增加してくるものと考へれば、社會の發展が、自づから「生活よりより多きもの」としての社交を、社會の發展の結果生じてくる衝擊を抑へる調節的な手段として要求しくる事情は、理解されるであらう。

しかし、我等は、社交のこの發生の意義によつてその考察を結了したものと考へてはならない。我等は更にこの發展の系列に含まれてゐ

る社會生活の他の側面をも考照する必要が存するのである。此の列の側面に含まれてゐる生活の論理は、先に述べたところと全く反對である。我等は先に生活から進んで「生活よりもより多きもの」に進んだのであるが、その反對に、我等は玆に「生活よりもより多きもの」がその發展の經過において「生活よりもより少きものに」轉化し、それが「より少なき生活」から終ひに「無生活」にまで進んでゆく事實を指摘することが出來るのである。

(三)

「生活よりより多きもの」としての社交が如何にして「生活よりより少なきもの」に墮落し、それがつひに生活を無に歸せしめるやうになるのであるか。我等は生活のイデエへの轉向が生活そのものゝ要求によつて行はれ、實際生活に對するイデエの意義が決して否定的なものでないことを見たのである。しかも何故本來の目的性を全く破壞するやうな現象が、此の過程のなかに現はれてくるのであるか。此の間の消息を明らかにするためには、我等は、生活のイデエへの轉向のなかにおいて、自づから發現してくる生活とイデエとの諷刺畫的な對立の根本的な特長を明確にする必要がある。我等は、此の場合實際的な社會結合と形式的な社交との對立の間に釀しだされる矛盾を把握することが必要である。

社會生活と社交とは、「生活」と「生活よりもより多いものと」の對照として考へられた。社交が生活から超越した存在の領域であることにおいてその特徴を有つものとすると、兩者はその間隔を益々深く且つ甚だしくすればするほど生活全體にとつて理想的であるやうにも思はれる。社交をして社會の實生活とは無關係な王國に仕あげてゆけばゆくほど、我等は生活の論理を積極的に現はすことになるやうである。從つて、社交にとつて致命的なのは寧ろそれが生活と何等かの聯絡を保つてゐる限りであるかも知れぬ。しかし、生活のイデエへの轉向そのものと擁護するやうではあるが、一方、社交が超越的な天國として社會にとつて有用な機能を營むことのできるのは、それが飽くまで社會の實際生活を離れ去らない限りにおいてである。社交は遊戲的な性質を帶びてゐるが、遊戲そのものが無意義でないためには飽くまでそれは生活に關聯を有ち、これを刺戟し鼓舞する役割を演じてゐなければならないと同樣に、社交も亦た遊戲的とはいつても社會の生活と絕緣した空虛な形式に墮してはならないのである。社交はその發生するとともに多樣な構成を造り上げてゆくものであるが、その形式としてのはたらきの源は、それ自身のなかにはない。我等は社交において更に社交の興味そのものによつて動かされてゐるものと考へるが、つきつめてみると、それは社會的な興味の支配のもとにあるのである。形式としての社交は社會の人間の相互作用の象徴として意義を有ち、魅力を具へてゐるものに過ぎぬ。社交は社會生活そのものではない。我等が社交を以て社會生活を超越したものであるといふのはこの意味では正當である。しかし、超越してゐても、それは社會生活を脫却するものではない。社會生活が全く掃ひ退けられて了つたならば、社交を織りなす纖維も亦た失くなつて了ふのである。社交は社會の上にある。しかも、それは社會の上に留まつてゐる。そして此の關係が社交と社

會との間に維持されてゐる限り、そこにはカリカチュア的な様相は現はれて來ない。社交と社會との奇妙な對立は、正にこの當然な關係に破綻が生じた時に發現するのである。即ち、社交が社會に基づかないで、文字通り完全に、これから遊離して了つた時、そこに兩者の變態的な對立が認められるのである。

社交はその成立の本來の形式においては、「生活よりより多きもの」として意義を與へられてゐた。しかし、それが社會との有機的な關係を失つた形式にまで高揚するにいたつて、それは、その形式性を完成するとともに自己の存在を無意義ならしめて了ふのである。この重要な轉換によつて、「生活よりより多きもの」としての社交は「生活よりより少きもの」に變質させられる。そして、その轉向の系列において「より少なき生活」を生ぜしめ、つひに「無生活」を結果することを免れぬ。社交がその許さるべき限度以上に超越的な形式に變化することここに生活のイデエへの轉向の背後をなす別の一個の論理的發展が存在するのである。我等はこれを超越的な形式の生活に對する支配と呼ぶことが出來るであらう。しかし、この場合に示された「生活よりより少きもの」から、「より少ない生活」へ、そして、「無生活」への道程は、その構成において、生活を土臺にしてゐるものでない。形式そのものが生活を支配する力を有つものでないとすると、右の過程は、正確にいふと、之を更に逆にして眺めることが必要である。我等は、「無生活」から、「より少なき生活」へ、それから又た「生活よりより少なきもの」へと過程を考へ直すことが要求されてくるのである。社交か形式に凝滞して了ふから、社會の生活としての作用が稀薄にされ棄却されて了ふのではない。我等は、逆に社會的結合そのものが無力になつて來るところから、社交が形式として無意義なものに化せられて了ふものと考へねばならぬ。

我等は通常形式主義の發達によつて生活が無意味なものに變化されて行くと考へて、形式そのものゝ生活に對する感化又は支配を重要な原因と看做してゐる。しかし、形式が本來生活と關聯して成長するものであることを思へば、形式が絶對的な超越性を帶びてくるのは、形式そのものゝ自動的作用ではなく、結局生活の內部にからした結果に導く原因が伏在するからである。此の關係は、所謂頽廢期の文學として總稱せらるゝ一定の藝術的傾向の解剖においても證明することができる。我等は此の傾向に屬する文學が示される生活と形式において、その形式尊重の觀念が結局如何にこの文學の源である生活を無意義ならしめてゆくかといふことを指摘する。イデエとしての文學の形式はその超越的な上空から生活のなかに動いてゐる有機的な發展的な力を吸收して了ふ。生活は、その內容を形式によつて奪はれ、文學の根抵が不毛の野に代へられて了ふ。此の見解をとると、形式が生活を變させるのである。しかし、頽廢的な文學がその形式主義によつて生活を無味な索漠たる世界に變化して了ふものとみるのは、形式に餘りに創造性を賦與することゝなるのではないか。頽廢的な文學は生活を形式によつて、無意義な感激のないものに變化するのではない。彼等が形式としての文學を高調して、その生活的な態様を粗雜であると考へ又た無感覺的であると判斷するのは、偏へに、彼等自らの文學的な、生活の內容が無意義と成つたことを彼等自らの告白するものである。形

式そのものが何等かの意味で優越的な最後のものと考へられるのは、此の觀照をなす者らの屬する世界に於いて、生活の內容が全くその意義を失つて了つた結果を反映するものである。此の故に、我等は社交が社會と對照されて優越的な絕對的な權威であると看做される場合には社會そのものが既にその生活的發展力を失つて了つてゐるものと見るべきである。社交のみが唯一の生活的意義を有つものゝ如く尊重され、その儀禮が一方的に重んぜられるのは、畢竟社會生活の無氣力を表現するものと謂はねばならぬ。社交が社會を無意義ならしめるのではなく、社會の無意義が社交を昂進的に純粹な形式として超越化する役割をなすものである。

玆において、我等は、社會のイデエとしての社交の形式に附着する生活的な條件、及びそれに關聯する否定的な傾向とを知るのである。それは根抵において生活の發展によつて何處までも支配されてゐる。生活の內容に歷史的な成長力が存するならば、社交は社會にとつて形式的ではあつても、有用な機能を營むことができる。しかし、社會の結合が無氣力に沈滯するにいたつたならば、社交は全く皮相的な欺瞞に類する形式に墮して了ふ。問題は、生活の發展性の如何に歸着せざるを得ぬ。

然らば、我等が社交と呼ぶ現象は、生活の發展力と相結び付いて居る限り、その意義を沒却しないものと見るべきであるか。勿論、此れは、認め得ることである。しかし、我等は生活そのものが歷史上單一的であると考へるのは間違ひである。人類の社會生活は大きく此れを生活の河とも呼ぶことが出來やうが、その歷史的發展においては、生活の展開が、全面的に一般的にのみ進んで來たものとは謂へない。生活の展開には、一方細胞的な發展を考へ得るが、此れを浸潤した、重要な形態として、我等は階級的な發展を考へなくてはならぬ。社會的結合において、歷史的な必然の生活力は、自づからその單位をなす階級の間に一定の系列を生せしめる。此の發展のなかにおいては、種々の階級的な生活單位が、必然的に現はれ必然的に消滅して行くのである。從つて我等は社交の形式についてみると、その根抵をなす生活の歷史的な發展における地位の推移することが、此の形式の歷史的生滅を支配することを知るのである。生活のイデエへの轉向は一つの論理であるが、生活は更に生活として歷史的に階級的な系列をなすといふことは、更に重要な一つの論理である。

（四）

現在の資本主義的な獲得社會は、生活の內面的な論理によつて、それに相應した社交の形式を成立せしめてゐる。既に現在においては、その形式が正に「生活よりより多きもの」の段階に到達し、同時に、「生活よりもより少なきもの」としての段階をも開示してゐる。資本主義の發生した當時において、資本階級は決して社交的な人間ではなかつたものである。彼等を、封建時代の支配者であつた貴族階級に比較してみよ。彼等は全く社會的結合の實際的な活動の生活のなかにあつて特別に社交としての形式を遊離せしめてはゐなかつた。我等の眼前に浮ぶのは、自然的な素朴な生活の平準を脫しなかつた人間である。しかも、彼等は現在最早昨日の彼等でない。我等は、彼等の社會的結合の

なかから、形式的な社交の世界か完成されてきたのを見る。彼等の階級的な生活の內部に、純然たる社交的機關が如何に發達してきたことであるか、此等の機關は當初において彼等の獲得的生活の目的に關聯して形成されたものであるが、現在においては、完全なる形式的な享樂の目的のために役立つてゐるに過ぎない。此等の社交の機關を通して、實際においては個人的に相剋し合つてゐる彼等は人工的な無風地帶を成立させてゐるのである。彼等の生活的な利益や志向の相違が甚しく、從つて反目や衝突の可能性も多いのに伴つて、社交は最も純粹な形式において昇華されてゐる。貴族社會においては、個人的な相違點が彼等ほど多岐ではなかつただけ、社交において包まれる生活の斷面はなほかなり廣大な領域にわたることが出來たのであるが、資本家階級の社會においては、さうは行かない。しかし、それだけ社交の「形式」としての表現は發達することが出來た。社交のなかに取り入れられる要素が僅かであるとすると、社交の形式は極めて簡單となる。それだけ社交の內部において、各人を拘束する規定も尠ない譯であつて此の點からして現代の社交が中世の騎士的なそれよりも遙かに個人にとつて自由な性質を帶びることが理解せられるのである。

資本主義社會においては、社會の人工的な結合の原理が有力に發展しつゝある。この傾向は最も人工的な要素をもつ社交の發展には、理想的な條件をなすものである。我等は、恰かも該社會の成長力を標示するかのやうに、社交の天地が、益ゝ擴がり、益ゝ上品に形成されてゆくのを見る。しかし、我等は、社交が洗錬され優雅に趨くのにつれて、**一方益ゝその形式化の甚だしいのを感ぜざるを得ぬ。**それが生活そのものを支配する中心と化しつゝある傾向のうちには、既に生活の發展力の凋落を物語るものがある。社交を中心として閑暇的な人間が幅を利かしてゐる。しかも、彼等が資本階級の指導者的な地位を擁することは、彼等自らの生活全體に於て形式が生活に君臨することを示すものに他ならぬ。我等をして燦然たる電飾に照らし出された社交場裏を彷徨する社交人の談笑するところを聞かしめよ。彼等の會話の形式的な過程のなかには、最早生活へ彼等を送り歸すに足るだけの進取的な刺戟は全く含まれてゐないのである。彼等の囁きには、生活からの逃避の陰影がある。彼等は、その胸裡において生活を賤しいものとして遠方へ斥けて了つてゐる。彼等がかくまで社交に耽溺してゆくのは、彼等の基礎をなす社會的結合が次第に實質的な統一と發展の力を失ひかけてゐることを示すものではないか。彼等は謂はゞ社會を失つて社交のなかに辛うじて生きてゐるに過ぎない。否、生活から絕緣されて社交においてのみ呼吸してゐる者は、生きてゐるともいへないほどである。彼等は生活において合理性を失つてゐる、華奢な社交を殘して、彼等の社會は沒落しやうとしてゐるのである、彼等は歷史的な人間の生活において、その役割を果したのである。最早彼等の生活のなかには、歷史を推進し此れを發展せしむべき何等の勢力も剩餘されてはゐない。社交が形式として宙空に浮んでゐるのは、偶ゝその社會的結合の崩解を指示するものであるとみることが出來る。生活のイデエへの轉向は、完了した。彼等には、無生活の論理が、殘されてゐるのみである。

此のイデエの沒落の現象は、直ちに文化の沒落として世界に幾多の悲觀主義者を生ぜしめたものである。「生活」から、「より多い生活」へ

それから「生活よりより多いもの」への論理的發展は、その完成期において、沒落に急轉直下するものと見ることは、不可能でない。しかし此れは生活を一般的に考へた結論である。我等は、生活の歷史的發展の過程の洞察によつて、現在、將に一個の階級的生活が此の論理の極限を突き貫けて墮落しかゝつてゐるものであることを認識し、生活全體が此れと運命を共にするものでないことを考へねばならぬ。現代において沒落の過程にある生活階級は、歷史のなかに埋沒されて了つた舊い階級と同樣に、生活自體の力を失つてその存在を自ら否定するにいたつたのである。今、歷史は謂はゞこの階級から別の新しい階級へと乘り移らうとしてゐるのである。我等は無力な生活を相續する有力な生活の階級の存在を認めなければならぬ。一般的に文化の沒落を信じ、世紀末的な悲觀主義に陷いつてゐるものは、彼等自身に歷史の認識力のないことを告白するものである。現代の頽廢は、階級の頽廢であつて、社會の頽廢ではない。此の區別は、歷史全體の見透しによつて容易に理解されることである。此の故に、我等は、生活のイデエへの轉向を單一的全體社會の過程と考へず、歷史的發展と關聯した階級社會の夫れ夫れの限界において完結してゆく過程と考へたものである。

生活のイデエは生活そのものにとつて必然的な歷史的制約を免れることが果して可能なものであらうか。我等は、これに對して否定的な考を與へるより他はない。しかし若し生活そのものが歷史的制約を繞りながら、しかもその必然的な完成に赴きつゝあるものであるならば即ち生活の氣力が歷史的發展の最後の段階において沒落から保證され得るものであるならば、此の場合、我等がそのイデエについても最後的な恒久性を與へることが不可能とはいへないのである。我等はかくの如き段階を資本主義的支配階級において認めることはできぬ。我等は、彼等の生活と對抗する無產階級の生活のなかにおいてこそ、此の可能性を認むべきである。從つて、我等は褪色した古い花瓣のやうな資本階級の社交の崩解したあとに、更に、無產階級の領域に、新しい社交が生活に對するイデエとして促進的役割を演ずるために發生してくることを、希望を以て待つことができると謂へやう。此の新興階級が歷史における最後の完成的な使命を帶びるものである以上、その生活は最後の完全な生活として飽くまでその生活力を維持するものであり、自づからその上に築かれる社交も亦た無意味なものとして凋衰して了ふ虞はないからである。此の有力な社會的結合の前に、無氣力な形式的な舊い社交の世界がなほそれ自身の法則を確有してゐるかのやうに旋回してゐるのは、歷史の眞の法則を把握した者の眼には寧悲慘な印象を與へるのである。

(五)

資本主義的な社交の形式が、空虛な舞踏を續けながら、その地盤とともに沒落してゆくのは、一個の歷史的悲劇である。しかし、こゝに我等は、この悲劇につながつて、小さな喜劇の演じられてゐることを注意しなければならない。此れは何を意味するか。此の喜劇は、表面的に見ると、悲劇そのものの進展を蔽ひ隱すものゝやうでもあるが、實際においては、悲劇そのものゝ効果を強めるだけに留まる。然らば私の謂ふ喜劇とは何であるか。それは、將に沒落しやうとする社交を

その不思議な魅力によつて無産階級の生活をなほ制御しつゝあることこれである。無産階級が自己の社會的結合の反映を頽廢的な舊い社交の形式において發見しやうとする。これは、明らかに、矛盾であり、滑稽である。

資本主義的な社交の形式が彼等に對して有つ支配力は種々の方面において認めることができる。金錢的な利得の觀念によつて巧みに案排された社交の儀禮は、無産階級の片隅の人々によつて、盲目的に尊重されてゐるではないか。又た此の社交を中心として醸し出される流行の現象に對して、彼等までも相當の關心を有ちつゝあるではないか。彼等は、自己の行爲が徒らに資本階級の形式的な社交に伴ふ快感を助長する役目をなしてゐることを顧みない。彼等は物質的並びに精神的に社交によつて搾取されてゐることを自覺しない。しかも、此の現象は、資本階級によつて極めて歡迎すべきものと考へられてゐるのは當然である。彼等は、實際において、無産階級を社交の世界に導き入れることを好まないであらう。しかし、彼等はその門戸が開放されてゐるといふことは示現しやうとするであらう。そして、我等が、社交の抽象的な法則だけを見たならば、案外彼等の表面的な公開的態度を善意的に解釋して了ふのである。

社交の内部には、自づから平等の原理が行はれる。この雰圍氣に浸るものは、一樣に、凡ての人が恰かもそれぞれ他の人々を特に尊敬するかの如くに振舞はなければならぬ。此の原理は、無産階級に對しても妥當するものと見ることは可能である。そこで、資本階級は、社交を以て、利害を超越した人間のあひだの愉快な交際の關係であつて、それは亦た超階級的なものであるとも思つてゐるのである。無産階級が此の表面的な社交の原理によつて吸引されることも止むを得ぬかも知れない。しかし社交は果して右の如き平等の原理と完全に吻合することが出來るものであると謂へやうか。生活そのものが階級的な區別を高く築いてゐない場合ならば、この解釋も許すことが出來る。しかし、生活において大いなる間隔が嚴存してゐるならば、如何に社交がその内面に平等的な原理を藏してゐるとはいへ、到底これを以て眞に平等的な作用を發揮し得るものとは考へることができない。社交が社會結合に對して平等的意味を有つてゐるといつても、それは單に資本階級のみに當て嵌るだけである。

しかも、かくの如き似而非な社交の平等の原理を無産階級自身が容認するにいたつては、正に喜劇的な滑稽であると謂はねばならぬ。此れは、彼等が、その克服すべき資本經濟のイデエとしての金錢に眩惑され、自己の歴史的な制約を忘れてまで、吝嗇家的貯蓄欲に驅られる場合と一致するものとみなければならない。しかし、此れは、要するに單なる小さな喜劇的分子であるにとゞまる。如何なる悲劇のなかにも、多少の道化役者の現はれるのは避けることが出來ない。しかも彼等の無頓着な仕草によつて、全篇の基調や目的を變向された悲劇はなかつたのである。社交を中心として考察された此の喜劇は、反つて悲劇的な歴史を鮮明ならしめるものと看做してゐるのである。我等はやがて、この悲劇と喜劇の幕が下りて、生活の氣力に滿ちた潑剌とした形式の交錯をなす社交が現はれてくるのを期して待つことができる。悲劇のなかから新しい生活階級の勝利の喊聲の響いてくるのを感ずることができるのである。我等は空虚な舊い社交の花の凋落によつて人間生活全體の沒落を悲歎すべき何等の理由を有たない。從つて此の階級的な展開を離れて考察された社交論は結局社交の生活的基礎をなす社會的結合の理解を缺除したものと謂はねばならないのである。」



唯物史觀經濟史出立點の再吟味（其二）

＝『古代共産制度』に關する若干の考證と祖述＝

福田德三

（十二）

私は此問題の吟味を、先づ『賃銀勞働と資本』に先つ一年前の一八四八年公刊の『共産宣言』の該當部分から始める。

『共産宣言』の第一節『ブルヂオアとプロレタリア』は、次の如くに始まる。

『總ての、從來の社會の歷史は、階級闘爭の歷史である。

自由民と奴隸、パトリチアとプレベヤ、領主と體僕、ツンフト市民とゲゼレ、要して云へば、壓迫者と被壓迫者とは、絕へざる相互對抗に於いて立ち、間斷なき、或は掩はれたる、或は明白なる闘爭——の其れは、毎時、全社會の革命的改造を以つてか、又は、相鬪ふ諸階級の共同の滅亡を以つてか終結したところの闘爭——を續けた。

歷史の諸初期に於いては、我々は、到る處に、社會が各種の等族に、全く分岐せられてゐることを見出す。其れは、社會的諸地

位の多樣なる階段付けであつた。古羅馬に於いては、パトリチア・騎士・プレベヤ・奴隷あり、中世に於ては、封建諸侯・陪臣・ツンフト市民・ゲゼレ・體僕あり、而して、此等各階級内には、またそれぐ特殊の階段がある。』公認版第七版一九〇六年刊第二三・二四頁



即ち、此處には、『賃銀勞働と資本』とに於けると同じように、『アジア的』には一言も觸れてなく、アジア的諸社會には、果して階級存したりや否や、存したりとせば、其は如何なるものなりしやは、一向に示されてなく、マルクス・エンゲルスは、一躍直ちに、古羅馬から、說き起して居るのである。其壓迫者、被壓迫者の列擧は、『自由民と奴隷』とを以つて始まるので、其は、希臘を包含してゐるとは云へるが、アジア諸國のことを意味してゐるものとは、考へ得られないのである。

クノーは、前に引くところの『マルクスの歷史、社會並に國家理論』第二卷第二章『マルクスの階級鬪爭理論』の終りに於いて、マックス・アドラーのマルクス評論を批評して、次の如く云つてゐる。同書七九頁以下

『この『非社交的社交性』の中に——（削）經濟的交互關係の多樣性及びそれから生ずるところの利益の諸對抗の中にでなく——アドラーは、階級鬪爭の原因を見（削）而して、然るが故に、（削）カントの衝動理論に於いて、マルクスの階級鬪爭理論の天才的豫斷ようのものを發見する。（削）

アドラーは、（削）カントについてのかゝる見解から單純に人間の社會結合（削）は、始めから一の相關的、對抗的性質を持つてゐると結論し、而して、更らに其れから結論して、人間の社會結合（削）は、『全く融和と不和との兩極的對抗間の不斷の緊張の中に存在するもの

に外ならぬ』といひ、さうして、更らに續けて曰く、

『この社會結合(削)は、――カントが、社會生活の一種の力學の思想を以つて、ヘーゲル及びマルクスの歷史ヂアレクチックの讃歎に値する先驅者として現はれる此場合にも、また、彼の思惟の天才性の働く、かの有名なる語を用ふれば――人間の非社交的社交性『換言すれば、此社會を絶へず分裂せんと脅かす一の一貫的抵抗と結び付いてゐるところの、社會に入り込まんとする人間の性向、これである。』

(中略)

かくて、有り難くも、階級鬪爭は、歷史的經濟過程から生ずる利益の對抗には歸せしめられずに、却つて人間の自然衝動に歸せしめられてゐる。(中略)元よりいかなる社會にも、最幼稚なる社會にも、(削)融和と不和とはある。が、しかし、それは、社會の諸成員が、『『自らを孤立しよう』と欲し、而して、社會結合(削)に對して、反逆するからではなくて、(中略)實に、幼稚なる社會は、(削)カントの意義に於ける、完全に單位的のものでは、全然なくて、生產過程の歷史的に與へられたる形態、及びこの過程に於ける、これらの地位に從つて、種々異なる經濟的生活利益を持つところの、諸共同體(諸階級でなく)の一列、例へば、ホルド(群團)共同體、氏族團體、家族團體、村落團體等に分裂されてゐたからである。

だから、同志アドラーが、(削)人間社會は、諸階級の利益鬪爭以外の何等の存在形態を持たぬ。階級鬪爭は、人間社會の存在態容(其もの)である(削)と、主張するのは、概念の混同に外ならぬ。社會の存在形態は、マルクスの見解に從へば、社會の經濟形態によつて決定される。從つて、一定の社會は、これを、一定の生產の組織形態と呼ぶことが出來る。(實に、原始共產社會、初期資本主義社會、封建社會等と云ふが如くに)さうして、階級鬪爭は、かゝる社會諸形態の內に於て、全く一定の歷史的經濟諸關係(經濟分化)から生ずる利益鬪爭に外ならぬ。それは、一定の發展段階において、始めて現はれるもので、さうして、(削)社會結合(削)或は孤立に對する(削)人間の永久的傾向なりとせらるゝものの間に於ける對抗とは、全く相預るところないものである。それは、恰かも、原始社會(削)は、たとへ、謂ゆる自然衝動なるものは、其內に於いて、最も强く作用するけれども、全く何等の階級鬪爭を知らざるが如くである。(削)何等の階級が未だ存在しないところには、階級鬪爭もまた存在し得ないことは、全く自明のことではないか。』同人社刊東京帝大學友會內社會科學研究會譯『マルクスの階級鬪爭理論』昭和二年一月三版五五―五七頁。圈點を附した部分は、私の試みに改めて見たもの。中頃の個所は譯者に於いて、若干讀み違をされたようであるから、其處は少し念入りに改めて見た。

クノーの右の見解が、マルクスの眞意を傳へて、誤なきものとすれば、『共產宣言』の前揭の個所に、アジア社會が擧げてないことは、誠に、當然なりと謂はねばなるまい。何となれば、原始共產社會の意味

に解せらるゝアジアの諸社會に於いては、謂ゆる自然衝動なるものは、最とも強く作用してゐても、其處には、全く、何等の階級存せず、從つて、階級鬪爭としての對抗關係存せざるが故である。アドラー流に、カントの社會生活力學乃至は思惟の天才性の所産たる人間の非社交的社交性、人間の自然衝動などと云ふものが、階級鬪爭を喚び起すものならば、アジア諸社會にも、また階級鬪爭が存してゐたるべき筈であつて、『共産宣言』が之れを洩らしたのは、一の缺陷と云はねばならないことになるであらう。而して、其の缺陷は、エンゲルスが前掲の脚註に辯疏してゐるように、一八四七年には、まだ、社會の前史が、殆んど全く知られてゐなかつた云々の理由を以つて、寛假さるべきではあるまい。何となれば、マルクスは、『アジア的』を列擧中に加ふべく、ヘーゲルから、十二分に教へられてゐたものであるに相違ないから。マルクスは、アドラーの言ふように、人間の社會結合は、始めから、一の相關的、對抗的性質を有つて居り、人間の社會結合は、融和と不和との、兩極的對抗間の斷へざる緊張の中に存在するものに外ならぬなどとは、決して、考へて居たものではないとするならば、階級鬪爭の當事者の列擧中に、アジアの代表者を參列せしめなかつたことは、何等怪むべきところはないのである。

クノーは、マルクスの眞意なりとして、幼稚なる社會は、カントの意義に於ける、完全に單位的の一體でなく、諸々の共同體に分裂されてゐたと云ひ、階級鬪爭は、社會諸形態の內部に、特定なる歴史的經濟諸關係（經濟分化）から生ずる利益鬪爭に外ならぬもので、其れは、一定の發展階段に到達して始めて現はるゝものなりと云ふ。此の解釋が、マルクスの眞意に合するものならば、『共産宣言』に於けるマルクスは、アジア諸社會に於いては、未だ此の發展階段にまで、經濟的諸關係が到達し來つてゐないものと認めたと云ひ得るであらう。

そこで、問題が起る。

クノーの此解釋は、『共産宣言』に於けるマルクスの眞に意味した處を描出して誤なきものであらうか、否か。而して、其れは、ヘーゲルの說と、——カントなどを持出すことは、私は、此關係に於いては、むしろ、滑稽に墮するものではないかと思ふ。私は、其昔し三田學會雜誌に、其の一部分を掲出した拙稿『カント國家法律哲學管見』に於いて、カントの社會哲學、經濟哲學（?）——若し、其樣なものが、彼れにあるとしたならば——の、彼の盛名に、毫もふさはしいものでないと云ふ管見を、今日に於ても、捨て能はないものである。——如何なる交渉を有つか、これである。

（十三）

ヘーゲルは、其の『法律哲學』(21)——ヘーゲルの『法律哲學』も『歴史哲學』も、ラッソン氏の訂正版があるが、私は特に、マルクスの讀んだ其版又は其れに近いものと思はれる全集版を用ゐて、ラッソン版によらぬこととした——に於いて、國家の發展史的地位を定むべ

く、三段を劃した。即ち(一)家族(二)ブルヂォア社會(三)國家これである。而して、彼は、『所有は、家族に先つて存せりと言ふことに出來ない。然るにも拘らず、家族に先つて、所有を論ずることが常である』全集第二版第八卷一八四〇年刊第六五五頁と云ひ、更らに、『所有の合理的なることは、其れが、諸欲望を充たすことには存しない、此れによりて、人格性の單なる主觀性が止揚せられることに存する。所有ありて始めて人格は理性たるのである。我が自由の第一の現實性が、一の外的の物に存すると云ふことは、一の惡しき現實性たるには相違ないが、抽象的な人格性は、其の不特定性にある限りは、此の不特定性の特定以外の他の實在を有し能はざるのである』同上七七頁と斷言して居る。

今、此の考と併行するものを求むれば、其れは、次の考であらうと思ふ。『人間は、其本性上惡なりとする基督教の教理は、人性元と善なりとする他の教理よりも高き地位にある。精神として、人間は、一の自由なる本體であつて、自然的衝動によつて、決定せしめざらしむる地位を持つものである。直接の而して教養を經ざる狀態にある人間は、其處に止る可からざる、而して其れより自らを解放せざる可からざる位置にあるものである。其れなくしては、基督教が自由の宗教たり得ざる所の始祖以來の罪惡の教理は、取りも直さず、此の意義を有するものである。』同上五二頁

家族は、不特定的なる——即ち其狀態に、人格が永く停滯す可きにあらざる狀態を止揚するものであり、ブルヂォア社會は、家族を止揚するものであり、國家は、ブルヂォア社會を止揚するものであるとのヘーゲルの考へ方は、斯くして、一のヂアレクチックを展示する。所有のヂアレクチックは、此のヂアレクチックに編み込まれて居るのである。唯だヘーゲルは、所有の發展階段其ものを特に明示して居らないのみである。私は斯く考へて大過ないことと思ふ。

此の考は、ロレンツ・フォン・シュタインが、其の『今日の佛國の社會主義と共產主義』(22)の結論に於いて、更らに之を布演した處であつて、而して私はシュタインを祖述しつゝ、若干自分の考をも加へて、拙著『階級鬪爭と社會政策』の結論中に述べて見たことがある。其後種々考慮した所によれば、此の考へ方は、後年のマルクスに全くは、其の跡を消し去つて居らぬものゝ如くである。然し其點は今問題外に措くとして、私に取つての當面の吟味に於いて、此點を念頭に置くことを忘れてはならぬように思ふ。殊に所有のヂアレクチック的見解に關するゾムバート(『プロレタリア社會主義』に於いて)及びムース(『駁マルクス』に於いて)の曲解又は誤解——私が斯く言ふ理由は、後段に詳にする——を釋くについて、此點は若干の關係を有つものと思ふ。

ヘーゲルは云ふ。『普遍的のものを、啻に解散的のみならず產出的にも特化することとしての概念の運動原則を、私は名けて、ヂアレクチックと云ふ。其は、感情に、直接意識に、抑も與へられた一の對象、命題を解散し、錯綜し、彼や此やへ導き、單に、其の反對の導き出し

を能事とする意味にてのヂアレクチックではなく——彼のプラトーンに於いて屢々現はるゝような、一の否定的方法としての其れである。』同上 六三頁 彼の國家觀、而して、其と併立する世界史觀は、其の產物である。

彼は云ふ、『普遍的精神の存在の要素——其は藝術に於いては、直觀及形象たり、宗教に於いては、感情及表象たり、哲學に於いては、純粹自由の思想たる——は、世界史に於いては、內在性と外在性との全範圍に亘る精神的現實性である。同上 四二三頁（中略）

歷史は、生起の形に於ける、直接自然の現實性の形に於ける、精神の形成であるが故に、發展の諸階段は、直接自然的なる諸原則として存在する。而して、此等は、——其等が自然的なるが故に——一の衆體として相互に分立し、從つて更らに、一の民族には諸原則中の一つが歸屬する——即ち其の地理的及び人類學的存在が。同上 四二五頁

斯くの如き要因が、自然的原則として歸屬する其の民族は、世界精神の自己發展の自己意識の進行に於て、此の要因の伸張を委任せらるるものである。此種民族は、然る時期に向つては、世界史上、支配的のものとなる——劃時的なるは唯一度に限る。世界精神の當面の發展階段に於いて、其の負擔者となると云ふ此の絕對權に對しては、他の民族の諸精神は、何等の權利を有たない。而して、一度其の時期の過ぎ去つた諸民族と同じく、彼等は、世界史に於いて、勘定されない。一の世界史的民族の特殊歷史は、一部分は、其の原則の幼稚にして掩はれた狀態から、其の全盛期——自由なる德性的自己意識に達し、一般歷史に參入する時期——に到る發展を含み、一部分は、又た、其の衰亡と墮落の時期をも含むものである。何となれば、斯くして、一のより高い原則の派生が、其れ自らの否定の原則としてのみ開展するから。（中略）同上四二五—六頁

具體的なる諸觀念、民族諸精神は、其等が絕對的普遍性であると云ふ具體的觀念に於いて、其の眞實性と其の決定とを有つ。言換れば、彼等が其の實現の實行者であり、又た其の偉觀の證人並に飾りとして立つところの世界精神の中に。世界精神は精神として、唯だ、自らを絕對的に知らんとし、從つて、其の意識を自然的直接性の形態から、解放し、其れ自らへ到達せんとする、其の行動の運動であるから、此の自己意識形成の諸原則は、其の解放の進程、世界史的諸帝國の進程に於いては、四となる。

其第一は、直接啓示の時代であつて、其原則は、實體的精神の形像、個體が其本體に沈入し、而して、其れ自らに向つては、存在の理由なきものとして殘るところの等位體の形像これである。

第二の原則は、此の實體的精神を知り、從つて、其れが、積極的の內容及び充實であり、其自らの在が、其の生きたる形即ち美しき德的個人性であることこれである。

第三の原則は、斯く自らを知れる其自らの在が、抽象的普遍性へ深化し行き、其れと共に、斯くて精神に一任し去るに到る客觀性への無

限なる對抗となることこれである。

第四の形成の原則は、精神の此の對抗が、其の眞實性と具體的本體を受け入る可き、其の內在性への轉化である。（中略）

以上四つの原則に從つて、世界史的帝國は、次の四つに分れる。第一、東洋帝國、第二、希臘帝國、第三、羅馬帝國、第四、ゲルマン帝國』。同上四二七—四二八頁

ヘーゲルが、一八三七年刊の『歷史の哲學』に於いて、（一）東洋（二）希臘（三）羅馬（四）ゲルマンの四時期を劃したことは、旣に一八二一年刊の『法律哲學』に、其の端を發することは、右を以つて明であらう。而して、其の分け方は、決して、單なる便宜から來つたものでなく、彼のヂアレクチックの中に、確乎たる土臺を持つものなることも、亦疑を容る可くもない。私はまた、其れと同時に、家族——ブルヂオア社會——國家てふ發展階級と、其れと併行する所有諸形態のヂアレクチック的發展階段も、旣に『法律哲學』の中に、可なり精密に說かれてあるものと考ふることの、決して誤りでないことを云ひ得ると思ふものである。

（十四）

右に示したヘーゲルの說は、二つに大別して考へて見る必要がある。第一は、家族——ブルヂオア社會——國家てふ三段の發展階段のシエーマである。第二は、東洋帝國——希臘帝國——羅馬帝國——ゲルマン帝國てふ四段の發展階段のシエーマ、これである。

今、第一について、クノーの解說がある。其言ふところを聽いて見よう。前揭書第二卷八三至八五頁

『この、社會が、家族から徐々に發展したといふ學說をば、ヘーゲルも亦、ある制限を設けてとつたのである。かれは、小さい家族の中に、旣に、國家生活を特徵づけるところのものを見た。個々人は、その中で、孤立せる人としてではなく、却つてかれの上位にある總體の關節と（削）感ずる。何となれば、家族は、性慾の滿足及育兒を目的としてゐるばかりでなく、その意義は、むしろ、性的關係を超越してゐるからである。家族は、同時に、法律的・道德的の人間の統一體であり、又、一定の所有或は財產（家族財產）をもつ經濟共同態である。ヘーゲルが、かれの『法律哲學』第一七〇節にいつてゐるやうに、『單なる個々人の特殊なる欲望の、抽象的所有權における恣意なる要素及び我欲は、ここでは、共同のもののための管理及び獲得、すなはち、道德的なものに變化するのである』。

しかしながら、家族は、ますます、發展するにつれて、新たなる若嫩を生じ、その若嫩は、出自や血統によつて、原始家族と關聯しづつ、なほ（削）それから分れて獨立するのである。そこで家族が、澤山でき、遂に、これらが相集つて、種族及び民族が生ずるのである。他方においては、個別家族は、それ自身分化する。それらの家族

の自然欲望は增加し、それらの家族の成員もまた獨立する。さうして、今やこれらの人々は、ヘーゲルがいつてゐるやうに、家族的結合の範圍からぬけ出して、かれ等の欲望を滿足するために、他の家族の成員たちと交互關係を結（——筆者註。問題の「アインゲーエン」は、茲では、正しく「結ぶ」である——）、ぶのである。かれ等は、『一のより高度の集合的統一體』に結合する。かくて、社會は生れる。けだし、いかなる社會においても、その最も主要なる內容は、『幾多の個人的諸欲望及びその滿足を、交互的勞働、乃至は、交互的共働によつて媒介すること』であるからである。

かくて、家族の擴大及び分化から、一方に於いては、種族及び民族が生じ、他方においては、欲望滿足の結合の結果として、恰かも、ヘーゲルがその著『法律哲學』第一八一節に次の如くいつてゐるやうに、ブルヂオア社會が生ずる。ヘーゲルはいふ。

『家族が他の原理に變化して、擴大することは、一部は、それの民族への——かくて、共同態的自然的起源を持つところの國民への——おだやかなる擴大として存在し、一部は、散在せる家族共同團體の——或は支配的强力により、或は自由意志による——結合されたる欲望及びその滿足に伴へる聯合の交互作用による集合として存在する。』

これと同樣なる見解を、われわれは、ヘーゲルに私淑せる若き時代のカール・マルクスにおいて發見する。かれも、また、家族——かれも、はじめには、それをやはり、父權制個別家族と觀てゐるのだが——の中に、新しき若嫩の增加と結婚とによつて、それから、種族及び民族が派出するところの原細胞を認めるのである。それ故に、種族は、かれにとつては、例へば『資本論』第一卷（第四版第三一六頁。民衆版第二九八頁。高畠氏改譯第四四八頁參照。譯者）にはまだ、『先づ一家族、更らに進んでは一種族の內部に、體性及び年齡の差異に基くところの、換言すれば、純生理上の基礎に立つところの自然に發生した分業が生じてくる』と、いつてゐるやうに、家族の血族的擴張にすぎないのである。同樣に、マルクスの『經濟學批判』の斷片的な草稿にも、次のやうにいつてゐる。

『われわれは、歷史をより深く遡るほど、（削）個人、從つてまた、生產に從事する個人は、非獨立的なる一のより大なる全體に屬するものなるを見る。始めには、まだ全く、自然的態容において家族の中に、及び種族に（削）發展した家族の中に（削）後には、諸種族の對抗及び融合から生じた種々なる形態の共同體に屬してゐる』

『資本論』の第一版及び第二版が、出たときまでもなほ、マルクスがかやうな見解を持つてゐたといふことは、フリードリッヒ・エンゲルスが、これを認めてゐる。（中略）

この點においても、マルクスは、始めは、ヘーゲルの見解をとつたが、かれは、間もなく（削）、父權制の個別家族は、既に早く、族父

制大家族に變化し、族父制大家族は、また更に、種々なる發展をとげて、種々なる形態をとつたことを認むるにいたつた點に於いて、ヘーゲル以上に進んだのである。なるほど、ヘーゲルも同樣に、聖書に、描かれたるセム的の族父制大家族並にローマの古家族を知つてゐたが、しかし、これ等の家族形態は、ヘーゲルにとつては、原始家族の單なる擴大にすぎなかつた。かれは、それに對して、一の歷史的發展の產物としての特別な注意を向けなかつた。これに反して、マルクスは、古アイルランド及びインドの經濟狀態の研究において、そこの家族共同體に當面し、それにおいて、取りも直さず、過去の家族の發展の交代的形態を見た。(削) かくて、彼は、發展の過程中に於いて、互に相交代する、種々異つた經濟形態に相應する、種々異つた歷史的家族諸形態を看取した。彼は悟つた。資本主義社會に於ける今日の家族も亦、決して自然的のものではなく、却つて、他の家族形態がこれに先行し、さうしていつかまた、他の家族形態が、それに次ぐてあらうところの、一の發展の產物であることを。だから、また『資本論』第一卷(第四版第四五五頁。民衆版第四三一頁。高畠氏改譯第六四四頁參照――譯者)には、次の如くいつてゐる。

『(上略)キリスト・ゲルマン的家族形態を、絕對視するのは、古ローマ的、古ギリシャ的、又は、東洋的家族的形態――これ等の家族形態は又、相互に一つの歷史的發展系列を形づくるものである(削)――を、絕對視するとおなじく、迂愚な沙汰であるは、いふまでもない』

之れに反し、原始的社會形態の形成をば、マルクスは、ヘーゲルとは、全く同樣に、(筆者註。譯者は、「それに反し……同樣に」を、「全く反對に」とした。其れは、逆立ち的讀違ひであり、又たヘーゲル、マルクス異同の現事實と矛盾する) 次の如く考へる。すなはち、諸個別家族及びそれらから生じたる諸家族共同體の中に、分業及び欲望の增加が生じ、遂に、これらの集團が、相互に、その生產物を交換し、換言すれば、相互に、經濟的交互關係を結ぶにいたり、それはやがて、更に一般的な、交互的な結合に導くといふのである。

(中　略)

從つて、ヘーゲルとマルクスとの差異は、たゞ、次のことに存するにすぎない。すなはち、ヘーゲルは、交換は、始めから個人的に行はれ、從つて、交互關係は、個人的態樣をとると、いふことを認めるに反し、一方、マルクスは、(略) 始めに、種々なる家族及び家族群が、家族及び家族群として、接觸し來るといふ、人種學的に(削 より正當なる見解から出發してゐる。』 鳥海篤助氏譯『婚姻及び家族の發展過程』二至七頁。圈點の部分は、私の試みに改めたもの。譯者の譯は、右にあげた「逆立ち」的讀違ひの一ケ條を除いては、甚だ立派に出來てゐる。

(十五)

クノーの此のヘーゲル、マルクス異同論は、今私が問題とするとこ

ろのものに取つては、Vorwegnahme 一の飛躍的豫斷である。ヘーゲルと異る見解をマルクスが、其の『資本論』において公言するに至るまでには、二十年近くの歳月が介在してゐる。而して、此二十年の途中に、私の當面の問題が包まれてゐるのである。『經濟學批評』の緒論及び所謂『唯物史觀の公式』の起草までにも、十年餘りの歳月が經過されてゐる。

私は、此十年餘りの間に、私の吟味の對象を探し出さねばならぬのである。此十餘年間のマルクスの研究過程の進行については、我々は、幸にも、マルクス自身の報告を有つて居る。其は『經濟學批評』序文中に見出される左の一節である。（同書第五版五四頁以下。）

『フランスの社會主義及び共産主義の弱い哲學色を帶びた反響が、「ライン新聞」にも聞へるようになつてきた。私は、この不手際の細工物に對して、反對を宣言した。然し之れと同時に、「アルゲマイネ・アウグスブルグ新聞」との交論爭に於いて、私の從來の研究は、フランスの此等の思潮の内容自體について、何等かの批判を下すには、なほ不十分であることを、率直に認めた。そこで、「ライン新聞」の重役連が筆鋒を和ぐることにより、之れに向つて下された死刑の宣告を免れ得るとの妄想を抱いてゐる際、私はむしろ喜んで、その機會を捉へ、公の舞臺から、書齋に退くことにしたのである。私を惱ました問題の解決の爲めに企てた最初の勞作は、ヘーゲル法律哲學の批判的檢討であつて、その序論は、一八四四年巴里で公にせられた『獨佛年誌』に現れた。私の研究は、法律諸關係並びに國家諸形態はそれ自身によつて、理解さるべきものでもなく、また所謂人間の精神の一般的發展によつて、理解さるべきものでもなく、寧ろそれは、物質的の生活關係——これが、總和は、ヘーゲルが、十八世紀に於ける英佛人の先蹤に做ふて、ブルヂオア社會なる名稱の下に包括せるところのもの——に、その根據を有するものだといふこと、而も、このブルヂオア社會の解剖的研究は、これを經濟學に求むべきものだといふこと、の結論に達した。』（宮川氏譯本『序言』一—三頁。傍點は、私の改めた個所を示めす。但し此節の宮川氏譯は、實に美事なものである。）

ヘーゲル研究から出立したマルクスが、主として、フランスに於ける社會主義並に共産主義の思潮及び運動に當面して、根本的の疑を設し、其の疑問の解決に頭腦を惱ませた有樣、而して、マルクスが如何なる解決を、其間から見出したかは、右の一節によつて、粗ぼ之れを窺ひ知ることが出來る。

マルクスのフランス社會主義及共産主義に關する研究、また、ブルヂオア社會の解剖を、其中に求むべきものだとの結論に達した經濟學の研究、而して、ヘーゲル說の檢討、それからの推出については、彼が潜心之れに從事してゐた最中、恰かも公刊された一先覺者の一著作が、輕からぬ關係を有つてゐることは、或は誇大せられ、或は故意に輕視

せらるゝの別はあれども、兎に角、誰人によつても、全くは否定せられてゐない事實である。其著作とは、一八四二年刊の、ロレンツ・シュタインの『今日のフランスの社會主義及び共產主義』(22) これである。

シュタインは此書の序文に於いて云ふ。『社會主義と共產主義とを、其の現在の最內部的生命に於て包藏する束帶は、那邊に、之れを見出すべきか？ 此の束帶が一の眞實にして、而して、フランスの今日の狀態の核心に、眞に屬するものであるならば、此れは、決して、突如として生じたものではあり得ぬ。否、其れは、フランス最近史の全體の歸結と見なければならぬ。國家團體の諸要素は、徐々に全く別のものとなつた。而して、其中に、全然新なものが一つ發生した。其れは、第一革命以前には、絕對に、注意されず、又た尊重されずに伏在して居たもので、誰人も其れに、獨立に意思し、又は思惟する權利を許容せず、否、國家も、各人も、愛又は實行上の援助をも、與へなかつたものである。(中略) 其れは、即ち、プロレタリアである。プロレタリアとは、社會的生活に於ける、其の妥當の基礎としての教養も所有も持たず、而も、人格に始めて、其價値を附與する其等諸財を、全く缺いて存するを欲せざる人々等の全階級の謂である。』前掲書六至七頁

シュタインは、更らに、共產主義の本質を論ずる條に於いて、次ぎの如く云ふ。『平等てふ思想は、フランスの民衆的意識の基礎である。此の平等は、所有者に對しては、實現せられてあるが、民衆即ち本來のプロレタリアに對しては、實現せられてない。故に、プロレタリアに於いては、平等は、既存の否定となつて現はれる。何となれば、既存は、不平等を設定するから。かくして、否定に對する事實上の地盤が見出される。(略) 故に、平等の原則が茲に於いて、一方に偏して、既存の單なる否定たるに止る所以が、說明出來る。(略) かくて、其れ自らに於いて、免れ難き、從來の歷史其れ自らによつて、絕へず確認せられた一の結論が生ずる。曰く、共產主義は、プロレタリアの中に於いてのみ可能であると』同上書三五五頁。

パウル・フオーゲルは、其著『ヘーゲルの社會概念及びロレンツ・シュタイン、マルクス、エンゲルス並にラサルレによる其の歷史的進展』伯林一九二五年刊 (23) に於て、左の如く云つてゐる。

『マルクス及エンゲルスのプロレタリアは、時期的のみでなく、概念的にも、また、シュタインのプロレタリアに、より近く立つものである。シュタインは、マルクス及エンゲルスの見たプロレタリアの特徴の、殆んど總てを指摘してゐる。即ち、資本主義への對抗、自由思想の中に其れが基礎を置くこと、精神的の統一、所有に對する矛盾、勞働を社會的尺度に引揚ぐること、都會プロレタリアと田舍プロレタリアとの區別、プロレタリアと貧乏とは同一ならざること、プロレタリアのヂアレクチツク的運動等は、何

れも、シュタインが、プロレタリアに本質的なりと指示してゐるところのものである。マルクス及エンゲルスが、シュタイン以上に進出したことは、此のヂアレクチック的發展と、プロレタリアの止揚に其頂點を有つところの革命的傾向とを、より大なる概念的鋭さを以つて、描き出したことこれである。』同上書二三七頁

『プロレタリア止揚の理論は、また共產主義の理論を伴ふ。然らざれば、其處に、一つの空虛な空間と一つの空虛な時間が生じたであらう。』同書二三八頁

『若きエンゲルスとマルクスとは、共產主義に於いて、少ヘーゲル哲學の首尾一貫した進展、ドイツ理想主義の合法的相續者を認めた。(略) 彼等の共產主義は、事實に於いては、終まで考へ拔いたヘーゲル主義であつた。(略)マルクスとエンゲルスとは、利益諸對抗の存せざる一の社會を構成して見たのである。(略) かくて、原始共產主義、階級なき原始社會に出發する循環過程は完了する。(略)シュタインのブルヂオア的地平線は、マルクス及エンゲルスの社會主義的眼界よりは、遙かに、視野の廣いものであつて、シュタインは、共產主義の、內在的矛盾を看破したのである。』同書二三九頁。

フォーゲルは、必ずしも公平なる批判者を以つて目することは出來ない。否、其論の全體は、むしろ、マルクス(及びエンゲルス)に對して本當の理解を、根本的に缺いて居るのではあるまいかと思はれる。唯だ右の一條は、大體に於いて、誤りなき觀察を言ひ表はしてゐるものと見て大過ないようである。其は、次のマルクスの言に徵して知り得るかと思ふ。

マルクスが、前揭の條中、『私を惱ました問題の解決の爲めに企てた最初の勞作』と云つてゐる『ヘーゲル法律哲學の批評的檢討』は、其序論を、一八四四年、即ちシュタインの右著の刊行に後るゝ二年目に於て、巴里で發行された『獨佛年誌』に揭げたものである。其最終の節に於いて、マルクスは、次の樣に云つてゐる。此文は、メーリング編のマルクス、エンゲルス、ラサルレ遺稿集第一卷(24)三八四頁以下にも、また一九、二、五年重刊の『獨佛年誌』(25)七一頁以下にも、共に載せてある。左に引く所は、後者の八四頁にあり。

『(前)、プロレタリアが、從來の世界秩序の××を宣言するのは、それは、唯プロレタリアが、其れ自らの存在の秘密を言明する所以に外ならないのである。何となれば、プロレタリアの存在は、此の世界秩序の事實上の××であるからだ。(前)プロレタリアが、私有財產の××を要求するのは、それは、唯だ、社會が、其の法則にまで高めたところのこと、(前) 即ち、既に、其の協力を俟たずして、社會の消極的歸結として、プロレタリアの中に、體化されてゐるところのことを、改めて、社會の法則に高める所以に外ならないので

ある。』

嘉治隆一氏譯『獨佛年誌鈔』我等叢書第三冊一九二七年東京同人社刊第三二頁。附點は私の改譯の部分を示めす。wenn……を「若しも……ならば」と譯出したのは、原文の意を誤解せしむる恐がある、譯者の再考を望む。大井氏の「した時に」も亦同樣の憾がある。大井元氏譯『マルクス論文集』一九二六年東京白揚社刊第三五頁參照。

‖シュタインの書は、一八四八年に至り、著しく改訂せられ、また二卷に擴張せられた第二版が、『第三フランス革命以來の社會主義的並に共產主義的諸運動』(26) と題する二百五十一頁から成る附錄別卷と共に刊行された。一八五〇年に至つては、更らに書名を『一七八九年より今日に至るまでのフランスに於ける社會運動の歷史』(27) と改め、三卷に擴張された新版が出た。此新版は一八五五年に其の第二版が刊行せられたが、其は第一版と寸分の異るところなき單なる重刷である。サロモンが自己の序文を添へて、一九二一年に重刻したもの (28) は即ちこれである。

マルクスとシュタインとの關係については、先覺學者の間に屢々論爭せられたところである。前掲フオーゲルの書以外のものをあぐれば(一)ストルーヴエの論文 (29) (二)マサリックの著書 (30) (三)サロモンの前掲序文(四)メーリングの論文 (31) (五)ゾムバルトの書 (32) (六)スパルゴの『マルクス傳』(33) (七)クノーの論文 (34) 等が、其重なるものである。

私は、本小論文に於いては、此問題其ものに觸れることを、全く避けた。何となれば、其考究は、如何に誘惑的であつても、却つて、私の論步の進行を妨げることとなるであらうと思つたからである。‖

(十六)

ストルーヴエは、メーリング (31) によつて痛く駁擊せられた其の『一八四〇年代に於ける二つの未だ知られざるカール・マルクスの論文。科學的社會主義の成立史への一文獻』(29) 『ノイエ・ツアイト』紙第十四年度第二卷一八九六年刊第五三頁。(マサリクは、これを一八八五—九六年度第二卷七十一頁と誤記してゐる。『マルキシズムの哲學的・社會學的基礎』一八九九年刊第四二頁。) と云ふ論文に於いて、『私の見る所では、マルクスは、後年の諸著作一八五九年の『批評』一八六七年の『資本論』に於いて、始めて、再びヘーゲルに立戻り、エンゲルスも、其爲めに、其方向に(『駁デューリング』に於いて) 有力に影響せられたものと思はれる。一八四〇年代に於いては、マルクスは、ヘーゲルのヂアレクチックに對しては、批判的・拒絕的態度を取つてゐたものゝように思はれる。此關係に於いては、『ドイツ哲學のイデオロギー的囈語』に關する彼の言、並びに、『駁グリユーン』に於ける、それに對する全體の調子を指摘したい。科學的社會主義の出產に際する危機的時期——それは、『哲學の窮乏』及び『駁グリユーン』の公けにされたとき——に於いては、後に至つて、新世界觀が、既に完成され、確立した教理的建物として現はれた頃に比すれば、此の大なる、エンゲルスが後に至つて、爾く力を込め、また雄辯的に力說した、科學的社會主義の發展に對するドイツ哲學の重要は、其の創說者兩人に取つて、未だ明瞭に其眼の前には存せなかつた。(中略)ドイツ哲學からの解放は、フオイエルバッハの『ヒユマニ

ズム』に對し、唯物史觀を對立せしむることによつて、完了された。而して、遙かに後に至つて、始めて、古典ドイツ哲學と唯物史觀とは、ヂアレクチックに於いて、結合を見出し、歷史的唯物主義は、ヂアレクチック的なものと認められるに至つたのである。』と主張したことがある。クノーも亦同誌同卷第四一〇頁の『天才の起源』(34)と題する小論文に於いて、『マルクスは、例へば、ロレンツ・シユタインと同じ樣な歷史的研究から出發した。恐らく、シユタインの書は、マルクスの研究を、著しく影響したものであらう。マルクスのヘーゲル哲學への連絡は一八五〇年代の始めに於いて始めて起る。マルクスの初期の著作には其れは未だ見るを得ない』と云つて居る。之れに反して、マサリクは、其『マルキシズムの哲學的並に社會學的基礎』(30)第四三頁脚註に於いて、兩者の言を斥けて、ヘーゲルのマルクスに於ける影響は、凡ての時期に於いて、而して抑もの始めから之を認むべしと主張した。

此れは、一の大きな問題であつて、今此小さき私の論文に於いて取扱ふこと能はざるものであり、また、其の必要もないことであるが、マルクスは、明かに、シユタインに、或は多くか、或は少くか、影響せられ、而して、更らに、より多く、フランスに於けるプロレタリアと共產主義との實際事實の觀察と研究とに、影響せられて、其の出發點たるヘーゲルの立場からは、或は多く、或は少く、兎に角、徐々に變化を被りつゝあつたことだけは、疑ないように思ふ。其變化の跡を辿るべき『ドキユメント』としては、一八四四年の『ヘーゲル法律哲學批評』については、同年の『神聖なる家族』(36)あり、一八四五年の『ドイツチエ・イデオロギー』(37)あり、更らに、また、一八四七年の『哲學の窮乏』(38)と、同年の『反デユーリン』(35)とがある。

今此時期に於ける、マルクスとエンゲルスのヘーゲルからの脫出の態度を物語るものとして、我々は、幸にも、エンゲルスの手に成る同時代的一報告を有つてゐる。其れはストルーヴエが、『ノイエ・ツアイト』第十五年度第一卷七八—七九頁に揭げた論文中に引いた一八四六年、ピユットマンの『ドイツ市民書』第二卷一至五六頁揭載の、エンゲルス稿の『商業に關するフリエーの一斷片』(39)中の一節である。エンゲルスは其中に於いて云ふ。『ドイツ人は、今共產主義的運動を墮落せしむべく始めつゝある。共產主義は未だドイツには存するか存せぬかの狀態にあるにも拘らず、ドイツ人は、フランス及びイギリスに於ては、常套陳腐の言と成り了つてゐるところのことを、ヘーゲル論理の言葉に飜譯して、此の新しき知識を、未だ嘗て存せざるもの、『眞正なるドイツの學說』なりとして、世界に振れ廻る。(略)フランス人又はイギリス人が、既に十年、二十年、否、四十年も前に、——而も甚だ善く、甚だ明晰に、甚だ美しい言葉に於いて言つたことを、ドイツ人は、此一年以來、切れ〳〵に學び、而して、之をヘーゲル化し、(略)而して遙かに拙惡な、抽象的な形ちに於いて、全く新しい發明として、活版に附

しつゝある。私は私自らの著作をも、此の例に洩れるものとはしない。ドイツ人に特有なことは、唯だ、此等の思想を表はすに悪しき、抽象的な、難解な、而して淺薄な形態を以つてしてゐるといふことだけである。而して、純粹な理論家にふさはしいことは、ドイツ人は、フランス人から――イギリス人のことは、彼等は、未だ、全く何事をも知らぬ――最一般的な諸原理以外には、唯だ、最惡なこと、最理論的なこと、即ち、將來社會のシエマチジールンク、社會系統だけを、知ることを以つて足れりとしてゐる。其最善の方面たる、現在社會の批評、社會問題の一切の取扱の眞正なる基礎、主要なる課題は、全く高閣に束ねられてある」と。以上は摘譯である。逐字譯ではない。

マルクスとエンゲルスとが、如何にしてか、ヘーゲル流の、ドイツ哲學流のシエマチジールンクから脫出し、現存社會の徹底的研究と批評とによつて、社會問題一切の取扱の眞正なる基礎、主要なる課題を見出さんと、刻苦經營したこと、これが、即ち、私の意味する變化を喚起すに至つた所以であらうことは、右のエンゲルスの言によつて、窺知することが出來る。然し、其の變化の過程を、一々に跡付けることは、マルクスの殘し置いた文獻だけでは、出來ないことであり、而して先覺者の研究に賴るべきものを――淺薄なる私の眼の屆く限りは――見出し得ないところである。

唯玆に一つ、私に取つて、甚だ有り難い先人の仕事がある。其れは、ゲオルヒ・フオン・ベローが、マルキシズムの成立期に於いて、マルクスとエンゲルスとが、經濟史の文獻に、どの位目を通して居たであらうかを考證して見た論文(40)此れである。リアサノフ氏は、更らに、之れに加へて、前掲ドイチッエ・イデオロギー覆刻文の緒論中にマルクスの遺紙中に見出された備忘錄から、マルクスが當時寓目し又は讀まんと志してゐた書物の名をあげてゐる。其大多數は、リアサノフ氏によれば、經濟學、經濟學、社會主義並に歴史に屬するもので、其中心となるものは、經濟學、經濟史及政治學說に關するものであると云ふことである。マルクス・エンゲルス・アルヒーヴ第一卷第二一三頁。

今此の一點を、善く念頭に置きつゝ、一八四八―九年、即ち『賃銀勞働と資本』刊行のときに至るまでの、マルクスの發言を、跡付けて見よう。

(十七)

一八四四年の『神聖なる家族』(36)には第四章『認識の休息としての批評的批評又はエドガー君としての批評的批評』メーリング編マルクス、エンゲルス、ラサルレ遺稿集第二卷一一三頁以下に收む の一章がある。此章は、マルクスのプルドーン讃美の一篇とも看做す可きものである。其中に於いて、マルクスは次ぎの言を發して居る。同上書一二七頁以下

『凡ての科學の第一の批評は、必然的に、其れが戰ふ相手たる科學の諸前提に囚はれて居るやうに、プルドーンの著『所有權とは何ぞや』(41)は、經濟學の立場からの、經濟學の批評である。此書の、法理的部分——法律の立場から法律を批評する——には、我々は深く立入ることを要しない。何となれば、經濟學の批評が、主要の題目であるから。プルドーンの書は、科學的には、經濟學の批評によつて立越へられる。プルドーン流に解釋した經濟學の批評からも。此の仕事は、プルドーン自らによつて、始めて可能となつたこと、恰も、プルドーンに對する批評が、フキジオクラットによるメルカンチル・システムの批評、アダム・スミスによるフキジオクラットの批評、リカルドによるアダム・スミスの批評、並びにフリエー及サン・シモンの業蹟を前提とするが如くである。

經濟學の總ての發展は、私有財產制を其前提として有つものである、此の根本前提は、經濟學に取つては、免る可からざる事實であつて、此前提は進んで之を吟味することなく、否、セーが素朴的に告白するやうに此前提については、唯だ偶然に論及するのみのものである。プルドーンは、經濟學の根據たる、此私有財產制を一の批評的吟味の下に置いた。其の吟味は、最初の決定的にして、無遠慮なる又た同時に科學的なる吟味である。此れは、プルドーンの成した大なる學問的進步である。此進步は、經濟學を革命し、一の眞誠なる經濟學を始めて可能ならしむるものである。

プルドーンの『所有權とは何ぞや』は、現代の經濟學に對して、シーエスの『第三等族とは何ぞや』が、現代の政治學に對して有するのと同一の重要を有つものである。

プルドーンが、私有財產制のより進んだ諸々の形ち、例へば、勞銀、商業、價値、價格、貨幣其他を、例へば、『獨佛年誌』(エンゲルスの『經濟學批評への斷片』を見よ)に於ける樣に、私有財產制の諸形成と見ず、却つて、此等の經濟學的諸前提を以つて、經濟學と爭ふのは、前に述べた歷史的に正しとせらるゝ立場に合する所以である。(中略) 同上一二七・八頁

經濟學は、人間的てふ影を、諸經濟的事情に、例外なく、妥當せしめるか、又は、却つて而して平均に於いて、此等諸事情を、人間的とは、明かに言明せられた差別に於て、其の嚴かに經濟的なる意義に解するのである。此の矛盾の內に、經濟學は、無意識的にさまよつて居る。

プルドーンは、一擧にして、此無意識性に、終局を與へた。(中略) 彼は、他の經濟學者のやうに、私有財產制の此種類又は彼種類を、部分的方法に於いて、描出することを爲さず、所有財產制其ものを普遍的方法に於いて、經濟學的諸事情の僞造者として、一貫的に描出した。彼は、經濟學の立場からの經濟學批評の爲し能ふ一切のことを、成し遂げたのである。

『所有權とは何ぞや』の立場を特色付けようとするエドガー君は

經濟學については一言も云はず、又たプルドーンの書の他と異る特質——即ち、私有財産の本質に關する問題を、經濟學と法理學との死活問題としたこと——についても一言も云つて居らぬ。批評的批評に取つては、其等凡ては自明のことである。プルドーンは、私有財産を否定することを以つて、何も新らしいことをしたのではない。彼は、批評的批評が沈默に附して居る秘密を、素破拔いたに過ぎない。』（同上書一二七至一二九頁）

マルクスは、更らに云ふ。

『プロレタリアと、富有とは、對抗である。此二つは共に合して一の全體を成す。兩者は、私有財産の世界の二つの形象である。兩者が、互に對抗して占むる一定の地位の問題である。兩者を以つて、一の全體の二方面なりと說くは、不十分である。

私有財産は、私有財産として、富有として、其れ自らと、而して其と共に其の反對なるプロレタリアとを、存在に於いて維持すべく強制されて居る。對抗の積極的方面が、其自らに滿足されてゐる私有財産である。

プロレタリアは、其反對にプロレタリアとして、其れ自らと、而して其と共に其を條件付ける反對——其れは其れをしてプロレタリアたらしむるところの——たる私有財産を止揚すべく強制されてゐる、此れは、對抗の消極的方面其れ自らに於ける不安、解消せられた而して其自らを解消するところの私有財産である。（同上書一三二頁）

『私有財産は、其の經濟的運動に於いて、其れ自らの解消へと促がし行く』（同上頁）

『プロレタリアが勝を占むるとも、其れは決して、社會の絕對的方面とはならぬ。何となれば、プロレタリアが勝つのは、其れ自らと其反對とを共に止揚するによつてであるから。然るとき、プロレタリアは消滅すると共に、其を條件付ける反對たる私有財産も消滅する』（同上書一三三頁）

『プルドーンは、啻にプロレタリアの利益の爲めにのみ其書を著はしたのではない。彼自らプロレタリアであり、勞働者であるのである。彼の著作は、フランスのプロレタリアの學問的宣言である。從つて其れは、誰彼といふ批評的批評家の文學的濫作などとは、全く異る歷史的重要を有つものである。』（同上書一三八頁。大井元氏譯『マルクス論文集』二一五頁以下に、此邦譯あり。但し、私は、茲には、自ら拙譯を試みて置いた。）

（十八）

プロレタリアの本質、其れと共産主義との關係を深く研究しつゝあつたマルクスは、更らにプルドーンによつて、此問題を『所有權』の

問題、所有權の發展のシェーマと關聯して、考ふ可く、大なる示唆を得たものであらう。而して、其れが、一八四五年の『ドイッチェ・イデオロギー』(37) 中の左の證言となつたものではあるまいか。

——佐野文夫氏譯、エンゲルス、マルクス『フォイエルバッハ論』改訂版一九二六年東京同人社刊には、マルクスの『フォイエルバッハに關する十一ヶ條のテーゼ』を附載するの勞が執られてあるが、惜しいことには、其れにつゞく以下の部分は譯出されてない。よつて、私は拙譯を試みて置いた——

「所有の最初の形態は、古代世界に於いても又中世に於いても、種族所有これであつて、羅馬人に於いては、主として、戰爭によつて、ゲルマン人に於いては、牧畜によつて、條件付けられたものである。古代諸民族に於いては、（殊に羅馬及スパルタ」——一の都市に、多くの種族が共に住居してゐた爲めに——種族所有は、國家所有として現はれる。而して、各人のそれに對する權利は、單なる占有（ポセッシオ）として現はれる。此のポセッシオは、種族所有其ものと同樣に、土地所有にのみ限られてゐる。本當の私有は、古代民に於いても、現代諸民族に於けるが如くに、動產を以つて始まる。——（奴隷及共同體）（ドミニウム・エクヰス・ユーレ・キヴィトゥム）中世から發生する諸民族に於ては、種族所有は、種々な階段——封建的土地所有、團體的動產、マヌファクトゥールの資本——を通過して發展して、現代的の大工業及び世界的競爭によつて條件付けられた資本、純粹なる私有財產——其れは、共同體の一切の外觀をぬぐひ去り、而して所有の發展に於ける國家の凡ての作用（影響）を杜絶したところの——に到達したのである。此の現代的私有財產に、現代的國家が照應する。（中略）ブルヂオアジーは、一の階級であつて、最早一の等族でないから、最早地方的でなく、民族的に其れ自らを組織すべく餘儀なくされ、而して、其の平均利益に、一の普遍的形態を附與す可く餘儀なくされてゐる。私有財產が、共同體から解放せられたにより、國家、

・乍去、國家は、ブルヂオアが、內と外とに對して、

・國家の獨立は、等族が、全くは階級にまで發展せず、より進歩した國々に於いては、廢止せられた諸等族が、尚何かの役目を演じ、人民の何れの部分もが、他の諸部分を支配するまでに到らざる混亂が存する諸國に於いてのみ、今日は、之を見るのである。此れは、ドイツの現狀である。現代的國家の最も完全な例は北米である。最近のフランス、イギリス及北米の學者等は、異口同音に云ふ、——

・而して、此等は、各人の意識に移植されてゐるのである。（中略）

私權は、私有財產と時を同ふして、原始發生的共同體の解消から發展するものである。羅馬人に於いては、私有財產及私權の發展は、其以上の工業的及商業的結果を伴ふことなくして終つた。何となれば、其の全生產方法は、同一のものたるに止つてゐたから。現代の諸民族に於いては、封建的共同體は、工業及商業によつて解消せられたから、私有財產及私權の成立〔發展〕と同時に、一の新しい態樣——其れは、更らに進んで發展の能力ある——が始まつた。」〔同上書二九八—九頁〕

「分業の種々異つた發展階段〔形態〕は、また同時に、所有の種々異つた形態である。換言すれば、分業の其時々の階段は、また勞働の原料、器具及所產との關係に於ける各個人相互の諸關係を定める。

所有の最始の形態は、種族所有である。それは、一民族が狩獵、漁撈、牧畜、又はせいぜい農耕によつて生活する生產の發達せない階段に相應する。農耕によつて生活する場合に於ては〔同時に〕未墾地の多く存在することを前提とする。分業は、此階段に於いては、未だ甚だ少しか發達せず、唯だ家族の內に與へられてある自然發生的の分業の一延長たるに止まる。〔全〕社會的分岐は、家族の一延長に限られ、家長的種族酋長、其の下に種族成員、其下に奴隷あるに止る。〔下略〕

第二の形態は、古代の地方體及國家所有である。其れは、幾多の種族が、契約又は征略によつて、一の都市に結合することから起り、奴隷制度は、前の如く存續するのである。地方體所有と併んで、既に動產は發達し、時を經るに從つて、不動產も發達する。乍去其れは一の異例として、而して、地方體に從屬する一形態としてに止る。國家の臣民は、唯其の團體に於てのみ、勞働する奴隷に對して、權力を有つに止り、從つて其爲めに、地方體所有の形態に拘束されてゐる。（中略）故に、全然其上に基礎を置く社會の分岐幷に其れと共に、民族の權力は、不動產が發達すると同じ度合に於いて、衰頽するのである。分業は、其れよりは、發達してゐる。我々は、既に、都會と田舍との對抗を見出し、更らに降つては、都會の利益を代表する國家と、田舍の利益を代表する國家との間の對抗を見、又た更らに、都會の內では、工業と海上商業との對抗をさへも、見出すのである。市民と奴隷との間に於ける階級關係は、十分に完成されてゐる。〔下略〕

第三の形態は、封建的又は等族的所有である。（中略）これは、種族所有及地方體所有のやうに、一の共同體の上に築かれたものである。さり乍ら、此共同體には、古代に於ける如き奴隷でなく、隷農小農民が、直接生產階級として對立してゐるのである。（下略）封建時代に於ては、主たる所有は、土地所有に存し、此土地所有

は一方には、其上に拘束せられてゐる體僕の勞働、他方には、自己勞働と、ゲゼレの勞働を支配する小なる資本と結び付いてゐる。』同上書三〇三至三〇六頁

ヘーゲルの『法律哲學』から出發し、フランスの社會主義及共產主義思潮を熟知するに及んで、之れに不滿足を感じ、シュタインの研究に、若干の示唆を得、更らに、刻苦研究の後、ヘーゲルの天地以外に進出して、ヘーゲル批評を起稿し、更らにプルドーンの私有財產に對する全面的批評に、多少の刺戟を感じ、ドイツの理想主義哲學の糟粕を全く一掃し去らんと努力したる時代のマルクスの所有發展階段史觀は、實に右の如きものであつたのである。私は、吟味を重ねて、玆に到り、マルクスの唯物史觀經濟史の由來するところの、甚だ深いものであることに、痛く心を動かされざるを得ないものである。而も、右の所有發展史觀は、エンゲルスが『共產宣言』第一頁の脚註に云つてゐるように、社會の前史は、未だ殆んど全く知られてゐなかつたと言つても差支ない位の一八四七年に先つ二三年前に於いて、既に已に形づくられてゐたのであることを知るは、私共に取つて、實に興味深きことゝせねばならぬ。

（十九）

此時期に於けるマルクスの考へ方を、彼自身の言によつて窺ふ可き

一傍證としては、更らにマルクスが後年一八六五年起草した、プルドーンを評した一書簡がある。其れは、今ベルンシュタイン及カウツキー共編の『哲學の窮乏』(42)の卷頭に附載されてあるものである。一九二〇年刊ストットガルト版卷頭前付の二十五頁以下。又た佛文原本の重刷二四五—二五八頁にも、エンゲルスの筆に成る其の佛譯が附錄第一としてのせてある。(43)

『（創）この著書の不滿足なることは、既に其の表題に示されてゐた。問題は、それに對して、正しく答ふることの出來ないように、問違つて、提出されてあつた。古代的（ギリシャ＝ローマ的）所有諸關係は、封建的所有諸關係の中に、（創）封建的所有諸關係は、プルヂオア的所有諸關係の中に、其影を沒してゐた。かくて、歷史それ自らは、過去の所有諸關係に對して、其の批判を行ふこととなつた。プルドーンが元來取扱はふと思つたのは現存の近代プルヂオア的所有（創）であつた。これが何であるかの問に對しては、經濟學の批判的分析——それは此等の所有諸關係の全體を、意志關係としてのその法律的表現に於てでなく、その現實の形態に於て、卽ち生產諸關係として會得するところの（創）——によつてのみ、答へ（創）得べきであつた。プルドーン（創）は、此等經濟的諸關係の總體を、所有權と云ふ一般的な法律的見解に絡み込んだために、彼は、ブリソーが、既に一七八九年よりも前に、一の類似の著作に於いて「所有とは盜」と云ふ同じ言葉を以つて與へた解答以外に、（創）出るこ

とが出來なかつたのである。

此の答から出で來ることは、最善の場合に於いても、『盗掠』に關するブルヂオアの法律諸概念が、亦た、(削)彼の『正直な』營利に(削)も適用されると云ふことだけである。他方に於て、『盗掠』は、(削)所有の暴力的侵害として、所有權を前提するものであるから、プルドーンは、眞のブルヂオア的所有に關して、自らに不明瞭な有らゆる種類の妄想の中に自ら縮み込んでゐるのである。

一八四四年、私がパリに滯在してゐた時分、私は、プルドーンと個人的關係に立入つたのであつた。私がこのことを玆に記すのは、彼れの『贋造』――これは、英國人が、商品の贋造を指して曰ふ言葉であるが――に對して、或度まで私に責任があるからである。長時間の、屢々夜を徹するに至つた討論に於て、私は彼にヘーゲル主義を吹き込んだのであつて、其れは、彼の爲めに、大なる害を爲したのである。――不幸にして彼は獨逸語を解しなかつたが爲めに、彼はこれを本當に硏究することが出來なかつたのである。私が始めたところのことは、私がフランスから追放された後には、カール・グリユン氏がこれをつゞけた。しかも、彼は、獨逸哲學の敎授として、――(削)ヘーゲル主義について、全く何事をも理解してゐなかつたと云ふ私に勝る長所を持つてゐたのである。

彼れの第二の重要著作たる「貧困の哲學」(14)が出版される一寸前のこと、プルドーンは、私に詳細なる手紙を寄せて、そのことを豫告し、その手紙の中で、次のやうに書いたのであつた。「私は貴下の批判の鞭を待つてゐます」と。併し乍ら、この批判の鞭が、彼に對して下さるゝや否や(私の「哲學の貧困。」パリ。一八四七年。(38)に於て)、我々の間の友情は、永久に、終りを告げたのである。

上來、私の述べ來つたところから、貴下は次のことを了解されたであらう。卽ち「貧困の哲學」、一名、「經濟的矛盾の體系」(44)は、之を要するに、「財産とは何ぞや?」の問ひに對して、解答を與へなければならなかつたのだと云ふことを。事實プルドーンが(削)經濟學の硏究を始めたのは、この最初の著書の刊行以後のことであつた。彼は、彼自ら提出した此の問題を解決する爲めには、單なる嘲罵によつてゞはなく、近世經濟學の分析によつて答へなければならないと云ふことを發見したのである。同時にまた、彼は、(削)經濟學上の範疇の體系を辯證法的に表出しやうと試み、解決不可能なるカントの『二律背反』に代ふるに、發展手段としてのヘーゲルの『矛盾』を以つてすべしとしたのである。

この二卷にわたる浩瀚な書物に對する批評としては、私は、貴下に、私の駁論を讀んで戴きたいと思ふ。その中で、私は、就中プルドーンが、科學的辯證法の神秘に徹することの如何に乏しかりしかを、他方に於て、彼が如何に、かの「思辨的」哲學とその幻想に與みしつゝあるかを、示したのである。物質的生産の發展の一定段階に照應せる歷史的生産關係の理論的表現として經濟的諸範疇を考察する

代りに、彼れは、(朗)これを、先驗的永久的觀念に變形し、かくして、廻り路をした揚句、彼は、彼れの出發點たりし、(例)プルヂオア經濟の立場に再び舞ひ戻つてきたのである。

ついで、私は、彼が依つて以て、批判を試みんとするところの彼れの經濟學の智識の如何に不備にして、否、時には學被生徒的なるか、また如何に、彼が歷史的運動――それ自體(朗)解放の物質的條件を生み出すべきところの運動――の批判的認識の中に科學を求めずして、却つて、かの空想者流とともに、謂ゆる「科學」を絞り求め、これによつて「社會問題の解決」に對する公式を、アプリオリに紡ぎ出さんとしてゐるかを示した。

(中　略)

かくして、プルドーン君は、經濟學ならびに、共產主義に對して、批判を加へ得たりと自惚れてゐる。しかも、彼は、實はこれら、兩者の遙かに下位に立つものである。經濟學者等の下位に。何となれば、彼は純一の魔術的公式を手許に携へてゐるところの哲學者として、彼は純然たる經濟的細目に入ることなくして可なりと信じてゐるが故に。また、社會主義者等の下位に。何となれば、彼はたとへ、唯だ思辯的にもせよ、プルヂオア的水平線の上に出るだけの勇氣と洞見とを有つてゐないが故に。「……彼は、科學者として、プルヂオアとプロレタリアとの上を、高翔せんと欲する。しかも、彼は絶へず、資本と勞働との間を、經濟學と共產主義との間を、ぶらついてゐる小プルヂオアにすぎないものである。』

(註)淺野晃氏譯マルクス『哲學の貧困』昭和二年三月第三版 弘文堂刊 三二一―三二八頁。圏點を附したは、私の改めて見た部分。譯者は、エンゲルスの佛譯文に基いて譯出された。其れとしては、美事な譯である。然しエンゲルスの佛譯は、必ずしも逐字的に、マルクスの原文を追ふて居ない。私は、今、一々、マルクスの原文に引戻すべく、改正を試みて置いた。

(45) 一八四七年八月及九月號の『ウエストファリア・蒸汽船』(オットー・ルユーニング編輯、初めはビーレフェルド、後には、パーダーボーンにて刊行。一八四五年一月一日創刊一八四八年廢刊)に揭げた、マルクスの『駁グリユーン』(35)については、其發見者ストルーヴエは云ふ。『此論文は、『哲學の窮乏』と殆んど同時に、出來たもので、此の古典的著作の側に置くにふさはしい副產物である。『神聖なる家族』のフオイエルバツハ主義のみでなく『フオイエルバツハに關する十一ケ條のテーゼ』も、また、此の『駁グリユーン』に於ける遙かにより鋭い而して、差異の點を何等隱す處なく明かに照明した議論によつて凌駕せられてゐる』と。(ノイエ・ツアイト第十四年度第二卷一八九六年刊第五二頁) ストルーヴエの此發見した論文に關して、更らに、考證文をのせた、メーリング(同誌同卷三九五頁)幷にベルンシユタイン(同誌同卷二一六頁)の二人も、亦粗ぼ同樣の書を爲してゐる。

其文中にマルクスは左の如く云つて居る。(ノイエ・ツアイト第十四年度第二卷一八九六年刊五二頁並に其全文を揭げた同誌第十八年度第一卷一九〇〇年刊。第一六五頁以下にもあり。)

『グリユーンは、實際の生產及び消費事情について、何物をも知

らない故に、『眞正なる社會主義者たち』の最後の隠れ場たる『人間の本質』といふことに逃げ込む外はなかつた。これと同じ理由からして、彼れは、生產から出發せず、消費から出發することを固守してゐるのである。生產から出發するとなれば、實際の生產諸條件並に人間の生產行爲を顧みなければならない。之れに反して、消費から出發するとなれば、今日は『人間的』に消費されて居らぬとの說明、而して、『人間的消費』のポストユラート、即ち、人間を眞正の消費に教育すべしとか、其れに類似の空語を以て、自ら慰めることが出來る。』

また曰く

『カベーは、其の「イカリー旅行」の、第十二章及び第十三章に於いて、共產主義に對する新舊の先覺者等の意見を陳列してゐる。彼は、決して、一つの歷史的運動を描出しようとの大望を抱いては居らぬ。フランスのブルヂオアに取つては、共產主義は、一の不評判なる人物として、通つてゐる。ソコデ、カベーは云ふ、よし、私は私の辯護依頼主（共產主義）の性格を保證する爲めに、總べての時代の最も尊敬すべき人々の與へた證明を提出しようと。かくて、彼は、辯護士の用をつとめる。彼は、彼れの辯護依頼主に取つて最も不利益なる證言をすらも、有利のものに轉化せしめてゐる。歷史的忠實は、辯護士には、要求すべきではない。

ソコデ例へば、一人の有名なる人が、偶然貨幣や、不平等や、富や、社會的弊害などについて、攻擊的口吻を一語でも洩らすと、カベーは、口を極めて之を稱贊し、其人をして、之を繰返さしめ、ついに其言を以て、其人の信仰告白たらしめ、之を印刷に附し、而して、手を打つて喜び、皮肉的な人の善さ振りを以つて、ブルヂオアに向つて叫んで曰ふ、『聽け、聽け、彼は共產主義者ではないか』と。彼の此のやり口には誰も免るゝことは出來ない。モンテスキユーでも、シーエスでも、ラマルチンでも、否とよ、ギゾーですらも。彼等は、何れも、皆、自分は知らない間に、共產主義者であることにされて仕舞ふ。』

マルクスは、グリユーンを以つて、或は、シユタインを、或はレーボーを剽竊しただけで足りないで、右のようにカベーをも、其儘生吞活剝したものだと云ひ、『グリユーン君は、疾呼する。家族に向つての共產主義よと』『此のやり口で、グリユーン君は、一切のブルヂオア制度を通覽して、必ず、其内に共產主義の一片を見出し得るのである。彼は、ナポレオン法典を共產法典と洗禮し、娼窟にも、兵營にも、監獄にも、共產主義的植民地を見出し得るのである』と罵倒してゐる。

（二十）

『共產宣言』から出發した私の吟味は、再び『共產宣言』に歸る。

以上、マルクスの思想進歩の跡を追ひ來つて、私は一八四八―九年のマルクスにまで辿り來つた。而して、私の得た結論は、これである。ヘーゲルから出立して、『共産宣言』と『賃銀勞働と資本』とに至るマルクスの研究は、一八四五年の『ドイチエ・イデオロギー』中に於ける所有三形態論を以つて、一段落を告げたものであつて、其れに至るまでには、マルクスは、或はシユタイン、或はプルドーンの影響を受け、又たフランスに於けるプロレタリアと共産主義との研究から幾多の光明を得、更らに經濟學、經濟史の研究によつて示唆せらるるところ多く、絶へず、變化を被りつゝあつたが、一八四五年の『ドイチエ・イデオロギー』の所有三形態論成つて後は、プルドーンに對し、また、グリユーンに對し、手酷しい駁撃を加ふるほどに、其所信を確めたもので、而して、其所信が、『共産宣言』と『賃銀勞働と資本』とに於いて、確定の形ちに於いて披瀝せられたものであらうといふことこれである。

若しも、私の此結論にして、若干にても、事實に合つてゐるものとするならば、ヘーゲルの二つのシエーマ、即ち、家族――ブルヂオア社會――國家と、而して、東洋――希臘――羅馬――ゲルマンとが、著しく異つたものとして、マルクスの心眼に映ずるに到つたことは、怪むに足らぬといひ得るであらう。其の總括は、即ち『ドイチエ・イデオロギー』中に見出さるゝものこれである。此點に於いて、私は、此の所有三形態論を含む部分を、容易に見ることを得るやうにして與れたリアサノフ氏に對して、滿腔の敬意を表せずしては、已む能はざるものであり、氏がマルクス研究に寄與せられた業績を、幾たびか繰返して、感謝せぬわけにゆかぬものである。此の文獻的至寶が復活せられる以前のマルクス說の研究は、タトヘ、ストルーヴエの意外の掘出物――當時に於いては、極めて重要なものであつた――を以つてするも、到底比較し得ざる、深さを與へられたものであつて、極端に云へば、其以前の研究は、少くとも、文獻的には、恐く其價値を或は全く或は著しく失つたといつても、大過ないかと思ふのである。兎にも角にも、私の本小論文に於ける吟味に關しては、躊躇せずして爾か云ひ得ると信ずる。

ヘーゲルは、所有は、家族に先つて存せりと言ふことは出來ないと云つて居る。其意を推して考へて見れば、ヘーゲルは最初の所有形態は、家族所有(家族財産)であつたと認めたものと云ひ得るであらう。即ち、クノーの云ふやうに、彼は、『家族は、同時に、法律的、道德的の人間の統一體であり、又、一定の所有或は財産(家族財産)をもつ經濟共同態である』と考へてゐたものであらう。而して、また、所有の合理性を、其欲望充足の能性に見ず、これにより、これを通ずる、人格性の顯純主觀性の止揚に於て認めたものであらう。換言すれば、抽象的な人格性は、不特定的のものであるが、其れが、一たび外的物質たる所有と結び付くとき、此の不特定性が特定化せらるゝことによつて、人格は一の

理性となるとしたものであらう。マルクスは、はじめは、ヘーゲルの此立場を守つてゐたものと考へられる。其れが一八四〇年代の央に至つて、特にフランスの共産主義思想に觸れ、經濟學の研究に心を潛むるに至つて、根本的に變化したものと考へられる。然し、其變化は、必ずしも、全面的ではなく、部分的であつて、マルクスの考へ方の中には、ヘーゲル的のものは、決して、全くは跡を絶たなかつたことは、クノーの言ふほどではないとしても、之を否定することは、出來ないようである。何れだけがヘーゲル的で、何れだけが、超又は非ヘーゲル的であつたかの決定は、容易に爲し得ざる難課題である。クノーやストルーヴエのように簡單に斷定するのは、決して當を得たとは考へられない。

私は、むしろ、マサリックの見方の方が、より正しくはないかと推測するものである。殊に、家族は、不特定的な個人人格性を、所有(家族財産)に結付けることによつて、其不特定の狀態を止揚し、ブルヂオア社會は、また、此の家族と家族所有とに拘束せられてゐた狀態を――家族其ものを――止揚し、國家は、更らに、此のブルヂオア社會を止揚するといふ、ヘーゲルのヂアレクチツクは、四十年代のマルクス、五十年代のマルクスに、共に、全くは、其跡を絶つてゐないのではないかと思ふものである。否、更らに、『家族は、其發展に伴つて、新なる若嫩を生じ、その若嫩は、出自や血統によつて、原始家族と關聯しつゝ、なほ、それから分れて獨立し、かくて、多數の家族が起り、其等は、相集つて種族、後には、民族を形づくる』(前段所引文を少しく改む)との、ヘーゲルの見解は、また、マルクスの執つてゐたところであるのであらうと思ふ。ソコデ、『ドイチエ・イデオロギー』に於ける、所有の第一形態は、種族所有であるとの主張が、諒解出來ることとなるであらう。

言葉を換へて云へば、公式としてのヘーゲルのヂアレクチックは、決して、マルクスによつて、捨て去られたものでないと、考へるべきであらう。然し乍ら、其れと同時に、ヘーゲルの『逆立ち』を『本立ち』に引直さんとの努力は、此期間に於いて、絶へず、マルクスによつて、爲されつゝあつたことと云はねばなるまい。ヘーゲルに於いて『逆立ち』になつてゐるシエーマが、『本立ち』に引直され、(一)種族所有　(二)地方體、及び國家所有　(三)封建的又は等族所有　の三段のシエーマとなつたのは、此努力の一産物と見るべきでは、あるまいか。他の言葉を以つて云へば、ヘーゲルの二樣のシエーマ、即ち　家族――ブルヂオア社會――國家　の其れと、東洋――希臘――羅馬――ゲルマン　の其れとの二つは、此の所有三形態のシエーマによつて、云はゞ――少し無理な言ひ方とは思ふが――『止揚』せられたのではあるまいか。

フオーゲルが云つた『マルクス及エンゲルスのプロレタリアは、時期的のみでなく、概念的にも、また、シユタインのプロレタリアに、より近く立つもので』、『マルクス及びエンゲルスの見たプロレタリアの特徵の、殆んど總て』即ち、『資本主義への對抗、自由思想の中に、

其れが基礎を置くこと、精神的の統一、所有に對する矛盾=プロレタリアのヂアレクチツク的運動』等は、シユタインもマルクス及エンゲルスと共に、本質的として指摘するところであり、而して『マルクス及エンゲルスが、シユタイン以上に進出したことは、此のヂアレクチツク的發展と、プロレタリアの止揚に、其頂點を有つところの革命的傾向とを、より大なる概念的鋭さを以つて、描き出したことこれで』あつて、マルクスとエンゲルスとの共産主義は、事實に於ては、終まで考へ拔いたヘーゲル主義で、此二人者は、利益諸對抗の存せざる一の社會を構成して見、かくて、原始共産主義、階級なき原始社會に出發する循環過程は完了するとせられたものでありとするならば、而して此考へ方に基いて得られた結論は、マルクス自ら云つてゐるやうに、法律諸關係並びに國家諸形態は、それ自身によつて、理解さるべきものでもなく、また、——ヘーゲルの考へたやうに——所謂人間の精神の一般的發展によつて、理解さるべきものでもなく、むしろ、それは、物質的の生活諸關係——ヘーゲルのブルヂオア社會——に、その根據を有するものだといふことにありとするならば、ヘーゲルが精神の一般的發展の階段なりとしたる東洋帝國——希臘帝國——羅馬帝國——ゲルマン帝國のシエーマが、マルクスによつて、著しく輕視せられるに至つたことは、誠に當然のことと云はねばならぬ。

其れと同時に、不特定人格の特定化と見られた家族——ブルヂオア社會——國家てふシエーマも亦た、其必當性を減ずるに至つたことも想像し得られる。しかし、マルクスは、此兩様のシエーマを全くは、脱出したものではない。否、其れは、一の赤き綫の如くに、『資本論』に至るまでも、其存在を全くは、消滅し去つたものではない。唯此の二つのシエーマに與へた内容が、著しく變化したに止る。

其變化は、東洋——希臘——羅馬——ゲルマンの四階段については、外形的にも現はれた。即ち一八四八年の『共産宣言』には、シエーマの外形を取らず、一八四九年の『賃勞働と資本』に、無造作的に

私は左様觀察した——古代的——封建的——ブルヂオア的てふ形となつて現はれるまでは、其途中に於いては、殆んど——全くと云つても差支あるまい——其影を潜めて仕舞つてゐる。

私は、無造作的にと云つた。然し、其れは、或は、言ひ過ぎであるかも知れない。其理由は、後段に述べる。家族——ブルヂオア社會——國家の三段のシエーマは、外形的には、必ずしも消へ去つてゐない。しかし、其れ丈け、更らに、より多く、内容に變化を來したと思ふ。は、今、其次第を、次ぎに闡明して見ようと思ふ。

（二十一）

ヘーゲルの三段のシエーマには、所有の發展階段が、密接に編み込まれてあることは、前段に云つて置いた。さて、ヘーゲルの所有觀は、晩年のマルクスの其れとは、全然異るもので、それを一の絶對的範疇と認むるものである。曰く『諸財の分配についての關係に於い

て、採用せんとする平等は、財産は、勤勞に基くものであるが故に、短かき時間の内に、再び破壞せられるであらう。かく、實現し得られざることは、決して實現を求むべきではない。何となれば、人間は、元より平等ではあるが、其れは、人格としてのこと、換言すれば、其の古有の淵源としてのことに限るのである。從つて、各人は所有を有つ可き筈のものである』『法律哲學』獨版八五頁『私は、所有を通して、私の意思に存在を與ふるものであるが故に、所有は、此のもの、私のもの、たるべき決定を有たねばならぬ。これが、私有財産の必要性に關する重要なる理論である。此れに對する例外が、國家によつて爲され得るのは、其れは、國家のみが、これを爲し得るからである』同上八二頁と。ヘーゲルの家族——ブルヂオア社會——國家てふシエーマは、此所有觀の上に基かれてゐるものである。

マルクスの變化は、先づ、此點について起る。而して、此れについて、最も鋭い刺戟は、ブルドーンの『所有權とは何ぞや』であつたと私は推測するのである。一八四四年の『ヘーゲル法律哲學批評』は、變化の第一段を、有力に物語るものであり、マルクスが、當時、如何にブルドーンに聽從しつゝあつたかは、同年の『神聖なる家族』に於いて、窺ひ知り得ると思ふ。『平等は既存の否定となつて現はれる。何となれば、既存は不平等を設定するから、』とのシユタインの考に刺戟されたマルクス、『共產主義は、プロレタリアの中に於てのみ可能である』とのシユタインの創見に勵まされたマルクスは、其ヘーゲル批評に於いて、『プロレタリアが、私有財産の否定を要求するのは、それは、唯だ社會が、其法則にまで、高めたところのこと（略）を、改めて、社會の法則に高める所以に外ならない』と云つて、明かに、ヘーゲルから完き脫出を宣言するに至つた。而して、ブルドーンに對しては『經濟學の總ての發展は、私有財産制を其前提として有つものである。（略）ブルドーンは、經濟學の根據たる、此私有財産制を一の批評的吟味の下に置いた。其の吟味は、最初の決定的にして、無遠慮なる、又た同時に科學的なる吟味である。此れは、ブルドーンの成した大なる學問的進歩である。此進歩は、經濟學を革命し、一の眞誠なる經濟學を、始めて可能ならしめるものである』との、最上級的讚美をあびせかけてゐる。其れは、『哲學の窮乏』に於けるマルクスとは、全く別人の觀がある。元よりマルクスもエンゲルスも、其毀譽に於いて——殊に褒に於いて——は、殆んど軌道を逸する底に極端なるを好む人々ではあるが、——此點に於いて東西のマルキスト達は、實に其師を辱しめぬ人達であると云へよう——ブルドーンに對する毀譽の急變化は、實は、兩人者、殊にマルクス自らの、此短期に於ける、急激な前進的發展を、ブルドーンを標的として、自ら物語るものと見るのが、當を得てゐるようである。

マルクスは、ブルドーン禮讚に托して、當時に於ける、彼自らの立場を、いとも雄辯に物語つてゐる。『ブルドーンは、一擧にして、此の無意識性に終局を與へた。』『彼は、他の經濟學者のように、私有財制産

の此種類又は彼種類を、部分的方法に於いて、描出することを爲さず、所有財産制其ものを、普遍的方法に於いて、經濟學的諸事情の僞造者として、一貫的に描出した。彼は、經濟學の立場からの經濟學批評の爲し能ふ一切のことを、成し遂げたのである。』『プルドーンは、私有財産を否定することを以つて、何も新しいことをしたのではない。彼は、批評的批評が、沈默に附してゐる秘密を、素破拔いたに過ぎぬ』と。私は、マルクスのすべての此等の言は、『逆立ち』になつてゐるものと見たい。其れを『本立ち』に引直して、考へて見るとき、始めて、此等は、活きたる文獻的證文となるものと考へる。

マルクスは、其一生中、實によく、實に有力に他を罵倒し、而してまた時には、他を讚美した。これを、單なる罵倒、單なる讚美と見るとき、我々は、其れが、何の爲めであるかを知るにさへ惑ふことがある。乍去、マルクスの他を罵るは、實は自らを——自らの過去を——罵る所以であり、彼の他を讚美するは、自らを——自らの現在を——讚美する所以であると考ふるとき、其處に、我々は、道ひ知れざる興味と而して手引とを、見出すのである。

かくて、私は、マルクスのヘーゲル批評に於いて、マルクス自らの過去を考へ、其のプルドーン讚美の中に、當時のマルクス其人を見出し得るかと思ふものである。若し私の此の『本立て直し』の試みが、若干にても、當を得たものとせられ得るならば、私は、次の如く考へて大過ないかと思ふのである。

マルクスは、ヘーゲルの二つのシエーマから出發した。而して、其れは、フランスに於けるプロレタリアと共産主義との研究、シユタインの著書、プルドーンの『所有權とは何ぞや』の熟讀によつて、著しく變化さるゝに到つた。かくて、到達したマルクスの立場は、一方に『共産主義は、プロレタリアの中に於てのみ可能である』と確信し、また、『プロレタリアが、從來の世界秩序の解體を宣言するのは、唯だ、プロレタリアが、其れ自らの存在の秘密を言明する所以に外ならぬ』と看破しつゝ、他方には、『プロレタリアは、プロレタリアとして、其れ自らと、而して、其と共に其を條件付ける反對たる　　とを、止揚すべく強制されてゐる』『私有財産は、其の經濟學的運動に於いて、其れ自らの解消へと、促かし行く』『プロレタリアが勝を占むるとも、其れは、決して、社會の絶對的方面とはならぬ。何となれば、プロレタリアが勝つのは、其れ自らと、其反對とを共に止揚するによつてであるから。然るとき、プロレタリアは消滅すると共に、其を條件付ける反對たる　　』と云ふにあつた。これ即ち、ヘーゲルのヂアレクチックの『逆立ち』を『本立ち』にまで、進展せしめたものである。精神を物質を以つて置き換へた丈けが、『本立ち』の努力ではない。否、後者は、むしろ、前者から派生した、云はゞ、一つの副産物と見るべきものである。私は、少くとも、左樣に考へることのより正しいことを信ずるものである。何となれば、若し左樣でな

いならば――左樣でなく解釋したものに、土田杏村君の社會科學『唯物史觀研究』號に寄せられた雄篇がある――其れこそ、玆にもまた、一の新なる『逆立ち』を現出するものであらうと思ふから。

（二十二）

かく考へて來ると、私が、前段（十三）に引いたヘーゲルの見解は、こゝに至つて、マルクスによつて、打克たれたものであつて、『所有によりて人格性の單なる主觀性が止揚せらるゝ』が故に、其は合理的なりと云ひ、『所有ありて、始めて、人格は理性たるのである』と云ひ、また、所有なき人格とは、基督敎によりてもと惡なりとせらるる人性の如きものなりと云ふ、ヘーゲルの所有觀は、全く打捨てられたものと云はねばなるまい。而して、階級闘爭の最頂點を、プロレタリアの、其れ自らと、其反對極たるブルヂオア的所有との止揚に認むるに至つたマルクスは、クノーの言の（十二）に引くところの ように『原始社會は、たとへ、謂ゆる、自然衝動なるものは、其內に於いて、強く作用するけれども、全く何等の階級闘爭を知らず』『階級闘爭は、社會諸形態の內に於いて、全く一定の歷史的經濟諸關係（經濟分化）から生ずる利益闘爭に外ならぬ。それは、一定の發展階段において、始めて現はれるもので、社會結合或は孤立に對する、人間の永久的傾向なりとせらるゝものゝ間に於ける對抗とは、全く相預るところないものである』と認むるやうになつたものと云ひ得るであらう。

其結果はやがて、世界史上の四帝國原則を『世界精神の當面の發展階段に於いて、其の負擔者となると云ふ此の絕對權』なりとしたヘーゲルの說を、全く否認し、其原則の負擔者としての四帝國階段のシエーマを全く度外に附するに至つたものであらう。而して、始めから、所有の發展階段と併行的に考へられてゐたヘーゲルの家族――ブルヂオア社會――國家てふシエーマは、端的に、掲げ出されて、種族所有――古代の地方體・國家所有――封建若くは等族財產てふ、より具體的な――但し、甚だ不備なる――シエーマと置き換へられるに至つたのであらうと考へ得ると思ふ。

此シエーマは、マルクス自ら云ふやうに、主として、具體的に、分業の發展階段と併行するものとして、案出されたので、ヘーゲルのシエーマの立て方の所有のヂアレクチツクの如く『普遍的のものを、當に解散的のみならず、產出的にも特化することとしての、概念の運動原則』の上に打建てられたものではない。だから、家族から種族へといふ考へ方に於ては、成ほど、クノーの云ふやうに、全くはヘーゲルから離れ去つてはゐなくとも、其意味するところ、其內容に盛らるゝところのものは、非常に異なつたものとなつたのである。

私は、かくの如くに、考へて見て、始めて、『ドイチエ・イデオロギー』中に見出さるゝ、一種異樣な――若しも此れが見出されなかつたら恐らく、誰人も、マルクスが、嘗て一時は、其樣に考へてゐたことさへも、考へ付くまいと思はれるところの――所有三形態論が、理解

され得ると思ふ。此の所有三形態論を以て、觀念論は、十二分に、唯物論によつて打克たれた。こゝに、其の重要が存する。所有形態觀として、其れが不備なものであることは、此の重要性を、寸毫も左右する能はざるものと思ふ。

マルクスが、茲に第一の形態として、擧げたものは、順序として見れば、『アジア的』に當り、第二の形態は、古代希臘及び羅馬を、第三の形態は、明かに、封建的を言表はして居る。即ちヘーゲルの、東洋は第一の形態によつて、希臘と羅馬とは、一括せられて、第二の形態によつて、而して、ゲルマンは、明かに第三の形態によつて、置き換へられてある。此第三を二つに分割することは、リアサノフ氏の重刻した部分に於いては、之を見ることが、出來ない。しかし『茲に草稿は中絶す』とあるから、未だ續きがあつたか、または、あるべき筈であつたらうとも思はれるし、更らに、此文に先つ個所に於いては、マルクスは、『土地所有、地方諸所有、封建的（所有）近代的（所有）』、また『都市所有、マヌフアクトーア所有、工業資本』の名をあげてゐるところによつて、察すれば、當然、其れは、説かるべきであつたように考ふる方が當を得てゐるようである。

しかし、右の振り當ては、唯だ順序としてのみのことであつて、内容的には、必ずしも、然るのでないことは、明である。即ちマルクスは、右個所に先づ『Ｏ・國家と所有權との關係』の條に於て、『所有の第一の（最初の）形態は、古代世界に於いても、中世に於いても、部族所有である』と明言してゐるのである。私が、順序として、ヘーゲルのシエーマと對立せしめたのは、無論、私が併べて見たものに過ぎない。マルクスに於いては、此の三形態を論ずるとき、ヘーゲルのシエーマは、殆んど全く念頭になかつたほど、彼は、當時に於いてヘーゲルから脱け出でてゐたものと見るのが、至當であらう。即ち、外形上は、似通つたところがあつても、其内容は、全く異るものとなつたと私が云つたことは、これによつて、確め得られると思ふ。

かくて、ヘーゲルの二樣のシエーマは、マルクスに對して、其の通用を失ふと共に、『東洋的』『アジア的』は、全く其跡を止めざるまでにマルクスの考へからは、消へ去つたものとの結論を得べきではないかと思ふのである。『東洋的』が、消へ失せた代りに、入り込んだものは、一定の經濟關係（經濟分化、マルクスの語を用れば、分業）に基くところの利益の對抗、利益の闘爭としての階級闘爭の考、これであらう。ヘーゲルに於ては、人格の特定化發展たりしシエーマは、今や全く一變して、經濟的アンタゴニズムの形態としての所有形態の發展となつたのであらう。

ヘーゲルに於いては、家族――ブルヂオア社會――國家てふシエーマの中に、編み込まれ、而も、其一切の出立點に、其基礎として、其前提として、確認せられてあつたところの『所有』は、今や、其の眞實の、

而して具體的の姿を露出せしめられ、其を包んでゐたところのシェーマから取り出されて、端的に、現實に、明白に、其れ自らの地位と、其れ自らだけの發展シェーマとを與へられた。而して、其れは、特定の經濟發展階段に置かれ、出立點、基礎、一切の前提てふ榮位から引摺り降され、其本當の役目たる經濟的特定利益のアンタゴニズムの負擔者として、白日の下に拵出さるゝに至つたのである。

然る間に於いて、マルクスが、具體的には、未だ其歷史の眞相を知り得ざりし『東洋的アジア』は、果して、其處に此くの如き役目を演ずるものとしての『所有』、其『所有』を具體的負擔者とするところの經濟的アンタゴニズムが存したりしや否やを確め得ざりしが故に、マルクスの考への內から、彼れのシェーマの內から、全く度外に置かれるに至つたものではあるまいか。私は、元より、此考へ方は、文獻的には、一も證據を有せざる推測に過ぎないことを十分に覺悟してゐる。而も、私が、間接的に以上長々と引いた旁證について、縷々に吟味して得た暫定的結論は、實に此くの如きものである。否、此くの如きものたるに過ぎなかつたのである。

（二十三）

私の此の結論は、私は、マルクスのプルドーンに對する態度の變化と、彼が自ら、自分が一度始めたヘーゲル說法を受ついだと云ふグリユーンに對する痛罵とに徹して、逆行的に裏書せられるものではないかと思ふのである。

既に『ドイッチェ・イデオロギー』に於いて、ヘーゲルに打克つて、彼自らのシェーマ、彼自らの經濟學研究に立脚する唯物的ヂアレクチックを、完成——無論、當時のマルクスとして——したマルクスは、否、より正確に云へば、完成したと自信したマルクスは、『神聖なる家族』に於いて溢美の言を惜まなかつたプルドーンを、再び立戾つて顧みた。而して、彼は、プルドーンにこびりついてゐるヘーゲルを、其處に見出して、憤然として、之を擊破すべく起つた。『哲學の窮乏』は、かくして作られた。

私は、前に云つた。マルクスの他を讚美するは、現在の己れを讚美し、其の他を罵倒するは、過去の己れを罵倒する所以たることが多くないと。プルドーンを讚美した彼は、其れに、現在の己れを見出したにより、其見出した限りに於いて——然るとき、現在の己以外のものは捨て置く——讚美したのではあるまいかと思はれるように、プルドーンを痛罵したときのマルクスは、其處に、過去の己れを見出したにより、其見出した限りに於いて——然るとき、過去の己れ以外のものは、一切捨て置く——これを痛罵したのではあるまいか。私は、出來る丈け、虛心平氣に、マルクスのプルドーン讚美と痛罵とを、兩々對照して、熟讀玩味して、此くの如き印象を得たものたるを告白せねばならぬ。マルクスは正直に白狀して云ふ『プルドーンの膺造に對しては、私に責任がある』『長時間の屢々夜を徹するに至つた討論に於い

て、私は、彼に、ヘーゲル主義を、吹込んだ』』其れは、彼の爲めに大なる害を爲した』と。

マルクスは云ふ。『プルヂオア的所有は何であるかの問に對しては、經濟學の批判的分析――それは、此等の所有諸關係の全體を、意志關係としての、その法律的表現に於てゞなく、その現實の形態に於いて即ち、生産諸關係として會得するところの――によつてのみ答へ得べきであつた。プルドーンは、此等經濟的諸關係の總體を、所有權と云ふ一般的な法律的見解に編み込んだ爲めに、彼は(略)「所有とは、盗掠である」と云ふ解答以外に、出ることが出來なかつた』又た『物質的生産の發展の一定階段に照應せる歴史的生産關係の理論的表現として、經濟的諸範疇を考察する代りに、彼(プルドーン)は、これを、先驗的、永久的觀念に變形し』云々、又た『彼(プルドーン)が、歴史的運動――それ自體、解放の物質的條件を生み出すべきところの運動――の批判的認識の中に、科學を求めずして、却つて、かの空想者とともに、謂ゆる「科學」を狩り求め、これによつて、「社會問題の解決」に對する公式を、アプリオリに、紡ぎ出さんとしてゐる』云々と。

私は、此等の言は、移して――無論相當の割引の下に――以つて、マルクス自らの進歩の跡を、語るものと見るとき、前段に述べた結論は、力強く裏書きせられるものではあるまいかと、考へざるを得ないのである。

更らにまた、『反グリユーン』に於けるマルクスは、より露骨に、當時に於ける、彼れ自らの變化を、物語つてゐるものではあるまいかと思ふ。エンゲルスは、後年、此『反グリユーン』を重刻しようと志して、ペルンシユタインに其事を諮つたけれども、再び思ひ直して、其企を中絶した。ペルンシユタインも亦其事を斷念した。然るに一八九六年に至つて、ストルーヴエは、前掲の如く、其重要部分を『ノイエ・ツアイト』へ掲出した。其時、『ノイエ・ツアイト』の編輯者は、マルクス、エンゲルスの遺稿中に、右論文のあること、而してストルーヴエの引いた文句は、判然と其中に見出されることを公言したが、ストルーヴエの發見した『ウエストフアリア蒸汽船』の全文が遺稿の文と一致するか否かは、未だ之を確めてゐない、何れ機會を得て、之を確めるであらうと云つてゐる。『ノイエ・ツアイト』第十四年度第二巻一八九六年刊四八頁脚註 而して、ペルンシユタインとメーリングとは、前に云つたやうに、此論文について、若干の考證を同年度の『ノイエ・ツアイト』に寄せた。乍去、右の如く約せられた仕事は、其後四年經つて、一九〇〇年の『ノイエ・ツアイト』に於いて、始めて公けにされたのである。エンゲルスはペルンシユタインに重刻のことを相談した手紙中に、此論文のことを『限りなく不謹愼な作』grenzlos freche Arbeit と云つてゐる、彼が、重刻を斷念したのは、恐らく其の餘りに、不謹愼に、餘りに亂暴に、グリユーンを罵倒したことを思ふて、躊躇したのであらう。

グリユーンは、右のマルクスの罵倒に現はれたところでは、三文の價値のない人のやうであるが、其實は、必ずしも左樣でないことは、

關係者の一樣に認むるところであつて、少くとも、當時のドイツ人に社會主義、共産主義の何であるかを知るに、甚だ便利な書物を與へたものであることは、疑ないようである。マルクスの罵倒は、自己罵倒であること、其の他人批評の、また同時に自己批判であるが如くであらう。斯くの如くに見來るとき、彼の『駁グリューン』の發見は、文獻史上に、甚だ重要なものであることは、明かであるといひ得よう。『ドイチェ・イデオロギー』に於いて、其研究に一段落を劃したマルクスは、自家苦心慘憺の結果鍛へ上げた利刀の鋭さを試す可く、プルドーン並びにグリューンの二人者に對して、試めし切を企てた。而して、彼は、十二分に、其の利れ味を確め得たのであらう。

かくして『共産宣言』は成り、『賃銀勞働と資本』は出來た。其處に『東洋的』『アジア的』が見出されないのは、誠に當然のことであると私は考へる。

× × × ×

私は疲れた。讀者は、更らに、より多く疲れたであらう。併し乍ら私の吟味は、今や、漸く、其第一段を了へたばかりなのである。幸にも、第二段は、第一段ほど骨の折れるものではない。何となれば、其の骨折りは、マルクス自身が、大英博物館の圖書館に於いて、身を削るような貧苦と鬪ひつゝ、既に已に、之れを成し終つて置いて與れたから。私は、當時のマルクスを追想しつゝ更らに、勇を鼓して、私の謂ゆる第二段の吟味に取かゝる。(以下嗣出)

附記。

(一)

五月二十一日、私は、慶應義塾精神科學研究會から、精神科學叢書第一編カアル・ムース原著『唯物史觀の哲學的、經濟學的基礎――マルクス主義の社會・歷史哲學――』と云ふ書物の寄贈に接した。此は近頃舶載のムースの『駁マルクス』(46)の初めの一部の邦譯で、私は、斯くも機敏に邦譯書を出されたことに、深く敬服せざるを得ざるものである。ムースの書は、私の此小論文に於ける吟味には、さまで關係のないものではあるが、其全體を通じて、非常な努力の跡を示めすことに、多大の敬意を禁じ能はぬと同時に、其の文獻的考證の可なり御粗末なものであること、本文にあげたフォーゲルの書物と、五十歩百歩であることに、甚だしい遺憾を有たざるを得ないものである。フォーゲルの引照は、所によると出鱈目と云つてい丶位御粗末である。私は、幾度か、其引照に欺かれた腹立しさを今に忘れ得ぬ。ムースのは、其れよりは勝つてゐるようであるが、孫引、または、露骨に云へば、燒直し――但し一昨年までの私は、其れを彼是云ふ資格は、些も有たぬものであるが――の箇所が尠からず見出される。

私は、私の此小論文に關係ある、ムースの書の三六―四八頁の箇所は、無論此小論文に於いて取扱ふのである。而して、ムースの

立論は、實は、ゾムバートに胚胎するものであり、ゾムバートの其論は、デューリングに、其源を有つものであること、從つて、エンゲルスの『反デューリング』を、よく顧みなければならぬものであることを云ひたいために、前號文末の文獻年表に一八七八年刊の『反デューリング』をあげて置いたのである。ムースの文獻的御粗末は、此個所に於いて、一の好標本を示してゐるとさへ、私は思ふものである。而して、其れへの道開きとして、本號掲載の部分は、豫期よりも、詳かに、文獻考證の道を辿つたのである。

ところが右寄贈の譯書に於いて、譯者蓑田胸喜君は、ムースをもフォーゲルをも甚だ讃美せられて居る。思ふに『反マルクス』と云ふ書題が、痛く譯者を動かしたのであらう。而して、譯者蓑田君は、其譯書の四四頁譯者註に於いて私の本文其一を評して『ムースが指摘した如き兩人（マルクスとエンゲルスを云ふ）の解釋の相違については、一言も觸れてゐない。博士（福田）が兩人の相違として指摘されてゐるのは、階級鬪爭の適用範圍（!?）についてゞある。然し、マルクスとエンゲルスに於ける辨證法的取扱を顧るときは、ムースの右の指摘を考慮すべきである。博士に辨證法の批判的研究を期待したい。之れを缺いては、ムースの最初にいへる如く、マルクス主義の研究は、ついに根柢にふれないからである』と云つて居られる。『ムースが指摘した』とは、餘りに遼東の豕的に過ぎる。教科書としてまでも使はれてゐるゾムバートは、必ず抗議を申立つるであらう。私は『蓑田君に、教科書的研究を期待したい』と云ひたくなつた。然し其れは失禮であるから、少くとも、デューリングの書位を包含する文獻的研究を期待したいと申上げて置かう。殊に、ムースを以て、『マルクス主義の過去及び現在に亙る全文獻を涉獵し』と云つて居られるのは、如何にして、これを確められたかを、伺ひたいと思ふのである。

本號掲載の個所を一見せられたら、其れだけで、蓑田君は、其の脚註に於ける御心配の用なきことを見出されるであらうと思ふが、更らに、以下の部分を見られた上での御批評を期待する。無論、私は、可なり殘念に、ムースの妄評を取扱ふのである。然し其れを御覽下さるまでもなく、ムースの書を左様に、有り難く思つて、譯筆をつゞけられることに對して、御要愼を切望して置きたいのである。承る所によれば、非マルキシストの間には——無論日本の——ムースの此書は、昨今、大受けであると云ふことである。よつて、私は、以上の言を、ひとり、蓑田君のみでなく、廣く御聞き取りを願つて置きたいと思ふものである。マルキシズム盲信もいけない、非マルキシズム盲信も、また、いけない。嚴密に、『クエレン・メーシヒ』に立てたのでない論は、贊否共に、要愼して受け取らなければならないといふのが、私の執るところの見解である。西洋人の書いたもの——殊に、近頃の——が、必

ずしも、皆感服すべきものだと思ふのは、甚だ險吞なことである。

（二）

五月十三日。改造社から、一葉の端書が、私の手許へ轉送せられた。發信主は、單に、一讀者とのみしてあるが、必ず博雅の先覺者の手に成るものであらう。其文は次ぎの如くであつた。

「こんな事は、どうでもよい、くだらん事で、且つ、アインゲーエンの讀方にも、博士の說に贊成でありますが、改造五月號七二頁で「形は能動的な動詞を受動的の意味に働かせた例は……見當らぬ」といはれるは、少し滑稽です。例へば、希臘語の πάσχω を御注意下さい。此字は、全く受動の意味に用ゐられ、e.g. "Ὅτι μὲν ὑμεῖς, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πεπόνθατε ὑπὸ τῶν κατηγόρων, οὐκ οἶδα. (Platon, Apologie 冒頭) 筆者試譯「オヽ、亞典の人々よ、爾等が、私の糺彈者たちによつて、どんなことを、されたかを、私は知らないが」といふ風に用ゐられ、普通 Passivum の際見られる ὑπό（筆者註。よつて）をさへ伴つてゐるではありませんか。」

成程、これは、一讀者氏の謂はるゝ通りである。文典を閲して見ると、何れも、此場合の用法のことを、多少は、說明してゐる。例へば、

（一） Curtius-Hartel, Griechische Schulgrammatik. Bearbeitet von Weigel. 30. Aufl. Wien 1922. S. 197. 『若干の『トランシチーヴ』の受動詞として、受動詞の構成（ὑπό「によつて」）を伴ふ『イントランシチーヴ』が用ゐられる。

アクチーヴ	パッシーヴ
εὖ ποιῶ σε:	εὖ πάσχεις ὑπ' ἐμοῦ.
εὖ λέγω σε:	εὖ ἀκούεις ὑπ' ἐμοῦ.

（下略）

（二） Goodwin, A Greek Grammar. 1924. p. 266. 『若干の『イントランシチーヴ』の動詞は、他の動詞のパッシーヴとして用ゐられる。例へば、εὖ ποιεῖν, to benefit, εὖ πάσχειν, to be benefited（下略』

（三） Ragon, Grammaire Grecque. 108–189 mille. Paris 1925. p. 160.『アクチーヴ動詞にして、其のパッシーヴが、同じ意味にては、僅か、若くは全く用ゐられない若干のものは、此のパッシーヴを中立（即ちイントランシチーヴ）動詞を以つて代用する。而して、然る場合には、ὑπό と二格（ジエネチーヴ）とを以て組み立てる。例へば

アクチーヴの意味で	パッシーヴの意味で
κακῶς ποιῶ	κακῶς πάσχω
（惡いことをする）	（惡く扱はれる）

(下略)』

(四) Riemann et Goelzer, Grammaire Comparée du Grec et du Latin. Syntaxe. Paris 1897. P. 247. §. 214『或る動詞のパッシーヴは、僅か、若しくは全く用ゐられないで、或るイントランシチーヴ動詞を、それに代用することがある。例へば εὖ ποιῶ (或人に善いことをする) のパッシーヴは εὖ πάσχω (善く取扱はれる)(下略)であるが如きである。』

(五) Koch, Grammaire Grecque traduite de l'allemand et mise au courant etc. par Rouff. 2. édition Paris 1877. p. 373『或るトランシチーヴ動詞のパッシーヴは、全く用られず、又は僅かしか用ゐられないで、イントランシチーヴの意味のアクチーヴ動詞を之れに代用する。此場合の構成は、ὑπό を伴ふ、パッシーヴ動詞の如くにする。例へば εὖ πάσχω (私は善く取扱はる) は εὖ ποιῶ (私は…に善いことをする) のパッシーヴとして代用さる、が如くである。』

(六) Kuehner, Ausfuehrliche Grammatik der Griechischen Sprache. II Theil. I Band. Neue Bearbeitung von Gerth. 1898. S. 110.『(前略) 以上と反對に、アクチーヴの形が、中聲の形の代りに用られることがある。例へば φέρειν を「運び去る」の意に用ゆるが如し。』

(七) Brugmann, Griechische Grammatik 4. Aufl. bearbeitet von Thumb. Muenchen 1913. S. 532『希臘語の發達の中に於いて、アクチーヴの形の一種にして、パッシーヴの用を爲すものが、發生した。其れは -ην に終るイントランシチーヴのアオリストである。』

(八) 田中秀央氏著 希臘語文典 昭和二年三月第一刷 岩波書店刊。五五頁。には、左の説明はあるが、問題の用法の説明は、私の見た限り、のせてない。『若干の動詞は假令アクチーヴ、ヴオーイスの形あるも、その實、殆んど常に、ミッドル、或は、ミッドル及パッシーヴに於いて使用され、事實上デポネントとなつてゐるものがある。eg. μεταπέμπομαι, πορεύομαι.』

× × × ×

右數例について、左のことを申上げたい。

(一) 此くの如きは、獨り希臘語に限るものではない。リーマン及ギヨルツエールのあげた如く、ラテン語でも、vendere, perdere のパッシーヴは、venditus, vendendus, perditus, perdendus といふ形ち以外には用ゐられないで、パッシーヴとしては、『イントランシチーヴ』動詞たる veneo (賣られる)(自ら賣る) pereo (失はれる)(自らを失ふ) を、これに代用する。前掲書二四七頁。クルチウスも亦た、右の説明の箇所で、比較の例として、ラテン語の perdo: pereo, vendo: veneo をあげてゐる。また、ブルーグマンも、(前掲書五三一頁) に於いて、Das Buch findet sich, lo

livre se trouve; il libro si vende = wird verkauft などの例をあげてゐる。否、英語に於いても、The book sells well (此本は善く賣れる)と云ふことを云ふ。形ちは、イントランシチーヴだが、意味は The book is sold well. The book sells itself well といふにある。必ずしも、希臘語の例を引き來るまでもない。猶、プラトーンの文法についてキアムプルの說明參照。Plato's Republic: the Greek Text with notes & essays by Jowett & Campbell. Vol. II Essays Oxford 1894. p. 180 (b)

(二) 乍去、右の諸文典の說明(田中氏の其れを除いて)何れも、其れは、イントランシチーヴ動詞に限ることを、明言してゐる。然るに、私の問題とした場合の eingehen は、『イントランシチーヴ』ではない、『トランシチーヴ』である。從つて、πάσχω の如き、『イントランシチーヴ』が、パッシーヴに用られてゐるからとて、『トランシチーヴ』たる eingehen をパッシーヴに用ゐんとする試みを、支持する例とはならない。

(三) 加之、右の除外的用法を許す動詞は、始めから、チヤアント極まつてゐる。場合々々に、任意に、其樣な用法に充てること河上、福本兩氏の『アインゲーエン』に於けるが如きことは、許されてゐない。

(四) ブレアル氏が、其の『セマンチック』Michel Bréal, Essai de sémantique Science des significations. 5. Ed. Paris. Sans date. P. 194 et seq. に說いてゐることが、正しいとするならば、インド・ゲルマン語の動詞は、はじめは、大抵、イントランシチーヴとして起つて來たもので、トランシチーヴは、遙かに後れて起つた用法である。イントランシチーヴは、嚴密には、發動詞ではない、トランシチーヴのアクチーヴのみが、嚴密な意に於ける發動詞である。其れがパッシーヴに用られた例(即ち河上福本兩氏の試みられたような)は、淺薄なる私の知らざるところである。イントランシチーヴは、云はゞ希臘の中聲に近いもので、容易く、轉移し易いものである。即ち一讀書生氏の指摘されたように、轉移する例が、希臘語のみならず、拉丁語にも、伊太利語にも、フランス語にも、英語にもある。ドイツ語では Das Buch verkauft sehr gut といふような言廻しは、聞いたことはない Das Buch verkauft sich sehr gut といふ言ひ廻しは無論許されるであらうが。eingehen はドイツ語である。私は、主として、ドイツ語について、申したのである。而して、右樣の用法は、『アインゲーエン』なる動詞については、嘗て認められたことはない。勝手に其樣な用法に充てることは、無論許されてゐない。

(五) 乍去、私の言ひ方は、甚だ拙なかつたことは勿論であつて、一讀書生氏が、これを訂す勞を惜まれなかつたことは、衷心から感謝せずには置かれない。其れと共に、此の匿名の博雅篤實の學者に對して、私は、深厚の敬意を表したい。

附て云ふ。田中教授の說明中には、他の文法書に、一樣に說いてあるイントランシチーヴ云々のことが、全く缺けてゐる。無論

其れは、デポネンスの說明であつたからであらうが、他の箇所に其反對なる此用例の說明が與へてないようであるから、事の序に其事も一言附加して置かれても、別に、妨げとはならなかつたであらうと思はれる。總じて、此書のシンタックスは餘りに僅かに過ぎると思ふ。シカシ、門外漢たる私が、專門大家の書について、彼是申すは、恐多いことである。唯だ、此書の惠に浴する一人として（一）田中氏のあげた文獻表は、少々杜撰であるのが、殘念である。例へば、ダードウヰンの書の刊年を、一八九六年として居られる如きこれである。（二）說明中、英語が多過ぎる。何故、英語でなく、日本語を使はれなかつたのか。（三）說明か餘りに英米流に偏してゐるようである。（四）定價が高い、同じような教科書で分量の遙かに多く、最近の教科書として知られてゐる、ダードウヰンが七志、クルチウスが四麻克半、ラゴンが僅かに、八法であるに比して、分量の少い此書の價は、餘りに高過ぎると思ふ。しかし、兎に角、日本語の希臘文典を有ち得るようになつたことは、實に感謝に値する。印刷の鮮明、誤植のなきこと、用紙の立派なることなど、何れも、寸分の申し條はない。

（三）

六月三日。今日、私は、本位田教授から一の惠書に接した。教授は、私の此論文を興味深く讀んでゐると仰せられ、教授の近業『自由共産村落の研究』經濟學論集第五卷第三冊別册を、參考になるだらうとて、わざ／＼惠送せられたのである。教授の研究は、私の巴里留在中同地で死去されたヴヰノグラドフ先生の業績を、いとも忠實に紹介せられたもので、まことに有益なものである。私は、一昨年先生の知を辱ふし、殊に萬國學士院會議では、中古拉丁辭書編纂委員會で、先生の苦心慘怛たる努力の次第を、十分に拜承して、一層敬意を深くしたものである。今、本位田教授の新研究に接して、追懷の想を深くした。私の此小論文中には若干先生の研究にも論及してあつて、何れ續揭の部分に出で來る次第であるが、私は、此小文の讀者に、右本位田教授の研究を一讀せられんことを、希望して置きたい。何となれば、私は、とても、十分には、ヴヰ先生の業績にふれる餘地を、此小論文中に有たず、且つ、私の今の考は、先生と立場を異にするところが、少くないようであるから。

（四）

右同日。今朝、河上博士の『社會問題研究』第八十册の寄送を忝した。其れには、『唯物史觀に關する自己清算』と題し、數號にわたる長大論文の（其四）がのせてあつて、本號所揭の私の論ずるところと關聯することが尠くないようである。元より、博士は、唯物史觀其ものを、正面から、堂々と論ぜられるので、私の今試

みつゝあるような、部分的・考證的の閑葛藤とは、日を同ふして談ず可きものではない。私も、何時かは、博士の論にもふれて見得るように、ありたいとは思ふが、先づ當分は自分相應なる一部的の考究に沒頭する外はない。仍て、私は、本文の讀者に、必す河上博士の右論を讀まれて、唯物史觀考究には、其樣な博大の方面を缺くべからざることを悟られんことを、切望して置く。

（五）

恰かも、此稿をのせた改造が市に上るであらうと思はるゝ頃の、滿一ヶ年前、一九二六年六月十九日、私共夫妻は、倫敦郊外のハイゲート墓地なるマルクスの墓に詣でた。私は、今、當日を想出して、若干の感慨なきを得ぬ。よつて妻の認めた當日の日記の一節を左に抜き書し、更らに改造社に御願して、當日妻が取つて吳れた拙い寫眞を玆に複寫して頂く。（本文の初にあり）。

六月十九日。（土）。あさ、宋明に宿を出て、ビリングス・ゲートの魚市場見物に、連られて行く。主人は、一二度來たので、人込みの中をダン〳〵くゞつて步く。私は、道の狹いこと、往來の汚ないこと、子供の時見た、日本橋の魚がし其まゝなのに、倫敦にも、こんなところがあるかと驚く。私には、丸切り分りませんが、こゝの人達は、卷舌の變な英語を使ふとて、主人は面白がつてゐます。（略）

九時頃、大英博物館へはいる。主人は、每日通つてゐるので、凋りで通がつて、說明して吳れます。讀書室を外から覗く。澤山の人が、一生懸命に勉强してゐるのに、感服する。エヂプトのミイラの部だけ、丹念に見て、外へ出る。（略）

宿へ歸つて、天井で御ひるをすませて、ソコ〳〵に、アンダーでハイゲートへ行く。途中の乘かへ場所で、主人とはぐれ、一時は、途方にくれる。イギリスの人は親切だとは、兼てから承つてゐましたが、凋りツクネンと思案にくれた私に、切りと、問かけて吳れる老人がありました。主人が、反對の方向の電車から飛出してきたとき、其の老人は、如何にも、安心したらしく、而して、何故か、わざとフランス語で、私に、『ボン・ヴオヤーヂ』と言つて吳れました。こんなことは、フランスやドイツでは一度も經驗したことがありません。

ハイゲートにたどりついたが、肝腎のマルクス先生の御墓は、皆目分らず、さまよつてゐる内に、ハーバート・スペンサー先生の御墓のところへ出て來ました。立派な、しかし、如何にも學者の墓らしい感じのいゝ御墓でした。主人を墓側に立たせて。パチンと取る。

マルクスの墓は、いくら探しても分りません。仕方なしに、再び入口へ戾つて、墓番らしい人に、一志つかませて、尋ねる。親切に、案内して吳れる。成程聞いて來ただけでは分らないわけ、ぎつしり詰つた狹い橫丁の眞中にあります。

御墓は、たつた、疊一ぢやう位、右にも、左にもぎつしり、外の御

刻み込んでゐます。たゞ前だけが、狭い路になつてゐるだけ。御墓は、マルクス先生御一人のばかりでなく、四人ばかり、合葬してあります。一番上に、奥さまの名が刻んであります。其次が先生の御名です。日本の御墓には、見られないことです。奥さまの歿日は、主人の誕生日と同日で、先生の御生れの日は、主人の母のなくなつた日で、誠に、奇縁と思ひました。

途中で、求めて來た小さな花束を、御墓の側へ置いて、主人と私とは、跪いて、默禱しました。私は、寫眞で見たマルクス先生が、ブリーンで去年散々御世話になつたブレンタノ先生に、何處か——ライオンのような御顔がでせう——似てゐるようで、もう一遍ブリーンへ行きたいと申しました。

主人に御墓の側に坐つて貰つて、二三枚寫眞を取る。御墓の文字が、余りハツキリ出ないのは、殘念です。ソレデモ、スパルゴの本に出てゐる寫眞とは、あたりが、大變違つたことだけは分ると、主人は喜んで呉れました。墓地を出て、ハイゲートの町をぶらつき、菓子屋へはいつて、紅茶を頂いて、また元のステーションから、チァリング・クロスへ歸る。（略）

夜は、一橋出の佐藤領事の御招きで、サヴオイ・ホテルへ行く。大倉様の奥様も御出で、支那服の御美事なこと、久し振りで、人心がつきました。（下略）

引用書

(21) G. W. F. Hegel's Werke. Vollständige Ausgabe. VIII. Bd. Grundlinien der Philosophie des Rechts, oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse. (1821) Herausg. v. Ed. Gans. 2. Aufl. Berlin 1840.

(22) Lorenz Stein, Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs. Ein Beitrag zur Zeitgeschichte. Leipzig 1842.

(23) Paul Vogel, Hegel's Gesellschaftsbegriff und seine geschichtliche Fortbildung durch Lorenz Stein, Marx, Engels und Lassalle. Gekrönte Preisschrift (Kant-Studien. Ergänzungshefte im Auftrag der Kant-Gesellschaft herausg. v. Menzer u. Liebert) Berlin 1925.

(24) Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle Herausg. v. Franz Mehring. I. Gesammelte Schriften von Karl Marx und Friedrich Engels 1841 bis 1850. I. Band. von März 1841 bis März 1844. Stuttgart 1902.

(25) Deutsch-Französische Jahrbücher. Herausg. v. Arnold Ruge und Karl Marx. Lieferung 1-2 (Paris 1844) (Neudrucke marxistischer Seltenheiten I) Leipzig 1925.

(26) Die socialistischen und communistischen Bewegungen

seit der dritten französischen Revolution. Anhang zu Steins Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs. Leipzig und Wien. 1848.

(27) Geschichte der socialen Bewegung im Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage. In drei Bänden. Leipzig 1850

(28) Herausgegeben von Dr. Gottfried Salomon 1921. (Bücherei für Politik und Geschichte des Drei Masken Verlages)

(29) Peter v. Struve, Zwei bisher unbekannte Aufsätze von Karl Marx aus den Vierziger Jahren. Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte des wissenschaftlichen Sozialismus. Neue Zeit 14 Jahrgang. II Band. Stuttgart 1896. S. 52 f.

(30) Th. G. Masaryk, Die philosophischen und soziologischen Grundlagen des Marxismus. Studien zur socialen Frage. Wien 1899. SS. 33-34.

(31) F. Mehring, Politik und Sozialismus. Neue Zeit. 15. Jahrgang. I. Band 1897. SS 449 ff.

(32) Werner Sombart, Sozialismus und soziale Bewegung. Jena 1896. S. 70. 9. Aut. 20, S 57.

(33) John Spargo, Karl Marx: His life and work. New & revised ed. New York 1910. P. 67.

—— Karl Marx: Leben u. Werk. Autorisierte Deutsche Ausg. Leipzig 1912. S. 51.

(34) Heinrich Cunow, Der Ursprung des Genies. Neue Zeit. 14 Jahrg. II Band. Stuttgart 1896. SS. 408 ff. bes. S. 410.

(35) Karl Marx, Karl Grün: Die soziale Bewegung in Frankreich u. Belgien (Darmstadt 1845). oder: die Geschichtschreibung des wahren Sozialismus. In "Karl Marx über Karl Grün als Geschichtschreiber des Sozialismus. Aus dem Marx-Engelschen Nachlass." Neue Zeit. 18 Jahrgang. I Band. Stuttgart 1900. SS. 4 ff., 37 ff., 132 ff., 164. ff.

(36) Karl Marx, Die Heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik. Aus dem literarischen Nachlass von Marx, Engels und Lassalle Gesam. Schriften von Marx u. Engels. II Band. von Juli 1844 bis Nov. 1847. SS. 103 ff.

(37) Marx und Engels über Feuerbach (Erster Teil der "Deutschen Ideologie") Herausg. v. D. Rjazanov, Marx-Engels Archiv. Zeitschrift des Marx-Engels-Instituts in Moskau, Band. SS. 205 ff. bes. SS. 298 ff. 303 ff.

(38) Karl Marx, Misère de la philosophie: Reponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon. Paris 1847.

Dans "Bibliotheque sociologique" Paris Giard et Brière 1896. et dans "Bibliotheque socialiste Internationale II.

Paris Marcel Giard 1922.

(39) Friedrich Engels, Ein Fragment Fouriers über den Handel Pütlmanns' "Deutsches Bürgerbuch" II Bd. S. 1-56.

(40) Georg v. Below, Die Deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unseren Tagen. Leipzig 1916. S. 124-180. 2. Aufl. in Handbuch der mitteltalerlichenund neueren Geschichte. München. 1924. S 161-194.

(41) P. J. Proudhon, Qu est-ce que la Propriété? (Oeuvres complétes de P. J. Proudhon. Nouvelle èdition par Bouglé et Moysset. Paris 1926)

(42) Karl Marx, Das Elend der Philosophie: Antwort auf Proudhons "Philosophie des Elends". Deutsch von E. Bernstein und K. Kautsky. 8 Aufl. Stuttgart 1920.

(43) Appendice I. Proudhon jugé par Karl Marx. Extrait du Social-Demokrat nos dés 16. 17 et 18 janv. 1865. traduit de l'allemand par F. Engels,

(44) P. J. Proudhon, Systẽme des contradictions économiques ou philosophie de la misẽre. (Oeuvres complètes Nouv. ed. par Bouglé et Moysset. Paris 1923).

(45) Westfälisches Dampfboot. Red. v. Otto Lüning I. Jan. 1845 bis 1848. Bielefeld u. Paderborn.

(46) Karl Muhs, Anti-Marx: Betrachtungen über den inneren Aufbau der marxschen Oekonomik. I Band: Der Produktionsprozess des Kapitals. Jena 1927. SS. 19-50. "Grundlegung: Die Marxistischen Gesellschafts- und Geschichtsphilosophie."

前號分正誤表

頁		行	誤	正
四二	上段	八	社會的生產諸關係	社會的生產諸關係
〃	〃	一一	成する。	成する。
〃	〃	一五	『賃銀勞働	『賃勞働
〃	下段	二〇	サー、ヘンリー、サムナー、メーン、	サー・ヘンリー・サムナー・メーン
四三	上段	二二	旣に已に	旣に已に
〃	〃	一三	派出	派生
〃	下段	七	一九一四年	一九一四年版
〃	〃	九	indis hen	indischen
〃	〃	二三	何れも	(何れも
四四	上段	一五	一八五七年	一八五九年
四五	上段	一三	氏族	民族
〃	下段	一二	rst jaehrlich)des Bodns	erst jaehrlich)des Bodens

頁	段	行	誤	正
〃	〃	一四	Ansi ht, dass ue erall	Ansict, hdass ueberall
〃	〃	一六	B weis	Beweis
四六	上段	一二	r spektiv	respektive
〃	〃	〃	beziehungs weise	beziehungsweise
〃	〃	一七	ヨーロツパに	ヨーロツパに。
〃	下段	一	派出	派生
四七	下段	六	正本にも。	正本にも、
四八	下段	一四	材料か	材料が
四九	上段	四	序言・八七頁	序言七・八頁
五〇	上段	一〇—一一	モスグウア	モスクヴア
〃	下段	六	アジア又び	アジア及び
〃	〃	一四	己れを	己れ自らを
五一	上段	八	(für Sich)	(für sich
〃	下段	三	古代と	古代的と
〃	〃	九	国家を分類	国家形態を分類
五二	上段	一九	『結論』	『結論』
〃	下段	一	一八九頁	一八—九頁
〃	〃	〃	形態の内	形態の内。
〃	〃	七	ゐるものである	ゐるものである
五二	下段	一八	法律哲學をは、	法律哲學をば、
五三	上段	四	より。	より、
〃	〃	五	所有への	所有への
〃	〃	〃	三九四〇頁	三九・四〇頁
〃	〃	八	しは〳〵	しば〳〵
〃	〃	一五	或	或は、

頁	段	行	誤	正
〃	〃	二〇	例へは	例へば
〃	下段	一	見るときは。	見るときは、
〃	〃	五	四五頁	四五六頁
五四	下段	五	至つては、	至つたは、
五六	上段	一五	資本論』	『資本論』
五六	下段	六	唯物史觀公式』	『唯物史觀公式』
〃	〃	一一	吟味	吟味
〃		一九	一八四〇年	一八三七年
五七	上段	六	二九八・三〇三頁	二九八・三〇六頁
〃	下段	六	一六八六	一六六八
〃	〃	一一	右の披刷	『駁デューリング』抜刷
〃	〃	一六	Banner ds	Banner des
五八	上段	一	Wilks,	Wilks,
〃	〃	四	Herausgeb n	Herausgegehen

時評

政變・政黨・出兵

政變から生まれた新政黨
出兵問題と『田中外交』の廻れ右
臺灣における政治結社の禁止

山川均

政變から生まれた新政黨

爺さんは山へ柴刈りに、婆さんが川で桃の實を拾つたのは昔のことで、昭和二年の日本では、樞密院の爺さんが川上から流した政權の桃の實を、川下で待たせておいた財閥と軍閥とが拾ひ上げて擔つてゆく。桃の中からは桃太郎が生まれたやうに、この政變の桃の中からも、一つの新政黨が生まれ出た。この桃太郎が、氣も優しくて力持ちであるかどうかは分らぬが、新興政治勢力といふ赤色に對するブルジアジーの征戰のうちに、一とかどの役割をすることだけは爭はれぬ。

立憲民政黨は新政黨と名づけてゐるが、新たな政治勢力の結合ではなくて、舊勢力の野合にほかならぬ。言ひかへれば、新たな必要の前に分解作用を起こしてゐる舊政治勢力の編制替への一つの現はれにほかならぬ。この謂ゆる新政黨の主要部分となつた憲政會なるものは、わが國の政黨史上に比類のないほど陰險惡辣な方法により、最も反動的な政治家の最も醜惡な動機によつて造られた政黨であつて、最近の在朝三年の間、忠實にこの立黨の傳統を守つて最も反動的な政治を行つた政黨である。新政黨の殘りの一軍を成してゐる政友本黨にい

たつては、政界の空巣狙ひの集團として、立派な折紙のついた徒黨であつた。この縱から見ても横から見ても寸分申分のない舊政治勢力の再結合を指して、『新』政黨といふものである。この舊るい新政黨が、普通選擧の實施と共に、從來の選擧地盤は政權獲得のために不充分になるところから、彼らの謂ゆる『新興勢力』に着目し、新要素の糾合に努めてゐることは事實である。けれどもこれは固より新しい政治勢力の結成ではなくして、新しい要素を舊勢力の指導の下におき、新しい要素によつて舊勢力を擴大し、新しい要素を舊勢力の一部とすることにほかならぬ。

舊勢力が新要素を獲得するためには、これらの新要素に對して、いつでも若干の讓歩と妥協をするのが常である。二つの舊勢力が對峙してゐる時には、攻勢に立つた方の勢力は、その鬪爭の力を增大するためには、いやいやながらもより下層の、從つてより廣大な社會層に訴へて、その力を利用する必要に迫られる。この新勢力獲得の競爭は、時としては新しい機運を導き入れる動機となる。しかしそのために、舊勢力そのものが新しい性質に變つたわけではない。新政黨もまたその宣言と政綱とのうちに、若干の『新らしみ』を見せてゐる——といふよりも、新らしみを見せかけようと努めてゐる。これは明からかに、新しい要素に對する舊勢力の妥協にちがひはないが、しかもこの妥協は舊勢力の根本利害を妥協せぬ範圍においての妥協であることにもちがひがない。

立憲民政黨の宣言は、政友會に政權をさらつてゆかれた隱れた主要の理由となつた外交問題を劈頭にかゝげて、『外交においては國際正義を高調する』と云つてゐる。これは帝國主義的色彩に滿ち、軍閥的な異樣の匂ひのする政友會の對外政策、なかんずく問題の對支政策に對時して、自由主義的な旗幟を押し立てたかの如くであり、またその積りでもあらうが、その『國際正義』なるものは、『通商、經濟、土地、資源に關する國際的原則の上に之を具體化し、以つて世界平和の基礎としなければならぬ。』宣言はこう云つてゐる。けれども國際的原則の上に具體化する前に、立憲民政黨はその主張する國際正義なるものを、もつと手近かなその宣言の上に具體化すべきであつた。この宣言に與へることのできる唯一の具體的な說明は、立憲民政黨の要求する國際正義とは、資本主義强國間の爭奪の目的物である。通商、經濟、土地、資源に對する機會——この獅子の配け前——その相當の配け前に、日本の資本をもあづからしめよと云ふことにほかならぬ。そして日本の大資本を代表する最も大膽な帝國主義者の要求するところも、これ以上でもなければこれ以下でもない。立憲民政黨が國際正義として要求するところのもの、これがまさしく日本の大資本とその帝國主義との要求なのである。たゞ立憲民政黨の場合には、この要求は『世界の平和』だとか、『世界の進運』だとか、『貴き使命』だとか、ないしは『磅礴たる正義の精神を把握』したとか把握しなかつたとかいふような、絢爛たる錦のきれで包んである。錦にはちがひないが、惜むらくはぼろ切れの錦であつた。その破れ目からは資本帝國主義が憶面もなく毛むくぢやな脚を突き出してゐる。『世界の平和』や『正義の精神』——いろ〳〵の光る物を寄せ集めてかき混ぜた間から、通商、經濟、土地、資源に對する機會の要求だけが、より强い光をもつて輝やき出

してゐる。

對外政策の方面と同じように、國內政策の方面でも、立憲民政黨の宣言には、『經濟、金融、產業、資源に對する國家の整調』と、『自由競爭』と、『社會公衆の福利』と、『生產の合理化』と、『社會正義に則る分配』『國民生活の不安の除去』と、『階級鬪爭の禍根の除去』とが、如何にしてこれらのものを兩立させ調和させられるかといふこととは全然沒交渉に、たゞ拾ひ集めて陳列せられてゐる。それにも拘らずこの混亂と混亂とのうちに、二つの主要な道筋が辿られる。第一には、『經濟、金融、產業、資源を、國家の意志（この國家の意志が直接に何者の意志を代表してゐるかは既定の事實として）によつて整調』せよと云ふ要求が、公然とかつ明白に、ブルジョア政黨の宣言政綱となり得るにいたつたことは、日本の資本主義がもはや獨占的な資本の時代に入り、金融資本の時代に入り、寡頭支配の時代に入つたことを告げ知らせる觸れ太鼓であつて、資本主義の下における經濟、金融、產業、資源の國家的統制の要求は、謂ゆる國家資本主義トラストへの身構へにほかならぬ。

第二には、いかに一〇〇％の舊勢力でも、いくらかの新しみを加へてより廣い社會層に訴へようとするならば、分配の問題、生活不安の問題、階級鬪爭の問題に觸れることが、絕對の必要となつたといふことである。立憲民政黨の宣言は、分配は社會正義に則るべしと云ひ、生活の不安を除去すべしと云ひ、階級鬪爭の禍根を絕つべしと云ふだけであつて、かく云ふだけならば、恐らく何人にも異論のないところであつて、無產階級運動の極左翼に立つ人々でも、それは誠に結構だと挨拶するにちがひない。宣言は、如何なる分配が社會正義に則つた分配であつて、何か國民生活の不安を除ぞき、いかなる方法によつてのみ、資本主義社會に必然に發展する階級鬪爭の禍根を絕つことが出來るかは、注意深く匿くしてゐる。それにも拘らず新政黨が『新しい』政黨に見へ、新しい要素と新しい社會層とを動員するためには、少なくともこれらの問題に對して新しい見解と政策をもち、少なくともこれらの問題について進步的な意見を持つかのような幻覺を、意識的に造り上げる必要があつたのである。

この旗印の下に、憲本の二つの舊勢力が集まつたが、彼らはなぜ集つたか。そしてなぜ集まれたか。本黨はすべてのブルジョア黨派のうちで最も露骨な保守黨であつて、保守主義を賣り物にして來た政黨であつた。憲政會は、少なくとも在野黨時代には、同じく賣り物とはいふものゝ、選擧權の擴張を唱へたり、一般商工階級からの得票を心掛けたことのある、比較的——比較的である——進步的なブルジョア政黨と見做されたことのある政黨であつた。少なくともこの範圍では、ブルジョア政黨の兩端にあつたこの二つの政黨は、何故に、少なくとも新しみを標榜した旗印の下に集まり、また集まり得られたか。ことに床次總裁が本黨の最後の大會において、『事情もつとも困難なりと見えたる我黨』と云つたように、多くの困難があつた筈の本黨側が、どうしてこの困難を乘り切つて、新政黨の下に集つたか。この答へは簡單であつて、いふまでもなく、それが次の政權を手に入れる最も確實な、一番の近道だと思はれたからである。これが彼らを集まらせた最も直接な、實踐的の動機であつたにちがひない。

しかしながら問題はなほ殘つてゐる。彼らは何故に、これが次の政權にありつく最も確實な近道だと考へたらう。かつて床次以下の面々は、次の政權を獲得する最も確かな近道だと考へたから、政友會から別れたのではなかつたか。諸君は普選を唱へたり、護憲運動をやるような過激思想の道連と手を切ることが、政權の、最も確かな捷徑だと考へた。諸君の當ては見事に外づれこそしたが、諸君の期待は、必らずしも不合理な期待であつたとは云はれない。現に憲政會の政權の油揚は、思はざる時に舞ひ降つた樞密院の鳶によつてさらはれたのではないか。

しかし今日は、政權の行くへについての見透ほしは、その時よりも遙かに明瞭になつてゐる。言葉をかへて云へば、ブルジョアジーの支配を蔽ふてゐた封建政治の殘存物といふ曉霧は急速に吹き拂はれ、獨占的大資本の赫灼たる太陽は、すでに三竿に昇つてゐる。次の政權はもはや戸惑ひすることなく、議會におけるブルジョア多數黨の門前に轉ろがつてくることが、九割九分の確實さを持つて見極はめられたのである。これをブルジョア政治學の言葉に反譯すると、憲政の常道が確立せられた、といふことになる。聰明な政友本黨指導者の往年の算用違ひは、この憲政の常道確立の途上に起つた一つの悲喜劇であつた。

多くの人々が指摘してゐるように、最近の政變の興味ある特色は、直接に、或る財閥の利害を中心として起つたことである。

第二に興味あることは、財閥の利害をさしはさんでのこの闘爭の渦中に、樞密院が雲の上から飛びこんだことである。たゞに政治上の中世紀的封建的廢退器官としての樞密院が、たま／＼過つて政爭の渦中に投じたといふばかりでなく、それは生きたる能動的な政治勢力として、この政爭の渦巻きを捲き起こしたことである。樞密院はかなりに久しい以前から、單なる舊時代の——ブルジョアジーの支配以前の——政治的遺物とのみ思はれてゐた。それはブルジョア政治の盲腸であつて、往々にしてブルジョア政治の腹痛の種子となり、時としては致命的な障害を引き起こしはするが、盲腸は畢竟盲腸であつて、近代的な人體の組織のうちに、新たな能動的な機能を持つて織り込まれるような、新たな進化をしたものではない。ところがこのブルジョア政治の體内にある盲腸は、新らたな環境に順應して新らたな機能をする一器官となつた。それはブルジョア政治勢力に抱合し、ブロジョア政治勢力の生きたる一部分となつた。政治上の廢退器官として、たゞ消極的な邪魔者としてのみ厄介視せられてゐた樞密院は、いまやブルジョアジーの政治勢力に融合し、同化し、その一要素となることによつて、最近の政變のうちに、能動的な政治勢力として再生したのである。

これはブルジョアジーの支配に取つての脅威であらうか。決してそうでない。昭和二年には、この樞密院の『暴擧』に對して、何らの『護憲運動』らしいものゝ起こらぬことが、何よりもよくこれを物語つてゐる。樞密院が政治上の一機關たる形態においては、舊時代の政治的遺物であることに何らの變りはない。けれども或る器官は或る範圍内ではその本來の形態のまゝで、新しい異つた機能をすることができる。舊時代の政治的遺物たる樞密院が、その遺物的形態を存しつゝ、ブ

ルジョア政治のうちに新たな役割を演ずるものとなつても、少しの不思議もない。もちろん憲政會に取つては、樞密院の行動はけしからぬに相違ない。これは臨時議會における決議案となり、立憲民政黨の政綱にも、謂ゆる『議會中心政治の徹底』の主張となつて微かに不平の聲をあげてゐる。しかしそれ故に、今更ら樞密院をどうこうしなければならぬといふ程の必要は、憲政會に取つても——從つて立憲民政黨に取つても——それが眞實のブルジョア政黨である限りは——全然存しないのである。貴族院の改革を叫んだ憲政會が、改革されないのと同じ貴族院を最も信頼する道連づれにしたやうに、樞密院を道連れにする順番が來る。樞密院が——もつと精確に言へば、樞密院によつて代表せられてゐる勢力が——ブルジョアジーの政治勢力と獨占的資本の支配から獨立した別個の反動的政治勢力を意味してゐた間こそ、それはブルジョア政治にとつての盲腸であり、しかも危險な、厄介な、時としては致命的な盲腸であつた。現にこの盲腸によつて引き起こされた政變の腹痛が、數年前ならば當然に豫期せられた中間内閣には落着かないで、政友會内閣の出現に落着いたことは、ブルジョアの政權がいかに確實に樹立され、『憲政の常道』がもはや政權の行くへを示す指針として、信頼するに足るの程度にまで踏み固められたこと、それと同時に舊時代の政治的遺物たる樞密院が、もはや完全にブルジョア政治勢力の圈内で働らく機關となつたことを示してゐる。そこで憲本兩黨は、あらゆる困難を突破しても、新政黨の下に合同する必要があつた。そしてまた、それ故にこの合同が可能であつた。

來るべき總選擧に臨む準備としても、この合同は必要であつた。憲本聯盟は議會に多數を占めてはみたものゝ、この二つの政黨が互ひに相牽制しながら政友會に當るのでは、反對黨政府の下に行はれる總選擧から現在の割合の勢力を持つて出てくることは覺束ない。この覺束ない期待のために、投票仕入資金の調達引受人を見附けることは尚更ら覺束ない。これは本黨側にとつてことさらさうだつた。のみならず來るべき總選擧はブルジョア政黨にとつては、二つのことを意味してゐる。即ち第一には、新たに選擧權を得た一千萬の新要素のうちの、いよ〳〵どれだけをその政治勢力のもとに獲得するかといふことであつて、第二には、このブルジョア政治勢力の新版圖の配け分を、どれだけ自黨に收めるかといふことである。ブルジョア政黨はこの問題そつくりを、第二の問題の形でのみ提起する。彼らは意識的にも無意識的にも、第二の問題のうちに第一の問題を伏せておく。彼らはこの第二の問題——ないしはこの問題の第二の方面——を決定することによつて、おのづから第一の問題——ないしはこの問題の第一の方面——を決定するのである。ブルジョア政黨間のあらゆる爭鬪が、政黨の階級的性質を隱くすやうに、普選に對するかやうな問題の提起と決定との仕方は、選擧の階級的意義を隱蔽する効果がある。そこでブルジョア政黨が普選の實施を前にして、その競爭政黨に對して行つてゐる陣列の整理は、やがて普選によつて擡頭の機會を得ようとしてゐる新興階級の政治勢力に對して、全ブルジョアジーの政治勢力がその陣營をとゝのへ、その布陣を整理し、砲列を布きかへ、その全勢力の編制替へをしてゐるものと見做してよい。直接間接に、普選の實施に刺戟せられてゐるブルジョア政黨の分解と再結合との作用は、こと〴〵くみ

な斯ような階級的意義を持つてゐるもので、資本合同の一面は、同じくこの作用の一端の現はれにほかならぬ。

これはまた、わが國の資本主義の根幹に進行してゐるより深刻な、より根本的な展開に照應する。戰後の資本主義が安定を求める一切の勢力——最近の恐慌は、この過程の鎖の主要な一環であつた——は、同時に資本の集中、企業の集中、資本の獨占化の過程であつて、最近の金融恐慌は、この過程の進行を妨げる最後の障害を爆破する火藥であつた。資本の覇權が、いよ〱ます〱少數の大金融資本の手に歸するに從つて、これこの少數の財閥の對立と鬪爭とは、いよ〱ますます激烈となり、いよ〱ます〱露骨に、直接に、端的に、政治上の對立と爭鬪とに變じて來る。金融資本の王侯は、もはや折々の冥加金を職業政治家の集團に奉納してその庇護を蒙る政商的の方法に滿足しないで、多かれ少なかれ、政黨をその常備の軍隊とする必要に迫られる。日本の政界が、政友會と立憲民政黨との二大勢力の對立に展開したことが、果してどの程度まで、最近にいたつてます〱著るしくなつた三井三菱兩財閥への勢力集中と、その對立關係の增大との直接の結果であるかは、もとより斷言することはできぬが、この對立關係が、對立した二大ブルジョア黨の間の今後の政爭を色どるべきことは、疑ふの餘地がない。

政友會内閣が、最も鮮ざやかに、官僚、軍閥、大資本の勢力の化合を具現してゐるように、これに對時する新政黨もまた、このブルジョア政治勢力の三位一體の結成につとめてゐる。官僚の古手を中堅とする點で令名のあつた憲本兩黨の乘合船が、軍閥中の反田中派を同乘せしめるために腐心してゐるといふ噂は、決して打消すべき理由はない。こうして大資本の政治勢力は、あらゆる反動勢力をその熔爐に投げ込んで、資本帝國主義の一大勢力を鑄造するのである。

新政黨の樹立により、日本の政界が二大ブルジョア黨の對立となつたことは、今後少なくとも當分の間、政權は確實に、『憲政の常道』によつてこの二大ブルジョア黨の間に授受せられるといふ見極はめのついたことを意味してゐる。これはブルジョア政權の安定を意味してゐる。

「出兵問題と田中外交」の廻れ右

若槻内閣が臺銀救濟問題のために倒ほれたといふことは、云ふまでもなく、田中内閣は臺銀救濟問題のために生まれたといふことであつて、これほど自明な事柄はない。

それにも拘らず、田中政友會總裁に内閣組織の大命が降つた瞬間から、この内閣がその出現の理由とした臺銀救濟について、どんな政策どれほど憲政會内閣と違つた政策を取るだらうかといふことは、恐らく唯だの一人も重大な問題にした者はない。なぜならば、若槻を田中と書き換へても、或はその他の如何なる名前と書き換へても、よし一億圓といふ數字が六億圓七億圓といふ數字に變はる變化はあらうとも、大體において同一の政策が取られることが、明らかであつたからである。

これに反して田中内閣の出現の瞬間から、すべての人々の注意の焦點となつたのは、對支政策の變化であつた。

これは若槻内閣の緊急勅令案に對する反對が、どの程度まで内閣倒壞のための口實――憲政會内閣沒落の眞實の理由――であつたかといふこと、從つてまた、この政變の裡面に、どのような力が動いてゐたかといふことを、最も雄辯に物語つてゐるものである。若槻首相は或る程度までは、丸腰になつた田中大將のサーベルの先きで倒ほされたと云ふことができる。その跡に生まれた政友會内閣が、軍閥的色彩――財閥的色彩については言ふまでもない――を多分に持つてゐることに少しの不思議はない。この意味でも、政友會内閣は、財閥軍閥の同化を標本的に具體化したものだと云ふことができる。田中内閣が專任外相を置かないことは、たゞ單に、人事上の理由からのみだと考へることはできぬ。かつては軍閥の二重外交が問題となつた。政友會内閣は、ブルジョア外交の軍閥外交への降伏でもなければ、軍閥外交のブルジョア外交への屈服でもない今一つの第三の方法、全く獨特の一方法によつてこの問題を解決した。即ち軍服をぬいでブルジョア政黨の首領となつた、丸腰の田中大將の外交によつて、この問題を解決したのである。

この外交の第一の現はれは、對支政策の聲明であつた。この聲明は最も婉曲に、しかも最も露骨に對支出兵の豫告をしたものであつた。出兵の決定は、濟南在留邦人の生命財産が危險が迫つたと政府が確認した五月二十八日であつたといふよりも、四月十九日の大命拜受の日であつたと云ふ方が當つてゐる。それよりも樞密院が緊急勅令案を否決した四月十七日だつたといふ方が、さらに一そう精確である。この四十日前の帝國主義の頭の中の既定の事實は、四十日後に具體の事實となつて、世界の前に展開された。五月二十八日の中外に對する出兵の聲明には、この兵力行使の目的が、絕對に在留邦人保護の範圍内にあることを念入りに說明してゐるが、その前日の濟南特電（東京日日新聞）は、『現在の模樣では濟南は絕對に心配がない』といふ藤田總領事の談話を傳へてゐる。現に出兵から二週間を經過した今日、いまだに濟南の在留邦人が少しでも兵禍の危險にさらされたといふ何らの報導もない。帝國主義者とは、出兵の目的は『事を未然に防ぐ』のであつて、今日までその危險の起らなかつたのが、即ち出兵の效果であるとして得意になつてゐる。けれども出兵にかような效果があつたと主張することは、二十八日の出兵聲明が、『南北兩軍何れの軍隊に對しても其の作戰に干涉し軍事行動を妨害するものに非ず』とわざ〳〵斷はつたこの保證が、事實において裏切られたといふことを意味してゐる。

日本の出兵の效果と眞實の性質とは、この出兵がどのような聲明の下に行はれたかで定まるのではなくて、この出兵が、出兵された支那國民に、どのように受取られたかで定めるのが、一そう精確である。上海の國民黨は眞つ先に出兵抗議の運動を開始した。三十日には上海交涉員の正式抗議を見た。南京國民政府外交部も、抗議的の聲明を發した。張宗昌すらも、『日本の出兵は日本人保護の名を藉りわが國壤を侵害するものである、現在の山東省に何等の不安もない』といふ理由で抗議をし、北京外交部も五月一日、正式の抗議をした。武漢政府は三日をもつて、日本の出兵は張作霖、張宗昌、蔣介石らが同意を與へた結果かも知れないが、國民政府及び支那全體に對する挑戰であつて。

英國の出兵以上の罪惡だとして議抗した（東京日日）。三日には濟南の諸團體によつて、出兵反對の會議が開かれ、青島の總商會もこれに應じて反對を聲明した。等々々。

たゞこの間に異彩を放つ二種類の報導があつた。その一つがロンドンから來たるべきことは、何人も豫期したところであつた。『大軍を派遣してゐるイギリス當局者および日英同盟の復活を希望してゐるイギリスの識者は日本の派兵を歡迎し、支那人から文句をいはれる道連れができたといつて喜んでゐる・・・』（東京朝日新聞特電）。

いま一つの歡びの聲がどこから聞こえるかも、固より豫想するにかたくない。二十八日の北京特電（東京朝日）は、『日本の出兵に對し何ら異論を唱へる理由を持たぬ』揚宇霆の談話を傳へ、二十九日の青島電報（東京日々）は、日本の出兵に對し、北方派に『異存なく、むしろ好感を抱いてゐる』といふ矢田部總領事の回答を報じてゐる。

斷つておくが、日本の出兵は、南北兩軍のいづれに對しても、その作戰に干渉し軍事行動を妨害するものではない！ たゞかような性質をもつたこの度の出兵を、心なき新聞紙が、『張氏の覆滅を帝國に不利とし、政府遂に出兵を敢行』といふ大々的活字の大見出しで報導し、しかも國民の何人もが少しもこれを不思議とせぬことは、まことに是非もない。

しかしながら『今回の出兵は・・・日本人の生命財産保護が第一義だから、このために排日運動が起る位のことは眼中に置かぬ』（五月二十九日東京朝日田中首相談話）田中外交の立場から見れば、支那國民の與論が一齊にこの出兵に反對しようが、日支の親善がそのために少々傷づけられようが、山東に對する日本帝國主義の野心が疑はれようが、この位のことは一向平氣である。必ずしも平氣ではないが、田中外交にとつては、それにも替へられないものが玆に一つある。『日本人が騷亂のために全部引揚げて仕舞ふやうでは、折角扶植した日本の地位を根柢から捨てることになるのだから、國家の經濟的發展の立場から考慮し・・・支那内地において日本人が・・・築きあげた經濟的地位は、單に個人の權利利益の立場からのみでなく、國家の經濟的發展の大眼目から見てあくまでこれを擁護する方針である・・・。』誤つてはならぬ！ 單に一個人としての日本人の生命財産の保護ではない、支那といふ國土と國民の中への日本の經濟的發展である。これが『大眼目』であり第一義のものである。そしてこれは日本の田中外交ばかりでなく、すべての資本帝國主義國家の外交が、いかなる手段に訴へても、『あくまで』最後まで握つてゐようとしてゐる第一義の大眼目なのである。もとよりそのためには、資本主義列國は、支那國民の口の先きや筆の先きの抗議や議論に尻込みせぬ。帝國主義は口先きや筆先きの抗議や議論よりも、もつと有力な抗議や議論――××――を持つてゐる。

最近、田中外交の『廻れ右』ないしは『方向轉換』が傳へられてゐる。形勢の變化は、勢ひ外交方針の變化を促がす筈であつて、田中外交が方向を轉換しても、もとより不思議はない。ではこの間に、支那の形勢は、一たいどのように變化したらうか。

第一には、張作霖が武力によつてこの地位を保つ望みが徹底的になくなつた。（あくまでこの見透ほしのつかなかつたのは、列國の帝國主義者であつた！）。これは他國の出兵が、南北兩軍のいづれの作戰と軍

事行動とを、公然妨げることなしに、尚は張作霖軍を有利に導びく可能がなくなつたことを意味し、從つてまた、張作霖が武力によつてあくまで南方に對抗する結果は、張作霖と一緒に、張作霖といふ土豪の上に立つ既得權の沒落となる危險を意味してきた。

第二には、國民運動の左右兩翼に對する分裂政策の成功は、反左翼の名の下に、南北を妥協せしめる希望の曙光を生み出した。この妥協の可能と不可能とは、最近喧しく傳へられてゐるところであつて、この妥協運動の背後に、或る種の力の動いてゐることは爭はれぬ。張作霖の軍事的沒落の見究めのついた今日では、革命的國民運動を打ち破り、或は少なくともこれを中途で喰ひとめる唯一の方法が南北の妥協であるやうに、國民運動の左右兩翼を決定的に斷ち切る最善の方法もまた南北の妥協であり、北方を助ける唯一の道もまたこの妥協の促進である。いはんや國民運動の左翼に對立する勢力とすれば、蔣介石軍は舊勢力と舊秩序を維持する力となるが、張作霖に對立する勢力としておけば、それは舊勢力と舊秩序を破壞する力となる。

支那の形成は變化した。田中外交は方向を轉換しなければならぬ。山梨大將は支那に急行しなければならぬ！ 妥協の光は東方より來る。

台灣における政治結社の禁止

臺北電報は、臺灣に初めて政治結社の認められたことを報導した。『臺政革新會と稱する本島人の政治結社がその筋から認めらるゝことゝなり……その發會式が擧げられた。綱領として揭ぐるところによれば、臺灣人の政治的經濟的社會的解放の實現を期すといふにある……（東京朝日）。

しかしその後の報導は、發會式における左翼分子の主張により、綱領に多少の變化があつたといふので、總督府はあわててこれを禁止したと報じてゐる。

臺灣は日本國内の、、、あり、、、、上に吾々から斷ち切られた國內であつて、臺灣民族の生活と吾々との間は、無形の、、をもつて嚴重に遮斷せられ居り、吾々はたゞこの障壁をもれて來る僅かな報導によつて、その生活を知るのみである。饒舌な新聞も、植民地民族の生活と、彼らを支配してゐる政治については、謹んで多くを語らない。そこでこの政治結社をその禁止についても、吾々はこの新聞記事以上には、少しも知るところがない。

けれども總督府が、臺灣において『初めて』存在を許るさうとしたといふ臺政革新會なるものは、蔣淮水、蔡培火らを中心人物とし、林獻堂を顧問にいたゞく團體だといふことだけで、その性質はすでに明かであつて、この運動が臺灣民族の運動であつたか、或は、、、、、の運動であつたかをさへも疑はしめるものがある。

總督府は、何故にこの運動を禁止したらうか。新聞の電報は、左翼分子の主張により、臺政革新會の性質が變つたからだと報じてゐる。私はこの左翼分子の性質をも、この新運動の內部における數量上の勢力をも知らぬ。けれども兎も角も蔡培火等の指導の下に起つた臺政革新運動のうちにも、すでに左翼があり、しかもその左翼が、大會を動かすに足る勢力であることは疑ひがない。かつて總督府は、その分裂

政策と分割支配の手段により、左翼的分子を含んだ文化協會の運動から、これらの指導者を、ゝくことに成功した。總督府はこれらの指導者の運動こそ、眞實に望ましい善き收穫を約束する土壤であると考へた。であるから進んでこれを耕作した。その播かれた種子が臺政革新會であつた。

ところがこの種子から芽を吹いたのは、小麥ばかりではなくて、多くの麥奴がまざつてゐた。麥奴の成長力は、小麥を壓しようとした。總督府は小麥と共に麥奴を收穫するか、でなくば麥奴と共に、小麥をも燒き棄てねばならぬ。これが臺政革新會の禁止であつた。

これは何を意味するであらうか。これは日本の殖民地政治が、その耕作によつて、畢竟殖民地から、、、、、、、、、、、、、、、象徴したものではあるまいか。(六月九日)

追記　この稿を了つて新聞を見ると、南北の妥協離が傳へられてゐる一方には、駐支英國公使は芳澤公使を訪ひ、『支那の赤化防止は蔣介石氏と張作霖氏とを妥協せしむるのが何よりの策だと說き、日本がその調停役とならんことをすゝめた』といふ北京特電が掲げられてゐる。北方の援助、革命的國民運動の防壓、張蔣妥協の押し賣、この三つの言葉は、今日の帝國主義的對支政策において、精密に同一の意義を持つ言葉となつた。

大恐慌後の對策依然腐爛を續く

高橋龜吉

一

去る四月に於ける未曾有の金融大恐慌は、流石に、資本家階級に一大覺醒を與へたかに見へた、當時に於ける一部資本家階級の言動には、尠くとも、「コレではならぬ」と云つた或るものが、動くに至つたことを明かに看取することが出來た。しかし乍ら、その後に於ける所謂「大恐慌の善後策」に現はれた資本家階級の對策なるものを見るに、資本主義そのものゝ爛熟と、資本家階級の腐敗とは、所謂「病已に膏肓に入り」、根本的手術を施さない限り、最早、之をドウすることも出來ない域にまで已に到達してゐることを痛感せざるを得ない。

いま、私は、幕府の末に、十六代將軍慶喜が、松平春嶽の問に答へて、中興では駄目だ、創業の決心で事に當らなくては……と云つた言葉が、如何に意味深長に現在の我が資本家階級並にその支持する資本主義に當嵌るかを、思ひ出さゞるを得ない。例へば、澁澤榮一男爵著

「徳川慶喜公傳」第五卷六六二乃至六六五頁を見ると、次の如く慶喜公は述べてゐる。

『……中興といふと、今までしたことは採らなければならぬ。創業といふことになると何もないのだ。規則もなければ慣例もないのだから、善いと思つたことはすぐやれる。まるでこれまで、何もない、早く云へば神祖が天下を何したあの通りにやれば宜いのだ。それで舊格やなんぞに泥んではいかぬ、と云ふ心持で創業と云つたのだ。……幕府の創業だ。私の考は舊弊もない積りだ。まるで新規に事をやつていかなければ迚も今日はいかぬと斯ういふのだ。……隨分諸藩には非常に拔擢したのがある。先づ幕府の方では非常に拔擢といつた處が永井主水正が若年寄になつたといふくらゐのものだ。それで幕府には人がない。人がないぢやない、採る途がないのだ。これだけの大勢の中に人のないことはない、採る途がない、あつても採れない。それで私等が考へて、若年寄くらゐには取立てたいと思つても、それをやつてはどうも折合が惡い。又……種々の故障で出來ない。だからあれは打壞してしまつて、新規に家を立てれば立派なものが出來る、修繕では迚も出來ない。……』

この十六代將軍の述懐は、之をそのまゝ、大恐慌後の我が經濟の改造についても云ふことが出來る。例へば、初め、時の藏相高橋氏やその他の主なる人々の口吻によると、所謂七億圓の補償法の適用は勿論、臺灣、十五其他の休業銀行の整理についても、之を徹底的に敢行せしめるの氣構へであつたらしい。所が、實際、事に當つて見ると、其所には無數の「資格」その他の仕來りが蟠居し、數知れぬ利害の絲がつながり合つてゐる。斯くて、例へば臺銀を徹底的に整理せんとすれば、倒れるのは一個の臺銀のみでなく、之に一億數千萬圓のコールを出してゐる數十の銀行が少からぬ痛手を蒙る。十五銀行を徹底的に整理せしめんとすれば、その裏には貴族院の政治權力が眼をムキ出してゐる。その他、已成政黨內部に於ける複雜した「行きがゝり」や、資本家階級內部に於ける利害の錯交等々、何れも、我が經濟――この衰亡し切つて瀕死の狀に在る――の改造、再建等に必要な施設を、思ふがまゝに斷行することを頑として阻止してゐる。慶喜公ではないが、「根本的に建て直すと云ふことでなくては、財界の改造に必要な新政策を施す餘地はないのだ。

斯くの如き情實の下に於て、安ぞよく財界に必要な大整理が敢行し得られやうぞ。今日のやり方は、宛も、幕末の幕閣に於けるが如く、幾度かその根本的大整理を要求する事件は眼前に展開し、「コレではならぬ」の氣持ちを幾度か一部の人々に持たしめながら、結局、十六代將軍をして、「中興では駄目だ、創業でなくては……」と永嘆せしめ、遂に大政奉還を餘儀なくせしめた歷史を繰返してゐるにさも似てゐる。去る四月の大恐慌と云ふ未曾有の刑罰に處せられながら、その善後策に於て、早くも我が財界は、再び、大恐慌前の腐爛し切つた「因循姑息」な彌縫策を繰返す外なき運命に陷れることは、以上の如く理解して、始めて不思議でも何でもないわけを知ることが出來るであらう。

二

已に前號の本誌に於ける拙稿「資本家機能の總破產」に於て評叙したやうに、過般の大恐慌の根因は、要するに、今まで家屋敷家財道具等を賣食して、收入不相應な生活をして來たものが、その賣り草を賣盡して、愈々、從來の生活を續け得ざるに至つた破綻に在るのであるから、この破綻に處する道は、唯だ一つ、彼れの生活を彼れの收入の範圍にまで低下せしめる外ないのである。具體的に云へば、その事業の資本金を現在その事業の收益力の程度にまで切り下げ、尙ほ、從來の損失を塡補し終るまでそし配當金を一切中止することである。

然るに、斯樣な分り切つた「善後策」が、いまの我が銀行家や事業家には、かの大恐慌直後の今日尙ほ、仲々實行し難いのである。そんなことをやると、或は株主から、或は外部の債權者（銀行について云へば預金者、事業家について云へば銀行）から、信用を割引されたり手腕を疑はれたり、株主の生活を脅かしたりすることになると云ふことが、依然として有力に作用してゐるのだ。然り、斯樣なクダラない理由が、大恐慌後の今日尙ほ、尤も至極な理由として、資本家仲間の間には通用してゐるのだ。斯くて、銀行家や事業家は、如何にその事業の中興上、減配、減資等の必要ある場合に於ても、自力で以て、破滅前に之を斷行するの能力無きことを、今度と云ふ今度は、完全に赤裸々に曝露した。それは、今次の恐慌後に於ける銀行の減配と云ふ、誰が目にも當然過ぎる當然が、銀行自身の力を以てしてはドウしても之を斷行することが難かしく、遂に政府をして、日本銀行や正金銀行やを强要せしめ、それに三井や三菱等を引張り出し、これ等が減配の音頭取りになり、東西銀行家が協議決定して、劃一的な方法に出で、茲に始めて減配（それも二分以下の）が實現するに至つたと云ふことに由つて曝露せられたのである。否、その上に、大藏省の減配慫慂と云ふ公文書まで出しての鐘太鼓で囃立てることを必要としてゐるのだ。

斯くの如きは、譬へば、幕末の大名のやり方そのまゝである。當時、彼等大名の生活はその收入を遙かに越してゐた。そこで、彼等は百姓を苛斂誅求する（今日の銀行家は十億圓からの國庫補償法と云ふことを以て之に代へる）その上に、將來の貢納を抵當にして大阪の富商その他から借金する　今日の銀行家其他の蛸配當は正にそれだ）斯くして、彼等大名の財政的破綻は誰にもハッキリ分つてゐる。にも拘らず、彼等大名は、格式とか體面とか（今日の銀行家その他は「信用」とか「株主の生活」とかと云ふ言葉を之に代用する）と云ふクダラない理由を、いかにも尤も至極な理由として、斷然たる財政の整理をなし得ずして、沒落への途を急進した。こゝに於て、時の幕府は、之を大名自らに委しては、破滅の外なしとなして、安政度の水野越中守の大節約令を出した。（之れが丁度今日の配當減少の慫慂である。）

去り乍ら、幕末の大名の財政的破滅が、結局水野越中守の節約令に由つて救ふに由なかりしが如く、已に自ら自己の破產を處理する能力を欠せる我が銀行家其他の資本家の破滅は、一片の大藏省の減配慫慂令や、日銀其他を强要して踊らせた減配の手本や位では、結局之を救ふに由なきことは、改めて說明を要せないであらう。斯くの如き附燒刄では、宛も水野越中守の退職後に再び奢侈が再現して、遂に財政的に幕府其他の大名を破產せしめた如く、過般の大恐慌の苦痛が少し薄

らぐと共に、再び、我が資本家は、利益無きにも拘らず帳簿上に利益を捏造して、盛んにその產業その自身を喰ひ潰し、遂に大名と同じ運命に陷る外なきことは、餘りにも明かであるからだ。

三

未休業銀行は云ふ迄もなく、休業銀行までも出來るだけ救へ、と云ふことは資本家階級一致しての要望である。所で、さう云ふことが許し得られる唯一の口實は、左樣に一切の銀行を救濟することに由つて、人心に安定を與へ、銀行の極度の警戒をゆるめ、信用の授受を圓滑にする……、之を一言に云へば、「全體の經濟界の利益のため」、と云ふこと以外にない。然し、さうした。理由に於てのみ、資本主義的精神に於ても、斯樣な救濟は許し得られるものである。

從つて、それは、「銀行」と云ふ一の金融機關を殺さずに出來るだけ生かしめる、と云ふことであつて、斷じて、その銀行の株主乃至重役等を救濟すると云ふことであつてはならないし、又大口預金者其他の債權者を救濟すると云ふことであつてもならない。御互ひが汗水流して納めた國庫の金に由つて、株主や大口預金者等を救濟する理由は何處にも成り立たないのだ。唯だ、これ迄有用な働きを持つて來た「銀行」と云ふ一のインスチチユーションだけは、何とかしてそのまゝ從來の働きをなし得るやうに出來るだけ救濟することが、全體として利益であると云ふに過ぎない。

そこで、「銀行」を生かすためには、その株主や大口預金者其他の債權者の利益を救護するどころか、反對に、それ等の利益を極力制限して銀行が生きて行けるやうにすることが、銀行救濟論の眼目にならなくてはウソである。然るに、實際に於ては、謂ふ所の銀行救濟論なるものは、專ら、その株主と預金者其他の債權者の利益を圖ることが唯一の目的であつて、そのためには、銀行の銀行としての働き、即ち、生產及び商業上の信用の授受、と云ふ作用を滅茶々々に破壞して憚からない。現に、いま我が經濟界は、銀行の斯の如き信用破壞行爲のため、極度に萎縮に陷り、操業縮少、工場閉鎖、解雇等が漸く一般的ならんとしてゐる。云ふ迄もなく、斯の如きは、全く、銀行救濟の趣旨に反することであつて、國民は何のために十億圓からの損失補償までして銀行を救濟せしめられたか、その意味が分らないわけだ。

さり乍ら、我らが資本家階級には、その意味はハッキリ分つてゐる。彼等の銀行救濟なるものは、始めから、その銀行の株主を甦し、預金者を救ひ、債權者を助けることにあつた。そのためには、銀行が銀行としての機能を如何に放棄し、そのため我が經濟活動全體が如何に解體せられやうが、そんなことは馬耳東風なのである。斯の如きが、我が資本家や政治家などの考へてゐる銀行救濟の內容である。

さればこそ、十五銀行の整理案として傳へられるが如きものが、何の不思議もなく一致財界に承け容れられてゐる。曰く

一、回收困難の貸金及有價證券評價差損等七千萬圓を缺損として計上す

一、拂込四千九百七十五萬圓を二千五百萬圓、即ち約半額に減資す

一、預金は無條件拂出しをなす。

一、別に資本金二百五十萬圓の新規銀行を設立し十五銀行と合併

す。

一、合併後の十五銀行は相當程度の株主配當を行ふ

即ち、十五銀行の株主の損失はその拂込の半額に止め（爾後は相當程度の株主配當を行ふ等）大口預金者にも全部預金を拂戻さうと云ふ虫のよい案である。而して、十五銀行の株主及大口預金者（それ等の大部分が華族―働らく味を殆んど知らない華族であること周知の通りである）を斯くの如く救濟するためには、國民が營々として積み上げた郵便貯金より三千萬圓と云ふ大金を、極めて低い利子（五分五厘と傳へられてゐる）で、しかも回收出來るか出來ないか不安極る狀態で川崎造船所に融通し、以て間接に十五銀行を助ける外、更に、日本銀行より「貸增並に增擔保の方法」に由り五六千萬圓の融通を與へねばならない。云ふまでもなく、玆に「貸增並に增擔保」の方法とは、普通ならば日本銀行が危ぶんで貸與しないものを夫の七億圓の補償令に由つて、萬一にも十五銀行が支拂はぬ時は國民が代つて支拂ふ約束の下に、日本銀行が十五銀行に貸すものである。

一體、十五銀行は、今度の破綻直前まで、年一割（約五百萬圓）の株主配當をやり、年三十六萬圓乃至四十萬圓の重役賞與と、年二十萬圓の行員慰勞積立金をやつて、自らを欺き、世を瞞かして來たものである。然るに、重役の中、松方氏のみが私財全部の提供をなせしを聞くのみで、他の重役は、社會と自分とを欺瞞して取つた何ヶ年分かの「重役賞與」すら吐き出さうとはせず、又、吐き出させようともしてゐない。又、年々利益もないのに五百萬圓の配當を取つて來た株主は、僅かに、過去五ヶ年分（大正九年以來已に八ヶ年である）を吐き出されたのみに過ぎない。それで、如何に巨額の負擔を國民に强ひんとするのだ―しかも華族を助けるために……。云ふまでもなく、先づ松方氏のみならず、其他一切の重役は、その私財を提供すべきだ（大正九年以來十五年迄に約三百二十萬圓の重役賞與を欺瞞して取つてゐるのだから……）株主も必要の限り之を先づ裸にすべきだ。而して、大口預金者も債權者もその一半の責任を負ふべきだ。斯くせば、十五銀行と云ふ金融機關を作用さすに必要な資金は、優先株その他の方法に由つて、國民に負擔を强ひることなくして（負擔を荷すとしても最少限の負擔に由つて）容易に調達し得るのだ。

十五銀行に現はれた整理の仕方は、又、その他の銀行の整理の仕方であると見て大過ない。蓋し、華族銀行を救濟した手前、他の銀行の救濟を十五銀行の救濟の仕方以下に下げるわけには行かないであらうから……。而して、傳へる所に由ると、その他の休業銀行は極力援助して、自立し得るものは自力で開店せしめ、然らざるものは別に新銀行を設立し一切を之に合併せしむる手段を採るらしい。が、その結果が、結局、銀行を銀行として活かすことではなくて、株主と預金者と債權者との私腹を肥やすに終るべきや云ふまでもない。

斯くの如き露骨な資本家救濟は、臺灣銀行の整理に於て更にチピカルに現はれてゐる。臺灣銀行と云ふインスチチユーションの有する機能、例へば東南洋に對する爲替業務、臺灣に於ける金融機關等を活かす、と云ふ名に於て事實救はれたものは臺銀の株主と大口債權者（銀行のコール貸其他）と預金者であつて、そのため、國民は從來の救濟分の外、二億圓の補償令、二億七百萬圓の震手處理案の少からぬ部分

等々の負擔を强ひられてゐる！

四

過般の大恐慌の結果、事業會社も亦、いまや一大整理を强要せられつゝある。彼等は、戰爭景氣の消滅、九年春の恐慌、十二年の大震災等の結果、減資、減配、不引合事業の打切り等の整理を必要とする時逆に、卅配增資に由る借金政策によつて、難局を糊塗し來つた。即ち、借金を返すに、節約、減配等の正規の方法に訴へる代りに、資本金を增してそれで一時を凌ぎ來つたのである。而して、その增資をし、拂込金を徵收するためには、株價を相當に高く維持する必要のある所から利益なきにも拘らず帳簿をゴマ化して高い利益配當を續けたのだ。だから、多くの會社は、いま、表面上の資本金ばかり多くて、實際の收益力は極めて少く、且つ、手許に餘裕の金とては一文もなく、借金に借金を重ねて、無理な配當を續けて來たのである。

それが、あの大恐慌で、先づ銀行がメチャ苦茶にやられたので、流石の銀行が大警戒を始め、到底、從來の如き無茶な借金政策を續け得ざるに至つた。斯くて、大小幾多の事業會社は、いまや、資金難に四苦八苦で、一大整理を徹底的にやることを餘儀なくせられつゝあるが、特に、最近に於ける特徵として目につくことは、その要整理會社として困難しつゝあるものが、從來、大體に一二流會社に屬すとせられたものに多いことだ。三流以下は、已に、これ迄に於て一先づフルヒにかけられて來たからである。

が、茲に於ても、失の大恐慌の刑罰を少しも恐れざるものゝ如く、その整理は極めて彌縫的であつて、その事業は、每期々々、收益以上の株主配當や重役賞與等を吐き出すために、愈々衰弱と破綻に迫りながら、尙ほ百方手を盡し、借金に借金を重ねて、出來るだけ多くの株主配當と重役賞與を算段することどに專念してゐる。云ふ迄もなく、かくては、事業そのものゝ眞の建て直しに必要な徹底的整理に極力廻避せられざるを得ない。最近、或は新聞紙上に於て、事業會社の徹底的整理（と云つても、こゝには專ら減資減配を意味する）の必要が力說せられ、或は、銀行家達が共同動作によつて事業會社の減配等を慫慂しつゝあるが如きは、以上の如き裏面の外部に現はれたものに外ならぬ。

中にも、以上の如き彌縫が遂に破綻を曝露して、いま、世人の注意を最も惹きつゝあるは川崎造船所のそれであらう。此の會社は、早く大正九年直後に於て、一大整理を必要としてゐたにも拘らず、或は國際汽船、川崎汽船等のカラクリ等に由り帳簿をゴマ化し、或は所有財產其他の評價增其他の方法に由り、或は積立金の喰潰に由り、自他を欺きつゝ、大正十二年までは年一割五分の配當を、最近破綻の直前迄も年一割の配當をやつて來たのである。それが、一度び、その內容の曝露せられ、十五銀行との腐緣が絕たれるや、職工の賃銀を支拂ふにも差支へると云ふ窮狀であつて、いよ／＼之を整理しようと云ふには實に左の如き荒療治を必要（それとても未だ徹底的ではない）とするの始末である。（五月卅一日東京日々所載）

一、公稱資本金九千萬圓（拂込六千九百七十五萬圓）を四千五百萬圓に半減す

一、積立金約三千七百萬圓の全部を潰して缺損補塡に充てること、

一、株主配當は當分無配當とすること。

一、社債支拂手形其他債務合計一億二千七百萬圓は左の如く處置す。

(イ)三千萬圓は預金部より融通す。

(ロ)七千萬圓は川崎造船の優先株に振替ふ。

(ハ)二千七百萬圓は積立金の一部を振向けるなりして處理する。

これが、昨日までも、堂々と年一割(即ち約七百萬圓)の利益配當を株主に行ひ、約二十一萬圓の重役賞與を出して、「大丈夫」でござると納り返つてゐた川崎造船の末路であらうとは、餘りに、その表面と内面との差異の甚しいのに誰しも驚かざるを得まい。實に、いま、我が一二流事業會社にして、表面上少からぬ利益を計上し、株主配當をなしつゝあるが、しかし、その内面はこの川崎造船に劣らぬ危い橋を渡りつゝあるものが少くないのである。しかも、之を徹底的に整理しようと云ふには、鈴木や川崎造船に劣らぬ大波紋を財界に與へることを覺悟せなくてはならぬ。かくて、我が經濟の「中興」に志す限り、斯様な必要な整理は有耶無耶に終らざるを得ない。慶喜將軍が永嘆した通り、「…新規に家を立てれば立派なものが出來る、修繕では迚も出來ない……」ことを痛感せしめられるのだ。「病已に膏肓に入る」を叫ばざるを得ないのだ。

而して、川崎造船所に對する預金部の融資事件は、要するに、已に腐り切つてゐる家を修繕せんとせば、後から〱ボロが出る止め度なき事實に直面して、「國防事業」の名を藉り之をいゝ加減の所にて打ち切らんとする一努力と見て、最もよく、此間の消息を伺ひ得るであらう。思ふに、この事實が、三土新藏相をして、一度びは預金部の融資を不都合だとして拒否せしめながら、遂に、この外に仕方なしと云ふ口實の下に、再び、預金部の融資を必要視せしむるに至つた根因であらう。(六・一二記)

現政局に對する無産階級的批判

最近政局の觀察

青野季吉

政權の移動について

若槻内閣はおよそ三年間、日本の政權を掌握してゐた。その間に何を爲したらう。積極的なことは、ほとんどやらないで、その場限りの彌縫で、お茶を濁してゐたと言つてよいであらう。この事は同時にまた若槻内閣の政策が、單調な反動政策の連續であつたことを意味する。かくして世の謂ゆる政局の沈滯が、極度に押し進められた。

ブルジョアジーの「政局打開」の法則は、若槻内閣をそのまゝではおけなくなつた。そのことは若槻内閣も自覺してゐた。第五十二議會以前に既に釀造された憲本接近の空氣は、若槻内閣のその自覺の初段的な現れであり、かねて政友本黨側でのその知覺の現はれでもあつた。

若槻内閣が第五十二議會へ提出した震災手形損失補償を名とした二億七千萬圓の國庫支出も、その運命的政策たる彌縫の一連環にすぎなかつた。財界の動搖を防ぐと揚言しながら、實は一特殊銀行と一政商の救濟を目的としたものだが、それだけで「財界の動搖」を防ぎ得るものではなかつた。

政權の移動は、いつ來るかも知れぬ。議會は無理で通過するとしても……である。そこで震災手形法案の騷ぎの最中に、憲政會と政友本黨の聯盟は成つたのである。

若槻内閣は第五十二議會で、一應は金融資本の勢力へ奉公した。即ち勞働者、農民の血の結晶である二億七千萬圓を、財界安定の包紙につゝんで獻上したからである。そして政友本黨も、その奉公に加はつた。

だが、それで政局の沈滯が破られたわけでなく、「財政の不安」が取除かれたわけではない。若槻内閣と政友本黨とが、政權の移動を目前

にして、此上金融資本に奉公して、その移動の行衛を確保する上には更に緊急勅令による二億圓の日銀損失補償の獻上物をしなければならなかつた。

こゝに到つて、政局は急轉し、直下したのである。

憲本聯盟と政友會とは、ブルジョア政治の内部において對立してゐる。その對立は、決して金融資本の勢力と、産業資本の勢力との對立と言つた性質のものでない。つまり政權を掌握して、いづれがヨリ多く金融資本の利益を代表し、いづれがヨリ確實に支配政黨となるかの對立である。

あせり出したのは政友會である。彼は左の手で若槻内閣の彌縫策を人爲的に暴露するがために、財界の不安を煽つた。そして右の手では内閣以外の内閣たる樞密院をつかんだのである。伊藤巳代治氏の背景に政友會があり、彼の樞密院に於ける怪辯が、政友會の舌をもつて爲されたことは、諸新聞紙の暴露がなくとも明白である。

若槻内閣と政友本黨との、政權移動の豫後政策は、物の見事に失敗した。そして田中大將を首班とする政友會内閣が、全國的パニックの鳴動の中に、成立したのである。

田中内閣の大藏大臣高橋是清氏は、五億圓を金融資本に獻上することによつて、ともかく『財界を安定』させた。これが議せられた臨時議會に於て、政友會と對立してゐる憲本聯盟は、默々としてそれを認めた。

かくて政權の移動は、國民——無産大衆——に何を結果したか？眼光の變つた劇的光景と、その觀覽料としての七億圓の血税であつたのだ。なるほど舞臺に變化はあつた。政權は一方の手から、他方の手へ呼吸もつけぬほどのキャッカケで移動した。が、それはそれだけである。七億圓の金融資本への獻上金が、その間にごまかされてしまつたのである。

無産大衆は、政權移動の舞臺に現はるる光景で、惑眩されてはならない。それが結局、何に結果するかを見極めなければならぬ。しかもそれは、決して複雜なものではない。無産大衆の利益といふ一點から眺める時、簡單明瞭なものである。

田中内閣の武斷政策

田中内閣の成立が、すでに『陰謀』にもとづいてゐると、ブルジョアジーの新聞紙さへ論じてゐる。それが『陰謀』であるかないかはしばらく問はないとして、黨派的に對立する憲本聯盟が、多數を擁しながら無力の團塊と化しつゝある事實が、もし『陰謀』があつたとすれば、それを可能にしたものである。

かくして最初から、相手を呑んでかゝつてゐる田中内閣は、五億圓の支出を難なく承認させて、金融資本への殊勳を立て、その基礎を據した。彼の武斷政策は、この間に漸く體を爲しつゝあつた。

彼は先づ空前の、地方官の大更迭を斷行した。この武斷政治の由つて來るところは、極く見易い。今や政黨の離合が一先づ段落がついて政友會は政權を掌中にしてゐるこの千載一遇の機會に、平坦久明の地盤を獲得しなければならない。このことはまた近づきつゝある第一回の普通選擧によつて複雜にされてゐる。彼の地方官大更迭の武斷政治

は、彼にあつては必然の命令にしたがつたものでもある。

同時に彼はまた對支政策の轉化へと進出した。『幣原式中立』から、『田中式干涉』へと、對支政策は轉化し、『財界の不安』の漸く去つた後、その武斷政治の誇りを見せて、支那出兵を敢てした。それは何の爲めであるか？　これも決して觀てとる可く困難な仕事ではない。國民革命をして、眞の國民革命たらしめないやうに『導く』ことが、日本のブルジョアジー（就中金融資本家）をも含めて各國のブルジョアジーのこれまでの對支政策の內實であつたが、いまや國民革命にたいする彼等の干涉的『指導』は、第一段の仕事を終つて――蔣介石と共產黨との切離しに於て――正に第二段の仕事へと入つた。即ち國民革命運動の結果をして、彼等の直接の利益へと導き來ることである。蔣介石軍と張作霖軍との交戰の舞臺は、正に彼等の干涉的『指導』の好舞臺であり、それは出兵をもつて最も確實にされる。この際の中立は各國のブルジョアジーの利益の對立が許さず、國內金融資本の利益が許さない。田中內閣が出兵でかち得るものは、五億圓の獻上に加へての金融資本の奉仕であり、その結果たる信認である。出兵による國民の負擔や、支那の無產大衆への直接の壓迫の如きは、田中內閣の武斷政治の前にあつては、痴人の譫言である。

田中內閣の武斷政治が帝都の警察權の末梢神經にまで及んでゐることは、極く近頃のことに屬する。彼はいまや無人の境を行くが如くその武斷網をひろげてゐるかに見える。

勞働階級の運動にたいする田中內閣の態度は、何より先づ一切の共產主義文獻を葬り去らんと意圖するが如き、最近の發賣禁止振りに現はれてゐる。原司法大臣は、思想問題に關聯する司法事務の改善を求め、勞働運動者、社會主義思想人の個人の傾向、その行動の變化を平素から研究すべきことを、司法官に要求してゐる。一見文化的である。公明にも見える。だが、その研究が何に役立つかを規定するものは、一司法大臣原氏の『人格と識見』ではない。田中內閣の武斷政治である。

かくして田中內閣は、一種の革命的な內閣である。それは最早や、消極的な反動政策に始終する內閣ではなくて、積極的な反動政策、軍國政策を高らかに掲げた內閣である。この內閣が、昭和政治の劈頭に現はれたことは、決して偶然ではない。いまや日本政治も、イギリスに見たごとき自由黨時代を飛躍して、保守勞働對立の時代へと、轉入の第一歩を踏み出したかに見える。

田中內閣の成立と、その武斷的政策にたいするブルジョアジーの承認とは、明らかに日本のブルジョアジーが、政治的に、プロレタリアートに挑戰したことを意味する。日本のプロレタリアートは、田中內閣の成立とその政策とを、絕對に、ブルジョア政局の一變態と見てはならぬ。そして假りにも、他のブルジョア政黨の黨派的對立のゆゑにこの變態が消失するものと考へてはならぬ。

立憲民政黨の正體

その長き無爲生活の後、金融資本の勢力に向つて、四億の贈物をしやうとして、もろくも足をさらはれた憲政會は、動揺常なき政友本黨と合同して、名も『立憲民政黨』とつけて、新粧をこらして現はれた。

そして若槻、床次の陳腐を排して、『清新味』を具へた濱口氏を總裁として、謂ゆる陣容を整へたのである。

彼はまたその新裝のつゝむまゝ自由主義的進步的の政綱をもつてしやうとしてゐる。昨日は、反動政治によつて『民心の暢達』を拘束し、金融寡頭政治への奉公に汲々としてゐながら、今日は、政治の『更始一新』を吹聽し、自由主義、進步主義を揭げて、民心をつながんことにこれつとめてゐる。

こと茲に及んだ事情は、一面では政友會との對立關係の故であり、他面では近づきつゝある普通選擧の故である。政友會は立憲民政黨との對立、對普通選擧の問題の解決策として、政權を利用して、地方官の大更迭を行つた。これにたいして立憲民政黨は、自由主義的、進步的政綱を揭げて、民衆を率ゐて當らうとする。

これが若し筋書通りに進むとすれば、民衆――無產大衆――はどうなるであらう。政友會と立憲民政黨との政權の爭奪に利用される結果となるのは、明らかである。恰かも往年の護憲三派の運動の結果と同じである。民衆はこれを忘れてはならぬし、また忘れないであらう。

立憲民政黨が、自由主義、進步主義の政綱を揭げるのは、民衆をあざむからうと意識してのことで無いであらう。だが、問題は、彼がそれを意識してゐるや否やにあるのではない。彼等が一度び政權を掌握した曉、その約束を果さうとするか、果さうとしても果し得るか、にかゝつてゐる。即ち言葉をかへて言へば、彼等の自由主義、進步主義が實現され得る社會根據をもつたものであるか、にかゝつてゐる。民衆を率ゐる上に、その政綱を揭げることは、彼等の智慧で出來ることだ。が、その政綱の約束を果すことは彼等の智慧だけでは出來ない。

新粧をこらして現はれた憲本聯盟が、金融寡頭政治への奉仕を、舊粧とともに洗ひ落したと思つたら間違ひである。ブルジョアジーの政論家德富氏でさへ、仙石氏を通じて背後に巖の如くひかへた勢力を示唆して、新政黨の將來のために、憂ひてゐる。尤な次第である。立憲民政黨が、自由主義、進步主義によつて民衆を率ゐやうとするのは、實にこの背後の巖の如き勢力へ、もつとも有効に、もつとも『時世に合つた形で』奉仕せんとするものである。そしてこの實證は、立憲民政黨が一度び政權を掌握するや、忽ち前面に現はれて來るであらう。その時、民衆はくいても遲いのである。

だが、立憲民政黨が、新粧として自由主義進步主義を選んだ、乃至は、選ばざるを得なかつたことは、無產者大衆にとつてよき武器を敵から與へられたことになる。立憲民政黨が、政權にありついた曉に、彼等にその政綱の實施、約束の履行を強要――ではなくて當然の要求だが――することは、彼の現實を暴露する所以であり、彼の崩壞を早める所以である。

たゞこゝに注意しておかなければならぬ一事がある。これまでも政府の爲すところを監視せよとか、その約束履行を要求せよとか言はれて來たが、それが常に中空に放たれる叫び聲にすぎなかつた。と言ふのは、それを監視し、それを強要する主體がなかつたからであり、それが實勢力を具へた運動とならなかつたからである。それであればこそまた、既成政黨は盛んに不渡手形を發行したのでもある。この監視の強要を有効にするためには、無產大衆はその主體を形成し、乃至

はそれに結びつかなければならぬ。しかも現に我國には、無產階級の階級的政治行動の中心が形成されてゐる。それはまだ實勢力としては微弱なものであるが、無產大衆のそれへの結合によつて、どれほどまでも有力なものたり得ることは、二に二を加へて四となるほど明らかな事實である。

立憲民政黨こそ、今日のブルジョアジーの煩悶の生んだ畸形兒である。彼は民衆の友の容貌をもち、ブルジョアジーの代理人たる四肢をもつて生れて來た。無產者大衆が、彼の容貌につられるか、それとも彼の四肢が無產者大衆によつて縛されるか——それが見物である。

濱口氏は聲を大にして言ふ。吾人は他日廟堂に立つて、國民への約束を守らねばならぬと。しかもその濱口氏の聲音には、多少我々の耳に響くものがある。それだけ我々はこの約束の約束を忘却してはならない。また忘却しないであらう。

無產政黨の對策

最近の政治的現象にたいして、三つの『無產政黨』は、いかなる態度、對策をとつてゐるであらうか。

『立憲民政黨』は、決して無產階級政黨を標榜するものでない。廣汎な、雜駁な民衆の政黨として立つて居るものであり、つねに憲政の常道を信奉し、議會的改良主義を指導理論としてゐる政黨である。したがつて彼の最近の政局にたいする態度も、それによつて規定されてゐる。彼はひたすら政府の反省を求め、その善意的改良を求める。『財界の不安』についても、それで押し通して來た。この限りに於て、彼とブルジョア政黨と選ぶところがないと言つてよい。事實、彼と革新黨との合同さへ喧傳されてゐる。が、彼の信頼が、政權把持者にあり、彼の活動中心が議會に限られて居り、彼の双脚が無產者の階級的組織の外にある限り、彼は結局において、ブルジョアジーの政黨の道伴以外の役目を演じ得ないであらう。最近の政局においても、彼は明らかにその態度を示したのである。

日本勞働農民黨は如何。彼は七億の國庫支出を、資本家の負擔とせよと要求した。この要求は正しいものであり、無產階級としては當然提出すべきものである。また彼は立憲民政黨の階級的性質をも正しく究明暴露してゐる。だが、その個々の要求でなしに、彼の政治的活動を一貫して觀察すると、たとへば對議會策の如き、動搖逡巡の跡をたどることが出來る。

然らば勞働農民黨はどうであらう。彼は決して、動搖逡巡を示さない。その要求も暴露も、さらに無產階級的認識に立つてゐる。しかし——しかしと言はざるを得ないのは遺憾だが——彼は、その運動を大衆の間に組織して、その要求と暴露とを有力なものたらしめることに於いて、缺くるところがあると言へる。

今日、無產政黨の存在と運動とは、まだ直接に政局に働きかける力を持つてゐない。ブルジョアジーの政黨が、無產政黨に關心を持ち、その政治的要求に留意するのは、漠然たる階級的恐怖からである。無產政黨が眞に階級的勢力を具體して、政局に積極的に働きかけ得るためには、大衆の政治的組織について、ヨリ實際的な見地をとる必要があると、私は考へる。(六・一〇)

民政黨、革新黨出現に對する批判

麻生久

一

最近日本の政界は一大轉換期に遭遇してゐる。之れが特筆すべき變化は無產政黨の出現と既成政黨內に惹起されつゝある一大分解作用とである。若槻內閣の沒落と政友會內閣の成立とは、既成政黨內に釀成されつゝあつた分解作用の氣運を促進して、一方憲政會政友本黨の合同の下に立憲民政黨を出現せしむると共に、舊革新倶樂部の殘黨をして、自由主義革新黨を組織せしむるに至つた。

從來、既成政黨の離合集散は、政權の移動を中心として行はれ來つたのであつて、何等其內に本質的な主義政策の爭ひを發見するを得なかつたは勿論である。而して今回の分解作用の中にも亦、從來のそれと何等異なるなき政權中心の離合集散が行はれた事は勿論である。

例へば政友本黨が名目上憲政會と合同して立憲民政黨を組織せる如きは、全く、政權が自己の手中に來らざりし結果であつて、政權に見はなされたる本黨が其獨立性を失墜して、遂に憲政會に併合さるゝに至つたのは、如何に如實に、從來の既成政黨の離合集散が政權のみを中心にして行はれ來つたかの最高適例である。而して今日政友會に入黨しつゝある幾多の代議士が政友會の主義政策に共鳴せるに非ずして政權を把握するに至つた政友會、換言すれば政權そのものに入黨しつゝあるは云ふだけ野暮な話しと云はざるを得ない。今日政友會は政權を得て其黨員を增加し傲然たる態度を持し、政友本黨は完全なる沒落の道を辿つて憲政會に併合せらるゝに至つたけれ共、此天と地との運命の分岐點は毫も合理的推移に依るものではなくして、西園寺老人の頭のふり方一つに依つたものである。若し、西園寺老人の頭が政友本黨に向つて振られたならば、本黨と政友會とは其地位を顚倒して、政友會が沒落の過程を辿るに至つたのは明かである。

二

若し今回の既成政黨の離合集散が、單に政權の爭奪を中心とする事にのみ止まるならば、それは毫も政界に於ける一大轉換を意味すると云ふ事は出來ない。併しながら今回の離合集散は、其離合集散を一個の機緣として既成政黨內部に一個の思想的變革の行はれつゝある事を

如實に物語るものである。私がこゝに指摘する既成政黨間に於ける一大轉換と稱するは、要するに、今回の政權の移動に依る分解作用を機緣として行はれ始めた、既成政黨間に於ける思想的變革と云ふのである。新らしく成立せる立憲民政黨と自由主義革新黨とは、その黨名それ自身が物語る如く、從來の既成政黨の安全唯一のブルジョア的立場を一步踏み越えて、黨それ自體を若干無產民衆の上に置かんとするものである。勿論、此看板の塗り代へが無產階級それ自體より批判する場合一個のゴマ化したるは論がない。併しながらそのゴマ化したると否たるとを問はず、看板を塗り代へて、一步民衆に接近し、其民衆の欲するところをとつて其思想的立場とし、其政綱となすに至つた事に對して否みがたきところである。

我國の政黨は其發達の過程に於て、先づ第一步として、藩閥の官僚的權力を倒して、立憲政治換言すれば政黨政治それ自體を確立するための戰ひがなされた。而して今や漸く純然たる有產階級を代辯する政黨政治の確立を見るに至つて、早くも無產階級の擡頭に遭遇して更に新たなる一步を踏み出さんとしつゝあるのである。

從來、既成政黨は政友會と稱し憲政會と稱し政友本黨と稱するも其間毫も思想的立場を異にするなく、主義政策を異にするところはなかつた。併しながら、今回立憲民政黨及び自由主義革新黨の成立に依つて、既成政黨内に於ける思想的立場は漸次に其相異を明確ならしめて、政友會が保守主義的色彩を明確にせるに對し、民政黨革新黨が自由主義的色彩を明確ならしむるに至つた。

勿論、今日の民政黨、革新黨の成立及び政友會との對立を以て、直ちに保守主義と自由主義との對立を完了したるものとは云ふを得ない。革新黨はしばらく措き、今日民政黨に加はれるものの中には、眞に思想的に自由主義を理解し共鳴するに非ずして、從來の無意味なる朋黨的對立の行きがゝり上此黨派に屬する者の多く存在するを見るのである。而して斯くの如きは政友會に於ても亦同然である。政友會中の少壯分子中には政友會の保守主義的傾向をよろこばざるも從來の行きがゝり上、今日尙ほ黨内に在るもの少なからざるを否む事は出來ない。從つて、今後或ひは政變を機緣とし、或ひは政策の遂行をなすにあたつて、兩黨間に相交錯せる關係を生じ、兩黨間に於ける離合集散は長く繼續せられて幾多の變轉が行はれ行くは必然である。

併しながら其何れにせよ、我國の政界は、從來の如き無意味なる政權の移動のみを中心とせるブルジョアの朋黨的對立より、一步を踏み出して、少なくとも政黨對立の上に思想的根據を求め來り、主義政策を以て爭はんとする曙光を見出し來つた事は爭ひがたき事實である。私が最近に於ける日本の政界が一大轉換期に立てるを指摘し、民政黨革新黨出現の意義を云爲するは此事實を指して云ふのである。

三

然からば既成政黨の斯くの如き變化、政界の斯くの如き轉換は如何なる原因に依つて行はるゝに至つたのであるか。普通選擧の實施、無產政黨の出現、換言すれば無產階級勢力の政治的、社會的擡頭が其根本的原因である事は何人も否定し得ざるところである。

從來日本の政治は支配階級の獨裁政治であつた。封建的殘物たる藩

閥官僚と、有産階級の代辨たる既成政黨とは長き闘爭の後、最近に至つて藩閥官僚の勢力は漸時に驅逐せられ、議會を中心とせる既成政黨は有産階級を代表して其獨裁政治を行ふに至つた。併しながら無産階級勢力の擡頭は長く有産階級的獨裁政治を續くるを得ざらしめて、普通選擧の實施は、從來政治的權力の埒外に除かれた無産階級をして、兎も角も、合法的にも政治的權力に侵入する窓口を開いたのである。玆に於て、今後の政治は、合法的立場より見るも明かに階級的對立の闘爭場と化し來つたのである。

斯くの如き形勢が既成政黨に作用し來る時其一半が何等かの立場を以て無産階級の勢力を獲得するために、若干の看板を塗り代へて其中に侵入し來るべきは理の當然である。從來既成政黨中、憲政會が主として都會の商工階級を地盤とし、政友會が地方の地主階級を地盤とし來れる關係上、無産階級の擡頭と無産政黨の出現に出會して、政友會が保守主義の立場をとり憲政會が自由主義的立場をとるに至つた事は極めて必然的傾向の現はれと見ざるを得ない。

たゞ世界的に最後に近づける帝國主義的資本主義が、如何に後進國の日本とは云へ、其社會的事情が幾何自由主義の發達を許すかは極めて疑問とするところであるけれ共、兎に角今日漸く普通選擧の實施を見、無産政黨の出現を見つゝある日本に於ては、兎も角も、政治界は一應、保守、自由、無産の政治的對立を生まんとする傾向を示しつゝあるのである。

急速度に促進されつゝある資本の集中

大正九年の後半以來不景氣に向へる日本の經濟界は、漸次に其度を加へ、昨年より今年に至つては加速度を以て恐慌のどん底に突き進みつゝあるを否みがたい。昨年末より本年に至つては、小中資本家の沒落は著しい現象であつて、工場の倒るゝもの銀行の破綻するもの數ふるにいとまなく、最近に至つて遂に此傾向は一大爆發を遂げて、我國の經濟界は未曾有の大混亂を呈するに至つた。

而して、我々が此經濟界の大破綻と大混亂とを通じて觀守し得るものは、急速度を以て行はれつゝある資本の集中である。鈴木を倒壞せしめて、外國貿易を獨占しつゝあるものは三井であつて、日本銀行は、百萬圓以下の銀行の存在を許さざる如き方針を以て進むと噂さゝれてゐる。

此恐慌の襲來の裡に行はれつゝある資本家階級の猛烈なる生存闘爭は、大資本が小資本を壓倒し、撃破して、日本の一切の資本と事業とを少數大資本家の手に集中せんとしつゝある傾向であつて、今回の經濟界の混亂は此傾向に油を注いで、其速度を驚くばかり急激ならしめつゝある事である。

而も今日財界の大混亂に際して政府がとりつゝある態度は、毫も無産階級を考慮せざる露骨なる大資本家擁護であつて、政治が今日の如く明かに露骨に資本主義との聯結を物語る事はない。九億圓に近かき金が殆んど無條件に銀行破綻の救濟に振り向けられつゝあるばかりではない。一川崎工場を救濟するために、無産階級の貯畜による預金部の金を充當せしめんと策しつゝある如き、殆んど論外と云はざるを得ない。

これを要するに、今回の財界大混亂は、日本の政治をして金融寡頭政治に向つて急速に押し進むる一大機會を與へつゝある事を否みがたいであらう。

今日、社會民主黨、立憲民政黨、自由主義革新黨は大體に於て自由主義的立場をとつて將來の政治を打開せんと試みつゝあるのであるが、行き詰まりを生じつゝある、日本の經濟界が、斯くの如き帝國主義の最後の階段へとばく進しつゝある時、果して今後、自由主義的立場が伸張せらるゝかは大なる疑問と云はざるを得ないであらう。

普通選擧のための民政黨

——羊頭狗肉のその政綱——

三輪壽壯

一

憲政會と政友本黨は、憲本聯盟、新黨倶樂部等の過程を經て立憲民政黨として合同した。そして彼等は『民政』といふ黨名——それは封建勢力に對する氣兼ねから『立憲』の文字でボヤ化してゐるが——にも現はれてゐるやうに、民衆煽動家として名ある永井柳太郎、中野正剛の諸氏の手によるといふ、しかも羊頭狗肉の創立趣旨書及び政綱を今や盛んに振り廻し、『廣く公衆に訴へ新興勢力を糾合せん』(趣旨書)がために、民衆を煽動してゐる。だが民衆は彼等の煽動を信ずべく餘りに過去に於いて裏切られてゐる。彼等の誘ひの笛には最早や躍らぬ。民衆は民政黨に於いて何等の沸々たる醱酵も、そよぐ涼風も見ない。

民衆の見出す凡ては單に憲本兩黨の普選のための新裝と表看板に過ぎない。筆者はこゝに民衆に代つて、彼等の煽動の辭に答へるであらう。

二

民政黨の政綱は次の如く語る。

『一、國民の總意を帝國議會に反映し、天皇統治の下議會中心政治を徹底せしむべし。

『國家の整調に由りて生産を旺盛にし、分配を公正にし、社會不安の禍根を芟除すべし。

『國際正義を國交の上に貫徹し、人種平等資源公開の原則を擴充すべ

し」(以下二項は舊來の政綱と同一なる故に省く)

第一大は議會中心主義の要求であり、政治上のブルジョア民主主義の主張である。第二項を創立趣旨書に參照すればからである。『立憲民政黨は經濟、金融、產業、資源を國家の意志によりて整調し自由競爭の能率を善用して社會公衆の福利に合致せしめんことを要求する。整調せずして干渉し、自立せずして依賴するは政治經濟上の通弊である』即ちこれによつてこれを見れば、獨占に反對するところの完全ではないが自由競爭主義の要求である。第三項は平和主義と國際協調主義の要求である。

この政綱を、單にその表現に於いて、文字に於いて見るときに、それは一貫して自由主義的ブルジョアの要求である。彼等は民衆が封建勢力に對抗して『ブルジョア民主主義』の獲得に勢意を有することを看破し、この民衆を釣らんがために、心にもなき『進歩』の假面をかぶり、意識的にブルジョア民主主義要求の旗を立てたのである。厚かましくも彼等は彼等の甘く見る民衆を釣らんが爲此の看板を麗々しく揭げたのである。けれども、人は如何にやらうとしても――彼等に於いては、やらうとする意志だにないのではあるが――そのやり得ることはなんであらうとそれはその時代、その環境を飛び越すことは出來ない。人は歷史の命ずるまゝに、社會の發達段階――資本主義の現段階――の範圍內に於いてのみ行爲することが可能なのである。

資本主義の現段階は、ブルジョアから民主主義獲得の使命を明かに剝奪してゐる。かくて彼等の企圖はあはれにも羊頭狗肉としての效果すら收め得まい。

三

資本主義には二つの時代がある。一は自由資本主義時代であり、他は獨占資本主義時代である。自由資本主義は資本主義の成長期であり、ブルジョアが封建勢力に對して革命的であり、民主主義の爲に戰ひ、政治上には自由主義を採用する。經濟上では產業資本が巾をきかせ自由競爭を原則として主として消費貨物の生產を行ひ、貿易は消費貨物の輸出であつて、從つて國際關係は概して平和主義である。獨占資本主義は所謂帝國主義である。ブルジョアは反動的となつて彈壓政治を行ひ、經濟上では金融資本主義が支配し獨占が行はれ、國家資本主義的トラストの形成へと進み生產は生產手段貨物に變じ、貿易は資本の輸出であつて、國際關係は市場、資源、弱小民族地、輸出資本擁護等のための戰爭時代である。獨占資本主義は、資本主義の最高發展段階であると同時に內國階級對立の尖銳化、國際的には帝國主義戰爭、被壓迫民族の擡頭等によつて、資本主義自身の沒落期である。

現在世界の資本主義は帝國主義時代にある。日本の資本主義も、また世界帝國主義の一環を形成すると共に帝國主義の諸特質を著しくして來たことは何といつても否み得ない。

見よ！貴族、軍閥、官僚、地主の封建勢力と協同して反動政治が行はれてゐるではないか。九億圓を民衆に負擔せしめる露骨な金融寡頭政治が橫行してゐるではないか。民衆の言論出版團結の權利は明々白々と否認され、蹂躙されてゐるではないか。また獨占に於てそのあらはれを見ることが出來る。そこには日本銀行を首腦とする東京銀行

シンジケート（正金、台灣、朝鮮、興業、第一、十五、第三、三井、安田、川崎、第百、三菱の諸銀行）大阪銀行シンジケート（住友、山口、三十四、加島、鴻池等）等よりなる金融資本團があり、各銀行を中心とする三井、三菱、古河、住友、安田、大倉のトラストがあり、また重輕工業のカルテルがある。民政黨それ自體が東京海上、明治火災、三菱海上、三菱鑛業、三菱製鐵、三菱造船、三菱電機、三菱内燃機、日本窒素、三菱製紙、旭ガラス、明治製糖、キリンビール、三菱倉庫、三菱商事等々を三菱銀行によつて主宰する三菱金融資本閥に依據する一個の政黨にすぎないではないか。太平洋を中心とする英米帝國主義との角逐は如何？ 對支出兵にその露骨なるあらはれを示す對支干渉は何を物語るか。かゝる時代に於て民主主義のための闘爭の使命はもはやブルジョアのものではないのみならず彼等は逆に民主主義を剝奪することに狂奔する。

ブルジョアが自由主義の選手として、民主主義のために闘はんと欲し闘ひまた闘ひ得るのは自由資本主義時代に於てのみである。如何に冗語と詭詞によつてブルジョア政黨が『自由主義』と『民主主義』のために戰ふべきを誓つても。その誓ひの語は描ける餅に等しい。

かくも彼等の政綱政策は果して何を意味し如何に結果するであらうか。いふ所の『議會中心政治』は討論場として議會、執行委員會としての政府を有する金融を中心政治となり、産業の『國家統制』は文字通り、國家資本主義トラストとなり、『國際正義』は武力の正義に『人種平等』は弱小民族の抑壓『資源公開』は資源の獨占に赴く以外の方向はない。

四

此の見えすいた舞台裏の仕掛は兎も角として、舞台上の演出は、貸すに『自然さ』と『觀客の無智』を以てすれば、一通りは芝居らしいものになる。民政黨の煽動家は民衆の『無知』を前提としてゐるのは勿論、更らにこの『自然さ』を日本には封建殘存勢力が強いといふこと、歐洲諸國に於いてブルジョア民主主義は、ブルジョアによつて獲得されたといふこと、民衆はデモクラシーを要求してゐるといふことを以てするらしい。そしてこれを裏づけるものは彼等の手による普選の制定であるらしい。しかしそこには果して、民衆を納得せしむるだけの自然さでもがあるであらうか。

吾國の民衆には既に歐洲諸國に於いてブルジョアによつて獲得されたる民主主義の政治的自由を有しない。農村には農奴制度そのまゝの小作制度が存在し、地主の土地所有權の前面には農民耕作權——勞働權——生存權も否定されてゐる。勞働者には罷工權も團結權も集會權もない。言論の自由も出版の自由も、更らに思想の自由さへも蹂躙されてゐる。

軍閥と貴族と地主と官僚は貴族院に、樞密院に、元老に、既成政黨にノサばつて、尙ほ甚だ大なる政治的勢力を有してゐる。眞にかゝる封建的政治勢力の下にある勞働者と農民と民衆は、デモクラシーを要求してゐる。それは事實である。しかしそのための闘爭をブルジョアがやり得るか。たゞそれだけが問題なのである。否！ 現在に於てはその闘爭の先頭隊は勞働者と農民であつて、ブルジョアではない。ブ

ルジョアは自由資本主義時代に於てはデモクラシー獲得の爲に鬪爭したし、またなし得たのであるが、獨占資本主義時代に於いては彼等は反動以外の何物でもない。この事實を民政黨の中堅なる憲政會と、彼等が民衆の『先驅』たるの唯一の證明となる普選法制定に見せしめよ。

普選制度の根據如何？　それは明かにブルジョアの封建勢力に對する鬪爭である。けれども更に彼等をしてこれをなさしめたるは民衆の成熟である。『普選は無産階級成熟の里程表である』（エンゲルス）。無産階級の階級的成熟と階級運動の發展が、無産階級を懷柔せんとする彼等をして普選實施をなさしめたのである。その普選法も既成勢力には多くの特典が、そして新興勢力には多くの陷穽が用意されてゐるものであることを忘れてはならぬ。しかも普選以上には彼等は民主主義のために戰ひ得ないのだ。清浦内閣との對戰に於いて民衆を釣れる好餌——『特權階級打破』を、一度朝に立つや一擲して顧みず、名のみの貴族院改革を行ひ、かへつて貴族院、軍閥と結び、最後に樞密院の官僚に挑戰さるゝや一戰をも交へ得ずして退却してゐる。この怯懦を見よ。しかも後進のために民主主義を用意しない乍も資本主義の衰頽期に足をふみ入れた日本資本主義は欺瞞の中に有ゆる民衆壓迫を行はねばならぬ。故に彼等は普通選擧を右手にして、民主主義を叫びながら、左手には治安維持法等の反動立法を行つたのである。

現代に於いて民主主義のために戰ふべき歴史的使命は、プロレタリアートのみ與へられてゐる。ブルジョアはたゞ反動への道を辿るべく運命づけられて居る。彼等は今日までにその正體を暴露し來つたし、今後は更に露骨に反動化するであらう。

五

以上に於いて吾人は羊頭の積りの民政黨の政綱が、羊頭にさへもなつてゐないことを、主として資本主義の發展の上から見た。

更らに民衆をあざむくべからざるは彼等のなした事實そのものである。民衆は憲政會が過去に於ける行動の中に斷じて民衆の友たり得ないことを見てゐる。デモクラシーを要求する民衆にとつては、彼等の反動立法の制定、社會科學研究の抑壓、貴族院改革の中止、研究會との野合、樞密院との決戰忌避等には、民衆への裏切り者たるを示し、且つ九億圓の民衆負擔法の提出或は協賛、及び三黨首妥協による解散回避等は、排撃すべき民衆の敵なるを確證して餘りある。

更らに憲政會と政友本黨が合同して『まだ立憲民政黨の如き率直に大膽に進歩的色彩を表徴したる大政黨はいまだ類例を見ない』（濱口總裁の創立大會に於ける演説）などと自負する『進歩』黨を作るのに、そこに民衆を納得せしめるに足る『自然さ』と『必然さ』を有しない。政友本黨は衆議院に於ける『研究會代理店』である。それは普選に對する最後までの反對者であり、清浦内閣の與黨であり、代表的な保守黨である。これが憲政會と合同したいといふことは、政權に一歩近づくために、また憲政と政友との對立鬪爭の中にその存立意義を失はんとする自己の壞滅を未然に防ぐための手段以外ではない。兩黨の合同は憲政會が政友會と政友本黨の對立を激成することによつて成功した政友本黨奪取である。しかして民政黨組織の全目的は來るべき普

選の總選擧に於いて新有權者——民衆、無產階級——を釣らんとする心ならざる新しがりである。見よ！既に創立大會に於いてさへ彼等の振り廻す趣旨書は裏切られてゐる。創立趣旨書は幹部公選を述べてから豪語してゐる——『立憲民政黨は內部の組織に於いて、役員公選の原則を確立し、役員は黨員の信賴をうけ責任を明白にして黨務を執行する斯くて立憲民政黨は政界積年の弊竇を打破し、黨員の總意により公明の發動に出づべき體系を完備する』と。また濱口總裁は『個人の自由と獨創とを抑壓することを以つて强力なる團體を組織する條件となすのは時代錯誤の見解であります、吾黨は內に君子の交をもつて互に切磋琢磨して外に一丸となりて敏活の行動に出でねばなりません。立黨の宣言に役員公選の原則を確立したのもこの精神の一端を發露したものと思ひます』かくも誇らしげに吹聽された役員公選——無產者團體では、文字通りに公明に公選されてゐる——はどうして行はれたか。依然として二三の幹部によつて投票は勿論、何等の方法も用ゐずに決定され、しかも兩派の間に幹事長、總務の爭奪戰さへ行はれた。民政黨も代議士のみの政黨であるのは勿論、而も依然として二三の幹部の私黨である。借問す。この役員公選の『羊頭』は店開きのその日までの廣告に過ぎなかつたのか。

趣旨書は『廣く公衆に訴へ新興勢力を糾合して新政黨を組織せんことを提唱する』と云つてゐる。代議士政黨なる彼等には『新興勢力の糾合』とは選擧に於ける『新有權者の投票の掻き集め』のことである。民政黨は來るべき總選擧のための政友反動內閣に對抗する憲政と政本の協同戰線である。打倒政友內閣の一點に共鳴するもので、[illegible]然らば協同戰線は破れるであらう。既往の總選擧も代議士の二分の一の入換へを行ふを常とした。來るべき總選擧は、更に大掛りの入換を結果するであらう。その時こそ代議士黨たるブルジョア各黨は一齊に而も簡單に離合集散するであらう。かくて比較的恒久性あるブルジョア政黨の分野がきまるであらう。もとより我等といへども政友會に對して民政黨が進步黨であり、またあるであらうことを否定するものではないが、自由主義、民本主義を振かざしても之を行ひ得ない現在の時代殊に彼等の環境を指摘することがより重大な問題なのである。我等は彼等の欺瞞策と飽くまで戰ふであらう。(六・一一)

ロシア藝術家の觀たる日本藝術その他

ヨーロッパ藝術に於ける浮世繪の意義

レニングラード美術大學教授
エヌ・プーニン

千八百七十年の頃、最初はイギリス人、次には佛蘭西人が或る一つの、一寸見ては詰らないやうな現象の目撃者となつた。然し此の現象は啻にヨーロッパ藝術の發達にばかりでなく、或る程度までは全ヨーロッパ思想の發達に於ても大なる役割を演ず可き運命を擔つてゐた。最初はロンドン博覽會に、其の三年後にはパリーに、始めて日本美術家の手に成つた浮世繪の版畫が多數陳列された。此等の版畫は初めから深い印象を與へ、直ちに美術批評家等の認める所となつて非常な賞讃を博した。此の時から全ヨーロッパに於て日本美術を讃美し賞揚することが始まつたのである。日本美術の勝利は完全な、そして異常なものであつた。各國の大使やその夫人達は互ひに競ふて、室内の裝飾と自己のコレクションを充たす爲めに日本の浮世繪、畫帖、畫暦、納札、繪本、茶器、有田燒や薩摩燒の花瓶、仁清の食器、乾山の陶器、立雨の漆器等を蒐集し始めた。部屋の壁には日本の織物や刺繍を懸け、其等の刺繍には紫色の帛に櫻花の枝を啣へた鶴が彌生の春を象どつて居た。

かうなると俄かにドイツ、フランス、アメリカ、イギリス等には、日本の古代を研究したところの專門學者が現はれた。千八百八十二年にルーブル美術館は金岡派の手に成つた懸軸を手に入れた。遂には多くの作家や美術家は、重苦しいヨーロッパのナチユラリズムから解放される何物かを求めやうとして、日本美術の精華に眼を向けたのである。エドモン、ジユーリ、ゴンクール兄弟、ゾラ、ヂアス、フオルツーニ、ウイストラア、カロリユス・ヂユラン、續いてモネー、ドガ、其他彼等の追隨者全部が、日本美術の逸品傑作の中に靈感と教訓とを攝

し始めたのであつた。勿論、此の日本藝術に對する最初の熱中はさまで永くは續かなかつた。餘りに縁遠く餘りに掛け離れた日本美術、それに偶然の機會で待ち來たされた日本美術は、たゞ、暗鬱で重苦しかつたヨーロッパのナチュラリズムの世界に一時の慰安と光明を與へたばかりで、淡い夢の如くヨーロッパ人の記憶に殘つた。然しながら日本美術家に對する注意は失はれずして、次ぎの十年間に於て、ヨーロッパの藝術文化は日本美術の影響を受けて漸次に變つて行つた事を看取することが出來る。

自分は本年初めて日本に來遊する事が出來たのであるが、來て見て驚嘆したのは、ヨーロッパ藝術の様式『近代派（モダーン）』の發生が、日本美術に負ふところの如何に多大であつたかと言ふことであつた。啻に線のリズムのみならず、對比、釣整と言ふ點も全然日本美術から採つたものである。現代に於いても尚ヨーロッパを支配して居るアスシムメッリイの原理は著しい程度まで日本から來たものである。然しヨーロッパは日本藝術の中に存在してゐるリズムと對比とを通俗化し誇張し毀損したに過ぎない。本來このアスシムメッリイの構成法は節度の感覺と趣味とを多分に必要とするものである。ところがヨーロッパには妙にこの節度の感がない。特にドイツの「近代派」に於てはその重厭さと誇張とが極度に達してゐたので、彼等が日本美術家の逸品に於ける特殊な美を殆んど理解し得なかつたのは當然である。

ロシアは他のヨーロッパ諸國に比較して、日本美術の影響を蒙ることが遙かに尠なかつた。ロシアの美術文献の中には日本美術に關する書籍が殆んどない。小さな雜誌や新聞の論文を勘定に入れないとすれば、ロシア語で書かれたものは、イゴール・グラーバリの小册子と、日本浮世繪に關する拙著のみであらう。ロシアの美術史家はドイツ、イギリス、フランスの本を利用し、其の中の若干がロシア語に譯されてゐるに過ぎない。それでも日本美術はロシアで大きな役割を演ずるだらうと思はれる。最近ロシアはヨーロッパ文化の直接影響から離れて藝術の多くの領域に於て古代の民族的傳統へ復歸した。そして此の古代ロシア美術は東方的要素に充ちたものである。勿論ロシアは一般に知れ渡つた原因によつて、日本美術の影響を曾つて受けなかつた。けれども昔より東邦がロシアに近接して居ると言ふ一事が、將來のロシア藝術家と日本美術家の藝術的接近の可能を雄辯に語つてゐる。また實際の事實が既に此の事を證明してゐる。ロシアの美術界には今日一つの運動が起つてゐるが、この運動はロシアの美術家を日本、支那、印度、波斯の文化との接近へ力強く呼んでゐる。現にロシアの美術界には所謂「支那風」の極彩色を取り入れてゐる一團の美術家がある。その中で過般日本に於けるロシア美術展に出品したブルーニは此の團體の最も天才的巨匠の一人と仰がれてゐる。

若しヨーロッパに取つて、日本美術が或る關係に於て過去のものであるとすれば、ロシアに取つては將來のものである。この關係に於て特に浮世繪の如きは、私の見る處では、最も顯著なる興味を持つ可きものである。私は今回東方への初旅に於て浮世繪の先覺者岩佐又兵衛

の自作を見る機會をもつた。其の印象は實に特殊なものであつた。色彩の深い節約的な含蓄、高雅な單純な線のリズム、偉大なるテクニックの自得、自由な構圖、形式の多樣性を傳へ得た能力——この等は當時の日本美術文化が西歐美術の最も偉大なる時代と比肩し得ることを證明するものである。又兵衞のかゝる雄渾な、單純な、そして記念碑的な藝術の後に、これを繼承した一派は其の價値が多少落ちてゐるが菱川師宣と奧村政信だけは大又兵衞と並び稱せられる事が出來る。

私は師宣の多くの作品に接する機會を持つた。彼の藝術の美は、彼が始めて畫家としての天分を市井の巷に及ぼして、詰らない身分の低い普通の人間を描いた所にある。彼は非凡なユーモアと輝かしい表現力とをもつて、日常生活の舞臺を描いてゐる。フイネローザは師宣の屏風繪の斷片を發行して居るが、それは銳敏な寫實的觀察と動きとに充ち滿ちた異常な行列である。若干のオランダ畫家を除いたら、何人にも師宣に見るが如き銳敏な實生活の感覺と、雄健な力強い快活さとを見ることは出來ない。彼はその手に落ちる限りの一切のものを描いた。女、歌人、朝鮮の騎士、尼、風景、酒宴、地方の歷史的事件、其他小說の插繪も描いて居る。此の寫實的藝術家の意義は、實生活の描寫に熱中してゐる現代に於て特に貴重である。

奧村政信は版畫手法の注意すべき完成者であつて、また最も純粹な浮世師であつた。彼の線には世界の偉大なる畫家のみに固有してゐるハーモニイが充ち滿ちてゐる。師宣以來勢力を持つた自然主義的色彩は政信に到つて理想主義的な熱情に變へられた。それは多少メランコリックな感傷的なものではあるが、然し常に美に充ちてゐる。其際政信は最近の或るクラシック巨匠の弱點と思はれてゐる外面的華麗を避けてゐる。

次期の浮世繪師の中、特別な注意に値ひすべきものは私の考へから言へば、鳥井一家である。其の中でも特に著しき畫家は此の種の浮世繪版畫を完成したところの淸信と淸倍とである。鳥井四世淸長に關して言へば、この後年の巨匠はまつたく特殊な手法の極意にまで達してゐる。浮世繪史上淸長は日本のラファエルと稱することが出來る。彼は私の考へる處に依れば、初めて繪畫の平面に完全な節度の感覺とアリストクラチックな節約とを取り入れて、日本の美術に新しい音樂的要素をもたらした巨人である。彼は多分或る程度までは土佐派の傳統を復活しながら、自分の描法に雄健さと記念碑的な調和と、幾多クラシック的な性質と高雅な表現性とを與へた。彼は集團を結合しつゝ、また集團の力を支へたり弱めたりしながら、深い純粹なリズムに充ちた美的形式の世界を創造した。初めて背景に手をつけた鈴木春信の跡を追ふて、淸長は自分の山水畫に本當の光線と空氣を取り入れた。隅田川の堤に於ける水を背景にして描かれた三人の女の姿態は、私の考へだと、日本美術史上に新しい頁を開いたものである。樣式の異常な純粹さと色彩の華麗さと深さには最早言ひ及ばなくとも、其の一般構圖上の關係は驚く可きものである。彼の藝術を支配してゐる動きの美——岸邊や帆や水に於ける風の舞ひは夕暮の明澄な莊嚴な、そして深

い歡喜の感じを起させる。風に撫でられてゐる人間の姿は動いて居り、其の緊張した姿勢と、其の優雅な表情、此の集團の背景に對する關係、その相互の連繫等は最も高級な美に充ちてゐる。

浮世繪派の中には私が特に個人的に好んで居る一人の畫家がある。それは鈴木春信である。彼は東錦繪(若しくは江戸繪ともいふ)の發明者であり、また特殊な優雅美の巨匠であつた。彼の版畫は萎れた花瓣のやうに青白く、一寸した息吹きにも堪へない程脆く弱々しく、そして云ひ知れぬ淑やかな美に充ちてゐる。從つて彼の藝術は秋の惱みとでも言はうか、靜かな憂愁の感じと混じた一種定かならぬ甘い哀愁の感じを呼び起すのである。人物の疲れ切つた鈍い黄色の中には、落葉の囁きと、秋の野原や霧に見る金色の透明さとを思ひ出させるやうな何ものかがある。草の莖のやうに細つそりとした、しなやかな肉體、キモノの袖を透かして見える細長い指を持つた手——それが冷めたい花を唇に持つて行つた時のやうな異様なショックを起させる。永久に愛すべき天才鈴木春信が、其の主なる人物を結晶したところの多様複雜な形式は實に驚くべきものである。水草のやうになだらかな長い線、楊柳の枝のやうにしなやかな線、廣く力强い表情の線——それは實に大膽な單純な、そして人を歡喜せしめるやうな運動と姿勢と線との、汲んでも盡きない寶庫である。此處に女は駈けッてゐる、梯子段を登つてゐる、脚を曲げて坐つてゐる、中には歌を書いてゐる女もある。或は笛を吹いてゐるもの、或は空想してゐるもの、各々其の狀況によつて自己の典麗さと自己の音樂美とを持つてゐる。その構圖は 此處で單純に廣い大きな集團にまで發展してゐるかと思ふと、彼處では優美に或る輕い細やかな輪廓の上に支へられつゝ、曉の青白い薔薇色の色彩を浴びてゐる。

歌麿を除いて日本の浮世繪師の中で、ヨーロッパの美術家の間に最もよく聞えてゐるのは鈴木春信である。ヨーロッパでは屢々春信を十五世紀の有名なイタリー畫家ボチシエリと比較してゐる。

然し最近ヨーロッパに於いて多大の名聲を博してゐるのは同じ浮世繪師で、しかも春信とはまつたく行き方の違つてゐる寫樂である。この非凡な巨匠は薄氣味の惡い火焰に包まれ、しかも其の焰の舌は、重苦しく惱める感興の深い哀愁のために眞黑にさへ見える。寫樂の先輩春章が俳優の顔から捥ぎ取らうとした假面は、寫樂の筆によつて恰も萎んで碎けたかのやうに最も深刻な惡夢と、最も慘酷な絶望との怪物的相貌を暴露してゐる。寫樂の筆に成つた多數の俳優の繪姿は、深い秋の夜のやうな、哀愁と退屈と憂鬱との一種異様な病的混合感を喚起する。然し東周齋寫樂の異名を持つた彼が晩年の浮世繪は、諧謔的な嘲弄と偉大な呪ひとに貫かれてゐて、その露骨な暴慢さに對しては何人も恐れを爲して傍へ飛び退くほどである。名匠としての寫樂はその暗い恍惚さに於いて恐ろしいほど非凡である。彼が性格描寫の力は怪奇的であり、彼が線のリズムは眼が廻るほどである。彼が並ならぬ大膽さと强情さをもつて、黒水晶の如き背景の上に投げてゐる點景への趣味は息苦しく且つ反語的である。そこには何等の傳統も有り得ない。それは或る透視狀態にある人の叫號であり、また嫌惡と侮蔑と傲

慢とのために戰慄してゐる人の發作である。寫樂はヨーロッパ的意味に於ける諧謔者ではなく、彼は一個の自由人である。職業などに構はず、また俳優ばかりでなく、何人をも自由に描寫し諷責することが出來たゞらう。彼の心には常に憤怒が燃え立つてゐた。世界をもつと完全なものとして見んと願ふ者の悲哀が叫ばれてゐた。

ヨーロッパに於ける寫樂の名聲が如何に擴がつてゐても、彼の役割はまだ未來に存する。若し比較を許すならば、日本のミケル・アンゼロとも言ふべき寫樂は、まだ〳〵ヨーロッパ大陸の上にその特殊な運命を持つであらう。

私に最も強烈な印象を與へた浮世繪の巨匠に就いては以上述べた通りである。私は茲に歌麿に就いては言はない。勿論彼が偉大なる藝術家であることは何人も疑ふことが出來ない。然しそれと同時に、歌麿は浮世繪の衰頽の根源である。素より彼の藝術は美しい、時としては全く驚くべきものがある。然しそこには最早日沒が感じられる。藝術的自然が感じられる。彼の製作に係る或る版畫の高雅なるにも拘らず中には餘りに藥味の勝つた、荷の重いものや、餘りに輕快典雅に過ぎたものがある。それに歌麿に就いてはヨーロッパでは餘りに多く書かれて居るので、今更私が茲に此の奇蹟的巨匠の記憶を忙しない言葉で攪亂する必要もないと思ふ。私はどちらかと言へば、彼の初期の作品を珍重する。

北齋に關して言へば、私はこの藝術家を全く好まない。彼が餘りに現實に即して世界を觀、絶對に有るがまゝの世界を作らうとする態度が氣に喰はない。藝術に於いては其樣にすることは出來ない。それは寧ろ過去の偉大なる傳統を亡ぼすところの虛僞の道である。

廣重は流石にこの事を理解してゐた。けれども彼は最早何事も爲すことが出來なかつた。別な時代が近づいて、趣味が惡化したからである。それでも兎に角廣重は偉大なる浮世繪の最後の巨匠であつた。苟も浮世繪の事を考へる場合、彼の事を忘れてはならぬ。けれども廣重は、師宣と政信とを黎明期とする偉大なる一日の黄昏である。藝術の偉大なる一日、我々はそれに接近したい、浮世繪が藝術に携はる凡ての人に知られるやうに、（完）

日本の演劇に關する一露人看客の所見

ロシア國立美術院委員
デ・アルキン

異邦人に取つて、日本の演劇の事を彼れ此れ言ふのは困難である。日本に於ては、舞臺藝術が民族のあらゆる生活、あらゆる傳統に堅く結び付いて居るので、すべての日本文化と切り離して其の演劇のみを檢覈することは不可能である。のみならず、極めて短時日の間この日出る國に滯在した自分――勿論その間にこの驚歎す可き歌舞伎藝術を細心に觀察するやうには努めたが――その自分に取つて、日本の演劇に就いての意見を述べる事は困難である。自分が此處に日本の舞臺藝術の意義に就いて二三の意見を發表するとすれば、それは單に、此の藝術が現今のロシアの演劇に取つて最も生々した、感動的な興味を示して居るが故である――つまり今日新ロシアの演劇改革者達の眼が、日本や日本の演劇に向けられてゐると言ふ事の爲めである。そこで私は本論文の中で發見されるだらうところの避け難い過誤を豫めお詫びして置いて、自分の印象の中から二三拔書きしやうと考へる。だから本論文は、歌舞伎座へ初めて足を入れた單なる一觀客としての、然かも日本語を解しない觀客としての印象に過ぎないものとして見て頂きたい

そこで私は最近觀たものから始めたいと考へる。最も著しい歌舞伎劇の特質は、その舞臺藝術が他のすべての藝術の樣式とは全然無關係な、獨自の藝術要素として、完全に獨立してゐる事である。現代ヨーロッパの演劇は此獨立性をとうの昔に失つて居り、とうの昔に文學の從屬物乃至藝術の他の分派――繪畫・音樂・文學などの合の子に變つて居る。現代ヨーロッパ劇の大部分は――藝術の獨立した分野でなくして、單に他の藝術に對して一種の補助的楷梯に過ぎない。本來舞臺藝術なるものは他の藝術と關係なく存在する事が出來、また、文學、繪畫、音樂の助力なくして、それ自身の固有の力に依つて培はれる藝術的エネルギーの巨大なる彈藥を內藏してゐる藝術であることを、歌舞伎劇はその偉大なる技巧によつて示してゐる。其の點では現代に於て歌舞伎劇は何よりも先づ世界的意義を有してゐる。即ち西歐諸國の舞臺藝術が著るしく衰微して居る現代に於いて、ひとり日本劇のみは舞

藝術が永く生命を保つべく、且つ他の藝術の光りを假らずして自己本來の火力に依つて燃え得る事を示してゐる。かるが故に歌舞伎劇に於ては日本語を解しない觀客までも劇動作の仲間入りをすることが出來るのである。歌舞伎劇はこの藝術の基礎となつてゐる演劇性の強烈な要素によつてすつかり包まれて居るからである。

歌舞伎劇は、詩や音樂や繪畫の材料となつて居るところの言葉・音響・色彩の外に、まだ演劇性と名付ける特種の藝術材料のあることを示してゐる。然るに、遺憾ながら固有の基礎を失つて文學や音樂の內容の上に命脈を保たざるを得なくなつた現代ヨーロッパ劇は、この演劇性を忘却してゐるのである。

若しも此の程度に於いて此等の獨立した基礎を持つて居る演劇で、他に何んなのが有るかと自分に訊ねるとすれば、先づ第一に歷史上の例をもつてお答へしやう。即ち伊太利のCommedia del Arte時代の劇は自身固有の火によつて燃えてゐた所の、やはり一個の藝術であつた。內に火を藏した古代希臘劇や羅馬の野天喜劇もこの例に數えることが出來る。歷史上の藝術から此處に引用出來る例がまだ若干ある。然しながら此れ等は悉ベて――遠い昔の頁(ページ)である。既に時代によつてめくられた頁であり、人類によつて讀み終へられた頁である。たゞ日本劇のみは現代に到るまで、その驚くべき生命に滿ちた力を保ちつづけ、純粹の形に於いて舞臺藝術を培育しつゞけて來たのである。

藝術史家や美學者が歌舞伎劇に關して口を開く時、彼等は特に好んで、代々繼承される歌舞伎劇の古い傳統にのみ留意し、その樣式や方法を革新したり變更したりすることを容易に許さない歌舞伎傳統の「保守的性質」を特に擧げてゐる。そしてそこから屢々「歌舞伎劇は死んだ演劇だ、これは過去の演劇だ、現代に於ては單に技巧的に繼承されてゐるだけだ」といふ結論が引き出される。けれども自分は藝術革新の最も深甚な味方であり、藝術上の有ゆる保守主義の敵であるにも拘らず、前述の意見には同意を表することが出來ない。自分が歌舞伎座の中に這入つて行つた時、また此の藝術が何んな力を以て觀客に働きかけたかを見、また觀客が(それも昔の人でなく、ラヂオや飛行機や相對性原理や其他有ゆる現世紀の奇蹟に馴らされた現代の觀客であり市民である)如何に舞臺面の動作や演技に反應するかを見た時に自分は次の一事を明瞭に理解したのである。それは、歌舞伎劇があらゆる其の固有の傳統の上に立ち、多くの脚本に死語があるにも拘らず歌舞伎劇は或る意味に於て最も現代的な劇であるといふことだ。が、自分の考へるが如く、歌舞伎劇は現代の觀客の心理と情緒に訴へる所のエレメントをまだ〱もつと强めなければならない――と言ふ事は現代、歌舞伎演技者達の目前に懸つてゐる最大の問題であらう。所がかゝるエレメントは歌舞伎劇に存するものであり、而も廣い範圍に亙つて存してゐる。肝要なことは、この保守的傳統の外皮を通して、而もその傳統を拒否しないで(といふのは傳統の中には技巧の力が籠められてあるから)歌舞伎藝術の中に此等現代性のエレメントを發見し深化することを理解しなければならない。現代の歌舞伎俳優の大部分は既に明らかに此うした傾向で活動して居るやうに思ふ。

と言つて、私は必らずしも歌舞伎劇が、型に嵌つた歴史的な脚本を斥けて、現代の世相を主題にした脚本を培養しなければならない、と言ふのではない。その本來の性質から歌舞伎劇に取つて、脚本や臺本に關する問題は、自分の想像に據れば、第二義的のものである。それよりは歌舞伎俳優の藝術を成し立てゝゐる心理的基礎が寧ろ遙かに重要である。そしてこの領域に於いて、歌舞伎劇は益々現代の觀客や現代人の心理に接近することが出來るだらうと思はれる。斯様に歌舞伎劇の前途には、その過去に於て然うであつたやうに洋々たる、生命に充ちた豐饒な未來が横はつてゐる。

また他面より見れば、歌舞伎劇は若い日本の演劇に取つて優れた學校の役を勤めてゐる。日本の國民劇と、ヨーロッパへの憧憬を持つた若い日本劇とは、全く異つた二つのもので、寧ろ仇敵でさへあるやうに思はれる。この複雑な問題に就いて茲には詳しく論述する餘裕を持たないが、たゞ自分はこの問題を聊か別な風に想像してゐることだけを言はふ。想ふに新日本劇はその將來の探究を歌舞伎劇の達成した技巧と經驗とに求め、その經驗を種々の形式に適用するだらうと思はれる。若い日本の築地小劇場と其の天才的指導者小山内さんに對して深甚の好意を持ちつゝ、同時にまたこの劇場は近い將來に於いて二つの種類の仕事へ進んで行くだらうと自分は敢へて言はうと思ふ。それは一方から言へば、劇動作に關する新形式の獨自的探求、また他方から言へば歌舞伎劇の達成せる技巧の應用と自得である。この意味に於いてこの日本の若い劇場の運命は、新ロシア劇場の現狀に甚だ近いものがある。而して我ロシアの前衛劇場は現在二つの方向に於いて闘つてゐる。それは一面には演劇の舊慣例と死滅しつゝある陳腐な形式とから解放されたいといふ希求、一面には動作表現の新様式及び舞臺技巧の新形式を發見しやうとする努力である。然しそれと同時に、新ロシア劇は現代の觀客にも多大の効果を有する最も高尚な達成と手法とを過去の遺産の中に探し出さうと努めてゐる。この點に於いて、ロシヤの若い劇場の視線は同様に矢張りこの雄々しい歌舞伎藝術に向けられてゐるのである。歌舞伎劇は今では既に新ロシヤ劇に多くのものを教へて居る。(例へばロシヤ劇壇の改革者であり、優れた舞臺監督であるメイエルホリドが自身の劇場で試みた「花道」に類するもの、俳優の登場に際しての音樂的伴奏等である。)

歌舞伎藝術の中、若いロシヤの劇場を特に惹き附けてゐる處のものは、既述の特質の外に、次のごとき一事である。即ち多數の個人的藝術意志を組織的に結合せしめて、唯一の藝術的意志を實現する俳優團の偉大なる集合、この歌舞伎藝術の集團的性質が若きロシヤ劇を魅惑した大きな力である。傳統の力、繼承の力、集團の力——これがその不斷の生命力を保證する歌舞伎藝術の著しい特質である。

然して此等の特質の正しい結果として——歌舞伎劇が驚く程、幾多の天才的俳優を生んだ事を認める。歌舞伎座はその集團的傳統的基礎の上に立つて居ると同時に、一面に於いて偉大なる個性の劇場、偉大なる俳優の劇場である。未だ曾つて日本のやうに舞臺藝術の偉大なる名人が此れ程輩出して居る國を唯の一つも擧げることは自分には出來

ないやうに思はれる。此れは歌舞伎座がその規則と世襲的傳統とによつて藝術的人格を壓迫しないのみならず、反對に、各俳優に對して自分の才能を成るべく廣く延ばす可能を許してゐる事實を示すものである。歌舞伎座――これは集團の劇場であると同時に、獨自の個性を持ち、藝術的相貌の明瞭（はつきり）した輪郭を有する各俳優達の劇場である。この相貌は多くの場合先代の相貌と見てもよい、六代目菊五郎は多くの場合單に五代目菊五郎の繼承であると言つてもよい。然しこの繼承したものの上に、代々の菊五郎は自分が先代の藝術の中に導き入れた新しいものを異常な力をもつて表現して行くのである。日本の俳優は單に自分の腕の技巧を完全に驅使する驚く可き藝術家だと言ふのみでなく一種の人格である。それも單に人格といふのみでなく、現代日本社會のいろんな理想を體現して居る主役（ヒーロー）である。

自分は現代日本の著名な俳優二三氏、特に、觀客としての自分に強い印象を與へた人について若干述べて見たいと思ふ。だがもう一度繰返すが、自分の印象は怖らく、余程主觀的で、偶然的なものであらう。然し「局外者」の印象として、幾分の興味を持つだらうとも考へる。

菊五郎は現代歌舞伎俳優の中でも最も注目すべき一人であらうと自分は見て取つた。劇壇に於ける彼の位置は、單に彼が自由に支配してゐる動作の驚くべき技巧や、舞踊や、扮裝や聲色に盡きてゐるのではない。自分は、菊五郎の容姿に於いて、現代歌舞伎劇の若々しい更新の力が體現されて居るのを發見する。彼に於いて自分は、古い日本や古い日本の美學が、新しい日本文化や、新しい世界觀や、現代日本の新しい社會心理などへ手を延べてゐるのを見る。歌舞伎の舞臺に於ける菊五郎は――舞臺上の新しいリアリズムの旗幟である。而もそれは舊舞臺伎術が達成した凡ての技巧を利用し得るリアリズムである。五月興行の芝居の中で、菊五郎が、零落した筆屋幸左エ門の役を演じた時、彼は舊劇の傳統的約束と、驚くべき實生活のリアリズムとを出來るだけ結合しやうとしてゐるのが、はつきりと受け取られた。この劇の或る瞬間、特に赤ん坊の場面とその次の發狂の場面とは、舞臺技巧として最も素晴しい出來榮であつた。それ等の場面に於いて、舊劇の制約的手法と表情との複雜なる寶庫は、偉大なる現實の眞と偉大なる人間性とにすつかり征服され調和させられてゐた。この一事を以て見ても、菊五郎の如き名優を有してゐる間、歌舞伎藝術は現代に於ても十分に生命あるものといふことが、立派に證明される。

現代の歌舞伎劇は更に羽左衛門に於て成型的彫塑的形式の優れた演技者を有してゐる。羽左衛門の藝術は、自分の感じた所に據ると、非常に控え目で、含蓄に富み、その手法と形式に於て所謂藝術的節約の極致である。英雄的な天性と高貴な性格とを表現しつゝ、羽左衛門は此れ等理想的な人物を、過度の緊張味や超人間的な英雄型で表現することを決してしない。彼の演ずる主人公は酷く內面的に上品な動きと身ぶりに富み、言葉とこなしの優雅な鋭さをもつてゐる。此の意味に於いて羽左衛門は日本の様式藝術の理想の化神として自分の眼に映じた。日本のすべての藝術、就中その最も高級な一分派たる純粋と浮世

繪は、深い控え目と表現手段の節約、外的形式の簡明さの上に基礎を置いてゐる。羽左衛門は、自分の眼には、日本藝術文化の此の著しい傳統の保持者であるやうに見える。

幸四郎——自分が彼の藝術に驚かされたのは、彼が優れた舞踊家だと言ふばかりでなく、彼が如何に大きな紀念碑的巨像を創造したかと言ふ點で、その中には昔の日本の莊嚴なる偉大さが浸潤して居る。彼の藝術は封建時代の日本の姿を壓縮した形で我々に示すかの如く、日本が生んだ實生活と藝術の理想を我々に語つてゐる。幸四郎——彼は小芝居の俳優でなくして、偉大なる紀念碑的藝術の俳優である。

左團次——私は彼を特に情熱の俳優と呼びたい。彼のセリフの力強さ、彼自身の大きな柄とそのテキパキした身のこなし、その表現力と運動性——これ等のものが彼を義務・名譽・犧牲・良心などの高い熱情を主眼とする大役の優れた演技者たらしめるのである。他の優秀な俳優の中にあつて、菊五郎の後に左團次の演技を見た時、私は歌舞伎の舞臺に於ける新しいリアリズムの最も明快な表現者を彼に於いて思ひ浮べたのである。

まだ梅幸、松蔦、福助、男女藏などと言ふ、自分が其の藝術に少からず陶醉し歡喜した優れた俳優のことは玆に割愛しなければならなくなつた。此等の名優は他の演劇システムと異る歌舞伎劇の驚くべき特色的な演技を老優歌右衛門と共に背負つてゐる。無論、こうした女形の役を演ずる優れた俳優の藝を完全に評價し得るためには、日本人になるか、少くとも日本を熟知するの必要がある。この點に於ても歌舞伎劇は技巧の完璧を殘りなく示し、俳優の通過して來た傳流の奥儀を殘りなく現はして、最も光輝ある頁の一つを實證してゐるのである。

自分は此の斷片的な隨想を、ロシアの若い演劇と古い歌舞伎劇との間に介在する(一寸見ては如何に奇異に感じられやうとも)內面的な大なる相似に就いて一言述べて、終らうと考へる。現今世界に於いてたゞ二つ、眞に偉大なる演劇文化が存在してゐるが、それは即ちロシアの演劇と日本のそれであると斷言するのは果して過誤であらうか？而もこの兩者は異つた手段と、異つた歷史的根據と、異つた形式とを持ちながら、共に同じ藝術的使命を實現しつゝあるのである。即ち兩者は共に劇動作の集團的原理を認容し、この動作の中心としての俳優の技術を一切より解放してゐるのである。藝術的個性の演劇であると同時に藝術的集團の演劇——是こそ本當の歌舞伎劇であり、同じくまたロシアの若い劇場が目指してゐる標識ある。日本とロシアの演劇の前途には廣大な自由が開かれてゐる。しかし此の道は、大衆の觀客が舞臺藝術と結合する範圍を增した時に、劇場が偉大なる人間集團の通話筒或は反響と成つた時に、始めて豐かな効果を現出するのである。若いロシア劇場の空想は其のやうなもので、彼は此の偉大なる未來に向つて下準備するやうに働きつゝ、舞臺技巧に就いては自分の師の一人として日本の演劇とその俳優とに望みを囑してゐるのである。(完)

日本に於ける私の第一印象

ロシヤ大提琴家
エム・エルデンコ

一九二三年に私はモスクワから日本への音樂旅行を企てて、道々シベリアや極東や支那で音樂會を開いた。唯、海を渡りさへすれば私は直ぐ憧憬(あこがれ)の目的地へ到達することが出來るのだつた。ところが或日、突然全世界は日本の怖る可き大震災の報導に接した。それが爲め私の日本行も無論駄目になつた、私は空しく哀愁を抱きながらモスクワへ歸つたのである。次の數年間は西歐諸國で音樂會を開く契約が成立してゐたので、自然日本行の問題は、又も延期しなければならなかつた。いよいよ今年になつて私は遠い旅を決心して、多年の宿望を遂げる事が出來今は斯うして日本に滯在してゐる。

先づ第一に敦賀に到着した時、私はかねて自分が心に抱いてゐた歡喜の情に囚はれた。山々のあの驚く可き緑の美しさは忽ち私を魅惑した。或はうす暗い陰鬱な松林、或は晴々と眼覺めるやうな濶葉樹の輝かしい緑、すべて見るものごとに私の心は躍つた……敦賀——その、提燈や看板で飾られた小さな玩具のやうな家や店や、其の愛想よき微笑、道行く人の色さまざまなキモノ、人を魅するやうな頰ぺたの赤い子供達、道を走る力車——すべて此等のものは私の眼には異様に映じて、これは夢ではないかと思つた位である。神戸の友人の家に住居を定めて私は其れから段々と神戸の近郊を旅行し始めた。私が日本の自然と生活とを廣く觀察するに從つて、それが益々深く強い痕跡を私の心に殘してゐる……

私の考へによれば、日本人は特殊な、勤勉と努力とを好む、感受性の強い國民である。ヨーロッパとアメリカとの技術や機械や文化を輸入しながらも、同時にそれを自己の純日本式の工夫に依つて擴大し且つ深化しながら、日本は決して其等の歐米の文化を輸入または舶來のまゝに取り入れてゐるのではない。日本は單に其の根本だけを受け入れて、其れを自己の國民性や固有の能力や固有の努力と勤勉とに依つて、日本式に仕上げてゐる。斯樣にして日本は自己の文化、自己の工業を建設しつゝ、他の列強と肩と並べて、文明の大道を進んでゐる。曾つて日本に滯在したロシヤの學者が「日本國民の勤勉と努力とに對しては、何人も帽子を取つて頭を下げなければならん」と言つた事があるが、此れは本當である。

日本は怖る可き地震のキヤタストロフを其の悉べての苦しい結果と共に忍び耐へつゝ、然かも此の種の地震は常に繰返へされる可能性のあるにも拘らず、極めて短い期間に驚く可き異常な努力をもつて其の一切の創痍を癒した。そして大きな建物を建築したり、新しい鐵道を敷設したりしながら、此の方面に於ける技術の最新の達成を適用してゐる。この努力こそ、前へ〳〵と巨人の歩みをつゞけてゐる大國民を作ることが出來るのである。私はかつて大トルストイが私の前で言つた言葉を思ひ出す。「明日は何んなことに成るか分らない。我々は悉べてを今日爲さなければならない。」とトルストイは言つた。此の言葉が日本國民の生活の意義と精神との奥底に深く宿つてゐるのである。私は此の一篇の感想を今日唯今書かなければならないことを非常に惜しむ。何故なら私は未だ日本には、ほんの一ヶ月しか滯在してゐないからである。其れ故に私はこの短期間に感受したその第一印象だけを頒つことだけしか出來ない。

日本の藝術は、特に刺繍、彫刻、わけても繪畫の方面に於て最も強い印象を私に與へた。私は明治大正作家美術展を見たが、此の展覽會から受けた私の印象は實に異常なものであつた。私は日本美術家の優れた技巧に殆んど心を奪はれて了つた。啻に繪畫の描法に於てばかりでなく、あの濃やかな色調の陰影と生氣とを傳へながら自由に水彩を支配してゐる技術には驚嘆の外はなかつた。私は日本美術家の繪畫の特質として、其の描法の稀なる透明さと、色彩の落付いた配合とを數へたい。其處には繪具の輝しい鮮活さはないが、其の代り洗練された典雅な幽趣と微韻とが浮動してゐる。それが日本美術家の創造に柔らかな、詩的な特殊の色彩を與へるのである。私は自分の印象を深めるために此の展覽會に數回足を運んだが、其の度々の鑑賞の結果今では、その中の多くの繪畫が世界的興味を持つてゐることを斷言することが出來る。

音樂藝術の方面に於ては、優秀な作品を書いた山田耕作氏の若干ロマンスの外、私はまだ日本作曲家の作品に接する機會をまだ持たなかつた。其の代り私は日本に於ける自分の音樂會に於いて、日本の國民が、の偉大なる藝術を研究し、自得しやうとする熱烈な大衆的希求を現はしてゐるのを觀取することが出來た。日本の公衆は好んで音樂を聽きに來た。彼等は如何に音樂を聽いたか、又如何に注意深く息を殺して音樂に聽き惚れたか、此の點に於て私は三萬人の聽衆を收容した改造社主催の、あの國技館の夕べの光景を一つの具體的證明として擧げることが出來る。私は演奏しながらも、聽衆が私の演奏する作品を如何に體驗しつゝあるかのを感じた。彼等は演奏が終つてから、ぞく〳〵と私の所へやつて來て色々な作品の事を訊ねたり、又私の演奏が如何に心的體驗を傳へたかといふこと、音樂の偉大なる藝術であるといふこと、日本國民は音樂を好み、且つ研究することを熱望してゐることなどを頻りに物語つた。我々日本へ來た藝術家に取つて、日本國民のかゝる眞劍な態度は、音樂の如何に日本國民の實生活と文化との必要な同伴者となつてゐるかといふ事、及びこの領域に於ける日本國民の將來は如何に偉大であるかといふことの疑ひなき證據である。

私は私の日本の同僚たる山田耕作氏や近衞秀麿氏などが、疲れも知らずに、其の祖國に於ける音樂藝術の發達の爲めに不斷の努力をつづけて居る其の熱心さに、心からの友情と敬意とを表するものである。けれども惜しいことには斯る先驅者は日本に於いては未だ少い。そこで私は此の點に於いては、曾つてずつと以前にロシアに於てあつたと同じやうな方法を取るやうに助言したい。本來ロシア國民は音樂に對する才能を豐富に持つてゐるのだが、此の天賦の能力を彼等は自分の力で發達させることが出來なかつた。そこでロシア音樂院の創立者たるルビンシュタイン兄弟が眞面目な音樂教育の基礎を据へ、ロシア國民の發達を促したのである。それが爲めにこの弟は外國の音樂者を招聘し、彼等が音樂科學方面に眞面目な根を下ろすやうに彼等と長期の契約を結んだのである。といふのは本來音樂方面に於いては眞面目な且つ長年に亙る努力が必要であつたからである。斯樣にしてロシア音樂院は、其の教授連の中に偉大なる世界的音樂者を持つことが出來た。例へば提琴家では、フエルヂナンド・ラウバ、ウェニャーフスキイ、ウェエタン、アウエル、グルヂマーリ、シェフチク、ピアニストでは、有名なるルビンシュタイン兄弟の外、レシェティツキイ、ブゾーニ、パーブスト、シェレツェール等である。悉べて此等の教授は後年偉大なるロシアの音樂者を生み出した。此等の音樂者は今では外國教授の力を借りずに最も力強い一團の音樂教授を組織してゐる。リムスキー・コルサーコフ、ラフマニーノフ、スクリャービン、タニェーエフ、アーレンスキー、チャイコフスキー、クラズーノフ、サフォーノフ等がそれである。そしてこれ等の教授達は更にまた、世界的藝術家を生み出した。かやうにしてロシアの音樂藝術は今日歐米に於いて最も高貴なる地位を占めてゐる。今日ロシアの音樂者が全世界に於いて有してゐる、其の偉大なる成功については日本にも充分知られてゐると、自分は考へる。多くの外國藝術家達は屢々ロシアに來て、ロシアの音樂や演劇を熱心に研究してゐるといふ事もよく知られて居る事實である。

ロシアに於けるかうした先例は日本に取つても一つの模範と成り得るだらうと私には思はれる。つまり日本に於いても音樂教育を培養し發育するために、又は日本の音樂者を援助させるために、出來得るだけ高貴な外國の音樂教育家を招聘して、彼等と長年の共同的仕事をする事である。そのやうにして始めて日本は音樂の領域に於いても、其の演劇の領域に於けると同じく高尙な地位に立つことが出來ると思ふ。例へば日本には全世界に有名なる歌舞伎劇がある。各國の多くの演劇指導者達は、極めて多くの點に於いて此の歌舞伎劇に學んでゐる。私は今回の旅行に際して、ロシアの海外文化聯絡委員會から、日本に於ける音樂事業を視察する委託を受けて來てゐるが、同時にまたソウエート・ロシアに於ける音樂事業の模樣に就いても日本の學者達に意見を開陳するやうに委任されて居る。それで近い將來に於いて私は、此の問題をもつと廣汎に日本の社會に訴へてみたいと考へてゐる。

私は此の短い感想を終るにあたつて、これが藝術家としての私を心から歡迎し、相互の間に精神上の結合を齎した日本國民に對する私の衷心からの挨拶であるといふことを附け加へて置く。多くの人々は日本を稱して美しいお伽噺だと言つてゐるが、私は日本を美しい感激に滿ちたミューズだと考へてゐる。(完)

禁煙を志て未だ禁煙せざるは何故か
永年の喫煙家も忽ち禁煙家となれる

簡易な禁煙方法を知らぬからだ

驚くべき「カロット」の効力

煙草が如何に體に害を及ぼすかは百も承知の事であるから別に此處にくど／＼と書立る必要もない、而し煙草をやめて損をしたと云ふ人はないが煙草を癈めた爲體重が増し長生をしたと云ふ事は往々耳にする事實である、煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くないそれは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので、永年の習慣は容易に改まるものでない。所が、玆に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまづくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）
金貳圓五拾錢（ベークライト製）（パイプ付）
金參圓五拾錢（サック入象牙製）（パイプ付）
（送料各内地十八錢 臺朝樺四十五錢）
（代金引替内地卅錢 臺朝樺五十五錢）
東京大森不入斗八二八 振東五二九一
發賣元 榮川堂
東京京橋區瀧山町十三
一手販賣 天下堂
振替東京七〇六八

饒舌錄

谷崎潤一郎

前號で私は、上方にゐると「食ふもの」には事を缺かないが「見るもの」が不足だと云つた。しかし此處にたつた一つ「見るもの」がある。それは文樂座、(燒失後は辨天座)の人形淨瑠璃である。菊五郎の芝居が東京でなければ見られないやうに、これは大阪でなければ見られない。

大阪人が文樂へ行くのは淨瑠璃を聽くためであつて人形を見るためではない、人形はむしろ邪魔になるのださうであるが、私はそれの反對で、淨瑠璃よりも人形の方が好きなのである。尤も此の頃たびたび人形を見に行くうちに淨瑠璃の方も耳馴れて來て、追ひ追ひ面白味が分つて來たやうな氣がするけれども、私は元來義太夫と云ふものは嫌ひであつた。なぜ嫌ひかと云ふと、あの語り方がいかにもキタナラしい。太い、不自然な聲を出して、熱して來ると顏ぢゆうへぎらぎら脂汗を浮かし、鼻だの口だのを滅茶滅茶に歪めて、見臺を叩いたり仰け反つたり、七顛八倒の暴れ方をする。苟くも公衆の前でやるのに實に無作法千萬である。中には懷ろから手拭ひを出して、幾度もちいちいと洟をかんだり、かつと痰を吐く者もある。義太夫好きの九里四郎君に云はせると、語り物の場合に依つてはああして痰や洟汁をきれいに出し切つてしまはないと、充分に聲が出せないので、實際必要に迫られるのださうだが、さりとはキタナイ藝術である。昔はずゐぶん貴人の前で語つたものださうだのに、その時分からあんなに行儀の惡かつたものだらうか。額や鼻の頭をおびんずる樣のやうにてら〳〵させて、ぬらぬらした脣をへの字に曲げて、眼を白黑させながら、わはツ、いツひ、いツひひひなどと笑ふ時には、唾吐きや洟汁の飛ばツちりがあたり一面へ懸るやうな氣がする。しかもさう云ふ無作法を、語る人間は少しでも遠慮することか、いい氣になつて精一杯に暴れ廻つて見せるのだから、いよいよ以て助からない。義太夫を一段語ると道を十里を歩いたくらゐの運動になると云ふ話だが、成る程あれだけ暴れたらそのくらゐの利き目はあらう。

いつたい大阪人は東京人ほど見え坊でない。東京の通人は、通人になればなるほどイヤに勿體振つて、遊びに行つてもなかなかオイソレと自分の藝を出さないものだが、大阪の通人はさうでないらしい。感興に乘れば田舍藝者の三味線に合はせてでも、藝と云ふ藝をあらひざらひさらけ出して裸踊りでもやりかねない。無邪氣と云へば無邪氣だけれども、隣り座敷のお客に取つては甚だ迷惑千萬である。大阪人のかう云ふ氣風を考へると、義太夫の無作法なのも偶然でない、さすがに郷土藝術たるに恥ぢないものがあるやうに思ふ。

○

が、此の無作法は一面たしかに大阪人の强味であつて、長唄にしろ、常磐津清元にしろ、江戸の淨瑠璃は大阪の義太夫ほどのネバリもなければ、ガッシリとした、前後一貫した組み立てもない。しかし東京人の肌合ひから云ふと、そのネバリだの組み立てだのが實に毒毒しくつてイヤなのである。世話物は別として、時代物になると一つの狂言の中に必ず幾つかのむごたらしい切腹があり、幼君のおん身代りがある。その腹の切り方が又頗るアクドクつて、大概の場合、最初に一と刺し脇腹へ突き立てて置いてから、喘ぎ喘ぎ長たらしいセリフを云つてうんうん呻つて見せる。義太夫の作者は瀕死の人間を呻らせることがよつぽど好きだつたに違ひない。五段目の勘平なぞは全くただもう呻るがために切腹するやうなものである。それから前にも云つたあのキタナラシイ泣き笑ひのしかた、――さう云ふ趣味が、筋の不自然とか荒唐無稽とかは今更論外として、單に古典藝術として味はうのにも、今の人間、殊に東京の人間にはどうも取り着きにくいのである。

○

私の記憶するところでは、中學時代に二三度聽いたことのある昔の攝津大掾は容貌も何處か高尙のやうな品があつたし、語り方も珍しく行儀がよかつたが、何しろ義太夫と云ふものにはすつかり恐れをなしてしまつて、越路や團平の全盛時代を私は全く知らないで過した。十五六年前に大阪へ來た時、たつた一遍人に誘はれていやいや文樂を覗いたことがあるけれども頭から性に合はないと極めてかかつてゐたのだから、ロクに身に沁みて聽きもしなかつたし、況んや人形などにはとんと注意が及ばなかつた。そして近年、と云つてももう二三年前のこと關西へ居を移してから久し振りで、東京の客を案內しがてら行つてみると、その時に又「蝶花形」と云ふ小さい子供が斬り合ひをするむごたらしいものを見せられたので、一層イヤになつてしまつた。さう云ふ譯でもう文樂は懲り懲りだと思つてゐたのだが、去年の十一月、ちやうどあの小屋が燒けた月に、「法然上人 惠月影」と云ふ新作物を出したので、ふとした好奇心から這入つて見ると、それが案外面白く、殊に法然上人の人形の首が馬鹿によかつたので、以來人形芝居と云ふものに段段惹き着けられるやうになつた。さうして今では每月缺かさず辨天座へ出かけるのである。但し成るべく義太夫語りの顏つきだけは見ないやうにしてゐるが。

「法然上人惠月影」が面白かつたのは、新作だけにサラサラとしてゐて、いつものアクドイ不自然な場面や組み立てが少く、上人の一代記をあつさりと述べてゐたからであつた。それに原作者は上人の故郷たる美作の國の坊さんださうで、なまじ新しい文士でないだけに氣障な近代的解釋がなく、古い淨土教の思想と情操とを、ただ有りのままに素直に唄つてゐるのもよかつた。義太夫の新作でも「金色夜叉」や「乃木大將」などは、想像しただけでもさぞ不調和であらうと思はれるが、法然上人は時代物であるから、淨瑠璃の方も人形の方も在來の型と約束とを破ることなしに、充分に原作の心持ちを出してゐた。つまり私は、宗教と文學とが未だ分離しない以前の、云はば原始的の說教節でも聽くやうな氣持ちであれを聽くことが出來たのである。時勢に捨てられて平素はあまり入りのない文樂座が、智恩院あたりの後援もあつてか、その月は熱心な信者たちのお客で連日滿員の盛況であつたが、宗教文學としての淨瑠璃の持つ魅力は、到底一時流行した親鸞物の戲曲や小說などの俄かに及ぶところではないのをしみじみと感じた。

それに法然上人の如き有り難い聖者を生きた俳優が扮すると、どんな名優がやつても何となく生臭坊主らしくつて、うそツぱちになるけれども、人形だとさう云ふ心配が少しもない。あの時の上人の首は特に新しく打たせたものかどうかを知らぬが、實に上人らしい慈愛と威嚴との充ち溢れた、麗しい顏立ちであつた。殊に壯年時代の首がよかつた。若しほんたうにあゝ云ふ坊さんに行き遭つたら、私のやうな不信者でも覺えず足下に跪いて衣の袖に縋りたくなるであらう。兎にも角にも宗教劇に人形淨瑠璃を應用することは、百の新しき解釋を試みるよりも、遙かに有力な教化法であるに違ひない。

○

むかし人形芝居を見た時には不氣味でグロテスクなやうに感じたが、見馴れて來るとなかなかさうでない、妙に實感があつて、官能的で、エロチックでさへある。人形を使ふのには主なる人形使ひが上半身と右の手とを動かし、一人の助手が左の手を、他の一人の助手が兩足を使ふ。さうして主なる人形使ひは時々黑衣を脫いで、人形の衣裳と同じやうな派手な裃姿で現れる。私は最初、それを目障りであると思つたが、それも段々考へると、矢張りあれはあの方がいい。なぜかと云ふのに、あの人形使ひは實は人形を使ふのではなくて、自分の肉體を人形の肉體に假托してゐるのだからである。つまり人形の衣の中にあるものは人形使ひの腕であり、人形の胴にあるものも亦人形使ひの左の腕である。人形自身は纔かに首と手足の先とを持つばかりで、胴體もなければ腕も腿もない。女の人形の場合には腰から下は全くがらんどうで、足の先さへもなく、そのなまめかしい裾さばきの下で動いてゐるものは、助手の兩腕なのである。云ひ換へれば一個の人形は三人の生きた人間の肉體を借りて成り立つ。さうして主なる人形

使ひは最も多く自分の肉體を人形のために提供してゐる人であるそれ故文五郎が天網島の小春を使ふ時、小春が懷ろ手をして溜め息をつかうとすれば、文五郎の肉體が溜め息をし、文五郎の手が小春の懷ろに入らなければならない。人形の體は凡べて宙に浮いてゐるので、小春が据わる時は脚を使ふ助手が裾をつぼめて膝をふつくらとふくらませ、小春の腰であり臀であるべき部分は直ちに裃を着た文五郎の腕と胴とに接續する。かかる場合には何處までが人形の領分であり何處までが文五郎自身であるとも云へない。小春は文五郎の肉體から派出した美しい枝であり花である。花を賞でるには花と一緒に幹をも見なければいけないやうに、人形の面白味は人形使ひと人形との一體になつたところにある。人形使ひは單に人形に依るのみでなく、自分の全身の運動を通して人形の心持ちを表現する。此の關係が私には非常に面白い。だから人形を見ると共に人形使ひを見た方がいい。

先達、紋十郎の使つた床下の仁木を見たが、これなどは最も兩者の關係が密接な例の一つであつた。仁木が花道へせり出して來るのを見ると、長裃の兩脚は全然紋十郎の脚なのである。さうして上半身だけが人形と紋十郎と別別で、ちやうど二人袴のやうに、肩衣を着た紋十郎と仁木とが一つ袴へ脚を突つ込んだ形で、紋十郎はしつかりと、前なる仁木のふところへ兩手を入れて抱きしめてゐるのである。それで悠悠と例の足取りで花道を揚げ幕へ這入つて行く。

○

人形に動く時よりもあまり動かずにゐる時の方が、却つて不思議に實感がある。たとへば今も云つた小春が懷ろ手をしてうつむいてゐる時、治兵衞が炬燵に足を入れて物思ひに耽つてゐる時、すし屋のお里が夜着の隙から白い素足を見せて寢てゐる時など、じつと見てゐると、へんに生き生きとした感じが迫つて來る。それから屍骸になつて倒れてゐる時が、此れが又いかにも屍骸らしい實感があつて、一種なまなましい。忠臣藏の判官が切腹してからその屍骸を處置するところなど、ほんたうにたつた今生きてゐた人が死んだと云ふ、無情迅速の感じがした。殊に惡魔的で物凄かつたのは先代萩の土橋の殺し場で、舞臺に仰け反つてゐる累の屍骸がまだ死に切れずに、息をせいせい彈ませて胸を波打たせてゐる姿であつた。

かう云ふ凄さは、思ふに人形なるが故に凄いのであつて、生きた人間の芝居ではとても現はせるものではない。

○

よく鴈治郎の盛綱がどうだとか、吉右衞門の熊谷が何だとか云ふけれども、元來時代物の中に出て來る性格は極めて線の粗いもので、人形芝居以上に細かく現はせば却つて不自然になり馬鹿々々しくなる。舊時代の日本の女性は喜怒哀樂に際しても、恐らくはあの物靜かな人形の顏以上に露骨な表情はしなかつたであらう。殊に東洋風の愼ましやかな幽婉な婦人を戯曲に描けば、歌麿の美人がどれもこれも同じ顏をしてゐるやうに、結局のところいくら描いてもタイプ以上の個性を

出すことは出來ないであらう。過去の東洋人、――佛教や武士道で鍛へ上げられた昔の日本人に取つては、たゞ永遠に「一人の女性」があるのみである。私は人形の女の首を見ると、いつもそんなことを考へる。さうして同じ人形が小春になつたりお里になつたり梅川になつたりすることを、むしろ自然であるやうに感じる。

○

しかし今まで見たもののうちで最も感心させられたのは二十四孝の狐火であつた。八重垣姫に狐が憑いてからの、あの幻想的な變化に充ちた複雜なしぐさは、いつたい如何なる人形使ひが考へ出したものであらうか。恐らく一人の頭から生れたものではなく、時代を重ね、工夫を積んで、あれだけの手順と型とを完成するに至つたのであらうが、幻想的の要素に乏しい日本人にも猶あれほどのものが作れたとすれば、徳川時代の藝術家の中には矢張りなかなか偉い人がゐたのだと思つて、私は自然に頭が下つた。昔はもつとあれどころでなく、無數の狐が舞臺一面に出たのださうだから、八重垣姫の振りもまだ更に幻想的で、千變萬化を極めたのかも知れない。生きた俳優の芝居だと、あすこの場面は頗る簡單に改惡されてしまつてゐるが、あの八重垣姫の身振りは人形でなければとても出來ない業だから、それも是非がなからう。

要するに人形芝居は、官能的で、實感に充ちてゐると同時に、幻想的、惡魔的、病的要素が多分にある。髪をおどろに振り亂した人形の「お化け」が恐いことは云ふまでもあるまい。

破綻銀行懺悔錄

緒方潤

晩春の夜の時が經つのは早い、もう十一時を過ぎた、あたりが何となく靜まり返つて、自分一人が取り殘されたやうな焦慮を感じだしたが、主人のＹＫ君は私を斯う待たして置いたまゝ、まだ歸つて來ぬ模樣である。私は「此樣に人との約束を平氣で破るやうな男の經營する銀行だもの破綻するのが當然だ」と云ふやうな、彼を非難したい衝動で一つぱいになつて居た。恰度其の時汗じみた顔に沈痛な色を浮べた彼が、身心共に疲れたと云ふ風な面持で室には入つて來て、じつと私の顔を見て居たが一寸頰のあたりを痙攣させてから、例の癖である、右の掌ですつと自分の顔全體をなで廻した。ハハア何か云ひだすぞと、思つたので私も聞くよ、と云ふ氣持で彼の方へ眼を向けた。

『待たして本當に失禮した、今日は悠然、君に私の本心なり又銀行の實狀を聞いてもらう積りで、半ばは罪の懺悔をする考へで居たが、何分にも今死ぬか生きるかの境にある、銀行を持つて居るだけに色々の用事が重なつてネ、今迄は何とも思はず夜更まで自動車を走らせて居たが、二三日前からどうも氣がさしてならぬから、六時以後は特別の用事が無い限り、運轉手を休ませることにしたので、今晩もＯ氏の宅から市電で來たやうな譯だ、それで意外に時間をとつた。どうか惡く思はないで呉れ給へ』

私は曾ての元氣に似てもつかぬ、彼の弱々しい言葉を聞いて、さつきの非難したい憤慨が消え去つて、苦しさうな心情だけでも助けてやりたい、と云ふやうな友情が湧き上つて來たので、これでは成らぬと急いで瞳を扁額の方へ上げた。其處には「業精于勤」と讀まれる文字が、實業界の大先輩の筆に成つて達筆に此の室をじつと見下して居た。

『君とは其後思想的にも相當の距離があり、境遇を異にして、殆んど關係のない仕事に從事した爲め、しみ〴〵話合ふこともなく數年間を過して來たが、此度こそ何も彼も君に聞いてもらつて、私自身を生れ變らせ度いと希つて居るのだ、どうか私の今迄行つて來たことなり、又私の今の氣持なりを客觀的に聞いて、そして公平に第三者の立場から批判して欲しい、さすれば私はそれを世間の聲だと聞いて、英斷的に事を處理したいのだ、いや當面の問題のみならず將來の生き方をも

定めたいと思ふ。今夜は君も自分の仕事を澤山持つて居るのだらうが、古い友人の好みで私の話を聞いて吳れ給へ、但し最初に云つて置くが、僕は君に同情を求める爲め泣き事を云ふのではない。社會の聲を君を通じて聞きたいからだ。それだけ私は何等の飾りや誇張は此の話の中へは全然入れない積りである」

私は冷へた茶を、ぐつと一呼吸に呑み下して、一切の、感情を排し理智の働きを呼び起しつゝ、彼の方へ靜かに向き直つて、一銀行重役の失敗談を耳にする興味を持たうとした。

「人の神經は實に銳敏に働くが、特に現代人の利害に對する敏感さは驚くばかりである。何處でどう傳へられるのか、私の銀行の休業を餘儀なくされた時など、見る間に預金者が殺到して、店の中は忽ち人で一つぱいになつた、勿論其の中には野次馬も澤山居たらうが、預金者が眼の色を變へて、拂戾の窓口に押合つて居るのを見た時、私はもう駄目か、愈々最後の日が來たか、とは思つたが、まだ金庫の中にも相當額の金がある筈だし、或る銀行へ援助を賴みに行つた重役の一人が今に吉報を齎らして歸つて來るだらうと云ふ一縷の望みを持つて、敢て悲觀はしなかつた、でも刻一刻預金者が增加して來る。時計の針は三時の閉店時刻に迫つて來るのに、其の重役はなかなか歸つて來ない、私はもうぼうとして、どうして今日を切り抜けるべきかの處置を考慮する閑もなく、波のやうに寄せては返して動く人の頭を眺めて茫然として居た。すると「事務事務、すつかり拂出してしまいました、どう致しませう」と、耳の傍で支配人の聲がしたので、我に返つた私は、突差に「時間だ表を閉めろ」と叫んだ、「まだ十五分時間があります」と誰かゞ云つたが、「かまはぬ表を閉め給へ」と云つて、私は自分の室へ引上げた。其の時には結果がどう成るかと云ふやうなことを考へる餘裕はなく、いきなり机の上に置いてあつた、札束をポケツトにおし込んだ、それは豫て私が特別に自分の小使錢にと思つて取寄せてあつたものであるが、行員が何か大聲に云ひながら、預金者と問答らしいことをして居る間にも、それだけの金を早く別にして置いたのを、甘くやつたと云ふやうな氣持で居たのであつた。暫らく女の甲高い聲やら、男のどなる聲やら交り合つて、騷然と聞へて居た處「明日確かにお拂ひ致します、今日の處は一先づ御引取下さい、時間でございますから」と、特別に大聲で叫んだ行員があつたのだ、私は直ぐそれがTだと知ると、六月には昇給してやらうとふと思つた、果して其の聲で預金者は表へ出たらしかつた。私はほつと思つて、明日の對策を協議すべく副支配人と支配人とを呼び、又或る大銀行へ行つて居る重役に電話で一應歸つて來るやうにと云はせた。その間にも二三の支店が取付られたと知らせて來たから、時間に閉めて支配人は直ぐ本店に來るやうにと云ひつけたのである。幸に支店は本店の取付後に取付が始つたので、それ程混亂はせず、郊外の支店など平素に變らなかつたものもある程であつた。これが取付第一日の有樣の概略であるが、其夜の協議では、もう起き上れない運命に陷つたと悟つて、私は不心得千萬ではあるけれど、自分の身を守る方法を先づ考へたのである」

巧利主義者の銀行家であつた彼を蔑やうに、今の彼は言葉を切つた。

「敗軍の將は兵を語らずと云ふから、僕としては默つて居て、完全な

整理は出來ぬまでも整理の事に專心し、社會と預金者と自己との、已を責める聲をじつと堪へて受けねばならぬ忍苦の境に居らねばならないのであらうが、私は實際過去の事柄を誰かに告げて置かねば氣が濟まない、神や佛に救ひを求め得ないだけ、君の手帳にでも此の私の眞の心持を書留めて置いて欲しいと思ふのだ。もう私は一切を無の世界に置き、所有の觀念から解放せられた、と云ふ自信だけは持ち得られるやうになつて居る、それだけ今までの自分の齒の浮くやうな虚名を逐ふた氣持、周圍の人々から好く思はれやうとした氣の弱さをしみ〴〵と情無く思ふ。結局斯うした始末になつたのも一口云へば、眼前の人々に自分を殊更に大きく見せやう、尊敬せしめやう、己の手腕を有難がつてもらひ度いとの虚榮であつたのだ。亡くなつた父が、銀行を私に讓る時「金は自分で動かすのだぞ、金に動かされるでない、まさかの時には裸になつてぶつかゝれ」と云ひ云ひして居たが、今金に動かされた私が、裸になつてぶつかゝる時が來た、さう云ふ意味から、私自身にとつては一大試練の時期が來たものとして決して不幸だとは感じて居ないが、預金者の諸君、殊に小額の預金を汗水たらし持つて來られた人々には、私の銀行を信用して下さつたことを深く、感謝すると共に、お氣の毒に堪へないから、是非さうした預金の全部を速かに拂戻さねばならぬと決心して居る。要するに斯樣な始末になつたのはこれから僞りなく述べやうとする種々の原因にあつたこと云ふまでもないけれど、結局は私が他人から「若いのに立派な腕を持つ銀行家だ」とか「活動的な判りのよい旦那樣だ」とか、たはいもない事を云はれて、好い氣持になつて居たからである。思へば馬鹿らしい限りであつた――と話して來ると、私がまるで悟り切つた人間になつたやうな口振りで、自分の失敗を何か斯う自分の爲めにした、個人主義の悟り屋のやうに聞へるかも知れない、然し其處は辯解するのでないが、全力を盡して整理に努めて居るのであるから誤解のないやうに――どうも君に話して居ると其の言葉が個人的になり勝で、ともするとセンチメンタルになりさうで困る』

時計は十一時四十五分を指して居る、私は彼の漸く熱を帶びて來た顏を眞正面から凝視して、高い物質の上から私達の所まで轉び落ちた一人の人間から、其の高い所の話を聞く興味を一層つのらせて――此一人の友の爲めに何時までゝも其話を聞いてやらうと思つて座り直した。かなり廣い邸內で、いや此の世で二人だけが斯う對座して居ると考へると、自然親しみ勝になるものだから、彼のセンチメンタリズムをも肯定せずには居られなかつた。

『今でこそすつかり決心して妻にも無一物になることを宣言したが、取付を受けた夜はまだ〳〵、如何なる手段かを用ひて事件を彌縫しやうと苦心して居た。先づ本支店の副支配人以上の者を集めて、一應銀行の窮狀を話し、夫々自重して與れるやうにと注意して置いて、緊急重役會議を開くことにした、勿論重役と云つても個人銀行に等しい株式銀行であるから、親族の人が重である。然るに銀行が窮境に陷つた取付を受けたと聞いた彼等の二三の者は居留守を稱して出て來ない。さはらぬ神にたゝりなし位に考へて居たのであらう、私は夫等の連中の物質主義で固つた個人主義的な行爲を、ひどく憤慨しながらも、自

分の私財の安全を圖らうと考へ、いよ〳〵整理不可能ならば銀行を潰すまでだと思つて居た、が又他面見へ坊の私はひどく世間體を惡くしないやうに、自分も損害の少ないやうな案はないかと、ひそかに思案した。是より先中央銀行からは見離されて居た、既に前日二三銀行の休業から餘程危險を身に感じて居たので、私自身中央銀行に某重役を訪ふて懇談數刻に及んだが、單に擔保有無の一點張で取付く島もないそして曰く「目下問題になつて居る〇〇銀行の如きさへ、政府が補償令を發布するからと云ふことで融通して居るに過ぎぬ、失禮だが君の銀行のやうな小銀行一つ一つに救濟の意味で資金の融通をして居ては、中央銀行は幾つあつても足りないだらう」とのことで、誠に今日の個人營利主義の社會にあつては尤もな言ひ分である私は返す言葉もなく引取つたのであつた、だから其の日取付けられたら難なく破綻することは瞭であつたけれど、やはり自分のものだと思へば慾目がある、父の時代からの預金者が大部分だから、よもや急激な取付は起るまいと思つて居たのに此始末である。或る大銀行へ行つた重役は「何とかして頂くまでは此處を動かぬ」と云つて座り込んで事情を話し、重役の所有する不動産を全部擔保に提供するからと話して居た處へ電話で歸るやうにとのことだから、殘念ながら一先づ歸つて來たと云つて居る。私は其時不動産全部を提供して吸收した資金を支拂つた處で追ひつく譯でもあるまいから、寧ろそれは成功しない方が自分等將來の爲めである。そして銀行は銀行だけで整理した方が得策だ、と述べて一かどの賢者振つたものだ、出席して居る他の重役は一言も發しないが、大膽に此の私の說に贊成らしく、中の一人が「どうせ銀行が破綻するのならば出來るだけ我々の損害を減少するやうにして置く必要がある云はゞ此銀行を破綻せしめたのは預金者の過敏な取付であるから、預金者も當然一部の責を負つてよい、吾々は出資金の殆んど全部を無駄にする譯であるから」と云ふのを機會にして、愈々翌日から[illegible]整理に付き向ふ二週間休業のことを決定した。無論二週間で整理の出來さうな筈はないが、差し當つてさうしたのである。そして直ちに夫々關係當局及び支店に通知を發し、大債權者大口預金者其他の方面へは出席重役が手別けして一應了解を得るやう挨拶して置くこととし、さう申せば頗る簡單に休業してしまつたやうであるが、もうそれまでに幾多の休業をせねばならぬやうな事件を繰り返して來て居たので、斯此樣にもろくも破綻を曝露したのは、恰度膿きつた處が忽ちくづれて來たのに等しい狀態であつた。それだけ私としても、到るべき日に到つたと云ふ一種の氣安さへあつて、特別に昂奮し狼狽する程でなかつたのである、從つて私は重な債權者と預金者との振り當てられた向へ自動車を走らせると、眞晝に宅に歸つた。訪問した人々は大抵留守であつたが、中に父の時代からの債權者が居て「ハハアやつつけましたか、でもよく今まで持ち堪へて居ましたネ、時世時節だ致方ありません」と皮肉まじりに言はれたのには赤面した、何分之まで「若い手腕家の銀行家だ」と、偉者扱ひにされて居た私が、まるで子供扱ひの言葉を與へられたのだから、納まらぬ胸を抱ひて家に歸り、物も云はず私の室へは入つた――銀行の破綻よりも其老人に嘲笑せられたことを念頭にして――』

彼の右の指に持つ煙草は今にも落ちさうに長く灰と固つて、居たが、それにも氣付づかぬらしく、話を續ける。

『妻は其日の出來事を誰から聞いたのか、全部知つて居るらしく、色々と慰め顔に振舞ふ、そして妻も來るべき運命の日が來たと思つて居るらしく、案外平氣であつた。實際妻にも之まで幾度か、銀行の危機のことを聞かせてあるので、豫め其日の在るのは覺悟して居たらしい。で私は寝る氣もしなかつたから、一人で整理の方法を案ずるがてら机の前に座つてじつと考へた、すると大正九年の恐慌以來の危い綱渡式の有様が、明瞭に頭腦に浮び上つて來る、よくも之まで未整理のまゝで經營出來て居たと驚くばかりである。これも不景氣ながら財界がどうにか安定して居たので、貸出の固定はそのまゝであるが、ぼつ〱預金もあり、苦しくなるとコールで、泳ぎ辻褄だけでも合して來られたのだ、だから此度のやうな取付が起らなくても、早晩整理せねばならぬ半身不隨には既になつて居た。では何故早く整理しなかつたか、と云ふだらうが、今までに整理したら幾らも殘るものはない、具體的の事を話すことは憚るけれど、到底正式に整理する勇氣はない程の狀態になつて居た。故に只管に待たれたのは景氣の恢復である、大いに好景氣が出て事業界が活動するやうになれば、貸金の回收も幾分か出來るであらうし、第一脊負込んである有價證券の値上りもあり、擔保に取つてある不動產の處分も可能となる、その上預金も亦增加するだらう、其の時になつて整理を斷行しやうと、誠にお恥かしい次第だが飛んでもない虫のよい事を考へて居たのである。それが反對に年々財界は不況を繼續す痛手は益々深くなる、どうやら身動きの出來ぬものの一つに數へられる有様になつて居た時も、時之が政治的に展開して震災手形の整理案から、大變な駒が飛び出して遂に此始末になつたのである。扨て其夜私が大體の整理案として考へた三つの案は、何れも私等に都合のよいもののみであつた。其の一は何れかの大銀行へそつくり合併することで、さうすれば株金全部が返濟されるのみならず世間體が頗るよい、而も此方から重役を出すと云ふやうな條件でもつけば、さしづめ私は一流銀行の重役になれるであらう。其の二は資本金を半額に減じ、不良貸付を切捨てる、そして預金の中から現資本金の半額を何等かの方法で優先株に引直して增資する、斯うすれば自分等重役は株金を半減せられるけれど引續き重役であるから、又何とか方法も出來る、但しそれでは充分な整理とは云へないのであるが兎に角一つの案とした。第三のものは取れさうな貸付を何等かの形式でそつとして置いて、銀行は思ひ切つて解散し預金者には幾部分を拂戻す、で別に此の貸付金を基礎として新銀行を起す、勿論それが實行に當つては隱匿出來るものは隱すのだ、之は背任罪となるらしかつたが、甘く行けばと云ふやうな、良くない考へに支配されたのである。然し斯んな案が實行に役立つ筈はない、其後休業中他の重役とも協議の上贊成を得て運動して見たが、何分金融界は彼のやうな大恐慌を惹起し、軈て全國の銀行が一齊に休業するやうな事態になり、內閣も爲に更迭したのであるから、どうすることも出來なかつた、いや今尙ほ休業を繼續して爲す手段を知らぬと云へる事情にある、但し私だけは今日確固たる決心が漸く出來た——』

さつき此室へは入つた時の疲勞し切つたやうな彼の顔色は、大

第に生色を帶び、さながら確固たる決心を持つものの如く頼もしげに見られた、

『私の決心に成る整理案として此處に是非實行したいと思ふものは先づ貸付の內から全然回收不能のものを捨て去り、回收可能のものを三つに分ける、直ぐ回收されるもの、或る期間を經れば回收出來るもの、それから切捨てた貸付の擔保品は全部小額づゝの回收可能のものと、速かに處分する、但し將來相當有利に處分出來るものは他の銀行に肩代りするとか、又他の方法を採るべく差當つてはそのまゝと爲し、追つて處分してもよい、そして私は私財を全部提供し、他の重役にも之を慫慂して出來るだけ提供させる　斯うすれば私の計算に依ると約資本金の二分の一を取り止め得る、其處で此の銀行を整理し、現在資本金の二分の一に減資して後、何れかの大銀行へ合併するのである、合併に當つての具體案は數字を調査し、全部の勘定を詳細に見ねば判らぬが概略私の見る處では、回收出來る貸付の殘りと預金額との差はさうたいして無いと思ふ、あれば合併銀行へ私の持株分を提供して埋め合せる、それで不足すれば致方がないから近親者の持株を出させやう、或はそれでも不足すれば大口預金者を株主になつてもらはうとか何とかの方法を講じやう。銀行の合併は必ず今後の金融統制上行はねばならぬことであつて、私の銀行も此の通りの整理が成れば立派なものとなるであらうから、何處でも引受けて吳れるだらうと思ふ、勿論私は重役にならうなどゝの野心は持つて居ない。斯くて預金者は何れも些の損害も受けないのみか、却つて大銀行の預金者となつて安心が出來る譯である。之を私が名譽だと考へて居るが、多分他の友人や親戚の者は、私が親讓りの財産を無一物にすると云ふので反對するだらうが、預金者に迷惑をかけないやうにするのは銀行重役の義務であり、事此處に到らしめたのは私の責任であるから、それを思へば私財を全部提供するのは當然ぎ過る程の當然である。たゞ株主には相濟まぬが、それは少數の緣故者のみである上、何れも相當の財産のある人々で、之まで銀行に利益のないのに配當を受取つて居るから、それを想へば大して損にはならぬ筈である。君は私にどうして急に其樣な氣持になつたか、と尋ねたいらしいが、それは外でもない、其處は此話を君に聞いてもらう理由がある、君の手帳に書いてもらつてこそ、私の決心が意義を生ずるのだ。と云ふのは昨年の暮、神田の書店で君と久し振りで會つたので、近くのカフエーで茶を飮みながら僅かの時間に色々の雜談をしたネ、あの時君が聞かせて吳れた虛無觀、それは一度「無」の世界にはいつてから浮び上ると云ふ說、あれを二三日前にふと思ひ出した。私の物質に囚れた個人主義の思想か、今度の事件でも最も自分を惱ますものであつた、ふと一切「無」の洗禮を受けよ、と云つた君の言葉を思ひ浮べてからは、今までの自分が嫌で嫌でたまらなくなり、今までの總ての惱みが無に依ると事なく解決してしまうものだから、自分を無にして只管預金者に迷惑をかけぬやうにと心懸けるに到つた。云ふまでもなく君の所謂虛無觀は未だよくは判らないけれど、裸の氣安さ無の氣輕さはよく判つた。何れ此後の私の生き方に就ては深く相談したいと思ふが、兎に角現在の私は右の如き考へで銀行の整理を斷行する積りで居る、どうか君は一社會人として、此の私の考へをどう解釋されるか、遠慮なく批判して吳れ給へ御願ひする」

之に對して私は一個の社會人としての批評をし、次で友人としての注告を熱心に爲し、且つ彼の決心を壯とした。果して如何に銀行を處理するかは此處に豫斷する限でないが――。夜はいよく〳〵更けて動くと見えるものは二人の口ばかりである、で其聲は高くはないがお互の耳には重々しく響き入る。

『金を使ふべき筈の人間が金に使はれた結果が、此有樣になつた譯である、實に私の虚榮心が、殊更に銀行の利益金を捻出せしめて配當を繼續した事實の如きは、其の金に使はれた好例の一つであらう。即ち餘配當を數年間續けた、其の理由は、他の銀行が何れも相當の配當を行つて居るのに、私の銀行が配當を行はないと云ふことは、頗る世間に對して耻かしい、折角若い銀行家中での手腕家と云はれて居るのに、其の人氣を落すことが、配當であつてはならぬと考へた末、苦しいいや殆んど無茶な利益の捻出をしたものである。大抵毎半期貸付の回收不能のものの整理を行つて居たら一文の利益も計上出來ない程であつて、左程の不良貸でないものでも利息の實際に收入されるものは非常に少なかつたから、それを貸付の方へ增加して行くか、固定資金の評價を引上げねば利益は出なかつた。從つて大正九年以後は新規の貸付らしいものはなかつたにも拘らず、每期每期貸付額は累增して行き、預金を遙かに超過し、見る間に資本金の數倍となつて行つた、さうし**て毎期貸付額の數字が增加したゞけを利益金として配當して行つたの**で、預金の增加と手許の有金はずん〳〵支出され、年月を經る每に運轉すべき資金が減少して行き、遂にはぼつ〳〵回收した資金までも配當に振り向け、又固定資金の評價も極度まで引上げた、故に最近では殆んど首も廻らぬやうになり、コール、マネーを吸收するにも、擔保品の不良で出手銀行から二の足を踏まれることもあり、漸く過去の取引上の義理合から、特別な向から信用で短期のものを融通してもらうなど、漸く其の日其の日を彌縫して來たのである。こんな今から考へると馬鹿の骨頂である餘配當を、自分ながらよくも行つたものだと呆れて居るが、此時分には配當せねば肩味が狹く、人と顏が合せられないと信じて居たのだ。まるで金の奴隷として金に使はれて來たことを耻じる。又斯く配當額が貸付額に振り替へられて居るのは、固定した貸付の殆んどは其の利息さへ滿足に支拂の出來ぬものであつたから、利息を貸付額に加算して行つた譯で、此の調子で進めば十年を經ずして、貸付金額は新規のものを別として二倍するであらう程である。然らば此樣な不良貸は如何にして出來たかと云へば、私の父は歐洲戰爭當時の好景氣時代に、自ら主唱して幾つかの事業會社を設立し、又人から投資を奬められて株主となつたものが少くなかつたが、何れも最初成績が一寸の間良好であつただけで、爾後は頗る惡い、現に私が親讓りの會社重役を二三やつて居るが、悉く業績振はず、既に解散の運命に逢着せるものさへある。さう云ふ事業會社へ情實を以て資金が流通せられて居るのだ、云ふまでもなく擔保らしいものはあるけれど、多くは不動產に屬するもので處分困難、假へ處分しても貸付金の三分の一も回收出來るかどうか疑問のものが多い。中には現に相當の成績を示して居る會社が無いではないが、それ等會社の株式は相當の價格のあつた折、早くも賣放つてあるので、今私の手許にあるのは所謂ボロ株のみであると云つても差支ない程のものである。それが倘ほ十二

年の大震災で打撃を受けたから、急貸付の回收不能に陷り、所有のボロ株の如き全然融通能力を缺ぐに到つた、たゞ此頃震災手形だけはどうやら同法令に依つて支拂の融通が出來るやうにはなつたけれど、今となつては大してそれに望みをかけやうとも思はぬ。其の上私は銀行の資力を用ひたなら、株式市場で相當の利益を擧げ得ると信じて、定期取引を試みた、これは別に失敗はしなかつたが、大した利益も不景氣な時期であつただけ無かつたのである。此樣な事情であつたから、私の銀行は甚だしい資金難に見舞はれて居た、其處で之を切り拔ける爲めに、預金の吸收に全力を盡し、彼の預金利子協定の違反を半ば公然と行つて來た、中に預金利子に年七分位のものも契約されてあるが、年七分は愚か八分でも預金の受入れをして、一時の繰り廻しをやらねばならぬ程であつたのである。高利に迷つて預金した人こそ聽て損害が己れに還る日があることを覺らねばならなかつたであらう事實は、此處に明かにせられた、然し私は重ねて云ふが預金者には迷惑はかけない積りである。要するに以上のやうな無理、例へば二と二とを加へて五とし六としやうとするが如き不合理のみを重ねて來たのであるから、それが何時までも續く道理はない、何かの障害にぶつかゝれば破綻する。其の日が遂に來た、然し銀行の破綻は、私の一身の再生の日ではあつた。斯う云ふ私は不謹愼だと改める人もあらうかなれど、其の批難は甘んじて受けるであらう』

彼の眼には泪さへ見られた、だが私は彼に徒らなる同情をする積りではなかつた、私も一人の凡人として其話を聞いて居るのだ、彼も亦一人の凡人として試練に堪へつゝあるのではないか。

『日本の銀行界も大銀行主義の下に統制される時期になつたやうだ、私の今述べた苦しみは、單に私の銀行の苦痛のみではない、二流以下の銀行の何れもが舐めて居る辛さである。それは今度の休業銀行の大部分が小銀行中銀行であるに鑑みても明かである。それにつけてもあれ位な動搖から銀行恐慌を惹起したのは、私の銀行の如き放慢さが銀行界全般に亘つて、其の頂點に達して居つたからであらう。でも早晩曝露されるものは、早く曝露した方が結果から見て良いやうである。之を好機會として銀行制度の改善が徹底的に行はれ、銀行業務の方針にも大いに改良せらるゝものがあれば幸である。私は銀行業者としての失敗者である、又何をか云はう、たゞ今後の健全なる金融事業の發達を望む意味から休業銀行が徒らに政府の損失補償令の恩惠に依つて浮び上らうと云ふやうな被保護觀念を捨て、自ら內部の荒療治を行ひ、金融界と預金者との爲めに速かなる整理の實行に着手されたいと切に思ふ。そして尙ほ君の銀行に關する忌憚ない意見をも聞かせて欲しい

——まだ私も現在は銀行家の一人だから——

淋しい微笑を私に送つた彼は、最早語るべきことは無いと云ふ風に、きつと唇を結んだ、二人の沈默が暫く續くと、何處からとも無く騒らしい雜音が忍び寄つて來る氣配があつた、私は眼を幾度となく瞬いた。おはり。

飜譯製造株式會社

戸川秋骨

器械を一とまはしガタリと動かすと幾個かの字が出て來る、また一とまはしガタリと動かすと、また幾個かの字が出て來る、幾度かそれを繰りかへして居ると、澤山の字が集つて來るから、それを並べると、立派な學問が出來上る。これが誰れでも知つて居るガリヴア巡島記で、スヰフトが書いて居るラガトオの大學の記事である。が、これにも增して容易にまた簡單に出來るものは今日の吾が飜譯である。西洋のある名ある書物を始めて飜譯するのは、可なり骨の折れる仕事であるが、ナニそれでも少し根氣よく器械でも動かす積りでやれば、ぢきに出來る。その飜譯が一つ出來上がれば、あとはわけなしで、ラガトオ市の大學で器械を動かすよりも手輕に出來る。凡そどんな飜譯にだつて文句をつけて、つけられないのはないのであるからその一つ、出來上つた飜譯に少し間違でも見つけたら、それを大袈裟に吹聽して、それから大體の他の部分にも筆を入れて、前のより少し下手にすれば、それで澤山なのである。下手と云つて惡ければ、前のよりは解らなくするのである。こういふ風にして拵へて行けば、飜譯なんてものはいくらでも出來る。かういふ風にして飜譯を作り出す所を私は有限責任飜譯製造株式會社といふ。さういふ飜譯では原文に忠實でないとか、原文の意に反するなんて云ふものもあるが、それは甚しい愚論で、そんな事は決して顧慮すべき事でない、そんな事を顧慮するのは無益といふよりも却つて有害である。何となればそんな事を云つて居ては、却つて文化の普及を阻害するからである。

丁度昔紡績女の手仕事であつた紡績が、大工場の一大產業となつて、所謂大量生產なるものとなり、爲めに昔の工女の手仕事が奪はれたやうに、從來かういふ飜譯も貧乏文士或は教師の手內職であつたものが、今や大資本に依つて多量に生產されるやうになつた。一方に貧乏文士や教師の手內職は奪つたやうであるが、他方に於てはそれは資本家自身を富ますのみならず、また多大な富を飜譯者自身に與へるやうになつた。蓋し斯樣な飜譯の大量生產はさういふ風に資本家と文人とに幸福を與へるのみならず、また世界の大思想大文藝を、極めて低廉な價を以て萬衆に頒與するのであるから、文化のためにも至大な貢獻であるに違ひない。天の惠は二重である、とはシェイクスピアの句にあるが、この事業たるや、かくして三重の惠となつて居るのであるから、豈に大したものではなからうか。果して天下をあげてかくの如き擧に贊意を表してゐる、上は廟堂の大官より下は陋巷の文士に至る

まで、みな商兒をのべてその徳をたゝへて居る。いやまだその點に與つて居るものが一ツある、新聞紙がそれである、賣藥品の廣告以外、飜譯ものの廣告が、どれほど新聞社を益した事であらう。これみな國家の盛事にあらずして何であらう。

エリザベス朝にイギリスがイタリヤの文藝を取り入れた時も、それが十八世紀の初めにフランス文學から影響された時も、レツシングであつたか、ラインの彼岸から來るものはみな謳歌されると云つて、フランス大學の模倣を慨嘆したドイツに於ても、吾が日本の今日ほど外國文學の悦ばれた時代はないであらう。昨今一圓本と稱して、世間から歡迎されて居るものは、大半飜譯文學である。世界文學とか、世界大思想とか、近代戲曲とか、近代……とかすべて飜譯でないのは殆んどなく、飜譯と銘を打つてないものでも、内容は飜譯であつて、正直に飜譯と看板を出したものよりも、さらに甚しい飜譯であつたりする。私はどうしてこんなに簡單に、こんなに容易に、社會を益し書店を益し、文人を益する、都合の良い事業を、人がこれまで思ひつかなかつたかを怪むものである。人は或は文藝の商品化を難ずるかも知れないが、文藝の事は云はぬとして、飜譯に至つては、何もそんなにやかましく云ふ筋のものではない、もと／＼商品であるのではないが、初めに云つたやうに器械で拵へるよりも容易に製造しうるのではないか、これが商品でなくて何であらう私は斯ういふ事業に依つて人々が利益を得、同時に世間に利益を與へる事を以て尤も近代的な、また最も賢明なる事業と考へて居る。只氣の弱いものは、こんなに洪水のやうに外國文學が流れ込んで來て、果して良いものかと心配するものもある。前に云つたやうに古往今來世界の何國に於ても、これほど外國の文學の流れ込んだ事實はないのであるから、或はその爲めに人心は食傷しはしないかと、氣づかはれるのも一應はもつともである。併し私に云はせればそれは杞憂である。買ふ人必らずしも讀むのではないし、また讀んだ處で斯うして出來た飜譯は容易に解りつこないからである。解つては飜譯ではない、解らない處に飜譯の價値があるのである。實に不思議な事であるが、日本では飜譯と云ふと解らないものになつて居る。これは嘗て私の説いた處であるが、西洋の諸國では飜譯といふと讀み易い解り易いものになつて居る。それは成句や慣用語が説明的になるし、文體も感情的でなくなり、概して理智的説明的になるからである。然るに用語文脈の組織が全然相違するためでもあるが、日本では飜譯が全く不可解になる、不可解は飜譯の主なる資格である。そんなわけであるから、それほど飜譯が澤山に出ても、それがために人の心が動かされるとか、在來の思想が亂れるといふやうな事は決してない、そんな事を心配するのは全く杞憂に過ぎない。

從つて近時の飜譯は粗雜であるとか、門外漢であるとかいふのも筋の通らない論である、えて左樣いふ事は老人の言であるが――現筆者も老人であるが――それは全く事理を辨へぬ言である。一體私は飜譯不可能論者である、頓智の意味に於て飜譯は出來ないものと心得て居る。それ故新潮社の飜譯は定評があるとか、杜撰なものであるとか、そんな評判はよく聞く處であるが、私は少しもそれに耳をかさない。何となればどうせ出來ない飜譯であるから、それが良くても、惡くても結局は五十步百步であるからである。もつとも物事の相違は五十步

百歩といふ處が大事なので、低氣壓と高氣壓との差は比較的僅少だし、體溫は三十七度なら平溫だけれども、それを三度越した四十度は大熱であるのだから、況んや五十步百步は大變な相違にちがひないが、それは場合に依る事で、何事も一律には行かない、零に對しては一だつて無限大であるから、不可能に對しては如何なる誤譯も誤譯も顧るに足らないのである。

私の考へる處に依ると飜譯には二種類ある。第一は原文に拘泥せず、ドシ〳〵と自分勝手に譯してしまふのである。原文で左とあるのを右と譯しても良い、然りと書いてあるのを否と譯してもかまはない、何でもかまはず、勝手に思ふ通りにやつてしまふのである。少々は文の筋が通らなくても、話の關係が變でもそんな事には頓着しないやり方である。これは則ち氣分に依つて譯すので、これを稱して氣分譯とか云ふさうである。その例は私があげるまでもあるまい、隨分譯山にあつてすでに讀者の十分に承知して居られる處であると思ふ。今一つの方式はそれとは反對の、逐字譯である、一言一句も忽かにせず、原文の通りに譯するのである、さうして出來上つたものは、通例何が書いてあるか一向に解らない、解らない筈である、譯者その人にも解つては居ないのであるから、併し飜譯としてはまことに忠實なもので、これ以上は望み難いのである。例をあげると面白いのであるが、前の方式のにしてもこの方式のにしても、うつかり書いて叱られるといけないから、かけかまひのない處を云つて見るが、或る處でゲロオワアムと言ふ字を蛆に似た蟲で夜後尾の方が光るものだと、先生が言つたら、生徒の一人が、先生それは螢ではありませんかと言つたといふ話があるが、第二の式の飜譯はこの呼吸で行くのである。キイク、デイスなら週間の日、インゼ・ロング・ランなら長い走りの内にと言つた具合に行くのである。この兩式は尤も大事なやり方で、今日の多量生產がこの式で行くのかどうか私は知らないが、これで行くのが尤も容易で都合の良いやり方である事を私は斷言して置く。

これは本題の飜譯製造會社とは關係のない事であるが、序で故一言して置かうと思ふ事がある、それは日本の文學を西洋に譯して嬉れしがつて居る人の事である。私は日本の文學の卓越して居る事に異議を唱へるものではない。外國人がそれに感心して、それを自國語に飜譯するのに異議を抱くものでもない。併し日本人自からが自分の文學を他國に譯して得々たるのは甚だ可笑しいと思ふ。可笑しい計りではない、或る意味に於ては吾が恥辱でもあると思ふ。その事自體が國辱ではないかとさへ思ふ、少くとも事理をわきまへた事ではないと思ふ。西洋人がさういふ飜譯をするのを助けて、それを完成さすなら結構な事であるが、自から進んでそれをやり、却つて西洋人の助をかりてそれを公にするなんていふのは、少し馬鹿氣た事と思ふ。かりに一人のイギリス人があつて、それが日本語に精通して居たといふので、シエイクスピアの飜譯を企てたらどんなものであらう。一寸考へられない馬鹿氣た話である。外國の宣教師達が、昔聖書を日本語に譯す時には、或はさういふ事があつたかも知れない、それとても日本人の力がその大部分を占めて居たであらうと思ふ。さすがに國自慢のイギリス人でもシエイクスピアやミルトンを日本語に譯さうとはしなかつた。それは出來ない相談であるからである。外國語で自分の考をのべた

とか、創作をしたとかいふのは隨分西洋にもあるが、私は寡聞にして、まだ自國のものを他國語に譯したといふ例を、外國の文學上で耳にした事がない。蓋しさういふ事があるかも知れないが、恐らくそれは稀有の例であらう。然るに誤譯會社のある日本では、それが往々行はれて居る、學生のために日本文を英語に譯する例を數へるためのものならば、それは已むを得ない事でもあるが、左樣でなくて日本文學を外國に傳へるといふ意味で、それが行はれて居るには少しく驚く、が、さらにそれが意外とも例外とも考へられず、當然結構な事と考へられて居るに至つては、さらに驚かされる次第である。どうも日本はどこまでも誤譯國で、さすがに誤譯會社の出來るのも無理はないと頷かれる。

誤譯國と言へば日本の事物はすべて誤譯である。政治も、教育も、事業も何もかもさうである。その内には良譯もあれば誤譯もある。文藝の誤譯の氣分譯もあれば逐字譯もあらう。飛行機の墜落とか、電車電燈の停電なんていふものは恐らく誤譯から來たものであらう。然らずんば拙譯の致す處であらう。私は三越に行く度に、なるほど西洋のデパートメント、ストアを誤譯したら、恁うなるのだなと感心する。恐らくこれ等はうまく誤譯したものであらう。これに反して須田町に立つて居る銅像は確かに誤譯である。而もあれは逐字譯の方の誤譯であらう。恐らくこれほどイギリスの原文を一字一句、そのまゝに譯して醜惡を曝したものはあるまい。須田町と言へば、これも嘗つて私の言つた處であるが、その場處そのものが誤譯である。兩國でも、この廣場でも、舊來の廣場をつぶして、新らしい廣場の誤譯をもッて來たものである。これ等は顯著なものであるが、今日の吾が社會に無數にあるいやな事、間違つた事の多くは、この誤譯から來て居るのではあるまいか。

日本の事が一切誤譯であるとすれば、この國が古今東西無比の文學誤譯國であるのもまた怪むに足りない。誤譯製造株式會社の出來るのも當然な事である。併し誤譯といふものゝ目的とする處は、一體何處であるのであらう。さういふやかましい事は、私には解らないが、兎に角自國以外の者が、どういふ事を考へて居るか、外國ではどういふものゝ見方をして居るか、どういふ風にものを感ずるか等の事を、作物によつて知り、それによつて自分の考を豐富にし、自分の考へ方、もの事の見方、感じ方を整へるのである。結局それは自分のためにするものである事は言ふまでもない、果してさうであるとすれば、その誤譯の仕方も自から定まつて來る筈である。それはこゝに私がくづぐづ説く必要もあるまい。然るに若し其處に誤譯といふものがあれば若くは拙譯といふものがあれば、それは全くその目的を達し得ないのみならず、それが有害なものになる。さういふものは、むしろ無い方が良い。何となれば丁度須田町の銅像が醜を曝すやうに、電車、電燈が、人を困らすやうに、間違つた考へ方や間違つた見方感じ方を傳へては、世を毒する事になるからである。よしそれほどでなくても惡い誤譯は、その原作に對する人の考をあやまらすものである。私一個としてもさういふ經驗がある。その一例をあげて言へば、私は小供の時バンヤンの誤譯を讀まされたが、恐らくその誤譯が、まだ文學的思想の幼稚の時に出來たものであつたからであらう、甚だ面白くない

ものであつたゝめ、今日なほあの有名な作が嫌ひである。一方には世を害ひ、一方には原作を害ふ、この場合シエイクスピアの言を逆に、災害は二重になる。甚だ恐るべきである。讀者は咎めて言ふであらう、貴樣は前に飜譯といふものは容易なものだと言つたではないかと、如何にも左樣言つたが、それは商品としての飜譯で、文藝としての飜譯ではない。もつとも私は飜譯不可能論者であるから、その點から言つても飜譯の事をやかましく言ふ資格はないのであるが、併し同時に飜譯は出來ないが、解說は出來るのである、即ちパラフレイズは可能であるから、それによれば原作の考へ方見方感じ方の紹介は出來る筈である。

なほも一つ言ひたい事がある、それは飜譯なるものは、あまり宛にならないといふ事である。能ふべくは飜譯などは見ない事にして貰ひたいのである。これも飜譯不可能論に關係があるが、贔屓目に見ても飜譯は贋物である。原作の細い筆づかひ、色彩、氣分などは紹介しがたい。ヨオロツパ諸國の間にあつても左樣であるから、況んやすべての事情環境の異つた東洋の言葉を以て、或は東洋の筆を以て西洋の氣分を出す事は先づ不可能である。私一個としては西洋のものでも、甲の國のものを乙の國語を以つて讀む事はなるべく避けて居る、よし讀んだ處でそのすべてに信賴しない事にして居る、少しでも西洋の文字が解る人ならば、私は直接原文に接する事をすゝめる。原文では澤山によむ事も出來ず、或は深く味ふ事も出來ないかも知れないが、左樣すればすべてが直接で所謂純粹なるものが得られる。そして直接純粹なものでなければ、何も強いて外國式のものに接し、半可な外國通になる必要はないのである。もし飜譯に依つてヨオロツパの文學を說くものがあれば、それこそ理義をあやまつたものであるが、今日は往々さういふ人を見受ける。さういふのは板畫に依つて、西洋の畫を論ずるやうなものである、そんな飜譯を讀むよりも下手でも日本の作物を讀んだ方がどれほど益する處があるか知れない。幾時間もコップに注いであつたビイルよりも、惡いながらも上かんの日本酒の方が良いと同じである。たゞ〳〵飜譯を讀まんとするものがあれば、私は飜譯有害論を唱へたい位である。

飜譯株式會社の話はいやに眞面目になつた、まつたく飜譯なんてものは、そんなに眞面目に考へるべきでないかも知れない、これは矢張株式會社に賴んで多量生產をやつて貰つた方が自他のため、世間のためであるかも知れない。元來日本がさういふ國であるから。



雪國の雪物語

樺太の冬と裏日本の冬

竹内大三位

一、軟雪と硬雪

寒いから雪が降るといふ、雪が降るから寒いといふ、が雪國らしい雪國では餘りにも寒い時は雪は降らぬ。東京や京都でも雪の降らぬ爲に降る以上の寒さの日がいくらも有る。『寒極』を僅か五百里の西に持つてる樺太は甚だ寒くて、コンスターチを吹き飛ばすやうな硬雪ばかりが吹雪いてゐるが。普通に東京や裏日本の各地で降る綿雪牡丹雪は『雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立て徘徊す』などある割合寒くない軟雪である。

北へさへ行けば雪は多いと思はゞと間違ひである、寒い所ほど雪が多いと思つても間違ひである。樺太は越御高田よりズッと北で又遙かに寒いが雪は高田の稍三分の一である。

二、歡賞の雪とその程度

ガラス戸越しの雪見の炬燵酒、下戸ならそれは茶であらうとも、庭の雪、或は二階などから稍や廣い森なり川なりの有る野山を眺望するとして、之れが一番簡易なると共は幼稚な雪見である。

凡そ雪は踏んで見、轉んで見、吹雪かれて見、手なり腰なりに攜ふべきをも携えて、廣くも深くも親しく歩いて見ねば、雪の雪らしい面白さは到底わかるもので無い。一尺の雪にである、二尺の雪にである。詳しくは霙や霰から三寸五寸の雪を經て五尺七尺の雪に一冬半歳か間冬籠りして見ねば、雪を見たとはいへない。

個人の庭園に在つては三四寸から六七寸以內を見頃と言はふ。雪國の庭園は一尺內外までの雪を眺め得るやうに出來てゐる。公園又は市街の近郊などは二尺くらゐまで。山林、原野などでは三四尺くらゐまでの雪を觀賞するに宜しいであらう。四尺以上五尺を過ぐれば最早觀賞の域を越えて、正に冬籠りの趣味であらねばならぬ。冬籠りは交通の可也に不便な山里などに於て、奧ゆかしい樣に豐富な田園的山村的情趣をさへ橫趣するので、この場合雪は如何ほど多くも差支無い、とも言ひたいが、此の雪の下に何々村在りも殺風景で過ぎたるは及ばざるが如く、身親ら冬籠りして見ると事實六七尺を越えるは、あまり感服出來ないやうである。八九尺から一丈何尺ら雪は、厄介とか危險と

か丶如何しても少しは伴ふので、人間は雪から一種の壓迫を蒙る。それはホンノ僅かではあるが積々五六尺の雪のやうに親しみを以て接する事が出來ず一寸目ざわりに成るのである。

吹雪の荒れ狂ふのも二日三日ぐらゐは我慢も出來る。それも時には善からうなど丶、朝のお膳から雉子の薩摩汁に盃が添えられたりする。遠來の客は勿論隣家の小供まで泊めてやつたりする、が、それ以上五日も六日もは如事にのんきな山村の冬籠りと雖も少し困るのである。

「澁柿に貧居閑なり種ふくべ」と言つた風な山村では秋の終ると共に冬籠りの準備を爲る。岩魚や鱒の乾物、猪や猿の燻肉、野菜各種各樣の貯藏、小供や老人の慰みにもなる栗や椎や胡桃や榧などの實から、初春までの間百何十日が間焚くべき薪や炭、取分け河馬のやうな體した積などを風當りとなる北側の屋根から窓近くへ高き七八尺にも積みなんどして、雪圍ひといふ一種の垣と共に爰に自分共の巣といふよりは身を入れる貝殼が出來上がる。北側に積み上ぐる薪を雪が更に包むため北の寒風を遮り屋内を暖かにする、薪が少くなると共に春暖が徐々に來る。でも年に依つて案外永い冬もあるので薪ばかりは成るだけ澤山に準備して積み上げて置く。

兎や猪を狩り、雉子や鴨を追ふのも一二尺の雪に銃携えて出て面白いのである。夜更けて臺所の流し口へ狐や狸がコン〳〵鳴きながら食物を尋ねて來るのを寂しく聞かれるのも此程度の雪である。今から三四十年前までは越中も越後も之等の鳥獸は甚だ多かつた。それは寧ろ迷惑なほど多く居た。少年時代の自分が冬の夜、番頭や兄などゝ共に爐端で、一度煮た親芋を再び焚火の周圍に並べて焼きながら、能登岬から鹿が三十何頭、大蓮華聯嶺の山峽森林を傳ふて十八里の波路を村の浦にまで泳ぎ着いた話や。黒部川洪水にはエモリサエモリといふ長さ數間の水蛇が出て巾は一里以上の大濁流の上を從横に馭け廻るといふ話など聞いて居る時、勝手口の方には毎夜のやうに狐の聲を聞いたものである。翌朝は雪の上の其の足跡を見て女中が。

『昨夜の狐は隨分大勢だつた』

といふ。大勢でも六七匹の親子であらうが、普通は一二匹、來ぬ夜も無論有つた。自分に狐の聲は嬉しいものではなかつた、それは子供らしく早寢すれば聞くに及ばなかつた。下男共は狐は捕ふなどは少しも思はなかつた。捕るには骨折りだし可愛想だし、下手すると狐から仇返しに夜路で化かしたりされては汁の實として美味しいくらゐの事では無いと思つて居た。自分は小學校の教室から、小川一つ隔てた直ぐ目の前の土手を狐が急がず歩くのを見た事もある。小供が雉子の卵を拾つて來たり、鴨の雛を捕へて來た事などは近年までまだ有つた。

雪と共に獸などは村里近くへ餌を求めて來た、村とはあまり遠く無い越後の親知らず附近では狢が非常に多く、冬は人家の床下へ來て子を育てるを普通とした、狢の數が人の數に十倍廿倍するので人と狢の勢力相伯仲し、人は狢を害せず狢は人を害せず自然と妥協が出來て居るなども面白い。それから親知らずの蝮は更に狢の十倍も廿倍も多く居たが之れとても人を害することは殆と無かつた。

その狢も蝮も鐵道開通以來は極端に減少したであらう。同時に少し人家を離れてはまだまだ澤山に居る事と思ふ。

姉の家は五六町離れた野中の一軒屋で有つたが農家相應に邸内が數千坪の所を六尺位の川を流し水車に米を搗かせたりしてゐた。これへ毎年初冬には屢々鮭が遡つて來た。夜の九時から十二時頃へかけて騒しい水音は瀬か鮭に相違ないから『それ水音だ』と紙燭で出て見る、矢張り鮭だといふので松明をともして賑々しく三尺豐かの大物を獲る事も度々だつた。その庭の一隅に狸が七匹の兒を育てて居たのを發見したのも七八年前の事である。

八千八谷と呼ばれる黒部溪谷の山林には猪鹿猿熊などが澤山に居る事は勿論だが、彼等は冬更け雪深むと共に漸次山裾の村落へ出て來る。

斯様にして山河草木風雪等の自然が、最も偉大なる勢力を表示して居り次いで禽獸虫魚の類が隨分盛んに繁殖してゐる地方に在つて雪は最も面白い。由來越中は不思議な自然に惠まれてゐる。一萬尺の諸峰は國の四分の三までを山林で占め、其間から北陸道七大川の四つまでを育成して一度田畑を灌漑した末が無數のプラクトンに依つて、全然鍋の形に出來てゐる富山灣内へ、日本海來往の各種魚族を誘ひ入れては出るを許さぬ。峻峰高岳の裾は直ぐ此海なのだが海は渚から直ぐに非常な深さで底が暗いために、滑川名物螢烏賊、きうり魚等の各種發光魚族が住み、沖遠くは毎年春夏の交に蜃氣樓を出現する等、等、等數へ盡せぬものがある。こんな國土に於てこそ雪は見るべく踏破すべく最も面白いのである。こうして一尺以上十數尺までの雪それぞれ雪國らしい雪國としてあらゆる物を抱擁してゐるのである。

越中越後越前飛騨加賀等の山村では時々一丈を越え稀に二丈に達する積雪に、一寸閉口するのだが、越中の飛騨境に近い長棟村大豆谷は四十何尺といふ一寸想像し難い程の恐ろしい積雪レコードを有してゐる。雪も之れだけ積もると九夏三伏の炎天にも解けず、大谷石の如く堅いのが未だ何尺か地面を蔽ふて殆んど手の附けやうが無い。でも人家の附近と南面の傾斜地などが黒い土を見せるので重要蔬菜くらゐを播種する。それから村民相輔け合つて、川水を畑へ流し、畑中で焚火して湯を沸かして撒きなど色々と工夫して是非とも入用な田畑の若干を雪中から救ひ出すといふ。雪の下にパンどころか大迷惑なのだが、有難い事には誰の所有ともわからぬ山林が一里も二里も三五里も續いてるので少し遠出すれば地表露出の南面傾斜地はいくらも有るといふ。

こんな風では此雪の下に長棟村在りの建札を何度建て直しても亦復た雪に埋もれるであらう、北極地方の雪よりチット始末が惡そうではないか。

三、裏日本の雪と都會の雪

『觚は觚ならず觚ならんや觚ならんや』と昔の人も言つたやうに、雪は雪ならずと叫びたいのは裏日本の雪に馴れた身に、東京始め東海道各地の雪を見た時である。箱根や日光は山だけに惡くは無いが尚ほ且つ喰ひ足りない、それに寒氣が強過ぎる。兎にも角にも裏日本の雪と表日本の雪とは可也の相違有ることをつくづく思ふ。

俗謠『いざり勝五郎車に乘せて、曳くや初花箱根山。(初花ことば)紅葉のあるのに雪が降る、嘸ぞ寒かつたでござんせう……』情あり景

あり、見るがやうに美しい誠に善い歌である。これ位な所が表日本の雪の第一步的。

東海道は吉原驛に近いピンカン松原の左富士、富士形に眞白く切取られた碧空は愈よ碧く、松原の松の濃綠とその幹の黑龍の如きうねりに附き纒ふピンカンの赤い珠が、一層の鮮かさを以て美しく見られる所、雪は地上に二三寸、昨夜降つた今朝、稍や十萬石ほどの大名行列が通る。丁度廣重か誰かの浮世繪にありそうな所。之れが表日本の雪の第二步的。

夜來の雪は今朝に至つて一層激しく降りしきり夕暮近く尙ほ止む氣色は見えない。さらば酒暖めて帝都の大官豪商などが、密かに自働車走らせて向島あたりへ雪見に出かける稍や五寸の雪。之れが表日本の雪の第三步的。でも翌日の午前十時には最早泥まみれ、昨夜は綿よりも美しと見た月に風情の待乳山も醜きむら消え、半夜の夢に似た歡樂の儚さをつくづく思はせる。之が東海各地の雪の大凡そで、大都會ほど此憾みを深くするものがある。それ以下の雪には雪見酒の顚末だ成らざるに、銀花地に落ち泥にまみれて元の枯木枯草の荒凉として目に痛ましいなどは京都でも大阪でも略ぼ同樣である。

志賀重昂先生が『さらさらと積もるは傘の雪ばかり』の妙趣を知らんと欲せば京の雪に若くは無く、同じ京の雪にても、三條大橋柳の梢拂ふ所に若くものあらじ云々と言つてるのは、雪國ならぬ地方の雪を善く說明してゐるものと思ふ。

枯れはつるかやが上葉に降る雪は更に尾花の心地こそすれ

西行法師

支那の詩に見ても『去歲荊南梅似雪。今年荊北雪如梅。』とか『長安雪後似春歸。』とかあるやうに、東京や京都の趣味の雪は抗州や南京などゝも相似て先づ此の邊を出ないらしい。酒汲むべし歌唄ふべし但だ此の程度に於てゞある。

都市の雪の五寸や六寸は降り終らぬ前からどしどし取り捨つべくして雪景が見たくば郊外へ出るが宜しい。仙臺金澤富山新潟秋田青森函館札幌等の多雪な都市では、例令ば年內の降雪は降るに從つて取り捨て、元日から二月末までは殘して、それ以後は亦降り次第片ッ端から捨て去るといふやうにして各地各適當の時期を擬定處分すべきであらう。斯くすれば解雪の不潔と不衛生と通行の不便などから免れて雪に對する美感をも損はぬであらう。

大谷光瑞先生は自分の敬愛する一人だが、先生の博學博識を以てして尙ほ且つ雪を理解せざるものと見え、昨年頭の某雜誌に『冬の美は雪にあり、雪の美は淺にあり深にあらず、一尺を越ゆれば多きに過ぐ、況んや數尺十數尺をや』それから『雪景の美は雪後の少時間にあり、是れを過ぐれば醜言ふべからず』とて雪解けの泥濘の不快を說いてゐる。之れは雪國の雪でない。解雪の泥土は不快としてもその一兩日又は六七日は六ヶ月から八ヶ月の在雪期と比べては甚だ短くして勘忍すべきものである。終年雪の消えぬ地方も世の中には在るのだし。解雪時でも雪國の山村では多年東京に見るやうな解でも屁相な泥深い不體裁は無くて反つて長松亂立の間に、一塊消え殘る雪は遠目に惡か樣かとさへ疑はれて風情あるものである。泥が一度裾や袖に着けば好何に洗つても跡を殘す大都會の泥、卽ち塵埃と糞尿と下水とあらゆる[illegible]

とで成り立つ泥それを、裸足で踏むべく手で握むべき朝露夕露の田圃の土砂とを一緒にしたり。淺草田圃のおはぐろ溝と『道の邊の淸水流るゝ柳蔭暫時とてこそ立ちとまりけれ』の淸冽掬して飲むべき山村のせゝらぎとを同一視されても困るのである。

大谷先生が美とする五寸や七寸の雪の今日降つて明日消ゆるものは自分に言はせれば未だ雪の數に這入らない。二厘三厘を懷にして錢を持つて居ます、でもあるまいし、大正琴の枯れすゝきで私の娘は琴も引きますと言はゞ少々をこがましからう。

四、苔桃と猿麻桛の山道

軟雪を說くにふさはしい地として既に黑部溪谷の片ほとりを撰んだが硬雪のためには樺太の豐眞山道を先づ紹介したい。

南樺太中央平原に在る豐原と西海岸の要港眞岡の兩市街を繫ぐ十九里の山越え。此所は南樺太で一番廣い、一番高峻な山脈が可也復雜に縱横もつれ合つてゐる、その山又山を一低一高、羊腸として森林、溪川、斷崖と縫つて行く所の思ひ切つた惡路である。

人でも馬でも車でも腰には必ず五つ六つから十五六までの鈴を着けてヂヤラン／＼と音を立てゝ行く、之は熊その他の野獸を避けしめて其の禍害から免れる方法なのだが、又一面に濃霧や吹雪の中の相圖ともなるので、隨分深い山奥であるから始めは矢釜しい、うるさいと思ふ鈴の音が、程なく賑やかで賴もしきほどの物に聞きなされ、遂には山愈よ深くして木立のみ繁き邊へ這入つては、自分の鈴の音が自分に寂しく聞かれて來る、伐木丁々山更に幽なりで鈴の音が山やら森やらに反響して遠くの谷川の音に和し、雲霧は時々山を隱し谷を埋め身自らをも包み隱す一方道は極端に粗惡なのだから、朝夕浪かしらばかり見て居た島の住民は偖ても恐ろしい幽邃な山奥よと度膽を拔かれ一轉してそれが直ぐ寂しさとなる。何所かの茶人は瀧は見るもので無い聞くものだと言つたが、此の山道のシーンとした一種の微妙な音を聞くと、峠に立つ身は山脈から催眠術でもかけられたやう變な氣になる。

白樺や椴松の密林は多くは猿麻桛が萠黄に近い薄絲を蓑龜の簑の如くその暗綠色の枝と黑褐色の幹の間に垂れて居る。それを濃霧が忽ち隱して間も無く現はす、神仙を想はせて今にも鶴に乘つて白髯の翁が空へ來さうにさへ考へられる。

濃霧の事を普通にガスと言ひさるをがせを『ガスの花』と言つてゐるが、面白くも名づけたものだ、正に濃霧の精の如く思はれる。こんなものに見られてゐる足元にはフレップと呼ばれてアイヌからも露西亞人からも珍重がられる深紫の苔桃の實が澤山に在り、見下す谷間には一面の蕗その高さは六七尺に達する。路の間を流るゝ谷川には驚くべき多數の岩魚と鯇が居り、鱒の時期には川は鱒で埋まる。魚を捕へるのか水を飲むのか此の川邊へ時々豹のやうに大きくて獰猛な山猫が來る、眼ざしの優しい麝香鹿が來る。

こうして可也に内地と變つた世界なのだから雪も亦變つたのが降らうといふわけである。雪には馬橇となるが平常は馬車を此の惡路に通はせてある。車上はお尻や腰が痛くて泣かされる、自分などは殆んど半死半生、何の因果でこんな地獄道を通るやらと悔ひの八千度臍を嚙

んだが、早曉眞岡を出發して夜の九時に豐原へ着くまで僅に午餐の小一時間を途中の驛逓に休むだけだから、十人が十人乘客は皆閉口垂れる、降參する。自分は其の翌日は無論一日寢た、その翌日もその又翌日も翌々日も背骨や尻が痛かつた。ウラヂホストックでは數でも河原でも平氣でニチエオーを叫びながらかッ飛ばして行く赤鬼御者の馬車は有名なものだが、此の山道のと先づ好一對らしい。

橇では尻は痛まぬが其の風の冷たさ、雪は降らなくとも風は地上の雪を吹き上げて旅人の顏を打ちつける、丁度栗の毬で擲られるやうな痛い冷たさである。それが思ひ切つた惡路なのだから橇は二里行つては横に倒れ、三里行つては崖下へ轉がり降ちる。その度毎に帽子が飛んだり襟首から雪まみれになつたり。時には雪中に半身を埋めたり、馬には太腿を蹴られたりするから、車にしても橇にしても殆んと命懸けの山越えである、姙婦や病弱者などは屢々にして意外な災禍を蒙るといふ。

人家の在る所までは如何しても五里や七里行かねばならぬ、こんな山中で吹雪に逢つたら命懸けである。日でも暮れゝば勿論の事である。降つてゐずとも地雪の吹きつけるひどさは大底でない。一陣の天風八尾八谷を鳴り響かして來ると思ふ間も無く雪の粉に白濁した風は巨大なる縞目を成して、巾何里かの大河が流るゝやうに北より南へと猛然驀進して山谷も洗ひ撫でゝ行く、その風速が一秒時二三十メートル内外、人や馬を谷底へ吹き落す位はお茶の子である。自分は市街に於てゞあつたけれども風速四十二メートルの吹雪に苦しめられた事もある樺太の冬は强風暴風が附き物である。こんなのが一陣又一陣、或る時は山も岡も谷も白い巨浪の如く動き來るかとさへ疑はれたりする。人は此の間に立つて一足進むは愚か息つく事をさへ許されて無いかの如く恐れわなゝくので、五六十貫のオットセイを撲り殺した漁場豪傑も、仁王の如き顏をそむけ目を閉ぢて唯だ倒されじとだけ道の邊の木にでも岩にでもすがり付くのである。

こんな山奥でなく村から村への一里かそこらの道でも、風が地雪を吹きつける時だけ顏をそむけて立ち停まり、風過ぐれば又歩き、五歩十歩廿歩にして又一陣來れば亦復た立ち停まつて風をやり過して行く。之れが夜に入ると一層道がわからなくなる。寒さは増す、空腹が催す、遂には自宅へ僅か一二丁の所で死んで居たりする。死なぬまでも足を踏み誤つて水へ入れゝばそれは必ず恐ろしい凍傷となつて、足を一本切り捨てゝ親には勿論女房小供にまで申譯のない悲しい仕末となつたりする。

こんな吹雪の中へウッカリ飛び出したら人でも鳥でも獸でも非常な災難である、小鳥などは大底死ぬものらしい。

山道の雪が四五寸まで精々七八寸までは風さへ靜なら人は通るが、少し風が强ければ二三寸でも遠慮する。

　雲は秦嶺に横たはつて家何くにか在る。雪は藍關を擁して馬前まず。

といふ韓退之の詩は實に此の山道の硬雪のために豫め作られたかの如く善く當て塡まつて居る。日本の歌や俳句に雪を扱つたのは甚だ多いけれども、明らかに硬雪を歌つてるものは殆んど全く無いのである。俳句に『粉雪』が有れど、少しく異り、事實激烈なる冷寒を伴ふ

て氣分は著しく違ふやうである。

降雪のために道がわからなく成つてる所へ吹雪のため更に方角も目しるしの木立ちなり橋なり岡なりもわかわからない、で夕方から夜通し道に迷ふて、同じ道を二三度も廻はり歩いたりなどで身は冷え切つて心身共に過勞し、遂には雪と風とに嬲り殺しにされて息が絶える。可愛相なのになると親子四人くらゐの一家族などが、悲鳴をあげる裸木の根元で、かたみに相抱擁したまゝ遂に凍死してるのを、モウ曉け方の空の半輪の月が、一時間前まで狂暴に吹き卷いた事も知らぬ顔に照らしてゐるといふやうな悲慘極まる光景も、屡々見聞されるのであつた。

五、一つ屋の吹雪の夜

豐眞山道の中央、分水嶺となつてる所に一軒の茶屋が在る。驛亭といふのだ。馬車や馬橇や『ノソ』と呼ばれる犬橇などでは午餐の場所となり、徒歩では一泊の所となるので、郵便でも小包でも人でも馬でもが、豐原と眞岡の元來た道へ、往者と來者とが物資だけ交換して歸つたりする。

その爲めに設けた深山中の一軒家で、酒屋へ三里豆腐屋へ二里と言つた位な優しい事では無い。こんな場所だから此茶屋自らが宿屋も兼ね料理屋も兼ね湯屋も兼ねる位は珍らしくは無いが、郵便局も兼ねる、雜貨店でもある、銀行の仕事も代理する、臨時には巡査駐在所とも成り、鱒と岩魚の幾籠かを谷川から拵へあがつて來た男の二三が這入れば、忽ちにして此茶屋は魚市場ともなる、何でも兼ね、何にでも早變りする、不思議にして重寶無比なデーパートメントストアである。通行者にでも漁、樵、獵者にでも一切萬事に此所を利用され、同時に一切萬事が奇妙に此所で間に合ふのである。それが東西南北何れを向いても七八里行かねば人里らしい所へは出られない位置なのである。

此の不思議な宿屋で折り惡く七日も八日も吹雪に降り込められた男女が有れば、八九分通りまでは戀愛關係を生じるし、それが若し未婚者で有れば八九分通りまでは夫婦になるといふ。丁度絶海の孤島に唯だ二人の男女が居るやうな譯で、其の邊に出雲の神樣以上の摩訶不可思議のものが有るから面白い。東京や大阪邊で夫婦に成れないと言つて泣き悲むだあげく、華嚴の瀧へ行つたり淺間の山の噴火口へ飛び込んだりして親戚朋友にまで迷惑かける若い男女などは、こんな所へ來て理想的生活の實行としやれのめしては如何、命を捨てないで濟むだけも結構かと思ふ。

雪の頃泊りの人は富山の賣藥商も樺太廳の高等官も、半ば乞食のやうな淫賣婦も皆一室に寢るのである。『一つ屋に遊女と寢たり萩と月』以上の光景である。例令室が四つ五つ有つても、一室に一人宛などはとても寒くて眠られないのである、强ひて望みに從つて別々の室に寢させたら、翌日になつて三人共凍死してゐて起きて出て來ないといふ、童話のやうな事にも成りかねないのである。で朝から火氣の絶えない一室へ、家族も客も皆が集つてストーブを中心にしてその周圍に寢る、夜中に小便に起きたものは誰でもストーブへ薪を投げ込むといつた順序である。

或る寒い夜は如何に充分に十二分に防寒設備をしても所謂『夜具が凍る』のである。室の隅などは勿論、少しでも火に遠い所では毛皮まで重ねて着て寢てゐる所の夜具の上が一面に霜が置いて眞白となる、夜具の襟は鼻から出る息が一面に凍りついてパラフイン紙の如き薄氷が黒天鵞絨にピッタリ附いて、その上まだ東京京都ならお台所の水道のカランにさへ稀にだに見られぬ一二寸長さの氷柱までが下がつてゐたりする。古來『氷の嚢』と稱した詩想の上の言葉が樺太では事實だから始めは誰れも驚かされる。

それほど寒い此の家でも、窓にはガラス戸が二重に這入つて居り、毛布を張つたり、屏風を建て廻はしたり、相當以上の防寒設備を爲て寢るのであるから、裏日本の雪を見馴れた人達には一寸想像が出來ないこと、暑さに於て華氏九十二三度までしか實驗しない人に、赤道直下の百二三十度を說くやうな譯であらう。

餘りにも寒い夜は寢ないで、赤くなるまで薪を入れたストーブの傍へ、敷布團の二つ折りを幾つも重ねた高さ一尺五寸ほどの大座布團として胡坐は勿論腰をかけたりして、餅を燒き兎の骨附汁を煮て、熱燗の酒を飲みつゝ浮世話に夜の明くのを待つのである。

而して誰れもが横綱大關のやうに着ぶくれて居る。毛織のシャツは上下共二枚づゝ重ねた上へ兎か犬か狐の毛皮を、尻まで當るやうにした一種のチョッキを着込み、厚綿の衣服を重ねた上へ、褞袍を羽織りまたその上に袖の有る夜具を猪首に着重ね、正に小山の如く丸らなつてストーブの傍へ寄り添ふのである。それでもまだ寒いなア寒いねエと言ひ續けにして夜を明かし、翌日午前十時も過ぎて寒氣が緩んだ頃若干時の安眠を貪ったりするのである。

どうにもならない吹雪の五日なり七日なりの山中滯留に依つて、自然の力の如何に偉大なるか、又人間は蠅や蚤と五十歩百歩の微力なものである事をつくぐ思はせられる。——吹雪の數日間は樺太の如何なる大都會に於ても、商業も工業も學校も役所も新聞社も、汽車の停車場までが臨時休業である——昔の高士とか賢人とかゞよく鹿や鶴を友としたのが如何にもと頷づかれて、目前の犬が大切なる親友であることも悟るのである。犬に向つて『お前寒くは無いかい』と慰めの言葉をかけたいほどの心持ちにも成り、犬に於ても拔け目なくストーブへ寄つて來て、人間に對する信賴ぶりは實に眞面目で切實極まるものがある。それが犬の一擧一動にも克くわかるのである。自然の壓迫に對してばかりも家畜類などを共に居らしめる必要が俗世間と離れ勝ちな古聖賢には有つたのであらう。北極探檢などは毎度犬が携へられ、殊に最近の飛行船ノルゲにノビーレ少將が犬を我が子以上にも愛してゐるのは尤も千萬な事である。即ち山奥の一つ屋で泊り合はせた男女の間に戀愛關係が生ずる結婚するといふのも相似た事情である。こんな場合人間は非常に親切になる、その親切が非常に有り難い、同病相憐むといふのか、人の將に死せんとするやその言ふ事善しといふのか、克くはわからぬが群集心理に類した、祈禱の心理狀態にも類した一種の傾向が人間の胸に暖く湧いて來るのである。

六、地が凍て家が隆起

眞岡で攝氏零下二十七度とか敷香で四十三度とか言つても、そんな

熱氣は所謂內地で產れて內地で育ちやがて內地で死ぬといふ人達には到底想像出來ないであらう。暑さから見ても東京で最高が華氏九十二三度として其れ以上二三度を增す每にその苦痛は容易な事ではない。それでも百度位までは想像が出來るとして、百度が五日も七日も續いたら如何か、日射病熱射病以下多數の病人死人の出來るだけは先づ間違ひない。それから先き百十度、百十何度ともなればどんなものか、一寸わからない、東京に產れて東京に育ち東京に死ぬほどの人達には到底思ひ及ばぬ事であらう。故に雪が二三寸降つて『オイ寒い！』と言はずに居られない東京の人達を始め、硬雪の眞味を知らぬ人達のために、改めて樺太の寒さの程を、自分の日記に依つて一寸說明する。

假岡港に於て自分の住居は日當りの惡い場所で無く、又低溫の地でも無かつた。が、十二月に這入るとグツと寒さが違つて來た。大切に育てた水仙の一鉢は、寢る時には坐布團の上に乘せて洋燈を其の葉先き近くまで垂れ下げて自分の枕の直ぐ傍らに置かれたが、それでも零下六度八度十何度と低下する頃には、一溜りも無く、へと〳〵に萎びて枯れた。矢張り草木は大地に深く根を下ろして居るべきものは今更のやうにわかる。羽翼の有る鳥は南方暖國に去り、羽翼の持たぬ熊や狐は地中へ深く穴を掘つて這入るなどは、如何にも天然自然に出來て居る、地上は膚を切り破るほどの寒風でも、烈風が家でも船でも大木でもを根こじ吹き倒すほどひどくても、地下へ三四尺這入つて居れば、溫暖で平穩で、無事泰平なくらひは熊や狐で無くともわからう。

十二月も中旬へ這入つて間も無くのこと、二夜三夜續いて家の西側がミシ〳〵、ギ、など變な音を出し、同時に戶障子の建てつけが甚だしく惡くなり、風の吹き入る隙間がその邊に幾つも出來てゐる。驚きながら、調べて見ると、此家の西側はお臺所で下水口も有つた爲め、地中に水氣も多く且つ日當りも幾分惡かつたので、地が寒さで凍つて膨脹し之れがため家の西側だけが一二寸ほど持ち上げられたのであつた。わかつて見れば苦笑の外はなかつた。

樺太では冬に入る前、家每に柱と壁の境目でも、天井板の一枚一枚の重ね合はせ目でも、窓枠とガラス戶の隙でも、疊でも石でも鐵板でも、凡そ人工でつぎ合はせた部分は其所に何等の隙間が無くても必ず紙を二重くらゐに目張りするのである、それをせねば其所から乾度雪が吹き込んで來るのである。爰に一坪の壁の中央に一尺四方の小窓があり、その窓のガラス戶は唯だ一枚のガラス板で有つたとしても、爰に壁と窓枠の間、窓枠とガラス戶の間、ガラス戶の骨とガラス板の間と三重に四角な窓だから三四の十二枚、それを二重に貼るから二十四枚の目貼りを必要とする。有しガラス戶が三尺に五尺位のものだとガラスも九枚位になるから、ガラス戶だけでも七十二枚の目貼りとなり、それに腰板有る戶障子などもそれ〳〵その板のつぎ合はせ目に大小二枚を二重に貼ることを忘れてはならない。然るにどんな小さな家でも之れ位のガラス戶の五枚や十枚は必ずある。疊の合はせ目ならば、疊下として新聞紙が二重にも三重にも敷いてあるにもかゝはらず、なほ時々は茶碗に一二杯ほどの雪を座敷の眞中でも隅でもへ吹き上げて來たりする。樺太の雪は魔物である。風も通られないやうな所を通つて來る、こんな目貼りなんて世界の何所にも無いものである。

八疊間一つの天井の目貼りが二百何十枚、四間ほどの自分の家で總

計千何百枚貼つて其れで完全に風が防げるかと言つても中々左樣で無い。それを家の西側隆起のために大部分の目貼りが捩れて所々破れる、破れたものは貼りなほしてヤレ〳〵と安心して四五日もすると又ミシミシメリ〳〵と二晩ほど來た。此の上西側の隆起は多少の危險も有らう、重ねての目貼りも厭だなつと恐縮してゐると今度のは北側の凍結隆起であつた北は玄關入口だから外套の雪其他水氣も多少はこぼれて居やう、それに日陰なのだから西から北へ傳染して來たわけである、とあきらめて又目貼りの修繕をする、又二三日して夜更けにミシ〳〵と音がする今度はどうやら東側らしい。そんな風では南側も遠からず地盤隆起でミシ〳〵カナと思つてると、果して六七日の後に亦復たメリ〳〵とかキとか變な音がして夜通し續いた。之れで家を一週したから地盤の隆起も終つた事と思つたに、其後とてもタマラなく寒いと思ふ夜は乾度少しつゝ隆起の音がした。自分もあきれて苦笑の外は無かつた。

　こんな風だから物書く時の机の上の鉛筆、飯食ふ時のチャブ臺の丸箸などは、一ケ月あまりの間は、今度は北へ今度は東へ、又幾日かしてからは南へと走り出したがる事生命有るもののやう。それは或時は可笑しかつたが或時は堪え難い不快と一種の悲哀を感ぜずには居られなかつた。兎にも角にも隆起の一週で稍や平均はされたものゝ、困つた事には家の略ぼ中央たる居間にストーブが有つたゝめ此所だけは地が凍らず從つて隆起せず、中窪の住居となつて皿屋敷と命名された。誰の家でも皆な斯樣かと聞いて見ると、今年は雪の間際に大雨が二三度有つた爲め多くは斯うだが、秋の頃から氣をつけて家の周圍に水氣を避けて置くと毎年必ず斯うとばかりでも無いと先住者がいふ。

　こんな風だから床の間の懸幅も香爐も花無き花瓶などは勿論、佛壇の内には佛樣まで前のめりに傾いてござる、祖先の御位牌に申譯無いやうに思はれて、今更ながら都落ちの悲哀にホロリとして此邊で樺太の寒氣にド膽を拔かれる。

　斯樣に言つても左程粗末な家では無かつた、十五坪か二十坪の小さいものでは有つたが神田邊の下宿には優つても劣る建築では無かつたと覺えてゐる。

七、便所の奇觀珍觀

　更に奇拔なのは便所で有つた、それほど寒いのだから何とか一と工夫有つて然るべきだが構造は東京のものと同じである。三年前物故の中山侯爵は冬期便所へ火鉢を入れた、德川の大奧でもそんな事が有つたやうに傳へられ、朝鮮の貴族は便器を室内に置き、ロシヤの女中はお臺所の流しへ立小便して知らぬ顔だといふが無論寒さのためである。樺太ではそうもせぬ代はり、襟卷は勿論、外套を着て御丁嚀に帽子までかぶつて便所へ行くのが多い、それは雪隱大工など、叩き大工の惡口にも使はれるやうに便所は客室よりは粗雜に出來てゐるから、風雪の吹き込まぬ便所は先づ樺太中に一個も無いと言つて善からう、家に依つては數ケ所から吹き込んで、如何に便所の内とは言へ一尺位の積雪をさへ見る事も決して珍らしくないのである。

　便所の中の僅か二三十分間の滯在に、肩や腰の上を白眞にして出て來る事も勿論珍らしくも何とも無い、出てから手を洗ふ水が無い、手

を洗ふ水が無い、手洗ひの水器は厚い氷を張つた上へ更に雪で包まれて、如何なる勇士をも頑として近づけないと言ひ張である。それで雪隠を出た人は自分の扉や縁の雪を取つて、兩手で揉んでそれ位で洗つた事にして置く、實際は氷と雪のため可也清潔化してる便所だから、そんな事で我慢して置く心持ちにも成り得るのである。居間へ歸つてストーブの上の洗面器の湯で手を洗ふなどは、十人に一人も居ない貴族的な仕方である。

衣服とても澤山に重れ着てゐる上に外套まで重ねての便所入りは不潔物の附着する危險が無いかと懸念されもするのであるが、それは懸念さるべくして事實は一切無用であつた。凡そ嚴冬時に於ける樺太の便所ほど清淨なものは澤山は無からうと思ふ。總てのものが悉く凍結して水晶の紙に包まれた上にまだ雪の銀粉に蔽はれて居り、黴菌などゝ言ふものも其存在は許されて居ない。尾籠な話で少々恐縮だが、糞が肛門を出ると間も無く凍結してしまふから其れは美しい食器の中へ入れても決して穢く無いのである。詳かに說明せぬが、黄金の花に水晶の薄衣を着せるなどは如何なる詩人も畫伯も思ひ及ばぬ美化であらう。

どうせ尾籠大手だから今少し我慢していたゞきたい。一方糞壺を見下すと、地獄に在りと聞く劍の山のやうに、直立した黄金白銀の劍や薙刀が幾つも立ち並んでゐる、こいつをおわい屋さんといふ大男が來て長さ三四尺の太い鐵棒を振り廻はし、ガチツ、ガチツ、ガラ〳〵と、打ち折り打ち碎いて、スコツプで、掻き出しては普通の塊の上へ、石片とも薪ざッぽうとも屑芥ともつかぬ格構に積み上げて運び去る。鼻をつまむ臭さなどは決して無いだけは一寸結構である。とても奇妙な光景であるから一度活動寫眞に撮つて皆人に見せたいくらゐ。イヤもう澤山とおつしやるか、どうも失禮致しました。

八、海まで氷て水がない

夜更けまでストーブの上で、茶人の所謂岸波やら魚目やらにグラグラ沸いて居た南部鐵瓶が、寢る時一寸しまひ忘れたばかりに、翌朝は、その熱湯が僅かの時間に凍結して、氷の膨張からあたら鐵瓶を三つほどに破碎してゐることは、何れの家でも一二度は必ず有る事なのである。鐵の弱さにも驚くが氷の强さには一層驚かれる。

每朝臥床から出て見て一番困るのは水の無いことである。酒まで凍つて目方で賣買され、モウ五百五十匁飲んで非常に酩酊した、などの挨拶も出る位だから、お臺所の水瓶桶は厚さ凡そ三四寸の氷が張る、如何な太い火箸で打つても突いても、女中や妻君の腕力では手の皮が破れても其の氷は破れない、柄杓の柄で突けばその首が飛ぶ、大男が係つても矢張り駄目である。こんな時には臺所か玄關か椽側か薪置場かの一隅へ吹き込んで溜つてる雪——大概の家は必ず家の內の何所か一二ヶ所くらゐは雪が吹き込んで一升や二升は積もつて居る——を二掴みほどを洗面器か湯沸かし器に入れて先づそれを熱湯に造り、之れを手桶へ注ぎ込んでその氷を破るのである。斯くて始めて家の內に水が有るのである。水の變形に過ぎない雪に埋もれながら水の不自由なことは、まるで航海中の船のやうである。その海さへも見渡す限り氷を以て包まれてしまひ、波の音も聞かれねば船の往來も止まつてしま

ふのである、從つて魚も漁れなくなるのである。

眞岡の町には十幾つかの共同井戸が有つた。その一つを十戸二十戸、多いのは三四十戸もが共用してゐた。で朝夕の混雜は勿論だが、大方の妻君達が水を汲みに來る時、手桶やバケツ一つなら無論手に持つが、二つ三つとなると橇に乘せて曳く、中には犬や子供に先曳きさせるのもゐる。こうして水は前以て充分の準備をして置かぬ事には、吹雪や地吹雪或は非常な寒風のために、欲しくても汲みに行かれぬことが屢々にして起るのである。從つて前日來の汲み置きの水は頗る冷たくて甚だ厚い氷が張つてゐる、それを張らせまじとする、張つたのを破らうとする、冷たいのを暖めやうとする。そんな努力ばかりも並大底のものでない。だから家族の多い家庭では、浴室の据風呂に、たわしを掛け廻はし石鹸で洗ひ上げて、美くしくした所を水溜桶に應用するのである。

こうして夜寢る前に、稍々翌朝まで保つほどの薪なり炭なりを焚いて置く、その鐵砲爐の火が朝まで保たずして、水を凍らせたにしても其の氷は薄くて濟むのである。必要は發明の母であつた。不衞生などと贅澤は言つて居られぬ、之れが一番便利な工夫であつた。

甚だしい寒い朝では井戸も涸る、北の寒風は板圍ひで除けてあれど、なほ雪が吹き込む爲めであらう。吊瓶もガラ〳〵ドシンと勢ひ込んで落しても、なほ破れない厚氷もあるので、それには熱湯の鐵瓶を、隣家の妻君も向家の娘も持ち寄つて、一度に澤山を注ぎ込んで、やつと井戸の氷を破るといふ大騷ぎを演出する。此の眞岡は樺太で一番暖かい土地なのである。

日常の生活が之れだから人皆は雪と寒さを極端に恐れる、熊に喰ひ殺されたとか鯨に呑まれて死んだとかいふ話は決して無いのだが、雪や氷のためには年々少からぬ死傷者を出してゐる。雪の下にパン有りと喜んだり、雪遊びに夢中となつたりする地方の人々には誠に意外なものがあるのである。

こうして十月下旬から六月上旬まで八ヶ月ほども雪と惡戰苦鬪して來て、待ち迎へ得た春には、草も木も百花一時に吹き揃ふこと、丁度高山の御花畑のやうに妍を競ふて美しいのである。その時の樂しさは又格別で、凡そたまらぬと言つたほど愉快なのである。それは勿論雪の苦痛を裏書きするものなのであつた。

こうして裏日本の冬籠りとは冬籠りがスッカリ違ふ。軟雪に見るやうな長閑な幽靜な、長い氷柱が軒から地雪に屆く、その水晶簾の窓の内には專ら古書を耽讀する、と二三日置き位には誰かゞ兎か山鳥などを土産に携えて訪問して來る。五尺四方位の圍爐裡でそれを鍋に煮ながら、山幸河幸畑幸の昨年か來年の話。東京の大火も太陽の黒點位にしか思はぬ浮世放れぶりで、詩趣津々たる氣分は、樺太の硬雪には到底見るべくも無くして、風も雪も寒冷のほども、萬事が鋭きに過ぎ强きに失して、弱い自分共には少々應へ過ぎ、所謂紙衣さわりが荒過ぎるので、甘酒から一飛びにコニヤックかキウラソウのやうな强い酒を飲される心地にも似るのである。

然し如何樣なる寒氣にも恐れぬだけの完全な家と、遺憾無き防寒設備とが出來てストーブの前に英國のココアを喫しながらベルリンの音樂や歌劇をラジオで聞き得る時期も、最早間も無い事であらう。自分が居た頃は樺太全島の人口五萬、今日は十八萬に增加して豐眞山道にも自動車が通つてゐる（終）。

石田勘平の平民學校

福原　武

一

最近の教育思潮として我々の注目を惹くものは成人教育である。戰雲全くおさまらぬ頃、英國内閣が成人に對する教育の普及奬勵に全力を傾注したことは我々の記憶に新らしいことであり、其の動機は言ふまでもなく教育上の機會均等といふ點にあつた。

機會均等は近代社會運動の標語であるが、社會生活上の機會均等は、この教育上の機會均等が得られることによりて、はじめて全き實現となるといふ見解に基づく成人教育の理論は、蓋し時代の聲としての當爲を有するものである。

英國はこの成人教育運動に就いて最も豐富な經驗を有してゐると謂はれてゐる。一九〇三年のW、E、Aの事業、一九一〇年の勞働大學の創設等は、遠く一八世紀末のグラスゴー市の機械工講習所、更に其れより約八十年を溯つてのバイブル讀會などによりて點ぜられた燈火であるとされてゐる。

次いでは米國である。一九一一年、ケンタッキーの山の中でスチュアート夫人の開いたムーンライト、スクールを手はじめに、現在では國民教育のプログラムの最初の要項に文盲者解放が擧げられてゐる。

我が國に、最近成人教育の要請を聞くに至つたのは歐米に刺激せられてゞあるが、我々の歷史に其の精神と事業は存さなかつたと、此の方面を過眼するは妥當でない。享保十四年（西紀一七二九年）京都車屋町通り御池上る東側に於て石田勘平の開いた平民の爲の講舍は、立派に文盲の成人を化育するの効績を擧げ、松平樂翁を一驚せしめ『心學』の命名を受け、寛政年間の頃に至れば、心學を講ずる講舍（平民の學校）は、全國に普く、其の數二百餘りを數へられた。其の平民の爲の講舍の精神は、一の教養機關も有さなかつた民衆を、人間性の本能である善の兒たらしめ、人格的自覺を喚び起さんとしたもので、これは決して歐米の理論と實際に比して劣るべきものではない。

社會生活上の種々なる罪惡や不德は、概ね人間性の教養を缺けるに胚胎する。これを救ふべきものは、カントも言つてゐるやうに、善良なる教育である。善良なる教育はこの世界に一切の善を生み育てる母のふところであらねばならぬ。が、人間の有する善人の素質を恒久に發展させる爲の教育は、少年期青年期の教育のみでは達せられない。階級や貧富の關係によりて異なる教育を豫想せしめるやうでは、其の種の望みは到底つながれないのである。

我が石田勘平の平民學校の精神は、カントの所謂この世界に一切の善を生み育てる母のふところであつた。英才を集めて薫陶し才華開くるに至つてこれを適處に活躍せしめるは天下至樂の一なりと古人は言つてゐるが、人間性の教養を欲するは僭上なりとされ、武士

の優越意識を滿足させるべく下位の人間として、沒人格的一生を餘儀なくされてゐた時代の民衆の教師として、懇ろにこれを化育教養し、人間の裏に潜む善人の素質を自覺せしめる道德的回生を吹き込むにあつた石田勘平の行へりし教育の如きは、人類的理念に最高と評價せられねばならぬ業であらう。近時成人教育平民教化を唱ふる者、歐米の理論と實際を我が國に輸入するに急にして、一思して民族の生んだ此の威大不朽なる精神と事業に學ばんとする無きは遺憾である

　英國に於て機械工講習所や勞働大學の事業を見たるは、其の社會上の事情の然らしめたものであつた。卽ち産業上の革命が、其の生產にたづさわる勞働者問題を生ぜしめ、やがて新興勢力となるべき展開を孕んで來ると共に、社會心情は漸く勞働問題に目覺めんとしたからである。

　我が國に於ける最初の成人教師石田勘平の起つたのも、ほゞそれと同じやうな社會上の事情を素因としてであつた。卽ち德川家康が開いた江戸幕府の中半元祿、寶永を過ぐる頃、泰平に馴れた武士が家祿に安んじて進出の意氣を次第に失つてゆく側に在つた平民、就中町人が、次第に新興者の意氣を孕んで來て、遂に幕府政廳の識者をして町人教化の必要を感ぜしめるまでになつたのであるが、特權者であつた武士の御用をつとめてゐた儒者には、町人の教化は出來なかつた。試みた篤志者も匙を投げなければならなかつた。何故ならば儒者の說く治國平天下は特權者の成心を離れては何等の魅力も持たなかつたからであつた。儒教の其の阿世的教化は、これをCivic morality として鼓吹しようとしても、武士の倫理としての外には殆と通用ならぬものとなつてゐたからであつた。

　この社會事情に刺戟されて起ち、然も官府及び特權者からは迫害的な冷遇をされながら、人間の本質である善に住し、本來自然の人間は道德の兒として平等でなければならぬといふ無限の大勇猛心を以て、十五年間を勤勞した偉大なる平民の教師が、我が石田勘平であつたのだ。

　德川時代にも平民の學校として寺小屋なるものが既に存してゐた。が、これは畢竟蒙の師であつたに過ぎなかつた。成年の民衆は、特權者武士の前に暗愚であること、人格的要求を持たぬことを一の義務として強ゐられてゐた。儒者はこの狀態の辯護者として素町人士百姓などに『道』を說くこそ鄉愚、德の賊なりと呼ばゝつた。

　其れ故、我が石田勘平の蹶起は時代の缺陷に應ずべきものであつたにかゝはらず、何れの時、何れの國にても必ず先驅者は迫害せられねばならぬ常法は、彼の事業の上にも矢張り免れなかつた。卽ち儒者は擧つて俗學談化の徒と嘲つた。佐藤一齋の如き人ですら、其の『言志錄』に於て、女子小人に寸益あるのみ、愚夫愚婦を誘致するもの、要するに士君子の歯するに足るものなり、と明言して憚らなかつた。武士が彼と其の事業を目して、身の程を知らぬ痴けと一蹴したことは言ふまでもなかつた。殊に石田勘平の前生が京都の一商家の丁稚番頭であつたといふことは、民衆からさへ、鵜の眞似をする鴉なりと哂はれたのである。

　然しながら、幕末の偉人横井小楠は、石田勘平の事業と精神の如何に威大なりしかに一驚せざるを得ない事柄に直面して其遺業を讃

へた。

嘉永四年の大饑饉の際、横井小楠は藩命を帶びて東上したが、其のとき京洛を中心に各地に於て、石田勘平の遺髪を嗣ぐ心學者が、饑民を救濟し官府をして後へに撞着たらしめる功績を擧げてゐるのを目擊して、長岡監物に送つて

「中國筋、長防三備藝州、別て風水の害を被り困窮甚しく、饑民道路に連續仕候。右は大抵京大阪をさし參り申候間、二都別て夥しく、既に大阪にては去月初より所司代御手許に達出候饑死二百餘人と申すことにて、其實は五倍も御座候由、私共も現在死に垂んたるを見申候て、甚だ以て惻怛仕候。大阪は今以て御救恤無之、京都は去冬霜月より御救恤之有候。此起りは例の道話社中より打立て、今以て此社主として取計らひ、餘程其仕法も宜しく、嚴重に行はれ申候。道話社中と申すは、寶曆の末頃京都にて石田勘平と申す人、元は程朱學にて專ら主として愚俗を諭し、其人一切金錢など貪り申さず、甚だ愚俗に信ぜられ申候。此の流儀にて今以て京都に社中有之、其流儀國々に及び申し、盛なる事に御座候。京師にて豪家など此の社中に入申候へば、すぐさま人物も宜敷相成申候位にて、第一に尊信せられ候ことに御座候。既に當町奉行なども御信向にて、節々講釋御聞きにて御座候。初め官府より米五百石に銀二十五貫位御出し方と相成候間、道話社中京師の豪商相誘ひ、都合一萬兩餘の金相集り三個處に施行所を設け、公平に取計らひ施行仕候間、大抵京師には饑死無之由、こゝもと學者多分に候へども、斯様なることには夢更氣附き申さず、却つて道話者に奮行相讓り候と一笑仕候。」

横井小楠の右の書簡は、石田勘平の創始した心學が、どういふものであつたかを如實に物語つてゐる。「京都にて豪家など此の社中に入申候へばすぐさま人物も宜敷相成申候位にて」の評價は、如何に人間性の教養を人人が欲してゐたか、それを與へる唯一の機關として町人間に欣求されたるものであつたかを指示し、其の學問を實際化する平民的訓練が如何に行屆いてゐたかは右の饑民救恤の模樣によりて躍如としてゐるのである。

外部的に附着せる特權におもねて、其の御用に學を賣り、實際の教化に迂愚な治國平天下、靜所體認などゝ唱へてゐた儒者に對して、民奴と共に人間的完成に憧憬れたる石田勘平と其一派の精神は比ぶべくもない貴きものであらねばならぬ。然らばかゝる貴き精神を發揚し、かゝる聖なる事業を展開せしめたる石田勘平は如何なる人であつたらうか。

二

石田勘平がどういふ人物であつたかは、彼の著作である『都鄙問答』『齊家論』『女教訓』や、門人の編纂した『石田先生事蹟』『石田先生語錄』『石田先生遺稿』等を讀んでみればわかる。

彼は淋しい求道者であつた。彼は追憶してゐる——

『私の性質は理窟者で、幼少から人に嫌はれた。十四五歲の頃、ふと心づいて悲しく思ひ、それから道に志した。』

丹波國桑田郡東懸村の理窟者であつた彼が、彼を嫌ふ郷黨に別れて京都に上つたの

は、寶永四年、(西紀一七〇七年)彼が二十三歳のときであつた。京都での彼の生活は、一商家の丁稚からはじまり番頭に終る二十年間であるが、その年々、彼はどういふ心でゐたか。

『道に志した私は、三十歳の頃になつて、理屈者の性癖を矯めることが出來たやうに思つたが、なほ往々言葉の端にそれがあらはれた。』

淋しい自己反省である。少年にして既に少年らしくない志である『道』を求めようとしたのは、自分が嫌はれ者であるといふ悲しみからであつた。青年になつた彼には、其の悲しみが姿を變へる良心の不滿足があつた。

彼は實直で主人の信用を一身に擔つてゐた。忠勤なる點では彼に及ぶ儕輩は無く、好醜なる點で彼に比せらるべきものは殆ど近隣に見當らなかつた。主人の老母は却々の女丈夫で店一切の切り廻しを束ねてゐたが、善人といふ烙印を勘平に與へてゐた。そして死に臨んでは枕邊に侍するものに向つて言つた。

『何の不足もないから安心して死ねるが、たゞ彼の勘平の行末を見とゞけることの出來ないのが殘念である。勘平は態度立派な人間になるのだが、さうした處を見る望みは、斯うなつてはもう無くなつた。』

一商家に仕へる番頭として、これ以上其の心を滿たしてくれる評價があらうとは思はれない。が、勘平の良心は不滿足を訴へてやまなかつた。

郷愿は德の賊であると孔子は言つた。良心に充たされぬものあるを感ずる反省の鞭を持たぬものは德の賊であるのだ。一商家の使用人として分外の評價をされた勘平に、小善に安んずる心持の無かつたことは、彼の求道が終始淋しい自己反省に基礎づけられてゐたからである。

知識的要求は、勘平をして程朱から陸象山や王陽明の哲學に學ばしめ、神道に就かしめたが、物識りに安んずるには、あまりにかけはなれたる良心の惱みがあつた。知識を實踐に移す修行がそれを解除しようとして積まれたが、たゞ善人である誠直であるといふ評價を頂戴することの淋しさは彼を强くとらへた。

實に勘平の要請は、自分の性癖を矯めることにあり、嫌はれ者であつた年少の日の追憶は、何時までも淨化し得ない自分の性癖の上に、生新しい悲しみとなつて盡きなかつた。然ういふ淋しい人間である自分の本體は何んであるかといふ疑ひはやがて別な惱みとなつて生じて來た。

それは、やがて四十歳近い彼の心であつた。實踐的要求は、理屈者である自分の性癖を矯めつくすの境に入つたが、然うすると、これまで把持してゐたつもりの『性』が根本からぐらつき出したのである。『石田先生事蹟』は、この別な惱みに入つた彼は、三十五、六歳以後であると述べ、性を知れりと定めてゐたのに何となく其の性に疑が起り、これを正さうと諸所に師を求めたが、師とすべき人を得なかつたと言つてゐる。

當時にも學者は少くなかつた。勘平のこれまでの修道の關係から考へて、諸所に師を求めたといふのは、神道家、儒者の門をかたこなたと叩いたといふことであらう。勿論神道家にも儒者にも勘平にまさつた物識りが多く在つたであらう。が、今の勘平に師とするものは無かつた。何故ならば、今の勘平は明確に自己の本體を把握しようとし、自我を認

識しようと焦慮する形而上學的な大疑念を抱けるものであつたからである。

　勘平自身の告白は、門人の編した『石田先生事蹟』に『師を求めたまへども何方にても師とすべき人なし』としるされてある時の狀態を次の如く語つてゐる。

『或は一年、或は半年と開き巡つたが、初心であるのと、愚昧な性分であるのとで、これぞと心定まらず、どうしても合點が行かないで、年月歎いてゐた。』

　げに、この歎きこそは、求道者が逢着しなければならぬ最後の難關の突破點であつた。ゴータマの出家は求道の發端であつたが、修道積んで解き難い大疑を得て、諸所にバラモンの教へを求めたが、何處にも師とすべきものは無かつた。斯くて菩提樹での證悟は、驚くべき大勇猛心が遂に自性見識の見を離れる成果であつたのである。

　石田勘平は、少年の日の悲しみを解除し、青年の日の淋しさを解除する求道を經て、年齡四十に垂んとし、其の最後の難關に突き當つて求むるに師なき歎きに深かつた。

　其のうちに、或處に隱遁の老師を得た。老師其の名は正順、海谷軒と號し、もと某藩の丈夫であつたが、致仕して京都に世塵を避けて禪三昧に耽つてゐたと『石田先生事蹟』にあるが、勘平はこの禪家の老師によりて、はじめて更に工夫すべきである力率を開かしめられた。

　老師は勘平を見るなり一喝した。

『汝は心を知つて居るつもりであらう。が未だ知つては居らぬ。心を知らずして聖人の書を讀むは毫厘の差を千里の謬たらしめるものである。』

　彼はこの老師に對して、自分の論議は大石に當る鷄卵の如くであるを感じた。そして大勇猛心を奮つて、新らしく禪の修養に入つた。

　年四十歳の正月上旬、勘平は病める老母を看て郷國に在つた。そのとき忽然として多年の大疑を散ずるを得た——堯舜の道は孝悌のみ、魚は水に泳り鳥は雲に飛ぶ、性はこれ天地萬物の親なり——と。

　禪の修業に入つて心を盡し身を勞らせて一有半年あまり、漸くこの工夫の成果を齎して京都に上つた勘平は、また老師の一喝に逆つた。我性が天地萬物の親なりと見るは『性に目なし』に至らぬものである、と。

　再び、はげしい精進に入つた。斯くて一年半ばかり、遂に經驗的自我を止揚して、我の本體を把持することが出來、證悟を開いて自性見識の見を離れた。時に勘平は四十二歳、享保十二年のことであつた。そして二十年間仕へた主家を離れたのも此のときである。

　其の心は、證悟の彼が、豫ねて宿願であつた人間の教養の機會をすべての人々に均等ならしめ、武士といふ限られたる範圍に學校や學問や儒者があつて、大多數の平民——百姓町人のために道を說き人間性の教養を授けんとするもの一人も存さぬといふ不合理を解除せんとする聖き首途としてであつた。

三

　番頭上りの石田勘平が、天下の教師として打つて出た當座ほどみじめなるはなかつた。席料や音物、謝禮などは一切受けぬ、男でも女でも手習ひ、謠、縫物などに出かける通りのふだん體で苦しくはない、但し男と女との席は簾をかけて區別してあるから遠慮なくお

出でなされ——と、徹頭徹尾大衆的に親切な教師としての繰れ出しも何等の反響もなかつた。

第一歩は、斯くて見苦しい足跡をつくつた。京都車屋町通り御池上る東側の、其の平民學校を訪れる生徒は無かつた。一人の聽講者さへ集らなかつた學校には、內輪の人々が招集されて聽講しなければならなかつたのである。

近隣の惡太郎どもは、偶々の來訪者に欣然と出で迎へる勘平の、生眞面目な樣子を垣間見て、客をよそほふて此の學校の門に訪れ、勘平が生眞面目な出迎へ姿を見ては、ドット嗤つて嘶子立てる——かうした日は、あまりに長く續いた。

或日のこと、內輪の一門人に講議してゐると、門に訪れる者があつた。門下生は迎へんに立たんとする勘平を引とめて

『また小供達のいたづらかと存ぜられます。お出迎へには及びますまい。』

勘平はおごそかに答へた。

『小供だと思つて出迎へせず、まことの求道者を失ふやうなことがあつたらどうするか。』

或夜のこと、矢張り一人の門下生を前に置いて講議にかゝらうとする勘平を、如何にも氣の毒に思つた其の門下生、

『私一人のためにお講議では甚だ恐れ入ります。お休講なさいましては——』

勘平は淋しい心をかくしながら、きつぱりと門下生に言つた。

『今晩は見臺と睨み合ひをしながらと思つてゐたところだ。一人も聽講があれば此の上の滿足はない。』

かうした日が、それは幾日繰り返へされたことであつたらうか。校門は徒らに惡太郎どもの遊戲場に弄ばされ、生徒を持たぬ教師の面はやつれて行つた。しかし倦怠を知らぬ教師は毎日一人か二人のために熱心になつて道を說き、神道、儒敎、佛教の三教說のふくむ眞理を、平易にくだいて述べてゐた。

其の熱誠と、其の說くところの世人に適したのと、この二つの點が、旅に汲み入れられる清水のやうに、反響が無い、應えが無いといふうちにも、幾年か經ぬれば水垢がたまつて旅の目をふさぐやうに、世と人との注意を惹いて來る唯一の力率となつて、生徒無きを歎いた勘平の平民學校にも、やがて三々五々集まるやうになつた。

惡魔の足の早いのと同じ速力を持つ好評の聲は、それからそれへと飛んだ。日常茶飯にこと寄せて、すべての人間の裏に潜む善人の素質、人間性の欲求に直入して行く勘平の教說は、一度大衆の間に運び出されると、直に驚くばかりなる渴仰者をつくつた。そして、手を拍つて嗤ひころげた惡太郎どもの戲れ場であつた勘平の平民學校には、善人の素質から本能的に衝いて出る法悅のさんざめく賑やかしい雰圍氣が漲つた。

斯くて、京洛に梅巖先生なる大衆の教師が、はつきりと印象された。それは苦心慘憺平民學校の基礎を堅確にしたときの石田勘平に與へられた評價であつた。享保十四年から八年目の元文二年、勘平は居所であり平民學校の舍である京都車屋町の宅を引拂つて、堺町通り六角上る東側に移したが、言ふまでもなく教勢に然らしめられた發展として、狹隘な京都の居所を離れたに外ならなかつた。この頃には門下生のうちに、石門の孟子と呼ば

れる手島堵庵をはじめとして、齋藤北山、杉浦止齋、久河大江、木村南冥、及び慈音尼などの高足逸材が集まり、平民學校の事業は、其の効驗を著しくした。

勸平の名が擧り、其の平民學校としての講舍の勢力が大衆によりて支持されて牢固となるや、神道家、儒者、僧侶などはこれを憎み猜りと迫害を試みたが、或は勸平の至誠に畏れ、或は勸平の氣魄に打たれ、或は其の教説の眞理に忸怩として退くものが多く、恭敬其のもの丶如くであつた勸平も、道を抱いてはなれざる者のみが有し得る無畏を以て、あらゆる迫害を撥無し去つた。

其の著『都鄙問答』に於ける一儒者との對論は、其の種の迫害に答へたる勸平の面目と其の學の本領とが奈邊に在つたかを示唆するものとして興味が深い。

儒者は詰問した。

『商人は每々詐を以て利を得ることを本職としてゐる。然れば聖人の學問などゝいふものは、決して成るまじき道理である。ところが貴下の講義には澤山の商人が集るさうだが、貴下は一方では一方に都合よく、他方では他方に都合よく教へるのであらう。孔子の謂ふ鄕愿にして德の賊なりとは、貴に貴下のことだ。曲學阿世の小人、人を誣ひ自己を欺くものだ。自ら省みて疚しいと感じないか。』勸平は靜かに儒者に答へた。

『世人も貴下の如くに余を疑ふてゐる。商人は言ふに及ぶまい。四民の外である乞食にさへも道があるのだ。總じて言へば道は一であるが、士農工商それぞれの行ふべき道があるのである。』

二人の論戰は斯くて開かれて言々相持つて來る。

――乞食にも道があると言ふのか。

――然うだ。或人が江州に行つたところ一つの非人村があつた。其處の橋の渡初めがあるといふので立ちどまつて見てゐると、非人頭と覺しき者が圓座に座してゐる。村の者達が渡初の祝儀を其の前に持つて來たが、中に瘦せ衰へて色蒼ざめたる一人が、茄子を三個頭の前に進めた。非人頭が言ふに、汝は病氣だと聞いてゐたが、この茄子は何處から持つて來たのだ、と。瘦せた男は小頭から渡初めの祝儀を申し渡されたので、夜前他處の畑から盜んで來たのだと告白した。非人頭はこれを聞いて、乞食は盜をせぬものだ、盜をするなら乞食は出來ぬ、汝はこの村を出て行かねばならぬ、と言つて、其の小頭を招き、此の男の病氣の癒り次第村を拂へ、が病中は面倒を見てやれと命じたといふことである。即ち飢え死ぬとも盜みをせぬが乞食の道であるのだ。孔子は小人窮すれば斯に濫すと言はれてゐる。困窮しても正しきを守らば君子である。困窮して放肆なるは小人である。

――其の說は首肯する。が商人は慾が深く、常々貪ることばかり心がけてゐるではないか。それに無欲の教を說いて何になるか。猫に鰹の張り番をさせるやうなものだ。學問を進めるなどは全く無益だ。無益と知りながら講義する貴下は曲者である。

――商人の道を知らぬ者は貪つてばかり居るから終には家を亡ぼすのだ。商人の道を知れば欲心を離れて仁心となり、家業につとめ道に合するから繁昌する。これが學問の德ではないか。

――然うか。では聞くが賣物に利益を取ら

ず元金で賣渡すことを貴下は教へるといふのか。外で利を取らぬことを學び内證で利を取るならば實の教へではない。却つて詐を教へるものだ。出來ないことを強いると前後に辻褄の合はぬに至る。商人が利慾無く賣買をして濟まされるなどゝは、あまりに人を馬鹿にするものだ。

——いや、斷じて詐を教へるものではない。詐でない道理を話さう。貴下に聞くが祿を受けずに君に仕へる武士があるか。

——孔子、孟子と雖も祿を受けざるは禮に非ずと言はれてゐるほどだ。道によりて受けるのであるから、何の慾心などゝ謂はれよう。

——つまりそこだ。賣利を得るは商人の道である。元金で賣るは道ではない。若し賣利は慾であつて道に非ずとせば、孔子が子貢を弟子になされた理由が無くなるではないか。子貢は孔子の道を以て商賣上に用ゐてゐるではないか。商人の賣利は武士の祿に等しい。或所に大名屋敷に出入する二人の用達があつた。すると外からも出入を望む者があつて、其の納める値段が從來の用達よりも格段と廉いので、買物方の役人が怪しからぬとばかり、二人の用達を一人づつ呼んで、不屆至極だと詰つた。すると一人の用達は、御用御粗末に仕ることは少しも御座いませぬ、初めて御出入を願ふ者は損をしても品物を差し上げるものですが決して長つゞきするものでは御座いませぬと、空々しく答へて引下つた。

も一人の用達は直ちに恐れ入つて、仰せ御尤もで御座います。去年までは愚父存生にて用を達して居りましたが、愚父相果てまして以來、拙者まことに不調法にて手許困窮に陥りましたので、實は仕入に高利の金など借り、自然と差上げるものも高値となりました次第、まことに申譯なきことに存じます。殿樣の御高恩にも背くと申すもの故、一兩年のうちに借錢など相濟まし其の上で復た御用を勤めさせて頂き度う存じます。と申上げた。二人の言ひ分を聽取した後評議をした末、前に呼び出された用達はやめられ、後の用達は亡父の奢りによる貧乏を隱して我が身の不束に引受け、殿樣の高恩を忘れずに正直に申し上げたことは殊勝の至りであるとて、其の身の借財の始末をも助けてやり從前通り用向きを言ひつけることにしたと言ふ。商人に道なしといふは道理の無いことである。

——然し、諺にも商人と屛風は眞直では立たぬといふではないか。

——ハヽア、世の中にはかゝる聞き誤りが多いのだ。これは屛風と商人は直なれば立ち、曲めば立たぬといふのを取りちがへたものだ。屛風は少しでもゆがみあれば疊まれない、地面が平でなければ立たない。商人も同樣に自然の正直がなければ人と並び立つて通用なり難いのだ。

——利を取るは商人の道なりとしたら、天下の商人がみな此の品は元金はいくら、利益はいくらと明らかにして商賣するがいゝではないか。

——一應尤もなことだが、然うは參らぬ。商品といふものは時の相場によつて百目に買つたものが九十目でなければ賣れぬこともあり、また百目に買つたものを百三十目にも賣ることがある。相場の高い時は強氣になり、下る時は弱氣になる。これは商人

の私でやることではないのだ。今朝までは一兩に一石買つた米も九斗となり、小判が上つて米が下り、米が上つて小判が下るといふ風に、何品に限らず日々相場に狂ひといふものがある。元金は是れ、利益は是れなどゝ杓子定規で品物を扱つてゐるのでは商人の渡世が出來なくなる。商人が皆農工となつたら品物の流通はなくなり天下萬民は難儀しなければならぬ。四民各々其の分を盡して天下の安穩福祉を增して行くのではないか。商人の賣買また天下の助けとなるの道理である。商人ばかり卑しめる道理はどこにも無いではないか。

當時の社會觀道德觀がどういふものであつたか、そして石田勸平の卓見が如何に其れを革めやうとしたものであるかは、右の問答の示唆する要點である。

當時に於ては、民衆は社會道德の埒外に追はれてゐた。治者と被治者との關係があまりに間隔をつくり、上下の關係からのみ社會觀が基礎づけられてゐたので、下位の民衆に對する優越を達成せしめるべく、武士階級はあらゆる點に於て民衆の權利を剝奪したが、殊に道德的優越の達成のためには、武士の論理を確立すると共に下位の民衆を道德的に自殺せしめる方法を取つたのである。卽ち民衆は其の人格的待遇の要求を不可能にさせられた。

切り捨て御免なる社會律は、素町人土百姓を精神的に殺して、人格觀念に死なしめた。國家社會は、それを不審とせず、武士に二言はござらぬの衿持、切腹が實證する責任觀念が特權者の生活律であるならば、下位の民衆は然ういふものを持たぬことによりて安全な許しを、特權者の優越意識の滿足によりて與へられなければならなかつた。學問をすること、道を求めること、社會的道義に遊はんとすること、人格的自覺を喚び起すこと――若し民衆がかゝるところに着目するならば、悲慘を豫想しなければならなかつたのである。

儒者は、この社會觀を肯定した特權者の侍講であつた。勸平に攻擊の矢を放つた一儒者の言葉に見ても明らかである。そして、勸平の卓見は、實に此の社會心情の革命を實現せんとしたものである。彼は素町人土百姓のためにこそ道を說かんとしたのである。精神的に殺され、人格的に死んでゐるものに、更生の炬火を點じてやらうとしたものである。彼は武士の道德的優越を撥無しようとはしなかつたが、四民はみな本來自然の趣きに於て道德の兒であらねばならぬといふ認識から、無畏の大勇猛心を起して、本質的關係に於ては武士道も町人道も何等差異あるなしと天下に呼ばゝつたのであつた。

然も、彼自ら言つてゐる如く『たゞ一人たりとも教導したしと思ふこと病となれり』と、熱誠愛憐の至情を以て、延享元年九月、西紀（一七四四年）、六十歲で世を去るまで、教へて倦むことなき民衆の教師として、其の十五年間を勤勞した。其の死のとき、遺品といへば書籍三櫃、人の問ひに答へて書きとゞめた草稿若干、机、見臺、硯、衣類と少しばかりの勝手道具だけであつたといふ。生涯婚らず、自炊獨身の彼が、人格的に無視せられたる民衆を戀人として、その戀人の魂を甦へらせようとした聖なる傳道は、日本が有する誇りで無くて何であらう。

四

石田勸平の學は、程朱に基づくと稱せられてゐる。が、主觀的唯心論であつた其の學の內容は王陽明に近いのである。陸象山、王陽明の性理の說が其の思想的背景をつくる有力なる分子であつたやうに思はれる。

然し、彼は所謂學者ではなかつた。其の平民學校としての講舍を中心としての成人敎育、社會敎化といふ活ける事實を通じてこそ、彼の存在價値は絕大性に開かれる。

人格的に登高する門が國家によりて保證せられ、理想實現の道がとゝのへられてある現代に於て、大衆を人格的に無氣力にし、其の理想に對する不信を押し出すものは、實踐實行に責任を負はぬ先生である。勸平の時代は現代と事情を全く異にした。人格的登高の門は時權者の權力によりて封ぜられてあつた。理想を抱いて人格的要求を提出する平民には、兎もすれば切り捨て御免なる殺伐の風が迫つた。斯ういふ時代に於て、人間は何れの階級を問はず、否、四民の外なる乞食たりとも、本來自然は等しく道德の兒である、といふ理想に炬火に誘引化導するの事業を活かし得た石門學の內容は、時間と空間を無視する抽象論ではなかつた。

そして、平民社會の倫理として、平易、實踐を生命とした石門學の組織者の苦心は並々ではなかつたのである。石田勸平は、王陽明哲學に最も多くの滋味を得たが、しかし彼の組織した平民敎は、あらゆる思想の綜合であつた。彼は自ら其著『都鄙問答』で述べてゐる。

『本意とするところは、孔子の一貫の道、孟子の浩然の氣これなり。儒佛神の三敎も悟るところは一なり。』

また、石門の孟子と呼ばれる手島堵庵は其の著『私案なしの記』に曰く

『私案無しといふことは、神道より出で、大學の明德、論語の一貫の道、中恕、克己、服禮の道、中庸の中途、孟子の浩然の氣これなり。また佛敎にては應所住而生其心は私案なしにあたる。』

暗愚な當時の民衆であつたが、日本の文化の血肉となつてゐる神、儒、佛三敎の含む思想は、低い階段ながら其の精神生活の基調をなしてゐた。石門學がこの三敎思想を綜合する內容を以て民衆に臨んだといふことは、彼等に處世修道の力率を與へんとせる者として極めて用意深きことであつたと謂はなければならぬ。

然し、この思想の綜合は、嚴密な批判からは、學といふよりも常識としてゞあつたと謂はれるであらう。が、如何に低所の折衷主義であるとはいへ、そこに中心思想の無ければならぬことは言ふまでもない。

勸平自身の說いたところ、また石門學の敎師たちの述べたるところに見るに、石門學の中心思想は『心』を知ることである。松平樂翁は中澤道二から勸平の學問を聞いて、それは『心學である』と斷じたのであるが、蓋し其の判斷は適切である。心を盡す者は性を知り、性を知れば則ち天を知るのである、孟子も斯く說いてゐるが自分の體驗もこのところに在る、これ我が敎の基礎である、とは勸平の言葉であつた。而て此の所に基礎を置いた學の、其の極限の到達點を悟入の狀態に見ることが出來る。悟入が如何な極限世界であつたかは後に說くとして、暫時石門學の基礎である盡心見性に就いて述べやう。

これは、石田勸平自身の言葉に明らかなる

如く儒教精神の傳承である。しかし石門學は其れを渾然と日本化せるものとして、より深い地盤に立つたものである。即ち性を知り、心を知ることが學問であり神に合する所以であるといふ意識が知的要求のうちに、實踐的要請のうちに、宗教的憧憬のうちに潜在したるは、元來東洋的風格の特徴であつた。

日本の神道は、自然兒の神化に起源し上代の人々は人間的な情愛を神々の行動に於ける主導者として崇めたが、北畠親房が其の『廿一社記』に於て

『身正しく心明なれば我身即ち神なり』

と道破したのは、日本神道の思想が、人間の本心、本性のうちに神を見んとしたものであることを言ひ表はせるものであり、また『和論語』の著者が、

『みな人の直き心ぞそのまゝに神の神にて神の神なり』

と、日本思想の要領を端的に言ひ表はしたところに見るも、日本人の知的要求、實踐的要請、宗教的憧憬が、人間の本心、本性を味到するにあつたことが明らかである。

また佛教は、顯性成佛の宗教であつて、佛性は普遍なりとするところに其の基礎があつた。即ち人間の本心、本性を味到するは成佛の歷程であつた。

性を知り、心を知るといふことは、斯ういふ知的要求、實踐的要請、宗教的憧憬の極限が、人間の本心、本性を味到して、絶對知、絶對徳、そして神佛聖に還元されるの門として、東洋的思想を培養して來たのである。

人間が佛陀覺者になれるといふ信仰は、釋尊によりて印象を強められたところに發したが、それは元來佛性普遍として已に人間のうちに佛となる可能性を認めるところに基づき、北畠親房の言葉の如く我が身即ち神なる可能性に立つて日本神道が存し、盡心見性して天地の心となる可能性が儒教によりて開かれた。

前述の如く石門學の基礎は心を知ることである。が、陸象山、王陽明の亞流なりと輕んずるは不可である。石田勘平の言ふ『神儒佛の三教も悟るところは一なり』といふ思考は、決して陸王の學徒に過ぎぬもの丶有し得るところではない。また『心を知りてこれを練磨するに、神儒佛老一として捨つ可きはなし』といふ方法的精神は、單に諸説を集成するに過ぎぬもの丶把持し得べきものではない。

説くところには、神、儒、佛、老の諸説が雜へられてゐたが、それは如上の思考と方法的精神から判ずるに、自ら絶對の規範を有したるもの丶試みたる綜合である。その絶對の規範が、本心を知るといふことであつたことは勿論で、すべてをこれに照らして純化せんとしたところに、石門學の本領がある。そして、是は日本思想、廣くは東洋的風格といふ根流に於て、神、儒、佛、老諸家の説におのづから合してゆく點である。

本心を知るを基礎とした石門學は、石田勘平の所謂『私の心無き境地』また手島堵庵の『私案無しの境地』に到達して『止る』ものである。それは神道上の『身正心明即ち神なり』の世界に同じく、佛教上の『涅槃成佛』の世界に同じく、儒教で言へば『天地の心となる』極限である。

石門學がこの究竟の世界に到達せんとした工夫には、王陽明から得るところが多かつ

た。朱子學風の窮理主義は、たとへ『浹洽貫通して自得す』といふ靈活なる一心の發現を最後に要請するとも、博學、審問、愼思、明辨を待たねば不可能であつたから、平民教としての石門學は、其の程朱流の久しき積習を必要としないところに、獨自の工夫を凝らさんとした。石田勘平自身の體驗から言つても、彼の見性は禪師小栗了雲の指南に負ふてゐる。卽ち朱子學風の評價によれば、精神の獨り角力である禪の悟道に體得したものであつた。然し、打坐凝念を經ずとも自得することが出來ると工夫しようとしたところには、禪でもないものがあつた。

這間の消息を傳へるものは、石田勘平の著はせる『都鄙問答』である。これに見れば、石門學の工夫は、朱子學風の窮理でもなく禪學風の靜坐體認でもなく、日常行事の一切の上に處しつゝ一心を練磨することを主眼としたものであることが知られる。そして、此の點は王陽明學風に近い。王陽明の詩に

饑ゑ來りて喫飯し
倦み來れば眠る
只だ此の修業玄更に玄。

これは、人間一切の行事として得道の力率たらざる無き味到である。石門學も亦日常事物の上に處して、其の種の味到を得んとしたが、然し王陽明の思想は、築き上げられたる理念の高塔であり哲學であつて、石門學は一に事上練磨の知性の道場であつた。實に石門學の價値は社會教化に在つた。

五

私案を捨離して私案無き境地に到るといふは、あらゆる矛盾の解除される極限の世界に悟入することであつた。理念から其の境地に導入し得ない民衆を相手とした石門學は、導入を一に心理的な反省的訓練に取つた。彼等石門學の教師たちは、それを如何に行つたであらうか。

石門學の文獻には、前記した石田勘平自身にかゝるものゝ外に、『私案なしの記』、『我技』、『心學雨やどり』、『身體柱立』これは手島堵庵の著であり、『道翁逸話』――中澤道二、『松翁道話』――布施松翁、『あつめ草』、『心學教訓錄』――脇坂義堂、『鳩翁道話』――柴田鳩翁などがあるが、これらに表はされてゐるところに見るに、石門學の教師たちの唱へたところは――

『自己が從屬せる社會に對して、自己は正しうせられたる內的生命の必然的な現はれとしての道德的行爲をいたさねばならぬ。』

と、いふにあつた。平易に言つて、良心、本心に恥づるなき行ひをしなければならぬといふにあつた。これは石田勘平の所謂『私の心無くして何事にも當る』、また手島堵庵の『私案なしで一切の行事に處する』といふ本領を、社會的に說明し且實證しようとするに外ならなかつた

一心を練磨することであつた石門學の核心は、それを個人主觀の向深に限らないで、寧ろ社會的實現に置かれてあつた。社會を通じて、社會のうちに於て、練磨せられたる心の實證を求めさせた其の實踐教化が次第に開いて來たものは、社會的道義意識を以て、本心の本質と悟らせつゝあつた効驗である。

これは、道德其のものゝ社會的說明の傾向にある最近倫理學思潮を、既に江戸時代の中半期から末葉にかけて、石門學の一派が如實に表現したものであると稱すべきではあるま

いか。

世人は道と世事とを別々のものゝ如くに考へてゐるが、大いなる謬見である。世事を離れて、心を澄ませることが道の修行であるとなすことこそ異端である。聖人の學は、實に世事を種子とするものである。――と、いふ如き認識が、石門學の教師たちを通じて、民衆の心に卑近な例や諭へとなつて吹き込められ、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ある、この五倫を全うすれば一字を學ばずとも眞實の學者であるのだ、文字を知らずとも五倫の道を能くすることが出來るのだ、と教へて倦まなかつたところには、横井小楠を驚嘆された顯著なる社會奉仕の民衆が次第につくられつゝあつた。

石田勘平は、佛學中の禪の思想に多分の興味を感じ、また程朱より陸王を學んだが、綜合された石門學などは、一面から見れば、當代の佛教や儒學などに對する一種の反感を持つた。それは彼等に内證的努力が無かつたからではなく、手島堵庵の所謂『敬を以て内を正しうする』ものは、佛學、儒學の人々にも見られなかつたのではないが、然ういふものが客觀的實現となつてゐなかつたこと、積極的な生ける力となつて社會共同生活體に與らうとするの趣の無かつたこと、これはたしかに憤らしさを感ぜしめたのである。野狐禪の徒輩、程朱學風の亜流を汲んで窮理曖昧に、譏日春を縛れて春に逢はざるの徒輩の、安價な自己滿足、鄕愿なるは、石門學の熱誠からは外道とも感ぜられねばならなかつたであらう。

石田勘平の言葉である『たゞの一人たりとも教導したく思ふこと病となれり』は、石門學に永遠の名譽を與へるの生命であつた。其の燃ゆる社會教化の精神が、社會を道德的にとゝのへようとして、とゝのへられるべきは人間の本心の具體的な現はれからと說いて行つた跡は貴いものである。

然も、彼等は日常の行事の一切に處して本心を知らんとしたものであつたから、常に反省と試練の戰ひを内に繰り返へしてゐた。君子は萬物を以て心とすると手島堵庵の言つたのは、事上練磨の過程は永遠であることを言ひ現はしたものであり、人格の無限性と人格發展の過程に善の實現があり、竟に絕對善に永遠に憧憬れる人生の本能を暗示するものである。

斯ういふ精神、内容、及び方法によつて建設された平民の學校としての石門學の『講舍』は、寛政年間に至つた頃には、全國に二百あまりを數へられた。それらの平民學校は、たとへば參前舍であるとか五樂舍などゝいふ風に呼ばれ、『舍』の大小に應じて舍務を處理する數名の都講、舍を後援する老友を以て組織され、當代に於ける教育の缺陷を補つて、民衆を教化し、年久しくとざされてゐた善人の素質の門を開いてやり、通俗平明、親切に、社會的道義心を喚び醒まし、その現はれを以て『規範我』の實現と悟らしめ、社會的道義意識を『本心』の本質と感得させたのである。

燭灯ほのぐらくゆらぐところ、心學先生に、まどゐして、平明な興味深い講義に、聽耳しつゝ誘引されて行つた民衆の、其の聽耳には、沈澱しきつてゐた彼等の魂のさゝやきが更新のリズムを打ち返へしつゝ生々と迫つて來た。そこから先上する力に本づいて、事上練磨の足跡を殘しつゝ、たましひのふるさ

とを取り戻しつゝあつたことは、日本文化史上から觀て非常に意義深い。

何となれば、この石門學の社會教化、成人教育は江戸時代の中半から明治維新に至るまでの間、民衆に最もなつかしまれたものであり、民衆の多くは是れによりて社會的道義に自覺し、論理的個人に深向して、王政復古の大業を支持する正義輿論を首肯し得たからである。

若し石門學の事業が無かつたとせばどうであらうか。年久しく人格的に無視せられてゐた民衆の精神の去勢沒落に入るを救つた者が無かつたならどうであらうか。人爲的階級思想の作爲にまかせ、奪はれたる人間的權利をあやしまず、道義的無自覺に馴致せられてあつた民衆を回心せしめる靈活なる教化が無かつたとせば、果して王政維新は成就を全くしたであらうか。

私は石門學の平民學校の功績を過大視するものではないが、特權者の前に無智と無自覺と、人格的要請をなさぬといふことを一種の義務として强るられてあつた民衆社會に、敎化といふ、道德的自覺といふ一種の社會革命を起さしめたることの、間接的に明治維新を誘發し成就せしめたことを認めるものである。

日本民衆の傳統的潜勢力が王政復古の理論を首肯し得たとしても、即ち力は國體の精華なる形式の底を流れる日本的血液であり、民族の文化力であつたとしても、それの炎上に一指を染めた石門學の平民學校は、矢張り一種の社會心情の革命であつた。

地妖 (4)

三上於菟吉
木村荘八 畫

裏河岸に二天狼藉の事

——いつか眞夏——

我儘な駄々ッ子の喚きのやうな荒々しいかみなりの響きが空を裂いて、銀いろに輝やく夕立雨が、凄じく、冷やッこく、ひとしきり降りそゝいだあとで、晝間の炎熱を忘れたやうな、すが〱しい宵が來た。

先程の豪雨をどこぞで凌ぎながら一盃やつたか、大分顏を染めた、袴の色こそ違ひ、薩摩上布に數寄屋羽織の、隆としたなりの壯年の武士が二人、涼宵の夜氣をさもこゝろよげに貪りながら、粋な灯かげがほのめいてゐる裏河岸のとある新道を、肩を並べて步いてゆく。

「なア、馬場。」

と、伴れより幾らか若く見える。卅四五の侍が酒臭く呼びかけた。

「かうして連れ立つて、さも仲の良い友達同志——ふん、これが戀の戰場のかたき同志とは、どこから見ても見えまいなう。」

「は、は、は。御尤も。」

と、相手は笑つた。

「お言葉は御尤もだが、辻さん。これがさ、二人が目ざす例の城が、ひつきようどつちかへ落ちるとしたら、この戰さも本氣になれるが、何分われ〱の腕前でも、あの城の堅固さでは、戀敵と名乘りかけて、あなたと刄を交じへる氣にもなれぬのが殘念さ。」

「それにしてもお滿の奴、新參者でも今の人氣では、ウカ〱してゐると他人に取られる。かくては當時肩で風を切る、百目鬼二天と言はれるわれ〱の顏にかゝわる話じや。物は相談、馬場、あれほどの尤物を、見す見す他人にさらはれようより、われ〱の中でどちらでも、彼の妓の情けを傾けることが出來たと見たら、邪魔立ては愼しんで、助け合つてその人の者にすることにしやうではないか？」

「思ひ付きなお言葉だ。じやあ、辻さん、若しお滿が拙者へ氣があると見たら、あなたは陣をお退きなさるな？」

「いかにもそうだ。その代り馬場、拙者へ傾いでも支へ棒は無用だぞ。」

「金打！ は、は、は。」

月はないが、星は降るやうにあざやかにきらめいて、大河から漂ふ風が沁みるやうな涼しさだ。

この二人の會話を聴いてゐると、われ〳〵には、何だか耳馴染があるやうな名が幾つも語られるやうに思はれるのも道理、此の世に激しい呪咀を含み、宿命の深淵から毒蛇と身を化して浮み上つた、あの不幸な姉妹の中の姉むすめ清乃が、このごろ百目鬼一派の羽振のいゝ武家どもが、柳橋に入り浸つてゐるといふ噂さから、何かのたよりもがなと、源太船頭を口説き落して、この土地から左褄──どこか育ちが育ちでキッとして、そして艶姿をきはめた美色、藝もあり品もありで、たつた一月あまりの間に、たちまち賣り出してしまつたのだつた。そして蕩兒は灯にあつまる火蛾の群、美くしいひとの明るく輝やかしい微笑にはまたゝく間に引き寄せられる。自ら名乗つて百目鬼二天と呼ぶ、玄蕃の股肱、辻左司馬、馬場壯平が、ふとした席でお清と名を變へた清乃から、好もしい暗示を受けて以來、殆んど毎夜、金八といふ會席へかよつて來るのも無理がなかつた。

「だが、因果なものさ。兄弟同然のそこもとと拙者が、一人の女に同じ苦勞をするなどとは──」

小身六百石ながら旗本の左司馬、たわむれでもない歎息。

相手はまた笑つて、

「は、は、は。この道ばかりは、辻さんは由緒正しい家柄、拙者は百目鬼の用人でも、さう〳〵譲つてはをられぬでな──」

ほろ醉ひの氣も軽く、とある曲り角にさしかかる。

と、その刹那、彼方からつぼめた雨傘を右手に、下駄穿、着流しの帷子、浪人風の若侍──やつと前髪を落して二年とは立つまいと思はれるのが、駈けるやうにいそいで來て、避けそこね、危うく左司馬に突當りさうになつたが、辛うじて身をかはし、二人の間を割つて過ぎる。

よほど氣が急いてゐるものと見えて、會釋を忘つて、そのまゝもう三間あまり突き進んだ。

たゞさへ、氣の昂ぶり易さうに、眼尻の切れ上つた左司馬のこと、微醺を帯びてゐるので怺え性がない。

「待て！ そこへ行く仁！」

鋭い調子に、ハッとはじめて氣がついたやうな若侍、踏み止まつて、振り返つたが、

「は、私をお呼びなされたので？」

蒼ざめた細面、どうやら心配ごとでもあるか、氣息が喘いでゐる。

「貴殿、拙者どもに意恨でもあられるか？」

ズイと、左司馬が詰め寄せる。

壯平は、これは面白い遊びといふ風で、底意地の悪い微笑をうかべ

て突立つてゐる。

青年は驚いた表情で、

「いゝえ、何で意恨なぞ——何か粗相でも仕りましたか？」

「シラ〳〵しい申様——これ、二人肩を並べてまゐつた、われ〳〵の間を割つて通つて、何か粗相とは何ごと——」

ジロリ〳〵と、酒癖の癖が立つて來たらしい目で左司馬は若ものを眺めて、

「はあ、さては貴殿、その年頃で粋なことを見覚え、好むをんなの許へ急ぐので、向ふも見えないまで魂を失くしをるのだな。武士の名折れ、棄て置けん。さ、それへ直れ。折檻してつかはす。」

青年は空いてゐる手を膝まで垂れて、

「いえ、なか〳〵左様なことでは——實は母親大病、夕刻より危篤に陥りましたので、不在の兄びとを尋ねるために、このあたりを所々さまよひ、見當りませぬので心痛のあまり、心急いての御無禮——何とぞ御容赦下さいますやう——」

「ナニ、母人が危篤で兄を尋ねて心當りをさまよふたと？　ソレ見るがよい、このあたりと云へば、名代の花街柳ばし——その邊を巣に致す兄を持つ其方——浪人の小倅分際で、惰弱さが愛想がつきる。直れ！　性根を叩き直してつかはすぞ。」

と、呼ぶなり、理も非もない左司馬、持つてゐた扇子でハッシと眞向を一打！

相手も身をかはしながら、右手に持つてゐた雨傘で受け止めようとしたが左司馬は根性は兎に角、腕は一刀流の剛の者、若年もの手に立つ敵か、白扇とは言へ、眞額を強く打たれて、二三歩ヨロめく。

あまりの亂暴に、場合も場所も言つてゐられなくなつた青年は、かよはく見えても武士だ。突嗟に命を投げ捨てゝ、その手が一刀の柄にかゝる。

「ホ、憤つたナ。面白い！」

と、左司馬が嘲笑つた時だつた。はじめて壯平が間に立つた。

「まあ、まあ。」

と、伴れに言つて、

「これ、若者、荒立つまい。それを抜いたら、その方生命がない。相手は一刀流の皆傳じや——聴けば病める母もある由、拙者があつからう。あらためて侘びい。な、よろしいか。」

病める母——と、言はれて、ハッと氣がついたらしい若侍、右手が力なく柄をはなれる。ぐたりとうなだれて——

「おあつかひ恐れ入ります。仰せの通り、重々の不仕末、なにとぞ御免下さいます様。」

「よろしい、誰れしも失策ないわけにもまゐらぬ。そこでな、見れば、なか〳〵の御美男、お兄人もこのあたりの、ホ、ホ、下世話に申す地廻りとなりや、そこ許にも馴染みの妓もあらう。恰度われ〳〵もこれから一酌催さうとしてゐる折柄、仲直りにそこまでまゐられ

な。」
壯年の小意地の惡い目が、ニタリ〳〵と笑ひをうかべてゐる。
青年は一さう當惑がほ。
「お言葉ではござりますが、私、一滴もたしなみませず、その上、母の大病——なにとぞお見のがしを！」
「なりや、拙者のあつかひ不承知か！」
と、今迄の猫撫ごゑが、突然に錆びた調子に變る。
「見られえ！　ああ言へばかう——不屆きな小伴。退きなさい。拙者、打ち据えてやる——」
と、左司馬が又しても白扇を振りかぶつた時、いつか物見高く、人立ちがした中から、なまめかしい聲——
「殿さま！　おまち遊ばして——」
どこかの灯に、ほんのりと浮き上る白い顏——潰し島田に、素に着てゐよう、紺上布、すんなりとした左褄の立すがた、怯めず近づいたのを見ると、思ひがけきや、たつた今二人の話頭に上つたお淸の淸乃。
「や、そちは？」
と左司馬の、振り上げた白扇が下る。
「聽いたお聲とおもへば、殿さまたちじやあありませんか——およし遊ばせよ——相手はまだ若い方——殿さま方のお名が出ますよ。それよりも、これから行く家があるのですけれど、この若い方のかはりに、あたしがお二方のお供をいたしませう——ね、それで許して上げて——」
と、左司馬、莊平を見くらべて、ニツコリと、夜目にもこぼれる愛嬌。
「それとも、あたしのあつかひでもいけないとおつしやるの？」
とんだ醉興を見とめられて、二人は閉口の氣味——
「ハ、ハ、ハ、その方のあつかいとありや、こりや、土地柄で顏を立てゝやらずばなるまい——どうじやな、そこ許は？」
と、左司馬が伴れの顏を見る。
「拙者はもとよりどうでもよいわ。」
「それでこそ殿方はサッパリしてゐて、だからあたしは好きなのさ。」
と、鐵火に言つて、うなだれて佇立してゐる青年をかへりみると、
「ね、あなた、濟みましたわ。早くお歸りなさいましよ。」
と、言つて、上げた相手の顏を見ると、
「オヤ、額から血が——」
「ナニ、血！」
若者はびつくりして、手を額に、血がついた指をほかげに透すと、こめかみが颯と蒼ざめる。唇が、キリ、と引き釣る。
發作的に、二人をグッと睨んで、何か言はうとするのを、お淸は寄り添つて、押しかぶせた。
「あなた、お母さまがお待ちなすつていらつしやいますわ。ね、早く



お歸りあそばせ。」
と、ふところ紙を手早く出すと、青年の額に押しあてゝ、滲む血を拭いて、
「これは血ではありませんわ。何か、黒いものが着いたゞけ――早くお戻りあそばせよ。」
と、言ひ捨てて、
「さあ、お二方、また金八へお運びなのでせう？　おともいたします。」
かへりみもせず、お濤は二人をうながして歩み出す。
「よう　路孝やア。」
「出かしましたア。」
と、人立ちから、若い衆たちの黄色い掛ごゑ。
「ありやあ、何て年増だね？」
と、一人。
「あの女を知らねえなら、よつぽどの唐變木だぜ。こないだから新宿板の濤の家のお濤さんさ。」
「何でも、武家種だつてえが、キビキビしたもんだなア。」
四方へ人は散じて、雨後の夜氣はふたゝび澄む。
愴然として佇立してゐた青年は、はじめて我れに返つたやうに、投げ捨てた雨傘を拾つて歩み去つた。

伏見茂之進意恨を含む事

――そのことがあつての翌翌日、烈日が西に落ちかけて、いくらか冷たい裏風が、隣家との庇あはひに、ほんの小さく取つた坪庭の八ツ手の葉を吹いて、打水に濡れた葉末から、ポタ〳〵と滴くが垂れるのが、涼しげに瞳にしみるやうな時刻に、お湯から歸つて來たお濤は、わが家の裏坐敷で鏡臺に向つてゐた。もうあらまし化粧がすんで、おしろいが浸んだ唇を濡れ手拭ひのはしで拭いて、臙脂を嘗めればいいだけだ。
お濤はあの時分から見れば、さま〴〵の悩みと呪ひとにさも骨々しく窶れてゐる筈なのに、さうした苦惱が却つて身の藥となつたかと思はれるまでに、いよ〳〵艶でやかに、いよ〳〵ふくよかなすがたである。思ひ切つて上半身を肌脱ぎに、潮染の浴衣の袖袂を腰に捲くやうにしたため、すつかり露はれた玉の肌は、ほんたうに雪ともまがつて白く、それでさも温かさうで、そして肩から二の腕へのかゝりなどは、さまで肥えてゐるわけではないが、どんな人の魂をも奪ふであらうふくよかさである。
突然、あはたゞしく、そのすばらしい裸體は浴衣にかくされた。廣からぬ家で、この部屋からも開け閉てがよくわかる格子が開き、訪なふこゑがきこえたのだ――彼女はどんなに意氣と仇との世界に同化しようと力めてゐても、どんな人にも自慢の肌ならさらして見せてはゞ

からぬ程、泥水には浸み切ることが出來なかつたて上り口で應對する婆やのこゑ——やがて、簀戸があいて、世帶くづしが顔を出す。

「姐さん、お客さまでございますよ。」

「お客？　どんな？」

お清の美くしい眉がひそむ。

——まさか、たつた昨夜おそく來て、醉ひつぶれて今朝歸つた源太船頭では？　それに船頭なら、婆やは「お客」とは、哀しいかな、言つてはくれぬであらう——もつとほかの親しみの言葉で、哀しいかな、呼び馴れてゐる。

「さあ、お若いお武家さまでございますが——」

「お名は？」

急に思ひ當るひともなく、お清はたづねる。

「それをおつしやいませんので——お目にかかれば、大てい見おえぼてゐて下さるかも知れぬとお言ひなすつておいでゞす。」

「どなたゞらう？」

「廿歳にもおなりでせうか、まあ、女のやうなと申したいやうな美くしい方で——」

と、婆やのこゑは低まつて、薄笑ひがうかぶ。

ハツと、お清は思ひ出した。

それなら、おとゝひの晩、裏河岸の暗まぎれで、百目鬼の二天につかまつて、狼藉をおうけになつた方かも知れぬ。

「兎に角、あたし、のぞいて見ますわ。」

掻き上げたばかりの美くしい髪に、鏡にのぞき込みながら手をあてて、立ち上つて、着くづれを直すと、白い素足が疊を踏んで、入り口の方へ出る。

土間に立つた客と、目を見合せると、ニツコリと、こぼれるやうなほゝゑみ。

「まあ、やつぱりあなたでございましたね、さあ、お上りあそばして。むさくるしいところですけれど——」

たぶさを大きく結ひ上げて、紺帷子、焦茶の帶、着流しに大小をたばさんで、紙のやうに青白い頬に、これもかすかな笑みをうかべたが、物ごしは惱みを持つ女のやうに儚なげだ。額の疵が薄々と消え殘つてゐる。

「一昨夜は一世の大事の折柄、思ひがけなきおあつかひ、おかげを以つて無事に歸宅——母病氣の折も折とて、何とも忝けなく、御禮かたがた、ちと、折入つてお願ひのすじもござれば押付けがましく伺ひました。」

青ざめた頬に、相手があんまり美しい女性であるためか、ぽうといく分紅を點じて、腰を屈がめての挨拶である。

「まア、わざ〳〵お禮の何のと——あんまり御難儀のやうですから、ちよいと生意氣なことを言ひ出しましたけれど、お叱りをうけても仕

方のない苦しい出口で、こちらこそ穴へもはいりたうございますわ。」

と、お清は輕く受けて、

「さあ、お上りあそばせよ。手狹でとても涼しいところもないのですけれど――」

「お邪魔でもございませうが、しからば御免を蒙りまする。」

片苦しく言つて、二疊の玄關へ上つて、大刀を拔くと右に持ち代へ、導かれて裏座敷へ通る。

「このとほりの住居ですから、取り散らしたところをみんなお目にかけてしまふ外はありませんの――」

衣桁にかゝつた、帷子や、とき色のなまめかしい紐なぞを、ちよいとかへりみて、お清は佗びるやうに、

「お許しあそばせな。」

婆やが水團扇や、冷たい麥茶を持つて來る。

若者はすゝめられた褥をもしかず、あらたまつて、兩手を膝に、頭を下げたが、

「過日のおあつかひ、お蔭さまにて五體滿足――仰せの通りかの人々の手並、萬夫不當と存じますれば、生じの腕立いたしなば、只今ごろは輕くも片輪――」

と、言ひかけるのをお清は笑ひ消して、

「何のまあ、そんなに仰有つて下すつては、ほんたうにもう困りましてよ――」

と、言つて、じつと見入つて、

「それにしても御病氣とかおつしやつたお母さまは、その後およろしうございますか？」

「有難うござるが、母は、拙者歸宅を待たず、みまかつてをりました。」

「え！　まあ！」

と、いつはりならずお清はサッと憂いをうかべて、

「何といふお氣の毒な！」

言葉すくなであるだけに、彼女の心からの弔意は、相手にもすぐに通じたやうだつた。

「世に弔ふ人も數少なき逼塞の身の上、お悔みのお言葉、母も草葉の蔭にてさぞ喜びますでございませう。」

と、若ものはうなだれたが、ふと、はじめて心付いたやうに、

「何やかや、心亂れてをりますので、まだ名乘りもいたしませんだが、拙者こと、伏見茂之進と申す浪人、今後お見知り置き下さいませ。」

「私は――伊皿子――」

と、お清は相手の調子に捲きこまれて思はず本名を名乘りさうになつたが、

「いゝえ、伊皿子の方から移つて來ましたお清といふおはづかしい女でございます。何分よろしくお願ひいたします。」

「いや、そこ許のお名は、あの折、通行の町の者の言葉にてたしかに承り、實はそれを頼りに、今日もおたづねいたしたわけ。」

と、伏見茂之進と名乘る青年は答へて、

「つきまして、こゝにひとつのお願ひが厶るが、折り入つて押してお聽き屆けにあづかりたう存じます――」

と、ジッとお淸をみつめました。

「私風情にお頼みの願ひのと、どんなことでも身にかなひますことならば――」

「ア、そのお言葉で安堵しました。さらばお訊ねいたすが、あの折、拙者に言ひかゝつて、この眞額に打ちを入れ、疵を殘しましたる人々――姓名、役柄、承りたう存じます。そこ許、屹度御存知の仁と見きはめましたが――」

お淸は際もなく見返して、

「それをお訊きになつてどうあそばすお積り？　いかにもあの人達は、御贔屓客ですから身柄も名前も知つてゐますが――だと言つて、次第に依つては申し上げられませぬ。」

「御尤も。そこ許として彼等を恨まねばならぬ拙者に、贔屓の客とあればこそ客の名前を打明けられぬのは無理も厶らぬが、お淸どの、お聽き下され――拙者一人の、恨み、恥ならば、酒興人を相手のこと、忘れもいたしませうが、かの者どもが拙者の額に疵をあたへたため、母死ねばたつた一人の肉身、兄造酒は切腹して果てましてござります。」

「まあ！　何でございますつて！　お兄さまが御切腹あそばして？」

と、お淸は青ざめた。

「いかにも、あの夜、曉に立ち戻り、冷たい母の骸を見ました彼は、このごろ色と酒とに溺れ、ロク〳〵母のみとりをも致さなんだを恥ぢた上、拙者の額の疵が、兄を探ねて色街に足を踏み入れ、言語道斷のはづかしめを受けた上、荒けなく狼藉を蒙りし痕と承り、母、弟に生きて對面言ひわけなしと書き置きいたし、死者の枕邊に腹を切つた次第。兄人の義理立、今更却つて恨めしうござるが、それは申すも返らぬくり言――」

泣くまいと反むけた青白い頰に、二すじの熱い涙の流れ――それがキチンと揃へた膝にハラ〳〵と落ちる。

お淸は唇をキッと嚙んで、まじろぎもせず茂之進の涙をみつめた。

「ほんたうに、お武家の意氣地ほど悲しいものはござんせぬ――ようございます。さういふことなら、茂之進さま、あの侍たちの身の上をチャンとお知らせいたしませう。」

と、キッパリ言はれて、茂之進は、涙も忘れて一膝進め、身分を捨てゝ兩手を突いた。彼の濡れた瞳は食ひ入るやうにお淸を見上げる――

「あ、ありがたう存じます。それではお教へ下いますか――かの者

ども、名は何と？」
「まあ、お手をお上げ遊ばせよ。ね、そして、私の言ふことを落ち着いてお聽きなさいましな。」
と、お清は姉のやうなやさしさで言つて、
「なるほど、伺へば、あなたも男として、お侍の意地として、此の世で一度はあの二人と意恨の刄をおまじへにならずにはゐられますまい。そりや女の私たちだつて、賤しい稼業の私たちだつて、あなたのやうな場合になれば、オメ〳〵と手をつかねてはゐられません——でも、人間の世の中のことは何でも同じこと——あせッては駄目でございますよ。ね、私だつて、あなたからそこまで打明けていたゞいた以上、及ばずながら、袖にも楯にもなりませう。そのかはりあなたも、私に默つて、拔け駈けに、亂暴なことをなすつてはいけませぬ。ね、茂之進さま——あなた、私から名や所を聽いたら、この場から駈けつけて名乘りかけやうといふお覺悟でいらしつたのでせう？」
「はい、母、兄を一時に失つて、生き甲斐ないからだ——斬り死を覺悟して、實は出てまゐつたのでございます。」
「そんな馬鹿らしい御了見は——御免あそばせよ——でも、そんな考は、私はほんたうに馬鹿らしいと思ひますの。幾日か、幾月か、幾年かを辛抱すれば、何の無理もなく、十分に仕遂すことが出來ますのに、急いで望みは果さずに、あなたのお命まで、あんな人達の刄の錆にしてしまつたのでは、先に冥途へいらしつた、お母さま、お兄さまも、それではお浮びになれないでせうと思ひます——さうぢやありますまいか？」
しんみりとお清は語つた。
茂之進はうなづいて、
「いかにも御教訓で、はじめて客氣が靜まりました。失禮ながら理窟の當然、思索の緊密——恐れ入りました。」
「ほ、ほ、ほ、何だか六かしくッてわかりませんけれど——」
と、わざと笑つて、お清は反らして、
「では、拔け駈けに、馬鹿なおあせりはなさらないとお約束になりますね？ 私をだまして犬死をなさると、狽へものと、私が大きな聲で笑ひますよ。」
茂之進は、寧ろ感じるより驚いたに相違なかつた。この釘の差し方は、このあたり色街の女たちの出來るわざではない。「犬死」「狽へもの」——この二ッの言葉は、武家に取つてこの上ないはづかしめの罵詈だつた。その禁句を、キッパリと使つた氣合は、まさに劍氣の極致——面を向けやう樣もない。
——このひと、町のものが、「武家種」と噂したが、あるひはいつはりではあるまい。と、さら茂之進は考へるのだつた。
お清はゆるめず、
「ね、お約束なさいますね。柳ばしのお清のやうな、藝者稼業のつまらぬ女に、犬死をした狽へものと、笑はれるやうなことはなさらぬ

と、堅くお約束なさいますね？」

「はい、堅くお約束いたします。神文、お約束いたします。」

相手のきびしい言葉に、茂之進は突いてゐた手を上げ、脇刀を拔いて金打しようとするのを、お清は止めた。

「武者風情を相手に、誓文も金打もいりませぬ。たゞ、あたしを信用して下さいましね、女のあたしでも、あなたからこんなに打明けていたゞいた以上、身を粉にしても、屹度望みをお遂げになれるやう計らひます。だからその時が來るまで、じッとしていらつしやいまし——くどいやうですけれど——」

「必らずお言葉通りにいたします。」

「では、言ひませう——」

と、お清はッと、茂之進に寄り添ふやうにして、袖屛風のかげで、聲をひそめ、

「おとゝひの晩の狼藉ものは、今、お覺えの芽出度い、百日鬼玄蕃との用人馬場莊平と、あなたのお額を打つた方が、六百石、旗本辻左司馬——二人とも一刀流の手利——世の中で怖れて百日鬼二天と、二天王を約めて呼ぶ人達でございます。」

「えー　そんならかの者ども、世に名高い百日鬼二天！」

「さうでございます。だから、おあせりになつては、おためにならぬと申すのでございますよ。」

はじめて敵手の名を聽かされて、さすが死を決した伏見茂之進も、思はず深い吐息を洩らすのだつた。ことさら左司馬は、居合、据物斬の名人として、旗本八萬騎舌を振つて怖れざるはない人物、百日鬼玄蕃の股肱として、傍若無人の振舞は、今日にはじまつたことではなかつた。

——あれが左司馬とすれば、白扇とは言へ、よくもほんの僅か額が破れただけで濟んだもの——若輩とあなどつて、輕い打ちを加へたのみだからこそ、あれで濟んだ。たわむれならず打たれたとすれば、今ごろは命もあるまい。それにしても、溜りかねて柄に手をかけた時、おさへてくれたこの女は、命の親。

茂之進は、恨みを深めてどうしても仇を返さねばならぬと臍をきはめた今、今更のやうに、あの時のお清の心入れを感謝せざるを得ないのだつた。

しかし、お清は、二人の名を聽いて、サッと顏いろの變つた茂之進を眺めると、勵ますやうに言ひ添へた。

「でも、茂之進さま、あの人達がどんな荒神でも、氣を落すやうなことはなさいますなよ。そんなことはゆめありますまいけれど。」

と、艶やかしい目付になつて、

「一心は巖をも透すと、ことわざにも申します。たゞ、一心不亂に望みをみつめてゐれば、屹度叶ふ時が見付かると思ひますの。それにあの人達は、どんな腕利かは知りませんけれど、人柄はあのやうに品下つた、惡い氣立です。神さまだつて佛さまだつて、こちらの味方

に、必らずついて下さいますよ。」

「辱けなう存じます。お清どの。」

と、茂之進は思ひ入つた調子で言つて、

「それにつけても、このやうに申してはあまりにお心にすがるやうなれど、そこ許が、拙者は何となく、姉上とも思はれるのでござります。到らぬところは、此の後お叱り下さい。」

「何の、あたしなんぞ、何も出來ませんけれど、いざといふ場合には、どんなことでもして見ますわ、そのかはりあなたも、一生懸命、腕をみがいて、眞正面から打突つても、あのやうな人達に、ひけをとらないだけの修業を遊ばせ。ね。」

と、お清も、頼ひ信じられれば、いやましに親しさが募るのを感じた。

——それにしても、この方も、何とまア、頼りすくないお身の上だらう。世の中を見渡すと、不運なのはあたし達姉妹ばかりではない——不仕合なものは、だからなほのこと、助け合はなければならないのだ。

彼女にしても、自分が恨む百目鬼一味を、共同の敵にする伏見茂之進を得たことは、なか〳〵に心だのもしいのだつた。茂之進、今こそ未熟な若ものなれ、理解もさとく、情熱も激しい。屹度たちまちすぐれたものになるであらう——

爽やか、顔を出した。

「姐さん、お座しきでございますよ。」

「ああ、さうだつけ——今夜は萬八の約束があつたのだね。いいよ、今仕度をするから——辨どんに待つてゐておくれツてさう言つておくれな。」

茂之進は、思はず時刻をうつしたのに氣がついて、再會を契つて清の家を辭した。

日はすでに沈んで、宵闇は晩涼をもたらした。若ものは孤獨と憤慨とに閉ざされてゐた胸が、かの美くしい、凛々しい、姉のやうなひとを知つたことに依つて、いくらか開放されるのを感じた。（つゞく）

樹蔭の路

金子薫園

人群れて通れどこころしづかなり藤棚下のベンチによりつつ

人群れて通れど埃あがらざる公園の路つつじの花ざかり

こぼれ日の地に揺れひかる公園の樹かげの路のうねりつづける

公園のわか葉あかるき小舍ぬちの幼な牝鹿の耳のいとしも

姉が弟にあをき林檎をむきてゐる樹かげのベンチ輕き風わたる

庭土のうるほひしるく春さりて丁字のさし枝芽をふきにけり

月光下の瞑想

月夜の美感

兼常清佐

○

月夜の美感。——それは昔文豪高山樗牛が麗筆を驅つて、その名を一世に轟かせた論題である。

今この古典的な題目をかゝげて私に文を求める雜誌記者は、些くも音樂については全くの素人であらう。月夜の美しさは眼に見てこそ始めて感じられる。耳に聞く音樂とは何も關係はない。月夜の美感を音樂の範圍で論ぜよ、といふ事は、鰻の蒲燒屋へとろゝを注文する樣なものである。田舍者のしさうな事である。

然し雜誌記者の方にも多少の言ひ分があるかもしれぬ。物は考へ樣一つである。記者はさう言ふであらう。——いつその事に鰻の蒲燒屋でとろゝを食はれる樣にして貰ひたい。同じ食物である以上出來ない事もあるまい。その樣に、耳の藝術である音樂の範圍で、どうにかして眼に訴へる月夜の美しさを論じて見て貰ひたい。同じ藝術である以上、全く出來ない事もあるまい。

それは亂暴ではあるが然し痛快な言ひ分である。とにかく試みる事は何でもみな愉快である。私はこの亂暴な試みを試みる事にする。そして月夜の美觀に托して、いさゝか音樂を考へて見ようと思ふ。

○

月の夜はいつも物みな美しい。月の光はいつもこの下界を不可思議な美のうすもので包んでしまう。今も昔も月夜は同じ月夜である。その月の光が變らない限り、その色で染め出され、世界の物象が變らない限り、月夜には月夜の美感がある筈である。月の夜といへば、誰の胸にも或る物悲しい、沈んだ感情を呼び起す。むかし樗牛はそれを評論した。

樗牛は月夜の美感を、月の光の青い色と、夜の世界と、そして聯想と、この三つの主な要素から論じようとした。誠に名論である。恐らく誰もそれに異論はないであらう。月夜の美感とは正にかくの如きものであらう。

たゞ私共都會の人々には、不幸にしてその樣な本來の月夜の美にうたれる機會は甚だ尠い。都會の夜は殆ど晝と變らず騷がしい。空は電燈の光でうす明るい。そしていつも塵と埃とでどんよりとしてゐる。電線とアンテナはその空を縱横に區切つてゐる。そして私共が月を見る頃には、私共の精神は大抵は疲れて、いらだつてゐる。私共はこの都會のこの空に、このいらだつた心を抱いて、塵に曇つた月を見るのである。昔の人が歌つた樣な閑寂な、餘裕のある氣持ちになれるわけはない。『憐むべし樓上に月徘徊す。玉戸簾中卷けども去らず』その樣な表現は誠に遠い昔の事である。

月夜には月夜本來の美感があるであらう。そしてそれは月と夜とには本質的なものであらう。然し私共のこの都會の日常生活では、それはたゞ憧れである。或は追懐である。私共には樗牛の麗筆が寫し出した樣な美しい月夜は殆どない。私共が日常見る月夜はさう美しくもなく、靜かでもなく、哀れでもない。本來の月夜の美はたゞ空想の裡に存在するだけである。

音樂はしば〳〵月夜の美を唄つた。その樣な曲を數へ上げたら、相當な數になるであらう。然しそのうちでも傑作が世に出たのは、恐らく音樂がローマン派の時期になつてからの事であらう。

私はまづシューマンの『月の夜』をあげる。或はシューベルトがゲーテの名篇『月に寄す』に置いた音樂をあげる。この樣なものが代表的な月の歌であると言ふ事は、誰も首肯するであらう。誠に美しい音樂である。綺麗た音樂である。そして樗牛が述べた樣な月夜の美感はこのロマン派の巨匠の歌の中にも十分に盛られてゐる。

然し私共の心はそれだけでは滿されない。私共は今この東京の町では、シューマンやシューベルトが唄つた樣な清楚な、優雅な月夜は見られない。私共はこの埃の中の月、アンテナにかゝつた月、騷がしい月、いらだつた心に映つた月、それを唄つてもらひたい。

パウル・ヒンデミット。――讀者諸君はこの新しい獨逸の作曲家の名をまだ餘り多く聞かないであらう。彼は實に現在の私共の感覺のためにピアノ組曲『一九二二年』を作つた。そしてその荒狂な嵐の樣な不協和音で、私共のいらだつた心を痛快に赤裸々に描き出した。めざましい新しい曲である。その組曲の第三章『夜の曲』こそ正に私共が銀座街頭の夜更けに感じる月夜の美感である。あの清楚な、優雅な『月の夜』や『月に寄す』を作つたロマン派の人々がこの『夜の曲』を聞いたら、或はこれは本當の音樂ではないと言ふかもしれぬ。然しそれが實に私共の音樂である。そしてそれに描かれた感情が實に私共の月夜の美感である。

○

話はこゝで一轉する。

讀者諸君は、然し本當に月夜の美感といふ樣な事が、音樂で唄ひ得られると思つてゐるであらうか。その美感がよし月夜本來の幽寂な美感であらうと、或はアンテナの林に懸つた埃の月であらうと、とにかく月夜の美感を音樂が唄ふ事が出來るであらうか。

ロマン派の巨匠の手に成つた『月の夜』や『月に寄す』は今は別に問題にはならぬ。もと〳〵歌である。文句がついてゐる。意味は頗る明瞭である。ヒンデミットの『夜の曲』はたゞ私が勝手にさう思ふといふだけである。諸君はこの曲で銀座街頭の月夜を感じなければならぬといふわけは少しもない。もし音樂そのものが月夜の美感を的確に描き得たと思はれる場合を見ようと思へば、私共は恐らくベートーヴエンの『月光の曲』などを例に取らなければなるまい。

『月光の曲』については私共は誠に可憐な物語を教科書で讀んでゐる。貧しい盲目の娘と、一世の大作曲家と、そしてあばら屋の窓を洩れて來る青い月の光とが此物語を世にも美しいものにしてゐる。もしこの物語が本當ならば、或はベートーヴエンの心に湧き出た月夜の美感がこの名曲に盛られてゐるのかもしれぬ。然し不幸にしてこの物語は全く架空のものである。何の歴史の據る處もない。『月光の曲』といふ題名も作曲者のつけたものではない。從つてこの名曲は特にベートーヴエン自身の月夜の美感を唄つたものでないといふ事は明かである。

實際聞いて見れば『月光の曲』はたゞ或る美しいピアノの曲である。ピアノが絶えず高く低く強く弱く鳴りつゞけてゐる。――たゞそれだけの事である。ピアノの音の中に月の圓い形があるわけでもなければ、飛ぶ雲のかげがあるわけでもない。たゞ目に見えないピアノの音である。目に見えるものは演奏壇上のピアノの形と彈く人の姿だけである。そして作曲者のベートーヴエンが初めから月の光の美しさを描くためにこの曲を作つたものでないとしたならば、この曲には一體何の意味があるかは、もう絶對にわかるわけはない。ピアノの音か、或は譜の頁かゞ物を言つてくれない以上、そんな意味を聞くだけ無駄である。

『月光の曲』はまたその外に『青葉の曲』とも呼ばれてゐる。もちろんそれも人が勝手につけた題目である。この曲が月の光と何の關係もない樣に青葉とも何の關係もある筈はない。

またこの曲はゾイメの詩『祈る少女』から想を得たものだとも言はれてゐる。父の病の平癒を神に祈る哀れなる少女リナを歌つた詩である。もしベートーヴエンがその日常尊敬してゐた詩人ゾイメのこの詩を描いたものとしたら、『月光の曲』はむしろ『祈る少女の曲』と題を改めなければならぬであらう。

最後にこの曲は月の光とも、青葉とも、祈るリナとも、關係はないが、たゞベートーヴエンの戀の悶えを訴へた曲であるといふ人もあ

る。實際ベートーヴエン自身がこの曲をジユリエツタに捧げてゐる。そしてジユリエツタは彼の戀人である。燃える樣な戀の手紙『永遠の戀人へ』は或はジユリエツタにあてたものかもしれぬとさへ言はれた位の女である。その女に捧げたこの曲は、正にベートーヴエンの戀の歌であるとも見られる。

結局『月光の曲』は或る美しい、綺麗なピアノの曲であるといふだけの事である。それ以上には、その意味は果して何であるか、決してわかるわけはない。いつまでたつても諸說紛々といふ有樣である。本當の事は地下のベートーヴエンを起して說明させない限り誰にもわからない事である。もし『月光の曲』を聞く人が、國定讀本にある通りを信じて、本當にこの曲から月の光や妖精の亂舞を想像し、そしてこの曲の描寫の巧妙な事を嘆賞したならば、それはいさゝか見當違ひである。或はいさゝかお目出たいとも言はれる。

私共は汽車の車輪のあのごとく〳〵いふ音をどうにでも聞く事が出來る。汽車が『馬鹿野郎、馬鹿野郎』といふとも思はれる。或は汽車が戀人の名を繰り返してゐるとも思はれる。音には初めから意味はない。意味を付けるのは聞く人の勝手である。音樂も音であるからにはこの例に洩れぬ。ベートーウエンの『月光の曲』を月夜の描寫と思ふのは、汽車の車輪の響を戀人の名と思ふのと同じ事である。

（　）

私共が教科書でも讀み、話にも聞いてゐるあの有名な『月光の曲』にして、なほそんな曖昧極まるものである。私共が空想する月夜の美、――面白い、澄み渡つた月の光とその下で靜かに安らかに眠つてゐる下界の有樣とは、たゞ詩人と畫家とだけに描かれ得るものであらうか。音樂はそれに一指をもふれる事は出來ないものであらうか。

ベートーヴエンのあのピアノのソナーテに『月光の曲』と名をつけたものは、詩人で評論家を兼ねたレルシユタープである。彼はこのソナーテの第一章から、アルペン山下の湖の月夜の美しさを聯想した。アルペンの嶺から吹き下す夜の風が靜かに湖を渡ると、冴えきつた月の光が漣波にきらく〳〵と映る。遠い村の教會から鐘がかすかに聞えて來る。すべては月の光が織り出した夢の世界である。レルシユタープはあの曲の第一章を聞いた時、勝手にこの樣な美しい光景を心の中に描き出した。そしてその曲に『月光の曲』と名をつけた。たゞそれだけの事である。

それならば私共は今レルシユタープでに倣つて、この曲をきいて、やはり月の光を聯想してもいゝ筈であらう。ベートーヴエンがどんなつもりでこの曲を作つたか、それはどうしても私共にわからないならば、いつその事に私共はベートーヴエンとは全く無關係に、勝手次第に想像をめぐらし、空想を描いた方がいゝかもしれぬ。それにしても、とにかく『月光の曲』と題がある以上は、誰もこの曲を聞けばまづ月の光を思ふであらう。たゞ習慣である。その起りは或る一人の全く偶然な思ひつきである。それにしても今日誰でもこの曲を聞くもの

は、必ず月の光を思ひ、その美しさを感じるならば、この曲は誠に美しい『月光の曲』であるといつてもよからう。正しく言へば遂に『月光の曲』とされてしまつたのである。然しそれは例へば汽車の車輪の響を誰もみな戀人の名と聞く樣になつたと思ふのと同じ事である。そして大抵の音樂はみなそんなものである。

もしベートーヴェンが青葉の曲のつもりか、或は祈る少女のつもりか、或は戀の悶えを訴へるつもりでこの曲をかいたものならば、それが今日思ひもよらぬ『月光の曲』として賞讃されるのは甚だ不本意な事であらう。然し大抵の音樂はまづみたそんなものである。

○

哀れなのは作曲家である。彼は戀人の名をよぶ代りに、汽車の車輪の音を用ゐる人である。

彼は月の夜に郊外に出て、その青白い光が靜に地上にふりそゝぐ美しさをしみ〴〵と心には感じるであらう。然し彼はそれを音樂に表現する道を知らない。彼自身はそれを表現し得たつもりでも、聞く人には何の事であるかわけがわからない。苦心して月光の曲を作つてもそれが青葉の曲や祈る少女の曲と聞かれないとは限らない。ベートーヴエンの天才を以つてして巳にさうである。

或る作曲家が月夜の本來の美を、樗牛が評論した樣に、靜かな、沈んだ、冥想的な氣持にあると感じたとする。彼はそれを表現するためにピアノの曲を作るなら、まづ靜かな、沈んだ、哀しい氣持の曲を作るであらう。まづ遲い、ゆるやかな、物哀しいメロディを作るであらう。伴奏には早い、すばらしい形を避けて、むしろ單調で、落付いた氣持ちの出る樣な形を繰り返へすであらう。大體の意匠としては、誰が考えてもまづそんな事になるに違ひない。そしてそれは正にベートーヴェンの『月光の曲』の第一章の意匠である。

つまり月夜の本來の美感を音樂で表現しようとすれば、大抵は遲い、靜かな、物哀しい『月光の曲』の第一章の樣なものになつてしまう。それから先きは、たゞ技巧や形式の相違の問題にすぎぬ。そしてそれを聞く人は、何と聞くかは全くわからない。青葉の曲と聞く人もあらう。失戀の曲と聞く人もあらう。中には月光の曲と聞いてくれる人もあるであらう。

哀れなのは作曲家である。もし彼が何事かを表現しようと思ふならば、彼はどうしても他のものゝ力を借りなければならぬ。表現といふ事が目的ならば、音樂は非常に不自由な、厄介千萬な藝術である。

彼はまづ言葉の助力を乞はなければならぬ。彼は何よりもまづその作つた曲に、明かに『月光の曲』と題を付ける事を忘れてはならぬ。ドビユフシーがピアノの序曲の一つに『月光』と明かに題をつけたのは、自分からは何の題もつけなかつたベートーヴェンよりも遙に理屈に合つてゐる。つまりこの曲を聞く時には、必ず月の光の事を聯想して貰ひたい、といふ意志を始めから明言して置くのである。その意志

は不幸にして音樂では全然言はれない。必ず言葉の助けを乞はなければならぬ。

然しそれだけでは物足らぬ。月の光にも、月夜の有樣にもいろ〲ある。どうせ他のもの丶力を借りる程ならば、もう少し明瞭に物事を言ひ現はして置いてもい丶。――『この曲は月光の曲である。私は夏の或る夜獨り多摩川の畔を歩いた。月の光と多摩の淸流と虫の音とは私の心を全く感傷的にさせた。そして私は川邊の石に腰を下して、月の傾くまで、たゞ一向に私の美しい戀人の事を考へて、涙をこぼした。』そんな事でも何でもい丶。なるべく詳しく書かなければならぬ。それもその事に相當する樂譜の上に書いて置かなければならぬ。こ丶の音を聞く時には、かういふ事を聯想して貰いたいと言ふのである。樂譜の中にその位まで言葉の威力を容れて、それで初めて音樂は月夜の美感を辛じて唄ひ得る事になる。

辛じて唄ひ得るのである。借りもの丶言葉の力で月の夜といふ樣な定まつた觀念を與へて置いて、そして音樂の描く感情がその觀念とうまく合致すれば、それでその曲は成功した事になる。誠に哀れな有樣である。

然し借りものは要するに借りものである。肝心な音そのもの丶中には初めから月の觀念も何もないならば、如何に借りもの丶言葉をそれに添へても結局は何の足しにもならぬ。汽車の音を必ず戀人の名と思へといふのと同じ事である。『私にはこの曲は月光の曲とは聞かれない。むしろ青葉の曲と聞かれる。』――さう言ふ人もあらう。そして遂には言葉を添えただけ無駄だといふ事になるであらう。

作曲家は畫家でもない。詩人でも無い。作曲家は文筆を持たない。言葉も持たない。作曲家も或る夏の月夜に多摩の川畔をさまようて、その戀人を思ふ事もあらう。或は人生を考へ、神を考へる事もあらう。そしてその事を自分の藝術で直ちに表現したいであらう。然しそれはすべて無駄な努力である。

同じ言葉の力を借りる程ならば、初めから詩に音樂を置いた歌曲を作る方がい丶かもしれぬ。シューベルトはゲーテの『月に寄す』に優雅な、典麗な譜を置いた。或は近くはシエーンベルクはジローの『月のピエロ』に新奇を極めた譜を置いた。つまりその音樂のふしと伴奏を聞く時には、人は必ずゲーテの『月に寄す』や、ジローの『月のピエロ』を聯想すればい丶。その音樂の意味はゲーテやジロー詩であつて、その外の何物でもない。それならば音樂の意味は明瞭である。從つて作曲家の感想も、もしゲーテやジローと同じならば、その詩を通じてよく聽衆に訴へる事も出來る樣に見える。

然しそれも結局五十歩と百歩の違ひである。音樂の中には、初めから言葉はない。どうしても言葉は借りものである。シューベルトの美しい『月に寄す』の歌から、その文句を全然變へる事も出來る。字數さへ同じならば、その『月に寄す』の代りに『戀人に寄す』と唄ふ事

も出來れば、『豚に寄す』とも『草に寄す』とも何とでも唄はれる。『月に寄す』の音樂は、必ずしもゲーテのこの詩に限られた音樂ではない。つまりは言葉はあつてもなくても同じ事である。借りものは借りもの以上の役には立たぬ。從つて作曲家は作曲家自身が詩人とならぬ以上は、音樂では決して自分の感想はのべられないといふ事になる。

要するに作曲家は言葉をもたない藝術家である。啞者である。作曲家が作曲家である限り彼は全く啞者である。啞者は月夜の美を感じても、到底それを語る事は出來ない。語る代りには身振りでもするより外に仕方はない。その樣に作曲家の天地もまた別にある。

○

殊に哀れなのは演奏家である。

彼もまた或る夏の靜かな夜に、ピアノによりながら、窓を洩れて來る青白い月の光を身にしみ〴〵と見る事もあらう。そして自分の事を考へ、周圍の世界の事を考へ、人を考へ、神を考へ、藝術を考へ、殆ど感慨に堪えないといふ樣な事もあるであらう。そしてこの感慨をこのまゝ自分の藝術に表現したいと思ふであらう。然しそれもすべて無駄な望である。彼はその感慨の何物をも表現する事は出來ない。

例へば彼はこの時にピアノでベートーヴエンの『月光の曲』を彈くであらう。そして自分にはこの感慨をよくこの名曲に盛り得たつもりであらう。自分一人ならそれでいゝ。然しそれを他人が聞くならば、或る人は今このピアニストはハイネの或る少女の詩をそのピアノで描き出さうとしてゐると言ふかも知れぬ。

演奏家が自分の感想をその演奏を通じて人に訴へようといふつもりならば、彼はどうしてもその事を言葉で人に言つて置くより外に途はない。もしこのピアニストが自分の今の感想を『月光の曲』で人に語らうと思ふならば、ピアノを彈く前に、彼はその感想を詩に綴らなければならぬ。或は散文に書いてもいゝであらう。そして演奏前にこの詩を聽衆に讀んで聞かせる。そしてその後でピアノを彈けばいゝ。聽衆はそのピアノの音から、前に詩で聞いた樣な事を聯想する。そしてピアノの與へる感情がこの詩の内容とよく一致するならば、恐らく聽衆は我を忘れてその演奏に聞き入るであらう。そしてこのピアニストを大なる藝術家とも言ふであらう。

然し演奏史上には、まだその樣な迂遠な企を試みた人はない。詩人ならば詩人でいゝ。苟も演奏家である以上は、言葉を借りて豫めその感想を聽衆に述べてをくなどいふ事は迂遠であり、屈辱であるも考へられる。それほどならば、よし程度の相違にしても、演奏家みな歌唄ひになるであらう。歌には文句がある。そしてその文句のための音樂ならば、文句の内容をその音樂で聯想させればいゝ事になる。そして誰も意味曖昧で感想の表現の出來さうもないピアノ彈きなどになるものはなくなるであらう。

作曲家が歌を作るのと、演奏家が歌を唄ふのとは、いさゝか違ふ。演奏家の歌はその時のその場きりである。たゞ一つのふしにたゞ一つ

の詩である。その時のその場の演奏家の感想は、その詩の内容によつて、その曲の感情によつて表はされるともいはれない事はない。然しそれも、もちろん、極めて限られた意味である。本來音樂と言葉と何の關係もない以上、強いてそれを結び付けて唄つて見たからとて、初めから無いものはやはり無いにきまつてゐる。

演奏家も作曲家と結局同じ事である。ピアノ弾きも歌唄ひも同じく啞者である。語る言葉のない藝術家である。

○

音樂そのものにたづさはるあらゆる種類の人々は、作曲家も演奏家もみな一樣に啞者である。音樂家はみな雄辯なる啞者である。

音樂家や演奏家が言葉で言ひあらはす樣な事にかけては、如何に不自由なものであるかは、月夜の美感の一例でよくわかる。彼等の胸裡には月夜の美感はあるであらう。然し彼等の藝術には月夜の美感は斷じてあり得ない。

音樂といふものが、由來さうしたものである。それが音樂の本質である。私共はそれ以外の何物をも要求してはならぬ。要求するならば要求する方が間違つてゐる。

もちろん、それは私共の心の自然には反した事である。私共の心は或る必然的なもの、或る普遍的なものを欲してゐる。ベートーヴェンの『月光の曲』は誰が聞いても必然的に月光の曲でなくてはならぬものであると言ひたい。そしてそれをこの曲が不朽の名曲である理由の一つにしたい。もしさうでなくて、私はこれを月光の曲と思つて喝采してゐるのに、隣に坐つてゐる友人は青葉の曲と思つて感激してゐる、といふ樣な事は確に私共の心を不安にする。確に私共が藝術を享樂する心理でない。そして音樂といふものはでたらめ至極なものではないか、と思ふ樣になる。音樂の威嚴は地に落ちる。

音樂家には、それは一層痛切に感じられるであらう。音樂は自分の藝術としたために、啞でもない人が啞の境遇に置かれなければならぬ。彼はその作曲を通じ演奏を通じて極力その胸裡の感激を人に訴へやうとする。月光の美を讚へ、月夜の美を歌はうとする。それは誠に藝術家の心の自然の要求である。然し聽衆には誰にもその意味はわからない。彼は何のために感激してゐるであらう。と聽衆は怪しむだけである。そしてそれに勝手次第な理由をつける。勝手次第な理由をつけられないために、わざ〳〵標題をつけてその内容を示して置いても、その標題は結局借りもので、人は必ずしもその標題どほりにその音樂を聞いてくれるとは限らない。然しさうとしたならばそれに或る藝術家の全精神の信頼は置けさうにも見えぬ。甚だたよりのない、心細い藝術である。そしてその事は甚だしく音樂の藝術としての信用をきづゝける。

音樂家は雄辯なる啞者である。音樂はその内容については全くでた

らめである。何の必然性もない。普遍性もない。それは事實である。事實をどうする事も出來ぬ。月夜の美感の一例はそれを明白に物語つてゐる。もしそれが音樂の權威にかゝはる問題であるならば、音樂は權威を失ふより外に途はない。もしそれが音樂の藝術としての信用にかゝはる問題であるならば、音樂はたゞ信用を無くするだけである。それを救ふ事は出來ない。音樂といふものが本來その樣な性質なものである。それが事實である。

事實と欲望とは混同されやすい。音樂がその內容については全くでたらめであるといふ事實は、到底私共の心の自然とは一致しない。私共は音樂に必然的な內容もあればいゝと思つてゐる。それは單なる欲望である。然しこの二つは長い間混同されて來た。音樂にも或は必然的な內容がありはしないかと思はれた。或はあるとも思はれた。あると思つた人々はその信念に基いていろ〳〵な曲を作つた。リストはそのピアノで聖フラチスクスが波の上を步く有樣を描き、ベルリオースはその管絃樂でバイロンの名篇ハロルドを描かうとした。その流れは今日に及んでもなほ少しも衰へない。そのために音樂の技巧は著るしい發達をとげた。そしてドイツではシュトラウスの管絃の詩を生み、フランスではデビユッシーのピアノの印象曲を生んだ。然し嚴重に言へばそれはみな事實と欲望との混同である。混同すべからざるものを混同したのである。その點に就ては徒勞である。全く失敗である。

世の中には理屈にかなつたものばかりは無い。むしろ理屈にかなはないものゝ方が多い。從つて私共の心の自然に反するものも多い。私共の欲求の滿されないものも多い。それが世の中である。それが自然の有樣である。

音樂は美しい藝術である。靜に目をとぢて、ピアノの鍵の一つの音を聞いてさへも、その音は私共の耳からはいつて、殆ど靈魂の最深の場所まで段々と透つて行く樣に思はれる。その音の限りなく複雜した一篇のソナーテは、誠に音の繪卷物である。音の花園である。美しい夢の國である。私共がこの地上で享樂しうる最も美しい瞬間の一つである。そして私共はたゞそれだけで滿足してゐればいゝのである。私共の心を、たゞそれだけで滿足させる樣につとめればいゝのである。それから先きは私共が勝手次第な空想を描くだけである。全くのでたらめである。

月の光は美しい。月の夜には詩が多い。銀座街頭のアンテナに懸つた埃の月にもなほ一掬の風趣がない事もない。私共はそれを音樂に唄ひたい。あれほど美しい音樂は、この月夜の美感を唄ふには、この上もなくふさはしく思はれる。

私共は全くでたらめに音樂を演奏しよう。或る友人はベートーヴェンの『月光の曲』を彈いて、この月夜の美をたゝへる。或る友人デ

ビユツシーの『月の光』を彈く。或る友人はシエーンベルクの『月のピエロ』を朗讀する。それ等はみな眞面目な友人だちである。私は音樂の內容のでたらめな事をよく知つてゐる。ヒンテミツトの『夜の曲』で銀座の月夜を賞讚しようかとも思ふ。然し必ずしも夜の曲や月の曲を撰ぶ必要もない。私はむしろ太陽の美感、眞ひるの感の曲がほしい。そしてそれを月夜の美感の曲であると思つて聞いてゐたい。

月と日本人

谷川徹三

一

ペーターはその「ヴインケルマン」の內に、ヘレニズムを光に於て、中世の精神を熱と深さとに於て、近代の文化をより多くの色に於て、他の如何なる時代にも勝れるものと見てゐるが、その言表はし方を借りて日本文化の特質を月の光に於て象徵することはできないであらうか。

すでに一二の人が西洋の詩歌には月を歌つたものより星を歌つたものの數多いに反して、日本の詩歌には星のそれに比して月のそれが如何に數多いかを指摘してゐる。この理由は恐らくさまざまの方面から考へられるであらう。第一に、氣候風土の相違。この國の濕潤の大氣と變化多い自然の形態――小さな地域に山あり水あり野ありしかもうつりゆく季節によつてその眺めが絕えずあらたまる如き――は月の風景にさまざまの變化と美しさとを與へるに反して、星の美しさはその乾燥せる大氣中に於けるが如き輝きと鮮かさとをもたぬことによつて、かの國の多くに於ける如くにはその魅力をもたないらしい。蓋し一つには月の眺めが多く下界のそれをも取入れるに對して、それ自身の中に多樣をもつ星の眺めはむしろ下界の風景から離して賞美せられることにも關係してゐる。第二に、文化的背景。日本に於ては月は佛敎の敎への「眞如の月」として古來一つの宗敎的道德的象徵的意味をもつてゐる。西洋では星は占星術の一般的普及と及び星座に伴ふ古來の多くの神話傳說とによつて星がより親しいものとなつてゐる。かかる

背景が一般に自然感受に及ぼす影響の強さは、(月や星を見るときいつもかかる考へを頭に入れてゐるとはいはないが)、たとへば日本の七夕の傳説によつてその傳説の星々が――天の河をも入れて――如何に、星としては異例に文學の對象となり、生活の諸相、諸行事にはいり込んでゐるかを見れば分る。これらの理由はそれぞれ重大な契機として見逃してはならないであらう。しかしわたしはそれらよりなほ一層重大なものとして日本人の氣質をかの國の諸民族の氣質に對立して考へなければならないと思ふ。

おそらくかゝる氣質一般は全く理念的なものである。またそれが孤立的に或は超時代的に民族に先天的なものとして考へられるのは正しくないであらう。それは一民族が一定の土地に居住してよりその自然(環境)との交互作用により、その隣接の文化の影響により徐々に展開發達したものであり、從つて未來になほ變化の可能を豫想しうるものでもあらう。しかし人が一定の歴史的時代、一定の社會的現象を考へるに際してかゝる因素を全然無視することは正しくない。それは歴史的社會的實在の一現象形態として常に顧慮せらるべき權利をもつものである。

だがそれより前に一體月夜が一般にわれ〳〵の心に喚起する感情の特種の性質を追感して見よう。

二

人間は自然に於てむしろ人間自身を見る。したがつて同じ月に對する氣持にも、人によつて相違があり、同じ人でもその時々の氣持によつて相違がある。これを大きくは人間の生活の背景、歴史的社會的發展の各の段階によつて、一定の群の自然享受の仕方をも區別することができ、また區別しなければならぬ。(それ故にこそわれわれは特に日本人と月とを結びつけて考へてゐるのである)。しかし一定の對象はまた、相對的にしろその對象の客觀性をもち、したがつてその對象は對象獨自の作用を人間に及ぼす。月は太陽や星とは異つた作用、感銘を、われわれに與へるであらう。もろもろの天體がわれわれの無意識の間に靈氣妖氣を與へ、普通には説明できぬたゞ不思議とのみされる、われわれの考へや行爲の、或はそれの無知のために他の原理で説明されてゐる現象の、秘密の原因になるといふやうなそんな考へ方をしなくても。

月に對して或は月夜に於てわれわれは一般に如何なる心の狀態に置かれるか。これが第一にわれわれの問はねばならぬことである。月夜とは言つても、ものの色のけじめをさへつけさうな滿月の滿ちわたる光と、糸のやうに細い、大きな星ほどの光の月とはその趣を異にし、空に融けさうな春の夜の朧月と冬の夜の「利鎌のやうな」鋭い月とは一樣には論ぜられない。或はまた涯しない大海原に昇る壯大な月と、とある夜に都會の屋根の上に玩具のやうにぶら下つてゐる月とはわれわれに與へる感銘を全く異にする。近代の鋭い感覺は、「サロメ」

以來、或はフランスの象徵詩以來、或はすでに「アタラ」以來、一つの月に百千の姿を見出してゐる。しかしわれわれはそのやうな、後に到つては全く病的な、奇怪な感覺のアラベスクとグロテスクとをしばし打忘れて、むしろ古風な月を見よう。エンデイミオンを眠らせて夜夜彼に接吻するセレスを、「月見れば千千にものこそ悲しい」月を、森の靜寂を照す靑白い浪漫的な月を、「靜かにおぼろな光をもて、ふたたび藪や谷をみたし、最後にわたしのたましひをも、すべてを和げてくれる」（ゲーテ）月を、或は「精靈のやうに輝き、この世ならぬ光をもて、夜の暗さを照す」（テニスン）月を見よう。

月は下界を照すその光に於て Parexcellence に月である。そしてその月光はその光度とその色調とに於て一定の性質をもつことができる。それ故この國の才情豐かだつた一批評家は已に二十年の昔に「月夜の美感」を論してその美の要素を月の光、夜の世界、月夜の光景が觀者の心に惹き起す聯想、の三つを數へながら、その美が主として第一の、月光の光度と色調とによつて、說明せらるべきを說いてゐる。彼は月光の主調を靑と見てその靑色一般の色相と感情とを述べて後にいふ。月光の靑は二つの點に於て、即ち第一に光力の弱い點、普通の靑に比して一分の暗を帶びる點、第二にその色の淡い點、稍白味を帶びておぼろげな點に於て、日中の靑と異り、ここから、その靑が普通のそれに比して更に一層の神秘と寂寞とを含み、沈靜安慰冥想に於て一段の深さを加へると共に他面、非實在の、假象的の、若くはイデアールな性質を帶びて來る、と。

この見方はたしかに肯綮に當つてゐる。その他彼の分析は多くの示唆に富んでゐる。加ふるにその優麗な文と幽婉の調とはわれ〳〵をしてさながら身月光の中にあるかに感ぜしめる。たゞ然しながら彼が「夜の世界」を論じてつくさず、また日中と獨自の對照をなしながら夜の世界或は月夜と更に興味ある對照をなす夜明けと夕暮との闡明を問題にしなかつたことはいさゝか遺憾である。

一般に晝は活動の時であり、夜は休息の時である。晝は惰性と有限と實際と經驗との世界であり、夜は心情と無限と靜觀と體驗との世界である。われ〳〵は晝に於て明かな輪廓とものゝ限界とを認識するが、夜に於ては輪廓はぼやけ融け、限界は失はれてさながらに無限の中にある。勿論日中といへどもわれ〳〵は、たとへば大空に無限を感じうる、が、それはむしろ知的に感ぜられる無限で、夜に於けるが如く切實な感情としての無限ではない。またいはゞ、晝に於ける無限は希望の無限であるが、夜の無限は畏敬の無限である。前者は喜びを伴ひ易く後者は恐怖に境してゐる。殊に闇黑の底知れぬ神秘は、小兒と原始の人とによつて恐怖であるばかりでなく、またわれ〳〵の中に住む小兒と原始の人とによつても、われ〳〵にとつても、しば〳〵恐怖である。

しかし月夜にはその無限の感じが闇夜とはいさゝか異つてゐる。闇の夜の無限はわれ〳〵に虛無をのぞかせる、しかし月夜にはほのかに

物象を浮べて、いはゞ永遠の時間の中に空間の漂ふ様を最も端的にわれ〳〵の直觀に示現するのである。それは恐ろしい虚無ではなくて、たゞ存在のはかなさである。物象の明かな輪廓と限界とを示す安らかにたしかな日中の存在感とは双方ともに異つてゐるにしても、恐ろしい虚無感と存在のはかなさの思ひとの間には大きな相違がある。それ故闇夜に於て人は恐怖と共にしば〳〵狂暴な原始の獸性を示すに對して、月の夜に於て人は多くやさしい感傷に捉へられる。闇黑は感性と靈性との分裂である。その一が他を支配し易いものであるに對して月夜は感性と靈性との靜かな忍逢ひである。闇黑は「すべてが無か」でり、月夜は和解である。闇黑は絶望と罪惡であり、月夜はあきらめと幻想である。

しかし月夜はなほ薄明と對象される。さうされることによつてその性質を一層明かにするであらう。月夜も薄明も晝の如くに明確な輪廓とものの限界とを示さないと共に、闇の如くに底知れぬ無限、虚無、絶望を示しもしない。ほのかな光に輪廓が鋭さを失ふことによつてやさしさとただよひとをもち、ものの限界が消えることによつて人は遥な思ひにさそはれる。存在のはかなさ、やさしい物悲しさ、靜かな感傷に誘はれる。しかしそこにおのづから陰影の相違がある。曙の薄明には期待と希望と熱とがある、生氣と新鮮とさわやかな感覺とがある。われわれの十分な眠りによつてさうである許りでなく、今やあらはれつつある太陽によつてさうである許りでない。全世界の生命のあらはれの姿をもつてさうなのである。夕暮の薄明にはそれに反して滿足と疲勞とが相伴ばしてゐる。一日の努めを果したことに滿足があり、その努めの勞苦に疲勞がある。人はその努めを如何なる程度に果したかによつて恐らくその氣持を異にするであらう。足滿のみあつて疲勞の意識されないもの、疲勞のみあつて滿足の感ぜられないもの、滿足の靜安の中に融け込むもの、疲勞と悔いとの中に身を投げ出すもの。しかしそれらすべてが滿足と疲勞との中にはさまれてゐる。しかも曙の薄明にも夕暮の薄明にも共通なものは、それが晝と夜との間の過ぎゆく短いひと時として常に或はただしさの雰圍氣をもつてゐることである。すべての時間が不斷の流動ではあるが、晝と夜とは類似の狀態の一定の持續として曙や夕暮ほどはうつりゆく時の流れを感ぜしめない。後の反省に於てその流れの速さを感じ嘆いても、一つの直感のうちに、刻刻と變化する外景のうちに、時の歩みを見るのではない。それゆゑ月夜には薄明に感ぜられない或靜けさ、安らかさ、落着きがある。夕暮の薄明に於て人の感ずる哀感は多く今日一日のことにかかはるが、月夜に於て感ずる哀感はむしろ遠い昔のことにかかはる。夕暮を悲しむものは怠惰者であるが、月夜を悲しむものは詩人である。曙の薄明にもつ希望は多く今日一日のことにかかはるが、月夜にもつ望みはむしろ遠い未來にかかはる。曙に胸を躍らせるものは實行の人であるが、月夜に胸を躍らせるものは冥想の人である。

一般に月夜に於てわれわれはかかる感情の内に自分を見出す。それ

は一般に暗きまたほの暗き時として眞晝に對立すると共に、特に暗き闇に對立し、またほの暗き時としても曙と夕暮との薄明に對立する。そこにわれわれはそのそれぞれに對する明確なまたは微妙な相違を發見する。さてこの月夜の感情が一般に浪漫的と呼ばれる感情に可成近いことは以上によつてもほぼ明かであると思ふが（人は浪漫的と呼ばれる文學に於て月の描寫を最も數多く見出すであらう）。しかしまた所謂浪漫的なるものの概念と甚だ異つたものをもそこに見出すであらう。

第一にわれわれはそこに沈靜を見出す。冷い落着きと青白い靜けさ。それは勿論ギリシヤ的の沈靜、アルカディヤ的安靜ではない。しかし浪漫主義の力強い半面である熱、或は潜熱、をもつてはゐない。いはんや浪漫主義の重要な母胎なる「シュトウルム・ウント・ドウラング」をもつてはゐない。われわれは中天にかかる滿月にしばしば「靜かなる偉大」と「氣高き單純」とをさへ感ずる。われわれは古典的彫刻にしばしば月光の美と相通ずる美しさを感ずる。もしギリシヤ的古典的なるものが偶然的と一囘的とを脫却した感性的存在（もしくは偶然的と一囘的とを脫却しながらなほ感性的なる存在）であるとするならば、いはば現象の多と理想の一との幸福なる融合として在るものとするならば、盈虛の姿を現じつつ一つの月としてある、美しく輝く天上の存在として在る月は、あたかもその象徵のやうにも考へられるであらう。では月は古典的であるか？　否。月の光は決して快朗と明確な輪廓とものの限界とを示さない。月はこの世ならぬ神秘をもつ。月はあらぬものへのあこがれに誘ふ。月は悲哀と感傷との母である。それは決して古典的なるものではない。

三

われわれの月に於て感ずるかかる感情、かかる心の狀態は、日本の文化を特質づける。殊にその詩歌に於て鮮かにあらはれてゐる。あの精神に通つてゐる。わたしが日本人として月をかく感ずるが故に、それがさうなるのではない。古と今の、さまざまの國のさまざまの人の歌ひ語るところを十分省みてもさう言ふことが出來るのである。さきに言つたやうに月の par excellence に月であるものの割合に長い年月に亘つて人人に歌はれ語られた最も普遍的な、言換へれば月並な、古風な、表現をかへりみてさういふことができるのである。かかる月並な、古風な表現は彼此各に共通しながら、しかもこの國に遙に數多いことによつてさう言ふことが出來るのである。——月は日本文化の、或意味での象徵である。

若しばしば人のするやうに日本人の氣質をその風土と關聯させて考へれば。第一、この國の溫暖なる氣候は一般に人々の魂に中和を與へる。それは南方に於けるが如く人間を懶惰にしまた文化的努力を不必要とするほど恩惠的でないと共に、北方に於ける如く人間を嚴肅にし自然に打かたんとさせる程無慈悲でもない、それは適度に調和的

である。第二。海にかこまれた細長い國土はその山水平野に特殊の相貌を與へる、總じて風景の特徴は大陸的に對して島國的と呼ばるべき特徴、變化と女性的性質とを有する。第三。濕潤の氣は心の隅々にうるほひとこまやかさとを與へる。それは熱烈と冷靜との中間にあつてやさしい同感と反省とを生む。……日本の文化は各の分野へこれらの性質を鮮にに反映してゐるが、月の與へるところもまたあだかもこれらの性質に對應する。月は太陽の如くに烈しく男性的でない。底知れぬ闇と、連る星座との如くに嚴肅で奧深くない。(カントの有名な言葉、「わが內なる道德律とわが上なる星空」とを想起せよ。)月は優しく照り、靜かなる感傷に、「もののあはれ」に誘ふ月夜には色彩の華やかさはない。色はおぼろに暗く燻されてゐる。もの皆に「床しさ」がある。感性と靈性との忍逢ひがある。

こゝへルンは「日本には熱帶地方で見るやうなあんな日沒はない、光線が夢の中の光のやうに穩かで、色の烈しさが少しもない。この東洋には自然界に色彩の猛烈さは全くない。海の色空の色すべてが色といはんより色味で、しかも濛氣を帶びた色味である、」と語つて日本の一般「自然界の色調の地味な微妙な美はしさ、」を說いてゐるが、これは日本の一般の自然の美を特徴づけてゐると共に、それが月夜の美の方向を指示することを明かにして、日本人と月夜との關係の親しさを特殊な方面から裏づけてゐる。單調と見えるものは實は微妙な變化なのである。それはヘルンの嘆稱してゐる日本人の色彩の好みにあらはれてゐる許りでなく、繪畫文學のその他文化のあらゆる諸分野にあらはれてゐる。西洋人の構圖の概念をもつてしては日本畫の畫面の空白は理解せられない。西洋人の詩の概念をもつてしては俳句の味ひは理解せられない。古池に蛙の飛び込む水の音は西洋の詩の概念をもつては詩となるにはあまりにあつけないであらう。畫面に一つ月を描いただけでは西洋の繪の概念をもつてしてはあまりに物足りないであらう。しかも日本人はここに奧深い餘韻を聽き、汲みつくせぬ餘情を認めるのである。複雜な構成に於けるもの以上に豐富な內容を見るのである。

月はこの心に於て日本人に鑑賞される。それは單純なものの美しさをもち、餘韻と餘情とをもつてゐる。サンタヤナは星夜の美しさを分析してそれを主として多樣の統一、或は一に於ける多樣、に見出してゐるが、(「第一に、空間の持續が、多樣の最高の觀念を與へるに十分な數多い諸點に劃られ、しかもそれら諸點がはつきりと生き生きとてゐて、その個性を悟らせずにはおかない。……第二に、暗い背景との感覺的對照……云々」)、もし西洋人が一般にかかる立場から星の美しさを見るのであり、また美の原理の少くとも有力な一つをかかる點に置くとすれば、月の美しさの理解せられぬことは怪しむに足りない。わたしはかつてソローを讀んで、彼の如く自然と親しく生活した人でさへ、「……時時鎧戸の隙間から覗くほどしか月を見たことがなかつた。なぜ月光の中を僅かの道でも歩かなかつたら、」と告白してゐ

るのを見て奇異の感に打たれたのを記憶してゐる。かの國では、あらゆる星座の位置と運行と傳説とを知つてゐるものも、月については知るところ少いのである。それに反してこの國では、星座の運行はいはずもがな、その最も著名なものの名さへ知らぬ人達も、十五夜に月を眺め、「月に濡れて」歩くことを忘れないであらう。この國の人達の自然は「花鳥風月」と言ひ、「雪月花」と言ひ、月をもつて常に自然の最も美しきものとしてゐる。しかも恐らく人は花に於てよりも雪に於てよりも月に於て一層親しく自然に冥合する。日本人は月に於て最も親しく自然に冥合する。月は日本人の氣質に最もかなつた自然の美である。

思ふにかかる月の賞美はすでに一つの傳統になつてゐる。事實またそれは年中行事の一つをもつくつてゐる。從つてそれはおのづから自然の美を感ずる自然享受といはんより人間の社會の一つの習慣、約束、として決して生き生きした內面の心をもつものでないとも考へられる。しかしまた翻つて思へば、さほどまでになるためには兎に角或程度まで、それが如何なる社會的狀態に於てであつたにしろ、月の美しさが人人の心に觸れねばならなかつたであらう。然り、その心は今もなほ全くは失はれてゐない、單に「古風」を愛する人のみならず、古風の中に新しい意味と價値とを見出さんとする人のみならず、新鮮な感覺をもつ何人の胸にも！

四

かくしてわれわれはいふことができる、ペーターに從つて若しヘレニズムが光に於て、中世の精神が熱と深さとに於て、西洋近代の文化が色の豐富に於て、殊に鮮かに特徴づけられるものとすれば、日本の文化の精神は月光に於て、最も鮮かに特徴づけられる、と。勿論、ヘレニズムにも或程度の熱や色やまた月光に比ぶべき光のなかつたわけではない。われわれはギリシヤ精神にあらはれた浪漫的なるものをも知つてゐるし、またギリシヤに於けるいはゞ月光的なるものをも知つてゐる。パルテノンのフリーズの彫刻が美しい色どりをもつてゐたとを知るものは、また南方の輝かしい日光の中に於ては自然にも文化にも一般に色彩の豐富が自然であるとを知るものは、人がギリシヤに於て色を見ないのは、(或はギリシヤ精神を彫刻的とするのは)たまたま偉大なる畫家達の作品がことごとく滅びたのに偉大な彫刻家達の作品が今に殘つてゐるといふ其單純な理由に基づくものとする考をも必ずしも無稽とはしないであらう。しかしそれにもかゝはらず Par excellence にギリシヤであるところのヘレニズムは飽くまでも光明と快朗とにその本質を有することをわれわれは信ずる。それと同樣、中世の精神にも色があり光があり、殊に靈的光明への憧憬はその本質をなすものであり、それは光とも月光的性質とも相通ず一面をもつてゐるが、しかしそれにもかゝはらず、その潛勢に於て、內に潛む統一的な力に於

て、熱にその本質を有することをわれわれは信ずる。最後に近世もまた光と熱とを勿論絶對に缺くものではない。中世を古い稱呼にしたがつて闇黒時代と呼べば近世は光明の時代であり、文化の諸方面に於ける發展の無限の可能、ファウスト的衝動（シユペングラー風にいへば）を跡づければ熱をもたないとは言ひ得ぬであらう。しかもそれにもかゝはらず、われわれはもろもろの活動の分裂に於て、眼まぐるしい變化に於て、皮相な文明に於て、心靈の喪失と感覺のアラベスクとに於て色彩の多樣を par excellence に見えるであらう。

日本的なるものについてもさうである。ここにも、光や熱や色が皆無なのではない。「眞如の月」の理想はいはば一つの光明主義である。しかしヘレニズムの光が知的光明としてものを合理化し、明確な輪廓と限界とに於て把捉せんとするに對し、眞如の月は靈的光明の理想として、ものを合理化し明確な輪廓と限定とを與へる性質のものではない、むしろ反對に晝の原理を離れて夜の原理の上に始めて成立つ心靈の覺醒である。ヘレニズムの理想は、一回的偶然的なものを離れてもなほ感覺的な形象として表現されたに對して、日本人の理想は感覺的な形象を通じてそれを單なる手段として、一層直接に內面をあらはすことを目ざされてゐる。晝の光があくまでこの世のものであるに反して月光はより自然にあの世のものと感ぜられる。かれには合理があり、知の明るさがあり、これには不合理があり靈の明るさが目ざされてゐる。アリオストが「人間が絶えず失くしてゐる青春とか美とか健康とかいふさまざまの所有や、また人間が地上の名譽の追求に、子供の教育に、或は所謂有益な事物の增進に費すあらゆる努力を、皆月の方へ蒸發して行つて、丁度物置小屋にでも積まれるやうに月の中に堆積される、で、決して人間を離れることのない愚蒙だけをのけると人間界の事物が一切月の中で見られる」といふのをきくとき、この諷刺の中に、われわれは月の中にまではいり込む古典的合理主義をはつきり捉へることができるであらう。熱についても色についてもさうである。日本人は根強い潜熱をもたぬ。日本人は華やかな色をもたぬ。熱はすぐ火花となつて散つて了ひ、色は地味な微妙な調和に融け込む光るものは燻し、あらゆるものに「さび」と澁さとを好む。日本人が月光に於て最も本質的なものの象徴を見出しうることは極めて自然である。………

勿論われわれはこの場合時代の推移を、或はそのやうな性質の展開の諸段階を全く無視するものではない。日本的なるものもその時代と社會とによつて發現を異にする。文學、美術、一切の文化が時代によつて多少樣式を異にする。そのそれぞれの時代が、或程度の時代的並行をもつて或はヘレニズムに似通ひ、或は中世の精神に、或は近代の文化に通ずる。しかしそれにもかかはらず、その各時代を、(少くともわれわれが歷史を有する範圍に於ては、)一貫する力強い統流がある。未來は問はず、過去のあらゆる文化時代に通ずる有力なる精神（或はシユペングラー風にいへば精神ではなくて心靈がある。それをわたし

は大きな不自然なくして、(殊にあのペーターの言葉を最初に豫想する場合は)、月と結びつけて考へられるやうに思ふのである。

月光的文献

室生犀星

一　月と喫煙

毎月十五日に吾々は小さい會合を催した。そして殆ど終夜喫煙を擅にするのだつたが、これはパイプの會と名稱けられてゐた。會員には資格はいらないが一本のパイプを携へることが條件だつた。薔薇の根でつくつたパイプさへ携てば、そして會員の内の誰かの懇切な紹介さへあればいいのであつた。パイプの會であるから珍らしい煙草を試煙することは言ふまでもないが、會員は既にマイ・メ クスチユアの濃厚な直ぐ舌の上に重い氣分を感じさせるのに飽いて、寧ろクレブン、メキスチユアを常用する程になつてゐた。

彼らは啻に喫煙するばかりではなく、料理をも併せて註文する關係上、上野の或る大きな西洋料理店の階上か、或はオオケストラの聞える階下の特別な箱のやうなボック スを撰ぶのだつた。ボックスは奇麗に急行列車のやうに駢んで、オオケストラの起ると同時に恰も疾走してゐる感じをも持つてゐた。併しながらこれは大抵會員が酒に醉ふてゐる爲めに、さういふ感じを與へられるのかも知れなかつた。ともかく可成なハイカラな此の會合には主として或る同人雜誌の關係者が多かつた。大學生、大學助手、詩をかく男、小說家といふ順序だつた。彼らは酒飲むものがそれに心を傾けるやうに、喫煙によつてそれぞれの心を傾けてゐた。

その晩は十五日のせいか混んでゐて、吾々會員の席が漸つと取れたくらゐだつた。勿論音樂は夕方から引き切なしに續いて、街路の電車道では諸々の車が動いてゐたことは云ふまでもない、それが女達のゐる控ひ部屋の鏡に映つてゐるせいで、この西洋料理店全體がメリイ・ゴオランドのやうに動いてゐた。先きにも言つたやうに吾々は醉ふてゐたし音樂は夕方から歇む間もなく續いてゐたし、それに吾々は二時間以上も喫煙してゐたから、階上で客同士の喧嘩のあつたことも、すぐ屋後の洗濯屋に小火のあつたことも知らなかつた。吾々は吾々同士

のパイプの蒂が段々に熱してくることや、酔と喫煙との過度からお互同士の顔が縦に長く伸びて見える事、舌の尖端に花火のやうな刺戟のある痛みなどをそろ／＼感じる頃であつた。吾々のボックスから勘定場のすぐ前の椅子に、吾々に背後を見せてゐる一人の青年が、酒場の方に向ひながら靜かに茶を喫んでゐるのだつた。その後頭から頸、頸からの線が猫背になつてゐるところは吾々に親しい友達の誰かによく似てゐた併し吾々はすぐ想ひ出されなかつた。吾々同士はその誰かに肖てゐるといふ考へを皆口へ出しては云はずに、皆の氣持の中で感じ合ふてゐた證據には、誰かゞその肖てゐる男の名前を云へば直ぐに判然とする程明瞭に吾々に感じさせる青年であつた。併しながら吾々はそのことでは誰も口を開かうとしなかつた。

夜が更けるとメリイ・ゴオランドのやうな料理店のボックスの中では、六人の會員は音樂のまにまに映畫觀照家の特異な或る感覺に依つて、悲劇中の女主人公を物色するのであつた。彼女らは卓の間を縫ひながら又引き返しては、注文書に料理の名前を書き入れる爲めに鉛筆を走らせてゐた。

「鈴木さんといふ方はお出でせうか。」

鈴木は僕だと云つて會員の一人が突嗟の間に答へて立ちかけた。

「お電話でございます。」

皆はその時最後のサンドウヰチを各々その指さきに抓んで食べてゐた。中身は好みで野菜のこしらへであつた。指揮杯が靜かに下ろされた。勿論、音樂もばたりと歇んだ。鈴木は電話口から離れて元のボックスに坐り込んだが、誰もその電話の用件を聞かうとするものがゐなかつた。或はだいぶ時間が經つてゐた關係上忘れられてゐたかも知れなかつた。メリイ・ゴーランドは一つところに駐つたきり再び動かなかつたのは、一つには音樂の歇んだためもあらうが、折も折、停電したためもあつたらしかつた。

當夜パイプの會員は十二時七分前までメリイ・ゴオランドに坐つてゐたから、都合夕方から六時間喫煙してゐた譯だつた。が、彼らの中の最年長者である粒山が醉みた時には、酒場の鏡に向ひ背後を見せて坐つてゐた男は、とうにその姿を消してゐた。併も皆はそのことに就いて電話と同樣に誰一人あつて氣にかける者はゐなかつた。

彼らが席を立つた時、お孃さんの詩ばかり書いてゐる或る男が、小窓を指さしておあつらひだといふ意味のことを云つた。月がどういふ關係か小窓の硝子にぼんやりと射し込んでゐたが、その明りはボックスの上へまでは射さなかつた。この晩青年詩人T・O君が粒山の故郷で逝去した。

二　月と歴史に就いて

千九百十二年六月下浣の或月のある晩、自分は何の爲めか塔の七階目から一度市街の燈火を眺め、更らに十二階目から家根の上を見下ろしてゐた。曾て斯樣に彼は彼の住む都會を見下ろした經驗を持たなか

つた。彼の視界はフエリスチヤン、ロツプスの畫面と同樣な、奇異な蝙蝠の暗い翼の羽ばたく音を幾度となく耳に入れた。其他の光景は何の誇張もなくロツプスの神秘と惡戯との世界であつた。

暗い屋根裏に錢を算へる老婆や、女の裸の足を嚙る男の珠數つなぎになつてゐるのや、また八度目のお化粧を仕直す女、煙草を拾ふて喫む男が義眼を落した騷ぎや、小路の奧の下水に陷ち込んでそれきりで絶命したのや、其他樣々の出來事が此の千九百十二年代の公園を中心として起つたのである。つゞめて云へば千九百十二年代の此の公園はロツプスとゴヤとを搗き交ぜ、フツクスとモールの寫眞版の複製で一杯だつた。その證據には美しい池の水は夜は石油のやうな虹色をぎらつかせ、それに映るものは可憐な玉乘少女であつた。その可憐な少女を描くことは當時の新しい畫家の好題目だつたに違ひない、――自分ら千九百十二年代の詩人の多くは概ね此痴情ある風景の中で擅に飲食し生成した。あらゆる惡徳をも見逃さなかつた。最も美しい彼女らの中の一人が彼らの上に乘りかかり吸鳴るのであつた。

「あゝ此の文なしの畜生。」

併し乍ら塔の上で自分らの發見した「思想」は、遂に神を呪はないところの正しい生活を慾望してゐた。痴情ある風景から田舍の風景の新鮮を思惟するところと一般であつた。そして今日の自分は凡人の一賣文者であり、何らの惡徳をも超然とするところの一紳士の假面をかむつてゐた。しかも今はその塔の上に再び登り彼の生活を俯仰することができなくなつたのである。千九百十二年代の病的なる月光が再び我々の上に無いやうに、その公園すら昔日の「歷史」の中に編纂されるだけだつた。

三　月から分れたる者

月から分れて出て來た男は、やはり同樣の女と冷たいアスパラカスの料理を食べてゐたが、彼女の指はアスパラカスと同樣に白い冷たいものだつた。彼らが辭去した後、給仕女は美しい二枚の新鑄されたばかりの銀貨をチツプとして、自分の財布におさめた。

四　月光的詩人

若し月光的詩人といふ言葉があれば、ボオドレエルやヴエルレエンはより多き生彩ある月光的詩人であらう。ボードレルには病的なる黃ろい月光を、ヴルレエヌには明鏡的な同時に詠嘆的な都會的古典趣味を各々感じるであらう。近代にはアポリネルやコクトオや、或はポール・モオランの諸短篇にも各々月光的なる詩人の精神を閃めかしてゐる。その他グウルモンにせよ、フランシス、ジヤムにせよ、レニエにせよ、新古典へ送り込まれた彼等の孰れも、月光的精神以外の詩人ではない。大摑みに云へば西歐の諸々の詩人は月か星かの匂ひを含まない詩は稀れだと云つてよい。彼らは月光をも溶解して製られた冰菓の石鹸のやうに、吾々の時に心腸を洗滌して與れると云つてよいのであ

る。

今の詩壇でこれらの詩人と比較して舊い昨日の試驗に數えらるべきものは、約言すればその月光的精神を生かしてゐるものは僅かに詩集「月に吠える」の著者である萩原朔太郎氏であらう。大正五年代以前に萩原氏が既に「月に吠える」と稱する奇拔斬新の命題を撰んだことは、云ふまでもなく何等かの先覺的な使命を、當時にあつて上包を解かれざる新しい試驗であつたことも實際であつた。當時新しがりの私でさへ此の締りなき一見散文的な「月に吠える」を餘りによき命題だとは思はなかつた。寧ろ彼が斯樣に新しがる程効果のない題意を鏡に萩原氏に傳へた程であつたが、彼は深く信據するところがあつたのであらう、後になつても更めることがなかつた。

萩原氏が月光的詩人であるとすれば、ボードレエル型の黄いろく歪んだ屋根の上の月光とでも云つた方が適當であらう、明々皓々の月光でない限り物凄い利鎌の如きものでもない、彼は病しげで之加も片雲の間に漏れる黄いろい月光であると云つてよい。――併し乍ら彼の詩の中で月光を唄つたものは殆ど稀れだと云つてもよい程である。それにも拘わらず、彼を思ふことは月光をも取交ぜて思ふことに近いのは、その作品の奥の方に「頼りなげにしかも忘れがたい月光」の明りが不斷に彷徨してゐるせいであらう。ジヤン・コクトオのシヤボン玉の詩は三行しかない、併も彼の詩には晝の月が出てゐるのを心あるものは見遁さない程、彼もまた月光から分れたものの一人であると言つてよいのである。我が萩原氏には殆どその凡ての作品に月がぼんやりと射し込んで、その影を落してゐる。それは一つには彼の心内に或月光が醸されてゐる事、又彼が月光的詩人の素質を多分に持ち併してゐる爲めであらう。又何よりも肝心なことは此詩人が「描かざる月光」を何時もうしろに負ふてゐることである。

五　活動寫眞の月

明治四十三四年といふ年代に自分は東京に出て、初めて活動寫眞を見物したものであつた。當時にあつては歐洲諸國の文明開化をもつてすら未だ活動寫眞といふものは、人生の數奇多樣の生活を表するものではなく、奈何にして自然の美を會得せしむべきものであるかと云ふことに腐心してゐた。ロツキイ山脈や砂漠の映寫は、吾々を生きたる寫眞の現象として感激させたことは云ふまでもない、――二十數年後に「カリガリ博士」や又五年の後に「サルベエシヨン・ハンタース」が表はれるなどゝいふことは、殆ど當時に於て文字通り夢にさへ見られなかつたことだつた。――自分らの過去に於てすら急激な變化ある進出を映畫界に見出したことは、吾々の後代の人は遂に「サルベエシヨン・ハンターズ」さへ一夕の笑草として語るやうになることがあるかも知れない。況んや際物である「カリガリ博士」は當然古きポンチ繪の如く棄てられ顧見られなくなる時代があらう。

自分らは樂しい明治末期の活動小屋の中にゐて、奇異なる文字通り

の活動寫眞を見物してゐたことは前以つて述べた。しかも自分らはダンスといふものが西歐人の肢體によつて斯くも完全に、斯くも私どもの前に如實の如く踊り演じられることに、又なき好奇の眼を瞬つたことは新しい喜びでもあり驚きでもあつた。當時は月光の中から瞬きしてゐる間に、數人の女が羅布を纏ひながら、嫣然として吾々の面前で踊り續けるのであつた。彼らは月光から分れて出たものゝやうに美しい長い手足を素早い動作によつて左右にヘシ曲げ、或は飛び上つたりするのであつた。月ばかりではなく花束や或は星の群からも、手品師の扇からも、卓の上の煙草入れからも、舞ふてゐる胡蝶や小鳥の籠や手帳の蔭からも、殆ど總ゆる物體の化身のやうに彼女らは舞ひ出てくるのだつた。しかも其等の花や月から女が出る前には、メリヤスのズボンのやうなもので手足をつゝんでゐる一人の奇怪な惡魔が、必らず絶えず畫面の中を指揮し彷徨してゐるのだつた。惡魔は西洋人の考へたことであることを、當時年少の一看客であつた自分が信じたことも諸君は無理もないことだと思はれるであらう。

當時自分は映寫中の一美人が婀平と微笑する時、何となくきまり惡い思ひをし、そして何となく羞恥の情や赧面の面持をしたことは強ち年少な好色にのみ耽つてゐた譯ではなく、飾りに吾々の眼に近く物言ふごとく囁くごとく表はれ踊つたからであつた。自分は永い間艶美で露骨な西洋人の微笑に悩まされてゐたのも、これらの映寫中の美人が物言ふごとく迫つてゐたからである。

月の中から分れて出た女は月の紋章のある冠をかむつた女王であり、星から生れたものは星の紋章ある冠を戴いた女王であつた。月あれば必らず自分はそこから舞ひ出る女王の姿を想像した。勿論星や花束が寫されれば直ちに同様の舞踊女をも想像した。後に自分が月光に何か艶治たる或物を想像したことは、夏の七夕に於ける星女を思ひ描くと同様、この活動寫眞の影響であることは拒めないやうである。

その明治末期に近いころは新文明を表象するものとしての「ふしぎなる二輪車」は次第に價を下げてはゐたものの、まだ一臺百金以下では求められなかつた。此の自轉車を發明した男は月ばかり眺めてゐて考へついたのではなからうかと、今だに自分はこの考へを捨てないでゐる。あらゆる文明機關であるところの汽車や自動車も、月の形態から入つた一つの科學的現象として見る前に、人間が何等かの模倣から入つて行かなければならない或宿命的な約束を持つてゐることを、吾々の日常生活の器物や肢體の圓球狀から想像することは、單に幼稚なる說として一蹴にする必要はないであらう。

六　上田秋成

上田秋成もまた月光的詩人であらう。

「淺茅が宿」や「靑頭巾」や「蛇性の婬」の物語には、軒漏る月かげでなければ、陰をつくる物凄い月が射してゐる。或は彼らしく清閑の月がほのかに照してゐる。西行も月の大家であるとしたら又芭蕉も月

の大家でなければならぬ。又秋成も大家の外のものではない、彼の文章の中に何か仄かな月のあかりが漂ひ、不斷な「淺茅が宿」をあらはしてゐる。

初　秋

月あかき夜を誰かはめでざらん、ふん月望のこよひ、庵を出て、わづかに杖をひけば、鴨の河面なり、雨ふらぬほどなれば、月は流を契てやすむらん、香をしるべにとめくれば、むべも清しとて、人々手にむすび、かいそうぶりなどして遊ぶ、風高く吹き、雲消え、影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき、——（以上、藤簍冊子）

十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやふきに、夢路にやすらふがごとし。（雨月物語）

やよひの望の夜ごろ、かすみながらに、夕かけて月いと花やかにさしのぼりて、庭の梅が枝に光かゝれる影の、花の色あらそふは、似る物もなくあはれ也。（つゝらふみ）

七　古い月

芭蕉は月光の大家であるよりも、月の大家とあると言つた方が適當である。月光は後代の新體詩人に冠すべきであるが、芭蕉は單に月の大家であらう。しかも芭蕉の月の句は彼の英才を以つてしても、大して新しくはない、と言つても決して古くはない。その句の殆ど總てに前書があり、偶吟といふよりも紀行や題意に叶ふて詠じたものが多いやうである。「三日月や蕣の夕べつぼむらん」旅中の吟「俤や姨ひとり泣く月の友」悼遠流天宥法印「其の玉を羽黑へかへせ法の月」嵯峨山「義仲の寢覺の山か月悲し」稍々晩年の作、「秋もはやはらつく雨に月の形」等枚擧に暇がない。みな古風な、それ自身月の面影を持つてゐる。

名月や門にさし來る潮がしら　　芭蕉

此句は何か今の深川あたりの景色は景色でありながら、繪のやうな往昔を思はせる。目のあたりに髣髴するそれであり乍らも、私の心に新たないのは、芭蕉本來のねらひが沁み出てゐないばかりでなく、單なる寫實で終つてゐるからである。月の大家は大家でありながら、やはり彼の發句道を通じて輝やくところの「名月」ではない。

芭蕉は或は月の大家でないかも知れぬ。彼はそれ以上の明々皓々たる何者かであらう。或は蒼古二百年の古い月かも知れない、——

八　山上にて

碓氷の峠への途中、中の茶店の婆さんが洋燈に火をともしてゐるのを見て、山中の感じが深かつた。が碓氷の山頂の村に着いた時は暗い電燈の明りを見出して、また一際山中の思ひが深かつた。自分らは避暑地の宿屋住ひの連中で碓氷の月を見に出かけたのである。

自分らは見晴臺へ行き、それから妙義山一帶が露骨な程山獄の感じを顯してゐるのに驚いた。勿論妙義一帶は憂欝な暗い雲の下から、懷中電燈のやうな月光に片方だけ照らされ、北方の斷面は悉く暗澹な

地であつた。自分はその黒雲が搖曳してゐる中に煤煙の臭氣を嗅いだのは、殊に煤の多い田端に住んでゐるためかも知れなかつた。ともあれ黒雲は惡魔のやうに暗かつた。自分は餘りに長く妙義一帶を眺めてゐる間に、山にも動物的な愛情を感じ出して一足飛びに飛び越えたい勇躍を感じた。それは自分らの足元には早くも夜霧が罩められ、谿谷の深さや恐怖が無かつたからである。自分は山嶽に對する感じは何時も莊嚴ではなく親密の度合の奈何によつて、その山を好き嫌ひの中に觀賞することが出來た。妙義山を見渡す此見晴臺の上では、自分はその晩小さい月を見出したのである。山頂では月も大きくなければならないのに、月は小さく山嶽の肩からはなれて、みじめに見すぼらしい姿をしてゐた。それは少々黄ばんでゐたせいかも知れないが、ああいふ小さい月を見たことは稀れだつた。

山嶽は昔地球が收縮したときの「皺」に過ぎないといふことは、特別な千古に新しい言葉に違ひない、――吾々は此の「皺」の上に立ち、夏蜜柑を舐るのだつた。或脊丈の高い西洋人は黒雲の方に向ふて、何か田んな唄をうたひ出した。自分は何となくブレークを思ひ出したが、後にこの西洋人はビールの立飲みをしてゐるのに氣がつき、自分の感興はまたゝく間に消え失せた。

此の山頂の離れた一軒家に自分の顏見知りの老媼がゐて、毎年顏を合すのであつたが、毎年の決文句はお達者で何よりでございますといふ言葉だつた。自分は此の老媼の主人を知つてゐたが三年前に亡くなつてゐた。老爺は或時彼にいふのであつた。「みんな此のばあんに吸ひ取られます。」

併し老媼はそんな話を珍らしがらないで、無關心で鷄の餌を撒いて遣つてゐたが、それは先刻上つて來た峠の中の茶店にかれらが住んでゐた時であつた。爺さんが亡くなつてから老媼は寂しいからといふ意味で、この山頂の茶店に越して來たのであつた。自分の考へでは中の茶店の方がずつと山頂よりも寂しからうにと思ふたが、老媼は此處の方がよいと言つてゐた。

自分は此の老媼の皮膚に何時も不思議な不健康さを感じてゐたが、老媼は霧や白雲や雨や風の中に生きることは微妙な健康を持つてゐて、茶店を開くことを夏だけの仕事としてあるのに、驚嘆に近い氣もちで眺めてゐた。自分は碓氷の山と結びつけて此の仙軀を負ふ老媼が、曾つて爺さんから罵られた單なる女でないことを白雲とともに思ひ出すのであつた。彼女はもはや半仙の老媼ではないか？――。

九　月光的感情について

私は所謂月光脈の詩人でもなければ、又特に古い月を詠むところの俳人でもない。併し乍ら私の文學的生涯の過半には、いみじき月かげは不斷に射してゐたに違ひないやうである。今も私の喜怒哀樂の夕には或は月光以上の明りが射し込んでゐる。私は今は西行のやうに月見れば悲しむといふ古への思想を轉旋してゐるものに近いかも知れな

い、——日本に於ける總ゆる和歌や發句道の精神には此の月に事寄せて哀歎の情を述べたものであつたが、私は却つてこの古き歴史と文學の背景をもつところの月光に、直ちに情を述べる文學に贊成することができないやうである。萬葉集や元祿俳人の詩的精神、ボードレエルやヴエルトエンの哀調を育て來たことを思へば、後代の月光も又別樣な文學の榮光を生みつけるであらう。併し月に事寄せる文學は今のところ行き盡いてゐることも實際である。殆ど洗ひつくしたと云つてよい。

高山樗牛が月夜の美感を書いたところは、今から二十年も昔であつた。空虚な文字ではあつたが當時にあつては私は愛讀したものであつた。彼には彼の熱情に依つて仄かに射すところの月光があつたことを私は記憶してゐる。德富蘆花や尾崎紅葉もまた月光的新派の一旗幟を持つてゐた。尾崎紅葉は何かしら一月十七日の月光を自分に印象させたことは、今だにお可笑しい記憶を殘してゐる。

夜中に目をさまして
庭に下りると月が私の家の
その眞上にすはつてゐる
あるだけの光がそそがれてゐる
地は光にうたれて濕つてゐる
いままで靜かに眠つてゐた自分の家
私がひらいた雨戸の音は
夜の葉と葉の上に亘り
月の中心にまでとどいて行くやうだ
かしこにもまた何者かがゐて
見下ろしてゐるやうな微妙さが來る
その明るさは未來の心をひらく

その美しい光の團欒
つきない光の泉
絶えず人々の心に入り込み
永い生涯のつゞきを考へさせる

光のはげしさ新しさに
そのちからに今宵も私は抱かれて
ねむりの內も起されて
底にたたへられた激しさに追はれて
しづかに庭をあるいてゐる

これは大正五年代の自分の詩であるが、今から見ても劣作ではない。大正十年代には既に詩壇の先進らは未來派のマリネッチイなぞに影響されて、月光暗殺論をその詩情の中に加へた。月光は人心を墮落させる前にそのセンテイメントを拒否する意味だつた。總ゆる未來派は時の道化者であることを疑へない如く、彼らは次第に影を消失した

のだつた。そして第二期の未來派はその文字の感覺的羅列に操り再び月光を封じようとするのであつた。併し乍ら月光は依然として世界の文學や音樂の上に照り輝いてゐる

音樂と月光との關係は比較的に深いと云へよう。文學にあらはせない月光は音樂に漂ふてゐることは、音樂の本質的なきめが月光の堆積による光線を音波として組立てられてゐるからである。月光的センチメンタリズムの發展は、比較的音樂の表現に依つて時にのみ、酷く露骨なセンチメンタリズムに陷ちなかつた。彼らは品よく體裁よきロンド風のセンチメンタリズムに加擔してゐるのは、月光暗殺派からは音樂を以つて時代遲れとしたことも故なきではなかつた。ベエトベエンにしろシユーベルトにしろモツアルトにしろ、自分らにはその全曲の半ばに達しない時にすら、その組立の豫想が可成に的中することは何らの皮肉であらう。音樂の構成は絕對的に數學的な豫約を踏んでゐることは爭へないやうである。併し乍ら音樂くらゐ月光的感情を表現したものは少ない、或意味で古い言草ではあるが音樂の感情も月光のそれと同じい微妙さを相互に持ち合してゐるものかも知れない、——

自分は專門家ではないが、音樂の發展や進出がどの程度まで續いてゐるかは分らないが、彼らの進出は絕大の同情に價する程遲々たるものであらう。彼らは進出しながら後方にあと退さりする砂山を登攀するそれの如くであるかも知れぬ。ラヂオなぞに依つて音樂の本道的な美や微妙さが解るものではない。ラヂオは音樂を通俗的に普及はしても其纖巧を失ふことは當然である。

十　小兒と月光

小兒が月光から與へられる感覺や記憶力乃至崇拜的感情に就いて一言しよう。

自分は幾歲くらゐで此世の月光を初めて見たかよく覺えてゐない。併し不思議に東方人の常として月光を崇拜する觀念は、北方の憂鬱な風光に育てられた自分に、この樣の言葉や、月の中にも住む者のあること教へた。自分らの國の老人は月を拜み日を拜むことによつて、自己の宗教的渴仰を滿した。自分らはいとけない日に乳母の背中にありながら、美しい月を禮拜することによつて每夜のお休みの言葉とした。吾々の曖昧なる父母は古代印度人のやうに吾々の月光を神に近いものゝやうに教へた。吾々は小さい掌を合して月を拜がんだ。併も成年の後には露もこの崇拜の念ひは殘つてゐないが、それを一蹴に付する勇敢をも必要としてゐないやうである。

自分は後に一子を設け、月のある晩は、その子供にのゝ樣と呼ばしめ、また彼に每夜のごとくお休みの言葉を言はした。斯く私の子供も遂に月を禮拜することによつて、彼らの小さい信仰を築き上げ私はそれを見て樂しむのであつた。彼らは成長の後に曾て私が私の父母を愚昧と呼ぶところのものを、又再び繰り返すであらうと思ふと微笑む氣もちになるのである。

月光讃

吉田絃二郎

月ばかりはいつながめてもいゝ。

上弦の月もよく、滿月はさらなり、下弦の月はさらにあはれである。場所を選ばず、季節を選ばず月はいつ眺めてもわたくしたちの心を落ちつけてくれる。

生まれてからわたくしの最初の月の夜の記憶は三四歳ころのことであらう。

亡くなつた母はわたくしを抱いて故郷の田舍道を歩いてゐた。恐らく一里歩いても二里歩いてもめつたに人にも逢はず、人家の燭をも見出せないほどの山村であつた。

わたくしはその夜川の瀨の上を月が白く照らしてゐたのをかすかに記憶してゐる。

をり〳〵は岸の木立が黝い影を作つてゐた。そのやうなところは乾度淵をたゝへてゐて漫々たる水がかすかな漣を立てゝゐた。わたくしは一つ一つの漣波に映る月の光りを子供心にも珍らしいと思つてながめてゐた。

同じその夜であつたかと思ふ。或ひはその前後であつたかも知れぬが、ともかくわたくしは母に抱かれて野天の風呂に入れられた。山の農家の庭の隅であつたらうか、明るい月が山をも田の面をも照らしてゐた。風呂につかつたまゝわたくしは月をながめてゐた。風呂の湯をかきまぜるたんびに月の光りが風呂桶のなかに踊つた。

今でもわたくしは田舍にかへつて秋の夜など野天風呂にはいるごとに、母に抱かれて月をながめたことを思ひ出す。

夜氣が霧のごとく重く沈んでゐるところに、遠い山風を聯想させるほどに湯がかすかな音を立てゝ沸いて來る。燃えてゆく石炭の香までがなつかしい。

山村に入つて第一のもてなしは月の夜の野天風呂の味である。

二里三里の間燭一つ見ないやうな境界に置かれて、しん〳〵と沸いて來る釜の音をきゝながら頭を上ぐれば月のみが三十年、四十年前にかはらず黝い山を照らしてゐる。

山には霧がかゝつてゐる。白い雲が湧いてゐる。時として青い光脚

をのこして星が中天を飛ぶこともある。羽音のみを殘して渡鳥の群が南より北へ飛ぶこともある。

　わたくしは今でも山陽道の姉の家をたづねては野天風呂の馳走にあづかることがある。

「あれを見い、備中の山ぢや。こつちの山が山陰境の山ぢや。靜かなものだらう。白い雲が悠々として湧いてるだらう。のんきなものだらう。」風呂の釜を焚いてくれてゐる義兄が柴を手折りながら話しかける。義兄の聲だけが月の光りのなかに溶けてゆく。そこには水の音も、風の音もない。

　わたくしはいつも義兄の山村の生活をうらやましく思ふ。殊に月下の野天風呂に浸されて秋の夜をしみ／″＼と觀ずる時「歸去來」の句を想ひ、白樂天の詩を懷ふ。

　齷齪として塵巷に功名を追ふてゐる者の生活が、いかに空虛なものであるかをつく／″＼と感じさせるのは山村の月明の夜である。殊に野天風呂のなかに月を眺むる夜である。

　都會の成功者必ずしも成功者ではない。志成らずして山村に還つた義兄が野天風呂のなかに月を眺めてゐるであらう姿を想像しては、わたくしはむしろかれがあまりに正直で、あまりに世渡りが下手であつたことをかれのために喜んでやりたい。

　五十年、六十年の成功は邯鄲盧生の夢に過ぎないことに氣付かせてくれるのも山村の月である。月の夜の悠々たる白雲である。

×

太陽は活動の象徵である。月は靜思の象徵である。月は回想であり、祈りである。もしこの地上から月が失はれたとしたらいかに人間の生活は空漠たるものになつてしまうであらう。月は人間の魂の揺籃であり、祈りの部屋である。月あればこそ英雄も槊を横たへて家鄕を想ふ。月あればこそ遊子も泣く。月あればこそ戀もあり、詩もある。

　月夜の美は所謂夢の美である。現實の境を越えて幽明の世界に逍遙するものゝ美である。

　月夜の美は萬法一如の美である。そこには色もなく、聲もない。在るものはたゞ幻のみである。空も地もたゞ一つの幻につゝまれてゐる。手に觸るゝことをゆるさぬ幻の光りのみが一樣に山を照らし、水を照らし、美しき女の顏を照らす。

　月夜の美は夢の美であるがゆえに、人は月の下にありてはなつかしき過去の夢を追ひ、過去の幻に泣く。

　もしこの地上に夢のなかに生き、夢を現身に生きる生活があるとするならば月夜を歩む若き人々の生活はそれである。

　巢林子は死に行く若い男女の道行を珠のごとき名文に綴つた。恐らく巢林子にとつては人間の一生のうち最も美しい刹那は死を急ぐ悲しい男女の道行の夜であつたであらう。月下を逍遙ふ時、わたくしたちの魂は與兵衛お龜の歔欷を聞かないか。小かん平兵衛の草を踏む

跫足を聴かないか。

月の光りは所謂厭離の情である。月の光りに照らさるゝ時死者はよみがへり、生者は憂ふ。墓の上に冷たき光りが漂ひはじむればかつて地にありし美しき女らは蹈り、かつて別れてしまつた美しき戀人らは絹のごとく草の上を歩む。

月の光りは悲しき魔法使である。

わたくしの忘れてゐた魂をゆり起して、草の上に美しいかの女の黒い瞳を思ひ出させる。

森の白樺に纏綿たる絹のやうにわたくしの魂をつゝむかの女の白い手が月の光りとともによみがへつて來る。

どうせ夜が明くれば太陽が赫と照つて、わたくしたちの夢を冷笑するのだ。

月の光りが漂ふてゐる間に、夜が明けぬ間に、醉へるだけ夢に醉つたがいゝ。

追へるだけ幻を追つたがいゝ。

かの女の黒い瞳を月の光りにさがしたがいゝ。

かの女の纖細い手を月の光りにさぐつたがいゝ。

月の光りのなかではわたくしたちは幻の國の王者なんだ。月の夜がつゞくかぎりは人を懷ふがいゝ。人を悲しむがいゝ。魂が窒息するまでに歔欷いたがいゝ。

夜が明けたら、そして太陽が照つたらわたくしたちはいやでも賢い現實主義者にならなければならないから。

×

わたくしはシモンズの「世界の馬鹿」を思ひ出す。死の國の物語りである。

一つの魂はいふ。

わたしはあまりに早く死んだ。まだ人生の朝のうちに死んでしまつた。だから人生がいゝのか、死後の世界がいゝのかわたしにはわからない。

一つの魂はいふ。

わたしはちやうど人生の正午ころに死んだ。五月の薔薇の花のさかりころであつた。だからわたしには死後の世界よりか人間の世界がなづかしい。

一つの魂はいふ。

わたしは人生の日暮れころに死んだ。わたしにはもう一定の態度さへ重かつた。わたしは疲れてゐた。だからわたしには人間の世界よりか死後の世界がなづかしい。

わたくしは三つの死についての、死の國の男たちの物語りが今も月の下でくりかへされてゐるのを知つてゐる。

大學の講堂では哲學者たちが生存について、意志について、いつもく蒼白い顔をして語つてゐる。そこには太陽があかくと窓のアカシヤの葉を射てゐる。

しかしそこではわたくしの魂は救はれない。

月が照る。霧が草の上にためらふ。

アカシヤの眞白な花が眞つ先にそよぐ。月の光りとアカシヤの雪のやうな花びらが幻の世界の窓をかざり立てゝくれる。

微風が吹く。幻の聲である。笑つてゐる聲である。歔欷いてゐる聲である。

「人生とは？」と一つの聲が語る。

「そんなことは永遠に分りつこはない！」と一つの聲が答へる。

幾つもの聲が哄笑する。歔欷する。

「ごらんなさい！」と一つの聲がいふ。

「ほら一つ一つの月の光りが砂の上に落ちてゐるでせう。そしてぢつと落ちてゐるでせう。落ちたまゝのところに、落とされたまゝのところに月の光りが砂の上に落ちてゐるでせう。やがて夜明けが近づいて來たら、落ちたまゝ、落とされたまゝで月の光りが無くなるでせう。何の恐れもなしに、何の不平もなしに、風よりも靜かに、死よりも寂しく月の光りが滅えて行つてしまうでせう！」

みんなが哄笑する。みんなが歔欷する。

×

わたくしは草の中を歩む。

日が暮れる。月が出る。

どこかで墓を掘つてゐる音がする。

亡くなつた東儀鐵笛の墓掘り男の歌を思ふ。

大きなユモリストであつたが、笑ひの底にすゝり泣いてゐた男であつたが、墓掘りの歌を舞臺にうたひつゝ寂しく死んで行つた。

死とは？　月の下に一つの聲が問ふ。

棺桶に訊ねて見たがいゝ！　と一つの聲が答へる。

鍬に訊ねて見たがいゝ！　と一つの聲がいふ。

人間の死骸を食る蛆蟲に訊ねて見るがいゝ！　と一つの聲がいふ。

「ヘレナ姫の屍肉が一番おいしかつたと蛆蟲は答へた。」近代の耽美主義者の詩はかくいふ。

わたくしは月の下の墓場を歩む。

ヘレナ姫の屍肉を食る蛆蟲の音が地の底から聞えて來さうな夜である。

生きてゐる人間の憎みも、呪ひも、苦悩もみんな墓の下の蛆蟲に食はしてしまつた方がいゝ。

×

月は人間の憎みをも、呪ひをも、懊悩をも霧の下に葬つてしまふ。

月は甘美な魂の痲醉劑である。

月を愛する者は南の國の阿片喫煙者にも似てゐる。

さらにギリシヤの Lotus-eater にも比すべきであらう。

人間の世の善も惡も、名も、富も太陽の光りのなかのものである。

月の光りのなかでは善もなく、名もなく、富もない。

あるものは靜思と、靜觀と、歡欷と、幻影のみである。

月を觀れば太陽の下に起つたすべての人間の苦惱も絶望も忘れてしまうがいゝ。

かつて太陽の下に人を思つたこと、戀ひしたこと、別れたことすべてを悲しい詩のなかの美しい繪卷物として眺むるがいゝ。月の光りはたしかにわたくしたちの悲しみや憤りを痲痺させるだけの力を持つてゐる。

人は風のごとく生まれ、風のごとく死んでゆく。

月はたしかにわたくしたちにこの眞理について考へさせる。

月の光りを見よ。

天上より落ちたるまゝに照り、落ちたるまゝに滅えてゆく。

×

春夏秋冬を通じて月はいつ眺むるも面白い。春の花とともに眺むれば西行ならずとも「願くば花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」といふ欲念も發すであらう。春の朧夜に花を眺むればむしろ死ぬことがいやになる。人間の世なればこそ花もあり、月もありといふ感じがわく。春の夜の月は歡樂きはまつて哀愁多きものである。近代のepicureanの生活を想はしめるものである。享樂、平安朝の人々の生活にとつて最も關係の深かつたのは春の夜の月であつた。現世主義者、耽美主義者たちの月は花の蔭の春の夜でなければならぬ。春の月は生活の苦を知らぬ大宮人の月である。王城の月である。

夏の月こそ市井の月である。人生の苦悶に喘ぐ人々の月である。浴みの後の夕涼み、一鉢の夕顏を前に月を檐端に仰ぐ夏の夜こそ裸一貫の男の極樂である。

田には懶い聲で蛙が鳴いてゐる。露草の露を慕ふて微風が吹き、螢火が流るゝ。田園の若い男女にとりての淨土は夏の月夜である。

南の國では大きな木の幹の上に高く矢倉をしつらへて若者たちはそこに月を眺めながら夏の夜を明かす。矢倉には草の屋根もあり、蚊帳もある。月下に燒酎が運ばれ、畑からもぎとつたばかりの眞つ赤な西瓜が剪られる。

若者たちは竹を切つては笛を作る。夏の夜南の國を旅する人たちは小暗い木立のなかゝら嫋々とした横笛の音の訴ふるがごとく、泣くがごときを聽くであらう。たしかに多感の旅人の腸を斷つに足るものである。

南の國の若者たちはよく燒酎を飲む。わたくしはかつて霧島の奧深く入つて月明の夜に若者たちの燒酎飲みを見たことがある。

月は千古の處女林に照つてゐた。岩は默く、水は絹のごとく白く、風もない夜であつた。若者たちは飲みに飲み、うたひにうたつた。舒する唄はむしろ悲しきものであつた。山は眠つてゐた。月も眠つてゐた。たゞ人間のみが霧の下に飲み、霧の下に泣いてゐた。

夏の田園の笛も悲しく、唄も悲しきものである。

夏の夜の田園の情趣の最も古雅なるものに月明の夜の麥搗歌があ

る。麥搗歌は田園生活の最もリリシアルな斷面である。霧に溶けて月光とゝもに水のごとく流れて來る麥搗歌は笛の音にもまして田園の人々の悲しみを訴へる。

夏の月は田園の月であると共にまた江上の月であり、海上の月である。萬斛の凉風を白帆に孕ませて江上に月を眺むる時、我が世の望み悉く足れりと思ふ。わたくしは大村灣のほとりに一人の親しい友人を持つてゐる。わたくしはかれの船に乘つては月下に鱸を釣つたことがあつた。恐らくかれは今もなほ大村灣の夏の夜を釣りに明かしてゐることであらう。靜かな大村灣をめぐるあの山、あの入江、あの月光、蒼茫としてわたくしの記憶によみがへつて來る。

世に名利を求めず、淸にして淸なるかれが月下に鱸を釣りつゝあらん高士のごとき風貌を描く時わたくしの胸は回想の思慕に顫く。

わたくしは對馬の夏の夜を忘れることもできない。そのころわたくしは對馬の兵營にゐた。山には菖蒲が咲き、野苺がみのるころであつた。險峻な山を越えては旅をつゞけて行つた。

仁比といふ海岸の村に露營した夜のことであつた。滿月の夜であつた。わたくしたちは磯のなかの犬藜を狩つては茵として、その上に簡單な携帶天幕を張つて眠ることにした。犬藜の茵の下では鈴蟲が鳴いてゐた。村の人たちは燒酎を運んで來てわたくしたちをねぎらふてくれた。對馬の人たちも薩摩の人たちと同じやうに燒酎を飲んではよく唄をうたふ。唄はむしろ亡國的な哀韻をたゝへたものである。

山は秀で、山は茂り、人煙稀にして夜も晝も玄海の荒浪の音にのみ齎かされてゐる島の人たちが月夜に燒酎をあふり、哀歌をうたふのはいかにも自然である。

バアンスの詩「萬聖節」のなかにスコツトランドの月の夜をうたつたものがある。カアライルはその「バアンス論」に於いて、スコツトランドの自然を描いたものとして壓卷の作であるといふやうな褒め方をしてゐるが、いかにもさうであらう。險しい、スコツトランドの岩多い山を下る水、羊齒の灌叢を流るゝ水が、木立をくゞる水が、月の光りに照らされては忽然として暗の底にかゞやく姿がいかにもいきいきと描かれてゐる。しかしわたくしの頭にさらにその詩の印象をはつきりと鐫みつけてゐるものは、月に照らされた流れの中で袂を濯いでゐる女の姿である。

北から南に流れた川のほとりである。かの女は人目を忍びつゝ袂を洗ふ。月はかの女の白い顏を照らしてゐる。女は濡れた袂を携へて家にかへる。部屋には一本の蠟燭がともされてゐる。女は濡れた袂の片側を炎にかざしてゐる。眞夜中である。かの女の戀人があらはれて袂の他の片側を炎にかざしてくれるといふ古い傳說のなかにかの女らは生きてゐるのである。部屋の外には月が照つてゐる。

月はいつも美しい戀愛と結びつく。

中世紀の僧庵のなかにさへも美しい騎士の戀は月の光りに誘はれて流れて入つた。キイツの詩の味、シェリイの詩の味はそこいらにある

のではないか

×

浴衣がけの若い男や女を橋の上に見る夏の夜は江戸時代のものでなければならぬ。

素足の美しさ、素肌の美しさをほこる月の夜の女はどうしても江戸の女でなくてはならぬ。

夏の月は江戸の町人のものでなくてはならぬ。

初鰹とほとゝぎすは江戸の町人の意氣と豪奢とを語るものであらうが、その底にはやはり悟りえぬものゝ悲しき悟りがある。諦めえぬものゝ悲しき諦めがある。

さらに素足、素肌の江戸人の夏の夜の生活にはあまりに儚い人間の諦めが潜んでゐる。執着がない、思ひ切りがいゝそれが江戸人の哲學である。

浴衣一枚の坐禪、蚊遣火を焚いて月に對するそれが江戸人の悟りである。あきらめである。

×

秋の月は芭蕉を思はしめ、西行を思はしめる。靜かなる哲人の悟りである。

冬の月はあまりに悽壯である。枯骨に對するの感がある。

×

月は山の端に出づるを見る時うれしく、中天にかゝるを見る時寂しく、山の端に入るを見る時悲しきものである。

山上に見る月はわびしく、橋上に見る月は胸を躍らせる。

人の見ぬ月は殊にあはれである。

去年の冬わたくしは日光の奥をたどつて中禪寺湖畔へ泊つたことがあつた。冬枯れの山々は人影もなく、猿の群が鳴いてゐた。吹雪が止んだと思ふ間もなく研ぎすました寒月が中禪寺裏の疎林にかゝつてゐたのを見た。たしかに凄慘な月であつた

陸中平泉への旅の途中、墨を流したやうた雨雲の間に不圖月を見た記憶も忘れられない。荒寥たる感じであつた。嵐が吹いてゐた。

去年の秋、興津の海岸を逍遙しつゝ有明の月を見たことがあつた。富士の巓に淡い雲が霜のやうに降つてゐた。小夜の中山あたりの山であらうか、有明の月を待つ峰には秋の色がすでに深くこもつてゐた。

三四年前の旅にわたくしは四國の新居濱で月をながめたことがあつた。

港の前に、港の水を抱いてさらに一つの島があつて、月の出の光りを遮るので、空には月があつても港のなかでは島の影はまだ暗かつた。その暗い島の影のなかに點々として歌妓を擁した艀舟が泛かぶのであつた。卑俗な唄であるが、潮の上に聽く時には掬すべき餘韻をこめてゐる。

濱の歌妓が二人、蓮の葉につゝんだ燈籠船を潮にまかせて流してゐた月下の姿は、今もなほわたくしの記憶にのこつてゐる。

耶蘇

アンリイ・バルビユス
武林無想庵譯

『わたしも耶蘇を見た。かれは身をもつて明確の美をわたしに示してくれた。わたしはかれが好きだ。わたしはかれを抱きしめる。もしそれが必要なら、わたしはかれのために他の人々と爭ふであらう』

第一章

一、――マリヤの子、イエスの消息。

二、――馬太と名のるものがあつた。又約翰と名のるもの、かれはイエスを見、イエスと話したといふ。路加と馬可とは、イエスについてシモン・ペテロの物語るを聽き、さうしてイエスの話をしたといふ。又その姿を見、或は見ずに、イエスの話をしたその他の人々があつた。言葉は殘る。が、事實はたしかでない。

三、――かれについて語られたる言葉の世界をくゞりいでゝ、今、ものをいふのはかれである。

四、――眞理は唯一であるのみだからである。さうしてそれはわれわれ全人類のものだからである。

五、――毎朝、家の片隅で目がさめる。わたしは子供なので、そこへ寢かされてゐたものだ。

六、――目をさましながら、わたしはよく雲にとりまかれた夢を見てゐる。と、わたしは思ふ。『一體おれは誰なのだ？』

七、――すると、夢の黒雲のまん中があかるくなる。四角な小窓ができあがる。そこからすばらしい村が見える。わたしの眼は物のかたちをつくり出す。わたしの部屋のそばにあつて、わたしのゐるのより大きい部屋には、ひざまづいて竈の中を掃除してる母の姿が見える。わたしはマリヤの子イエスだ。

八、――隣室にうづくまつてる母の見えるのは、そこに戸がないからだ。わたし達の家は、どんな小聲でわたしがこの際かの女に物を云を云つても恐らくきこえさうなほど小さいのだ。が、わたしはスツカり目のさめきるまで動かない。厚い栗色の壁の、その一と隈くの隆

起や、瓷罎の上に据つた重たい木造が見えて來るまで動かない。又箱の上にあるわたしの着物が數へられるまで動かない。

九、——朝がわたしを起してくれたところで、勝手に外へは出られない。わたしは父のそばにゐる指物師だからだ。食事がすむや否や、それからまだわたしの皿小鉢の物音が消えやらぬうちに、わたしは父のそばで働き出す。裏庭の中でだ『さア、どれでもいゝから、俺のやうにやつて見ろ。』と、父が、わたしに云ふ。わけなくできる仕事なのだが、わたしにはそれがむづかしくてうまくできない。父のやうに大きくならないうちはかうなんだらう。

一〇、——が、時々、父はわたしに、『そとへ行け。』と云ふ。わたしがまだ子供だからさう云ふのだ。

一一、——野原や石の多い谷あひをば、ズン〳〵と山の方へ向いて行く。と、山はいつでも巨人のやうな足どりで、先へ〳〵と遠ざかる。

一二、——海のむかふで、白いところからそれを太陽がギュッ〳〵と掴みだしてゐるやうな、まつ黒にかゞやく瀝青の山々、わたしはついそれに見とれて了ふ。世の中では一番大きい物だ。

一三、——どこからわたしは來る？ わたしはどこへ行く？ さうしてわたしは何物だ？ わからない。けれども、大きな石塊や天然林の無秩序よりは、わたしは繪のやうにつくられた庭園を撰ぶ。工夫のある耕地を撰ぶ。地下でスツカリ整理された可憐な土を撰ぶ。

一四、——又わたしは庭よりは家を撰ぶ。で、いつも家のあるところへ行く。

一五、——村の事物はたえずわたしに物語る。『わたし達はまアからです。岩の多い街路、(わたし達はいたづらに死滅してゐます。すぎゆく時がわたし達を殺すのです。)灰色の敷石、上に棕櫚の木。飲用泉、水につかり、水中で小砂利の堆積をなす、その白い石。で、ぐるりには、遊戯にいそがしい子供等の叫び、青いかつぎの女達、その青さをば、恰も大空の布きれの一部として、日光がごし〳〵と洗つてゐます。それから明るい地上には、さながら無數の手のひらのやうに、太陽が大花無果の黑い葉蔭を落してゐます。村に立ちはだかる醜い大きな無花果の木です。とき〳〵家々の中の一軒で人聲がします。と、その棕櫚の木の下の(壁を除いた)一切がざわつきます、「エムエルが死んだ」とか、「ゾアルが嫁とる」とかいふのです。が、遠方からでは、何事かある家も森閑としたものです。ざツとこんなもので。』

一六、——わたしは家へ歸りたくなる。わたしのパンの家へ。

一七、——わたし達の家は隨分奉公して來たものだ。

一八、——うちでは母が大役だ。うちでは母がその母としての任務を掂つて、ハア〳〵といそがしい。うち中の事がみんな母に落ちかかるからだ。しかもその重荷が母は好きなのだ。食事の時間が母をせきたてる。つらい拭掃除が八方から母にぶつかつて來る。

一九、——人目に立たぬわたしの母は、ある日わたしに馬小舍を見

せて、『こゝがお前の生まれたとこだよ。』とさゝやいた。

二〇、——一夜、そこでだ。藁、土、それから闇中滿天の星。

二一、——母は溜息をつく。グッタリ腰かける。

二二、——黒布の下に皺だらけな黒い額、猶太型の顏、ほこりだらけな足の指。

二三、——脈管の中をながれ／＼る彼女の血。

二四、父は年よりだ。とき／″＼頭がひとりでに顫へる。特別にきれいずきで、きたないものはどし／″＼すてさせる。何よりもまづ清潔だ、と父は云つてゐる。ズッと昔からの指物師だ、その手が木で出來てるほど指物師だ。

二五、——そこで、わたしは人間よりは貧しき者どもの方を撰ぶ。

二六、——ある日、山から山へ行く一人の老人が、（人間は山を目あてにするものなので、）道すがら、わたしの家で泊つたことがある。その老人はわたし達より大きかつたやうにわたしは思つた。人が知らずにゐて、しかも又知つてゐる人間の秘密をば、到るところでさらつて行くのはこの老人だ。で、表の戸の前で老人の腰かけてゐたところは、そこが一寺院の廣場なのであつた。

二七、——もの凄いほどかれは醜かつた。その影はきたならしかつた。ものいふことをかれは知らなかつた。

二八、——ものが云へないので、かれの魂は中氣に罹つてゐたわけだ。

二九、——たゞ眼だけが、たゞ顏をしかめるだけが、口ほどにものを云つた。

三〇、さうして目顏の顰みかたで、云ひたいことが人にわかつた。

三一、が、生きとし生ける物の中で、わたしは動物に感心してゐる。

三二、——事實さうなんだから、さういふのだ。

三三、——眼をあげて、まだ子供等や人間どもの顏を見ようともしないうちに、わたしはスッカリかれ等に見とれてゐた。

三四、——朝、ひもじくなつて、かれ等は訴へる。

三五、——かれ等はハッキリした事をいふ。かれ等はわれ／＼の生まれながらの眞理だ。かれ等は正しきものどもだ。

三六、——で、日光と構造との間につッ立つて、（一束の藁が地上で日に焦げてゐる）、わたしは驢馬に話しかける。『お前は灰色をした非常に貧しい或者だ。お前は頭をつき出す。お前の鼻面は黒んぼだ。お前は小ッぽけな四つ足の上に据ゑつけられてゐる。お前には蹄だけしきやない。お前の肌は木地のでるまで擦りきれてゐる。とき／＼お前の脊中ぢゆうが、まる／＼としたお前のお腹ぢゆうが、なんだか下に手でもかくれてゐるやうに動く。わたしもお前も同樣に無智だ。だが、わたしの無智は厚ぼッたい。お前のは透明だ。

三七、——われ／＼だつて同樣に求めてゐる。が、あんまり物事を知りすぎるわれ／＼は、何を求めてゐるのか、よく知らないのだ。

三八、――この世では、われ〳〵は富者だ。お前達は貧者だ。が、われ〳〵の富はわれ〳〵を貧者にする。お前達の貧はお前達を富者にする。』

三九、――と、驢馬は自分の頭の方へ差出されたわたしの手をジッと見た。で、自分には手がないので弱つてゐた。又驢馬の短所は口のきけない事であつた。

四〇、――さつき云つた老人、もう一度いふと、山から來て、途すがらわたし達の家へ足をとゞめた老人は、案内に犬を一疋つれてゐた。老人の眼がそのクシャ〳〵した顔の中でほとんど明いてゐなかつたからで

四一、――毛色は褪せ、泥のかたまりは一杯つけ、さうしてそのきたないマントのほか何ひとつもつてゐない、一頭の老いぼれ犬だ。犬は老人を見て、立派だと思つてゐた。たつた一つの姿しきやかれの心には映らなかつたものだ。

四二、――わたしの目は老人よりはこの犬の方を悦んだ。人間はわからないが、犬はわかるからだ。

四三、――と、脇腹に怪我して、血が出てゐるのを見つけたので、それがわたしにはなほぐつと一遍にわかる。内心では、わたしはもつと血が出てゐた。わたしが近よつたとたん、犬がわたしを見たとたん、われ〳〵の傷がさざ〳〵とそこにあつた。『わたしに物がいひたくて、お前は跪まづくんだね。』

四四、――そこへ身を倒した、石のやうに老い又命のやうに若々しいかれの前で、わたしはなんにもしない。なんにもしないが、しかもわかるのは何かしてゐるのだ。

四五、――で、こちらの、とび〳〵に建つ小屋並の前には、たゞもうまッ白にもり上つた、あのいぢらしい小羊がゐる。

四六、――すると蝗が、『地面はみんなをポン〳〵拋りあげる。』といふ。

四七、――と、又、翼のあるちいちやな小鳥が、

四八、――『青空は厚い。』といふ。

四九、――鈴のやうな聲だ。

五〇、――動物は生の前でハッキリしてゐる。丁度人間が死の前だけでハッキリしてゐるやうに。

五一、――前述の如く、われ〳〵の無智は夜で出來あがつてゐるが、かれ等のは晝でつくられてゐるからだ。

五二、――靈の單純なものどもは幸福だ。天國はかれ等のものだ。

第二章

一、――又わたしは晝間より夕暮を撰ぶ。

二、――夕暮はうはつ面のものをそッくりそッとかき消して了ふ。目に見える境界を、刻々の浮雲を、あらゆる白晝の蓋臨をとり拂つて了ふ。夕暮は身輕になつた或物だ。わたしは夕暮がすきだ。そのほの

かな光がすきた。

三、——本來に還る光だ。

四、——寂やかな夕暮は眞理を示す。人の心はおのづからにして影に入る。

五、——この無色の姿こそわれ／＼の諸父の父が山上で見た火焰の棘より一層力強いあらはれだ。

六、——最初モーゼがブル／＼顫へて、その何物かを見きはめる氣になれなかつた時の。

七、——白晝の光の中で『これを拜め』『あれを拜め。』と若し人がわたしに云つたならば、影がわたしのそばへ白晝を洗ひに來た時に、わたしは往々心中で『いやだ。』と答へる。どれもこれも本物とは思へないからだ。

八、——入相をわたしが父母の家へ歸つて行つた時、入口からさう遠くないところに、男の子が一人ツヽ立つてゐるのを見た。かれはわたしと同じ位な年恰好であつた。又やせこけて見すぼらしかつた。

九、——『お前は何よりもお前の兩親が好きかい？』と、かれはわたしに訊いた。わたしは『さうだ。』と答へた。『さうぢやない！』とかれは叫んだ。

十、——なんだか地の中にある異常な木の根にハタとぶつかつたやうな心持がした。と、かれは見えなくなつた。『さうぢやない。』と云ひ放つた者はかれだけであつた。

一一、——その後、わたしはその男の子がザカリヤのヨハネであつたことを知つた。

一二、——ところが、夕暮の部屋の中には、われ／＼の一家がゐた。

一三、——ゆり動かしてゐる父の頭や晝のつかれでグツタリした母の肩がつひ鼻の先に見えてゐた。

一四、——この部屋の中では、する事がもうなんにもなかつたので、みんなでむだ話してゐた。父母はとなり近所の、そのまた隣から隣へと、村中の人々の噂してゐた。さうして、『ザドクがあんな事をした。』とか、『サツピラがこんな事をした。』とか、『わたし等はなぜあゝしなかつたのだらう？』とか、惡口を云つたり、やきもちを燒いたりしてゐた。

一五、——で、家庭といふものは、互に睨みあふ料簡の狹い陰口のことなので、陰口や嫉みの種はそこに伏藏するものだといふ事がよくわかつた。

一六、——唯見ると、夜が部屋の戸をまつ黑にしてゐた。たしかに夜がその戸をあけて、それをば一切の物の中へつきまぜてゐたのだ。と、その開いた戸口から、フラ／＼とわたしが家を出て、一切の他人の方へ、あらゆる空間の、又あらゆる時間の人々の方へ、どうやら出かけて行つたもののやうな心持になつた。

一七、——父上、母上、わたしの本當の家族はどうもあなたがたち

やない。表の、向ふの方には、あなたがたよりもつと親身で、さうしてまだ親身でない人達がゐる。あなたがたの方を向いて、わたしはやつて來たのぢやなかつた。わたしの方を向いて歩いて來る者こそ、さうしてまだ名もないうちから、わたしの兄弟にならうと勉める者こそ、わたしの兄弟なのだ。『兄弟!』とわたしのいふ時、遠方の兄弟をば、わたしは呼んでゐるわけだ。

一八、——一切は自我から來るか? わたしの血族關係すらも?

一九、——翌日、わたしはお禮を云はふと思つて、ヨハネ・ザカリヤをさがした。あの子供が云つてくれなかつたら、わたしは自分の思つゐたことを思はうともしなかつたに相違ない。

第三章

一、——讀方の先生が生徒等のまん中に立つて、手にした書物をたどりたどり、一切の學問や一切の出來事をば、さながら無數のおもちやの如く、即席にひろげて見せる。

二、——どの子供もすべてこれ一個の人間の救主なんだから、子供等は世の中をおぼえる必要がある。

三、——無花果の大木は見るともなしに見てゐる。さうして他の一方では自分の影で地面の上を歩いてゐる。

四、——すなはち先生は人形をうごかす人形使ひのやうなものだ。

五、——先生の說明によると、この世には希伯來民族しきやゐないんださうだ。さうして他の一民族の學問を研究することは、豚を飼ふよりもつと罪惡ださうだ。

六、——この先生はそれがために病氣になるほどの猶太人なのだ。

七、——モーセの掟をくりひろげながら、先生は生徒等に、『カフトル』『キツテム』『オフル』を反覆させる。

八、——で、生徒等はそれを覺えるために、讀み習ふために、十遍も二十遍もその言葉をくりかへす。

九、——ところへ、一人の羅馬人——たとへ羅馬人でも、有德の君子だつたので、猶太人の友達なのだ——が、近よりざま、ひどく小ぎれいな顏をつき出して、『それは何の事です?』と云つた。

一〇、——『ズツと昔の都會です。』と、先生は丁寧に答へた。

一一、——『そんな都會は決してどこにもありませんでしよ。』と、羅馬の殿樣が斷言した。

一二、——返事する代りに、先生は指で聖書の上にあるその地名をさし示した。

一三、——と、そこにかすかな文字の偶像のあることをば、その指先はわたしに示してくれた。

一四、——人は自分の信ずることを書くのだ。それから書いてあることを信ずるのだ。言語は一時きりの創造物だ。さうして一切の生物同樣に死ぬものだ。又書物は言の墓場だ。

一五、――書かれた言葉は燃えて了ふ。

一六、――又眞理は言葉が入用なので、言葉を好むけれど、言葉の方では眞理が嫌ひだ。

一七、――人間の大不幸史を物語る書物は、又高らかにそれを讀む人には、小さな事ばかり教へて、大きな事は教へないものだといふ事をば、同樣にその指がわたしに示してくれた。

一八、――すなはち、王樣がゐたとか、ゐなかつたとか、もうゐなくなつてゐたんだとか、又不識から不識へ、川の如く流れ去つた都會だとか、風の如く吹き去つた人名だとか、そんな小さな事ばかり教へる。

一九、――さうして常住一切處、人間は同然に人間だといふ、さういふ大きな事は教へない。

第四章

一、――猶太教會の中で、口のきける連中が立ちあがる。

二、――わたしは子供だから、ヒソ／＼ばなしはできない。

三、――が、間違ひなしにチヤンときくことはもうできる。

四、――で、腰かけて、鉋で怪我した手を膝の上に見やりながら、頭をさげて聽く。

五、――さうしてると、なほよくきこえる。

六、――外では、男女の猶太人の、その色と、そのクリ／＼する目と、又その太い指だけしきや見えなかつたものだ。こゝではこの民族の內面が見える。

七、――信者の道德は神を畏れることだ。

八、――で、こゝに集つたわれ／＼は、神を畏れるといふ事によつて、互に犇と結束してゐる。

九、――ものを云つてゐる。わたしはネヘミヤの偉大なる時代を思ふ。

一〇、――われ／＼の歷史中で一番わたしのすきな時代だ。

一一、――エズラの小團體がバビロンからエルサレムへ來て、その神殿造營がモーゼの掟を忘れはてゝゐた事に氣のついた時代だ。絕望せるエズラが民衆の前でその共同の罪を懺悔した時代だ。又イスラエル民族が全部擧つて悔ひ改め、全部擧つて身を修め、さうして神に背けるその幸福の廢墟の上にその運命を一新した時代だ。

一二、――この一新こそ至點であり偉大であつた。しかもその完成の歡喜のうちに、エルサレムは七日間綠葉をもつて飾られた。橄欖、天人花、又棕櫚の葉の幕屋々々が、屋上に、內庭に、神殿の入口に、到るところに設けられた。

一三、――イスラエルには改悛と復興の一大力量があるからだ。

一四、――かれ等の五臟六腑には永遠の春がある。

一五、――イスラエルは罪に墮ちる。併し又罪から這出る金剛力がある。

一六、——かれ等の悔悟には容赦假借がない。

一七、——諸民族の總鑑たるところはそこだ。

一八、——で、われ〳〵もまた同樣に、現在われ〳〵の合同劇に於いて、容易ならざる一時期にある。

一九、——あらゆる方面から大飛報の反響しつゝある今日だ。

二〇、——『時は近づけり。舊世界は死滅に瀕す。』

二一、——かれ等は云ふ。『大勢の趨くところ、革命の曉だ。大地の黎明に正義の虹は閃きつゝある。』

二二、——頭をもたげて、かれ等は叫ぶ。『イスラエル萬歳！』

二三、——シオンの岡より永遠の神は獅子吼するであらう。惡魔の榮ゆる地の王國をば、正義の神は覆へすであらう。一大減縮が地上に行はるゝであらう。この事は天使等の教書中にあらかじめわれ〳〵に警告されてあつたところだ。

二四、——曰く、下界には深淵がある。次に死者の地牢がある。次に人間の去來する地上がある。次に空氣、次に魔王とその諸藩とが出沒する蒼穹がある。次に數百萬の天使等が密集せる不可思議微妙の七空がある。さうして第六天軍と第四天軍とが七個の玉座を圍繞する。然るに、第七空の最高所からは救世主が現はるゝであらう。玉座そのものゝ白熱斷片として地上まで落下したるのち、明皎々として宇宙心髓を突破しつゝ、再び天へ昇るであらう。

二五、——天の救主は大鎌をもつであらう。地は刈りとらるゝであらう。救主は罪人を追ふであらう。主の曰はく、罪人若し海に沈むならば、余は怪物に命じて水中よりかれを曳きあげるであらう。かれ若し人間中に立雜るならば、余は劍に命じてかれの咽喉に擬するであらう。かれ若し天に昇るならば、余はかれを天より曳きおろすであらう。かれ若し墳墓に下るならば、余は墓穴よりかれを曳きいだすであらう。

二六、——諸王國は崩壞するであらう。國民を支配する者どもは國民に怒號せらるゝであらう。諸天は退去するであらう。あらゆる島嶼は湮滅するであらう。又山々は再びその姿をば見せぬであらう。正にこれ憤怒と苦悶との日であらう。その日、太陽は黑くなるであらう。その日、騎士等と妖怪等とは、天上に又空高き雲中に、互に格鬪するであらう。その日こそ、地はその死屍の置場となるであらう。地獄はその役目を果すであらう。

二七、——革命の英雄は一新時代を劃するであらう。その時、イスラエルは鷲より高く舞ひあがるであらう。七倍の光をもつて、星は正義者の頭上に輝くであらう。さうして永遠の神とわれ〳〵とは、幸福の一條約を商議するであらう。

二八、——われ〳〵民族の見る夢はかうだ。(一民族の見るまぼろしは、一人の見る、その人自身の諸斷片から成る夢の如きものだ)

二九、——次から次へと、幾多の希望の粉碎されたわれ〳〵は、希望の民だ。民衆人だ。

三〇、——もうとても手のつけられぬやうに、不幸はわれ〳〵の現狀をつくつて了つた。

三一、——さうしてわれ〳〵の絶叫して來たのはそこなのだ。そのわれ〳〵はまだ眠つてゐる！

三二、——家へ歸らうと思つて、わたしの通り過ぎる町々には、夕日の影が長い。人々は革命を考へてゐる。

三三、——一人が云ふ。『さういふ革命は來ると思ふかね？』もう一人が云ふ。『あすのことだらうよ。』

三四、——大空の上にある太陽をば、みんなは見てゐる。太陽は世の正義の宮殿だ。

三五、——が、みんなはそれ〴〵自分の仕事や家庭のことで一杯だ。人は距離を異にするさま〴〵の希望をば一緒くたにもつてゐるからだ。

三六、——で、小學校のある廣場を横ぎつた時、わたしはそこの生徒達が一齊に、『カフトル』『キッテム』『オフル』と繰返してゐるのをきいた。先生の前でこはくもありねぶたくもあつたといふ譯だ。（かれ等は目をぱちくりしたり欠伸したりしてゐたのだ。）

三七、——人間はポツリ〳〵分秒の間に生きて行くものだ。

三八、——それから廣場の大無花果のぐるりには、中位の無花果の木が一本づゝ戸口々々の前にある。

三九、——その實は手のひらのやうに生温い。

四〇、——それ〴〵の家庭内へはいるのはその無花果の一本々々だ。

四一、——夕暮中の夕暮だ。誰も氣にとめず、そのまゝにして了ふ或夕暮だ。まどろみながら、わたしはとつおいつする。『おれは何を要求してるのだ？』

四二、——わたしの心靈中には革命に似た昂奮がある。

四三、——父祖代々の無間地獄がわたしの内部で阿鼻叫喚する。

四四、——人間は何か正しい事をするためにつくられてゐるのだ。

四五、——人間は正しくないものをぶちこはすためにつくられてゐるのだ。

四六、——『廉直で定木を、正義で水盛りをつくらう。』と書いてある。

四七、——さうして激流をつくるのだ！

第五章

一、——『先生だ、先生だ……』と云つて、その人を指さし、その人をほめたゝへる。『あれだよ、小僧。ついて行つて、あの人のお話をきいて來い……エライ學者なんだ。』と、人々はわたしに云つた。

二、——『いやだ。』とわたしは答へる。

三、——そんな信用は偶像崇拜だ。

四、——自分の先生には自分自身で權威をつけなければならん。世

評なんぞでは駄目だ。
五、——何人も常に一切みづから工夫しなくてはいかん。信仰も、確信も。
六、——又他人を信用することも。
七、——他人を信用することは、とりもなほさず、人が何物をも持たぬ時に持つ大いなる富だ。
八、——感激しなけりやならんのは固有名詞ぢやない。単純な民衆の言葉だ。俗語だ。
九、——従はなくちやならんのはエライ先生ぢやない。

一〇、——かれだ。
一一、——云ふに云はれぬ同胞だ。
一二、——かれはわたしへ來た。
一三、——丈恰好まで、かれはわたしに似てゐた。ゼベダイの子ヨハネのことだ。
一四、——同様にわたしもかれに赴いた。
一五、——二人とも世間からかけ離れてゐた。
一六、——で、お互に話した。
一七、——話すといふのは、誰かゐることだ。
一八、——友達と話してこそ、はじめて人の面前にゐる氣がする。
一九、——本當に自分自身であり。又自己を知るためには、きいてくれてゐるお前といふものが入用だ。
二〇、——お前がそこにゐる時、わたしは心から二人きりになれる。
二一、——お前の云ふ言葉はわたしの口にあまい。
二二、——お前が眠るのを見ると、睡眠の中にジッと閉ぢこもるのを見ると、又お前の目の前にゐることがもうお前の目の前にゐることではなくなると、時の立つのがわたしには恐しくなる。
二三、——睡眠は死の姉だからだ。
二四、——お前の力で、わたしは物の見方を改める。お前の力で、わたしは自分の心をつくり直す。自分の喜びを工夫する。さうして自分の預言者になる。
二五、——すべてみんなお前のお蔭だ。
二六、——ゼベダイの子ヨハネに逢つた時、わたしは自分の知つてゐた事を一氣にかれに話して了つた。
二七、——よし賤者中の極貧者でも、人は堂々と見るためにつくられてゐる。
二八、——われ〳〵が空間へ與へたものをわれ〳〵自身へ取戻すためにだ。
二九、——又人は話すためにつくられてゐる。
三〇、——それ、このとほり、ヨハネが出て來る。或時は遠方から、或時は室内の暗い一隅から、又或時は町の横町のまがりかどから。かれはわたしを見る。かれはわたしに話しかける。

三一、——わたしの胸中にある一切の未知のうちで、わたしはかれが好きだ。

三二、——もう一つ光明がある。

三三、——天にない光明だ。

三四、——人々の頭の中にある、人々の顔の上にある光明だ。

三五、——わたしは人間の子にすぎない。その人間の子に向つて、神が、『お前の顔をみんなの顔よりもつと苦しい顔にしてやらう。』と云つたものだ。

三六、——が、人はわたしを見つけたら最後、わたしをつかまへて、『この人だ』と云ふだらう。

第六章

一、——堀に沿うて石の腰掛が一つあつた。

二、——上に荊棘の藪があつた。又腰掛の上にゐた者の頭上には荊棘の冠があつた。(冠は二つだとも云へた。)

三、——もう一人のヨハネ、すなはちヨハネ・ザカリヤが、時々、夕方、腰かけてるのを見かけたのはそこだ。

四、——又かつてわたしがかれに、『何事もたゞ歓喜のうちにのみ成る。』と云つたのはそこだ。

五、——『左様サ。歓喜のうちに、又七転八倒のうちにだ。』とかれは云つた。

六、——何を云つてるのだ!悲哀で善事ができるかい?』

七、——『わたしは悲しむとは云はなかつた。苦しむと云つたのだ。』

八、——『そんな事はない。』とわたしが云つた。『物事は物事固有の美質を通して穏かに成就される筈だ。事変は物がをどりを踊るのだ。』

九、——かれが云つた。『さうぢやない。すべて耕すことは、耕す新しい叫びすら、悉く九死一生だ。さうして耕す人を苦しめる。

一〇、——又その及ぼす範囲を苦しめる。』

一一、——わたしが云つた。『平和は平和で成る。』

一二、——かれが云つた。『さうぢやない。』

一三、わたしは面白くなかつた。で、立上ると、わたしはかれを見すてゝ去つた。そこの木蔭がゾッとするほど寒かつたからだ。

一四、——『小僧さん、お前どこへ行く?』

一五、——『楽な仕事の方へ。』

一六、——『いけない。』と、かれはもう一度云つた。で、立つて行くわたしに、『長い月日むだ骨を折つてから、お前はまたいつか爰へ来るだらう。』と云つた。

第七章

一、——エルサレムへの旅。

二、——エルサレムへ行くには野山を越えなければならない。

三、——世の中にはそのほかの野山がまだ〳〵澤山ある。

四、——わたしの家は村の村だが、わたしの國は少くとも聖地の村だ。

五、——海とエフライムとの間にある土地で、われ〳〵は女神アシトラテの木像を見た。この木像はアナニアとよぶスリア人の園中にあつたものだ。

六、——この女神は立派なかたちで一杯星をちりばめた青い大マントを着てゐた。女神は金冠をかぶつてゐた。女神は又同様に立派な、同様に金冠をかぶつた、神の幼児を抱いてゐた。かれ等の頭上には靈鳥がゐた。アナニヤの園中はすべて空色と黄金づくめだ。

七、——わたし達は庭園の前を通つた。同行者が大勢ゐた。わたしの父もゐた。母も無論ゐた。母とわたしとは殿りであつた。

八、——猶太人等はみんなトットとこの偶像を通り越した。

九、——わたしの母も同様に。

一〇、——だが、のろり〳〵と。

一一、——母は溜息をついて『美しいこと！　御運のいゝお方だね。』

一二、——と、通りすぎながら云つた。母は善良な猶太女だつたからだ。

一三、——カルメル人のアビシヤイが云つた。『わたしはいつでしたか（いま〳〵しい日でしたよ）偶像信者がお祭してるのを見たことがありますよ。波斯坊主が祭壇の前につッ立ち、さゝげた盃をぐッと乾すと、次に温飩粉を輪形にこねて、麺酵なしに焼いたものを突出し、「これこそミトラ神のおからだぢや。わしはかうして御神體をたべる。」と云ひながら、ムシヤリとやつたものです。』

一四、——そこにゐたわれ〳〵一同は、おそる〳〵唾を吐いた。

一五、——お寺だ。

一六、——わたしは始めてそのまつ四角な大伽藍を見た。

一七、——新しかつた、新しいどころか、スッカリ出來上つてゐなかつた。

一八、——わたしは中へはいつた。祈禱者が自分一人だけ靈驗にあづからうとするお寺だ。

一九、——で、そのガラン洞の内部はます〳〵儀式くさい。

二〇、——お寺の中へは律師、司祭、祭司の輩が來て、教理を述べたり、論議したりしてゐた。

二一、——さうして、天文學はアブラハムがバビロニヤと埃及に、又哲學はモーゼが希臘人に教へてやつたものだなどゝ云つてゐた。

二二、——そこへエルカナといふ人もやつて來た。イスラエルの大博士だ。

二三、——このエルカナが云つてゐた。『昔、方図のない埃及人がゐた。續いて小刻みな希臘人がゐた。

二四、——その双方の神々がゴチヤまぜになつてゐる。

二五、――神々は詩人の創作だ。詩人は物が半分しきゃ分らないで、眞理のまはりをたゞグル／＼廻つてゐるにすぎないものだ。

二六、――物事の上つ面で、さういふ連中のやつてることは文雅典麗の遊戯なのだ。かれ等は表向きの微笑や目前の收穫に滿足して、くだらなく納つてゐる。かれ等は又雄辯術や作詩法で、又ほがらかなお面をかぶつて、自分達の空虚を閉塞してゐる。

二七、――しかも、さうしてゐる間に、人道は寸斷され人間のからだは苦しみつゞけ、虐げられつゞけてゐるのだ。

二八、――ソクラテスとよぶ一賢者の人道主義の上へ喜色滿面の一宇宙を建立した。プラトンがゐた。

二九、――けれどもかれはさうした宇宙をば天の圖面中へ造つて、人生の圖面中へ造らなかつた。

三〇、――希臘人の姿の上へ切拔いた人間然とした羅馬人がゐた。が、あんまりぐるりを切拔きすぎたので、かれ等はたゞ法律と義務のお大名にすぎない。

三一、――併しイスラエルの神様がある。イスラエルの神こそ、地上に於ける人間正義そのものだ。』

三二、――ところで、わたしの父母はわたしの行衞をさがしてゐた。わたしは父母の出て行つた時、お寺の中へとつてかへして、いつまでも博士達の云ふ事をきいてゐたのだ。

三三、――『あつちへ行つたんですよ。』と、母が父に云ふと、『ぢやア、行つて見よう。』と父は答へて、二人がお寺へ戻り、荷物小屋に中へはいつた時は、恰も講話してるわたしを見つけて、律師司祭の連中が、わたしに問をかけ、

三四、――さうしてわたしが答へてゐた矢先であつた。

三五、――『ぶッ倒さなけりやならん偶像は到るところにあります。』

三六、――連中はわたしにきいた。『若しこれを拜めあれを拜めと云はれたら？……』

三七、――わたしは云つた『いやだと答へます。』

三八、――『が、拜むに足るものだつたら？』

三九、――『わたしはどこまでもいやだと答へます。さうして置いて、それから拜むに足るものを探します。』

四〇、――すると、エルカナがわたしのことをかう云つた。『この子供にはすばらしいイスラエル魂がある。

四一、――この子供の心は常に根抵から改造の必要を感じてゐるからだ。

四二、――わたしがすでにわたし自身について考へてゐた言葉が、今この子供の聲となつて寺中に響きわたつたのだ。

四三、――かうした言葉は永遠不朽に力がある。

四四、――わたしの行願は常にそこから踏みいだす第一步でありたいと思ふ。かのアブラハムの堂々たる態度のやうに。』

四五、――かへり道に、エフラタ、すなはちベテレヘムへ行く道のある四つ辻で、わたしは心ゆくかぎり日光を浴びた。で、思つた。『目の法樂ができる人生は美しい。』

四六――が、盲人がひとり通つたので、わたしはそんな事を喜んだのを後悔した。

四七、――『氣の毒な人、お前さん何がつらい?』

四八、――『だまりこくツてゐる事だね。人の笑聲がいつも鳥のやうにツイと目の前をすりぬけて行く事だね。』

四九、――わたしは訊いて見た。『お前さんどうしてほしい?』

五〇、――盲人はわたしに答へた。『お前にニツコリしてもらひたいよ。』

五一、――かれはクワツと日に照された額をあげた。わたしはわたし以上に光を知り光を愛してゐるもの丶前で顫へた。

五二、――さうしてなぜ正義を見た者は尤も多く迫害を被つた人達や劣敗者達であるかといふ理由がわかつた。

五三、――地を蹂躙する一切の寺院は被害者を種にして光明の寺院をつくる。

五四、――正義者は負傷者だ。

五五、――そこにゐて、目を開いて、この男を見ながら、そんな事は一向に見なかつた人達があつた。

五六、――かへり道のもつと先で、わたくしはくたびれたので、下を向いて了つた。

五七、――犧牲を見た結果だ。

五八、――屠殺、焼けたゞれる臓腑、ダラ〳〵とふすぼる脂肪、そんなものが目に殘つて、氣持がわるくなつた。

五九、――あんな蒙昧な血烟をあげたところで何の祈禱になる?

六〇、――あんなに肉をひツちぎつて、生命はどうなるのだ?

六一、――そこでもまた、人々はそいつを眺めてゐたものだ。この人達の目は、つぶれるためについてゐたわけだ。

六二、――息づまつた、猿轡をはめられた、敗北者のイスラエルは、それだからしてのべつ動物をぶち殺してるといふわけか?

六三、――要するに血腥い事とするためか?

六四、――しかもそんな事は大して氣にならないと、永遠の神樣が仰しやつたものだ。

六五、――犧牲とは自分自身を献げることだ。

六六、――眞理の血潮を流す時に、

六七、――心中の象徴をグサリと刺して。

第八章

一、――日から日、週から週、又年から年。

二、――生の喜びがまづまあトン〳〵と朝夕の調子を合はす。

三、――が、その朝夕は一つ〳〵過去の中へ落ちてゆく。人はそゞ

ろに過ぎし日を指をりかぞへる。が、數字は死の言葉にすぎない。

四、——ありし事どもは動かしがたい。氷結する。神といへども光つた稻妻の兩極は引放し得まい。

五、——來る夜も〳〵、一切のありし日の上へ〳〵とかさなる。で、それをしまつて置く。われ〳〵はたゞ普遍的なる最後の一日或は一夜にすぎない。又傳來の山積にすぎない。

六、——恰もかのシオンの岡に散亂して、あらかじめ預言者の示した大災をまぬがれた者達のやうに。

七、——さうして最後の日は、夜間盜賊の如く來たるであらう。

八、——わたしは仕事に沒頭してゐる。わたしは人のために品物をこしらへてゐる。

九、——仕事場の壁には匂ひの高い材木の厚板が立てかけてある。

一〇、——わたしはその皮を剝いだ肌のカツチリした木口がすきだ。又その一枚々々に異つた味がすきだ。

一一、——開いた戸口から往來の人が見える。と、それが大空の白色中へ吸ひ込まれて、ボウッと消える。

一二、——お婆さんが胡座かいて糸を繰つてゐる。

一三、——お婆さんの手は二疋の蜘蛛だ。

一四、——どんな小さな仕事でも小さくない。

一五、——仕事中は決して怒つたりあせつたりしてはいけない。でないと、手がフラ〳〵して、氣が落ちつかない。良工は落ちつきはらつたものだ。板と道具とはお互に喧嘩させず、仲よく話でもさせるやうにしむけなけりやいけない。で、何かできた時にはこれでいゝと思ふ。さうしてできあがつた物そのものが報酬だ。

一六、——わたしは人々の家へ、机だとか箱だとか寢臺だとか、さうした嵩ばつた品物を運んで行つた。さうして人いきれでおのづからに生暖かくなつてゐる家の中へはいつた。さうして一軒毎に、われ〳〵人間の似たり異つたりする姿を見た。

一七、——と、革命を待つ一切の人々の、その下心でひそかに待つ銘々の何物かゞわたしには讀めた。すなはち幸福だ。もつとハッキリ云ふと、その一つを他の一つでくるんだ二個の幸福が、かれ等にはあるわけだ。

一八、——が、かれ等は幸福といふものをば自分達の目先にチラついた完全な代物だと思つてゐる。

一九、——『もう一人子供ができたら！』と一人が云ふ。

二〇、——子供のそばへもつて行くと、一切のものはみんな古い。みんな殺風景だ。その子供に母親が云ふ。『お前はよその子達とはまるで別物だよ。』(そこが女親の天眞だ)。が、併しかの女は母性愛といふものゝはかなさは承知してゐる。『もうぢきこの子はわたしの子ぢやなくなるだらう。それでもわたしはこの子の母親なのだ。』

二一、——『この畑を手に入れたら！』と又一人が云ふ。そこでかれ等が云ふ。『さうすりやわたしは幸福になる。』

二二、——かうした偶像、すなはち幸福にあやからうとして、かれ等は待ちこがれてゐる。キヨト〳〵して待つてゐる。しかもその間に幸福はつッ〳〵と通りすぎてゐる。

二三、——幸福は人の考へるやうに一色で出來てるものではなくて、幸と不幸とのまざり物だからだ。

二四、——そのまざり物がわれ〳〵のうちにある。

二五、——一體、望むといふことは、もたずにもつことなんだから。

二六、——もつといふことは、もう望まないことになる。

二七 ——といふのは希望は不幸の微笑だからだ。

二八、——泣くものは幸福だ。かれ等は慰められるだらうから。

二九、——慰められるものは不幸だ。かれ等はもう泣けまいから。

三〇、——併し誘惑された覺ある者は王冠に用心する。澤山愛した不幸者は幸福だ！

三一、——かつて盲人の心中に光明の天國があつた。

三二、——マリアとよぶうら若いマグダラの女がゐた。人は爰かしこに出沒するかの女を見かけた。

三三、——わたしはかの女が手に入れたかつた。

三四、——あさぐろい顏に黑い鏡のやうな眼、草花を飾つた髮、熱い唐金のやうな脚、どッしりしたからだ。

三五、——わたしはかの女の着物を透き通してかの女のことを考へた。

三六、——かの女はひどく淫亂であつた。若い人達はみんなかの女にたんのふした。かの女の乳首やかの女の腹部や又接吻の間に轉がり出す口說はみんなが知つてゐた。

三七、——そこでわたしも一番と思つて云ひ寄ると、かの女はハネつけて逃出した。

三八、——もう一人の女がゐた。わたしはその女をスッカリ手に入れた。

三九、——かの女の名前は思ひ出せない。

四〇、——かの女に着物を脫がす前は、われ〳〵兩人の準備で、わたしは有頂天になつたものだ。

四一、——が、肉の決戰がすんだあとは、兩人とも重苦しい羞恥を覺えた。

四二、——男女はいつもアダム・エバを繰返してゐるものだ。

四三、——煩惱は誰かに諸君を熱狂させる。聲が張れあがる。

四四、——と、偶像がカラッポになつて、こな〴〵に碎ける。

四五、——わたしが云つた。『わたし達は何をしたんだ！』

四六、——二人はお互の創痕をかくした。

四七、——さうしてお互に憎さげな顏を見合つた。愛とは反對なことだからだ。

四八、——かの女が云つた。『わたし達は自分達の足で愛を踏みにじ

つたんです。』

四九、——わたしの心が答へた。『わたしはお前を愛してなンぞゐなかつたんだ。たゞお前が入用だつたんだ。お前はわたしを愛してゐたと云へるかね？』

五〇、——すると、かの女は兩手で顏をかくした。

五一、——かの女の靈であつたところの顏に恥ぢて、エバがその肉體をかくしたやうに、かの女が顏をかくしたのを見ると、

五二、——、わたしが云つた。『どうしてだい？ わたし達はどんな惡事をしたんだね？』

五三、——かの女の苦悶に誘はれて、わたしはゾッとしたからだ。と、二人の肉の、一過した淫樂の、又戀のエゴイズムの、さうしたもの、殘滓の上に、物の不思議さいぢらしさがこみあがる。いとしさがいやまさる。『肉の戀では二人は銘々別だけれど、不思議に思ふと、二人が一つになるぢやないか？

五四、われ／＼二人がスッ裸になつて、すこしも恥しくなくなれる日には、われ／＼の天國へ神樣が來てゐて下さるとか云ふぢやないか？ 肉慾を知るのは恥づかしい。不思議を知らぬのは恥づかしい。

五五、——さうしてわたしは死んでしまつた戀の眼でお前を見るのがはづかしい。

五六、——お前はお前で別だからだ。』

五七、——かくして二人がさがしあひ、かくして二人が一緒になつた次第だ。で、一緒になつてゐながら、遠くかけ離れて了つたわれわれ二人なのだ。

五八、——しかも二人は石上に腰かけてゐたものだ。と、わたしは村に立ちはだかる大木を見た。又そのすこし上に星が一つ見えた。

五九、——物のあはれは刄の如くそこで一しほ深くなる。そこでわたしが云つた。『お前の魂の血なんだよ。』と。

六〇、——わたしはかの女の指の間から絶望したその眼を見た。

六一、——わたしはかの女の顏の上の手を拂ひのけた。

六二、——さうしてわたしはかの女の心に觸れるためにその口の方へわたしの口をもつて行つた。

六三、——すると、かの女がわたしに云つた。ハガルが神に云つたやうに。『あんたはわたしを見て下さつた生神樣よ。』

六四、——かの女はまた云つた。砂漠の中のハガルのやうに。

六五、——『わたしを見て下さつたお方が、わたしにだつて見えないでゐませうか？』

六六、——赤裸々なかの女の顏の上の、赤裸々な何物かであつた唇が云つた。

六七、——『あんたは寛大ね。』

六八、——『わたしがさうなんぢやない。われ／＼人間がさうなんだよ。』

第九章

一、――そのころわたしの父が死んだ。

二、――臨終の時、父は『どうしたんだ？』と訊いた。母親達のやうに單純な周圍の人々が、『なんでもありません。』と答へた。

三、――そこに父のゐた一瞬間があつた。それからもう何もなくなつてゐたその次の瞬間があつた。そこに、からッぽの物がその胸にはいり、その眼が硬ばつた線をつくり、又その顔が白粉のやうに白くなつた、思ひもかけぬ一瞬間があつた。時間の停止がさつそくこの寢臺へ引越して來たわけだ。

四、――お前はもう のないものなのだと、どうかしてわたしは思ひたい！

五、――埋葬の翌日、母がわたしに云つた『お父さんをお墓へ納めた日も、わたしの目がつぶれて了つた日も、もうきのふになつて了つたねえ。』

六、――母の苦悶は太息と洩れた。深い〳〵忍び音と洩れた。さうしてわたし達は一人の人間に對して身も世もあられぬ思ひをした。

七、――母にとつても、わたしにとつても血肉の同胞の人だつた。

八、――それがわたし達とこの人とを結びつける赤繩だつたわけだ。

九、――わたし達の奥の方には、父の生命の 薫ひや輝きや、又その醉の陽氣な響などが、ピタリとコビリついてゐた。わたし達はそのはしはじを偲んでは嬉しがつた。と、亡父の顔や肩がわたし達の頭の中で動いてゐた。

一〇、――朦朧たる故人の面影をば、わたしは犇と抱きしめて涕泣した。わたしは父の父親になつた。

一一、――やがて實をもつた庭園の木々は、殘らず花が咲いたけれど、悉く喪中になつた。

一二、――生き殘つてゐるわたしのお蔭で。

一三、――父はもはや外部に於ける何物でもなかつた。ところが、わたしといふものは一個の死であつた。又母は他の一個の死であつた。死はその人自身から出て諸君のうちへ來たる何びとかだ。生者の内部へ忍び込まぬ死者はない。

一四、――生物を殺し生物を生きかへらせるのはわれ〳〵だ。

一五、――そこで死を忖度しつゝ、わたしが云つた『かれぢやない。わたしだ。』

一六、――夕暮、わたしは群集のしかばね、すなはち墓地のうらがなしいところへ行つた。

一七、――あゝ、荒涼又荒涼！

一八、――かうした墓地の陰慘な黄昏のたゞ中に、わたしは二人の孤兒を見た。青年が一人、少女が一人、かれ等はそこで出會つたので、二人とも嬉々と笑つてゐた。このいたいけな一對はその足音でこ

の世の暗い過去を讃美してゐた。地下に面影を變じ、既に見る目を持たずなつたその一切の群集物に、二人はウットリと魅せられてゐた。互に手と手を握りしめてゐたからだ。

一九、――かれ等の內面の賠償によつて、

二〇、――誰かの外面の形態なる、その青白い罌粟花の上で、二人は互にもたれ合つてゐた。

二一、――他の人々には不幸をもたらすものが、かれ等には幸福をもたらしてゐた。それは二人がニコ／＼してたのでわかる。

二二、――森羅萬象の懐に、この二つのはかない影は寂寥を閉じてゐた。

二三、――かの石上に腰うちかけて――村にはだかる大木とそのすこし上に星影を一つ見た時の――わたしが戀と死について考へた瞬間こそ、さうしてそれは誰の心にも去來するものだと氣のついた瞬間こそ、わたしの生涯の一大轉機であつた。

二四、――さやかに人の到着してゐた黑闇々裡、一道の光明がわたしにだけ閃いた。

二五、――眞理は人の考へるそれとは反對の方向を指す。

二六、――眞理は神からわれ／＼へは來ない。われ／＼の方から神へ往く。

二七、――眞理の指す方向はそこにある。

二八、――又靈は下界から來たる。

二九、――もはや彼岸から發足してはならぬ。われ／＼自身から發足しなかつた事は存在しない。われ／＼は天からは落ちぬ。立ちあがるのがわれ／＼だ。（つゞく）

室生犀星著

帝都著名病医院案内

淋疾
梅毒
尿科

佐藤診療所

神田區錦町二の十 小川町下車明治書院裏
電話神田(25)二六九一

醫學博士 佐藤恒祐

耳鼻科
咽喉科

菊池病院

日本橋區本町一 電話日本橋(一一五〇〇番
日本銀行裏門前 三三九〇三番)

耳鼻咽喉科
院長ドクトルメヂチーネル 菊池循一

眼整形科
ソコヒ
斜視科
トラホーム

丸ビル眼科

東京驛前
丸ビル四階
(眼整形の規定書は御申込み次第進呈)

醫學博士 内田孝藏

血壓亢進症
糖尿病
心腎臟病
X光線科

倉上内科

東京市赤坂區青山北町四丁目六六
(入院應需) 電話青山二二七六番

醫學博士 倉上由一

腦脊髓
神經科

佐多病院

芝區明舟町十九番地
電話青山六九五二番
虎の門

醫學博士 佐多芳久

神經衰弱
腦精神病

青山腦病院

外來午前 入院隨時
ドクトル 齋藤紀一
醫學博士 齋藤茂吉

東京青山南町明治神宮前、電青山六五一・六五三
府下松澤村松原玉川電車下高井戸行山下降

内科 小兒科
外科 耳鼻科
眼科 皮膚科
婦人科 X線科

東京醫專 博濟病院

市電 東大久保拔辨天又新宿一、二丁目下車
省線 新宿より徒歩十五分
(電話四谷一五一一)

内科小兒科
外科花柳病
傳染病室完備

野田病院

淺草二天門

院長 醫學士 野田孫一

耳鼻
咽喉
扁桃腺

平川耳鼻科院

診前九—後五 電話銀座三七二一番
東京丸ノ内スキヤ橋際(有樂町驛前通)

醫學博士 平川武三郎

内科
産科婦人科
耳鼻咽喉科
外科

小石川病院

院長 橋本節齋
醫學博士 山崎清
部長 齋藤一
部長 内田茂吉

東京市小石川區大塚仲町十七・十八・十九番地
電話大塚(86)五一五・五一六・五一七番



みち子ときみ子

正宗白鳥

（一）

芝、神谷町の高臺。内海英一のこの頃新築したばかりの家。

内海は日本橋に店を出して、電氣應用のいろ〱な器具を賣つて可成りな資産をつくつたことになつてゐたが、數ケ月前、新築の家屋が落成しかけた時分に、腦溢血で倒れて半身不隨になつて店の方は他人にまかせて病床に就いてゐる。

妻のみち子と從妹のきみ子とが、看護婦を一人雇つて、病人の看護をしてゐるが、二人とも看護には飽き〱してゐる。

時節は五月の半ごろで、未完成な庭園にも新綠が冴えた日に輝いてゐる。

その庭に面した廣い日本室で、みち子（四十歳）が、紫檀の机に向つて新聞を讀みながら假寢をしてゐるところにて幕開く。

きみ子（美しからぬ愚かな女、二十歳）新聞紙に包んだ菖蒲などの切花を持つて、「只今」と云つて、襖を開けて入つて來る。みち子の眠つてゐるのを見て微笑して、机の上にソツと切花を置いて緣側へ出る。彼女自身も俄かに倦怠を感じたらしく、そこにあつた肱掛椅子を、よささうな位地に持つて來て腰をおろして、目をつぶる。

人の眠りを誘ふやうな唐人笛の音が何處からか聞えて來る。看護婦（今津せい）靜かに襖を開けて顏を出したが、二人の假睡した有樣を見て、微笑する。そして、机の上の新

閾をソッと取つて、奥へ入つて行く。

間もなく、みち子は、惡夢にでも惱まされてゐたやうな顏して、ふと目を醒まして、あたりを見廻す。

みち子　きみちやん、何時歸つて來たの？。

答へがない。

みち子　よく眠つてるのね。何てだらしのない眠樣をしてるんだらう。

そちらを注視してさう云ひながら立上つて、きみ子の側へ行く。そして「きみちやん」と云つて、その肩を搖ぶる。きみ子愕然として目を醒ます。

きみ子　あたし眠つてゐたのね。

みち子　眠つてゐたもないものだ。口を開けて鼾を搔いてた癖に。

きみ子　嘘よ。あたし、今歸つて來て此處へ腰を掛けたばかしなんだわ。

きみ子は極りの惡さうに云つて、椅子を離れる。

みち子　あたしが眠つてゐたからつて、あなたが眞似をして、晝間假寢なんかしなくてもいゝのよ。いくら日が長いと云つても、午餐前に午睡をするのは、お嫁入り前のお嬢樣には似合はしからぬことぢやないの？（笑ひ〳〵云つて、元の座に坐つて）まあ此處へお坐んなさい。あなたに話したいことがあるんだから。

きみ子、机の側へ來て坐る。

みち子（ふと、机を見て今氣づいたやうに）あたし今新聞を讀んでるうちに眠つたくなつたのよ。どうしたのだらう新聞は？。きみちやんが何處かへ持つて行つて？。

きみ子　いゝえ。さつきあたしが入つて來た時に、新聞は姉さんの頭の側にありましたよ。……誰れかゞ持つて行つたんでせう。

みち子　ぢや、今津さんがあたし達の眠つてる間に入つて來て持つつたのかも知れない。人が來て、自分の側にある者を持つて行くのも知らないで眠つてるなんて、あたしもよつぽど心が眠つてるのね。その癖眠つてるうちにも、いやな夢ばかり見て、心は安まつちやゐないのよ。

きみ子　あたしはいやな夢なんか見ないんだけど、どうしてから眠いんでせう。……一日飽きるほど眠りたいと思つてよ。

みち子　ぢや、今日は一日、御飯も食べないであなたの部屋へ入つて眠るといゝわ。

きみ子　……でも、病氣でもないのに、晝間寢床を延べて寢る譯には行かないわね。

みち子　あなたはあたしのお交合ひをして毎日眠不足をしてるからこそ、この家にぢつとしてゐられるんだけど、二三日もぐつすら眠つちやつたら、こんな家に居る氣にはなれなくなるに違ひないのよ。

きみ子　どうして？

みち子　それは分つてるぢやないの？。……あなたはたとへ、義兄さんがあんな病氣に罹らなかつたにしろ、この家に長く辛抱してゐら

れないの。あたし達の方で引留めようとしても、あなたの方から出て行くに極つてるんだわ。

きみ子（腑に落ちぬらしく）あたし、この家を出て行かうと思つてやしないわ。

みち子　隱したつて駄目よ。あたし此間うちから氣がついてゐるの。

きみ子（氣遣はしげに）出て行かうたつて、あたし行くところがないんですもの。

みち子　行くところがない？。……だつて、あなたには兩親が揃つてゐるぢやないの。あたしのやうに、父親にも母親にも死別れた人間とは違つてゐるんです。此方から飛んで行きさへすれば、いつでも待受けて叱つて呉れる兩親が生きてるんだから、それほど幸福なことはないのよ。

きみ子　そんなこと云つたつて駄目よ、姉さん。故郷へ歸つたらいやな思ひばかりしなきやならないんですもの。あたしの方はこの家を出て行かうとは思はないから、姉さんの方でも、あたしに出て行けなんていはないで、何時までもこの家にゐられるやうにして下さいね。

みち子　あたしも不斷さう思つてゐたのだけど（悲しげな口調で）きみちやんとは一生一しよに暮すつもりでゐたのだけど、どうもさういふ譯には行かなくなつたの。

きみ子（悲しげに）どうしたんでせう。あたし困るわ。……あたし、いけないことがあつたら、姉さんの仰有る通りに直しますから、何時までも此家に置いて下さいね。

みち子　あたしの方であなたを置きたくつても、あなたの方であたしを離れかけてるぢやないの？。……あなたは清見さんのことどうも思つてやしない？

きみ子、心の動搖を顏に現はしながら默つてゐる。

みち子（相手の心の動搖は見のがして）清見さんのことをあなたがどう思つてゐようと、それはあなたの御勝手なんだけど、あなたが緣談を耳に留めるやうになつた時はあなたを家にお預り出來なくなつた時だと、あたし、あなたのお父さんにお約束してあるんだからね。

きみ子　緣談と云つて？。あたしそんなこと聞いたことないわ。

みち子　白はくれたことお云ひでないと云ひたいんだけど、あなたにさう云ふのは可愛相ね。……あなたもこの頃になつて男戀ひしくなりだしたのよ。今津さんに惡い智慧をつけられたりして、なほ更目が醒めて來たのよ。……醒めだしたのなら爲方がないけど、あなたも今に不幸な目に會はなきやならないのね。

きみ子は、相手の言葉が理解されないので、たゞ相手の顏を見てゐる。

そこへ、英一（四十五歳、肥滿した大柄な、しかし病に窶れてゐる男）が、大型な座蒲團に胡坐を搔いて、看護婦と下女とに引摺

られて出て來る。下女だけは入口まで運ぶと入つて行く。

みち子　退屈したんですか（彼女はさう云つて立上つて、看護婦を助けて、英一を机の側に運んで來る。看護婦は病人の側に坐る。）

英一　お前達はさつきよく眠つてゐたさうだな。舌が硬張つてゐるやうで、努力して口を利きながらも、言語が不明晰である。

みち子　夜寢床へ入ると眠れなくつて、晝間坐ると眠氣が差して來るんだから困つちまふ。

看護婦　陽氣のせいですわ。

みち子　それもさうでせうけれど、あたし十年も二十年もの間の疲れが、このごろになつて一度期に出て來たのぢやないかと思はれますのよ。

英一　へゝゝ（笑つてゐるのか泣いてゐるのか、分らないやうな笑ひを洩らして）お前は疲れるほどの忙しい思ひを、何十年もして來たと云ふのか。……忙しかつたのはおれのことぢやないか。そのために、おれはこんなになつた（自由にならない右の手を微動させながら、恨めしさうにそれを見詰める）

みち子　あなたの病氣は、お醫者の云ふやうに、お酒や遺傳のためばかりぢやなくつて、商賣のために頭を使ひ過ぎたのがいけなかつたのかも知れないんですけど、……でも、あなたは、商賣のために忙しい思ひをなさるのが何時も面白かつたんぢやありませんか。面白い思ひをして病氣になつたのは、まだしも諦めがつくぢやありませんか。

英一　おれに諦めろと云ふのか。

みち子　それに、さう氣にしてばかりゐなくつても、あなたの病氣はそんなに重かないんだから、次第々々によくなるとお醫者も云つてるんですもの。

英一（妻の言葉を喜んでゐるらしく首付いて）おれの手も大分動くやうになつた（と云つて、左の手で右の手の手首を支へて、指を折つて數を數へる）

みち子　もう少しの辛抱ですよ（氣のない口調で慰めて）でも、あなたは仕合せね。かうして皆んなに看護をされて。……きみちやんもよく云ふことを聞いて働いて與れますのよ。

英一、感謝を籠めた目できみ子の方を見る。

みち子　今お稽古から歸つたところなの。今日はこの花をあなたの枕許で生けさせて御覽なさい。きみちやんは大分上手になつたんですよ。

英一　さうか。おれには生花は分らないよ。……今日は誰れか見舞に來て與れないかな。

みち子　淋しいんですか。誰れか珍らしい人が遊びに來て與れるといゝんですがね。

看護婦　今日は早稻田と慶應の野球が御座いますのね。

みち子　今津さんは變つたものがお好きなのね。今日これから見物に行つていらつしやるといゝわ。

看護婦　あたし、見物したいと思つたこと御座いませんのよ。

そこへ、下女が顏を出して、

下女　お電話で御座います。

みち子　さう？（立ちかけると）

下女　お孃樣に、

みち子（不思議さうに）きみちやんに？（と云つて、ポカンとしてゐるきみ子に向つて）さあ、早く行つてらつしやいよ。

きみ子、下女に隨いて奧へ入る。

英一　きみにでも電話が掛ることがあるのか。

みち子　珍らしいことですわね。……でも、あの子も年頃になつたのだから、若い男から呼出しの電話が掛つて來たのかも知れませんよ。（座興らしく云ふ）

看護婦笑ふ。

英一（氣遣はしさうに）あの子にそんなことがあるのか。

みち子　さうねえ。……そんなことでもあると、あの子は仕合せなんですけど。

英一　さういふことがあるのなら、お前が氣をつけなければいけない。

みち子　あなたも氣が弱くなりましたね。他人の事まで始終危かしがるやうになつたんですね。

英一　あの子についちや、おれ達は責任があるぢやないか。

みち子　あなたゞつてあたしだつて、もう他人の子の責任を背負つちやゐられませんよ。それに、あの子は今にこの家から飛び出しさうなんですの。

英一　どうしてだ？

みち子　どうしてもかうしても爲方がないぢやありませんか。

英一　あの子がゐなくなると、家の中がまた淋しくなるぢやないか。もつと氣儘にさせてもいゝから、此家に留めて置くやうにして呉れ。おれから賴んでもいゝ。

みち子　そんな勝手なことは出來ますまいよ。どうせ出て行くものは留めきれないんです。

英一（心細さうに）病人の側にゐるのがいやになつたのだらうか。

みち子　さうでもないんでせうけれど、……

英一　あの子は他人に唆されるやうな子ぢやないんだが、（物を考へ込む）

みち子　あなたも氣が弱くなりましたね。あの子の何處がよくつて、いつまでも側に置きたいと思つてゐらつしやるの？

そこへ、きみ子が入つて來る。

みち子　誰れから電話が掛つて來たの？

きみ子　お父さんから。

みち子　あなたのお父さん？（意外に感じたらしく）お父さんがこの

頃東京に來てゐらつしやるの？

きみ子　今東京驛に着いたところなんですつて。電車で直ぐに此家へ來ると云つてゐました。

みち子　お父さんはなぜ、わざ／＼電話をあなたに掛けたんでせう例にないことだわね。……何か變つた用事があつたの？

きみ子　用事といふ程のことぢやないんですけど。……（打明けかねて口籠る）

英一　きみ子のお父さんにはおれも話があるんだ。丁度よかつた。

みち子（夫を見て）お客樣がゐらつしやるまで、あなたはあちらで寢てゐらつしやい。此處を片附けますから。

英一　さうか。……おれは此處に來て何分ばかり坐つてゐたかな。

看護婦　時間はまだ五分ぐらゐにしかなりませんよ。

英一　これで一時間もちやんと坐つてゐられるやうになつたら大丈夫だ。

看護婦　あちらへゐらつしやいますか。

英一　あゝ。

みち子　さあ、手を貸して下さい。

　みち子が先に立つて、三人して英一を奧へ運んで行く。

　きみ子だけ、直ぐに引返して、箒を持つて出て來たが、掃除をするのも懶さうに、肱掛椅子に腰をおろす。そして小聲で感傷的な唄を唄ふ。

　「きみ子さん」と呼ぶ聲がする。きみ子が、聲のする方を搜すと、小庭の片隅に、隣りの娘のはる子の顏が見える。

よし子　いゝもの見せたげますから、ちよつといらつしやいな。

きみ子　いゝものつてなあに？

　きみ子、庭へ下りて其方へ寄つて行つて、二三言小聲で話合つてから、庭の外へ出て行く。

　みち子、看護婦と一しよに部屋へ出て來る。

みち子　きみちやんは箒を拋出して、何處へ行つたんでせう。切花も早く生ければいゝのに打つちやらかして（と呟いて、看護婦を見て）あの子は何を稽古させても、熱心に習はふといふ氣になりませんのよ。

看護婦　でも、きみ子さんは御器用ぢや御座いませんか。

みち子（笑つて）今津さんは突飛なお世辭を仰有るのね。あの子が器用なら世間に無器用な女はありやしませんわ。

看護婦（氣がなさゝうに）さうでせうかしら。

みち子　まあ、坐りませうよ。

　みち子は、ふと氣がついたやうに云つて、机の側に坐る。看護婦も坐る。

みち子　あなたは本當にあたしの家にゐて下さる譯に行かないの？あんまり出し拔けなので、あたし吃驚しちやつた。

看護婦　先日から、さう申上げようと思ひ／＼、申上げにくいもんで

すから、一日延ばしに延ばしてゐたのですけど、遅くも明日か明後日までには、あたしどうしてもお暇を頂かなきやなりませんのよ。

みち子　それは御都合がおありになるのなら、爲方がありませんわ。他の看護婦さんをお雇ひしても、氣心の分らないうちは氣骨が折れていけませんから、病人の世話は、あたしときみ子とで、内輪だけで間に合はせてもよろしいんですけど、きみ子も、長くは此家にゐさうぢやありませんのよ。……あなたやきみ子に行つちまはれると病人はどんなに淋しがるでせう。

看護婦　でも、わたくしが最初お伺ひした時よりも、よつぽどよくおなんなすつたんですから、看護婦の必要は御座いませんわ。

みち子　でも、あたしなぞ、病人の扱ひ方をちつとも知らないんですから駄目よ。人間があんなになるとは、夢にも思はなかつたんですもの。……主人が日本橋のお店で卒倒したといふ知らせを、電話で聞いた時には、あたしも卒倒しましたのよ。目の前が眞暗になつたんです。

看護婦　腦溢血は突然に起るんですから、お驚きになるのは當り前なんで御座いますわ。(お義理のやうな返事をする)

みち子　あたしはこの年齢になるまでなんにも知らなかつたんですもの。……でも、妙なものですわね。主人があんなになつたゝめに、はじめてあたしの目が開いたやうに思はれますのよ。二十年も三十年も盲目だつたあたしの目が、不意に開いたやうに思はれますの。

看護婦　さうで御座いませうね。

みち子　この年齢になつて目が開くなんて、あたし目の開きやうがあんまり遅過ぎたんです。

看護婦　奥さまはまだお若くてゐらつしやるぢや御座いませんか。

みち子　あたしが若いものですか。誰れだつて一日々々年齢を取るに極つてますけれど、あたしは、眠つてゐるうちに歳を取つたのですわ。……そりや、忙しい思ひもしましたし、人の見る者は見るし、人の聞くものは聞くし、あたしだけが人様と異つた生活をして來た譯ぢやないのでせうけれど、あたしはなんにも知らなかつたんですのよ。……この家だつて本當は自分の家だか何だか分らないんです。主人だつて今まではあたしの夫だつたのかどうだつたのか分らないんです。……今になつて氣がついたつてもう遅いんですわ。……主人の病氣はどうせよくなる當てはないんですから、今から一年か二年のうちに、あたしは、一人ぼつちになるに極つてますの。身に覺えのない女がこの年齢になつて一人ぼつちになつて世を渡るんですから、隨分みじめぢやありませんか。

看護婦　奥さまの御身分がみじめだつたら、わたくしどもはどうしたらよろしいんでせう？。

みち子　今日にもお別れするあなたに、こんな内輪のことをお喋舌りするのは、隨分馬鹿げてゐるわね。……でも、あたしには、愚痴を聽いて吳れる相手さへ一人もないんですから、みじめぢやありませ

んか。病人にはいやなこと聞かせる譯に行かないし、きみ子は世間知らずのお馬鹿さんだし、親類にも親身な話相手は一人もないんですから、他人のあなたにこんないやなことをお聞かせする氣にもなるんですの。……まさか、壁に向つて獨言を云ふ譯には行かないんですものね。

看護婦　ぢや、わたくしは壁の代りになつてるんで御座いますね。

みち子　さうお取りになつちや、大變な誤解なのよ。(感傷的に)二月の餘、御一しよに病人を看護してゐましたから、あなたを他人のやうには思はれなくつて、お別れに打明話をしたくなりましたのよ。

看護婦　わたくしのやうな行屆かないものを、奥さまは、お家の方同樣によくして下さいました。(冷靜に云ふ)

みち子　あたしね、今津さん。……主人が元のやうに丈夫になつたら是非云つてやりたいと思ふことが、胸に一杯溜つてゐますのよ。目の明いたあとのあたしの氣持を、主人にだけは聞いて貰ひたいと思つてるんですけど、あたしの大望はこの世ではとても叶ひさうぢやありませんよ。

看護婦　御主人は次第によくおなりなさいますよ。仰有ることもよく分るやうになつたぢや御座いませんか。

みち子　いくらかよくなつても、どうせ元のやうにはなりませんわ。少くともあたしが思ふ存分に云ふことを、ぢつと辛抱して聞いて呉れるやうなしつかりした身體にはならないに極つてますわ。あたしが思切つたことを云はうものなら、主人は目を眩すでせうよ。

看護婦　奥さまは旦那樣に何を仰有らうと思つてゐらつしやるの？

みち子　別段異つたことぢやありませんの。……でも、あなたにでも誰れにでも、これだけはお話する氣になれないんです。……あたし主人が一時間でも三十分でも、元のやうな丈夫な身體になつて呉れゝばと、願つてるんですけど、駄目です。あたし、一生云ひたいことが云へないでおしまひになりますのよ(看護婦を見詰めて、ふと調子をかへて)今津さんとも、今日か明日で一生のお別れになるんですね。

看護婦　わたくし、お宅へ時々寄せて頂きますわ。

みち子　どうぞ。……この邊にゐらつしつた時には、是非寄つて下さいね。……あたし達は何時までこの家にゐるか分らないんですけど。

　そこへ、下女が顏を出す。

下女　あの。旦那樣がお呼びになつてゐらつしやいます。

みち子　あ、さう。

　みち子、座を立つ。そして、看護婦が座を立たうとするのを留めて

みち子　あなたはあとで來て下さいね。あなたとお別れしなきやならないことを、病人の得心の行くやうに話して置きますわ。

看護婦　ぢや、お話の濟んだ頃まゐりますわ。(看護婦が膝を落着けると、襖の側に突つ立つてゐた下女が入つて來る。)

下女　あなた、お暇をお貰ひになるの？

看護婦　えゝ。以前わたしがお世話になつてた方が今度病院をお建てになつたの。それで是非わたしに來て吳れと仰有るんだから、お斷りする譯に行かないのよ。

下女　病院の方が氣樂でいゝでせうね。

看護婦　さうでもないでせうけど。

下女　あなたは、よく此方に長くゐて下すつたわね。(用心してあたりを見て) あなたは、この頃の奧さまの御樣子をどうお思ひになつて?。

看護婦　奧樣がどうかなすつて?

下女　奧樣は以前はもつとキチンとした方だつたのよ。

看護婦　今だつて、だらしのない方でもないでせう。

下女　あなたは、以前の奧樣を知らないから氣がつかないんだけどあたしには、奧樣のお顏まで變つたやうに思はれて、夜薄暗いところで見ると、怖くなることがあるんですよ。

看護婦　そりや看護疲れのせいなんでせう。心配もしてゐらつしやるでせうし。

下女　さうでせうか。……あなたがゐらつしやらなくなつたらあたしもお暇を頂かうか知ら。

看護婦　どうせ代りの看護婦をお入れになるんでせうから、あなたは辛抱して此家にゐてお上げなさいな。

下女　でも、病人のある家はいやなものね。あなたは御商賣がさうだから、何とも思はないんでせうけど、

看護婦　あなたは御病人の側に附いてゐる譯ぢやないから、どうだつて構はないぢやないの。

下女　構はないことはないわよ。奧樣は以前に比べると氣六ケしくおなんなすつたの。あなたには御機嫌を取つてゐらつしやるけれどあたしには隨分邪慳になつたのよ。以前は鷹揚だつたのに、この頃は急に儉しくなつて、菜つ葉の切れつぱしでも粗末にすると、目に角立てゝあたしの方を見るんだからたまらないわ。

看護婦　何處の金持らしい奧さんだつて、內輪へ入つて見ると、大抵そんなものだわね。(ふと立上つて) あたし、もうあちらへ行かなきやならない。……お客樣がゐらつしやるさうだから、あなたはこのお部屋のお掃除をなさいな。

看護婦はズツと奧へ入る。

下女は看護婦に命令されたのを忌々しがつて、チエツと舌打ちをする。そして、机の上の切花を取上げて眺めてゐると、きみ子が庭に現はれる。

きみ子　誰れもまだ來なくつて?。

下女は振返つてきみ子を見ると、切花を机の上に置いて立上る。

下女　お客樣がゐらつしやるんですか。

きみ子　あたしのお父さんが來るのよ。

下女　あなたのお父さまなら、旦那樣の叔父さんで御座いますのね。

きみ子　極つてるわ。

下女　ぢや、お座敷のお掃除をしとかなきやいけませんわね。

きみ子　そんなこと、どうだつていゝのよ。……あたし、今お隣りへ遊びに行つて、とても怖かつたのよ。

下女　どうなすつたの?。

きみ子　はるちやんのお父さんのところへお金の催促に來た人があるのよ。はるちやんのお父さんはいろ／＼に言譯をしてゐたけれど、その人は承知しないの。

下女　お隣りでは人からお金を借りてゐらつしやるの?。外から見ちや分らないものですわね。

きみ子　あたし、はるちやんが可哀相になつてよ。その金貸が側の室できつい聲を出してお父さんを虐めるもんだから、はるちやんは怖がつて青い顏してブル／＼震えてゐるの。……あたしもぢつとしてゐられなくつて、逃げて歸つて來たの。

下女　お隣りではよつぽど借金してゐらつしやるのか知ら。……さう云へば、あすこのお孃さんはそんなにいゝ服裝をしてらゐつしやいませんわね。

きみ子　さうでもないことよ。二三日前にも三越へ行つて、いろ／＼なものを買つて來たと云つてたわ。買つて來たものを見せるつもりであたしを呼んだのだけど、そこへあの恐ろしい金貸が脅かしに來たもんだから、それところではなくなつたのよ。

下女　東京にはお金がありさうに見えて貧乏な家が多いですね。

きみ子　この家だつてさうかも知れないわ。あたし何だか氣になりだしたのよ。今にも恐ろしい借金取りが來やしないかと思はれて。

下女　お孃様は飛んでもないことを仰有る。（年長者氣取りで相手を戒めるやうに云つて）旦那様が病氣してゐらつしやつても、此方のお店は大丈夫で御座いますよ。

その時、呼鈴が鳴る。

きみ子　お父さんか知ら。

さう云ふや、否や急いで出て行く。下女は箒を持つて、掃除の眞似をしたゞけで出て行かうとすると、庭の片隅から、「きみ子さん」と呼ぶ聲がする。下女はそちらを覗いて、「お孃様は今御用がおありになるんです」と云つて、庭へ下りて、聲の方へ向つて出て行く。

きみ子は、父の内海參吉（六十歳田舍者らしい頑健な老人。）を導いて出て來る。

參吉　なか／＼いゝ家だ（と、あたりを見廻しながら云つて、机の側に坐つて）お前もまあ此處へ坐れ。電話で云つたことは分つたらうな。

きみ子　えゝ。分りました。

參吉（周圍に氣をくばりながら）今度わしが東京へ來たのは、英一の病氣見舞のためばかりぢやない。お前を連れて歸るのが肝心な用事

なのぢや。義姉さんの手助けをしとるお前をわしの方から是非連れて歸ると云つちや、今日の場合ぢや、この家に、おれも義理の悪いことになるんだから、お前の方から、是非おれに隨いて歸りたさうにして呉れ。お前が歸りたさうにすれば、おれも、少しの間暇を貰ひたいと、義姉さんに得心させるやうに話をつけてやる。……おれが電話でさう云つたことが、よく分つとるだらうな。……それさへ分つとればえゝ。(安心したやうに云ふ)

きみ子　……でも、あたしは故郷へ歸りたかありません。

参吉　歸りたうない？　どうしたのぢや。……(聲を潜めて)英一が丈夫なら、お父さんもお前を連れて歸らうとは云はんのぢやが、主人が全快する望みのない病氣に罹つとるのに、お前がこの家に居るのは、お前の爲めにならんぢや。お前にはその譯が分らんだらうが、まあお父さんの云ふ通りにして居れ。お父さんの云ふ通りにしとれば間違ひはないのぢや。

きみ子、不満らしい顔して默つてゐる。

参吉　お前はそんなに此處の家がえゝのか。(相手を壓するやうな目付をして云ふ)

きみ子、默つてゐる。

参吉　お前は何時の間に、そんなに剛情になつたのだ？。

そこへ、みち子が奥から出て來る。
参吉、俄かな態度を改める。

参吉　勝手にお座敷へ上り込んで、失禮しました。今お着きになりまして？

きみ子　よくお出掛けになりました。

互に挨拶する。

参吉　急に思立つて夜行で來ました。英一の病氣はどんな風です？。

きみ子　お蔭様でいくらかよろしいやうです。でも、まだ獨りでは動けないんで御座いますよ。この頃大變、人を懐しがつてゐますから叔父さんにお目にかゝつたら、どんなにか喜びますでせう。さつき電話でお知らせがあつてから、ゐらつしやるのを待遠しく思つてるんで御座いますわ。(きみ子に向つて)義兄さんに早くさう云つて下さいね。お父さんがお出でになりましたつて。

みち子　ハイ(出て行く)

参吉　きみが何時までも御厄介になつて、ゐまして。(恭しく頭を下げる)

みち子　きみちやんはよく働いて呉れますので、あたしも大助かりなんですわ。

参吉　なにせ、田舎娘で氣が利きませんから、お役には立ちますまいと、始終お氣の毒な思ひをして居りました。

みち子　あたくしどもこそ、叔父さんのお賴みを安受合ひに受合つてゐながら、充分なことが出來ませんで申譯が御座いません。……叔父さんのお家は皆様お變りはないので御座んせう。

参吉　わたしの家は此方と違つて多人數で、朝から晩までガヤ〳〵騒

がしくつて、老人も午睡さへ出來ないやうな有様なんです。

みち子　お賑やかで結構ですわ（これはお世辭でなく、深く自ら感じたやうに云ふ）

參吉　日本橋のお店の方は、どうして居られるんぢやな。

みち子　お店の商賣のことは混入つてゐて、あたくしには、まるつきり分りませんですから、一切他人任せにしてゐるんで御座いますの。主人は病氣してもをり／＼お店のことを氣にしてヤキモキしてゐたやうでしたが、この頃は病氣に負けちやつて慾が薄くなつたのですか、店のことはあんまり口に出さなくなりましたの。商人に慾がなくなつちや、もうおしまひで御座いますわ。

參吉　いつかのお手紙にもあつたが、店の方は、身内のものが誰れか監督しなければなりますまいな。

みち子　監督も必要なんで御座いませうが、あたくし、お店のことは成るべく聞きたくは御座いませんのよ。

參吉　どうしてゞす？。

みち子　それは訊いて下さいますな。

參吉、怪訝な顔する。

そこへ、座蒲團に乘つた英一が、きみ子と看護婦とに引かれて入つて來る。

參吉（驚いたやうに）オヽ。この頃はさうして坐つとられるやうになつたのか。これから其方へ見舞に行かうと思つてたのに。無理をしちやいかんぜ。

英一、みち子にも助けられて、机の側に座を占める。

英一　叔父さん（昂奮して不自由な口を利く。そして、言ひたいことが咽につかえてゐるのをもどかしく、思つてゐるらしく涙を落す）

みち子　久振りで叔父さんにお目にかゝつて、お懐しいんですね。（夫の落涙の意味を説明するやうに云ふ）

英一（妻の言葉を否定するやうに首を振つて）叔父さんはきみ子をわたしの家から連れて歸らうとなさるんですか。（吃り／＼咎めるやうに云ふ）

參吉（慌てゝ）いや、さういふ譯ぢやない。

英一　親が自分の娘を連れて歸るのは當然なんでせうがわたしが、こんな不具になつて、商賣の方も思はしくないのを見て、きみ子を連れて、歸らうとするのは、不人情ぢやありませんか。あなたがはじめきみ子をわたしに頼んだ時はそんな筈ぢやなかつた。

參吉　どうしてそんなことを云ふのだ？。お前は大變わしを誤解しとる。

英一　店の方がどうならうと、きみ子を歸らせやしません。

參吉　わしはお前の店がどうなつて居るか全く知らんのぢやないか。

みち子（呆氣に取られて夫に向つて）あなたはなぜ、叔父さんにそんな失禮なことを仰有るの？。

皆んな、間の惡い顔して座が白ける。

看護婦　今お孃樣が旦那樣にさう仰有いました。お父さまが直ぐに連れて歸ると云つてゐらつしやるけれど、御自分は何時までも此處にゐたいのだから、叔父さんの方から、お父さまによくさう云つて下さいと、お孃樣が旦那樣にお頼みになつたのです（冷靜に云ふ）

參吉（目に角立てゝきみ子を見て）お前は馬鹿なことを云ふ。お前が鄕里へ歸りたがつてるから、わしが連れて歸つてやつてもえゝと云ふたまでぢや。

みち子（苦笑して）どちらだつてよろしいぢや御座いませんか。

英一　今津さんは今日か明日かのうちに暇を貰ひたいと云つてゐる。きみ子はお父さんが連れて歸る。（みち子を見て）お前も何處かへ行つちまひたいんだらう。……皆んな行つちまつて、おれ一人を此處へ殘して置くつもりなのか。

みち子　詰らないことを仰有るものぢやありませんよ。（叱るやうに云つて）あなたは今日はどうかしてゐらつしやるのね。

參吉　まあ、きみ子のことは後でゆつくり話すことにしよう。

英一　叔父さんがわたしのところからきみ子を連れて歸りたいのなら今直ぐに連れて歸つてもよろしい。（きみ子の方を見て、手で追拂ふやうにして）お前はお父さんに隨いて故鄕へ歸れ。おれの家にゐても、お前の得にならないと、お父さんに思つてゐるのだ。

みち子　今日はどうしたんでせう（參吉の方を見て）不斷はこんなぢや御座いませんのよ。この頃は氣が弱くなつて、人懷しくつておとなしいんですけど、今日は何だかの加減で體の居所が惡いんですね（英一を見て）さあ、あなたは彼方へ行つてお休みなさい。無理をしてたび〳〵起きてゐちやいけないんですよ。

みち子は、看護婦の手を借りて奥へ連れて行かうとする。

英一　焦せ〳〵。興奮して云つて、自由にならぬ手で行くまいと爭つてゐるうち卒倒する。皆んな驚く。

（幕）

（二）

同じ家の應接室用の西洋室。テーブルと椅子が置かれてあるばかりで、まだ何等の裝飾も加へられてゐない。

野島良助（五十歳くらゐ。質素な洋服を着けてゐる。英一の事業上の仲間で、英一の病中は、みち子は萬事此の男に委任してゐる）と、みち子とが對座してゐる。みち子は前の幕よりも著しく窶れてゐる。

みち子がテーブルの上の帳簿を見てゐて、良助が煙草を吸ひながら、みち子の丸髷頭に目を注いでゐるところで幕が開く。

みち子（帳簿から目を放して）こんなものを見たつて、あたしには分りませんわ。あなたが御覽になつて、缺損になつてると仰有るのならそれでよろしいんです。

良助　でも、一應はよく御覧になつて、充分御得心が行くやうでなければ、わたしの責任が果せませんよ。

みち子　得心が行くも行かぬも御座いませんわ。あなたがお調らべになつたものを、算盤の分らないあたしが調らべたつて、なんにもなりやしませんよ。主人の身體が丈夫だつた時にも、商賣のことはなんにも知らなかつたあたしですもの。今になつて分る筈が御座いませんわ。……缺損があればあつて爲方がありませんわ。この家が人手に渡るものなら、それも爲方がありません。

良助　あなたは諦めがよくつて結構です。

みち子　あたしが諦めがいゝんですつて。野島さんは何を仰有るんです？

良助　内海君が丈夫でありさへすれば、こんな缺損くらゐ何でもないんでせうが。……

みち子　もう駄目だと仰有るんでせう。……主人は商賣に掛けては智慧があつたのかも知れませんが、あんなに脆い人間とは思ひませんでしたの。何でもないことで直ぐに倒れてしまふんですもの。あたし、悲しく思ふよりも不思議でなりませんの。

良助　以前のやうに坐るだけも六ケ敷なつたんですね。

みち子　寢たつきりですのよ。今度こそどうしようも御座いませんの。今度こそ回復の望みのないことを自分で承知してゐますから、何事じれて、氣六ケしくなつて、看護婦も手が掛つて困つてゐるんです。

良助　わたしは今日は、内海君に會はない方がよろしいでせうか。ちよつとお目に掛りたいと思つてたんですが。

みち子　お會ひ下さらない方がよろしいんです。あなたにお目に掛ると、商賣のことをお訊ねしたがつて、神經をいためますでせうから。……それよりも、あたしはこれからどうしたらいゝと、野島さんはお考へになりまして？

良助　さあ。……内海君が回復の望みがないのなら、お店の方の整理はわたしがお引受けて、あなたと御相談の上仕末をつけませう。しかし、あなたの御一身のことはわたしなどが彼此申上げる資格はありませんよ。……内海君の叔父さんはまだお宅に御滯在になつてるんですね。

みち子　え、叔父も間合ひで、歸るにも歸れず、當惑してるんでせうよ。

良助　叔父さんに、この帳簿をお見せになつて、お宅の資産狀態をよくお知らせになつたら如何です。何ならわたしから叔父さんによく御說明してもよろしい。あなたのためにも、さうなすつた方が御親類に對して後暗いところがなくつて、御得策だらうと思はれますが。

みち子　叔父さんに帳簿を見せろと仰有るの？　あたし、眞平ですわ。田舎の叔父さんをはじめ、主人の身内の方に、わたしどもの資

産の處分を御相談する必要は御座いません。あなたに整理して頂いて百萬圓もの大金が殘つたにしても、破産同樣な目に會つて、着のみ着のまゝでこの家を出て行くやうになつても、主人の身内から餘計なおせつかいは受けまいと思つてますわ。此處はわたしども夫婦の家です。若しも主人が亡くなるやうなことがあつたら、此處はあたし一人の家です。(努めて力を籠めて云ふ)

良助　(相手の權幕に壓せられたやうに)　その御決心は結構でせう。

みち子　結構でも不結構でも爲方がないぢやありませんか。(いやに相手にからんで)　缺損の穴埋めに、この家が人手に渡るまでは、二日でも三日でも、この家はあたしの家です。あたし一人の家です。

良助　(輕く受けて)　內海君は折角こんな結構な家を新築したばかりで病氣になつて、氣の毒ですね。

みち子　でも、病院代りに役に立つたと思へば結構ですわ。贅澤ぢやありませんか。死榮がするやうなものですわ。

良助　あなたもお一人で、御病人のお世話や何かゝ大概ぢやありませんね。

みち子　野島さんあたし、時々は逃げ出さうと思ふことがありますのよ。

良助　逃げ出す？(不思議さうに相手を見入る)

みち子　えゝ。家も病人も抛つちらかして逃げたいと思ふことがありますのよ。

良助　えらいことを云ひますね。だつて、あなたは今、この家は御自分一人のものだと云つてゐらつしやつたぢやありませんか。

みち子　本當にさうでしたね。

その時、扉が開いて、きみ子が顏を出す。彼女の顏も前よりは窶れてゐる。

みち子　何か御用？

きみ子　義兄さんが義姉さんに、直ぐに來て下さいつて。

みち子　(眉を顰めて)　あたしは應接室でお店の方とお話してるんだから、心配なさらなくつてもいゝと、さう仰有い。野島さんが來てゐらつしやると云つちやいけませんよ。顏を知らないお店の方だと云ふんですよ。

きみ子　ハイ

みち子　それから、紅茶でも持つていらつしやい。

きみ子　ハイ　(入つて行く)

みち子　あれだから困るんです。少し側を離れてゐると、なんにも用事はないのに、あたしが家を逃げ出しやしないかと思つて、呼びに來るんです。

良助　心細いんでせうから、早く行つてお上げなさい。わたしはもうお暇しませう。

みち子　まあ、御ゆつくりなすつて下さい。病人は構ひませんの。

良助　きみ子さんはお父さんと御一しよに郷里へお歸りになるといふ

ことだつたが、どうなりました？。

みち子　さあ、どうなりますか。きみ子と云へば、何時かあなたが滿見さんが、お嫁さんを搜してるから、きみ子はどうだらうと仰有つたでせう。それをあの子は側で聞いてゐて、その緣談を心待ちに待つてゐるやうなんですの。（ふと氣づいたやうに）……あゝ、さうだ。今だつて、あなたが緣談のことを仰有りやしないかと思つて、ドアの側をうろ／＼してゐたのかも知れませんわ。

良助（ふと思出したやうに）あゝさう／＼。滿見君の話もあれつきりでしたね。どうです？。こちらで御熱心なら話を進めて見ませうか。

みち子（手を振つて）それはとても駄目です。

良助　此方で何かいけない譯がおありになるんですか。

みち子　當人は、相手が男でさへあれば、何處へでも喜んでお嫁入りしたいんでせうが、あたし、不賛成です。

良助　滿見君ではお氣に入らないんですか。

みち子　氣に入るも入らぬも、そんなことが問題ぢや御座いませんの。そりや、滿見さんはきみ子には過ぎた方なんですけど、……あの子は結婚さすためにあたしの側に置いたのぢやないんですもの。

良助　ハヽヽ（馬鹿なことを云つてゐると云つたやうに笑ふ）

みち子（非難するやうに）何をお笑ひなさるの？。あの子には男を知らせないで、一生あたしの側に置くつもりで、叔父さんからお預りしたのでした。……だけど、もう駄目です。あの女さへ、あなたの緣談のお話を立聞してから、俄かに色氣が芽を吹きかけたんですからね。あたしいやらしくつてたまらない（これは獨語のやうに、そして不愉快らしく云ふ）

良助　ハヽヽ。

そこへ、きみ子が紅茶を運んで來る。

良助　きみ子さんは、此間お目に掛つた時よりもお瘦せなすつたね。看護疲れなんですか。

みち子（皮肉に）看護疲れだか、何だか。

良助　奧さんもきみちやんも、さう弱つちやいけませんね。病人にかぶれて陰氣になつちやいけない。もつと氣を大きくお持ちなさい

きみ子（みち子に向つて）義兄さんが呼んでゐらしつてよ。

みち子　煩いねえ。

良助　早く行つてゐらつしやい。わたしはお茶を呼ばれてゐますから。

みち子　爲樣がないねえ。

不承々々に出て行く。きみ子も隨いて出て行かうとすると、

良助　きみちやん。まあここへお掛けなさい。

きみ子、振返つて躊躇してゐると、良助は笑顏で手招ぎして、

良助　あなたにお訊きしたいことがあるんだから、ここへゐらつしやい。

きみ子、默つて椅子に腰をおろす。

良助　あなたのお父さんは、いつお郷里へお歸りになります？。

きみ子　明日は歸る〳〵と、毎日のやうに云つてますわ。
良助　あなたもお父さんと御一しよにお歸りになるんですか。
きみ子　お父さんは連れて歸る〳〵と云ふんですけれど、あたし、田舍へなんか歸りたかありませんのよ。
良助　やはり東京がいゝんだね。ぢや、お父さんにお願ひして此方にゐらつしやることにしちやどうです？。
　きみ子は、帳簿に目をつけてゐる。
良助　折角この家へゐらつしやつたのに、義兄さんがあんな病氣になつて、あなたも運が悪かつたですね。
きみ子　あなたにお訊ねしたいことがあるんですけど。……
良助（ある感じに打たれて）何です？。
きみ子　あの。……この家は義兄さんが亡くなるやうなことがあつても、財産が後へ殘りまして？。
良助（その問ひを意外に感じて）今から遺産のことを、あなたは訊くんですか。お父さんがわたしに訊いて見ろと云つたんですか。
きみ子　いゝえ。
良助　ぢや、きみ子さんが御自分で訊く氣になつたんだね。遺産があつたらどうしようつて云ふの？
　きみ子、なほ帳簿に目を留めながら默つてゐる。
良助　きみちやんは、この帳簿を見たいんですか。……さあ、遠慮なく御覧なさい。
　良助が、揶揄半分で、帳簿を突付けるのを、きみ子は、不思議な物を見るやうにそつと覗く。
　そこへ、みち子が慌たゞしく入つて來て、怪訝を含んだ目をそちらへ向ける。
良助（笑ひ〳〵）今ね。きみ子さんが、この帳簿を見せろと云ふからお見せしようとしてるところですよ。奧さんよりもきみ子さんの方が數理に明るいのかも知れませんね。
みち子（ふと血相を變へて）これを見たいと云ふの？。見かけによらない恐ろしい根性を有つてゐるのね、あなたは。（きみ子の首根つ子を捉へて、帳簿の上に押付けて）さあ、見たければ、いくらでも御覧な。……此家はあたし一人の家だよ。あなたやあなたのお父さんに指一本差させはしない。
良助　そんなひどいことをするものぢやありませんよ（二人を引分けて）奧さんも大人げないぢやありませんか。
みち子　さあ、あなたは、今からお父さんと一しよに故郷へお歸んなさい。
きみ子（おど〳〵しながら）あたし、悪かつたらあやまりますわ。あたしに歸れと云はないで、どうぞ此家に置いて下さいね。
みち子（憎さげに）しぶとい人ね（と云つて、良助に向つて）この子はのろまなくせに、色氣と慾氣は人一倍持つてるんですね。あたし、恐ろしくなりましたよ。こんな人と一しよにゐたら、あたし、これ

から夜も安心して眠れませんよ。

良助　しかし、きみちやんがゐなくなつたら、此家の御家族はあなたと御病人と二人つきりになるぢやありませんか。當人が此方にゐたいのなら置いてお上げになつたらいゝでせう。

みち子　あたし、一人ぼつちですとも。（われ知らずあたりを見廻す。そして、力のない聲で）病人はもう死んでゐるも同樣なんですもの。將來のことよりも、今の今、一人ぼつちになつてるぢやありませんか。

良助　わたしはこれでお暇しませう。

立上りかけたところへ、扉を叩く音が聞える。

みち子　きみちやんのお父さんかも知れない。

彼女は不氣味な訪問に接したやうな顏して、返事もしないでゐる。良助も突つ立つたまゝで默つてゐる。

（幕）

（三）

みち子の化粧部屋。

（一）と（二）の舞臺面が、不完成を示してゐるのに引變へて、この部屋は、狹いながらも小奇麗に飾られて、完成美をあらはしてゐる。

みち子は、湯上りらしい姿をして、鏡面に向つて丹念に化粧をしてゐる。前の幕よりもいくらか晴々した顏をしてゐる

そこへ、きみ子が、やはり湯上りらしい姿をして入つて來る。

みち子　あなたはいつも烏の行水ね。

きみ子　義姉さんの後で入ると、お湯が熱くつて長くは入つてゐられないの。

みち子　あなたは頑丈な皮膚をしてゐるのに、あのくらゐなお湯が熱いの？。熱いお湯に漬かるやうでなければ、身體は奇麗になりやしないよ。

きち子　毎日熱いお湯に入つてゐたら、義姉さんのやうに肌がしなやかになるんでせうか。

みち子（微笑を含んで、自分の腕を見て）あたしの肌がしなやかだつて？。きみちやんはいつの間にお世辭がうまくなつたの？。こんなお婆あさんになつちや、もう駄目なのよ。……あゝ、これでせい〳〵した（と云つて、鏡に映るおのが顏を覗いてから、鏡臺の側を離れる）

きみ子　あたし、此處を拜借してよ。義姉さんの仰有るやうに、家のなかでは、この部屋が一番落着けていゝのね。

みち子の立つた後に坐つて、みち子の眞似をして、クリームなどを顏へ塗る。

みち子は、快い湯疲れを休めるやうにしどけなく坐つて、きみ子の化粧振りを見てゐる。

きみ子　お父さんからどうして手紙が來ないんだらうね。何處へも道寄りしなかつたのなら、無事に郷里へ着いたといふ手紙が、もう屆かなきやならない時分なんだけど。

みち子　お父さんの手紙なんか來なくつてもいゝのよ。

みち子　きみちやんはどうしてもあたしの側にゐたいのね。……長くゐてくれた看護婦の今津さんも出て行つたし、下女のきよが暇を取つてから、落着いて家にゐて呉れるものはないのに、あなたゞけは辛抱がいゝのね。

きみ子（甘えるやうに）だつて、あたしは此方にゐたいんですもの。

みち子　あたし、決してきみちやんを悪く云ふんぢやないけど、あなたのしぶといのには、毎日呆れてゐるのよ。あたしもあなたほどしぶとくなれたらいゝと思つてるの。

きみ子　しぶとい〳〵と、義姉さんはあたしのことを仰有るけれど、しぶといつてどんなこと？。

みち子　だつて、みんながあたしの家を逃げて行くのに、きみちやんだけがこの家にぢつとしてるぢやないの？。

きみ子　あたし一人つてことないわ。義姉さんがゐらつしやるし、義兄さんも病氣してゐてもこの家にゐるのですもの。

みち子　義兄さんやあたしは、この世の人間ぢやないやうなものよ。

　きみ子、粉飾した顔を此方へ向ける。

みち子　奇麗になつたのね。

　きみ子、悦しさうに微笑す。

みち子　さういふ顔して、あなたがこの家で花嫁さんにならうつて云ふの？。

きみ子　義姉さん冷かしちやいやよ。

みち子　冷かすどころぢやないの。あたしは、とてもあなたには敵はないわ。野島さんがお世話して下さるのなら、清見さんとでも結婚するといゝよ。それから、義兄さんの遺産でも頒けてお貰ひなさいよ。お父さんはそのつもりで、あなたをあたしの家に置いて行つたんでせう。

　きみ子、何と答へていゝかと云ふやうな態度で默つてゐる。
　そこへ、下女が襖の間から顔を出して、「旦那様がお呼びになつていらつしやいます」と傳へる。

みち子（懶さうに）今お湯から上つたばかりだから、もう少し待つて下さいつて、旦那様に云つてお呉れ。

　下女、入つて行く。

みち子　きみちやん、あたしの代りに義兄さんとこへ行つて頂戴。

きみ子　あたしだけぢや駄目だわ。義兄さんの仰有ることがあたしには通じないんですもの。

みち子　義兄さんにだつてあたし達の云ふことは通じてゐやしないのよ。

きみ子　だつて、義姉さんの云ふことはおとなしく聞いてるぢやない

の。

みち子　義兄さんは、あたしに逃げられやしないかと思つて、そればかり心配してるんだけど、あたし、逃げようたつて、何處へも逃げてくところはないぢやないの。義兄さんはあたしに張番させてあの世へ行けるんだから仕合せなのさ（欠伸を洩らして）あたし、長湯をしたせいか眠つたくなつた。此處で一眠りするから、あなただけ行つて、あたしの代りに義兄さんのところへ行つてゐらつしやい。

きみ子　え丶。

躊躇してゐる。

みち子　早くお出でな。……それからおさとに枕と毛布を此處へ持つてくるやうに云つて頂戴。

きみ子　ハイ

不承々々に出て行く。

みち子、ふとまた鏡に向ふ。

下女おさと、毛布と枕とを持つて入つて來る。みち子、下女の姿を見て驚く。

みち子　あゝ、吃驚した。

下女（怪訝な顔して言譯のやうに）お嬢様がこれを持つて行けと仰有いました。

みち子　あゝ、さうだつた。あたし、一眠りする筈だつたのね。

下女（持つて來たものを下へ置いて）これでよろしいんで御座いますか。

みち子　そこへ置いとけばいゝのよ。それから、お居間の方から誰れが來ても、病人の手が離せないからと云つて、お斷りしておくれな。

下女　ハイ。（入つて行く）

みち子、横になつて目をつぶる。

きみ子、そつと入つて來る。そして、みち子の寝顔を見てから、また鏡面に向つて、お化粧をする。

みち子（ふと目を開けて）あなたまた來たの？。

きみ子　義兄さんが義姉さんの側へ行つてゐろと云ふんですもの。

みち子　煩いねえ。あなたは義兄さんに頼まれてあたしの張番をするの？。あたしが逃げようたつて、何處へも逃げて行くところはないと、さつき云つたぢやないの

きみ子　あたし、義兄さんにさう云つたんですけど。

みち子　あなたは仕合せものね。明日もこんなことをして此處にゐるつもりなの。

みき子　あたしいつまでも此方にゐたいんですもの。

みち子　今にお隣りのはる子さんのお家のやうに、夜逃げをするやうになつても、此處にゐたいの？。……あなたは、まあ鏡で自分の姿をよく覗いて御覧なさい。

きみ子　あたし、さつきからよく見てるのよ。

みち子　あなたのその顔が映るばかりぢやないの？。

きみ子　それは極つてるわ。

　そこへ、下女が入つて來る、

下女　野島さんがゐらつしやいました。奥様はお差支があると申上げたのですけど、大切な用事だと仰有つてずんずん應接室へお上りになりました。

きみ子　直ぐにお目に掛ると云つておくれ。

　下女、入つて行く。

みち子（興奮して身つくろひをしながら）さあ、きみちやんも仕度をなさい。野島さんが何を仰有るか聞かせて上げるよ。

きみ子　ハイ（元氣よく返事をして、元氣よく衣服を着替へる）

みち子　あたし、しつかりしなきやいけない。（自ら力をつける）

（幕）

人物

内海英一
内海參吉
野島良助
みち子
きみ子
看護婦
下女二人



純一の手紙

綱野菊

夏の初め、從弟達三人は叔母と一緒にM町の叔父の家を出た。其同日、叔父の妾がM町の家に入つた。

從弟三人の中、上二人はそれ〴〵やう〳〵銀行や會社に口を得て就職してゐた。叔父の事業の失敗、家の中のゴタ〳〵、さういふ事から從弟達は三人とも一時にK大學の豫科を途中でやめた。それで上の二人が就職したと云つても其とる給料は僅だつた。が、從弟達は若く、元氣だつた。父から離れて自活する、其事に喜びを持つた。殊に總領の純一は新たに一軒の戶主となり、自分の取る金で兎も角も母を養ふといふ事に誇と滿足を感じてゐた。

從弟達の新しい住居は郊外のHにあつた。

七月の中頃、私ははじめて從弟達の家を訪ねた。私は前に純一から其家への委しい道順を書いた手紙を貰つてゐた。それは或る郊外電車をH停留場で降りると殆んど一本道だつた。だが、私は電車を降りると、ふと脇道をして行く氣になつた。私は其土地には前にたつた一度來た事があつた。それも夜だつた。年上の女の友達と或る人の家を訪ねた。私は其番地をよく覺えてゐた。私は家々の表札の番地數を見い〳〵歩いて行つた。

片影の出來てゐる頃ではあつたが暑かつた。私は汗をふき〳〵歩いて行つた。番地は入組んでゐて中々分らず、何丁か私は歩いた。やう〳〵目的の番地を探しあてゝ、私は友達と曾て訪ねた家を何年振りかで見た。其家は主の人が日本にゐず、洋館の外側が所々くづれてゐた。庭の草もあれてゐた。私は其家の前を通つてから直に從弟達の家の番地へ出られるものと思つた。所が中々出られなくなつた。竹籔のやうな所へ出たりした。ぐる〳〵廻り道をしてやう〳〵從弟達の家に着いた時には日はもう暮れかゝつてゐた。叔母が家の前に水を打つてゐた。上の從弟達はまだ歸つてゐなかつた。下の從弟の良三だけが、玄關脇の三疊で机に向ひ、ラヂオを組立てゝ試驗してゐた。私は叔母について町の公設市場へお夕飯のお菜を買ひに行つた。さうしてゐるうちに、純一や善次もつぎ〳〵と歸つて來た。

「よく來ましたね。」純一は大人振つた物の云ひ方をした。

「道に迷つて分らなかつた。」

「停留場からは一本道ぢやありませんか。」

地圖を書いてくれた純一は變な顏をした。

「一寸、脇道に入つたら、さあ、分らなくなつて……。」さう云つたが、私は脇道の理由を純一達に云ひにくゝ、赤面した。

從弟の家の前は私が先刻歩きながら見た竹籔の後だつた。竹籔に沿うて細い坂道があり、其坂道の丁度崖下に當るやうな所にトタン屋根の新建の家が四五軒かたまつてゐ、純一の家は其一つだつた。裏は二軒の家の間の細い道を出ると直ぐ原で、原の向うは雜木の丘だつた。

「靜かでいゝぢやないの。中々いゝわ、こりやあ。」さういふと、純一は、

「いや、よくないんですよ。屋根がトタンですから、それこそ、夏はトタンの苦しみなんです。」といふ。純一は洒落が好きだつた。

「それに前が竹籔で蚊の多いこと〳〵。さうして夜は御覽の通り淋しい所ですから、ムツテルなんか一人でお湯へも行けないといふ始末なんです。」

叔母が夜お湯へ行く時は、從弟の中の誰かが附いて行くのであつた。

「家に待つてゐるのだつて、一人ぢや怖いといふ風なんだから。」と叔母は云つた。

「さういへば、道で、泥棒を要心するやうにといふビラがチヨイ〳〵はつてあつたわ。」

「さうなんですよ。實に物騷な土地なんですよ。なんでも早くM町を出たいといふのでこんな所へ來たんですが、此處には永くはゐられないと思つてゐるんです。」

純一はスツカリ一とかどの家の主らしくなつてゐた。純一はそれが得意らしくあつたが、それは私を淋しくさせた。私が小さい時からあれ程までにも愛して來た純一、(私の「純ちやん」といふ言葉は私の母校友達の間には有名だつた。)美しく、上品で、氣だてがいゝと私の自慢だつた純一が月給四十何圓かで母と弟二人と暮し、二十三といふ

若さで平凡な一戸主となつて甘んじようとしてゐる……。

從弟達は叔父の家を出る時、飼犬のジョンも一緒につれて來た。善太は洋服を和服に着かへると良三と一緒に外へ出てジョンをからかつた。二人はジョンを相手に家の廻りをグル〳〵驅け廻つた。犬はハアハア云ひながら二人を追ひかけ飛びついた。私は從弟達が朴歯の日和ですべらなければいゝがと心配した。又ジョンが餘りハア〳〵云つてゐるので、本氣になつて從弟達にくひつきはしないかと、聲を出してハラ〳〵した。

「大丈夫ですよ。くひつきはしませんよ。」

善太と良三は左う云つて止めなかつた。ハアハア笑ひながら一生懸命に飛び廻つてゐる二十一と二十の從弟達を見て、私は、「矢張りまだ坊ちやんだな」と思つた。純一は大人らしい苦笑を浮べ、弟達の動作を見てゐた。

ジョンは形はいゝ形をしてゐたが、何だか感じが緻密でなく、私は好かなかつた。

「エチはいゝ犬だつたわね。」と私は純一に云つた。エチは以前叔父の家にゐた犬で、ずつと離れた郊外の或る家へやつた所、一年位かゝつて叔父の家を尋ね〳〵て歸つて來た。「ジョンは形はいゝけど、好かないわ。」

「犬でもそれ〴〵違つた表情をしてゐますね。ジョンは實によくA町の床屋の主人の顔に似てゐるんだ。と云ふより床屋の主人がジョンに似てゐるといふ方が當つてゐるんでせうか。それからまた此處へよく遊びに來る犬で黒といふのがあるんですがね、それがまたB――といふ大工さんにそつくりなんです。」

御飯をすませると、叔母が私達に「お湯へ行つて來たら」と云つた。叔母は留守番をしてゐるといふ。外はもう眞暗だつた。從弟三人と私は懷中電燈を持つて出かけた。私は其日泊りがけのつもりでなく寮を出て來た。（私は父の家にゐず、主として母校の卒業生の爲にたてられた或る寮にゐた。）泊る事を電話でことはらねばならなかつた。自動電話は郊外電車の線路の向うまで行かなければ無かつた。私達は私が先刻叔母と買物に行つた公設市場を通りぬけ、線路を越えた。電話をかけ終ると、再び暗い道をお湯屋のある町の方へと歩いて行つた。私達は何の拍子からか、死後の靈魂といふやうな事を話してゐた。

「僕はどうしても靈魂は不滅だと思ひますよ。」純一は熱心にさう云つた。私も純一程さうハツキリと其事は信ぜられない氣がしたが、併し、最近友達からきいた話や新聞で讀んだ記事などから、さういふ事の實例になりさうな話を從弟達にした。從弟達も各々さういふ話の持合せがあつた。きりがなかつた。私は暗い道でさういふ話をしてゐる事が氣味悪くなつて來た。

「何だか、恐い氣がして來たわ。やめませうよ。」

併し、純一はまだ話し足りぬ面持ちだつた。純一がそれ程其話に熱心だつた事は不思議に強く私の頭に殘つた。

純一兄弟は共に家を出る前から土地のお湯屋の自慢をしてゐた。事實、お湯屋は新しく建てられ、脱衣場には煽風機があり、小庭も附いてゐ、流し場は大理石か何かでしきつめられ、男湯と女湯の境の石の壁の上にはいろ〳〵の草花の鉢などおいてあつた。東京市中のお湯屋に先きだつて震災後の新浴場令に基づいて建てられてあつたので、從弟達が自慢するのは無理もなかつた。私は、從弟達を待たせてはと思つて、早く外へ出た。從弟達は中々出て來なかつた。女湯から、男湯から、次々と來て來る人達が、お湯屋の前の薄暗がりに一人立つてゐる私を不審氣な眼で見ながら通りすぎた。そのうち、やつと義次と良三が出て來た。

「純ちやんは？」と訊くと、

「大きい兄さんは頭を洗つて、丹念に櫛でとかしつけてゐるのです。」と從弟達は答へた。

「隨分長いお湯ね、驚いた。」と私は云つた。從弟達は私の方が長いものと思つて幾らかゆつくりしてゐたらしくもあつた。大分經つてから純一は出て來た。純一は弟達にひやかされた。

「秤で目方を計つてゐたんだ。」と純一は答へた。つまり男の脫衣場には秤もあつたのだ。

歸りは廻り道をし、來た道とは別の道を行く事にした。道は少し行つた所で二つに分かれてゐた。左りは其爲に私が道に迷ふやうになつたあの番地の方へ續いてゐた。私達は右へ折れた。其處からは全くの住宅地で暗かつた。大きな邸の門の中からピアノの音が聞え、私達は話をしてゐながら習慣的に一寸立止まつたりした。住宅地がつきると道は傾斜をし、原へ向かつて展けてゐた。原の向うは、例の叔母の家の裏に見える雜木の丘の續きである。傾斜の下は畑に沿うて道が右へ折れてゐる。私達は其畑に沿うた道に立ち、原や丘や空を眺めた。星が綺麗だつた。純一は二三年前月や星の話に凝つてゐた。私は其事を思ひ出し、純一に星の名を訊いた。純一は「あれが大熊座、これがヴヱーナス」と指をあげて指し示した。まはり全てから虫の音が起り、螢も時々私達の傍をよぎつた。純一、良三、私とかたまつた空を見上げてゐる間に、義次は一人離れて、手拭ひを片手にさげながら、畑よりの電信柱に身を寄せてぢつとしてゐた。

「何してゐるの？」と訊くと、

「電信の音を聞いてゐるのです。」と義次は答へた。

家に歸ると義次と良三はマンドリンを取出し、合奏をはじめた。

「どうも直ぐこれだから困る。下手な音をガチヤ〳〵云はせて。少し遠慮してくれないか。夜でも靜かに休まうと思つてゐるのに、どうも左う耳許でガチヤ〳〵やられちややり切れない。」と純一はブツ〳〵云つた。純一はそれを心から不平に思つてゐるのではなく、戸主としての意識から左う云つてみたいのだといふ事は私に分つたが、併し、背を丸くし（純一は少し猫背だつた）、變に年寄りじみた調子で左う云つてゐる純一に私はいゝ感じを持たなかつた。私は純一に青年らしさの

なくなる事が淋しく、氣を重くさせられた。
　裏の原で螢がとれるといふので、私は叔母と出てみた。純一も後から來た。私はまた星の話を純一に訊いた。さういふ話をしてゐる時は、純一は矢張り美しく青年らしかつた。蚊がひどいので直き家へ入つた。善次と良三は體を振つて拍子を取りながら、まだマンドリンを彈いてゐた。
「もういゝかげんにやめて、四人で何かして遊ばないか」と純一は云つた。二人は直ぐ止めた。トランプを出して遊んだ。ツー・テン・ジヤツクなど暫くやつてやめると、純一は、
「かういふ獨り占ひは知つてゐますか」と云つて、私のまだ知らない占ひ方をしてみせた。
「占ひなら、私もやつて貰はうか。」
　そばで片づけものをしてゐた叔母が云つた。
「お母さんのですか、」左う云つて從弟達は笑つた。「これは主に戀愛問題を占ふんですよ。」
「オヤ〳〵。それぢやあ、善次の畑だね。」と叔母は云つた。「善次のあの人を占つて御覽。」叔母は子供達のさういふ問題に對してサバケてゐるといふ事が得意でもあつた。
「仕樣がないな。どうもから親が不良では。」善次は左ういふ話が私に知れるのをきまり惡がつて頭をかいた。「それよりも兄さんのをした方がいゝや。」
「へえ、純ちやんにもそんなロマンスがあるの？」私は善次のは内々知つてゐたが、純一の事は知らなかつた。「みんな、それ〴〵なのね。」私は純一に對して輕い嫉妬を感じながら云つた。
「うそですよ〳〵。」純一は赧くなつて打消した。
「僕だけが不景氣なんですよ。」と良三が云つた。
「さうだね。良三はまだないやうだね。」と叔母が云つた。良三は叔母のペットだ。
　叔母の其云ひ方で、私は純一の事が本當である事を知つた。私は自分を振返り、從弟達も大きくなつたのだから左う云ふ事のあるのは自然だと考へた。
「僕が諸君のロマンスを占つてあげよう。公平な立場からね。」左う云ひながら良三は兄達のを占つた。純一も善次もひやかし半分のやうな顏をしながら、そのくせ充分の興味と關心をもつて占ひの結果を聞き、肯定したり否定したりした。
　トランプにも倦きると私達は雜談をはじめた。良三はラヂオの時報をきく爲、三疊へ退いて受話器を頭につけた。其時分はまだラヂオは一般的になつてゐず、演藝放送など無かつた、純一と善次は會社の話、銀行の話などを私にした。
「うちの會社でね、北海道の方の工場にゐる職工を慰安する爲に雜誌を出してゐるんです。それに載せる小說が無くて困つてゐるんですが、どうです、書いてみませんか。」と純一は私に云つた。

「私が？」
「少しですが、原稿料は出しますよ。僕に書いてくれつて頼まれたんですが。」
「私には書けさうもないわ。それより、純ちやん、書いたらいゝぢやないの。」純一は時々小説のやうなものを書いてゐたので私は左う云つた。
「いや、僕には左ういふ職工に分るやうな物は書けませんよ。あゝいふ人達に讀ませるには矢張り通俗的な物でないといけませんからね。一つ、お願ひしませう。」
「まあ、書けたら書くけど、私にも六ケ敷いわ。」私は左う答へるより外無かつた。私は心の中で苦笑してゐたが、純一は眞面目だつた。
純一は京橋の或るビルヂングの五階にある會社に勤め、善次は神田驛近くの銀行に出てゐた。善次の取る月給の額も四十圓そこ〳〵だつた。唯、善次の方は其外に晝食のパンと牛乳が銀行から出た。純一はお晝は大抵附近の公設食堂へ行つてすませるとの事だつた。
「純一は家にゐても、そりやあ儉約してゐるんだよ。」と叔母が云つた。從弟達は以前は隨分私の眼から見ると贅澤と思はれる生活をしてゐた。
「純ちやんや善ちやん達のお友達はみんなどんな所に勤めてゐるの？」と私は訊いた。みんな似たりよつたりだつた。
「××ね、あいつ、今、××省へ出て羽振りがいゝさうだぜ。」純一が三疊の良三に聲をかけた。
「さうかい？　××は頭は良かつたからね。いつも組長をしてゐたからな。」
「誰？　良ちやんの組の人？」と私は言葉をはさんだ。
「さうなんです。大變に小さい男でね、だが頭は大變によかつたんださうです。」
「そりやあ、小さい男でしたよ。僕の方の學校ぢや、組長は行軍の時に鐵砲は持たずにサーベルをさげるんですがね、其サーベルが地面にひきずれるので、其男はいつもサーベルをたくし上げるやうにしてゐたんです。」と良三が説明した。
「あいつはどうも社會主義らしかつたね。矢張り、あゝ脊が低い事や何かからひけ目を感じる事が左うなつたんだな。」と純一は不氣な調子で云つた。純一は社會主義といふものを全然自分から遠い物に考へ、悪いものと頭からきめてゐて疑はないらしかつた。純一の年頃で、そして純一の境遇で左ういふ考へ方をしてゐるといふ事は私に寧ろ不思議な感じをさせた。
「だが、純ちやんはいつまでも今の儘の考へでゐるだらうか？」左う私は心の中で思つた。
翌朝、私は從弟達と一緒に出て下町へ廻り、洋行する知人への贈物を買はうと思つてゐた。善次は支度が出來た。が、純一はまだだつた。善次は八時十五分前位までに銀行へ行つてゐなければならなかつた

が、純一は九時が出勤時間だつた。私はどちらと一緒に出ようかと迷つた。
「どう、一緒に出ますか？」と義次は訊いた。
「さうね。」義次と出ると純一に惡く、さうかと云つて純一の爲に殘ると、一緒に出るつもりでゐた義次に惡い氣がして困つた。
「みいちやんは別に時間があるわけぢやないから、そんなに急がなくてもいゝぢやないか。義ちやん、先へ行つたらいゝぢやないか。」純一は不滿さうな顏をして義次に云つた。私もさう云はれてみると純一の方と一緒に行かうと思つた。
「ぢや、御機嫌よう。多分、もう秋までは會へませんね。」義次は左う云つて出かけた。私は義次を一人出かけさせる事がすまなく、窓の所に立つて見送つた。線路に沿うた傾斜を上つて行く、アルパカの洋服を着た義次は青い竹の葉の反射を受けて顏色が惡く、姿も細く頼りなげに見えた。
　純一は私が殘つたので滿足らしかつた。機嫌のよい顏をして、靴下をはいてゐた。靴下はつぎ〳〵だつた。叔母は私に、「純一はいつでも一番惡いものをとる。」と云つた。かりに、ネクタイが三つあるとすると、義次や良三が其中でよいものを取り、純一はいつも殘りのを不平も云はずに取るし、靴下なぞも、義次達はどん〳〵いゝのを引出してはいて行くのに、純一はつぎだらけのでも平氣ではいて行くといふのだ。
私も、純一が私と一緒に出るのを喜んでゐるといふ事を知ると嬉しかつた。純一の支度が出來ると、私達は出かけた。
郊外の夏の朝の空氣は氣持よかつた。
「かうして、毎日朝早く電車まで歩く事は體にいゝわ。」と私は云つた。
「さうです。それがせめてもの我々郊外居住者の慰めなんですよ。」
「どう、此頃は歌の方は？」
「相變らずですね。其中にまた見ていたゞきませう。僕の會社にはね、歌の好きな連中が多いんですよ。社長の奥さんが第一歌人ですからね。從つて會社の中でも左ういふ趣味が盛んなんです。」
「さう。まはりの人達が左ういふ風だと、純ちやん、いゝわね。」
「さうなんですよ。まあ、僕なんか運のいゝ方だと思ひますよ。仕事は樂だし。まるで遊んでゐるやうなものですからね。義ちやんの方なんか、そりやあ大變なものなんですよ、忙しいと云つたら。友達なんかも僕を會社に訪ねて來てみたりして、僕がひまさうにしてゐるんで羨しがつてゐますよ。」
停留場近くに來た時、純一は、
「僕等はこゝいら邊に一寸したコーヒー店でも開いたらと思つてゐるんですよ。氣の利いた店にしてね。」と云つた。「ムッテルは花屋もいゝだらうと云つてゐるんですがね、僕は一方でお茶など飲ませ、其傍花を賣つたらと思つてゐるんです。さうすれば僕達は會社をやめて花をつくるんですね。店の方はムッテルにまかせて。僕も會社は早晩や

めたいんです。會社にゐてもいつまでも同じですからねえ。此文房具屋ね、此店は僕達が越して來た時に此處に店を開いたんですがね、中中此頃は繁昌してゐるんですよ。僕と同じ位の年の人が主人なんです。矢張り、學生上りらしいんですよ。」

郊外電車を驛前で降りると私達は省線電車に乘りかへた。純一は元氣で話を續けてゐた。朝の勤人らしく、手に薄い經濟雜誌など持つてゐたが、私と一緒で讀めもせず、くる〳〵手の中でまいたりほぐしたりしながら話し續けてゐる。

純一はいつもは東京驛で降り、其處から歩いて行くか、又は遲れさうな時は乘合自動車を利用するかであつたが、私が神田驛で降りて善次の銀行を一寸のぞいて見ないかと云つたために同意して、まだ時間も早いからと云つて、一緒に神田驛で降りた。

善次の銀行は震災で燒けて、本建築にとりかゝつてゐる傍、側のバラック建てで執務してゐた。一寸ドアをおして入ると、まだ營業時間になつたばかりで、客は無く、向うの奧まつた所で、善次は支配人らしい人の前に立つて嚴肅さうな顏をして何か命令をきいてゐた。私達はニヤ〳〵笑ひながら入口に立つて、善次がこちらを向くのを待つてゐたが、善次は中々氣がつかなかつた。出納口の係の人が私達をぢつと見てゐるので、私達はそこを出た。

純一は其處から電車に乘れば一本道だつた。私は途中で降りた代純一に少しでも餘計なお金を使はせる事がすまなく、丁度一枚きり殘つてゐた市内電車の切符を無理に渡した。が、其儘別れる事は何だか物足りなかつた。私は數日のうちに山へ行く事になつてゐた。歸京するまでの一と月と幾日かの間が私には大變に永いものに思はれた。私は純一にアイスクリームでも御馳走して別れたいと思つた。

「何か、飲まない？」左う私は純一に云つた。

三越の前を通つたが、私は何だか、入りつけない所で、しかもまだ朝なので、はいりにくかつた。三越へ入つてみた。食堂を覗くと、眞白いエプロンをかけた給仕の少女達が、あちこちに立つて話をしてゐた。テーブルかけの白さや、室の入口の鉢物の葉の青い色が清々として目立つた。私に純一の先になつて入りかけたが忽ち引返した。どうも間が惡かつた。

「困つたわね。まだ、時間が早すぎるから。どこか無いかしら。」

「いゝんですよ。僕は別に何も飲みたかないんですよ。」純一は左う云つたが、私は、それでもまだ、思ひ切れなかつた。私達は白木屋の方へ歩いて行つた。白木屋についてもまだ時間が早すぎた。私達は京橋まで歩いてしまつた。純一の會社の前まで來た。

「つまらないわね、此儘別れるのは。」私は秋までの間に純一か私の身の上に何か惡い事が起りさうな氣がしてならなかつた。

純一も別れにくさうに默つて考へてゐたが急に元氣になつて、

「ぢや、かうしませう。僕、一寸、出勤簿に印だけおして來ますからね。さうしたら、此近所で何か飲んで別れませう。ね、いゝでせう。」

直ぐ來ますから。」と云つた。

「いゝの？　直ぐ出て來たりして。」

「いゝんですよ。みんな、よく、さうするんですよ。」左う云ふと、純一は私をおいて、電車道の向うへ駈け出して行つた。ビルデングの入口の所で純一は帽子をぬいでお辭儀をした。同僚の人に出會つたのだ。何か笑つて話しながら其人と一緒に入つて行く。私はビルデングの階下にあるT呉服店の雜貨部へ行つた。

暫くすると、純一は階上から降りて來た。

「いや、お待遠樣。」さう云ふと純一はずん／＼先に出て、電車道をこえて向う側へ行つた。

「純ちやん／＼。何だか、矢張り、心配だから、やめとくわ。」私は純一の後から聲をかけた。

「大丈夫ですよ。此横丁を曲つてしまへばわかりませんよ。」純一は立止まつて私に云つた。

「いゝのよ。それ程までにしても別に飮みたくはないのよ。唯、何だか、あんまりあつけなく別れるのがイヤだつたものだから左う云つたのよ。社の人にでも運惡くみつかつたりしてもいけないから、やめときませう。」

「大丈夫ですよ。わかりませんよ。」

「でも、何だか、心配しい／＼飮んでもつまらないわ。」

「さうですね。──ぢや、からしてくれませんか。みいちやんはこれから買物をするんでせう。さうして十二時頃にまた此處へ來てくれませんか。さうすれば僕は大威張りでお晝に出られますからね。辛ずしをおごりますよ。」

「さうね。さうしてもいゝけれど……。」

「ね、いゝでせう。さうして下さい。ね。」

「だけど、何だか、それもおつくうね。」

「さうですか。もし、みいちやんが迷惑でなかつたら……。」

「來てもいゝけど、でもね……。」私は日本橋へ引返して榛原で扇を買つて贈物にしようと思つてゐた。それからお晝までの何時間、暑いのをブラ／＼してゐるのは一寸重荷だつた。

「まあ、ぢや、今度はやめておくわ。考へてみれば、たつた一と月の間なんだから。また、ぢきに會へるんですもの。」

「そりやあ、さうですね。」

「歸つて來るまで、アイスクリームはお預けにしときませう。ね。ぢや、これで今日は歸るわ。純ちやんも體を大事にして。さうして、若し來られるやうだつたら、Sへも遊びにいらつしやい。」

「えゝ、ありがたう。だが、十中九までは行けませんよ。此間、休みを取りましたからね。みいちやんも體を氣をつけて、元氣で歸つていらつしやい。」

「ありがたう。ぢや、もう、社へ歸つた方がいゝわ。」

「さうね。ぢや、さやうなら。」

純一は再び向う側へ駈けて行き、ビルデングの中に姿を消した。私はそれを見送つてから日本橋へ引返した。

それから二三日して私は山へ行つた。八月の末東京に歸つて來たが、私は純一とは其後會はなかつた。さうして、私は十月の末、京都へ旅行した。それは樂しい旅行だつた。「樂しさの雜誌みたいなものだ。」左う、私は其旅行中、思つた。然るに歸つて來ると純一から手紙が來てゐた。

「其後は隨分久しい間御無沙汰致してしまひましたね。お許し下さい。もう京都の地よりお歸りの事と存じて此手紙を書きます。例によつて亂筆ですから惡しからず。御歸京後も相變らず御元氣の事とは思ひますが如何にや御近況をお洩らし下さい。先日は××展覽會の切符をありがたう存じました。殘念ながら僕は行かれませんでしたけれど切符は無駄にしませんでした。何しろ近頃身體を些か損ねた上に忙しいものですから方々へ手紙も出せない位なので折角の切符でしたが行かれる方に呈上して其方に行つて貰つたのです。胃腸を害して居る上に風邪氣で苦しんで居ます。然し勤めの方はどうにか出て居ります。其點は御心配なき樣。風邪氣を押して朝夕の寒い風に吹かれて混み合ふ電車やあの薄ぎたない圓太郎自動車にしがみ付いて通勤する時には少からず悲哀を感じさせられます。つく〴〵恒産のない僕等所謂洋服細民の辛さを思ひます。わづかの金のために時間から時間を机にかぢり付いて居る僕等サラリーマンの生活てふものの淋しさを一しほ味つて居ります。僕はあまり病氣もせず可也丈夫だつたのですが近頃一寸した寒さにも善次に劣らず參るので自分の身體がもどかしくて仕方がありません。一體に虛弱になつたのでせう。身體が資本の僕等にとつて風邪をひきやすかつたりお腹をこはしやすかつたりするのは一大打擊です。これからもつと〳〵注意するつもりです。住宅の方は一先づHを引拂つてSへ移る事にしました。物質的經濟のためにHからSの田園へ轉じます。力なきものは絶へず壓迫を受けます。追はれ〳〵て落付く處は淋しい片田舍位でせう。僕等は郊外に住むで×××郎式に土に親しみ自然に接するなんて事は仲々出來さうになく不便な郊外に居を構へ往復の惡道路と通勤の運賃と時間とをかこつ位が落ちでせう。こんな事を考へると去年あたりの不景氣さが淡しくも思はれます。然し何時までもみじめな生活は續けないつもりです。必ず餘裕のある生活をする覺悟です。今の此境遇は得難い體驗と思つてゐます。愚痴を並べて居る場合でなくもつと〳〵物質的にも精神的にも苦しみより一層考へ人間として立派に生きて行かなければならないと存じます。人間は苦しまなければ駄目だと思ひます。苦しい中にもまれて終に玉のやうに圓滿な人格思想が生れるんではないでせうか。僕はさう思つてゐます。より一層苦境に泣く事を豫想してゐます。必ずや今の此苦惱に報ゆる何かを神樣は惠まれる事と信じてゐます。虫のいゝ考へ方かは知りませんか。家庭的に生計の安定を得る事と社會的にもちつと立上

る事が僕等の望みです。何時までも一介のサラリーマンでは居ない決心です。決心だけは素的ですが其迦り行けばと案じます。

もうやめませう。今日此頃はゐてこんな愚痴めいた話に終りやすいのです。悪しからず思召下さい。

御近況を是非お洩らし下さい。下つて母はじめ弟達はお蔭様に達者ですから御休神下さい。皆それ〲今後の方針てふ事に考へ疲れて居ります。然しまだ〱倒れないつもりです。

久方ぶりですが一昨日作つた即興的な愚作を些か御覧に入れませう。お笑ひ草です。

啄木は病と貧にたほれたりわれの行末彼に劣らん

些かの寒さに頭重くなるわれとわが身のもどかしきかな

親しかりしOさへわれと離りゆくわが生くる力弱ければならん

(Oとは某會社に居る元親しかりし友)十月卅日午後　社の机にて咳しつゝ

純一　拜

姉樣へ

其手紙は私を淋しくさせた。卅日といへば私が丁度京都からの歸途奈良へ廻つて法華寺を訪ねた日であつた。曇つた日であつたが、途中ひろ〲と打續く大和平野に畑のあちこち又はくづれかゝつた土壁の中などに赤い柿の實が點々としてゐた。私が左うした美しい奈良の郊外の道を歩いてゐる頃、純一は會社のお晝休みを利用し、此手紙を書いてゐたのだ。私は、自分の旅行が常になく樂しいものだつただけに純一の事を忘れてゐた事をすまなく思つた。だが、純一が希望を失はずにゐるらしいことがまだしもだつた。

一週間ばかり後の夕方、私は用事で父の家へ歸つた。すると純一も私の後から來た。純一は會社の歸りに寄つたので、二三日前引越しをした、其時のトラック代の立替を父に返しに來たのであつた。純一は力のない咳をしてゐた。お腹をこはして困つてゐると云つた。私は、丁度其處に胸の悪い人が來合はせてゐたので、純一をなるべく其人の前に向かせまいとした。だが、其人の病氣を知らぬ純一は何かと愛想よく其人に話しかけた。純一は直ぐ歸つた。

それから四五日して再び私は父の家へ行つた。長火鉢のそばで母と話をしてゐるうち、母がふと聲を落し、

「さう云へば、お姉さん、M町のお兄さんが大變な事になつたのですよ。」と云つた。

「どうしたのですか?」私はドキッとした。私は純一が會社のお金でも使ひこんだといふのではないかと思つた。

「血を咯かれたのです。」

「えつ?」私は今何ときいたのか?

「會社で咯血なさつたのです。」

純一が血を咯く、私のあの純一が血を咯くなんて事があり得やうか。

私は呆然とした。私は、あの純一のけなげな手紙をつい數日前讀んだばかりではないか。純一はあの手紙の中に「神樣はきつと何物かを報ひてくれる事と思ふ」と書いてゐた。神樣は純一に何を與へたといふのか。

そこへ父が二階から降りて來た。

「純ちやんが咯血したつて本當ですか？」私は父に向つて訊き直した。

「本當だ。どうしてあんな病氣になつたのかね。あの子は病氣など殆んどしなかつたぢやないか。何しろ困つたものだ。」父は火鉢の前に坐りながら暗い顏をして云つた。

「きつと、公設食堂なんかで粗食したり何かしてゐたからだわ。」私は左う云つたが、悲しくて／＼ならなかつた。涙が後から／＼せき上げて來た。

「何しろ境遇が急に變つたからねえ。」と父は云つた。

純一は二三日前（それは十一月の十三日であつたが）、お晝、いつものやうに外へ食事をしに行つて歸つて來、エレベーターに乘らうとずるはづみに咳をし、咯血した。びつくりして其儘エレベーターに乘つて五階へ上つたが、自分の席につくと再び咯血をした。會社の人達は驚いて早速保證人になつてゐる私の父の弟に當る叔父の所へ電話をかけた。叔父は自動車に乘せて純一を引取つて來たが、直ぐ動かしてはといふ純一の家のかゝりつけのお醫者の言葉で一と晩叔父の家にねかせ、落着くのを待つてＳへ返したのだと云ふ。

私はもうみえも外聞もなかつた。父と母の前でしやくり上げた。泣いても／＼泣き足りなかつた。私は、此間の旅行が餘りに樂しく、何か其反動がなければいゝがと思つてゐた。神樣は其反動に純一をつかつたのであらうか。

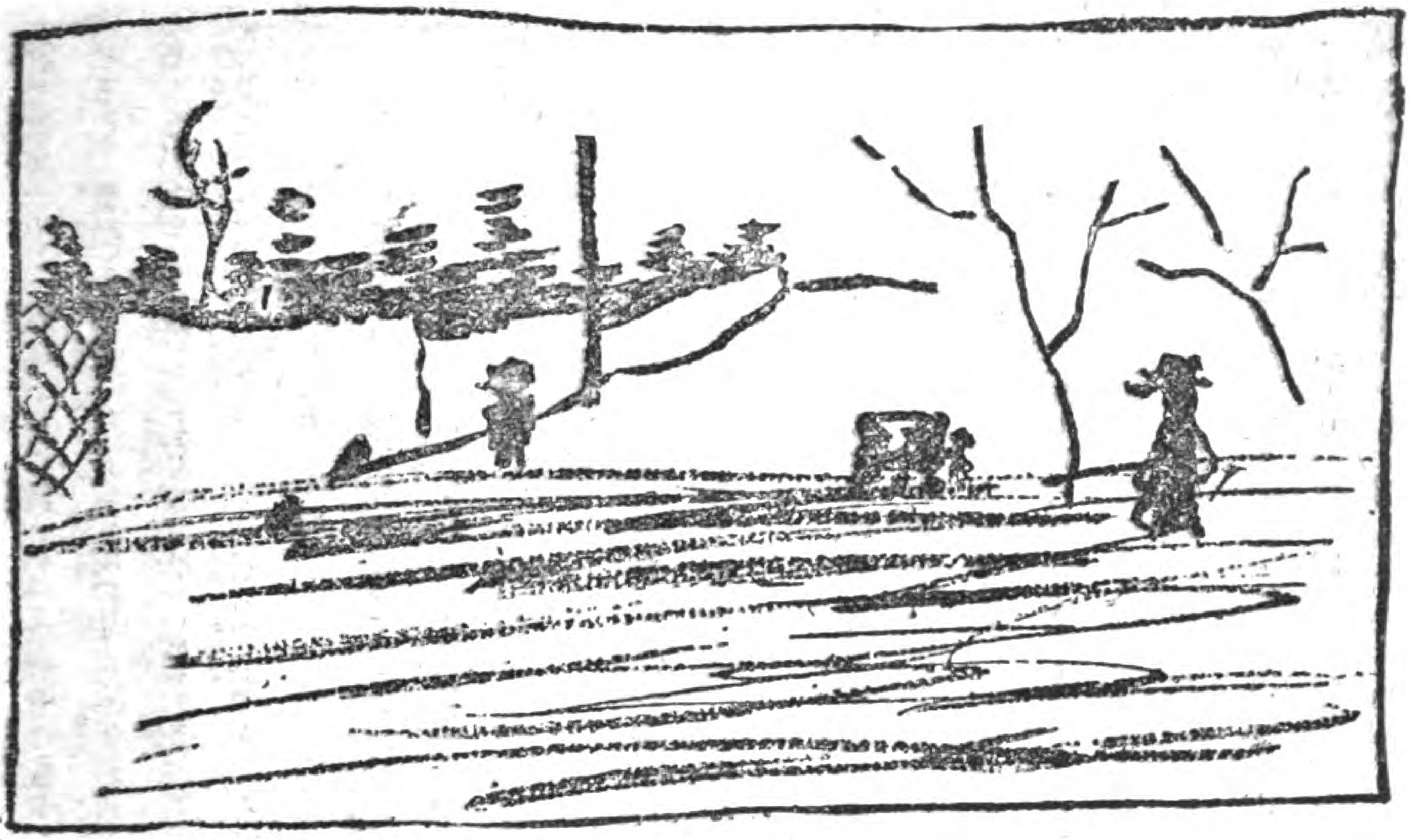
「でも、治る事は治るんでせうか。」私は泣きながら父に訊いた。

「さあね、何しろ、年がわるいからね。」

「でも、どうにかして助からないでせうか。」私は繰返して云つた。

「まあ、お金と根氣の問題だと××さんは云ふけれどね。どつちにせよ。困つた事だ。」

純一の病氣はさしづめ父達の負擔になる事は分り切つてゐた。私は、父がこれを苦痛に思ふ事を恐れた。お金と根氣で純一の病氣が治るといふのなら、どうにでもして治させたかつた。私はいつまでも／＼父の前で泣いてゐた。私は泣きながら、「こんなに私が泣くのを見たら、お父さんは私の爲にだけでも、きつと純一の面倒を充分に見てくれるに違ひない」と思つた。私はそんな考へ方をするのはいゝ事ではないと思つた、だが、一方、純一のためなら、それもまたゆるされる氣がしてゐた。（昭和二年五月）



長篇

夢殿

中里介山

小引

前回には主として、鳥佛師と秦河勝の問答を書き、鳥佛師の描いてゐる天人の繪が、崇峻天皇の嬪に召されて、東漢直駒と私してゐた蘇我の石河の郎女に酷似してゐることを河勝が不審とし、そこで一場の議論となつたが、歸る時、河勝は斑鳩の里の夕暮に、法隆學問寺の堂塔伽藍の聳ゆるのを深き感激にながめて立つ處までを書いた。

今回には主として聖德太子の舍人調使麿を出し、調使麿が太子の愛馬の烏の駒を太子生誕の地なる橘寺から牽き出して、飛鳥の都より斑鳩の里へ急ぐ門出の情景をうつしてゐる。挿繪は橘寺の石刷と法隆寺所藏の古彫とを參考として著者の描いたものである。

第二回

橘寺の西門の左近右近の間から烏の駒を引き出したのは舍人の調使麿である。

調使麿は十四歲の童子で、聖德太子お氣に入りの唯一の舍人――といふことで、今日まで大よその繪傳は通つて來たが、戸籍面はそれでは通らない。

調使麿を一つには調子丸とも書いて、字面そのものが、小冠者を思はせるし、畫面としても太子のお傍去らずの舍人に水干の美少年を添へることが賢こい。併し、戸籍面の正しい處は必らずしもさうでない。この調使麿こそは、實に聖德太子より五歳の年長であらねばならぬ。この舍人が、上宮太子のお傍去らずになつたのは、太子に於かれては十三歳。調使麿に於ては十八歳の時である。それは父君、用明天皇と母君間人の皇后との御議で、蘇我の大臣が立合の上で、その時、百濟から渡つて來た調使麿を太子の前に呼び

今より後は、厩戸王には汝獨り常に隨ひて離れざれ

との親しき御沙汰があつての上なのだから、此の主從の緣は切つても切れない。

そこで、調使麿の生涯は、この御沙汰通りに始終してゐる。

なほ、この調使麿の出身を、もう少し委しく調べて見ると。

調使麿ハ百濟國ヨリ來ル、追調使也

とある、ある者はまた

追調子ノ事ハ百濟ヨリ進調ノ時ニ、玄使具玄來故。太子調ト名クル也

ある者はまた

調子、百濟國ノ宰相、日本へ調ヲ進スル給沙汰人也、調宰相ト名ク、彼ノ子ナルガ故ニ調子丸トイフ也。

或はまた

彼ノ使ナルガ故ニ調使トイフ。

兎にも角にも、これは百濟より進貢の使者のうちから、太子常從の侍者として選まるゝに相當するほどの器量か材能かを備へてゐた若者には相違ない。

主從の緣は其の時から始まつて、太子の御最期を見送つて後、八十四歳まで此の舍人は生きてゐた筈である。八十四歳といへば人壽に於ては太子に倍するほどの齡であり、歷史に於ては、用明、崇峻、推古、舒明、皇極、孝德、齊明、天智の八朝に仕へて、藤原鎌足が大織冠を授けらるゝといふ年まで長らへてゐたわけである。

されば、この調使麿を童子として現はすことは、どの方面から見ても戸籍が許さない。まして此の時代は、まだ働き盛りの年配ではあるし、此の頃中、病氣をしたといふ事もあまり聞かないのだから多分、それは、息子の足人が、父に代つて烏の駒を扱う時にのみ、かりに舍人の位置にあつて、父の名を冒すものかと思はれる。

それに相違ない。家にある時は足人で、駒を索く時だけが調使麿である。

橘寺の西門を出でた調使麿は、やがて宮の下の山城街道を右に廻ると左に大和平原の一部が開けてゐるのを見た。

飛鳥川を渡つて、岡の村から、多武の峰道を右に見て飛鳥の大路へ入ると、天の香久山が眞向ひになる。

法興寺の塔が高いものだから耳梨と、畝傍が見えない。――そこで

彼は唄をうたふ。

ここは飛鳥の
豐の浦
いざ、さんざ
ここにて
花を
ながめやう――

生憎の事、四國の風物は唄の注文通りには行かなかつた。山は青いけれども、こゝから見たのでは花らしいものが無い。

彼は、ちつとも失望しない、いざ、さんざ、こゝにて花をながめやう、ながめやうと歌ひながら五町ほど歩いて來て

吉野のお山は花の山
花が無ければ只の山

と結んだ――

童謡はいつの世にも無いことはないが、これは、いい、おしとんどあたりの童謡と比べては調が新らし過ぎるではないか。山猿の童謡よりも、無論ずつと新らしい。近ごろは伎樂が盛んになる一方、童謡にも新らしいのが流行ると見える。

そこで、飛鳥の法興寺の門前まで來ると、調使麿は歩みをとゞめた。

これまで來る十餘町の間といふものは、ほとんど、誰にも行き逢はなかつたのは時刻が早過ぎたからである。だが、こゝへ來ると、もう寺では朝のおつとめが終つたと見える。調使麿は案内もなく鳥の駒を法興寺の門内に引き入れてしまつた。

丁度、その門内に青年僧が一人、帚を立にして頻りに庭を掃いてゐるのを見ると

『智堂さん、お早やう』

と云つた。

『やあ、足人の舍人か』

『足人ぢやない、今日は調使麿の舍人だよ』

『成程』

『智堂さん、この間の高麗笛を貸して下さい』

『よし來た』

『やあ、こゝばかりは花が咲いてらあ、さうして、こんなに花びらが落ちてらあ』

調使麿は帚目のこれからかゝらうとする露に濡れた庭の面を物珍らしさうにながめながら、その花の咲いてゐる一幹の櫻に駒の手綱をつながうとすると

『小舍人、およし、その樹へつなぐのはおよし』

『可けないの』

『それは墨染櫻だから』

『はゝあ、これも墨染櫻かい、橘のお寺にも墨染の櫻があるよ、あ

烏駒(クロコマ)と調使麿(ミツギマロ)

介山居士画かく



るけれど、あれはもう散つてしまつた』

『こゝのは、なか〳〵散らないよ、いやに壽命が長いんだ』

『壽命が長いのは、めでたい事さ、いやにと冠をつける必要は無からう』

『でも、此の通り、四方の櫻といふ櫻は、もう十日も前に散り果てゝゐるのに、それとほゞ一緒に、いつ咲いたかと思ふほど、ひつそりと咲いて、いつまで咲いてゐるつもりかわからない面をしてゐる、さうして、一日に一ひら二ひらと數へるほどしか散らない癖に、いつも此の櫻の下は落ちた花びらで埋もれてゐる。この薄墨色からして何だか氣味が惡いやうだ、同じ事なら駒を此方へつないで置いた方が宜からう』

『さうか知ら』

調使麿はその根元が、きれいに掃かれた別な葉櫻の大樹の下に駒をつないだ。

『待つてゐるで……今、高麗笛を持つて來て上げるから』

青年僧が伽藍の方へ行つてしまつたあとを調使麿は石の上に腰をかけて待つてゐる。

成程、見れば、墨染櫻が雫を落すやうに、一片二片づゝ、しつとりと落ちてゐる。木の下は其の花びらで一ぱいだ。

橘寺の墨染櫻は上宮太子が硯の水をこぼしてから、花が墨の色に咲き出したのだといふ。この墨染櫻は何の因緣だらう。どうも重い感じがする、人を惱ますやうな色だ。花は花らしく咲くことだ、まして櫻の花は花らしく咲くがよい。太子の御德を傳へる語り草の一つとして、橘寺に墨染櫻があるのはよい。他の處にさう幾つもありたくはない。橘寺に一本あればよいのだ。さまで遠くは無い此の飛鳥大佛にまで墨染櫻は要らない事だ。自然に生ひ立つたとすれば生意氣である。わざ〳〵移植したとすれば餘計な事である。

忌はしい花だ——と調使麿がながめてゐる時に以前の青年僧が錦の布に包んだ一管の笛と覺しいものを持つて來て調使麿に與へながら、

『小舍人、お前、難波の池へ人魚が出たといふ話を聞かないかい』

『人魚が——聞かない』

と云つて、調使麿は眼を圓くした。青年僧は笛を引ずりながら人魚話をする。

『昨晩の宵のうちの事だ、人魚が、一つ黑い髮の毛を引いて、ポカリとあの池の中に浮いてゐたのを現在見屆けた人がある』

『えゝ……人魚が、昨晩あの池に浮いてゐたつて、本當かい』

『嘘と坊主の頭は結はないといふ人が見て來ての話だから、信用していゝだらう、その人魚は先年近江の蒲生河で捕れたのと同じ位だつて……つまり、常の人間と同じ位の形なんだ』

『で、その人魚をどうしたえ、誰がつかまへたの』

『誰が捕まへたか、それまでは聞かなかつた、お前、あそこへ通り掛つたら容子を聞いてごらん、見られるなら見て行つたらいゝだらう』

「うん」

調使麿は、うなづきながら、高麗の笛を懐の中へしまひ込み、櫻の樹に立ち寄つて鳥の駒の手綱を解いた。

彼は再び駒を牽いて、法興寺の門を出たが、今朝は墨染櫻もいゝ感じがしないのに、人魚の話がまた忌だ。

おれは人魚なんぞ見たくはない。人間に近い魚だか、魚に近い人間だか、どちらだか知らないが、そんなものは見たくない。見たつて、不快な感じを與へられる外に何の益もないではないか。それよりは――

――と彼は懐から、さいぜんの高麗笛を取り出して壹越調で吹き鳴らした。

調使麿は成べく人通りの少ないのを見定めて、高麗笛を吹き出したのだが、大びらに吹いたからとて、咎める者は無い筈なのだが、何だか定まりの惡いものがある。

實は、この頃、櫻井の伎樂の少年達に抜擢を感じてゐる。いつぞや豐浦の大庭で伎樂があつた時、あの少年達の呉の舞を見せられてから、調使麿はそれが頭に殘つてゐる。殊に高麗笛を吹いた一人の少年の出來榮がすばらしかつたので、いたく上下の喝采を博して、身に餘る光榮で退出したのを見ると、なに自分にも、あの位には吹けるのだ。自分のは味摩之から教へられたのではない、父からの直傳だ、父の方が味摩之よりも傳習の系統は正しいのだ、といふ腹もあるものだから、つい、此の頃は吹いて見る氣になつたのだ。吹いて誰に聞かせるつもりもないが、吹き出して見るとやめられない。

競爭する氣に取られてもいやなのと、殊に上宮太子のお宮近くにゐて、これを吹いては恐れ多いといふ心から調使麿はそつと知己へ笛を預けて置いては、成るべく人に聞かれない時と處を擇んでは、それを吹くのである。一つは聖徳太子の御座所間近を恐れるのみではない、殿下がまた笛の名手でゐらせられるから、お聞かせ申すのが面はゆい感じもあるのだ。

斯うして彼は餘念なく高麗笛を弄して學んで行くうちに飛鳥坐神社の前を左へ折れて豐浦の宮の都大路を避けて、淸めの瀧の近い前まで來ると、

「小舍人様、お早うございます」

小川で物を洗つてゐた若い娘に先方から言葉をかけられたので驚いた。

「お早う」

そこで、少しばかり狼狽氣味で高麗笛を懐へ入れながら、

「あ、さう〳〵、姉さん、昨晩、難波の池へ人魚が現れたといふのは本當ですか」

「え、人魚が――存じません」

「知らない？　でも、たしかに聞いて來たんだが、先年、そら、近江の蒲生河で捕れたつて評判だつたらう、あれと同じやうなのが難波の池に」

『一向存じませんよ』
『おかしいね、この近い處にゐるお前が知らないで、却つて遠い處で噂をするなんて』
『難波のお池は直そこですもの、そんな事があれば、わたし達がどなたより先に知らない筈はございません』
『では、智堂法師、何か聞き違へたんだらう――それにしても』調使麿は首をひねつて暫らく考へ
『嘘と坊さんの髮を結つた事が無いといふ人が見屆けたんだといふから不思議だ』
『ホ、ホ、ホ』
と娘は笑ひ出した。つまり、嘘と坊さんの髮を結つた事が無いといふ、さゝやかな洒落に興を催したものらしい。それにも拘らず調使麿はまじめな面をして
『昨晩の宵のうち、難波の池の中に、人魚が一つ黑い髮の毛を長く引いてポカリと浮いてゐたのを、その嘘と坊さんの髮を結つた事の無いといふ正直な人が見屆けたといふ事なんだが……』
『その正直なお方はどなたですか』
『さあ、それは誰だか聞かなかつた』
『この近い處では、そんな噂は更にございませんでした。その位ですから誰も、あのお池で人魚を見たなどゝ申すものはございません、何かの間違でございませう』
『さうか知ら』
調使麿は晴れやらぬ面でまた歩き出した。人魚などは、どうでもいいのだが、それでも折角念を押されたのだから、一應たしかめて見る氣にはなつたが、聞いて見ればいよ／＼拍子拔の思ばかりする。
蒲生河の時も、評判ばかり聞いて、實地には見なかつた、見やうともしなかつたがあれは都に遠い處、小墾田の王宮眞下から、今時そんな化物の現はれやう筈が無いではないか。
だが、問題の難波の池は、つい目と鼻の先だ、先といふより早くも自分はその池のほとりを歩いてゐるのだ
可なりに廣い池の面、前面には向原の大寺、甘樫の岡、小墾田豐浦の宮殿が相並んで聳え、難波の池は、池といふよりも、その宮殿をめぐる堀江といつた方がよい。
調使麿は、怖いものでも覗くやうに、その池の面を隈なく見て通つたが、水は清冽で、底から藻が幾筋も浮いてゐて、岸には水草が立つてゐるだけで、心持、湖面が白く光るかと思はれるばかり、その他には何等の異狀がありさうにもない。ずる／＼と引き上げられた長い水藻が泥と共に畔道にこんがらかつてゐるのが、昨晩浮んだといふ人魚の黑い長い髮の毛の名殘と見れば見られるやうな心持でゾツとしたばかりだ。
先代の蘇我の大臣が、佛を信仰してこの向原の館を寺としてかしづいてゐた時、守屋の大連がこれを憎んで、火をかけて寺を燒き、佛像

を此の難波の池に投げ込んだ。その佛像が信濃國の義光の通るのを見かけて、池の中から呼びとめたといふ話。若しやと思つて調使麿は池のまはりをまわり込んで見たが、池の中から蛙一匹呼びかけるでもない。

豐浦の宮殿を左に見て、向原の大伽藍の右を廻つて、調使麿は、少〻の山路づたひに石河の池のほりへ出た。

石河の池は難波の池よりはズット厖い。難波の池は池といふよりは堀江といふのが當つてゐる。石河の池は見渡した處でも八町の面積はある。難波の池が豐浦の宮をはじめ、都大路を鏡としてゐるのに引きかえて、これは寂寞たる山野の中の池沼の面影がある。調使麿が、道芝の露を踏んで、烏の駒をいたはりながら通ると、雜木の蔭から村の子供が二人ばかり出て來た。籠を背負つて鎌を持つてゐる。朝草を刈りに來たのだ。

『あ、烏の駒——』

といつて二人の村童は足をとゞめて眼をみはつた。

『烏の駒——上宮太子のお馬だよ』

村童は知つてゐる。甲斐の國から牽られた烏の駒。數ある名馬のうちの名馬である。太子は馬については、雙びのない乘手におはするし、その吟味もなか〳〵やかましい。諸國貢進のうちから、御自身に選ばれた名馬。少くとも飛鳥の都から、斑鳩の里へかけては兒童走卒も、そのお馬を知らぬはない。それは推古天皇の六年春三月の事。太子は諸國に命じて善馬を貢せしめ給ふ。集まるもの五百疋。その中から此の烏駒一頭のみをとゞめて、他は盡く國へ歸し給ふ。

十八年の九月、太子が此の馬に乘つて斑鳩から飛鳥へ赴かるゝ途中、お馬があやまつてつまづくと、太子もそれを不祥に思はれたか、斑鳩宮へお引返しなさる、それより烏駒は草を食はず水を飲まず、耳を低れ、目を閉ぢて悔ゆるものゝ姿である。太子からお使があつて、宜しく草を食ひ水を飲むべしとお沙汰があるとはじめて目を開いて飲食を取ること常の如くになつた。といふのは有り得ることだらうが、東の方輔時に登りて三日にして還り、北の方高志の州に遊びて二日にして還るといふのは神靈化され過ぎてゐる。

産地は甲斐の國八代郡、美和の社の神馬といふ事になつてゐる。村童は、不意に、こんな處で、朝まだきに、名馬を見せられたものだから、その驚異と、それから、攝政の高貴のお乘物といふ敬意から、口を啞にして眼を皿のやうにしたが、その舍人が、自分よりは多くて三つ四つしか違はない小舍人だといふことが、馴染心を與へたと見えて、直に傍へ寄つて來て

『舍人さん、お早う』

『お早う』

村童二人は調使麿に從つて、石河の池のほとりを歩き出した。

『草刈かい』

『あゝ』

丁度、中ほど、大きな花崗の石碑に何かいはれの刻んである處へ來ると、村童が云ひ合せたやうに立ち止まり、
「此處だよ、此處へ昨晩、人魚が出たんだぜ」
「人魚が――」
調使麿が却つて驚かされた。
「え丶、人魚が出たといふのは此處かい」
「あ丶、昨夜」
「さうか……」
調使麿は憮然としてしまつた。さうか、池の間違だ、難波の池と聞いたのは此の石河池の誤聞であつた。誤まり聞いた責任は自分には無いが、同時に、それで、嘘と坊主の頭を結つた事が無いといつて智堂法師に教へた人の責任もいくらか輕くなつたやうだ。調使麿は烏の駒の手綱を引ぱつたなりで岡から池の傍にピタリと足をとめてしまつた。
「君達、その人魚を見たのか」
「見たよ」
いよ〱話せる。この子供が現に見てゐる。子供は嘘をいはない事に於て、坊さんの頭よりもなほ確かだと調使麿にもほゝえまれる。
「さうか、話してお呉れ、その人魚を、大きさは、形は、面は、啼き聲は……」
立てつゞけるに責めて見ると、子供は極めて無雜作に、
「人間と些とも變りは無かつたよ」
「でも、上半身は人間と變りはないが、此處から下が魚になつてゐたらう」
と調使麿が自分の腹を撫で〱見せる、と
「い丶え、此處から下も、やつぱり人間と同じことだつたよ」
「それぢや、全部人間と同じなら、人魚じやなく、やつぱり人間なんだらう」
「あたいは、人間だと思つたけれど、ゑらい人が皆んな人魚だといふから……人魚にして置かないと怖いのだとさ」
「何…………」
調使麿は、甚だ合點の行かない子供の言葉尻だと思つた。これは聞き咎めずには置かれない、聞きたゞさずには居られないといふ氣になつた。
「ナゼ、人魚にして置かないと怖いのだエ」
「ナゼだか知らないが、あたいが人間だといはうとしたら、父さんにうんと睨められて口をつねられた」
「おかしいね」
調使麿は其の村童の魯直であることを知つた。さうして自分の頭は少くとも、此の少年の先手を打つことも、鍼をかけることも自由なるを知つた。そこで、
「それは、お前が見て人間でも、ゑらい人が見て人魚ならば、人魚に

間違ひは無からう、さうして君の見た人間としての人魚は、どんなものだつたか、よく話してごらん、眞正直にいつて見てごらん、さうすれば、わたしが、それを判斷して上げる」

「さうね、あれは女の人でしたよ」

「成程、さうして年頃は」

「まだ若い、きれいな人………—豐浦の御殿の宮仕へのお姫樣に似てゐました」

「着物は」

「やつぱり豐浦のお宮仕へのお姫樣の着ると同じ着物を着てゐました」

「髮の毛は——」

「こんなに長くつて、眞黑でそれがずる〳〵と、大蛇のやうに濡れてゐました」

「ふ——む」

聰明な調使麿は、蒼く澄み渡つた水藻の池の底をのぞいて、どろどろになつた髮の毛が、そこにまだ浮いてはゐないかと見た。

これより以上は押して問はないがよい。問うて見た處で繰り返し言には過ぎないが、要點だけの想像にはこれで充分である。

人魚は人間である。身分賤しからぬ若い女人が、こゝに落ちて死んだのである。いや、死んだか生きたか、それはわからないが、あやまつて落ちたのではなく、覺悟を決めて身を投げたのだらう、故意か怪我かその邊の事はよくわからないが、どうも、周圍の事情が、身を投げたものゝやうに思はれてならぬ。

その屍骸を最初に見つけたのは此のあたりの農夫だらう。多分、身を投げた物音に驚かされて水門番の老爺あたりが眞先にかけつけて來てから、それから問題となつたに相違ない。

引上げて見れば、やんごとなき人である。少なくとも公けにしては、憚かりのある身分の女であつたに相違ない。そこで、沙汰によつて出向いて來た相當の係りの者から、口留があつたものと見られる。併し乍ら、出來事そのものをも人の口から葬つてしまうわけには行かないから、そこで人魚の口實が設けられた。

それにはよい事がある。先年、近江の蒲生河で人魚が捕れたといつて、この都まで持ち來して、持てはやされた事の記憶が人々の間に殘つてゐるから、それがいゝ道具だ。斯うして、石河の池からも人魚が浮いた。といふ噂は大人を欺くには足りるが、事實見た子供を信ぜしむるには足りない。調使麿はほゞそんな風に考へて見たが、さてその人魚が引上げられて何處へ納められたか、そこまでは詮索する氣になれなかつた。

村童と別れて調使麿は、池のほとりを行くと、こゝでは香久山と耳梨は隱れて、畝傍が眞向ひに見える。

それよりも心にかゝるのは、和田へ行く小路の上に立つた十字の柱。高さ二丈餘で横に副木が渡してある。朝日の加減か、今朝はくつ

きりと、綠の野の中に浮き出して見えるが、それでも墓じるしのやうに淋しい。

人のいふ處によると、あの柱はあれは東の漢の直駒の首をかけた處だ。彼は申すまでもなく天皇の御身に刄を當て奉つた逆賊。蘇我の大臣が手づからこれを殺して、首はあの十字の柱にかけて、大逆罪の酬ゐのほどを一代の見せしめにした處と傳へらるゝ。

調使麿は其の大變事を昨日の事のやうに聞かされてはゐるが、その事のあつた時には生れてゐない。何しろ、天日が遽かに缺けて地上に落ちたといふ空前絶後の大變が此の世界を暗くしたといふ傷心の事は、初な心に思ひ浮べてさへ恐怖の至である。此處を通つても成るべくは、あの十字の柱だけは見ないやうにして過ぐるのだが、今日はどうしたのか、くつきりと浮き出して、見まいとすれば、まばゆいほどに、其の形が眼にうつる。日にかゞやけば光を添うるのが萬物の常であるのに、あの柱の日にかゞやいて、いよ〳〵白い事。

一說には、あの柱はあれは逆賊の首をかけた處ではない。逆賊の供養の爲に誰やらが建てたのだと。

では、其の誰やらは誰だ。——おれは其れを知つてゐる。

調使麿は胸の中で斯う叫んだ。何の、あれは秦の河勝の おぢさんが建てたのだよ。と自答する。

では、河勝のおぢさんは逆賊の供養者なのか。——どうして〳〵、そんな事があるものかと調使麿が抗議をする。

それでは、いよ〳〵何の物ずきで、それを建てたのかわからない——

——わからなければわからないで宜しい。と調使麿が躍起となる。世間も、それを知らず、當人も自分が建てた事を晦ましてゐるのに、何も根や葉を掘つて尋ねるがものはないではないか。

併し外の事とは異う、逆賊を供養する心は即ち逆賊に同情する心ではないか。物ずきにも程度といふものがある。

さう逸まつてはいけない、あの十字の柱が逆賊の首を掛けたのだといふ事も、さうではない、あれは逆賊の供養の爲に建てたのだといふ事も、等しく臆說ではないか。誰も本當にそれを見たといふ者もなく、斯うだと名乘つた者もないではないか。

秦の河勝のおぢさんが、あれを立てたといふ事は恐らく自分だけが知つてゐる——だが何の爲にあれを建てたのですと尋ねた事も無ければ、これ〳〵の目的でと聞かされた事も無い、前に云ふ通り當人がそれを晦ましてゐるのに、他人が根を掘る必要はないではないか——或者は單にあれは道標だと、或者はまたいふ風見だと、いゝや、さうでもない、實は此のあたりへ大伽藍を建てやうとした時のあれは測量の目じるしだと。

要するに、あんなものを立てたから、それで問題が紛糾するのだ。この點に於て河勝のおぢさんはいゝ物好だ。つまらないいたづらをしたものだ。

こんな事を考へてゐるうちに、十字の柱もいつか後ろになつて、和

田の小坂をだら〳〵と下りながら、ふと左手を見ると、森の後ろの大きな建物に今日は鴟尾が上がつてゐる。この前、通つた時には建築中ばで、まだあの鴟尾は上がつてゐなかつた。

　あゝ、大きな建物だ、あれは蘇我の大臣が最近にお立てになつたお屋敷の一つだが、あそこへは一族のどなたをお置きになるのだらう。

と調使麿はそれを考へ出した。蘇我の大臣は島の莊にも、向原にも、大野にも、あれほど宏大な御殿を幾つも持ちながら、また最近は王宮のうしろへあの大建築をなされた。さながら王宮の四面は蘇我氏の屋敷で圍まれてゐる。何の必要あつて、あんなに御殿を造られるのか、その御殿といふ御殿が規模に於ても、結構に於ても遙かに王宮を凌駕するの勢ひだ。大臣の子孫を王子と呼ばせて、御自身の出入の儀式は天皇のそれになぞらへてゐると、この頃はその噂が漸く巷に滿つるほどだ。自分は斑鳩にゐることが多いから、大臣の御近況は餘り知らない。もとより一國の大臣であり、並び立つてゐた大連といふ者が欠ければ、權勢が盡く大臣に傾くのは自然でもある。併し今こそあの大臣に對抗する一方の勢力は絶滅したとはいひながら、必らずしも、一代がそれに心服してゐるものばかりでは無い。

　權勢を持續する爲には力が必要である。その力も内に藏してゐる力ばかりではいけない、外に現はして威力を示す事も無ければならないのだから、あゝして大臣殿が宏大な土木を興しなさるのも一つの政策といふものかも知れない。

聖徳太子様が、攝津の難波へ四天王寺をお建てになつたのは、一つは外國に對しての、わが國の文明と勢力の程をお示しになる政略――といつては恐多いが、國家の威嚴の爲めの必要をお考へになつての事といはれる。法隆寺は殿下の御學問所であり、また日本の今日の文化の總府として、あの土木の費えを誰か無用といふ者があらう。その他、殿下には、無數に寺を建て、佛像をお作りになり、兼ねて土木を起し給うと雖も、それは皆殿下の御信仰に出で一つには當代の有功の事業であり、兼ねては後世に無いこの國寶をとゞめて、當代の文明を永久に紀念なさる事業でないといふものは無いのに、蘇我大臣のあの盛んな邸宅の經營が、當代の人民に何を與へ、後世の紀念として何を殘すのか――たゞ一族の者を助け、妻妾の誇りを增すの手段の外に何がある。

　調使麿の想像のうちにも、その頃の辻の巷に起り勝ちな偶語が、多少、影を見せて來るのも是非がない。だが、また、それを思ひ返してさうはいふものゝ蘇我氏の今日の勢力とても、あながち偶然に出來上つたものではない、物部氏や中臣氏の勢力が内外に根を張つてゐた時分、疫病のやうに忌み怖れられた外國の異教を信じ通して、これが爲に蒙つた幾多の誤解と迫害。それを切り拔けて今日に至つた蘇我氏の犧牲、苦衷、忍耐といふものに、今日の人は餘りに同情が無さ過ぎる。

　かりに、あの時、大連派が勝つて、蘇我氏が亡ぼされ、守舊派の天

下となつて、排佛派の絶滅となつてごらんなさい。今日の文明が何處から吸收されて、この盛んな文化の光が何處にかゞやいたか——排外の心は、いよく盛んになつて、三韓とは交際が絶えて戰爭が續き、人心は固陋となり、政治は武斷となり、壯丁は徵發され、百姓は奔命に窮する——さうで無いまでも、人心に潤ひをかき、時代に今の光彩があり得やう筈が無い。

飛鳥朝文明の光りの下には、蘇我氏の多年の犧牲を認めなければならぬ。聖德太子ですらも、蘇我氏に一目を置き給うやうに拜される事のあるのは、蘇我氏の權勢を憚つての思召ではない、今日の文化を生むまでの蘇我氏の犧牲の大なることをお認めになつてゐるからに相違ないと自分は思ふ。たゞ併し、弑逆の背景から拭うことの出來ない暗黑が、すべてを帳消しにする。それより以後の蘇我氏は限り無く呪はれる。

排佛の爭の時も、蘇我氏物部氏を亡ぼさなければ、物部氏が蘇我氏を亡ぼしたに相違ないのだ、崇峻天皇のお憎しみを蒙つた時も、早くそれをのがるゝ事が出來ない限り、蘇我の一族は誅滅されたであらう。逆臣と雖も、いづれの時もその立場は、亡ぼすか亡ぼさるゝかの、妥協を許されない地位にのみ置かれたことの不幸よ。

呪はれたる蘇我の大臣の家。恐らく、幾つ宏大な邸宅を築いても、その中に安住の處は見出し難からう。聰明な調使麿の頭は次から次と、こんな事まで考へさせられてゐるうちに、おのづと重くなる頭を撥ね起して遠く見渡すと、金剛、葛城の峰が見える。

詩人ならば、山河ひとり悠久なりと嘆きたい處をば調使麿は懷へ手を入れて、例の高麗笛を取出して見たが、どうしたものか、今は最前ほどに興が乘らない、それを脣に當てゝ見たが吹き鳴らさうとの氣がしない。

やつぱり、頭のうちは、蘇我氏の新屋敷の鴟尾から、あの十字の柱の處まで飛んで行き、柱の白い色がまだ眼前にちらついてならぬ。

何でも、あの柱にかけられた首を見たといふ人の話には、東の漢の直駒の首は非常に大きなもので、普通の人の三倍ほどあつたといふ。

それが、いつまでも眼を見開いて、島の庄を睨んでゐたといふ事だ。

さうして夜になると其の首が、飛鳥の都の誰の耳にも聞えるほどの大きな齒嚙みの音をして、それから有らん限りの聲を以て大臣殿を呪る聲が聞えたといふ。

『われ、その時に、ゝの、きを知らずして、大臣の好きを知る——餘事は兎もあれ、弑逆の一事のみは、この駒が一人で責任は負ひきれない。』

と叫ぶ。その聲が遠く多武の峰にこだまして、蘇我の大臣の島の庄に地の震ふほどはためき聞える。その時ばかりは、さすがに威嚴一代を傲ける蘇我の大臣が眞蒼な面をして、取る物も取り敢えずに閨の中へ逃げ込むのだと見て來たやうに噂をする者がある。

河勝のおぢさんが、いつか爐邊の物語に、そんな臆說を一切打ち消

しながら、その眞相といふのを恐懼に餘ある心で話して聞かせて呉れたのを思出す。

その面が人並の三倍もあつたといふのは嘘だが――河勝のおぢさんはよく東の漢直駒を知つてゐるのだ。熟魂ではないが、普通に口を利き合つた交際だから間違はない――たしかに膽力もあり力量も優れ大臣にも姫にも愛せらるゝだけの何ものをか持つてゐた男ではあつた。

冬十月七日の夜の中。禁裡の宿衛では衞士が火鉢を圍んで夜もすがら物語をしてゐた。そこへ何氣なく東の漢直駒がやつて來た。衞士の連中とは何れも懇意の間柄であり、大臣からも愛され天皇にもお覺えのある勇士の事だから、誰も別段、あやしまなかつた。

その時、何でも衞士連は、かりそめの後宮の噂話をしてゐたさうだ。新たに蘇我の河上の娘が入内して、大伴の小手古の姫が寵を失つたといふやうな事が話題になつてゐたらしい、それから身分相應の戀話もあつて、戀の恨といふものゝ怖るべき事なども話題に上つたのは、何もその晩に限つたことではない。そんな折には、その時代の最も目に立つ戀愛話が、あつらへたやうに話題の中心となるのは上下おしなべての習だ。

そこへ、東の漢直駒が入つて來たのも偶然ではない。後での話にこそ、その時の駒の顔色が尋常でなかつたといふけれど、誰もその時それを認めたものはない。

『主上の御機嫌は』

駒は常にする御機嫌伺の體であるから、衞士の連中も、いよ〳〵心置なく

『上には只今、紫宸殿に於て御安眠中であらせらるゝ』

『左様でござるか』

衞士連は引つゞき世間話に餘念がない。それなりで駒の姿が消えてしまつたのをも、咎める者は無かつたのだ。

誰か知らう、この時、倉梯の宮殿の九重の奥深き處に腥風が吹き入り、萬乘の君の玉血が匹夫の刄の上に注がれ給ふ事を。

世にも怖ろしい、天日がくづれ、地軸が折るゝ音を外にして衞士共は何をしてゐたか。

此の大逆漢が、ぬけ〳〵と禁中から都大路へ飛び出し得たといふ事だけでも惡魔の無上なる奇蹟ではないか。

調使麿はその事を思ひ出すと自分の生れた以前の世界の出來事とは思はれない。自分の眼先がクラ〳〵として、青天白日が錯のやうに重くなるのを感じた。こんな事の恐れ多い回顧からでさへ、早くのがれねばならぬと考へて、うな低れた首を擧げると、行手遙かに大和平原が海の如く開けて、三山が島のやうに浮ぶのを見る。

朝日が、この平原を遮りなく照らしてゐるものだから、三山の姿があざやかに浮き上がつて、いとゞ優美にして爽快なる感じを與へずには措かぬ。

やまとには

むら山あれど
とりよろふ
天の香久山
のぼり立ち
國見をすれば
國原は
煙たちこめ
海原は
かまめ立ちたつ
うまし國ぞ
あきつ島
やまとの國は

わが大和はうまし國。幾度見慣れても、調使麿はそれを飽かず眺めないわけには行かぬ。

誰が見ても、畝傍を先づ男性の山だと思ふ。それは三山のうち最も高くて、ますらをの立てるに似てゐる。耳梨と香久山とは、それに追從するが如く、遊戈するが如く、戯るゝとも見えるし、爭うとも見える。まさしく此の二つの山は女性である。して見ると一人の男性を二人の女性が爭う——といふ直感が詩人で無くとも、苟も性と戀とにに生くるほどのものゝ想像を働らかせぬわけには行かぬ。

香久山は
畝傍を愛しと
耳梨と
相あらそひき

性と戀とは遂に相爭ひである。それは單にある一人の詩となり歌となつて現はれた形容のあやではない。太初以來の人間の歴史だ。物が二つあれば相和する形で、三つあれば相爭ふの形になる。太古の人は身に引きくらべて、事實と傳說とを混同し、人間と擬人とに差別を置かなかつた

あゝ、此の美しい三つの山も亦、血みどろになつて爭つてゐる——

調使麿の初な心が今日は見る物每に感傷を作る。感傷は其の創口から詩を生むものであるが、彼はまだ詩人としての技巧を外に現はす術を知らない。

「小舍人樣、お早うございます」

田疇の間からまた聲があつたので調使麿が三たび呼び醒まされた。

「おゝ、阿部の爺ではないか」

見れば、腰の曲つた老人がひとり、路傍にうづくまつて、舍人と馬の駒とに道を讓つてゐる。老人の脊には周圍一尺ばかりの根附の株が一幹、頭高に負ひなされてゐる。

「どちらへ、お越しでございます」

阿部の老人がたづねる

「斑鳩へ參ります」

「お一人でございますか」

「あゝ、一人で」

「お父様は」

「あちらにゐます」

「侍従の方々は」

「後から追かけて來るかも知れません」

「小舍人様、老人が餘計な差出口のやうでございますが、侍従方のお出になるのを此のあたりでお待ち受けになつて御一緒にお出でなされては、いかゞでございます」

「さうも思ひますけれど、烏の駒が殺へるものですから」

「併し、小舍人様、お前様だけが拔がけをなさるやうな事になりますと、侍従方の越度になりませう、お待ち受けになつて、御一緒にお出でになつた方が宜しうございますよ」

「それもさうだが、烏の駒が逸るものだから、わしも亦、一刻も早く殿下の御許へと氣が急かれるので……」

「左様でもございませうが……」

調使麿は駒を窄いたまゝ、阿部の老人はうづくまつたまゝである。

「阿部の老爺、お前は何處へ行くの」

「はい、わたくしは橘寺まで參上致します、御覧の通り此の榛を橘寺の南庭へ獻上を致したいと思ひまして」

「わしも今、橘寺から出て來た處だ、知つての通り、わしは殿下の御用で、父の名代として、橘寺の御胞衣塚へ捧げ物に來たのだ、殿下よりは夢殿を御出定あるまで、ほゞ七日間のお許しを得て來たのだが、今日は烏の駒が逸るものだから、わしも一刻も早く斑鳩へ歸りたい、つまり烏の駒が逸るのと、わしの心が急くのは、夢殿の殿下が何ぞ思召あつて、我等をお召しになる暗示なのだから、猶豫することは許されない、侍従達にいへば、何かと手間取る故に思ひ立つと此の通り、馳せ出したが、駒も快く走るのだ」

「はゝあ、左様でございますか、殿下には夢殿へお入定になりましたか」

「三日ほど前に」

その時、阿部の老人は伸び上がつて

「あゝ、あれに見えまする、石川の池の上あたりから、數多の人が此方へ向けて走せ來るやうに見受けますが、あれは侍従方ではございますまいか」

「成程……」

調使麿は振り返ると、成程、數多の人々が此方へ向いて走つて來るのを見る。答うるまでもなく、それは殿下のお馬わきにつきそう侍従と舍人の人々だ。

程無く、息せききつて追ひついた、これ等の人々十餘名。

「小舍人殿、お前拔かけをしては困るではないか、我々に斷りなしには出かけられて、萬一途中で事が起つた日には、我々の立つ瀬が無い

でないか、萬一の事が起らないでも、殿下のお乘物を粗略に放しては、威儀にもかゝはるといふものだ、人困らせをしては可けない』

といつて、不平と愚痴とたら〱である。調使麿は氣の毒さうに言譯をして

『今も、それを此の阿倍の爺にいはれて申譯をしてゐた處だ、遽かに駒が逸り出して、我等の氣も急くものだから、これは、たしかに夢殿にお在します殿下が、何か思召あつて我等をお呼びになる暗示――と斯う心得たものだから取る物も取り敢へず、君達に挨拶をすれば何かと手間取ると思つたから、拔駈をしたのだ、惡くなく思つてもらいたい』

『それはさうとしても、我々の役目をも重んじてもらはねばならぬ』

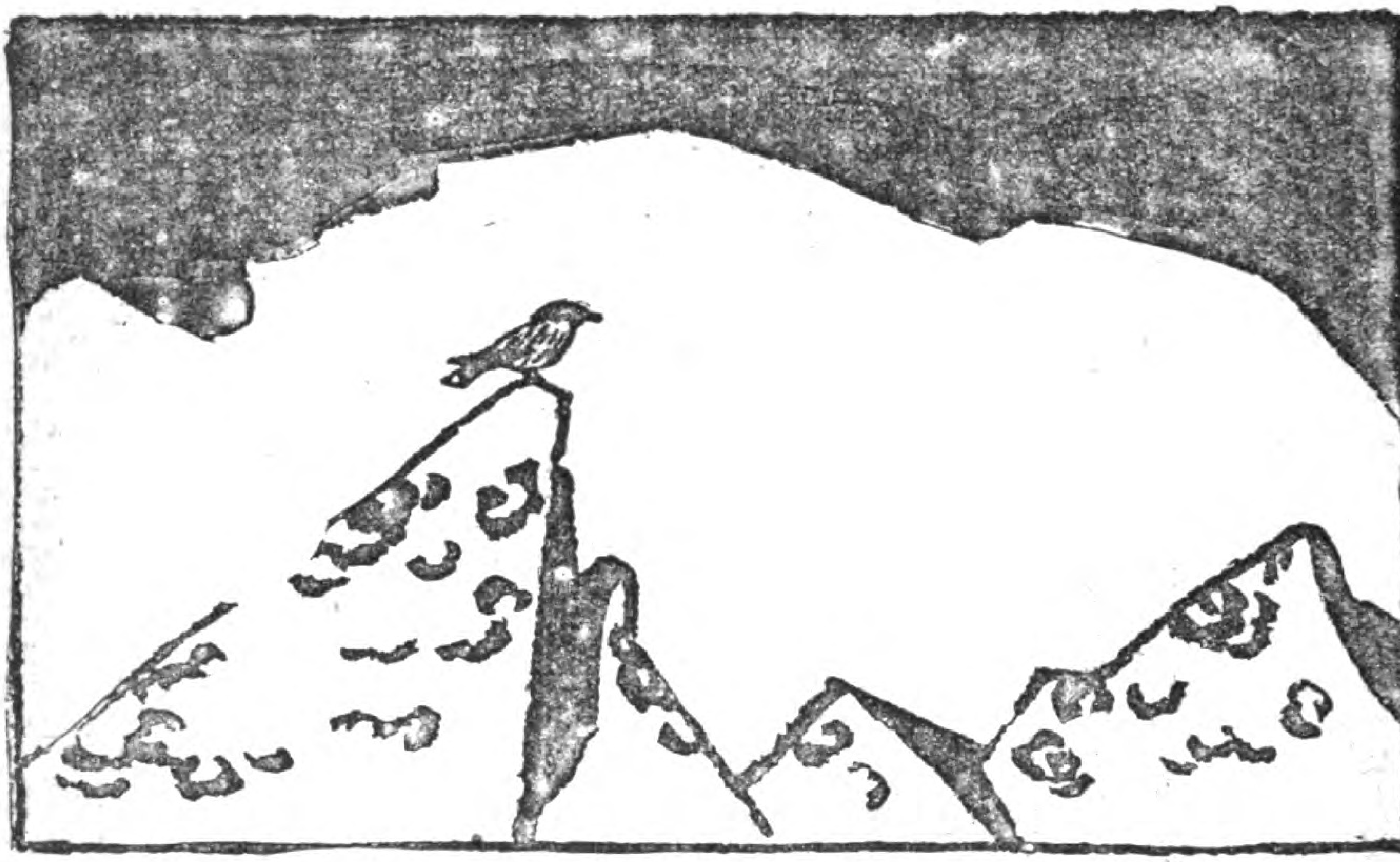
『君達の役目を重んずる心の無いのは申すまでもないが、上宮太子樣は時あつて、烏の駒と我等父子とには、遠く離れてゐて御命令をなさる事があるのだ、我等父子と烏の駒だけが、その不思議な暗示を感能してあやまらないといふ前例を知つてゐてもらいたい』

侍從達は、それに對して何と抗辯していゝか躊躇の體であつたが、

『議論をして見ても仕方がない、殿下よりは七日間のお暇を賜はつてゐる筈だが、斯うなつた以上は、再び橘のお寺へ引き返すわけにゆ行くまいではないか』

『兎も角、斑鳩へ急いで下さい』

そこで烏の駒の前後には、新たに十人の侍從が附き添つて、飛鳥の都から爪先下がりに大和の平原を北へ。飛鳥の都から斑鳩の里までは、たしか六里はある筈である。



朦朧とした風

横光利一

セメント製アパートメント。丘と丘とを塡充した義歯。ここは屋根だけがいつも平凡の特權を受けてゐる。部屋と云ふ部屋は、いかに日光が平等の影を與へるかと云ふことについて、說明してゐるやうなものである。やがて、冬が來るだらう。

木山はお品から、その日の建物の中で起つた出來事を聞くのが好きだ。お品は食堂の給仕である。彼はお品が、初めて此のアパートメントに現れた日、彼の部屋で彼女に云つた。

「君の年は、龍年だね。」

お品は默つて彼を見上げた。

「君は、肺病にちがひない。」

一切が當てられたのだ。お品はそれでも默つてゐた。

「こんな所にをれば、君はもう直ぐ死ぬだらう。」

「でも、」

「早く日のあたる所へ行くがいい。」

「ええ、」

「お金がないなら、少し位ひは上げてもいいね。」

此のときから、木山とお品は知己になつた。彼女が彼の所へ來る度に、此の影そのもののやうな建物の中の出來事を洩して行くのが例である。

「でも、あたし、肺病だと云ふことを隱してあるの。誰にも云はないで下さいな。知られると、あたし、首になるの。さうすると、」

「君の月給はいくらかね？」

「三十圓よ。」

「それで夜の十時まで？」

「ええ、その代り、朝も十時。」

「それで、君の身體は保てゝ行くつもりだな？」

「だつて、かうしてゐるより、仕方がないわ。」

それは、木山には分つてゐる。だが、お品のその綺麗さで、どうして今迄結婚出來なかつたかゞ疑問である。彼女はうつとりと濕つてゐて、かすかな怨言のやうな魅力があつた。間もなく、此の建物の中の男達は、ドアから外へ、彼女を出さないやうに努力し始めるに相違ない。さうして、もし彼女の病氣に氣附いたなら、彼らは一齊に唾を吐き、彼女をドアから外へ突き出すに定つてゐる。

「まア、御機嫌やう。あたし、あなたがあまりいらしやらないもんだから、來ましたの。でも、こゝは、お靜かで、」

隣室では男と女の對面だ。その次の部屋には壯士がゐる。彼はいつも默つてゐて、濕つた穴のやうな天井の下でうろ〳〵と眼を光らせ、顏面の斬り傷を晒してセメントの中から出かけて行つた。空虛の部屋を挾んで女優がゐる。彼女は蓄音機をかけて酒を飲み、ダンスをしたかと思ふと嚏をする。そのドアからは絶えず太つた腹や學生帽が、フライの海老や魚の頭と一緒に出入した。その向ふには博士がゐる。博士は壁いつぱいに地圖を掛け、その下で眼鏡を掛け、蒙古の佛器を愛翫しながら支那人と接見した。その向ふは相場師だ。相場師の横には春婦がゐる。春婦は令孃の姿をして、夜毎に街から鴨を撃つて憂鬱に歸つて來た。

木山は夕暮になると、レンズを磨き上げて歸つて來た。彼は食堂のストーブの傍へ椅子を寄せた。お品はカーテンの影から出て來るとあたりを見廻して囁いた。

「昨夜から、まだ一度もお眼にかゝらなかつたのね。あたし、夕べは叩かれたの。」

「どうして？」

「だつて、叩きたいんでせう。」

「誰が？」

「あの料理番。あの人は仕方がないの。」

「君に、つまり、參つてゐると云ふんだな。」

「ええ、さうらしいのよ、あたしが、あの人の云ふことを、きかなかつたもんだから。」

「あの男が、一番君に參つてゐるのかね。」

「それはどうですか。だけど、あの人はいい人なのよ。たとへね、叩くだけが惡い癖なの。」
「叩いた奴を賞めるのも、惡い癖さ。」
「あら、だつて、」
「何だか、君は、嬉しさうにしてゐるな。」
「いや、叩かれるのも、惡くはない。」
「まア、いやだ。」
木山は空腹を滿すと三階まで上つて來た。希望――彼にはそんな光つたものは何もなかつた。彼は欄干の光澤を愛しながら、部屋に歸つて長くなつた。いきなり、古風な壁の電話が、人間の顏に見え出した。
「いや、機械と云ふ奴は、人間の眞似をするものさ。」
しかし、人間は？　と彼は考へた。
「さうだ。人間は、機械の眞似をさせられる。」
隣室から電話が急に鳴り出した。
「さう、さう、さうなんですよ、つまりわれわれは、清廉潔白だと云ふことを示さなければ。ええ、ええ、さうなんです。それでいいんですからね。」
木山は清廉潔白について考へながら、ぼんやり隣家のフランス人の洋室を眺めてゐた。と、いつものやうに、二つの高い傑れた鼻が、窓の中で戀愛をし始めた。木山はお品のことを考へた。もし彼は、誰かを愛しなければならないと云ふ法則でも出て來れば、お品を愛するにちがひない。位置は戀愛を決定する。あの「鼻の戀愛」を、一日に一度づつ見せられるとしたならば、人は模倣の屬性を動かすだらう。だが、あのお品の唇が、腐つた肺と續いてゐるとしたならば、彼はお品の唇を警戒しなければならなかつた。
女優の部屋からは夜毎のマズルカが聞えて來た。その下では禿頭の勸誘員が寢臺の上にひつくり返つて球突の眞似をしてゐるにちがひない。その下では夫婦者の辯護士が明日の天氣について物憂げな話をしてゐるだらう。その横は病人だ。
木山は階段を降りて廊下を奥の方へ歩いてみた。廊下は暗くて狹く、突然理由も分らずに鉤のやうに曲つてゐる。空虚の部屋は倉庫の荷物のやうに陰欝に並んでゐた。陰謀は恐らくここで形を整へるにちがひない。木山はこれらの部屋の前を通る毎に殺人を想像した。ここは大都會の底のもつとも暗流の淀み場だ。無愛想に沈んだ刺青のやうな横顏が、こつそり足音を忍ばせて通つてゐる。
「まア、木山さん、どうしてこんな所にゐらつしやるの。」
不意に、小聲で、お品が後から呼んだ。彼は振り返つた。
「靜に。僕は刑事だ。」
「ほんとに、そんな風に見られるわ。」
「君は、何か、惡い事でもしてると見えるね。」
「いやなことを仰言らないで、早くこちらへいらつしやいよ。そんな所にゐらつしやれば、いけないわ。」

「ここは、何んだか。危なさうな所だね。」
「ここは、支那人の來る所よ。あたし、コーヒーを持つて來たんだけど、いやらしくつて。」
二人は並んで階段を上つて來た。
「何か、あの邊で面白いことがあるのかね。」
「あたし、良くは分らないけど、あたしが行くと、みんな默つて了ふのよ。警察の人が玄關へ來ると、主人は直ぐ奥へ電話をかけて了ふの。」
二階へ昇ると壯士が兩手を洗つてゐた。三階へ登ると、色眼鏡で表情を誤魔化した無職者が、急にばたばたと駈け出した。
「あの下の部屋の中で、人が二人は殺されてゐる筈だ。」
「いやよ、そんな。でも、あそこん所は、一寸でもいやね。」
「いや、あそこで人殺しをしなければ、する所がないだらう。」
「もうよしてよ。あたし、あなたみたい、そんな恐い顔をして云はれると、ぞつとして來て。」
「しかし、ここにゐる人間は、みんな人殺を平氣でやりさうなものばかりだ。これぢや、どこかにきつと、脱け路があるにちがひない。」
木山は夜中になると、毎夜肉體を壁へ打ちつけるやうな物音をききつけるのを思ひ出した。あれは秘密な生活の物音だ。お品が肺病を隱してゐるやうに、ここでは誰も彼もが何事かを隱してゐる。
「おい、君、君はここから出る氣はないか。」
「だつて。」
「出なけりや、後悔の方が先に出る。」
「あたしは出たつて、こんな病氣ぢや仕方がないわ。どこへ行つたつて、働かなくちやならないのは、同じことよ。」
「そんなことを云つてれば、死ぬより仕方がなくなるさ。」
「そりや、さうね。でも、死ぬより仕方がないんだから。」
二人は顔を見合して苦笑した。二人は木山の部屋へ這入ると坐り込んだ。
「君は、もう少し、僕を愛してゐると云ふやうな、そんな素振りは出來ないかね。」
お品は口へ手を當てて笑ひ出した。
「でも、これだけしてゐれば、澤山よ。」
「つまり、愼しやかだ、と云ふんだな。」
「あたしなんか、あなたにそんなことをしては、いけないわ。」
「いや、僕だつて、かう云ふ高い所へ昇ると直ぐ、ははア、ここなら死ねるな、と思ふやうな人間だよ。」
「あなたなんか、まだまだこれから先が長いんだし、もつと、氣を大きくお持ちになるといいんだわ。」
「何アに、これからさき、毎日せつせとレンズ磨きをやつたつて、近眼の奴が喜ぶだけさ。第一、何のために生きてゐるやら、さつぱり分らないんだからね。さつきもここで、あの洋館の窓を見てゐると、男

と女の影が現れて、いきなり接吻をし始めるのさ。だいたい、接吻と云ふ奴は、眞似のしたくなるもんだが、一人ぢやしやうがない。」

笑ふかと思つたお品の首が、うなだれた。木山は、掌の中へ落ち込んで來たお品の心の重みを急に感じた。だが、此の肺病の女を背負つて何にならう。彼は暫く默つてゐた。しかし、此處は間もなく立ち上れない若い女の病人と、希望の消え失せた青年との實驗室になるのは定つてゐる。彼はポケットから十圓紙幣を取り出した。

「君、これは、君がオランダチーズを買ふ金なんだ。」

お品は紙幣を握らされたまま默つてゐた。

「チーズを食べると、身體がそれだけ強くなる。すると、君はそれだけ美しくなつて行く。」

「いやよ。そんな、」

「いや、チーズといふのは、食べてをいたつて、惡くはない。」

木山はお品が部屋から出ると、急に食慾を感じ出した。彼は廊下へ立つてみた。すると、下まで落ち込んだ窓の羅列の一角から、濁つた豚のやうな料理番の顏が見上げてゐた。

隣室の相場師が夜逃げをした。電話が一齊停止を食つた。球突場の女が子供を生んでゐる間、姦婦は拘留されてゐた。不良老年が妾をつれて這入つて來ると、朝から晩まで三階の片隅で酒ばかり飲んでゐた。電話室の交換ボーイは火のついた煙草を埃溜に捨てて小火を出した。倒れた木瓜の盆栽は、廊下の隅でいつまでも倒れてゐた。

或る夜、お品は木山の部屋へ這入つて來ると、そのまま火鉢の縁へぐつたりと崩れかかつた。

「あたし、何んだかだんだん苦しくなつて。」

「それは危い。」

「もう此處まで上つてくると、動けないの。暫く休ませて下さいな。」

「何とか、いい考へはないものかね、もつと、日のよくあたる、綺麗な空氣の、生き生きした樹があるやうな、まア、さう云ふやうないい所がさ。」

「駄目よ。」

「さう物は、一概には捨てないで、拾ふもんだよ。」

「だつて、あなただつて、捨ててゐらつしやるんだわ。あたしなんか、捨てなくちや、ゐられないんだけど、」

「僕なんか、こんなに達者で、どうにも仕樣がないんだから、なほ仕方がないんだが、しかし、どうも、面白いことは何もない。いつたい、世間の奴は、あれで面白いことがあるのかね。」

「そりや面白くなけりや、あんなにふわふわ出來ないわ。」

「いや、面白くないから、ふわふわしてゐるのかもしれないぜ。」

「さうかしら。」

「そりや、さうだよ。どいつもこいつも、自棄糞なんだ。何が何だか分らないさ。だから、此奴は面白さうだ、と思ふと、もう、直ぐ飛び

ついて舐めてみる。」

「あたし、夕べは飛びつかれかかつたの。」と、お品は云つて笑ひ出した。

「誰に？」

「あの料理番よ。」

「またか。」

「ええ、あの人は、一寸あたしが傍にゐないと、もう怒るの。」

「ぢや、ここへ來てれば、いけないな。」

「ええ、さうなの。あたし、夕べも、六番のお部屋へ炭を持つていつたらね、あたしがあなたのお部屋へ行つたんだつて、怒り出すの。」

「ぢや、僕のために、叩かれてくれた、と云ふんだな。」

「まアさうね。あたし、だから、誰の所へ行つたつて、勝手だわ、つて云つてやつたの。さうすると、怒り出して、あたしのここん所を、ぶつ叩くの。それで、あたし、もうこんな所なんかにゐられないから、暇を下さいつて云ひ出したら、主人が今度は出て來て謝まるの。」

「ぢや、主人も君を、狙つてるんだな。」

「まさか。」

「いや、あの親父が狙はなけりや、狙ふ奴はゐるものか。料理番なんか、親父が君を狙つてゐれば、恐くはないさ。」

「でも、そんなことなんか、大丈夫だわ。」

「大丈夫かもしれないが、向ふが大丈夫ぢやないんだから。」

「だつて、こちらが大丈夫だつたら、大丈夫だわ。」

「さう云ふときには、小さな聲で、私、肺病なんですが、つて云つてやるに限るんだ。」

「さうしたら、直ぐ首ね。」

「首だ。」

二人は手を繋いだやうに笑ひ出した。

「しかし、これは、ひよつとすると、君より僕の方が殺られるかもしれないぞ。」

「どうして？」

「だつて、あの料理番に、默つて毒でも盛られたら、それぎりだ。」

「まア、いやだ。あなたは、そんなことを考へるのね。」

「いや、あの男の顔つきなら、やりかねないよ。ことによつたら、もう一人ぐらひは、やつてゐるかもしれないね。」

「だつて、あたしは、あなたと何んでもないわ。」

「何んでもない。しかし、何んでもないのに殺されたら、なほ困る。」

「あたし、あの人にさう云ふわ。あなたとあたしは、何んでもないつて。」

「ふむ、それなら、身體を負すが良い、と來るだらう。」

「だつて、そんなことを云つたつて、」

「そんなことを云つたつて、さう云はれれば、仕方がない。」

「あたし、そしたら、」と、お品は云ふと默り出した。

「そしたら、身體を負すと云ふのかね？」
「ええ、もしさうなれば、あたし、あなたのためにさうするわ。」
「そんな覺悟は、僕には、有難くも何ともない。」
「でも、こんな身體は、あつてもなくても同じだわ。」
「それなら、僕は、こんな心配はしない方が得なんだ。何も、わざわざ、殺される辛抱なんかしなくたつて。」
「それなら、あたし、どうするの。」
「君は、何もしなくつたつていいんだよ。たゞ、小聲で一寸、あたしは、肺病なんですが、つて云ひさへすりやそれで了ひさ。」
「ぢや、あたし、かうするわ。あなたのお勝は、みんなあたしがして出すわ。」
「さうだ、それは有り難い。しかし、さうだとすると、君と僕とは、なほ何んでもないとは云へなくなる。」
「困つたことになつたのね。」
「うむ、あんまり美しすぎると、困つたことになるものさ。第一、傍の者が迷惑だ。」
「あたし、ここから出やうかしら。」
「出るに限る。」
「そしたら、あたし、あなたとお別れしなきやアならないわ。」
「君は、僕を、何だかちよつと、好きだと見えるな。」
「だつて、あたし、こんな身體で、あなたにそんな、」
「うむ、分つた。しかし、僕は、こんな收入ぢやしやうがない。月に一鑵、オランダチーズを買つて了へば、お了ひだ。これで君の病氣を背負つたら、」
「あたし、そんな、あなたのやうな考へで、云つたんぢやないことよ。あたしはあたしで働くわ。」
「そんな身體を働かして、忽ち殺すのと同じぢやないか。」
「だつて、かうしてゐたつて、殺されて行くのに變りはないわ。」
「そりや、いづれ殺されるのなら、僕が殺してやつてもいいんだが、しかし、僕は、殺し番にだけは、なりたくない。」
「でも、あたしにしてみれば、いづれ死ぬなら、こんなことをしてゐて死にたくないの。」
「それも分る。しかし、何とかしてくれ。僕は、殺し番はいやなんだ。」

　お品は顏を赧らめた。彼女は俯向いて默つてゐた。木山はぶらぶら下つた繩のやうに憂鬱になり出した。彼は火鉢の縁を叩き出した。金さへあれば、金さへあれば、と云ふかのやうに。彼は壁の電話を仰いでみた。物言ふ機械。眞似をしてくれ。――彼はお品の顏を覗きながら、ざくざく小判の出て來た花咲爺の金色の話を思ひ出した。

　女優の部屋では蓄音機に合して三人の男が毆り合つた。色眼鏡の無職者は春婦の部屋の鍵を握り出した。賣店の主人は博士に小娘を紹介した。セメント製のアパートメントの主人は日日不運の老人を恐喝し

た。さうして、壯士は、夜遲くまで食堂の中で歌を歌ひながら、明快に茶碗を割つた。

木山は食堂へ入る度に、カーテンの隙間から鬚のない料理番に睨まれた。彼は一日に朝と夜との二回づつ、淡々たる食器の底から黑々とした毒殺の幻影を描き出した。彼はお品の顏色を窺つた。彼女は彼を振り返ると笑顏で云つた。

「大丈夫、お上りなさい。」

彼は微笑を返して箸をとつた。

「死ねば、あ奴だ。頼む。」

しかし、彼は、どうして此の奇怪なセメント箱の中から出ることが出來ないのかと考へた。彼はお品を愛してゐるが故ではない。お品が彼を愛することを、彼の不幸としてゐるからだ。それは彼に鋭い理論のやうに窮屈だつた。

彼は或る日、お品と別れやうとして街を歩いた。彼は新しい下宿屋を搜し廻つて戻つて來た。その夜、木山は仰向きになつて部屋の中に寢てゐると、お品が新聞を持つて這入つて來た。

「まア、こゝの主人はしやうがないわ。あたし、今日は暇を貰はうかと思つたの。」

もう彼には話の條が分つてゐた。だが、何故さう云ふことを聞かされねばならぬのか。木山は寢ながらお品の顏を忌々しさうに眺めてゐた。

「不愉快な話なら、やめて貰はう。僕はさうでなくとも、此の頃だん〳〵君を見るのが苦しいんだ。」

「そんなに急に、お怒りにならなくたつていゝぢやないの。あたしはあなたに、死んだつて御迷惑はかけないわ。」

「うむ、それなら聞かう。しかし、僕をせき立てるやうな話ぢやないね。」

「あたし、あなたの思つてらしやるやうな、そんなつもりで云ふんぢやないわ。あたし、此の頃、あなたの顏を見ると、淋しくなつて、」

「そんな話だつたのか。」

「いやよ、だつて、あたし、もうあなたに何も云ふ氣がしなくなつたの。」

「話さないなら、出て行つてくれ給へ。僕は、もう君を見たつてしやうがない。」

「あなたは、急にお變りになつたのね。」

木山はお品から顏をそ向けた。此の女を見るのが恐い。彼女が幸福であるならば、彼女が健康であるならば、彼は彼女を愛せずに濟ませたにちがいないのだ。お品は立ち上つて出やうとした。

「おい。」

お品は振り返つた。彼は起きた。

「何か云はぬか。」

「だつて、」

「主人がどうした？」――
「あたしに來いと云ふもんだから、行つて來たの。」
「いつだ？」
「今よ。」
「そしたら？」
「そしたらあたしに、巻物を出して來て、軸の所を持てと云ふの。持つたら主人はあたしの眼の前で、するするッと巻物を擴げるの。あたし、それで、」
「分つた。」
「それであたし、軸を投げつけて出て來たの。あんな物をあたしに見せて、」
「さうしなければ、此の建物は保てないのさ。」
「だつて、あんな繪を見せなければ保てないなんて、あたし、奥様を輕蔑したわ。あなたは、あの主人がいつも一緒に、お酒を飲んでゐるお爺さんを見たでせう。あれと一緒よ。きつとあたしを、此の家の玉にしやうつて云ふ腹よ。」
　そんなことは定つてゐる。木山は別に何の感動も受けなかつた。だが、彼は、お品が主人に追はれれば追はれるほど、彼がお品に靜々と追はれて來たのを感じ出した。これは不幸だ。不幸に追はれて幸福になつた話は寓話である。
　――しかし、俺は、お品に追れたときほど希望を感じたときも、一度もない。
　――だが、俺の希望は、お品に追はれる此の不幸にあつたとしたならば？
　彼は暗くなつた。彼は春の來ない冬を感じた。彼は手に觸れる日々のレンズのやうな冷たさを要求した。彼の顏は堅くなつた。
「此處を出てくれ。」
　だが、彼の眉はかすかな光りのやうに動いたにすぎなかつた。彼は帽子を冠ると外へ出た。
　セメント製アパートメントの三階では、女優が三枚のレコードを買ひ込んだその間に、地下室から二組の陰謀團が上げられた。博士は夜更けた階段の中途で酔顏のまゝ反り返るやうになり、お品はだんだんと青くなつた。
　木山はある夜、壯士の部屋からお品の悲鳴をききつけた。それは初めは水の中の言葉のやうに籠つてゐて、木山の耳へは響かなかつた。が、突然、お品の聲ははつきりと高まつた。
「いや、いや、いやだッ。」
　木山は足音を忍ばせてその部屋の前まで行くと、外からドアをノックした。お品は髪を亂して廊下の外へ飛び出して來た。と、いきなり彼を突き飛ばした。彼女は彼の部屋の方へ驅け出した。木山は部屋へ戻つて來ると、お品は机の前に倒れてゐたが、彼女は彼が這入ると逆に默つたまま外へ出て行つた。彼はまたお品の後から部屋を出た。彼

は食堂へ降りて行つた。彼女はテーブルの前に坐つたが、彼から顔をそ向けていつまでも默つてゐた。

「お茶。」

茶が出たが木山は茶を飲まずに、煙草を吸つた。ふと、彼は戀人らしい顔をしてゐる自分が不快になつた。立ち上らうとすると、お品は初めて彼を見上げた。

木山は默つて外へ出た。彼は長い露路を出て立ち停つた。と、後にお品が立つてゐた。

「どうするんだ。」と木山は云つた。

すると、お品は横を向いて泣き始めた。

木山は眉を顰めたままお品の泣き顔を眺めてゐた。彼女は泣きながら露路を來た方へ引き返した。木山はお品に近寄ると彼女の肩へ手をかけた。

「おい、行かう。」

彼はお品の手を握つた。彼は不快な顔を續けて表の方へ歩き出した。一臺の自動車が二人の前を通りかかつた。彼は手を上げた。自動車が停つた。木山はお品を押し込むやうに車體へ入れた。二人は並んで坐ると木山は運轉手に聲をかけた。

「おい、結婚式だ。走つてくれ。」

光りが面に冠つて來た。街は火の點いた扇のやうに廻轉した。屋根が、果物が、ウインドウが、居並ぶ人波の中を、二人は揺れながら朦朧とした風のやうに疾走した。



戯曲　星亭

中村吉藏

第一場

明治六年

橫濱稅關

登場人物、星亭、神鞭知常、柳公使、稅關吏、受附、屬官、其他

○

稅關長室、正面の壁には大時計、その左右に大きなガラス窓が明いてゐて、そこには青々とした海の水平線が劃されてゐる、下手には扉、上手の壁には海圖などがかゝつて居り、一角に露臺へ通ずるガラス戸がある、露臺の横には稅關倉庫の赤ぬりの三角形の大屋根が突き出してゐる、その大屋根と稅關の建物との空間には、棕櫚の木の梢が高く聳えて、海の背景を二分してゐる

○

室內の上手寄には、關長用の卓と椅子、下手の一隅にはやゝ粗末な卓と椅子、

○

幕開くと、二十四才の稅關長星亭、格服のいゝ體に關長の制服、金ぶちの眼鏡、葉巻

をくゆらしながら行儀わるく椅子に倚りかゝつて、英書をひろげてゐる、やゝ離れて下手の卓には、略同年輩に見える神鞭知常が書類を取りひろげて巻煙草を吹かしてゐる。

神鞭。領事先生、やかましく云つて來てるぢやないか？　一たい、クヰーンていふ字は、女皇か、女王か、どちらが正しい譯語なんだね？

星。（チロリと見て）女王だ……女王でたくさんだよ。

神鞭。公文書に女王と譯されちや世界の大國の權威にかゝわるとでもいふんだね、どちらだつて善さゝうなもんだが、毛唐の外交官と來ちやイヤにお高くとまりやがるんだね、……君の氣象ぢやア何處までもこのまゝで押通したいだろう、日ごろ威張りくさつてる奴の頭を折折蹴飛ばしてやるのは、痛快だが、しかしかんじんのあちらの外務省の腰がふらふらしてるんだから、後がめんどうぢやないだらうか？

星。（薄ら笑）外務省の腰が歯痒い程ふらくしてやがるから、己が代つてガン張つてやるんだ、さういつまでも毛唐に嘗められちやつてたまるもんかい。

神鞭。そりや僕だつて大賛成だが、しかしあれ丈骨を折つて君を此地位に推薦してくれた人にめいわくをかけるやうな事になりやしないかナ？

星。陸奥にかい、めいわくどころか、あいつもつむじ曲りだからキッと喜ぶだらうよ……一たい、己が斷わるのをあいつ、ムリヤリ勸めるから、イヤくながら膝を屈して役人なんかになつたつてやつたやうなもんだよ、藩長の藩閥出身以外のものは役人になつて出世は出來ん、何うせ先きが知れてらア（葉巻の烟をぷーッと吹く）

神鞭。ウム、それは全くさうだね……徳川幕府を倒して、その代りに薩長幕府を立てるなんて實に怪しからんよ、これぢや明治維新も看板倒れだ、お互にこのまゝヂッとして見ちやゐられない、何んとかする責任を痛感するね。

星。（冷靜に）今日はインヂアン號が上海から入つて來る日だよ……もう追々着くだろう。

神鞭。さうだ……あの船こそ脫税の札附きだ、こん度こそ取ッちめてやるかね？

星。（大きく頷いて）ウム、己れは待つてたんだ、……今日こそ思切りやつゝけてやろう。

神鞭。よし、……そいつア愉快だ、……唯、例の外務省が何處までも事勿れ主義のヘナヘナ腰と來てるから、毛唐の公使なんかに怒鳴り込まれると、一ぺんにペチャンコだ、折角こゝで骨を折つて上げたやつを有耶無耶に、もみ消すかも知れんぜ、そうなつちや力み損だ、こりや出來る丈問題を大きくして、輿論を呼び起す手段を取るに限るな。

星。ウム、出來る丈大げさにやつつけやうよ、古い條約で定めてある

海關税すら徴すつぽ取れないで脱税品は見逃がしの方針と來ちや、なつちやゐない。毛唐が圖に乗る筈だよ……

神鞭。こん度こそ日本男子つてものが何んな者だか、毛唐に知らせてやるんだね。

星。(葉卷の烟を吹きながら)ウム、日本だつて無人島ぢやアない、やつぱり税關があるつて事を知らせてやろうよ。

受付(扉をノツクして現れる)、ハツ……關長に申上ます、只今、柳公使の屬官の方がお見えになりまして、公使が午後一時出帆のオセアニア號へお乗込なさるについて、急いで小船を出してくれるやうにとの事でございますが……?

星。(冷靜に)それが何うしたといふんだ?

受付。エヱ。いつも斯うした場合には、税關で世話をやいてくれるのが慣例になつてゐると申されまして……

星。今でも税關でそんなよけいな事をやつてたんだな?

受付。ハツ……(躊躇しながら)……實は……あの……外國へお行になる政府の高位、高官の御方には、いつも左様、計らつてゐたやうでございますが……。

星。さうか、そんなムダな事務をやつちやゐられんな、斷ッちまへ。

受付。(困つたやうな顔色で)ヘッ……相手は今度イギリスへお行なさる柳公使でございますが……?

星。税關を船宿と間違へたんだらうから、船宿を数へて上げろと、關長が云つたと、さう云へッ……。

受附。ハツ(當惑しながら退場)

神鞭。ハ、、屬官の奴、目を白黒させやがるだらう。

星。(チヨツト苦笑)さうかも知れん、あゝいふ連中は、何うも頭が悪い、至極當り前の事が分つてないんだからな。

神鞭。公使閣下もキッと蒸汽釜のやうに頭から湯氣を噴き出すよ。

星。ついでにそいつで航海すりや恰度善いハ、、

神鞭、例のインヂアン號の方の手管は何うするかね?何時かも話したやうに生ぬるい事をやつちや脱税品は押へられないし、さればと云つて警察力まで借りちや、アベコベに難癖を附けられるかも知れない。

星。何アに、向ふが白晝公然、悪事を働くんだから、こつちは何んな事をやつたつて正義だよ、目的のためには手段なんか撰ばんでも善い。

神鞭、そいつを撰んだ日には、百年經つても彼奴等の悪事は押へられやしない、そりや何んな手段でも構やしないが……

星。警察力を借りるのはチとまづいかな、他にも思寄はあるのだが、一たいこれは、貴様が引受けて何か名案を考へてをく筈だつたぢやないか?もう時間も迫つて來るぜ?あんまり用事もないのに、貴様をここへ傭ひ込んで、月給を當がつてやるのも、こんな時のお役に立たせるためだよ。

紳縉。(苦笑) ひどい事を云やがる、……だが飛離れた名案といふやうなものも浮ばないよ、まア何時か話し合つたやうな事をやるんだなア、

(扉をたゝく音、受附に案内されて、容體ぶつた屬官が入つて來る)

受附。關長の仰る通り申傳へましたところ、何かの間違ひであらう、自分で直接、御目にかゝつて、お話がなされたいさうでございますから。(一禮して退場)

星。(默つて屬官を見る)

屬官。(氣取つた咳拂ひ、徐々に進み出て) 貴方が長官ですか?

星。はア……何か御用ですか?

屬官。もう御承知の筈ですが、何なら改めて申ませう。このたび、柳公使が、畏くも大命を蒙つて、イギリスへ御越しなされるので、今日午後一時出帆のオセアニア號へ御乘込みの爲めに、こちらへお見えになつて、唯今御休憩中です、それで、こゝから本船まで、小船を出す用意をするやうに御申附です、早速、左樣に取計らつて下さい。

星。あなた、間違へてるんだ、それなら船宿を敎へるやうに、受附の者に云つて置いたから、行つて聞いたら善いでせう。

屬官。(ムッとして)これは怪しからん……こんな場合に、これ位な事は今まで稅關でズッとやつて來てゐます、……まして外ならぬ柳公使が畏くも大命を蒙つて、イギリスへ……

星。(言葉を遮つて) はア、分つてゐます、分つてゐます、まことに御苦勞です、……それで小舟の御用意なら、船宿へ御案内させやうていふんです。

屬官。(焦々した口調) 君は、何うかしてるんですか? その用意は、稅關でやるのがこれまでの仕來りです、一たい、君は何時頃からこゝへ來たんですか? 失禮な事を云つちやタメになりませんぞッ。

星。仕來りならそれが間違つてたんだ……稅關の仕事はあり過ぎる程あるんだから船宿の兼業なんかよけいな事をやるのは、今後改めさせなけやいけないんでね……。

屬官。柳公使ですぞ……柳公使ですぞ……君はこの御方の高貴な御身分を知らないんですか? 小船一つ出すぐらゐ何んでもないぢやアないか?

星。(平氣な調子で) どなたでも同んなじだ。

屬官。(愈々焦れて)、そんな失禮な事を云つて、この職務が勤まると思ふんですか?、今の一言をそのまゝ公使閣下へ復命したら何んな結果になるか分つてゐますか?、

星。(葉卷を手にしたまゝ) さう云つて復命したら善いでせう……それとも船宿へ行くなと、御隨意に。

屬官。(ぶるぶる唇を顫はせ) 失禮な…失禮千萬な…覺えて居るが善いつ…(プリプリして扉をバタリとしめて退場)

紳縉。(吹き出しさうになつて、口を押へ) この富樫にかゝつちやかなわないね、これぢや、判官もカタ無しだハヽヽヽ。

星。そりや何の洒落だい？、
神鞭。謠曲の一くさりぐらゐ習つちや何うだ？、
星。そんな閑があつたら英書を讀まア、お互にノンキな時代ぢやないぜ。
神鞭。だが君のやうに、あんまり一本調子でも困るよ、己はたしなみに謠曲をポツポツ始めてゐる、のんびりするよ、
星。止せよ、近頃は、用のない公卿さんや、沒落しかゝつた士族仲間で大分流行つてるらしいがありや正に亡國の聲だよ…、我々はこの國家を興す爲めに、死身になつてやらなけやならん仕事が澤山あるんだ、オヽイン、ヂアン號がもうやつて來るぜ。
神鞭。先刻、云ひかけて、邪魔が入つたが、いつか話した例の非常手段を取つちや何うだろう（起上つて、傍に寄り、小言でさゝやく。
星。ウム…ウム……あれか………ウム…（頷いてゐる）（扉にノックの音、受附、周章しく入つて來る）
受付。柳公使閣下が、御自身でお越しになりました。
星。さうか？（輕く頷つく）
（柳公使、先きの屬官を始め四五人の從者を連れて、昂然として入つて來る）
屬官、公使閣下が御自分で御越しになつた、出帆の時刻もダン〱詰つて來たから、彼是云はず、即刻、小舟を出したら善からう。
星。（默つて、立つて一禮する）
柳。君が税關長か？
星。はア……何か御用ですか？
柳。（ピリヽと顏面神經を緊張させる）用事は分つてる筈だ……オセアニア號へ乘込まれるやうに手筈をしてくれ、もう時間が無くなる。
屬官。早くしてくれ給へ、閣下も御心せきだ。
從者。すぐ出す事にせんけりや乘をくれたらそれこそ大へんだ。……。オヽもう半時間しかない……（ガヤ〱つぶやく）
星。（冷靜に）こゝは税關ですから、そんな御世話は出來ません……度度斷つた事ですから御承知の筈ですが……。
柳。（壓し附けるやうに）これまでいつもこの税關でやつてた事だ、君は心得てゐなかつたんだらう、何しろ急ぐんだから、小舟を出せッ。
星。税關でそんな仕事をするのは間違つてゐます、外務省でも間違つた仕事をさせちやいけない筈です。
屬官。まだグズグズ理窟を云つてるんか？　この火急の場合に不埒ぢやないか。
柳。君は默つて居れッ……出帆時間がもう迫つて來るんぢや。早くしてくれ、……麻呂が命令する。
星。そんな命令は船宿でなさつたが善いでせう……その方へ案内させませう。
柳。（興奮した顏色）これ丈云つても汝には分らんのか？　麿は苟く

も大命を蒙つて、イギリス國へ赴任するんぢや、萬一、この船に乘り遲れでもしたら、相濟まん事になる、即刻、小船の用意をせいッ。

星。(冷靜に)閣下は大命を受けてゐられませうが、本官へは閣下をオセアニア號へ送り屆けろといふ大命が別に下つてはゐませんから、稅關で、閣下の命令を受けるわけにはまゐりません、お氣の毒ですが致し方がないのです。

柳。(沈默、相手を睨んでゐる)

屬官。(ウロ〳〵して)公使閣下の御命令をきかんのか?

星。(沈默)

(沖合でボーと汽笛が鳴る、大時計の振錘の音が耳立つ)

柳。(窓の方をのぞき込んで)コリやグズグズしちや居れん……君、たのむよ、(弱つた調子で)便宜を計つてくれ給へ、乘り外づしちや大へんだ……君、頼むよ。

星。お頼みなんですか? さうですか?

柳。(額の汗を拭いて)ア、何卒、便宜を計つてくれ給へ……頼むよ。

星。(氣輕な調子で)お頼みなら何んとかしませう。……オイ、君、直ぐに誰か呼んでくれ。

神鞭。ハツ……(と扉をあけて、)關長がお呼びだ、誰でも早く來てくれツ

(稅關吏が二三人、バタ〳〵と、駈けて來つて、顏をならべる)。御用ですか?……

星。(口早な調子で)ア、早舟を一つ、直ぐ出すんだ、直ぐ……公使閣下がオセアニア號へ御乘込みだ……い〻か? 直ぐだぜ。

稅關吏。はッ……

星。大急ぎだ、大急ぎだ、間に合はせんといかんぞ……。

(稅關吏、忙しくかけて行く)

星。何卒、直ぐあちらへ入らして下さい……大丈夫、間に合はないやうなヘマはやらせませんから……。

柳。何うも御心配かけたな。

星。イヤ、何うしまして。(と一行を送つて行く)

神鞭。(双眼鏡を持出しながら)大急ぎだ、大急ぎだはよかつたなア、星つて奴はまるで小兒のやうな大人だ……イヤ大人のやうな小兒かな……(この時、又汽笛が太い、長い音をひゞかせる、神鞭は、双眼鏡を持つて露臺へ出て、沖の方を眺める。)

星。(入つて來て、苦笑しながら卓によりか〻る)

神鞭。(改まつた調子で、ガラス戸越しに)關長、インヂアン號が入つて來たらしいです。

星。(露臺へ出て來る)さうか……(双眼鏡を取る)

神鞭。あの防波堤のずつと向ふに、黑い烟の見えるのがそれらしい。

星。ウム……たしかにさうだ……は〻ア、こちらには公使一行がやつて行きよるぜ、みんなすました面をしてやがる。

神鞭。大分手きびしかつたね、何うなる事かと思つたが、向ふが折れ

て出たんで、うまくケリがついてよかつたよ

星。縱まれや越後からでも米つきに來るつていふからなハヽヽヽヽ。

神輿。公使閣下もチヨツト寄くなつたやうだぜ……

星。自由平等の實地教訓だ……ア、こん度はインヂアン號の番だぜ……
……今日こそ免すもんか？

神輿。でね……（と小言でさゝやく）

星。ウム、よからう……チツと村芝居じみるが……よろしい、早速、家の書生を呼ばう……

神輿。我々は知らん顔をしてるんだよ。

星。ウム……そりや勿論さ（頷く）

汽笛が一しきり鳴り出す、遠くで「柳公使萬歲」の聲。

（廻り舞臺、又は暗轉）

第二場

横濱波止場の一角。

登場人物、波止場人足、菓子賣の支那人ボーイ、書生、税關吏、その他大勢。

○

桟橋にかゝつた蒸汽船の黑と赤に塗り分けられた船腹の一部が見えてゐる、一方には積荷がある、桟橋につゞく廣場に、波止場人足が群れてゐる、ザンギリ頭や、チヨン髷や、拾つて來たやうな古帽子を阿彌陀に冠つたのもある、中には馬の腹掛の洗つたのを着てゐたり、糠袋で睾丸を包んだのも交つてゐるが、大てい三人、五人が思ひ／＼に塊り合つて、土の上で手なくさみをやつてゐる。船へ物賣りに行つた支那人ボーイが、箱をかゝへて桟橋を通りかゝる。

波止場人足の一。オイ、ちやんころ、何か菓子あるか、見せな？

波止場人足の二。もう午過だろうな？ オイ、肉まんちゆうか何かあるかい？

支那ボーイ。ない、ない。（首をふる）

波止場人足の三。コラ、ちよいと來いつていふに、……いふ事を聽かねえか？

支那ボーイ。もう皆賣れた、ない、ない……。

波止場人足の四。嘘を吐くとひどいぞツ、賣殘りがある筈だ。

波止場人足の一。汝も商賣ぢやねえか見せろて云やア見せろ。

支那ボーイ。汝たち、錢ない、品物たゞ取りする、ベケベケ（と逃げかける）

波止場人足等。何んだと？……このちやんころめツ？（バラ／＼と惣立ちにかゝつて、支那人ボーイを毆る、蹴る、菓子箱はひつくり返され、無數の黑手が、奪ひ合する。支那人ボーイは悲鳴を上げる。

（一人の書生が來かゝつて、叱り附るやうな大聲を出す）

書生。オイ、コラ……何をするツ？

支那ボーイ。旦那、助けてくれ……この人足、いつもよくない事す

る……泥棒ある。
(波止場人足等は狼狽へて、ちり〴〵になる)
書生。何に、泥棒だ？　日本人を泥棒呼ばゝりするのはケシからんぞ。
支那ボーイ。菓子たゞ取る、錢くれん、泥棒ある。
書生。菓子をいくら取つたんだい？
支那ボーイ。喰殘りの菓子、皆取つて行つた。
書生。(銀貨を箱へ投入れ)さア菓子代だ、それでいゝだろう。
支那ボーイ。難有う、難有う。……私助かる、難有う……(叩頭しつつ、小足早にかけ去る)
書生。(苦笑、人足等を手招ぎする、一人二人、寄つて來る)君たちは、チといゝたづらがひど過ぎるよ……こゝらに頭はゐないのか？
波止場人足の一。(進み出て)へイ……何處の旦那だか知らねえが、只今はお庇で御馳走さまに成りまして、難有うござへます、……實はおあしは、これから稼いで賃金が手に入つてから拂うてやるつもりでござへましたんで……
波止場人足の二。何うも相すみません、……警察の旦那なら、何卒この度だけは御見のがしをお願ひ申します、これからはキッと皆、氣を附けます。
書生。イヤ、僕はそんなものぢやアない、チと君たちに頼みたい事があつて、頭に逢ひたいのだ。
波止場人足の一。へエ、左樣でござへますか？役割は今こゝに居りませんが、てまへがその代りをやつて居ります、何んな御用事でござまへませう？
書生。君等の仲間に、何時この波止場を逃げ出しても構はんやうな獨身者がゐるだらう、それも成るべく腕ッ節の強い、がんぢやうに出來てる奴が善いんだ。
波止場人足の一。へエ……そんな奴はいくらでも居るには居りますが、それを何うなさらうていふんです？
書生。そんなものを二十人許り集めてくれ、用事はそれから頼むんだ、儲け仕事だよ。
波止場人足の一。へエ、儲かりますかな、ぢやア善うがす、早速集めませう。
書生。そして、あそこの積荷の蔭へ連れて來てくれ。(自分で、その方角へ動いて行つて、しやがんでゐる)
(波止場人足の一は、あちら、こちらで仲間の者とひそ〴〵さゝやき合ひ、やがて人數を集めて書生の傍へ寄つてゆく)
波止場人足の一。へイ、旦那、こいつ等アみんな宿無しでござへます、御用の筋を仰つて下せへ。
書生。ア、御苦勞だつた。實は内密の頼みだが(云ひ〳〵財布からザラザラと銀貨をぶちまけて)さア、これを一顆へ一兩づゝ分けてやつてくれい、手附けだ。

波止場人足の一。ヘイ……これを分けるんですか？（躊躇してゐると、あちこちからウヨウヨ黑い手が出るので、怒鳴り附けてをいて、分配する）

書生。外でもないが、先刻インヂアン號が上海から入つて來たな、今に荷揚げをやるだろうが、あれは何時も寶石類だの、貴金屬だの、毛織物にしても價の高い上等の品物ばかり積込んで來ちや公然に脫税をやつてゐる、君等もそれを手傳つてるだろう？

波止場人足一。ハイ……何しろこちつもそこが附け目で、仲間の奴等も情女がやつて來るやうにあの船を待ちこがれてるのでごぜへますよ、ふだんは一日働いて、タカが天保十枚か十五枚、一晝夜ブッ通しが、やつと二十五枚くらゐにしか附きやせんからやり切れません。ところが脫税品と來りやその二倍にも、三倍にもなるんで、皆助かりまさア。

波止場人足の二。全くでごぜへますよ、僕には、あんなうまい事に有附かなけや、ちごくも買へませんでねへゝゝゝ

書生。ところが、その脫税品が、つもりつもつて見ると、國の爲に年年何十萬、何百萬つて莫大な損害になつてるんだ、第一、日本をバカにして、條約なんかてんでふみ附けてるんだからこの國の面目も何もメチャ／＼なんだ、君等も口惜しいとは思はないか？

波止場人足の一。（苦笑）へゝ、そう仰りやまアそんなものでごぜへますが、こちとらは何しろ、其日ぐらしの、しがない人足でごぜへますでな

波止場人足の二。百でも、賃金のよけいな方が難有いんでさア。

人足大勢。……全くだよ……。

書生。ウム、君等の身になつちや、さう考へるのも萬更無理とは云へないが、まアこの場合だ、一つ國の爲めに働いてくれんか？　六ツかしい事ぢやアない、君等が脫税品を商館の倉庫へ運び込むのを、今日はチヨツと方角をかへて、税關の倉庫へドン／＼持込んでくれりや善いんだ、今の一兩は手附けだ、うまく行けや又三兩や五兩は出せる、その上、當分こゝを逃出しても直ぐに困らんやうな處置は附けて貰つてやる、何うだ？　やつてくれるか？

波止場人足の一。何うだ？　兄弟？……

同　の二。さうさなア、さう一時にどつさりお金を戴くのは、難有いには難有いが、何んだか後がこわいなア。

同　の三。ウム、チツと話がうま過ぎるぜ

波止場人足の一。旦那は税關から云附かつて來たんだね？

書生。さうだ、これは極々內分だから、決して他言しちやならんが、こん度の税關長がなか／＼やかましい人で、斯うした思切つた事をやつつけやうていふんだ、で、若し君等が素直に云事を聽かなけりや、その一兩は取上るし、脫税品屋の合棒と認めて、早速この波止場から追ッ拂はれるんだが、それでも善いかね？

波止場人足の一。そいつア困りまさア……何うだ、兄弟、思切つてや

つゝけやうか？

波止場人足の二。エ、エ、やつけつやうよ……かうしてピカ〳〵する一兩の顏を見ちやかぶりは振られねえやな。

同　の三。さうだ〳〵、國の爲めだつて云やア猶更だ。

同　の四。己れたちだつて日本男子だぜ。

同　の五。ウム、見すぼらしいが、これでも日本男子だハ、、

書生。(滿足さうに)ウム、皆、思切つてやつてくれい。

波止場人足の一。だが旦那、荷物を運ぶ時は、毛唐の番頭めらが、碧い眼玉を光らして、附切つてゐますぜ。

書生。そんな奴は、ぶんなぐつて了へッ。

波止場人足の二。後で別條ありませんか？

書生。何アに、構ふもんか、泥棒仲間だからな、邪魔すりや、海ン中へたゝき込んでやれ、だが成るべく負傷はさせたくないな、殺しちや愈々面倒だから、そこらは手加減をしてやつてくれ。

波止場人足等。さうしたお許しが出たら喜んでやつつけますよ。

同上。喧嘩なら皆ヒケは取りませんや。

書生。だが、手筈をちがへて、ヘマな事をするなよ。

波止場人足の一。それはてまへが心得てゐまさア、……棒の先へ赤い小ぎれを附けて、ふり廻はすのを相圖に、やつつけませう、……兄弟、いゝかい？

(波止場人足等。頷き合ふ。)

書生。よし、話はきまつた、仕事がすんだら稅關の倉庫の、裏手の小屋へそーッと集まつてくれ……僕はそこで待つてやう……ぢやア頼んだぜ(と立去る)

(波止場人足等は、後影を見送つて、さゝやく)

○　面白い仕事が舞ひ込んだな。

○　(銀貨をいぢりながら)化かされたんぢやアあるめえな……こんなものは始めて握つて見た。

波止場人足の一。あそこで旗を振つて番頭さんが相圖をしてらア、棧橋へ行かうよ(ゾロ〳〵出かける)

沖合で汽笛が鳴る

棧橋の上を、日本人、西洋人、支那人のさま〴〵な風俗をした乘客の群が入れ亂れて通る、その間を縫うて忙しく手荷物が運ばれる

棧橋の人通りが稀れになつた頃、先刻の波止場人足等が、そこにかゝつてゐる汽船の蔭から、一つ、一つ、荷物を運び上げて、上手へ行きかけ、急に方角をかへて、下手へ向く、西洋人番頭Aが飛び出し「ヘシツ、シツ……」と上手をさす、知らぬ風をして行きかける、番頭は大股に走りかゝつて、いきなり人足の腰を蹴る、つゞいて、他の人足も、荷物を下手へ運びかける、番頭Bが飛びかゝつて、突き飛ばす

波止場人足の一が、合圖の棒の赤い小切れをふる、手あきの人足が、番頭等になぐりかゝる、亂鬪が始まる、その中に人足等は番頭

たちを棧橋から海へ投込んで、一さんに荷物を下手へ運び、そのまま姿を消して了ふ。

税關のボートが、づぶ濡れになつた番頭等を救ひ上げ、棧橋へ押し上る

税關吏甲。お負傷はなかつたですか？

番頭A。難有う、難有う……危いところでした、おかげで命助かりました。

税關吏乙。とんだ災難でしたな。

番頭B。難有う、難有う……亂暴者、困ります……大切な荷物、何うしましたか？

税關吏甲。それは税關の方に預つてあるでせうから、一しよに行きませう。

番頭A、難有う、難有う……

税關吏A。さア、君も一しよに行きませう。

番頭B。何うも難有う……難有う……。

（連れ行く）

第三場

再び税關々長室

登場人物、星亨、西洋人番頭A、B、パーク公使、A國領事、B國領事、その他、第一場の人物大勢

○

神鞭知常は、双眼鏡を手にして露臺に立ち、沖合を眺めてゐる、星亨は室内に、税關吏甲、乙と對坐してゐる。

税關吏甲。脫税品はすつかり運び込ませまして、何處が出先で何處何處の商館へ入るのか、一々調べ上げました、この通りでございます

（手帳を出す）

星。（見て）フム……これでよし……御苦勞。

税關吏乙。向ふは、一々荷物と引合せてすぐ渡してもらへるものと虫のいゝ事を考へたのでせう、こちらの問ふのを待ちかねたやうに、何も彼も。ヘラヘラと喋舌つて了ひました、スツカリ泥を吐いたわけです。

星。（微笑）はア、さうか……づうづうしい奴等だ……オイ、神鞭……。

神鞭。（入つて來る）用事かね？ 荷揚はもうスツカリ済んだやうだ、他にうさん臭いのは見當らない。

税關吏甲。こん度はうまく行きました。

星。考へ通りに行つたやうだ、……神鞭君、早速脫税品の目錄を書き上げて、沒收公賣の處分に附する旨の揭示をやつてくれ。

神鞭。はア……愉快だ……。

税關吏甲。番頭どもは何うしませう？ 沒收公賣の處分の事を申渡しませうか？

星。こゝへ連れて來い。

(税關吏、甲乙、退場)
神鞭。(文案を書きながら) こいつを見たら領事どもが眼を逆さに吊つて、怒鳴り込むだらう、彼奴等に取つちや、波止場に海嘯が立つたやうな出來事だからな。
星。ウフ、、、、。
神鞭。外務省もやつぱり海嘯をかぶつたやうな大騒をするだろう、寺山先生、眼を廻はして、引ッくりかへらなけや善いが……
星。ウフ、、、、、。
(扉あいて、税關吏甲乙に導かれ西洋人番頭、A・Bが入つて來る、チョッと叩頭する)
星。(葉卷の烟を吹きながら) ア、君たちはぬれ鼠だね、風邪を引きやしないか?
番頭A。かまゐません……荷物の事片附いたらすぐ歸つて着がへします、何卒早く引渡す手つゞきして下さい。
同B。ひどい目にあひました……海の水呑みました、鹽辛い……鹽辛い……。
星。お氣の毒だつた……でもまア助かつて善かつた。……
神鞭。折りよく税關の船が通り合せてゐたもんだ、君たちも命拾ひをした。
税關吏甲。運が善かつたのです。
番頭A。有難う……有難う……御禮は何度云つても云ひ足りません……。
同B。お蔭で命助かりました…それは私たち忘れません。
星。負傷もなかつたんだね?、
番頭A。ハイ、負傷しません、たゞ少し肱を擦りむきました、棧橋へ這ひ上ろうとしましたんで……。
同B。私、腕の筋が少し痛みますが、大した事ありません。
星。まア善かつた……善かつた。
番頭A。あの荷物直ぐ引渡してくれますか?、
同B。人夫傭うて、引取つてよろしいですね?、
星。荷物?ア、あれか…あれは税關の鑑査を受けない脫税品だからあのまゝ引渡す事はならん、君等は歸してやる。
番頭A。エ……脫税品?、
同B。それ困ります…税金出しますから引渡して下さい。
番頭A。これまでこゝの税關、そんなムチヤな事、しません……
星。(冷笑)、これまで税關が脫税品を見て見ぬふりをしてたのが間違つてるんだ、吾輩は條約の文面通りビシ〱處置するからさう心得てもらはふ。
番頭A。それ困ります……貴方そんな事するなら領事へ訴へます。
同B。領事からかけ合ふたら、タヾですみません、何うもヘンです税關の役人、キッと波止場人足けしかけました……
星。(相不變葉卷をくゆらせながら) そんな馬鹿な事はない、……領事

でも何でもやつて來るが善い、吾輩がよく云つて聞かせる事があるから……。

番頭A。(急に哀願的に)あなた、こん度だけ許して下さい。

同　B。高い金出して、仕入れた品物許りであります……税金いくらでも拂ひますから……。

星。いけない、今更税金を拂ふなんて云出したところで仕方がない。高い品物なら始めから鑑査を受ければ善いんだ、以後よく氣を附ける事だ。

番頭A。以後氣を附けます、この度だけ何卒見のがして下さい、お願ひします。

同　B。お願ひします。

星。いけないッ。……もう歸ッたら善いだろう。

税關吏甲。さア歸れ、歸れ、歸れッ

同　乙。歸れ、歸れ、歸れッ。

(番頭A、B、怨めしさうな表情で、税關吏甲乙に背から押されながらスゴスゴと退場)

紳權。ハヽ、これで何年ぶりかの鬱忿が晴れた……ア、早速掲示させて來やう。

(と出て行く)

(星亭は、葉卷の烟を輪に吹きつゝ、愉快さうに室内を歩き廻る)

税關吏甲。(入つて來る)階下でブツ〳〵云つてゐましたが、とうとう追歸してやりました、皆が同謀でやつた事だから、領事から手きびしく掛合せて、今に一四一四東洋の黄猿の面の皮を引ンむいてやるなんて、ひどい惡たいを吐いて行きました、よつ程口惜しかつたのでせう。

星。(苦笑)東洋の黄猿だつて?……フーン?

税關吏甲。一たい今まで税關のやり口があんまり手ぬるくつて、毛唐て云やア始めから一目も二目もをいてかゝつたのだから、彼奴等を増長させ切つたのですよ、こん度こそ胸がすーつとしました。

星。面の黄ろい猿だつて、面の白い猿より智惠が足らんとは限らない。今にもつと懲りさせてやるからさう思へッ。

税關吏甲。もうこれからはメツタに脱税なんかやらせません、この手でドシ〳〵やつつけてやります。

星。身分に高下はあつても、人間の本當の値打は、割り當てられた職務を正當に行つてゐるか、何うかできまるんだよ、條約を反古にされても、毛唐を怖がつて默りこくつてる大臣より、脱税品なんかドシ〳〵取つちめる税關吏の方がよつ程えらいんだ、これからは勉強するんだね。

税關吏甲。ハイ、御指圖を受けて大にやります。皆もさう云つてるんです、こん度の税關長は、お年は若いが實にキビキビして氣持が善い、こんな長官の下で働くのは働甲斐があるつて……お世辭ではございません。

星。さうかい……さうだらう。

紳士。(扉をあけて)領事がお揃ひでやつて來た……。

星。ハヽア、やつて來たか？　通してくれ。

稅關吏甲。はッ……(退場)

紳士。先生方、血相をかへてるよ。

星。白猿が赤猿になつて來たのだらうハヽヽヽヽ。

(A國領事とB國領事とが連れ立つて入つて來る、近づいて手をさし出す、星、握手する)

星。まアお掛けなさい。

A國領事。難有う……實はパーク公使があなたにお談したい事があつて、今にこゝへ見えますが、よろしく云つてくれと云はれました。

星。さうですか？　パーク公使が？

B國領事。私たちが來たのは外の用事です……今日、上海から入つたインヂアン號の荷物の件です、……わたしたちの國の商人、皆、困つてゐますから何卒返してやつて下さい。

A國領事。パーク公使も大へん心配しておられました、これが國と國との表向きのかけ合ひになると至極めんどうくさい事になる、日本のためにもよろしくないから、此度は默つて引渡す事にして下さい、その方がお互によろしいでせう。

B國領事。何卒さう計らうて下さい、勿論相當の稅金は拂はせます。

星。ア、あれですか、あれなら前の揭示場を見て下さい、條約の文面通り沒收處分に附して公賣する公告が出てゐます。

A國領事。エ……沒收……公賣……それはひどいです……無法です……早速取消して下さい。

B國領事。商人たちが惡意あつてやつたのではありません、全く不注意だつたのですから、沒收はやめて下さい、……罰金を納めさせます。

星。いけません、脫稅をやつて、見顯はされた後で、稅金を納めるからと云つても、許される筈はないでせう、國を換へて御覽なさい、日本人があなた方の國へ行つて脫稅をやつた場合、後で稅金を納めたら稅關でその荷物を滿足に引渡してくれますか？

B國領事。それ理屈です……あの商人たちが見す／＼大損するのが氣の毒ですから、私、あなたに察していたゞきたいのです。

A國領事。こんな事件、度々起ると、貿易商館は片ッ端から破産します、皆逃げて歸ります、この港もさびしい昔の田舍の漁師町になります、日本のためにもよくない事です、

星。(苦笑)商人たちが大損する前に、日本は今日までの脫稅でいくら大損させられてるか分りません、關稅を納めないで密輸入をやつてゐるやうな不正な商人は、一人不殘追ッ拂つてやりたいくらゐです。

A國領事。(ムッとして)あなたが脫稅品を押へるなら、正當な手續で押へたがよろしい、あのごろつき人足、あなたが云附けたに違ひない。

B國領事。この事、外務省へ談判します、あなた、それでよろしいか？

星。吾輩は知らない、何うなと勝手にしたがよかろう、沒收した物品は明日までに公賣する……たゞそれ丈けです。

A國領事。あなた頑固です。

B國領事。あなた强情です。

星。何んと云つてもダメです、もうお歸んなさい。

A國領事。失敬です。

B國領事。禮儀知りません。

受附（扉口に現れ）パーク公使が、お目にかゝりたいと云つてゐられます……それから領事さんを一寸呼んでくれと仰います……

A國領事。さうか……

星。サア、サア、こゝへ通してくれ。

（受附、領事二人は退場）

星。バカヤローハヽヽ。

神鞭。こん度はパーク公使と來たか、チョッと手ごわいぜ、今のバカヤローどもたア違ふだらう。

星。ウン……こん度は大バカヤローだ。

神鞭。さうかも知れないハヽヽ、

（扉、ノックされる、神鞭、迎へに出て、パーク公使を招じ入れる、公使は鼻眼鏡を光らせ、傲慢な態度でノツ／＼入つて來る、神鞭はそのまゝ退場）

パーク公使。（手をさし出し）今日は……

星。（握手）今日は……

パーク公使。私、今日、柳公使お見送りしました、ついでに思ひ出してこゝへ立寄りました、外の用事ではありません、あのクヰーンの譯語の間違ひです、あれ直して、更めて出して下さい。

星。ア、あれですか？　間違つてはゐません。

パーク公使。イヤ、女王といふ譯語間違ひです、女皇です、……女の皇帝ですから、女皇が正しいのです、でなければ不敬に當ります。

星。女皇といふ譯語はありません、女王で善いのです、あなたが考違ひなさつてるんです。

パーク公使。イヤ、女の天子ですから、女皇です。

星。あなたは日本語がよく分つてゐないのです、勿論英語ならあなたは間違つた事を云ひますまいが、日本語の事は、日本人の吾輩があなたなんかよりずつとよく知つてゐます、日本語に譯した文字の事をあなたからかれこれ云はれる道理はありません。

パーク公使。（ダン／＼興奮した調子になる）でも、女王は、女皇より一段、位が下るのです、私よく知つてゐます。

星。さういふわけではない、意味は同じ事です。

パーク公使。同じ事なら女皇と直して下さい。

星。同じ事だから直す必要はないのです、こんな事を彼此いふのは下

らないぢやアないですか？

パーク公使（顔色をかへ卓をドンとたゝく）下らないッとはケシからん……我國の王室に對する不敬だ。

星。不敬ぢやアない、どちらでも同じ事だから同じ事だと云つたんだ。

パーク公使。……君ぢや分らんから、外務省へ直接談判するッ。

星。御隨意に……。

パーク公使。（噴々して起上つたが、又立戻つて……）ア……話は別だが、領事から聞けば、今日、インチアン號の貨物を陸揚する時、税關ではごろつき人足を手先に使つて、番頭へ喧嘩を吹きかけ、打つ、なぐる、しまひには海へ投げ込んだりひどい、ひどい事をやつた、その隙に、貨物を税關へ持込ませて、脫税品でもないものを、脫税だとケチつけて、沒收したといふ事だが、不都合千萬ではないですか？　重大な國際問題を起さぬ中に、早速返したら何うです、今なら默つて居る事にしませう。

星。その事なら當方に手落はありません。

パーク公使。脫税品なら、何故、あなたは正當の手續で差押へなかつたのですか？

星。正當の手續をしてゐます、不正な手續をやつちやゐません。

パーク公使。イヤ、違ひます、何故、ごろつき人足に亂暴を働かせましたか？　泥棒、强盗見たやうな眞似をさせましたか？

星。（葉卷の烟を吹いて）そんな事は一向知りません、荷主と、人足とひどい喧嘩をやつたといふ事は聞きましたが、それは毎日のやうにやつてるんだから、珍らしくもないんです……尤も海へ投込まれた者は折よく税關のボートが行合せて、助けたさうで、生命に別狀がなかつたのを何より悦んでゐるんです……

パーク公使。（睨み付けて）あなたが何と云つても、私、税關の役人がやつた事と認めます。

星。では、何んといふ役人がやつたのか、姓名を云つて下さい。税關の役人は制服を着けてゐます、裸體で荷運びはやつてゐないから、役人は役人、人足は人足と見分がつく筈ですが……。

パーク公使。（焦立つて）税關役人と人足と相談してやりました、分つてゐます。

星。では何處で相談してやつたか、あなた御存じですか？

パーク公使。（怒氣を含んだ口調）もう〳〵、あなたとかけ合ひしません、クキーンの譯語でも我國を馬鹿にしました、こん度もあなた、我國を馬鹿にした……もう相手に出來ない、外務省へ行つて、嚴重に談判する……。

星。御勝手になさるがよろしい。

パーク公使。あの貨物は、それまで處分する事出來ません。

星。明日、公賣してしまひます

パーク公使。（哮る如く）日本役人泥棒だ……大泥棒……。

星。(赫となる)何んだ……も一度云つて見ろ。
パーク公使。日本役人、大泥棒……。
星。無禮な事を云ふかッ。(横面をなぐり附ける)
(扉があいて、神鞭始め五六人の税關吏がドヤ〱入つて來る)
パーク公使。なぐりました？　承知出來ん……。
神鞭。まア〱怒つちやいけません。
(押し返し、もみ返し、公使はそこへ引倒される、皆でなぐつたり蹴たりする。)
パーク公使。……何するあります…何するあります……。
(領事等がかけ込んで、パーク公使を助け出さうとして、又なぐり合ひが始まる)
星。(傍に立て見ながら)。けがをさせちやいかんよ……これで已も役人のやめ時かへ、、、、、、
(混亂の中にカーテン)

第四場

明治十七年九月、
新潟、西堀通、不動院、――自由黨北陸大會、
登場人物、星亨、加藤平次郎、その他の辯士、幹事、有志者、壯士、警部、巡査
傍聽者は、舞臺の上にも、又觀客席の一隅にも陣取る、
○

內外の拍手の音につれて幕開く、正面は本堂內陣の黑光する大柱から大柱の間を縫うて幕が張通してある、一方には、辯士の揭示、廣瀨鎭三、南磯一郎、野崎榮太郎、寺島正節、小塚義太郎、安東和風、鱸信行、杉山重儀、森山信一、山際八司、高岡忠郷、大竹貫次、加藤平次郎等の名前の上に、それ〲演題を書出した細長い紙が、旗のやうに列べて貼つてある。そして最後のところに「政治の界限……パリストル、星亨」と掲げてある。
一段高い演壇の、赤の布片をかけた卓の背後には、古びた二枚折の銀屏風が立てゝある、
幹事。(演壇の下手に立つて)。……エ、これからこの度北越七州大會の爲めに、東京の自由黨本部から特派されて來られましたパリストル、星亨先生御演說があります、星亨先生は諸君、御承知の如く、長らく英國に留學されまして、歸朝後、司法省代言人の職務に從事せられ、その學識と辯舌とを以て、嘖々たる名聲を天下に轟かせてゐられますが、自由黨に加盟せられて以來、萬事を擲つて非常に熱心に黨のため又國家の前途のために盡力してゐられるのは、我々一同感謝に堪へないところであります、これから御演說がありますから御謹聽を願ひます。
(拍手、大喝采、星亨萬歲の聲のどよめきの中に、金縁の眼鏡、便々たる太鼓腹の目立つフロックコート姿で星亨が悠々と演壇に現れる)

臨監の警部、數名の巡査は、上手の椅子に倚りかゝり、手帳をひろげて筆記の用意をしてゐる、席上の、辯士、有志者、壯士たちも息を呑んで耳傾ける。

星。諸君、我輩の演題はこゝに揭げてある通り「政治の限界」といふのである、簡單にいへば、あらゆる物事には限界――限りがあるもので、政治もやはりその通りに限界――限りがある、決して限りなく萬能なものではない、イヤ、誤つて萬能だなどと妄想して、何にも彼にも手出をし、いらぬお節介をやき過ると、それこそ、拔差ならぬ、とんだ事になるのである、尤もこれは今日の日本の話ではない、もつと廣い世界の話であるが、先づ例をロシヤと獨逸の政府に取ろう、諸君も知らるゝ通り、獨逸の如きは已に國會は開けてゐるが、その國會は唯、紙の上に書かれた國會であつて實際は何の役にも立たぬのである、之加、ロシヤの如きは、まだ國會の開設さへなく、政府の政治萬能であるから、吾輩の演說に例を引くには、持つて來いの國である……道理上からいへば、政府の務めは二つより外にあるべき筈はない、第一は外國からの侵略に豫め備へる事であり、第二は、國內の安寧秩序を維持する事である 即、この內憂外患を防ぐ爲めには、內務、外務、兵務の三つ丈があれば事足るのであつて、その外は必要がない、イヤ全く無用の長物である、そして、その兵を募るについても、國々で各々その方法が異つてゐる、或は國民何十歲以上の者は義務として悉く兵隊に出ろと云つて募る國もある、或は最初から志願兵丈で軍隊を組織してゐる國もあるが、吾輩の例に引くロシヤや獨逸では、否でも應でも、兵役は國民の義務だと云つて、首ッ玉へ繩を附けてゞも引ずり出すといふ強制制度である、兵隊は成るべく不足させて置く方が善い、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、然るに彼のロシヤや獨逸は、今日、益々兵備の擴張に汲々として努めてゐる、兵備を限りなく擴張すれば、勢、外國侵略の戰爭なんかつい オッ始めねばならん事になつて、その結果は却つて自ら滅亡するやうな、とんだハメに陷るかも知れないのである。

警部。辯士、注意ッ…。

傍聽者。默れッ！……バカヤロー……。

警部（起上つて）何んだ？……どいつだ！

星。(苦笑) これは獨逸の話である、注意して聞いて貰はなけや困る…彼の獨逸、ロシヤの二國では、又鐵道を官設にする、電話や、郵便にまで政府が一々、手を出して干涉する、こんな事は、我國幕府時代には、人民がやつてゐたもので政府のお世話に預かつてはゐなかつたのである、その頃は、例の三度飛脚とか何んとかいふものがあつて、敢て差支がなかつたのである、然るに、政府が一々、手を出して之れに干涉し、人民の膏血を絞つた稅金を濫費して、損をしてゐるのは甚だ惡い事である、その上、彼の國では、宗教や教育上の事にまで、いらざる世話をやいて、僧侶や牧師にまでヤレ教正だ

の、講義だの、と、コケ威かしの役名をクッ附けさせたり、かと思ふと一方では或は、自由主義の本は讀んではならんとか、或は過激な思想の研究は禁止するとか、更に限りなく干渉するのを善い事のやうに思つてやつてゐる、我國幕府時代にこんな事まで一々、政府のお世話には預らなかつたが、無學文盲な者ばかりがゐたわけでもないのである、果して然らば、これも全く、いゝよけいなお世話であり、いゝ、いらざるお節介である……

警部。辯士！ 注意なさいッ！

傍聽者。それこそ、よけいなお世話だ……。默れッ……。よく聽けッ……。

星。……そして、又彼の國には、人間に等級があつて、その等級は、即、政府が規則を以て、これは大貴族とか、これは小貴族とか、何んとか彼とか云つて階級を造つて置くのである、これも甚だ悪い事である、（傍聽者の中から。ヒヤ〳〵と呼ぶ）……何んとなれば、人間といふものは元來斯の如く貴賤の差別のあるものではない、貴いからと云つて、目が三つあるのではない、やはり我々と同じく目は二つしかない、加之、彼の國で貴族など云はれてゐる者は、却つて一般の人民よりは何も知らぬ者が多いのである、試に見られよ、我國の幕府時代の貴族——即、彼の公卿とか、大名とかいふ者にもずいぶん無智な者があつた、所謂お芋の煮えたも御存じない連中がナカナカ多かつたのであるといふ事を聞いてゐる、果して然らば、これは貴族、彼は平民と、身體に験しの附いてゐない者を、特に、政府が規則を以て、その等級を造るといふのは、徒らに政治萬能の妄想に憑かれ、實際の政治の限界を越へて、よけいな事をしてゐるのである、のみならず、甚だ國に害があるのである……

警部（起上つて、卓をたゝき）辯士……中止ッ！……

（聽衆、鬨の聲を上げ。警官引込めッ。……謹聽しろ。……よけいな世話をやくな……。政治の限界を知らんか？……。と喧躁する。）

星。（警部の方を睨み）よろしい、分つた……諸君、人間の等級は天賦、即、自然から授かつたものゝ多いか少いか、高いか低いかに依つて區別しなければならないのである……あの演題の辯士の名前の上にバリストルなんて、誰かゞよけいな肩書をかいたが、バリストルは代言人の商買用の看板である、辯士をエラク見せかけるために、書くべきものではない、これも誰かゞいゝ、いらざる世話をやいたものである（拍手喝采）

警部。（つか〳〵と歩寄り、フロックコートの裾をとらへ）中止すると云つてるのが、分らんですか？

星。分つてるから、今までの演説は中止して、更に外の演説をやるのだ……日本の事ではない、吾輩が若しロシヤの政治を取るとすれば、すべてこんなよけいな、害のある事は斷然止めて了ふ、若し我國の大政大臣になつたとしたら、斯うした事は決してやらないのである。

警部。（演壇に上つて行き）お止めなさい……お止めなさいッ……井下

の演說は治安に妨害があると認めますから、中止解散を命じます……速に演壇をお下んなさいッ。

星。何？治安妨害だから中止解散？一たい何處が治安に妨害があるのか？

警部。それは說明の限りではありません、たつて聞きたくば、警察署へ御出なさい。

星。吾輩は警察へ行きたくて聞いてゐるのぢやない、君が中止したから、何處が治安に妨害があるか、聞いてゐるのだ？たとへ吾輩が默つて一人で承知してもこゝに集まつてゐる二千人の傍聽者が承知しなかつたら解散どころか、大騷動が起るだろう、君等がそれを好むならそれでも善いが、苟も、穩かに解散をやろうとするなら說明する義務がある、何處が惡いか、聞かせてもらはふぢやアないか？

警部。(一寸と沈默――漸く口を開いて）演說全體が惡いと認めます。

星。これは可笑しい……君は全體が惡いと認めると云ふが、吾輩はまだ半分もやつてゐない、これからソロ〳〵本題に入ろうとするところだ、それに全體が惡いといふのは何うして分る？

警部。ハツ……それは？

星。まだこの腹にたゝみ込んである事が、君に分る道理はないぢやろう、一たい、君は法律を知つてゐるのか？

警部。(躊躇)……ハツ……それは、職務上、必要な事丈は知つてゐます。

星。では尋ねるが、集會條例によつて見ると、演說會を開くとか、閉ぢるとかは、最初屆出た會主、又は發起人が全責任を負うてやる筈で、辯士は唯、自分のやつた演說に責任を持つだけだ、然るに、君は會主でもなく、又發起人でもない辯士の吾輩に對して、中止解散を命ずるといふのは、法律に違反してゐる、條文にも、中止又は解散を命ずる事あるべしと書いてある、中止したから必ず解散せなければならない筈はない、君は果して法律を知つてゐるのか？

警部。(一寸と沈默)……こゝで法律論はしません、本官は職權を以て中止し、又解散するだけです。

星。それは、君が誤解してゐるといふのだ、辯士に對して解散を命ずるのは、法律違反である、隨つて効力が無いのだ。

警部。(激した調子）でも本官は職權を以てこれを遂行します。忌なら警察へお出なさい。

(辯士仲間や有志者たちがバラ〳〵とかけて來て星をなだめる。)

幹事（起上つて）諸君、只今御承知の如く、中止解散を命ぜられましたから、甚だ遺憾ながら演說會はこれ切りといたします……尤も演說會は止めましたが、これから豫定通り、懇親會を開く事にいたしますから、有志の御方は、何卒自由に、御參加を希望します、お席はそのまゝで傍聽、イヤ傍觀なすつて下さつても構ひません…。(拍手)

警部、巡査。皆歸り給へ、歸り給へ、……解散だ……解散だ……。

(有志者が惣立になつて抗辯する。……最早、演說會ではない、懇親會だ……。貴下こそ退場して下さいッ。)

(横暴だ……壓制極る……なぐつちまへッ……歸れ〳〵……)場内はガヤ〳〵喧噪する)

警部。(力んだ調子で)これで演說會は中止解散したから、本官等も一應署へ引上げる……しかし名を懇親會に籍つて、濫りに民衆を煽動する言論をやる者があつたら決して、容赦しない、……適宜に取締の手配りをするからさう心得てもらはふ。

傍聽者。…もう用事はない……。邪魔をするなッ…歸れ〳〵。

(警部は巡査に命じて、演題の紙を引剝がせる、演壇や銀屛風を片付けさせ、幕を取外させにかゝる)

幹事。佛前に怖れがありますから幕はそのまゝにして下さい、……こちらで形附けます、

警部。黨員丈殘つて、傍聽者は歸さんといかん……皆歸つた……歸つた……。

幹事。大てい、皆懇親會の會費を拂つてゐます、唯、傍聽丈に來たのではありませんから、あまり壓制をやるととんだ大騷ぎが持上りますよ、…まア萬事、發起人に任せて下さい。

警部。フム……では君等が全責任を以てやつてくれ……善いか?

(警部、巡査退場)

幹事。諸君、これから懇親會に移ります、折詰と酒は今配らせますから出來るなら、こちらへ上つて下さい。

(一部、觀客席から舞臺へ上る)

加藤。さア諸君、…星君を圍んで圓く坐を作らう…くつろいで大に論じやうよ……

幹事。(觀客席に向ひ)こちらの諸君への折詰と酒は、あまり御多人數なので、チヨッと手が廻りかねて、今二三十分かゝりますが、何分にも幹事の不行屆を御容赦下さつて何卒暫らく御待ち下さるやう願ひます。

(舞臺では星亭を圍んで圓坐がつくられ、酒、折詰が配られて獻酬が始まる、燭臺が持込まれる、談笑がはづむ)

幹事。星先生の法律づくめでは、奴さんたち、チヨッと弱らされたやうですな?

加藤。ハ、、、星君の屁理屈は有名なもんだ……だが、大ていの相手が、ギウ〳〵云はされるよ。

星。馬鹿ア云へッ、相手が屁理屈でやつて來るから、こちらはクソ理屈で閉口させてやるんだハ、、、、。

有志者の一。(微醉口調で)獅子、兎を擊つに全力を用ふつて云ふのが、先生の戰術だね……。

加藤。兎の後に、藩閥つて大魔法使ひがクッ附いてるんだからかなわないよハ、、、。

有志者の二。ロシヤや獨逸の實例は善かつたね、チクチク刺されるやうだつたろう。

星。(見廻して)政治の界限ぢやないが、かうして見ると幕を張廻した

のは、何んだか窮屈だよ、取つちや何うだ。
幹事。御本尊が見えるのですが……取りませうか……
(二三人、起つて行つて、幕を取る、護摩壇の彼方に、等身の不動尊の立像が、煌く蠟燭の光輪の中に、儼然として現れる、護摩の烟ももや〳〵と立上つてゐる。)
星。はア、成る程こゝは不動院で、あれが御本尊か？……ウム、威勢がいゝなア。……降魔の利劍を引摑んで、猛烈な火炎の中に突立つてゐるのが、我黨の士だと云ひたいなア……
幹事。例の運慶か誰かの古い名作だといふ評判の御本尊です。
星。(起つて近寄り)ウム、こいつア氣に入つたよ……(ちと不動尊を仰ぎ見る)
有志者の三。さういへば、星先生も、この不動尊に似てゐられるぢやアないか？
幹事。ウム、成る程……。
(星亨がこちらへ向くと。…星先生萬歲……不動尊萬歲。の聲、一齊に起る)
星。(苦笑)ウム、我々は、この不動尊のやうに身體も、又心も火炎になつて燃えながら手には降魔の利劍を揮つて飽くまで戰つて戰ひぬく覺悟でなけや彼の瀋閥の金城鐵壁を打倒す事は出來ないんだ。
幹事。先生は不動尊だ………今の政界の不動尊だ…
有志者。……不動尊萬歲……星先生萬歲……胴上げにしろ……胴上げにしろ…不動尊と脊くらべさせろ…やれ〳〵ッ…
(大勢寄つて集つて、星亨を胴上げにし、不動尊の前に立たせる…ワツと鬨の聲上る、杯を八方からさしつけて、立つたまゝ酒をのませる、醉興に護摩を焚くものもゐる、鉦を打つものもゐる)
(この時、警部が下手へ現れ、幹事を呼び附けて、何かさゝやく)
幹事。(何時の間にか坐に返つた星のところへ行く)先生、先刻の警部が又やつて來ました、チヨツと御目にかゝりたいと申ますが……。
星。(少し醉つた口調)フム、酒でも飲みに來たのだらう、呼んでやれ。
幹事。イヤ、戲談ぢやアありません、警察の用事だと云ひます、…先刻の用事だと云ひます、…先刻の演說の事かも知れません。
星。こつちへ來いと云つたら何うだ？
幹事。(警部のところへ行き、直ぐに返つて來て)…チヨツと廊下まで と、云つてゐます。
星。さうか…とにかく行から(氣輕に起つて、警部のところへ行く)…何か用かね？
(警部、默つて、拘引狀をさし附ける)
星。(チヨツと見て)さうか、分つた……君に返さう。
警部。(ムツとして)返さうではありません、署名捺印して下さい。
星。(冷靜に)そんな事はせんでも善いよ。
警部。本官を侮辱するんですか？
星。この拘引狀には、官吏侮辱罪に依て拘引するとあるが、果してさ

うかね？
警部。さうです。
星。それなら何かの間違ひだろう。もう一應よく相談して來るが善いだろう。
警部。(きつい調子で)失禮仰有るなッ、間違ひはありません。
星。さうか。……間違ひではないかね？
警部。何の間違ひがありますもんか？
星。さうか？しかし、苟も位階のある者は、直に拘引する事は出來ない筈だ、宮内省へその手續がいるだらう。
警部。勿論、さうですが、この場合に、そんなよけいな事を云ふ必要はないんです。
星。よけいな事ではない、吾輩には位階がある。
警部。(不審さうに)エ、……何うしてそんな事が？
星。従六位だ。
加藤。(傍から)ウム、星君は十年前に税關長をやつてた事があるぞ。
警部(表情を變へ)……ハッ……さうでしたか？これは失禮……いづれ又……(匆々退場)
幹事。イヤやつこさん、又しくじりましたね。
一同。痛快々々……(拍手する)
星。吾輩は、位階なんか、厄介あつかひにしてたんだが、こんな時には毒を以て毒を制する事になるかなアハ、、、、、

(カーテン)

第五場

明治二十年四月、
玉鳴館假装舞踏會。
登場人物、假装した日本人及び西洋人男女大勢
黒装束の假装の群
金ボタン、制服の男大勢、その他

○

管絃合奏樂で開幕
西洋風の廣間、緋の絨緞が敷つめてある中央には廊下へ通ずる大扉口、上手に螺旋形の階段、思ひ〲な假装の日本人、西洋人の男女の群が入り亂れて舞踏の渦卷を起してゐる。
高い天井裏に花瓦斯の燈がパッと入る、道化役者に扮したのや、緋縅の鎧を着たのや、ヴェニスの貴族風俗、丁髷のかつらに裃姿の假装などが殊更に目に附く、一方には太田道灌と、山吹娘もあれば、六段目の猪もゐる。普通の燕尾服に、黒の目かくしだけしたのも交つてゐる、ルイ王朝時代の服装に典雅なスタイルを誇る假面美人も人目に立つ、ワルツ、ポルカ、フオックストロットと曲の移るにつれて舞踏群の熱狂は高まつて行く。
螺旋形階段の上にも、さうした奇怪な假装男女の群が折れ重つ

て、休憩しながら赤い、青い酒のグラスをあほつて、はしやいだり、高笑ひしたり、手をたゝいたり、大陽氣である
舞踏は本場で鍛えた技の冴えを見せて、巧みなのもあり、まごついて滑稽なのもあり、すべてが統一の中に混亂を見せ、雜音の底に階音をひゞかせてゐる。

一くさり、音樂止んで、舞踏群がくづれると、假裝の男女はそれぞれ、あちこちに塊り合ひ、小扇をつかつたり、眼と眼と見合せてほゝ笑んだり、樂しげにさゝやき合つたり、キッスを交はしたりする、背の高い、西洋人らしい黑假面の燕尾服の男が、山吹娘の後を追つかけ廻すと、太田道灌が又その後から跟いて行く、道化役者がルイ王朝時代の假裝美人につきまとうてうるさがられたり、かくれんぼうのやうな戀の遊戲が、つゞく、一方では緋縅の鎧が、大身の槍を杖つきながら、甲冑のローマ武士と談笑して歩き廻り、六段目の猪が、誰彼となく、婦人に惡ふざけしたり、ちよん髷のかつらが新流行の洋裝の假面美人の腕を力づくで引張つて廻つたり、奇々怪々なシーンが現出する、すべてはパントマイムである、

廊下の奧の方で「お飮みもの丶用意が出來ましてございます、殿樣方、姬樣方お庭園へ御出で遊ばしませ」メカホンか何かで叫ぶ、假裝男女の群れはゾロゾロと廊下を流れ込んで行く。

廣間がガヲンとすると、螺旋形の階段の蔭から、黑假面のヴエニス貴族が黑假面のルイ王朝美人の手をぐつと引張つて出て來る、女の方はしきりにすね廻る、男の方は、手先をギユウと握りしめたり、耳邊へ口を寄せたり哀願したりする態度である、女の方は隙を見てギヤロップの足取りで逃げかける、男の方は、飛びかゝつて抱きすくめ、力づくで接吻せうとする、女の方は「アレーツー」と叫び聲を立てながら激しく抵抗して、相手の假面をむしり取る、我顏の、ホクロのある男の顏が露はになる、金ボタンの番人が二三人、バタバタと駈け附ける、男は手を上げる、番人は呆氣に取られて敬禮する、男はかへり見がちに、スタスタ廊下を入る、自分で假面を取つた女は、荒い息づかひしながら何か云つて、嘲笑ひ、階段を上つて行く

再び音樂が始まる、假裝男女の組々が舞踏しながら廊下を練つて再び廣間へ流れ込んで來る

忽ち、下手の奧から高らかな詩吟の聲がひゞく

爭取珠璣費如塵
絃歌湧出滿城春
煌々金殿夜明畫
不照寒村菜色人

劍を手にした覆面黒裝束の男の群が、亂舞しながら黒旋風のやうに下手からサツト突入する、假裝の女たちは驚いて悲鳴を上る、假裝の男たちは狼狽へながら叱咤する、それにかまはず黒裝束の群はぎらつく白刄を揮り廻し。流行の自由の歌を歌ひながら狂へる如く亂舞する、舞踏組は、いゝ、なだれを打つて、逃げかくれる。

○

天には自由の鬼となり
地には自由の人たらん
自由よ自由、やよ自由
なんぢとわれとのその仲は
天地自然の約束ぞ
千代も八千代も末かけて
この世のあらん限りまで
ふたりが仲の約束を
いかにぞ仇に破るべき
いかにぞ仇に破るべき――

黒裝束組の劍舞と歌とが暫らく廣間を占領する、
やがてワーツと凱歌を上げて、彼等の群は又黒旋風の如く戸外に去り行く

緋威の鎧の男、假面をぬいで、瘦せた、尖り顏の、眼をギヨロギヨロ光らせ、大身の槍を振りしごき／＼現れて來る、ヴエニス貴族も、道化役者も、いゝ、ちよん髷かつらも、猪も、皆素顏で集つて、給仕に椅子を持出させ、急な會議が開かれる。

道化役者。（破裂したやうな癇癪聲で）何うもけしからん奴ぢや……けしからん奴ぢや、すぐにふん縛つてしまへッ……。

猪の男。部下の者に早速、こゝへ集まつて來るやうに命令は傳へました。

緋威の鎧の男。今の奴等はありや手先だ、後であやつつてゐる奴等をつかまへて嚴重に處分せんぢやダメだ、それにつけて總理、この間からより／＼會議にかけてるあの條例を早速實施する事にしたら何うだろう、今夜の中にでも善い、兵は神速を貴ぶんだ……。

いゝ、ちよん髷かつらの男。ウム、よか、よか、おいどんも賛成するけん……。

ヴエニスの貴族。ウム……斯うなりや外に手段がない。思切つて保安條例實行に取かゝるか？　この帝都から三里以外の地に皆追ッ拂つて了つたら、當分は手も足も出ないだろう、何しろあいつ等は山嶽黨だ、こちらで先手を打たんけりや立遲れると、こつちがひどい目に逢はされるからな。

道化役者。ウム、ぐつぐづしちやダメだ、今夜中にやつて了へッ、第一條約改正の妨害になる……。

ヴエニスの貴族。ウム、今夜のお客の外國の紳士、淑女たちに對して、實に恥かしい、あの野蠻な奴等は根こそぎ始末せんと國辱だが、條

例發布には、勅裁を經る手つゞきがある、實行の手配りだけ今夜中
に附けて置くか？
緋威の鎧の男。ウム、さうした方が善い、もう外に策はないよ
い、い、ちよん髷かつらの男。ウン……さうだ、さうだ、外になか……？
猪の男。ぢやアあの保安條例を愈々御實行なさるのですか？
道化役者。ウム……君ならやれるだらう……思切つてやれッ……。
猪の男。だが、あの退去命令を素直に受取らなかつたら、何んな騷動
が始るかも知れません、部下の者丈では不安心です。
緋威の鎧の男。エ、…あの人民共に鬼のやうに怖がられた君が、急に
そんな弱音を吹くのか？　何うしたといふんだ？
猪の男。何んな事になるか、こん度許りはチョッと見當が附きかねます。
緋威の鎧の男。手が足りなけや、治安維持のためなら構ふ事アない、
軍隊をくり出すんだ。
い、い、ちよん髷かつらの男。おいどんもそう思つちよる……
道化役者。ウム、彼奴等は、亂臣賊子も同前だからな。縛り上るのは
愚か、抵抗したら打殺したつて構はん。
ヴエニスの貴族。いよ〳〵となりや、ソラ、何んな手段を取つても構
はんぢや。
猪の男。さうですか？　ぢやア斷つてやつつけます、身命を賭してや
つつけます。

（猪の男は、猪の皮をぬぎ捨てる、金ボタン附の制服になる、相
圖の笛を鳴らし立てる、金ボタン、制服の一群が、劍鞘をつかんで
驅足でくり込んで來て、整列、敬禮。）
猪の皮をぬいだ男。（威嚴を見せて）諸君御苦勞だつた…。
道化役者。これで心丈夫だ……我々は、一應引揚げて、改めて會議を
開く必要があるだらう……後はこの衆に任せたら何うだ？
ヴエニスの貴族。我々が中坐しては、折角御招待した外國の紳士淑女
たちに濟まん、條約改正が氣がかりだ、まア、まア餘裕を見せる事
も必要ぢやぞ。
緋威の鎧の男。それもさうぢや、今の事はあの男に任せたらいゝだろ
う（云つて、猪の皮をぬいだ男にさゝやく、そして彼を殘して連
れ立つて奧へ入る）
猪の皮をぬいだ男。（室内に列を作つた金ボタン、制服の一群に向ひ）
先日來、諸君に調査を命じた危險至極な注意人物どもの住宅は一
軒、一軒即刻手配して、厳重に監視しろ、明日は皇城三里以外の土
地へ片ッ端から追放する事になろう、強いて抵抗すれば、縛り上る
んだ、手ごわい奴は、打殺したつて構はん、善いか……それから又
先刻白刄を揮つてこの館に亂入した奴等も追跡させて引しばつて了
へッ、直ぐ出動せいッ。
（一同敬禮、忽ち散つて行く）
（ヴエニス貴族、緋威の鎧、道化役者、い、い、ちよん髷かつら、それぞ

れ相手と腕叉して出て來る、太田道灌は山吹娘をつれて現れる、又音樂が聞えて、舞踏が始まる、假裝男女が再び廣間へなだれ込む……

猪の皮をぬいだ金ボタン、制服の男は、傍に立つてヂッとこの圓舞を見つめてゐる。(カーテン)

第六場

明治二十二年二月十一日憲法發布大祝日

石川島監獄舍、典獄面會所

登場人物、星亭、片岡健吉、加藤平次郎、井上榮一郎、熊谷三平、石山與惣、細川芳正、荒川高義、天本彦一、その他典獄、監守、押丁等

○

下手は板牆に鐵格子の窓があいてゐる、上手も同じ板牆、その一隅に出入の扉口、正面のガラス戸寄りの處は一段高くなつて、卓、椅子などが置かれ、低い方の板敷には二三脚のベンチが並べてある、ガラス戸越しに、灰色の壁に沿うて長廊下の通じてゐるのが見える。

監守、押丁が、澁柿色の服の囚人等を導いてこゝへ入つて來る、監長片岡健吉が先頭で、細川、荒川、井上、熊谷、加藤、石山、天本、その他の人々がつゞく、星亭も交つてゐる。

監守。(高い所から)只今、典獄が皆に申渡される事があるから、靜かにして待つて下さい。

片岡。(謹直に)ハッ……。

荒川。(小聲で)己たちはやつと地獄の釜の蓋があいて、何うやら娑婆へ出られさうになつたが、たつた一日違ひで、こゝで死んだ奴アかわいさうだなア……。

細川。(涙ぐんで)ウム……それを云はれると己は放免されるのがイヤだよ、……キッとこの前には大勢出迎へに來て、待つてるだろう、上野の女房や子供も、あいつの無事な顏が見られるんだと思つて、胸をワク〳〵させてその中に交つてゐるだろうからな、……面を合せるのが辛いよ。

星。ウム、上野の奴か……?(腕叉して考込む)

(あちこちで、ガヤ〳〵話聲が高まる、鼻をすゝるものもある)

監守。皆、話をせんで、靜かにして待つて下さい。

片岡。(見廻して)諸君、我々はまだ正式に放免を申渡されたのではないから、自由な體になつてはゐないのだ……今少しの辛棒だ……靜かにしてゐやう。

(暫時、沈默)

(一隅で又話聲が聞え出す、調子がメン〳〵昂ぶつて來る……)

井上。……でも、ずいぶん長い間、ひどい目に逢はされたもんだ……横暴極まる閥族政治を攻撃するのが何んで罪になるんだ、あの保安

條例なんて、天下の惡法を一夜作りに作りやがつてさ、己れたち、罪のないものを無理やりに、こんな暗い處へようも打ち込んで置きやがつた、……今頃は寢ざめが惡からうぜ、國會が開けたらもうこつちのもんだぞ、汝、今に見ろッ……。

熊谷。ウム、こん度はあべこべに、あいつ等を引縛つて、こゝへぶち込んでやる……イヤ何處かへ島流しにでもしてやらなけやこの腹の蟲が納まらんよ。

片岡。(チロ〱見て)諸君、まあ靜かにしてくれ給へ。

石山。折角、放免されかゝつて、又ぞろ官吏侮辱なんかに引つかゝつちや間尺に合はんぜ、氣を附けろッ。

天本。ウム、口は禍の門だ、當分愼めッ……。

皆。ハヽヽヽと輕く、低い笑聲。

監守。シーツ……。

(暫時沈默)

細川。(低聲で、星に話してゐる)……あいつも覺悟はしたらしい……元來、脾弱かつたのに、こゝでは底から冷え上るんだから、何んでも腎臓へ來たらしいんだ、僕が面會に行くと、いきなりこの腕をギウと握りしめて、涙をポロ〱流しやがる、もう口が利けないのかと思ふと、さうではない、ハツキリした聲を出してね……「己れはもう死ぬが、諸君は再び明るい世の中へ出て力限り根限り戰つてくれ、戰つて戰いぬいて彼奴等を地べたに打倒してくれ、その地ひゞきが聞えたら己れも冥途で凱歌を上げて目をねむるよ」つてね……。

星。ウム……ウム……彼奴は血性男子だつたからな……。(と頷づく)

細川。……(かすれ聲で)氣の弱い事をぬかすな、貴様も一緒にこゝを出て、我々同志と共に第一線に立つて戰ふんだ、何アにもう一足ふん張りや勝利はこつちのものだつて……勵ましてやつたんだが「氣休めは云ふな、己れは死ぬ事なんか少とも怖れちやゐないぞ、我れ同志は無法に虐げられてこんな處へ打ち込まれたんだから、こゝで一人くらゐは死んだ方が善いのだ、己れの屍體の重さだけでも、貴様等の復仇戰の責任が重くなる筈ぢやアないかつて」……却つてこつちを勵ますんだから、尚更、この胸先をかきむしられるやうでね……

星。……ウム、男子らしい奴だなア……

荒川。貴樣アそれでも、夜通し、傍に附き切つて介抱してやつたんだから、まだあきらめが附くが、己れ等はあいつの死目にも逢へなかつたし屍體もそのまゝ放りぱなしでこゝを出て行くんぢや、何んだか友達甲斐がないやうな氣がするな。

細川。(ため息をついて)だから、己れは放免されたくもないんだよ……。

星。ウム……尊い戰友の屍をこのまゝ敵地に殘しては置けない……イヤ、何うにかならう……何うかするよ

細川。何うかすると云つても、老婆たア違つて、こゝぢや當り前の葬

理も人情も通らないんだからねえ、そんなものはあの鐵の扉一枚で、彈ねッ返してるんだからな……

星。（自信を以て）さうとも限るまい、こりや外の事たア違ふんだから、こつちが誠心でぶつつかつて行きや、何、鐵の扉だつて、あくまいもんでもないよ。

片岡。……靜かにして下さい……監長たる吾輩の責任ですから……

監守。何卒、靜かにして……

（典獄、式服で、監守を從へて入つて來る、一同禮）

典獄。……エヽ……今日は目出度い紀元節で、その上、畏くも宮中に置かれては、前古未曾有の憲法發布の大典を執り行はせられる當日であるから、一視同人の有難い聖慮に依つて、特に大赦令が下り、お庇で皆の罪も赦されて今日、唯今から放免される事になつた、この天地日月の如き廣大な御聖德に浴した事はめい〳〵の胸底に深く銘り附けて、いつまでも忘れないやうに、今後、陛下の忠良なる臣民として、よく法律の命令に從ひ、社會の秩序を守り、過激な言論や行動を謹んで、着實にそれ〴〵自己の業務に勉强し、國家社會のためにその本分を盡される事を希望する、……長らくの間、さぞ苦しい事であつたらうが、本官は只忠實に職務を執行しただけであるから、そこはよろしく諒として貰ひたい……エヽ、これから皆、更衣所へ行てつ衣服をあらため、それ〴〵所持品を調らべて、それを持つて、こゝを出て行くのだ……エヽ、憲法發布のお庇で、今日只今から、諸君は皆、青天白日の身である、お喜び申す……。

片岡。（起上る）只今の御訓示、唯々難有く拜聽いたしました、憲法發布の大典に當つて廣大無比なる聖恩が、微々たる我々身の上にまで下りました事は、一同感泣するより他に、云ふべき言葉をも存じません……尚、在獄中いろ〳〵に厚い御もてなしを受け、何彼と御親切に預つた事をも、典獄始め職員諸君に、御禮申上ます。

（一同、禮）

典獄。（碎けた口調で）イヤ、皆さん、隨分辛かつたでせうが、今日からは自由に、羽根を伸して飛んで行かれますよ、外は少し雪が降つてゐるが、大した事はない……さア、さア、早速着替をして、引取んなさい。

（引返しかける）

星。（進み出る）一寸と待つて下さいッ。

典獄（面喰つて）、エ、何んですか？

星。外でもない、同志の上野富左右が、昨夜、到頭病死して、屍骸はそのまゝ轉がつてゐるが、生きてゐる我々丈が大赦に逢つて獄舍を出て行く、死んだ者は後に殘されるといふのは、情に於ていかにも忍びない。

典獄。實にお氣の毒でした……たつた一日違ひの事でした。

星。ついては、あの屍體を我々同志に下げ渡してもらひたい、我々同志で持ち抱へて、一しよにこゝを出たいから……。

典獄。(一寸と考へ)……エ……友達仲間の情愛としては、御尤のやうですが、放免されて行く者が、こゝから屍體をかつぎ出すといふやうな例はこれまでに習つてない事だから取り計らひは出來ません

星。例がある、ないを聞いてゐるのではない、……我々生きてゐる者にはまだ刑期も盡きないのに、畏くも大赦令によつて從來の罪は赦してやるといふ有難い聖旨が下つたのです、ところが死んだ者は、罪も刑罰も一しよに消えるのであるから、まして一視同仁の大赦令が下つたら、我々よりも先きに、こゝを出て行くのが當然です、尤もあいつは、屍體になつても、我々より先きへ出たくはないでせう我々が守つて、一しよに出た方が、滿足だらうから、引渡して下さいと云ふのです。

典獄(一寸と默つたが)……ア、然うですか……とにかく一應主務省へ伺うて見ますから、都合によると時間がかゝるかも知れない……

……諸君の出獄が遲れてもいゝですか?

星。そんな事は一向構ひません……。

細川。いけなかつたら、我々も出獄しなくてもいゝです。

典獄。では待つて下さい……こゝにもう電話がありますから……

(退場監守等もついて入る)

天本。オイ〳〵さう時間がかゝつちや困るぢやないか?

石山。何時までも待つてるなんて、よけいな事を云ふなッ。

星。何がよけいだ、當然の事ぢやないか、?

片岡。まア、まア……、星君のいふ通同志の屍體を獄舍に打捨つてをいて、生殘つた我々丈が大手を振つてこゝを出て行くといふのは、何んだか疚ましい氣持がするぢやアないか、我々に代つて戰死したも同樣な彼の屍體を我々同志が護つて出て行かれゝばこれに越した滿足はないよ。

(遠く音樂が起る)

井上。(窓からのぞいて見て)……ア、堤坊の向ふを高い旗を押立てて樂隊入りでやつて來よる……我々を迎ひに來たのぢやアないかな……。

加藤。憲法發布の祝ひのダシでも引いて來たのだらうよ……

熊谷。イヤ、キッと同志が我々を出迎へるんだらう…死んだ上野の妻君や子供も、來てるだらうよ、可哀さうに、まだ何にも知らないんだからな、生きた人に逢へるとばかり思つてるのにいきなり屍體をつき附けられちや氣絶するかも知れないよ……チョッと堪らないな。

星。……(しんみりした調子だが、我々も、上野のやうに、いつ何處で屍體になつて歸るか分らないんだぜ……國會が開けたつて、決して油斷はならん、我々の敵は何處にでも陷穽を堀つてるんだからな。

片岡。ウム、そりや星君のいふ通りだ……

典獄(入り來る、監守もついて來る)ア……主務省から指令がありました……この際だから、特にさう計らつてよろしいといふことです。

星。（感激的に）有難う……ぢやア上野のとこへ行かう……そして彼奴の屍體を先頭に立てゝ、我々は新らしい戰場へ突進するんだ（山川、荒川、熊谷等と、星が先立つて行く）

片岡。我々も、佛に告別をして來やう（と立つて行く）

天本。赤い衣物も、イザ脫捨てるとなりや何だか殘惜しくもなるなアハ、、、、。

石山。ウム、人間つて奴ア勝手氣儘なもんだよ……しかし死んだ者は損だな。

（云ひ〳〵、皆出て行く、音樂がつゞく、獅子舞の笛、太鼓の囃子も賑かに聞えて來る）

監守甲。（窓からのぞく）

監守乙（入つて來て）外は景氣がいゝなア

監守甲（ふり向いて）ウム、何しろ憲法發布だよ、來年はいよ〳〵國會が開ける、人民はこれから稅金が安くなる、何んでも云ひたい事は云ひ放第だ、世がかわるつて、大はしやぎよ。我々もチと月給が上ればいゝがなア。

監守乙。しかし、稅金が安くなりや月給も安くなるかも知れんぜ。

監守甲。戲談云ふなッ、それぢやいよ〳〵やり切れんぞ。

監守乙。我々もいつそ國會議員にでも出るか？

監守甲。直接國稅十五圓つていふぢやアないか？

監守乙。そりや選擧權だ、規則ぢや、何んな貧乏人だつて、國會議員に出られるつていふぜ。

監守甲。ところが出してくれる人がないよ、ハ、、、、

監守乙。お互に貧乏くじか、ハ、、、、。

監守甲。だがあの放免になつた連中はこん度の國會議員になるだろう、理くつはうまいし、口は立つし、やり手が揃つてるからな

監守乙。ウム、それで今の政府に睨まれて、皆、こゝへ打込まれたんだよ、しかし、あの連中は獄舍へ入つても、平氣な顏をして、威張りくさつてゐるから、扱ひにくくて困る、早く出てくれて、我々も重荷を下ろしたやうだよ。

監守甲。そりやさうだが、何んだか、動物園の檻をあけて獅子だの、豹だの、虎だの、熊だのを世間へ向けてオッ放してやるやうな氣もするな

監守乙。ウム、噛みつかれる奴はとんだ災難だなハ、、、、

○この時、廊下を、服裝をかへた星等が、白布をかけた屍體を担架にのせて先頭に運び、一同後につゝいて、續々と列を作つて通る、典獄が嚴粛に見送る、外では音樂、監守甲乙もそれを見て、謹ましく立禮する、

カーテン

第七場

明治二十六年十二月

第五議會

登場人物、星亨、齊井品三、杉松謙三、岡菊造、田中忠造、稻田彌、神鞭友常、山田喜一、山村七彌、立川仙平、その他、代議士、書記官、守衞、大勢、

舞臺には、

議長席、演壇、政府委員席、議席（斜面に裝置、天井に電氣照明、議席は半分丈見える）

○

幕開く。

齊井、（老人、議席で、へうきんな、上方なまりで喋舌つてゐる）……杉松氏の只今の演説は、議員の資格でやられたのですか？　過日は政府委員として演説をやり、今日は又議員としてやる、これぢや彈き語りで甚だ聽きにくい……（笑聲起る）……三味線をひくとか、語るとか、どちらか一方にしてもらひたい、杉松君に、一方になる事は出來ぬかといふ事を伺ひたい。

杉松。（議席で）只今のに答へませうが、杉松謙三は議員なり、又政府委員なりであります、これは諸君が、政黨内閣、責任内閣といふ事を眞に望んでゐられるなら、お分りの筈だと思ひます、然し齊井さんが立派な政府の大臣にお成りになつた時は、議員のまゝに政府委員であつて、一人で兩方の椅子に坐つて政治をやり、同時に人民を導くといふ御心になられる事と思ひます、私はそれ丈の事を申します。

星議長。採決いたします、只今問題になつてゐた處の非常準備金法は、二讀會を開くや否やといふ決を取ります、二讀會に贊成の方は起立を願ひます、

（起立者少數）

星議長。少數と認めます、本案は二讀會を開かぬといふ事にきまりました

岡。一八〇番……緊急動議がござります。

星議長。一八〇番……

岡。（演壇に上る）諸君、本員は衆議院議員星亨君の不信任決議上奏案を提出いたします、被告の名を呼んで立ち、被告を後にして演説するといふのは、ずいぶん辛い話でございますが、これも今日の場合、實に止むを得ないのであります、星亨君は已に諸君御承知の如く、身、衆議院議長の榮職に在りながら大阪の米穀取引所の顧問などやつてゐるといふ事が、黄金の冠に糞土を塗つてゐるも同前でありますが、更にその惡因緣から、彼地の商人輩と築地邊りの待合で密會した事實があり、又近頃、瀆職罪の嫌疑の雲に包まれてゐる古藤農商務大臣や、例の金時計事件の佐藤次官とも如何はしい關係があるといふ事は現に新聞紙上でもやかましく書立てられて居り、社會輿論の攻擊の的となつてゐるのであります、かゝる議長に、我々は信任を置く事が出來ません、そこで最初に、我々は深く辭職し

てくれといふ決議をやつた、星亭君が、苟くも院議の重んずべき事を知られるならば、直ちに辭職せらるべき筈である、

(ヒヤ〳〵。……さうだ、さうだ。……なぜ辭職せんッ。！　の聲、喧ましく起る)

然るに、星亭君は、辭職せんどころではない、翌日、平然としてノコ〳〵議席へ入り、づう〳〵しくも議長席につきました、かゝる恥を知らざる議長の指揮の下に、我々が議事を進行させる理由はないから、直に休會を決議して、更に星亭君の反省を求めました、然るに何事であるか？　今日又ぞろ、づう〳〵しく議長席について、平氣で議事を司つてゐる、これ一度ならず、二度ならず議員を侮辱し、我々議員の顏に、泥をなすり附けたものである、(田中。馬だ〳〵、人間ぢやない……)。

○鐵面皮漢ッ！

○默れ〳〵ッ。

○貴樣等の顏は泥より汚いぞ。

(。バカ……。退場させろ……退場させろッ)　(喧噪)

星議長。何卒靜肅に願ひます。

岡。元來、私は星亭君に對して、何等の怨恨はありませぬ、(。嘘を吐くなッ……。僞善者……默れッ。……)星亭君が議長として議場整理のこれまでの手腕に對しては私は實に衷心から賞讚もし又ひそかに感謝もしてゐるのである、殊に此議場が非常に混亂に陷つて、[illegible]れるが如き大騷をしました時に、よく己を捨てゝその職責を盡された事をいつも記憶して常に忘れ得ないのである、苟も議員に退場を命ずる際には、それが改進黨であると、又自己の屬する自由黨であるとに差別なく、親疎遠近を問はずビシ〳〵斷行された。(。そんなよけいな事は云はんでも善い……。不信任決議を忘れるなッ……。モウロクしたか……。默つて聽け。……)……又星亭君の發議によつて、我々は議場を靜肅に保つといふ秘密の誓約までした、斯の如く星亭君は此議場を重んじ、その整理に全力を傾け盡して來たのである、議長、その人の職務は法律に依て此議院を支配する以上に、德義的に秩序を保つといふ事の更に、更に必要なる事を我々も認めてゐる、又星亭君もそれを認めたればこそ、秘密の誓約をさせたくらゐである、我議會の體面と品位と威信との爲めに、涙ぐましいほどのかゝる配慮をされた星亭君を我々は心から尊敬すると同樣に、イヤ、それより遙か遙か以上に、この議會を尊敬し、その體面と、その品位と、その威信を重んずるものであります(ヒヤ〳〵、拍手大喝采……)

かるが故に、星亭君は當然、この議會の不信任決議案に服從して潔く辭職さるべき筈である、あれ程、この議會を愛し、又これを重んじた星亭君としては、一も二もなく辭職せなければならないのである、然るに、何事ぞ、星亭君はこの決議を不當と認め、自分に

は守る責任がないなどと放言して、今日まで何處を風が吹くかといふ顔をして、ノコ〳〵出席する、晴れ衣を着飾つてゐる大勢の人込みの中へ泥まみれ、垢まみれの、ボロ姿で、平氣で飛び込んで來るのは乞食ぐらゐなものである、乞食ならまだよろしい、これが議員であり、議長であるとは何といふ恥不知でありませうか？　何んといふ不德義さでありませうか？　何といふ無責任でありませうか？　この上は最早いたし方がないから、この不信任決議を更に上奏案として、當人に深く恐懼改心せしめたいのであります、議案は朗讀してもらひます。

星議長、よろしい。

書記官、本院は、議長星亨に信任を措く能はず、故にその職に在るを欲せざるを決議す、臣等は、曩に議員法第三條に依り、星亨を薦奏し、勅任を辱らす、之臣等不明の致す所、誤つて天聽を冒瀆す、惶恐の致に堪へず、謹んで奏す

星議長。これを緊急動議とすべきや、如何といふ事を討論を用ゐずして決を取ります、緊急動議となす事に同意の諸君は起立……

（起立多數）

星議長、多數と認めます、直にこれを議題といたしますが、その前に一言、御注意申上る、已にこの前の決議案の際にも申しました通り、凡て他人の行動の中にかくされた内心の機密を察しないで、唯、上ツ面から輕々しく是非善悪の判斷を下すのは越權であり、不法である諸君の言動は徒らに吾輩個人を陷れんとするもので憲法の精神に反した、不當の決議と認むるから、吾輩はこれを守る責任を感ぜない、それは憲法に悪例を殘すからである。從つて決議案であらうが、上奏案であらうが、非立憲的なものは何處までも非立憲的であるからかゝる事のために、星亨は決して自ら處決はしない、中心少しも疚しい處がないからである。それ丈申上る。

田中（眞ッ赧になつて起上る）何んだ、何んだ……まだ懲りもせんで、そんな亂暴な口を利くかッ……上奏案まで出すとはよく〳〵の事だぞ、涙を揮つてやるんだぞ、天を恐れんか？　この不忠者ッ……

星議長。勝手に發言してはいけませぬ、注意なさいッ。

田中。（怒鳴る）な、な、何を云ふんだッ、君こそ議長席を下りなさい、サッサッと議長席を下りて、副議長と代んなさいッ。

星議長。（冷靜に）勝手に發言してはいけないと云ふんです、議長の命令をお守なさらんと、止むを得ないから退場を命じますぞッ……。

田中。何んだッ！（喚り立てるのを、傍の者がやつと制する）

〇一〇五番。

星議長。一〇五番。

稻田。（議席から）議長の唯今の言葉は甚だ不穩當であつて、諸君の言動が非立憲的であるとか、憲法に悪例をのこすなどとはそれこそ臭い者身不知である、内心の機密が何うだとか、上つ面の判斷が何うだとかいふやうな事は、どちらにでも云へるのでそれを口にするの

は、已に後ぐらい處があるからである。この場合の問題は、苟も議院が不信任決議案で、その意志を現はしたら、議員たる者はその意志を重んじ、直に自分の進退を決せねばならない事で、それが憲法の精神である、この議院の不信任決議が若しその効力を失ふ事になつたら、內閣の鼎の輕重を問ふ力あるものが、議長一個人の叛逆的行動によつて、全く効力のないものになる、諸君、火藥を抜かれた彈丸が何の役に立ちますか、硬度を喪ふた刄では紙も切れますまい、然るに、議長は、彈丸から火藥を抜き、刄をなまくらにしてこの議院に、自殺的行爲を遂げしめやうとしてゐるのである、この場合速に上奏案を可決して、議長の處決を迫る外はない、尚星亭一身に關する問題であるから議長は當然議席に就いて、後を副議長に譲るべきである……。

○ヒヤ〳〵…副議長と代れ〳〵ッ

○それが當然だ……當然だッ……

○代れ〳〵……下りろッ下りろッ下りろッ（喧躁）

星議長。御注意までに申上る……前回の不信任決議の時は、直に副議長と代つたのであるが、案の大體の主旨が明らかになつてゐる今日では、自分は少しも疚しい事がないのであるから、このまゝ議長席について、議事を進行させる、さう心得て下さいッ。

（何んだ〳〵？……づう〳〵しい……。下りろッ……下りろッ。……と一隅で喧噪）

○一一〇番

星議長、一一〇番

山田。（議席で）法律上はそれで善いかも知れないが、德義上いけない事である、議長は副議長と代られたい。

星議長。議長に於ては、これを德義的な問題と認めないから、從つて德義的に退席する必要を認めない、議長に、この席を退けといふのは、議員に向つて、議場から退けといふのと同じである、議員は議長に向つて、議場から退けと命令する事は出來ない。

（一隅でガヤ〳〵喧躁する）

さア、議事を進行させませう。

○二八九番

議長、二八九番

神鞭。（演壇に上る）自分は星亭君とは黨派を異にするが、この議案には反對である。（スツコメ……。謹聽しろッ。…）成る程、星亭君が、米穀取引所の顧問をやつたり、商人と待合で會つたりしたといふのは、あまり讃められた事だとは思はない（ヒヤ〳〵…ノー〳〵……）

併し代言人を業務としてる議員で、銀行、會社の顧問になつてゐる人は、相當に多いやうである、それも議員なら構はぬが議長がやつてはいけないといふのですか？（拍手……。ヒヤ〳〵…。ノーノー…。）又、商人に會合するのは、星亭君に限らない、現にこの上

奏案の賛成署名者である安部君も山村君も、亦緊急動議を出された岡君も、先日、私と一しよに、帝國ホテルで生絲商人等に會合したではありませんか？その中には、待合にまで行かれたお方もある（。それは違ふぞッ……。けしからん事を云ふなッ……。。僞善者、恥を知れッ……。……）勿論、この問題は、保護奬勵金の下附といふのが、我々に賛成出來かねる事なので、それッ切になりましたが、議長だから商人に會つてはいけない、議員なら構はないといふのはお可笑しいではありませんか？（ノー／＼。……ヒヤ／＼…。）かゝる風潮はいづれにして善い事とは云へない、政府の役人もやはり待合入りをやる、そして藝妓がゐなくては酒が飲めないといふ風になつてゐるらしい、商人などと來ては、國家の事を相談しても、まア國家などは何うでもよろしうございます、何分私共は錢儲けが目的でございますからと平氣で云つてゐる、こういふ時勢がゆくと、今に何んな事になるか、先が恐ろしくなるが、星亨君などの考へでは、恐らくこの商人たちを手なづけて、同じ金儲け仕事をやるにしても、國家社會の公利公益と結び附けさせ、同時に、彼等に政治的の眼を瞬かせて、自分等の味方につけ、云はゞ政黨政治の地盤を堅めるコンクリート材料に使ふ、そして今爺、その頑強な根を殘してゐる藩閥政府を何處迄も枯れ絶えしにせうといふ、遠き慮から來てゐるのではないかと思はれるふしがないではありません。（。詭辯だ／＼……止せ／＼…。星は賄賂を取つたのだ……。失禮な事を云ふナツ。貴樣ぢやあるまいし……）星亨君、素より聖人、君子ではありますまい、がしかし、タカの知れた賄賂などに目がくらんで、商人輩と待合入りをやるやうな、そんなケチくさい人間だと思ふのは、眼が節穴になつてる輩のいふ事だ（ヒヤ／＼…ノー／＼…。問題外だ、……。辯護は止せッ）…殊に、この上奏案の文句に、三百の議員は不明を謝するとある、即我々は馬鹿者であつて、何の譯も分らない人間だといふ事を、恐れ多くも陛下に上奏するとは恥を知らざるも甚しいッ、こんな事が、我々の口から外へ出せますか？（ヒヤ／＼、ノー／＼）速に否決されん事を希望します。

○（二三六。番）

○一〇四。番

議長、（二三六。番

山村。（議席で）本員は神鞭君に對して質問しますが、臣等の不明を謝するといふのが何故悪いですか？我々は議院法に依りて三人の議長候補者を選んで薦奏したわけであるが、折角、我々の信任に依つて勅任を辱うした星亨君が、かゝる不義不德漢であつて……。

星議長。言葉をお謹みなさい。

山村。……（昂奮した調子）院議を侮辱して恬としてその職に在るばかりでなく（……。恬としてその職に在るばかりでなく……。と口眞似する者がある）……馬鹿ッ……。

星議長。よけいた事を云つちやいけません、さア一〇四番……

田中。自分はかゝる横暴なる議長の下に、議事を進行させるのは不愉快千萬である、まア、あのづら〳〵しい面を見るがいゝ、三百人の者を一人で相手にして、バカにしてかゝつてゐる樣子は何んだい？

（ヒヤ〳〵……。忠造暴言を吐くなッ……）

星議長。（苦笑）あまり興奮してはいけません。

田中。……今のまゝでは、こゝは帝國議會ではなくて一箇の星亭が一人藝をやつてゐる見世物小舍である、我々は議員ではなくて、見物人である……これで上、陛下に對し、下國民に對して、我々は職責を果してゐると云へやうか？　云へる筈はない、この見世物小舍を一刻も早く、ほんとうの帝國議會に立返らせる爲めには、上奏案でも、何んでも構はない、天意も速に、議會を革淸する事を嘉納あらせられる事と恐察する、滿場一致、可決されん事を熱望する、

（ヒヤ〳〵、拍手。……。キ印し……）

〇一二六番

星議長。一二六番

立川。（演壇に上る）本員は大反對である、憲法論としてもかゝる上奏案を陛下がいかに處理あらせられるか、凡そ見當が附く筈である、陛下が直接に、議長を免職にし給ふやうな事があり得ると考へられるか？……殊に大權の發動を促さうとするのは果を上御一人に及ぼし奉るものであつて、立憲政治の常道すら辨へざるものである、結局、これに依つて、議長を自決させんとする苦肉の策ではあろうが、議長にその意志がない以上は、諸君は、一箇の星亭を如何ともする事が出來ないではないか？（。默れッ。……引込めッ。バカヤロー……）又たとへ議長を取かへて見たところで、その候補者としての岡君はあの御用新聞で、何處からか金をせしめてゐるといふ噂のある札附であるし、（失禮千萬なッ。……取消せッ……）又山村君にしても、信州の山林で大い金儲け仕事をやつてゐるし（。出たらめをいふなッ……）又角田君にしても、取引所の顧問代言だ……星亭君が潔白だといへないなら、これ等の諸君は一層、不潔白である、イヤ不潔である。（バカモノ。……提燈持ち。……よけいな事をいふな……引ずり下ろせ。）のみならず、改進黨や國民協會の諸君が、星亭君イヂメをやる內々の理由は、星亭君が、江藤や陸奥と妥協したのを根に持つてゐるのである、イヤその實、妥協、妥協と見せかけて、いつの間にか、自由黨がまんまと政府を乘取つてくれては困る、爲に油揚をさらはれるといふ恐怖心と、嫉妬心とが、一氣に爆發したのである、（。何を云ひやがる……。引ずり下ろせッ。……我黨を侮辱しよる。……ふらち千萬た……。）

大喧躁……一群はバタ〳〵と演壇にかけ寄る、あちこちで罵り合が始まる、亂鬪が起る、

星議長。靜粛になさい……山井、小田、大山三君に退場を命じます

（守衞が三人を退場させる）

田中。（議長席に迫まり）君こそ退席し給へッ。
星議長。みだりに議席を離れては不都合である
田中。（怒號）君は一たい、良心はあるのか？
星議長。君等のよりチットばかり鍍が附いてる丈だ。
田中。バカッ（と躍りかゝる）
（守衛が遮る）
星議長。田中忠造君に退場を命ずる。
（守衛が寄つてかゝつて、罵りたける田中をつれて行く）
○除名だ、除名だ……
○議長を除名しろ……星を除名しろッ
○卑劣だ……陰險だ……バカヤロー
（亂鬪が各所に起る）
演壇の上では、立川を中に、各派の議員がもみ合つての大亂鬪
星議長。休憩いたします…（振鈴）

カーテン

第八場

明治三十四年六月二十一日。
星亭邸宅
登場人物、星亭、夫人つね子。頭。女中つる、神藤知常、書生二木、横山、壯士、青年等、

○

幕開く。
舞臺は黒幕、薄ら明の中に白い影、それがやがて骸骨に見えて來る、この骸骨の四肢がリヅミカルに動き出して、パラ〳〵に上下、左右に離れたり又一つにくッ附いたりして、暫らくの間、へい、い、うきんさと、薄氣味惡さとをゴッチヤにしたダンスをやつてゐる
（あやつり應用）
それがかき消されて、急に明るい、朝の光の中に、上手に城壁のやうな書棚に圍まれた書齋、下手には唐木の卓を中央に据えた座敷が現れる、そこの床の間には、「一日蓮上人」の畫像がかけられ、燕子花が活けてある。
書齋には、和服姿の星亭が、書卓に寄りかゝり、書籍をひろげたまゝウト〳〵してゐる、肱傍に積みかさねた數冊の書籍がバタバタと床に落ちる、ハッと目ざめて、四邊を見廻はす。
星亭。ア……つい徹夜したかな……バカ〳〵しいッ……（云つて、ページをくりかへし、再び讀書に耽る）
（神藤友常、モーニング姿で、色の小白い、品位の備つた星夫人つね子。と一しよに、座敷へ入つて來る）
神藤。ハア、先生相不變讀書狂ひですか？……昨夜から書齋に入つたきりですつて？……ヘエ……驚いたもんですなア。
つね子。近頃は又ひどく凝り出したやうで、膳に觸りはすまいかと心

配してゐます。
神鞭。でもまア瘋癲狂ひや妄狂ひとは違つてるから、さうやきもきせんでも善いでせうハ、、、。
つね子。ハイ、それはもう……。
神鞭。オイ、星君、何うした？（と、書齋の扉をあける、つね子は坐敷に正坐つて、様子を伺うてゐる）
（星は、見向もせず、讀書してゐる）
神鞭。オイ、君、大抵にしとき給へ、蟲が出るぜ（相不變、見向もしないので、つか〳〵と側へ寄つて）……。オイ、君、もう朝だよ…夜が明けたんだよ。
（星、相不變、ページの上に、目をとめてゐる）
神鞭。（ドンと（足音をさせて）。オイ、星君！
星。シーツ……。
神鞭。何がシーツだ……オイ、僕が來たんだよ……（いきなり書籍を引つたくる）
星。（始めて、ヂロりと見て）勉强の邪魔アするな。
神鞭。用事があつて來たんだ。
星。まだ讀書の時間だ。
神鞭。そりや承知でやつて來たんだ、まア此方へ向き給へ。
星。この書齋へ、つか〳〵入つて來ちやかんいよ……まア貴様ででもなけりやこんな眞似をやる奴もゐないだらうが……。
神鞭。ウム、又貴様でもなけりやそんな挨拶をする奴もゐないだらう。
星。一たひ、今時分、何しに來たんだ？
神鞭。何しに來たつて、やつぱり貴様の事が心配だからやつて來たんだよ。
星。何を云つてやがる？　吾輩この通りピンピンしてらア、少つとも心配なんかないぢやアないか？
神鞭。ウム、そりやさうだらう、貴様の氣象ぢやたゝかれりやたゝかれる程、はね上る、ヘコまされりやヘコまされる程ふくれ出す、何處かの新聞屋が云つてたやうに、鋼鐵とゴムで出來上つた人形だからなアハ、、、、。
星。ハ、、、、人形はひどいよ、これでも人間なみの魂は持つてるぜツ。
神鞭。ウム、持ち過ぎてるんだよ、……とにかく顔でも洗つて、飯を食つちや何うだ？
つね子。（のぞいて）、あなた、こちらへ御越しなさつては？
星。ウム……
（坐敷へ入つて來る）
神鞭。この「日蓮上人」は何處から、持込んだんだ？
つね子。（星が默つて、笑つてゐるので）、このあひだ、池上の本門寺へ、亡母様の御墓參をしました時に借りて來たのでございますよ。
神鞭。さうですか？……貴様は近頃、狼山和尚にも逢つたつていふぢ

ゃアないか？　發心でもしたのかい？

星。(葉卷を燻らせながら)、ウム、逢ふには逢つたよ。……チョッと面白い事を云ふ坊主だが、己れ丈、安樂を得て滿足するのが小乘で、世人にも安樂を與へる心がけで、自利、利他するのが大乘だなど云つたので、それぢやア己は自利、利他一致だと信じて萬事やつてゐるから、大乘に達したわけだつて、笑つたのさ。

神観。ウム、貴様はさう信じてやつてるに違ひないが、世間つて奴は、とかく、圖ヌ抜けた働きをする者を目ざわりにする、そしてアラをさがしたり、ケチをつけたがつたりする中はまだ善いが、暗討ちでもくらわかせかねないんだから困るよ、

つね子。…私はあの、コーヒーでもわかして參りませう（退場）

星。(葉卷の烟を吐いて)この頃の新聞の攻撃が？ダン〳〵ひどくなつて來るやうだな、しかしあんなものを一々、氣にかけてちや、何んにも出來やしないよ。

神観。そりやさうだ、君の眞實の氣持が分つてないんだ、泥まみれになつて基礎工事をやつてる奴に、裸體を咎めたり姿振を嘲笑つたりして、自分は高見の見物をやつてるのが、世間では聖人、君子で通つてるのだから情ないよ、中には尾に鰭つけて、舞文曲筆をやつてる奴もある、我々から見れば狼の尻笑ひだが、あれをあのまゝ眞實だと信じ込む輩が多いのだから恐ろしいよ。

星。信ずる奴には信じさせておくさ、一々辯解して廻るわけにも行かんよ。

神観。だが、去年の躓もやつぱりさうだよ、我々は藩長政府を打倒すといふ理想の爲めに多年の間戰つて來たんだ、その理想の一端がやつと現れかゝつて、折角、君は内閣に立つて、遞信大臣の椅子につきながら、直ぐにそれをオッ抛りださなけりやならなかつたのは殘念ぢやないか？

星。ウム、あれは自分の力で、自分がひつくり返つたやうなもんだ、まだ先は長いよ。

神観。だからこゝらで少し例の明哲、身を保つといふ方針を取つちや何うだ？　市會議長なんか止せよ、一たいあの市會の建物は白砂糖か黒砂糖の塊りで出來上つてるらしい、とかく利權あさりの蟻がウヨ〳〵つきたがるさうだ、そんな處からは、キレイに足を拔いた方が、後日の爲めだらうぢやないか？——

星。だがね、己は例に依て東洋流の勿れ主義、引込思案が大きらひなんだ、生きてる中は一日でも積極的に動くのが人間の本分だ、イヤ動いて動き廻つてこの社會にいつも新らしい血液を循環させるのが即ち生きた人間だ、生活だといふ信條は變へないんだ、何アに利權あさりだつて、タカが知れたもんだよ、それで仕事がドン〳〵運びやア結算では、市民が餘つ程得をするだらう。

神星。だが、所謂賄賂つて奴を、訴訟事件の手數料だぐらゐに輕くあしらつて右から左へ筒拔させて了ふやうな君たア違つて、利權常習

奢つて奴は、質が悪いからな、結局は君一人で皆が負込む事になるんだ。

星。ウム、それは己だつて氣が附かんでもない、自利ばかり計る輩がだん／＼多くなるのは困つたもんだとは思つてるよ……己等が血まみれになつて薩長幕府と戰ひつゞけたあの地獄の苦しみや、負けじ魂などは彼等には少しも分つてないんだ、外面ばかり眞似やがる……何しろ己等の敵には權力といふ武器がある、その上政商をあやつるし……政治の機密を利用して相場をやるし……國庫金にまで手をつけかねないから、莫大な軍用金の用意はいつでも出來てゐる、そいつを向に廻してこちらは素ッ裸で戰つて來たんだからな、そしてやつと、こゝまで追ッ詰めたんだからな、負傷も受けてる筈だよハヽヽヽハ（寂しい笑）

神鞭。ウム、相手が手段を擇ばんのだから、こつちだつて手段を擇んぢやゐられない、善いも、惡いもあるかい、だが時代も大分變りかけた、さすがに薩長のタガもゆるんでるよ、我々にももう山は見えて來たからソロ／＼身をかわす時機だらうぜ。

星。ウム、そりや己れにだつて分つてるよ。

（つね子、入來る）

つね子。あなたあの、お手水は？

星。ウム………（退場）

つね子。神鞭さん、私一人で胸をいためてるのでございますよ、何んとかならないものでせうか？

神鞭。傍の忠告なんか聞くやうな人間に出來てゐないんだからね……尤も忠告する方の人間が、役者が二三枚下だから困るんです、……あれでも、自分で氣が附くと、コロリと態度がかわるんですが……

つね子。家の者には、誰にでも信切で、よく氣を附けてくれますがね、世間へ出ると何うしてあんなに強い一方でせうね？

神鞭。家庭で猫のやうなのは、奥さんの腕がゑらいのですよ、外へ飛出しや虎か、豹かの本性が出るんですハヽヽ

つね子。私なんか腕も何もあるもんですか？

神鞭。イヤ、これは戯談です、唯、奥さんの淑徳が高いからといふのですよ、

つね子。まア……イヤですよ。

星。（小學生の服を着た明をつれて入つて來る）、神鞭の伯父さんに御あいさつを……。

（明、チヨツト挨拶）

神鞭。ウム、明君、お早う……學校か、今日は何曜日だつた？

明。明日が、土曜日だから、金曜日です。

神鞭。金曜日だつたかなア？

星。こいつ、なか／＼頭がよささうだよ。

神鞭。ウム、しつかり勉強しろッ……

明。書物がどつさりあるからいくらでも勉強せうと思つたら勉強出來

るんだ、ね、お父さん。

星。ウム……お父さんの書物は坊にはまだ六ッかしいよハヽヽヽ

（つね子、女中のつるを指揮して、コーヒー皿など卓上に運ぶ）

星。（パンとコーヒーを取りながら）これは己れの朝飯だ……。

（明が、傍に坐つて、せがんでゐる）

つね子。明さんはもうすんだでせう、お父さんのまで飲んではいけませんよ。

星。……飲みたがりや飲ませるさ、いけませんよはいかんよ……うちの奥さんはいゝ奥さんだが、唯あれはいけません、これはいけませんが出て困る、子供がいぢけるからなア、勿れ主義は家庭でもやめやうぜ。

つね子。でもあなたのやうに、甘やかすと、又このあいだのやうに下痢をします、さうするとあなた、醫師〱つて、眼の色をかへて御心配なさるぢやアありませんか？

神鞭。ハヽア、こいつは大將、一本参つたな。

星。なアに参るもんか？　己れが心配して見せなけりや皆が油斷するからな。

神鞭。ハヽヽ、君の逆手にはかなわんよ。

星。（考込んだやうな調子で）だが人間つて不思議なもんだなア、……この皮を剝ぐと肉がある……肉を剝ぐと骨がある……つまり骸骨だからな、骸骨が踊り廻つてるんだからな。

神鞭。妙な事を云出したなア？　君だつて死なんて事を考へるのかね？

星。（苦笑）フヽヽ、死なんて事をいくら考へたつて、何うにも仕様がないと考へてるんだ、尤も誰だつて死んだら自由平等になるが、そいつはつまらん、生きてる中の自由平等でなけやね、だから生てる中は己はそのために一分でも働く、働くのが人間だといふのだ、己れたちの生れる前にも、人間がウヨ〱ゐたし、死んで後にも人間はウヨ〱ゐる、つまり働くといふ事を人間は前の代から後の代へ傳へて行くもんだ、それが骸骨の踊り見たようなものだつて構ふもんか。それで善い、惡くつても他に仕方がなかろう。

つね子。まアこんな御話をなさるのは私、始めて聞きましたよ。

神鞭。何うせ誰しも死ぬにきまつてるから考へて見るのも善いが、しかし、君のやうな考方ぢやはかない、はかな過ぎるよ、

星。はかな過ぎたつて事實だから仕方がないさ、理窟は閑人がクッ附けるもんだ……だが己れが死んでも別に金は溜めてないから、あの書物を賣喰にすりや善い、あれでも二萬圓や三萬圓がものはあるだろう、さうせい、この子の教育費位出る。

つね子。イヤですよ、だしぬけにそんな事を、

星。己も年が寄つたのだろうハヽヽ、

神鞭。横濱でパーク公使をなぐつた時は、お互に若かつたな。

星。ウム、若かつたな、しかしこれでもまだまだ元氣は衰へてゐないよ

神鞭。イヤ、元氣がよ過ぎるぐらゐだ。
書生二木（次の室から）いつもの連中が見えましたが……
星。ウム、あちらで待たせてをけ。
つな子。明さん、もう學校でせう？
明。ハ……お父さん、お母さん、行つて參ります。
神鞭。己も歸る、明君、そこまで一しよに行から……市會議長丈は止めたがいゝなア、考へてをけ。
星。ウム……ぢやア又來いッ
つね子。何うも失禮いたしました。
（送つて行く、星は直ぐ五六人の壯士をつれて坐に返る）
星。ウム、皆よく來た……横山もゐたぢやアないか？
（薩摩新の書生、一行の後から入つて來て、末座で挨拶する）
星。明後日が日曜だぜ、運動會は何うしたい？
壯士の一。運動會どころぢやアありません（玄關から抱へて來た新聞紙をドッサリ投出して）…實に失敬千萬ぢやアありませんか？　今朝のを見ちや、何うも斯うにも我慢がならないんです、……公盜の巨魁を罷れとは何んたる事つてせう、いかに政敵とはいへ、苟も先生に對して、こんな極端な侮辱を加へるなんて、今田つて奴、頭が狂つてるとしか思へません……。
壯士の二。我々も、相當の覺悟をしてよい時だと云ひ合つてゐるのです、先生も御油斷なすつちやいけません、新聞なんかの煽動に乘つて、バカを働く奴が飛出すかも知れませんから。
星。（チッと見てゐたが）新聞の煽動に乘つて、一番先きにバカを働かうてのは、貴様等ぢやアないのか？……止せよッ。
壯士の一。……エッ……先生に決して御迷惑はかけませんッ
星。あんなボロ新聞社をたゝき潰したつて何になる？……書きたい丈書かせて置け、今に書きくたびれるよ、それよりか君等は、君等の前途の事を考へたが善い、皆、若いんだぜ、イヤでも應でも今にその肩にそれ〳〵重い責任がのしかゝつて來る筈だ、これからの日本はなか〳〵容易ぢやないからな。
壯士の二。ですから先生の地位はいよ〳〵重大です、それを擁んで叩き落さうとかゝてる奴等は、存分に懲しめてやるのが正義です。
壯士の三。先生は平氣でゐられてもあんな無責任な惡口を許して置くと社會は先生を誤解します……我々は堪らないんです。
星。まア落着いて聞け、こんな機會だから話してやるが、惡口を云はれる、損をする、生命が危い、この三つの災難は、人情上、誰でも好きはしないさ、だが公心から國事に盡さうとする者は、この三つの災難を自分の一身に引受けて立上る覺悟でなけやダメだ、だから己れは少つともヘコたれやせん、イヤ、いよ〳〵闘ふて行く勇氣が出て來るんぢや、貴様等もバカな眞似なんかせんで、運動會でもやれ…そして英氣を養ふんだ……
（壯士等は、沈默……すゝり泣く者もゐる）

(この時、玄關の方で、ガヤ〳〵高い聲が聞える)

壯士の二。何んだ？……亂暴者でもやつて來たのぢやアないか（起ちかかる）

星。何に二木が怒鳴つてるんだよ…物もらひだらう。（葉卷の烟を吹いてゐる）

二木。（顏を出す）先生、ヘンな奴がやつて來ました、社會民主黨の者だが、先生にぜひお目にかゝりたい、御承知の筈だつて、玄關にすわり込んでゐますが？、

壯士等。我々が追拂つてやりませう。

星。イヤ、待て、待て……このあいだ發會式を上げて、直に解散を喰つたあの可部や幸田の手先だらう、成程いつか電話をかけて來てたよ、會つてやらう、賓客だ、……汝等は應接室の方へ行つて居れッ。

壯士の一。先生、大丈夫ですか？、

星、ウム……心配ないよ。

（壯士等退場、二木に案内されて、二人の見すぼらしい洋服姿の神經質らしい靑年が入つて來る）

星。まア坐り給へ……あの黨は直ぐに解散を喰つたつてね、今の時勢ぢやまア仕方がなかろう。

洋服靑年の一。壓へ附けられや壓へ附けられる程我々は地の下へ潛り込んでドン底の方へドン底の方へと、根を張つて行く覺悟です。その中には太陽に照らされる芽生え時が來るといふ希望は決して捨てませんが……。

洋服靑年の二。壓迫なんかにはヘコたれません。

星。ウム、いつまでもその元氣でやれッ。

洋服靑年の一。で我々は、此際、リーフレットを出す考で、その方面に奔走して居ります。

星。フム、秘密出版かい？、

洋服靑年の一。今度も又壓迫されりやそんな方法を取るかも知れません。

同二。それで創刊號に、先生の月旦をやるつもりです……で、一應、先生に伺ひたいのは、例の問題になつた横濱の埋立事件や、最近では市街鐵道を公有にしないで、宮田一派の、資本家連中にやらせなすつた動機ですね？、

洋服靑年の一。先生の立場からの御意見を聞いて參考材料にしたいのですが……？

星。（葉卷の烟を吹かしながら）ハヽ、そりや君等の考で、勝手に評論するさ。

洋服靑年の一。でせうが、あの電車などは市でやるのが今日の時勢では、當然な事だと思ふのですが？

洋服靑年の二。あの當時の板木伯の意見などはよく時勢を見越してゐはしないでせうか？

星。……役人根性の奴に任せ切りちやまだまだ持てあますよ、……政治つてものは、理想を見失つちやいけないが、より以上、現實にしがみ附いてゐなけや、足が宙にぶらさがるんだ。

洋服青年の一。先生はあゝした事件で……その……多額のコンミツシヨンを取られたといふ噂ですが……？

同　二。勿論、先生の周圍の子分たちが、先生の名を利用したのも多いさうですが……？

星。君等の方が、吾輩よりもよく知つてるやうだハ、、、、

洋服青年の一。何にしても今の資本主義的政治はあらゆる方面に腐敗をひろげて行くばかりです、、、、、の上に、すべての基礎を立直さなければ、もう破滅だと思ひます。

洋服青年の二。何も彼も金で汚れつくしてゐるのが現代ですから。

星。(頷いて)ウム、そりや同感だよ、プールドンつて男がうまい事を云つてる、すべての財産は、、也つてな。

洋服青年の一(チヨツト面喰つて)へー、先生はプールドンを御研究ですか？

星。(微笑)讀むには讀んでるよ、商賣人、月給取、利子取、賭博、富くじ皆スリや泥棒と同じだつていふんだろう、金に對しては、今の世はすべて罪惡だ、その灰汁を拔くのは、マア君等の主張する社會主義ぐらゐのもんだろう。

洋服青年の二。へエ、先生は我々の主張に御贊成ですか？

星。ハ、、君等のやうに若かつたらな、……だが吾輩は今日の仕事を受持つてるんだ、君等のは明日の仕事さ……寄附はしてやらう、君等の用向もそれだろう。

洋服青年二人。はツ……と(頭をかく)

星。(つね子を呼ぶ)財布は？

つね子。ハイ……(懷から出して渡す)

星。(紙幣をつまみ出して冷靜に)……さア、盜賊のわけだ前だ……。持つて行けツ。

(洋服青年二人、顔を見合せて、もぢ〳〵する)

星。又話しに來るが善い、だが、何んでも宛身でやらなけやダメだぜツ。……(獨語的に)すべてを失ふものはすべてを得る也さ……ハハ、、

洋服青年二人。はツ……おやア頂戴します　(叩頭して退場)

壯士の一。(立現れ)先生、あんた奴に何うして金なんかやんなさるんです。

壯士の二。社會主義つて、國賊ぢやありませんか？

星。吾輩も、國賊あつかひされて來たんだ、今でもさうらしいぜ……ところで君等の運動會へも、寄附してやるよ。

壯士の三。でも我々はそんなのん氣な事が……？

星。だが運動會を名にして、放蕩はいかんよ、汽車賃と宿料と小遣ひ

だけ計算して奥さんから貰へ。さア……（と財布を抛り出す）
つね子、ぢやア、こちらへ入らつしやい。（退場）
（壯士等立ちかける）
星。オイ、横山は、チョイと用がある……皆はあつちへ行けッ。
（横山、一人居殘つて、隅の方へ小さく坐る）
星。もつとこつちへ來いッ……貴樣ア何うした？
横山。つい、御無沙汰許りいたしまして。
星。そんな事を聽ちやゐないッ、貴樣は不埒だぞ。
横山。エ……何うしまして？
星。とぼけるなッ……家の女中を…おつるをはらませたのは貴樣だ、貴樣に違ひない、眞直に云へッ。
横山。（どぎまぎしながら）イエ、決して僕では……。
星。二木になすり附けやうたつてダメだ、代言人試驗に合格したからつて、此家を出たのは、ゴマ化す爲めだつたんだ……おつるがすつかり白狀した。
横山。でも私は……
星。何が私はだ……あの女は今、こゝに歸つて來てゐる、貴樣が覺えがないといふなら對決させやうか？
横山。あの女が何と云つても、私は知りません。
星。强情張るなッ……貴樣の子が、あの女の腹にゐるんだ、貴樣はあの腹の子の父親だ、この事實が動かせるもんか？
横山。そいつア何うも誰の子だか……？
星。（怒した口調で）グヅグヅ云ふな、貴樣はあの女と結婚しろッ。
横山。でも先生、それはあんまり押付けです。
星。何が押附けだ。
横山。いかに何んでも……誰が見てもつり合ひません。
星。（鋭い調子で）何んでつり合はん？……横須賀の漁師の娘がいけないといふのか？
横山。（强い語氣で）ハイ……あんまり素性が卑しいのですから……。
星。（かみつくやうに）馬鹿ッ……己れの母親も横須賀の漁師の娘だつたぞ、世間でいふ素性の卑しい者の子に强か者が出る、貴族や富豪の、生ッ白い娘の腹からは弱蟲か、倣蟲しか生れやしない、この己れは漁師の娘の子だッ……。
横山。でも先生は別ですが？
横。別だとは何んだ……あそこを見い、あのお上人も安房の漁師の子だぞッ。
横山。……先生のためなら、僕生命でも投出すのは厭ひませんが、あんな無教育な女と一緒になるの丈は何卒許して下さい、
星。このとんま野郎、生命でも投出すと云ひながらあの女と一緒になるのが忌とは、何の口で云つた、よし、忌なら斯うしてやる
（云ひさま、飛びかゝつて、横山をなぐり附る）
つね子（入つて來て）まア、何うなすつたのです？そんな手荒な事は

お止しなさいませ（宥める）

星。つるを連れて來いッ、何うしてもこいつと夫婦にしてやる。

（つね子退場）

星。……何うだ、貴様？　結婚するか？

つね子。構はず、ズッとお入り（おつるを連れて來る）

星。つる、汝の腹の子を私生兒にしちや可愛さうだ……一生日かげ者ぢや誰だつて堪らないからな、横山と結婚しろ、己が世話をしてやる、

つる。ハイ……（泣いてゐる）

つね子。横山さん、つるは一旦、親の家へ歸つたのだが、身重が知れて、さんぐ\に叱られたので、泣く\/又こゝへたよつて來たのですよ、あまり可愛さうだから私等も默つてそのまゝ世話をしてゐるのです、義理の分つた人なら先生の仰る事に逆ふてはなりますまいよ……貴方、手を放しておやんなさい。

星。つるは、こんな薄情な奴に愛情をつかしちやアゐまいな？

つる。……私はもう……御恩は一生忘れません

星。ウム、よし、さア横山、何うだ？

つね子。手をお放しなさらなきや、横山さん、口が利けないのぢやないですか？

横山。（苦しさうに）こればかりは……。

星。何んだ？　まだ剛情張るか？　たゝき殺すぞッ。

つね子。あなた、あんまり亂暴です……先生がこんなにお怒りになつたのは、始めてゞすよ、横山さん、先生におあやまんなさい。

星。さア返事をしろッ

（壯士等が次の室から頭を出す）

壯士の一。先生、何うなすつたのです？

壯士の二。横山が先生に無禮を働いたのですか？

星。イヤ、此奴が間違を仕出したから一應見せしめに懲らしてやるんだ、……しかし皆安心せい、此奴も女を弄んで逃げ出すやうな輕薄男兒ではないんだ。横山とつるとは近い中に結婚するよ。

横山。（泣きながら）先生、……私が惡うございました……。

星。（手を放し）ウム、當り前だ、始めから分つてる事だ。

（一坐、沈默）

二木（かけ來る）正友會本部から電話がかゝりました……

星。（冷靜に）さうか……今日は市參事會へも廻らなけやならない、ソロソロ出かけやう。

つね子。お召物は？

星。今日は久しぶりに背廣にせうよ。

（廻舞臺又は暗轉）

第九場

前場と同日

市參事會議室

上手はガラス窓、正面板壁、一隅に扉口、下手にも扉口、中央に黒の大卓を圍んで椅子數脚、

登場人物　星亨、參事會員數名、助役、書記、伊庭想太郎、紳士友常、星夫人つね子、江藤總裁、原敬、板垣伯、その他、幹事、豫審判事、醫師、壯士、給仕、市吏員等大勢、

○

幕開くと、鼠色の背廣服の星亨を始め參事會員數名大卓を圍んで、議事をしてゐる。助役、書記も交つてゐる。

參事會員の一。今申しましたやうなわけで、この伊豆の石山の購入は、價格も至當といふよりは、格安に附いて居ますし、市の道路、橋梁、築港、建築その他の工事上、必要な材料を手に入れるのでありますから、假契約人の名義が手違ひであるなら、それを變更させて、速かに契約したらよろしかろうと思ひます、委員會の報告にかねて意見を申上げてをきます。

星。この石山は船着からよつ程奧へ入り込んで、甚だ不便な處だと云ふぢやアないか?　格安だ、格安だと觸れ廻つても、運賃その他でとんだ高いものに附く勘定だぜ、それぢや市民に迷惑をかける事になる、それに假契約人のやり口が氣に喰はない、他人の所有を、自分の名義で買込まうとしたのがくせ者だ、こんな惡ブローカーが持込んだのぢや、今更名義を取かへたつてダメだよ、又例のイヤな金錢問題——私腹を肥やすといふやうな問題がとかくくつ附いて廻る、吾輩は絶對反對だ。

(參事會員、一度に星の顏を見る)

參事會員の一。エ……絶對反對ですつて?

星。(頷いて)ウム……さうだ……。

(暫らく沈默)

參事會員の二。星さんが絶對反對と來ちや、誰も文句は云へますまいな?

參事會員の三。(未練がましく)別にヘンな問題はからんぢやアゐないのですが……?

星。……いろ〱聞込んだ事もある、一たい、市の當局者が不埒だ、もつと責任を明らかにしなけやいけない……こんな問題は直に撤回させやう……。

參事會員の四。ぢやアさうしますか?

參事會員の五。さうするより外に、いたし方がないでせう。

助役。それに御異議はありませんな……ぢやア撤回といたします……これでチヨツと休憩いたしませう。

星。ウム、それがよかろう……まだ飯は來ないな……オイ、君(參事會員の三を呼ぶ)この間に一番もんでやろう、さア盤を持つて來いツ(と葉卷の烟を吹かしながらくつろいで、聲をかける)

參事會員の三……(隅の方から將棋盤を持出して)返討に會はんやう

に用心し給へ（コマをならべ始める）

參事會員の六。一たい、どちらが强いんだらう……。

（一方では、ひそ〳〵さゝやき合ふ者もゐる）

星。（コマをならべながら）今日は君、政友會本部で、原敬の奴を二番とも立つゞけにたゝきつけてやつて來たんだ、あいつ、口惜がりやがつたよ……サア、來いッ……。

參事會員の三。（さしながら）……サア、どちらがまけたのか？　あやしいもんだ……。

星。傍道をあけやがつたのか？

參事會員の三。……飛車が詰まんやうに用心する事だ……。

參事會員の六。（のぞき込んで）王より飛車を大切がるてんだね。

……………　………………………

星。いけないッ。………

參事會員の三。そーら、飛車が動けなくなつたぢやアないか？………待つてか？

星。（首をふり）待つてちやアないッ……。

參事會員の三。ぢやア取つちまひますぜ。

星。馬鹿ア云ふな、これは、此方の手がちがつたんだ。

參事會員の三。ぢやア待つてだな……よし待つてやる。

星。馬鹿ア云へッ。待つてちやアない、この駒の動き方がちがつたんだ。

參事會員の三。……さう二手も三手も前からやり直しちやいけないよ

星。やり直しぢやアない、置き方が違つた丈だ……。

參事會員の六。ハ、、、、星亨一流押し通るか。

給仕。（名刺を持來る）。星先生、この方が御面會ですが……。

星。（見向もせず）何ア二……今、大切なところだ……さア斯う行けば何んでもないだらう。

參事會員の三。人の手を見てからそんな行方をするのはヒドイや。

星。チッともヒドクはない……當り前だ。

給仕。先生、四ッ谷の教育會の委員伊澤正太郎といふ方が、先生の教育會で御有つた御意見について御話が聞きたいとかいふ事ですが。

星。（夢中で）教育上……イヤ、今、そんなノンキなところぢやアない……さア何うだ？

參事會員の三。桂取りと來たか。……そんなものは惜しくもないね。

星。もらつてやらア……ソロ〳〵王が逃げ腰か？……

參事會員の三。バカな……

給仕。先生、何ういたしませう……。

星。今はいかん〳〵。（給仕、退場）

參事會員の六。フム、東が形勢が悪いッ。

星。弱い奴が負けるにきまつてる。助言はいかんぞ。

（給仕がそれ〴〵御飯を運んで來る、參事會員はあちこちに散つて、食事する）

參事會員の三。腹が減つては、戰が出來んか？

星。早く片附けてやらう……さア何うだ？

參事會員の三。王手飛車か？……卑怯だな……まア待つて……。

星。待つてはないよ……堂々たる戰をやれ

參事會員の三。何處までも勝手な大將だ……こいつはやり直し……。

星。（苦笑）負けたか？……ぢやア許してやる。

參事會員の三。負けたんぢやアない。

星。負け惜みを云ふなッ……

（相手が駒を投げ出す）

星。何うだいハ、、、（快笑）

給仕。洋食がまゐりました。

星。さうか……（匙を取り）今日は朝から土附かずだ。

參事會員の三。今にギューく云はせるから。

星。君などとは、何うも段違ひだ。

參事會員の三。直ぐ自惚れだから困る。

參事會員の一。もう一つ鼠買上げの問題が出てゐる、あれも早く片附けてしまはなけや……。

參事會員の四。ウム、星君が見えてゐるからサッサとやつて了ふんだね。

星。ウム、あれかい……さうさ……一氣に片附けたが善いだらう。

參事會員の二。ペストも、もう止んだかと思ふと、又とび出して來る、夏向だから實に厄介な問題だ。

參事會員の一。何處まで菌がひろがつてるか分らないから、始末に了へないね

參事會員の三。悪口を云ふ奴は、我々がペストまで種にして、腹を肥やすなんて、觸れ廻るのだから癪に障るよ。

參事會員の五。我々までペスト扱ひにするんぢや、やり切れないなハ、、、、。

星。（匙を動かしながら）己れはこれから又他へ廻るから、構はず始めかけてくれ。

參事會員の一。ぢやアボツく始めますか？ 給仕、助役さんにさう云つてくれ……

（一同再び大卓を圍む、助役、書記も入つて來る）

助役。ぢやア始めます……議案にもあります通り、捕鼠買上は二十二日即、明日限り中止する筈でございました、ところが又々、大學で有菌鼠を發見しましたので、まだ油斷がなりませんから、市は更に二萬五千圓の豫算を出して、買上を持續せんとの案であります、昨今、市費濫費などいふ謂れない攻撃もある際でございますから如何かとも思ひますが、何しろ市民衞生上の大問題でありますから、是非決行いたしたいので、御計らひする次第でございます。

參事會員の一。謂れない攻撃くらゐ氣にして、このペスト菌を東京全市に撒き散らかすやうな大事が出來したら、それこそ取り返しが附

かない、原案に賛意を表します、捕鼠買上勵行を然るべき事と思ひます。

參事會員の二。賛成！

參事會員の三。黒死病にあばれ放第、あばれられちやかなわない、異論はないでせうな。

星。(起上る) 吾輩は不賛成だ、……ペスト蔓延の原因だつて、醫者は何んだ、彼んだ云つてるがほんとうの事はまだ分つてゐないらしい、のみならず、これまで市から莫大な金を支出して買上げた捕鼠斃鼠の中から、また一疋の有菌鼠も發見しないぢやアないか？ ひどいのになると、鼠を市外の土地から買ひあつめて、商買にしてる奴もあるていふ事だ、こんな頭の黒い有菌鼠こそ見つかり次第撲殺する必要がある、市の費用も嵩んでゐる折柄だからもうこんな事は止めた方が善い、もしペスト蔓延が、大學から續々出るとすれば、有菌鼠發見の附近の建物丈構ふことはない、火を附けて燒拂つて終ふんだ、その方がサツパリする。

參事會員の一。エ、燒拂ふんですつて？

星。根こそぎ、燒いちまやア善いんだ

(參事會員等は額をあつめて、コソ〳〵論じ合つてゐる)

(この時、五十才位の、鼻筋の通つた、色の白い羽織袴着の伊庭正太郎正面一隅の扉を排して、ツカ〳〵と星の傍にすゝみ寄る)

伊庭(顔をよせて談話口調で)。このあいだ、市の教育會の演説で、孔孟道德は廢れ主義だと罵倒しましたね、舊い道德なんか蹴飛して、何んでもやれ、彼んでも爲せツ、て、君は云ひましたな。

星。君は誰だ？

伊庭。(急に叫ぶ) 己れは伊庭正太郎、この國賊を倒しに來た (忽ち白刄閃く〳〵)

星。下れッ。

(バタ〳〵と格鬪が始まる、一同、それと氣附いてさわぎ立つ、椅子で打ちかゝるもあり、中には椅子に倚つたまゝひつくり返るもあり、逃げ出すのもあり、助役始め數人、のしかゝつて伊庭を取押へる、星は倒れてゐる。)

伊庭。ア、仕留めた……國賊を誅した……愉快だ……逃げかくれはせん……

(ドタバタと吏員や給仕や多人數が出入して混亂する)

伊庭(引かれ行ながら) 思ひ知つたか？……斬奸狀は懐にあるぞ……

(扉口に消える)

(星の斃れた周圍に、人の黒山が築かれる、巡査や醫師が驅けつける、やがて豫審判事、檢事の一行がくり込んで檢屍、證人しらべの混雜が一しきり——それはすべて、人の黒山の蔭で進行する——)

(やがて、雪の如き白布に包まれた星亨の屍體は、大卓の上に安置される、鉢植のバラがその枕頭に置かれる

星夫人のつね子が、人々に導かれて、青ざめた顔色で、悄然とし

て入つて來る。

助役。何うもとんだ事になりまして……。

參事會員等。何んとも、申上やうもございません……。

(夫人は、目禮して、靜かに屍體の方に歩み寄り、默拜したまゝぢつと立つてゐる——沈默

神鞭(飛ぶやうに入つて來る)ダメかい…ダメかい、(いきなり、屍體の傍へ飛んで行き)殘念な事をしたァ……。

助役。…突嗟の出來事でございました…まるで夢のやうで……。

神鞭。…ア…奥さん…殘念ですなッ……。

つね子。(落着いた、しんみりした調子で)こんな事になろうとは思ひもかけませんでした……。

神鞭。兇漢は取押へたんだつて……何者が唆かしたのか?、

助役。唯の無頼漢とも思へませんが、今、取調べ最中でせう。

參事會員の一。斬奸狀だとか、何んだとかいつてゐましたから、淺はかな考からこんな事を仕出したのだと思ひます……

神鞭。(罵る口調)大馬鹿めッ…とんだ事をしやがつた……急所をやつたんだな?、

醫師。ハイ、眞先に左の肺部をつき通したのが致命傷です、それから二三刀斬りつけてゐます、手口が唯の素人ではありますまい。

神鞭。(嘆息)得難い人物を殺しやがつた……人民のために戰つてる總大將を暗打にしやがつた……屍は手段を擇ばなかつたが、こんな卑怯な手段は、手段の中に勘定してなかつたんだぞッ……。ア今朝、會つたばかりだのになァ(屍體に取附いて男泣する)

助役。…市のためにいろ〳〵大きな仕事を計劃されてゐたのですが、何も彼もダメになりました……

神鞭。市の爲めばかりぢやァないよ……己に云はせりや今に、日本の大黑柱になる男だつた、あんまりもろい折れ方をしたなァ……。

參事會員等。……江藤總裁が見えました。

江藤。(愁ひに滿ちた顏色で、悄然と入つて來る、原啓がついて來る)…電話を聞いて噓かと思つたが、何うも驚いた事が出來たもんだのう、さういへば今日は金曜日で、シーザーの刺され日だ……(屍體を默拜)……殘念だッ……何んといふ野蠻な眞似をやるんだろう、まだ封建時代の人間が、殘つてる……。

神鞭。侯爵、あなた方もあんまり封建時代の夢を見過ぎてゐて藩閥に長くこびりついてゐられたので、星君もあんな苦戰惡鬪をやりつゞけて來たんです……あなた方の目をまさして上げた星はこんな死ざまです

江藤。ウム、さう云はれゝば、さうかも知れん……オ、奥さん、何うも何んともいへない事で。

つね子。(氣丈に)ハイ、生前いろ〳〵御世話になりました……あの、去年の大病で死んだよりも、まだこの方が……さう思つて私……あきらめます。

（沈默）

原。（長し默拜を了つて）どうも夢のやうな事だ。午前本部で二人が將棋をさしたばかりだつたのに……何うも夢としか想へん。

參事會員等。ア、板木伯が見えました。

板木。（皆に目禮）イヤ、電話で驚いて了つた……惜しい人物を無くした……（默拜）……奥さん、とんだ事になつたもんだね……

神鞭。原君、君も剛情だが、星にはかなわなかつたらう、しかし斯うなつちや、星の志のつげるのは、正友會ぢや、まア君くらゐなもんだぜ。

原。ウム、已れも大抵の奴には負けないつもりだが、星には一目をいたよ……あの後繼は容易ぢやアない、だがあの氣象ぢや疊の上で死ねなかつたのも、不思議でないやうな氣がするよ。

江藤。（淋しい笑）さういふ君も、疊の上で死ねるか、何うか、あぶないもんだ、まア氣をつける事だ。

原。總裁も老ひて益々御壯んだから何んな死ざまをなさるか、分りませんよ、

板木伯。（そこへ近づいて）……先に立つて行く者は、皆犧牲になる覺悟がゐるだらう……尤も吾輩は、運がわるくて、殺され損つた方だらうが！（淋しい笑）

（黨員、壯士が數十人黒く群れて扉口から肅然と入つて來る、屍體の前に半圓形に列坐して合掌默拜する、

ガラス窓には、赤い夕陽の光り、つね子夫人、江藤總代始め、立ちながら嚴肅に、默拜

大沈默の中に

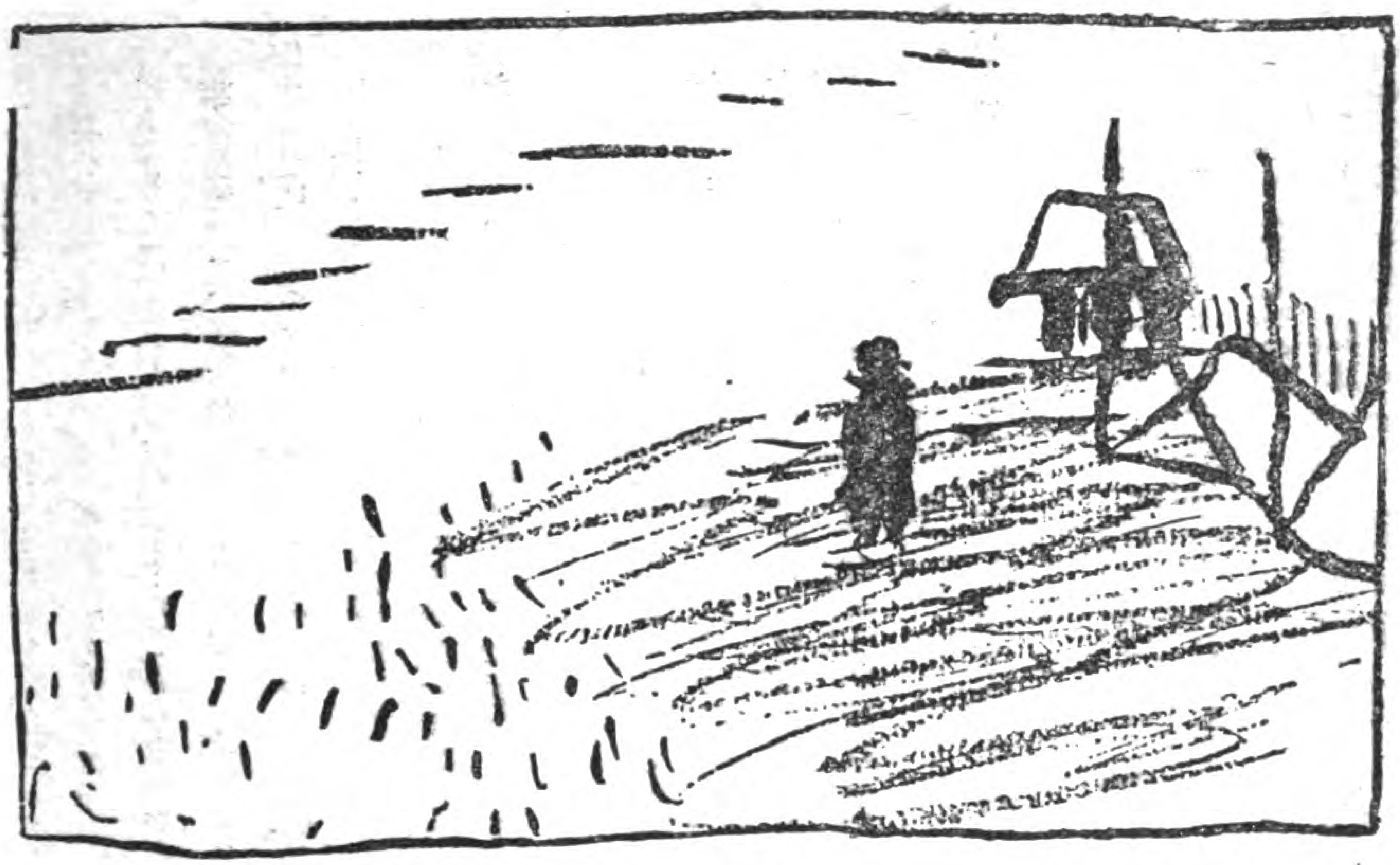
――カーテン――

附記

伊藤痴遊著「巨人星亨」仙洞隱士著「怪傑星亨」、都澤亨著「星亨」、藤井竹官著「星亨」文齋社編「星亨」正岡藝陽著「時代思想の權化星亨」「第五帝國議會速記錄」其他參照

大體は史實に據りたれど、勿論史實そのまゝではない、尚衆議院議員牧野良三氏（現參與官）の紹介に依り、直接材料收集のため星亨氏の遺族及知友の方々に會見する機會の與へられた事を感謝する

本篇は、レーゼ、ドラマの形を取らず、ビューネン、ドラマの體に依る――



三つの窓

芥川龍之介

1　鼠

一等戰鬪艦××の横須賀軍港へはひつたのは六月にはひつたばかりだつた。軍港を圍んだ山々はどれも皆雨の爲に煙つてゐた。元來軍艦は碇泊したが最後、鼠の殖ゑなかつたと云ふためしはない。――××も亦同じことだつた。長雨の中に旗を垂らした二萬噸の××の甲板の下にも鼠はいつか手箱だの衣嚢だのにもつきはじめた。

から云ふ鼠を狩る爲に鼠を一匹捉へたものには一日の上陸を許すと云ふ副長の命令の下つたのは碇泊後三日にならない頃だつた。勿論水兵や機關兵はこの命令の下つた時から熱心に鼠狩りにとりかかつた。鼠は彼等の力の爲に見る見る數を減らして行つた。從つて彼等は一匹の鼠も爭はない訣には行かなかつた。

「この頃みんなの持つて來る鼠は大抵八つ裂きになつてゐるぜ。寄つてたかつて引つぱり合ふものだから。」

ガンルウムに集つた將校たちはこんなことを話して笑つたりした。少年らしい顏をしたA中尉もやはり彼等の一人だつた。つゆ空に近い人生はのんびりと育つたA中尉にはほんたうには何もわからなかつた。が、水兵や機關兵の上陸したがる心もちは彼にもは

つきりわかつてゐた。A中尉は卷煙草をふかしながら、彼等の話にまじる時にはいつもかう云ふ返事をしてゐた。

「さうだらうな。おれでも八つ裂きにし兼ねないから。」

彼の言葉は獨身者の彼だけに言はれるのに違ひなかつた。彼の友だちのY中尉は一年ほど前に妻帶してゐた爲に大抵水兵や機關兵の上にわざと冷笑を浴びせてゐた。それは又何ごとにも容易に弱みを見せまいとするふだんの彼の態度にも合してゐることは確かだつた。褐色の口髭の短い彼は一杯の麥酒に醉つた時さへ、テエブルの上に頰杖をつき、時々A中尉にかう言つたりしてゐた。

「どうだ、おれたちも鼠狩をしては？」

或雨の晴れ上つた朝、甲板士官だつたA中尉はSと云ふ水兵に上陸を許可した。それは彼の小鼠を一匹、——しかも五體の整つた小鼠を一匹とつた爲だつた。人一倍體の逞しいSは珍しい日の光を浴びたまま、幅の狹い舷梯を下つて行つた。すると仲間の水兵が一人身輕に舷梯を登りながら、丁度彼とすれ違ふ拍子に常談のやうに彼に聲をかけた。

「おい、輸入か？」

「うん、輸入だ。」

彼等の問答はA中尉の耳にははひらずにはゐなかつた。彼はSを呼び戾し、甲板の上に立たせたまゝ、彼等の問答の意味を尋ね出した。

「輸入とは何か？」

Sはちやんと直立し、A中尉の顏を見てゐたものゝ、明らかにしよげ切つてゐるらしかつた。

「輸入とは外から持つて來たものであります。」

「何の爲に外から持つて來たか？」

A中尉は勿論何の爲に持つて來たかを承知してゐた。が、Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌々しさを感じ、力一ぱい彼の頰を擲りつけた。Sはちよつとよろめいたものゝ、すぐに又不動の姿勢をした。

「誰が外から持つて來たか？」

Sは又何とも答へなかつた。A中尉は彼を見つめながら、もう一度彼の横顏を張りつける場合を想像してゐた。

「誰だ？」

「わたくしの家内であります。」

「面會に來たときに持つて來たのか？」

「はい。」

A中尉は何か心の中に微笑しずにはゐられなかつた。

「何に入れて持つて來たか？」

「菓子折に入れて持つて來ました。」

「お前の家はどこにあるのか？」

「平坂下であります。」

「お前の親は達者でゐるか？」

「いえ、家内と二人暮らしであります。」

「子供はないのか？」

「はい。」

Sはかう云ふ間も顏の中も不安らしい容子を改めなかつた。A中尉は彼を立たせて措いたまま、ちよつと横須賀の町へ目を移した。横須賀の町は山々の中にもごみごみと屋根を積み上げてゐた。それは日の光を浴びてゐたものの、妙に見すぼらしい景色だつた。

「お前の上陸は許可しないぞ。」

「はい。」

SはA中尉の默つてゐるのを見、どうしようかと迷つてゐるらしかつた。が、A中尉は次に命令する言葉を心の中に用意してゐた。が、暫く何も言はずに甲板の上を歩いてゐた。「こいつは罰を受けるのを恐れてゐる。」――そんな氣もあらゆる上官のやうにA中尉には愉快でないことはなかつた。

「もう善い。あつちへ行け。」

A中尉はやつとかう言つた。Sは擧手の禮をした後、くるりと彼に後ろを向け、ハッチの方へ歩いて行かうとした。彼は微笑しないやうに努力しながら、Sの五六歩離れた後、俄かに又「おい、待て」と聲をかけた。

「はい。」

Sは咄嗟にふり返つた。が、不安はもう一度體中に溢れて來たらしかつた。

「お前に言ひつける用がある。平坂下にはクラッカアを賣つてゐる店があるな？」

「はい。」

「あのクラッカアを一袋買つて來い。」

「今でありますか？」

「さうだ。今すぐに。」

A中尉は日に燒けたSの頬に涙の流れるのを見のがさなかつた。――

――

それから二三日たつた後、A中尉はガンルウムのテエブルに女名前の手紙に目を通してゐた。手紙は桃色の書簡箋に覺束ないペンの字を並べたものだつた。彼は一通り讀んでしまふと、一本の卷煙草に火をつけながら、丁度前にゐたY中尉にこの手紙を投げ渡した。

「何だ、これは？……「昨日のことは夫の罪にては無之、皆淺はかなるわたくしの心より起りしこと故、何とぞ不惡御ゆるし下され度候。……尚又御志のほどは後のちまでも忘れまじく」……」

Y中尉は手紙を持つたまま、だんだん輕蔑の色を浮べ出した。それから無愛想にA中尉の顔を見、冷かすやうに話しかけた。

「善根を積んだと云ふ氣がするだらう？」

「ふん、多少しないこともない。」

A中尉は輕がると受け流したまま、圓窓の外を眺めてゐた。圓窓の外に見えるのは雨あしの長い海ばかりだつた。しかし彼は暫くする

と、俄かに何か詰るやうにかうY中尉に声をかけた。

「けれども妙に寂しいんだがね。あいつのビンタを張つた時には可哀さうだとも何とも思はなかつた癖に。……」

Y中尉はちよつと疑惑とも躊躇ともつかない表情を示した。それから何とも返事をしずにテエブルの上の新聞を読みはじめた。ガンルウムの中には二人の外に丁度誰もゐ合はせなかつた。が、テエブルの上のコツプにはセロリイが何本もさしてあつた。A中尉もこの水々しいセロリイの葉を眺めたまま、やはり巻煙草ばかりふかしてゐた。かう云ふ素つけないY中尉に不思議にも親しみを感じながら。……

2 三人

一等戦闘艦××は或海戦を終つた後、五隻の軍艦を従へながら、静かに鎮海湾へ向つて行つた。海はいつか夜になつてゐた。が、左舷の水平線の上には大きい鎌なりの月が一つ赤あかと空にかかつてゐた。二万噸の××の中は勿論まだ落ち着かなかつた。しかしそれは勝利の後だけに活き活きとしてゐることは確かだつた。唯小心者のK中尉だけはかう云ふ中にも疲れ切つた顔をしながら、何か用を見つけてはわざとそこここを歩きまはつてゐた。

この海戦の始まる前夜、彼は甲板を歩いてゐるうちにかすかな角燈の光を見つけ、そつとそこへ歩いて行つた。するとそこには年の若い軍楽隊の楽手が一人甲板の上に腹ばひになり、敵の目を避けた角燈の光に聖書を読んでゐるのであつた。K中尉は何か感動し、この楽手に優しい言葉をかけた。楽手はちよつと驚いたらしかつた。が、相手の上官の小言を言はないことを発見すると、忽ち女らしい微笑を浮かべ、怯づ怯づ彼の言葉に答へ出した。……しかしその若い楽手ももう今ではメエン・マストの根もとに中つた砲弾の為に死骸になつて横になつてゐた。K中尉は彼の死骸を見た時、俄かに「死は人をして静かならしむ」と云ふ文章を思ひ出した。若しK中尉自身も砲弾の為に咄嗟に命を失つてゐたとすれば、――それは彼にはどう云ふ死よりも幸福のやうに思はれるのだつた。

けれどもこの海戦の前の出来事は感じ易いK中尉の心に未だにはつきり残つてゐた。戦闘準備を整へた一等戦闘艦××はやはり五隻の軍艦を従へ、浪の高い海を進んで行つた。すると右舷の大砲が一門なぜか蓋を開かなかつた。しかももう水平線には敵の艦隊の挙げる煙も幾すぢかかすかにたなびいてゐた。この手ぬかりを見た水兵たちの一人は砲身の上へ跨るが早いか、身軽に砲口まで腹這つて行き、両足で蓋を押しあけようとした。しかし蓋をあけることは存外容易には出来なかつた。水兵は海を下にしたまま、何度も両足をあがくやうにしてゐた。が、時々顔を挙げては白い歯を見せて笑つたりもしてゐた。そのうちに××は大うねりに進路を右へ曲げはじめた。同時に又海は右舷全体へ凄まじい浪を浴びせかけた。それは勿論あつと言ふ間に大砲に跨つた水兵の姿をさらつてしまふのに足るものだつた。海の

中に落ちた水兵は一生懸命に片手を擧げ、何かおほ聲に叫んでゐた。ブイは水兵たちの罵る聲と一しよに海の上へ飛んで行つた。しかし勿論××は敵の艦隊を前にした以上、ボオトをおろす訣には行かなかつた。水兵はブイにとりついたものの、見る見る遠ざかるばかりだつた。彼の運命は遲かれ早かれ溺死するのに定まつてゐた。のみならず鱶はこの海にも決して少ないとは言はれなかつた。……

　若い樂手の戰死に對するK中尉の心もちはこの海戰の前の出來事の記憶と對照を作らずにゐる訣はなかつた。彼は兵學校へはひつたものの、いつか一度は自然主義の作家になることを空想してゐた。のみならず兵學校を卒業してからもモオパスサンの小説などを愛讀してゐた。人生はかう云ふK中尉には薄暗い一面を示し勝ちだつた。彼は××に乘り組んだ後、エヂプトの石棺に書いてあつた「人生――戰鬪」と云ふ言葉を思ひ出し、××の將校や下士卒は勿論、××そのものこそ言葉通りにエヂプト人の格言を鋼鐵に組み上げてゐると思つたりした。從つて樂手の死骸の前には何かあらゆる戰ひを終つた靜かさを感じずにはゐられなかつた。しかしあの水兵のやうにどこまでも生きやうとする苦しさもたまらないと思はずにはゐられなかつた。

　K中尉は額の汗を拭きながら、せめては風にでも吹かれる爲に後部甲板のハッチを登つて行つた。すると十二吋の砲塔の前に綺麗に顏を剃つた甲板士官が一人兩手を後ろに組んだまゝ、ぶらぶら甲板を歩いてゐた。その又前には下士が一人頬骨の高い顏を半ば俯向け、砲塔を後ろに直立してゐた。K中尉はちよつと不快になり、そわそわ甲板士官の側へ歩み寄つた。

「どうしたんだ？」

「何、副長の點檢前に便所へはいつてゐたもんだから。」

　それは勿論軍艦の中では餘り珍らしくない出來事だつた。K中尉はそこに腰をおろし、スタンションを取り拂つた左舷の海や赤い鎌なりの月を眺め出した。あたりは甲板士官の靴の音の外に人聲も何も聞えなかつた。K中尉は幾分か氣安さを感じ、やつとけふの海戰中の心もちなどを思ひ出してゐた。

「もう一度わたくしはお願ひ致します。善行賞はお取り上げになつても仕かたはありません。」

　下士は俄に頭を擧げ、かう甲板士官に話しかけた。K中尉は思はず彼を見上げ、薄暗い彼の顏の上に何か眞劍な表情を感じた。しかし快活な甲板士官はやはり兩手を組んだまゝ、靜かに甲板を歩きつゞけてゐた。

「莫迦なことを言ふな。」

「けれどもこゝに起立してゐてはわたくしの部下に顏も合はされません。進級の遲れるのも覺悟してをります。」

「進級の遲れるのは一大事だ。それよりもそこに起立してゐろ。」

　甲板士官はかう言つた後、氣輕に又甲板を歩きはじめた。K中尉も理智的には甲板士官に同意見だつた。のみならずこの下士の名譽心を

感傷的と思ふ氣もちもない訣ではなかつた。が、ぢつと頭を垂れた下士は妙にK中尉を不安にした。

「こゝに起立してゐるのは恥辱であります。」

　下士は低い聲に頼みつゞけた。

「それはお前の招いたことだ。」

「罰は甘んじて受けるつもりでをります。唯どうか起立してゐることは……」

「唯恥辱と云ふ立てまへから見れば、どちらも畢竟同じことぢやないか？」

「しかし部下に威厳を失ふのはわたくしとしては苦しいのであります。」

　甲板士官は何とも答へなかつた。下士は、――下士もあきらめたと見え、「あります」に力を入れたぎり、一言も言はずに佇んでゐた。K中尉はだんだん不安になり、（しかも又一面にはこの下士の感傷主義に欺されまいと云ふ氣もない訣ではなかつた）。何か彼の爲に言つてやりたいのを感じた。しかしその「何か」も口を出た時には特色のない言葉に變つてゐた。

「靜かだな。」

「うん。」

　甲板士官はかう答へたなり、今度は顋をなでゝ歩いてゐた。海戰の前夜にK中尉に「昔、木村重成は……」などゝ言ひ、特に丁寧に剃つてゐた顋を。……………

　この下士は罰をすました後、いつか行方不明になつてしまつた。が、投身することは勿論當直のある限りは絶對に出來ないのに違ひなかつた。のみならず自殺の行はれ易い石炭庫の中にもゐないことは半日とたゝないうちに明かになつた。しかし彼の行方不明になつたことは確かに彼の死んだことだつた。彼は母や弟にそれぞれ遺書を殘してゐた。彼に罰を加へた甲板士官は誰の目にも落ち着かなかつた。K中尉は小心ものだけに人一倍彼に同情し、K中尉自身の飲まない麥酒を何杯も強ひずにはゐられなかつた。が、同時に又相手の醉ふことを心配しずにもゐられなかつた。

「何しろあいつは意地つぱりだつたからなあ。しかし死なゝくつても善いぢやないか？――」

　相手は椅子からずり落ちかゝつたなり、何度もこんな愚痴を繰り返してゐた。

「おれは唯立つてゐろと言つただけなんだ。それを何も死なゝくたつて、……」

　××の鎭海灣へ碇泊した後、煙突の掃除にはひつた機關兵は偶然にこの下士を發見した。彼は煙突の中に垂れた一すぢの鎖に縊死してゐた。が、彼の水兵服は勿論、皮や肉も焼け落ちた爲に下つてゐるのは骸骨だけだつた。かう云ふ話はガンルウムにゐたK中尉にも傳はらない訣はなかつた。彼はこの下士の砲塔の前に佇んでゐた姿を思ひ出

し、まだどこかに赤い月の鏃なりにかゝつてゐるやうに感じた。

この三人の死はK中尉の心にいつまでも暗い影を投げてゐた。彼はいつか彼等の中に人生全體さへ感じ出した。しかし年月はこの厭世主義者をいつか部内でも評判の善い海軍少將の一人に數へはじめた。彼は揮毫を勸められても、滅多に筆をとり上げたことはなかつた。が、やむを得ない場合だけは必ず畫帖などにかう書いてゐた。——

君看双眼色
不語似無愁

3　一等戰鬪艦××

一等戰鬪艦××は横須賀軍港のドックにはいることになつた。修繕工事は容易に捗どらなかつた。二萬噸の××は高い兩舷の内外に無數の職工をたからせたまま、何度もいつにない苛立たしさを感じた。が、海に浮かんでゐることも蠣にとりつかれることを思へば、むづ痒い氣もするのに違ひなかつた。

横須賀軍港には××の友だちの△△も碇泊してゐた。一萬二千噸の△△は××よりも年の若い軍艦だつた。彼等は廣い海越しに時々聲のない話をした。△△は××の年齡には勿論、造船技師の手落ちから舵の狂ひ易いことに同情してゐた。が、××を劬る爲に一度もそんな問題を話し合つたことはなかつた。のみならず何度も海戰をして來た××に對する敬意の爲にいつも敬語を用ひてゐた。

すると或曇つた午後、△△は火藥庫に火のはいつた爲に俄かに恐しい爆聲を擧げ、半ば海中に横になつてしまつた。××は勿論びつくりした。（尤も大勢の職工たちはこの××の震へたのを物理的に解釋したのに違ひなかつた。）海戰もしない△△の急に片輪になつてしまふ、——それは實際××には殆ど信じられない位だつた。彼は努めて驚きを隱し、はるかに△△を勵ましたりした。が、△△は傾いたまま、炎や煙の立ち昇る中に唯唸り聲を立てるだけだつた。

それから三四日たつた後、二萬噸の××は兩舷の水壓を失つてゐた爲にだんだん甲板も乾割れはじめた。この容子を見た職工たちは愈修繕工事を急ぎ出した。が、××はいつの間にか彼自身を見離してゐた。△△はまだ年も若いのに目の前の海に沈んでしまつた。かう云ふ△△の運命を思へば、彼の生涯は少くとも喜びや苦しみを嘗め盡してゐた。××はもう昔になつた或海戰の時を思ひ出した。それは旗もずたずたに裂ければ、マストさへ折れてしまふ海戰だつた。……

二萬噸の××は白じらと乾いたドックの中に高だかと艦首を擡げてゐた。彼の前には巡洋艦や驅逐艦が何隻も出入してゐた。それから新らしい潛航艇や水上飛行機も見えないことはなかつた。しかしそれ等は××には果なさを感じさせるばかりだつた。××は照つたり曇つたりする横須賀軍港を見渡したまま、ぢつと彼の運命を待ちつづけてゐた。その間もやはりおのづから甲板のじりじり反り返つて來るのに幾分か不安を感じながら。……（昭和二・六・十）



善魔

里見弴

四の五

用で行く關西の旅の歸途、箱根で落ち合つて、一晩でも二晩でもお互にゆつくり骨休めをしようではないかと、出かける前に、三つ四つ年上の、勝彌といふ朋輩に誘はれ、今日といふ日に、湯本の宿で待つてゐるやう約束して來たのだから、——さう云つて瑛龍は、久保や昌造が止めるのも聽かずに、朝とも晝ともつかない食事をすますと、お民に荷の始末などさせ、いつの間にか二寸ばかりも積つた雪の上に、自動車の太い轍の跡を殘して、やがて慌たゞしく發つて行つて了つた。その時分には、起きぬけからの酒が、可なりもう昌造を醉はせてゐた。物見のやうな感じの、三階のてつぺんまで戻つて來ると、ちり鍋の煮つまつてゐる餉臺に凭れてへつとりして了つた。はばかりへよつた久保は、そこへはいつて來るなり、うしろから肩を小突いて

「どうしました。さうまア現金にしよげないでもいゝでせう」

「しよげもしないが……」

「まア〳〵、そんな本氣な聲を出さないたつて、一杯どうです。お酌しませう」

「醉ひましたよ」

「まだ貴方……。熱いのをひとつ持つて來て貰ふかな」

呼鈴を押して、「然し、なんだか急にがらんとしちまひましたね」

たんとでもない荷物がなくなり、鏡臺や化粧道具や濡手拭が消え去つただけで、急に部屋ぢうがさむ〴〵と白け返つて了つた。そこにあるものはみんな、――口を利いてゐる人間でも、湯氣をたてゝゐる鍋でも、悉く置き忘れられた感じだつた。

「酒の飲めないやつなんて、考へてみれア可哀想なもんだな」

さう云つて昌造が、新しく來た銚子から手酌で注がうとするのを、久保はひツたくるやうにして、

「さうまア悵然としつこなしさ」

「貴方こそ一々さう云はないで、少しはおもての景色でも見てごらんなさいなね。どうです！」

障子の中硝子には、けれども、遠い山の頂が、一抹、幽に望まれるだけで、あとはたゞ灰色の雪の、縱横無盡に舞ひ狂ふ綾があるばかりだつた。

「よく降るなア」

「どうです、こんな日に、酒の飲めない人間のことを考へると、氣の毒になるでせう」

さう云ふ間にも、ふと、昌造の心には、山鼻の斷崖を、急角度に廻つたりする瑛龍たちの自動車の姿が、あぶなつかしく思ひ描かれたりした。また、さういふところを乘つて行きながら、瑛龍の心に映つてゐるこの三階の部屋の様も、遠くはじけ返つて來た。それによつて、一層淋しくされた。――いつものやうに豫知し、警戒するところなしに、頭からのめり込んで行くやうな感傷が、醉とともに、胸いつぱい擴がつて來た。

「どうです、三平でも呼びますかね」

才氣縱橫の久保も、有繋にこの對座はもて扱つた。自分だけの氣持としても、賑な喋りてを同時に二人も失つたあと、どうにも取返しのつかないものがあつた。なまじ雪なんぞ降つてゐるだけに、めいめいの部屋に引きとらうといふ始末のつけ具合もわるかつた。

「三平もいゝが、おツこちやんをお呼びなさいなね、おツこちやんを」

作者註。――瑛龍たちと同じ土地の藝者で、親しい仲ではよくかう云つて呼ぶ琴次は、もう二年近くも久保の世話をうけてゐた。

「おツこですか。それア呼んでもいゝけど」

「お呼びなさいよ。そんなら、序に三公も呼んでやれば、丁度途中のお伴が出來ていゝぢやありませんか。さうなさいよ」

「さうねえ、ぢア、兎も角電話をかけてみますかね」

この相談がきまつて、久保が卓上電話にかゝる頃から、そろ〳〵また昌造は、前後不覺の醉態にはいつて行つた。いつになくしめやかに、もの靜だつたから、久保もそれほどとは思はなかつたが、はつきり昌造の憶えてゐたのは、たゞかういふ話になつて來た時だけだつた。

「……行きませうよ」

昌造は憮然として、この義ばかりは同意できない、と思つた。

「それアいけない！」

「だぜ。……いゝぢアありませんか、兎も角行つてみて……」

「それアいけない。よしませう」

「どうして？　來ちアいけないとでも云はれてるんですか」

「そんなこたアないけど、それアまアよしませうよ」

「そいぢア、何も、ちつとも構はないぢアありませんか。この雪の中を自動車で出かけるのも、またちよつと洒落てますぜ。行きませうよ！」

「然しね……、僕ア、箱根で落ち合ふつてのは、……うたぐつちア惡いけれど、勝彌ぢアなかないかと思ふんだ」

「ふーん」

ちよつと考へてから、「そんならそれだつて構はないぢアありませんか。それとも、やけますか」

「やけもしないが……」

「どつちにしたつて、惡氣であとをつけるわけぢアなし、……そのくらゐのことは彼方だつて解ると思ふがな」

「でもね、……まアよしませうよ」

「ひどく弱氣だなア」

「だつて、あんまりどうも……」

「みつともない？」

「みつともないこともないけれど、なんだかへんぢアありませんか」

「ちつともへんなんてこたアありませんよ。要するに愉快な洒落ぢアありませんか。行つて、なんとかひとつ、おどかしてやりませうよ」

「でも、もしひよつと勝彌でなかつた場合……」

「貴方がみじめかな？」

「うん、みじめですとも」

どん、とひとつ脊なかをどやすと、久作は、禿た髪毛を、兩手で盆の窪まで撫でつけ、そこに指先を組み合せたまゝ、天井を仰いで笑ひだした。

「どうも實に、呆れ返つたもんだなア」

「だつて仕方がない」

昌造のは、べそをかいたやうな笑ひ顔だつた。「こつちのみじめはまだ我慢がなるとして、いかにも先方に對して惡いからなア」

「いけねえ、とてもこれアいけねえ」

座蒲團ごと横膝行に、三舍を避けるの態をみせて、「どうも實に……
……。有繋の加島昌造も、かういふことになるもんですかなア」

譯たず、それを、褒められた意味に釋つて、その故に昌造は赤くなつた。

……降りしきる雪のなかを、幌自動車で走つてゐた。たうとう出かけて了つた！　と思ふと、昌造の心は、たゞひと筋に弱々しく暗み沈んで行つた。もうとり返しがつかない、とさへ感じられて悲しかつ

た。からなつては、久保一人がたよりだつた。ぐつたりと倚子に身を埋めて、

「…………」

どんなことを云つたのやら、皆目憶えはなかつたが、その時の氣持から推せば、さだめし女々しく、甘く、殉情的な泣言でも並べたてたに相違なく、こればかりはあと〱までも自己嫌惡の種だつた。訊いてみても、久保が、

「いゝえ、別になんにも云やしませんでしたよ」

とばかりで、詳しい話をしてくれないのが、氣がゝりで氣がゝりでならなかつた。

……汽車のなかは、二重廻しの襟をかぶつて、丸くなつて寢てゐた、――かと昌造には思はれる……。

……夕方、雪の蔭が、螢火のやうに蒼み亙る頃、湯本の宿の、昔風に薄暗い土間に立つた。荷物といふほどのものも持たず、普段着のままで、なかにも昌造は、紅梅園の低下駄の鼻緒のゆるんだやつをだらしなく引き摺つてゐた。客の品評に出た番頭が、醜聞染もないこの二人を、階段下の薄暗い八疊に案内したのも無理はなかつた。

早速久保が、女中を捉えて、それとなく瑛龍たちとのことを訊くと、來てはゐるが、二人きりで、まだこゝで落ち合つた客といふのはない、とのことに、昌造は、人知れずほッと安堵の吐息を洩して、

「なアんだ！　さうかい！」

と、思はず知らず大きな聲を出して了つた。

「それごらんなさいなね」

久保も笑つて、「だアね、……えゝと、どうしませうね。勝彌の名前を騙つて、手紙を書いて持たしてやりませうかね」

「えゝ、いゝでせう」

急に元氣づいて、硯箱を持ち出し、二人して、せい〴〵その人らしい文句を考へ考へ、女文字をにせてみたが、久保のうまさは、到底昌造のとは比べものにならなかつた。今更ながら、なんでも出來るこの友達の才氣に感歎して、筆を擱き、自分の書きかけを掌の平に丸めてゐた昌造が、

「實際貴方つて不思議な人だなア。いつの間にかちやアんと見てゐるんですねえ」

「だつて、それア、かういふ手紙をうけ取る數から云やア、なんてつたつて、貴方よりずうッと僕の方が多いでせう、――なアんて……」

「成程、それでね。……どうれで、字が女學生じみてますぜ。小野鵞堂のお手本で習つたつてとこがある」

大凝にこつてやつと出來あがつた贋手紙を、たつた今お着きになつた女のお客樣から、と云つて屆けるやうに女中に云ひつけたが、もとよりそれでうまく〱騙し終せやうとは、内心、二人とも思つてはゐなかつた。前から落ち合ふ約束の宿に着いて來て、態々手紙でそれと知らせてやる筈もないのだけれど、でも、一時たりとも、おやッ！　と思は

はせれば面白いし、第一、そんな風にでもしなければ、執拗くあとを追つかけ廻してゐるやうな自分たちの自身の、やゝてれ臭い氣持にまぎれがつかなかつた。

しばらくすると、廊下に瑛龍の聲が、

「どこ？　そこなの？」

お民は燥いだ笑ひ聲で、

「駄目よ、うつかりがらツと開けるとおどかされるわよ」

「いやだわ。あんた先におはいンなさいよ」

襖の外から聲を張つて、

「駄目ですよ！　ちやんともうわかつてるんですからね！」

用心しいしいそうツと覗き込むうしろから、押し重つて瑛龍の笑ひ顏も現れた。

「きつとさうだらうと思つたんだ」

「手紙の來る前から、ちやァんともう御注進があつて……」

「あら、お民さん！　默つてゐらつしやいよ！」

どや／＼はいつて來ると、すぐもう火鉢を取り卷いて、騒々しいくらゐの賑かさで喋り出した。――こゝへ來るなり、お民がすつかりしよげ返つて了つて、つまんない、つまんないの百萬遍で、却つて瑛龍が慰め役に廻らなければならなかつた、といふやうな話で、二人の追跡も、格別邪魔にならなかつたことが知れると、どうやら少しは落ちついて、昌造の口もほぐれた。

「こつちもね、急に火が消えたあとみたいになつちやつて、どうにも法返しがつかないから、やたら飲んでるうちに、ちよいとからへんなことになつちまつて、久保君に何を云つたかと思つてね……」

「そんなに、憶えがないほど醉つちやつたの？」

「どうも弱つたよ。自動車ンなかで、なんかへんなことでも云やアしないかと思つてね、實は、いまだに久保君の顏が正面に見られない氣持なんだ」

「何しろ、今日の僕は、大した役どこですよ。どうしたつて高田實だね」

瑛龍は、お民の方へ、意味ありげに笑ひかけて、

「高田實の賈家……」

「あはゝゝは」

と、すぐもう他愛もなく笑ひ崩れて、「賈家さんに道具屋さん……」

「え？　何が賈家……」

「いゝえね」

瑛龍は、やゝ態故らしく、横腹を押へて笑ひながら、「久保さんが賈家で、あんたは道具屋ですとさ」

「何がさ。なんのこつたかちつともわかンない……」

「あのね、助さんつてね、最初からゐるこゝの番頭さんが來てね、いきなり、貴方がた熱海からいらしつたんですかつて訊くのよ。さうだつて云ふと、紅楓園でお泊りでしたねつて、いやにニヤ／＼笑つてるか

ら、なぜたなぜだつて訊いてもなかく\云はないの。やつと、ぢア內證で申上げますがつて、誰だか男の人が二人で、あたしたちを尋ねて來たつて云ふから……」

「けしからんな。すぐさう內通するとは思はなかつた。ねえ、加島さん、そんな奴つてありませんね」

それには、笑顏で頷き返して置いて

「そいで、どうしたのさ」

「すぐ、あゝ、いらしつたな！　と思つたんですけど……」

お民が話しかけるのを、途中から瑛龍がひッさらつて、

「でもね、一應どんな人たち？　つて訊いたら……」

「畫家に道具屋か！　でも、ちよいとうまいことを云ふもんですね」

「畫家なら、それア貴方はいゝでせう。それアいゝが、道具屋はひでえや、道具屋は！」

「よくあるやつですよ」

久保は眞赤になつて笑ひながら、「賣れッこの畫家にくッついて步いて、一枚でも二枚でもせしめやうつてのがね……」

「綿屋つてやつだ。可厭ンなつちやうなア、どうも」

「そいで、片ッぽおみ足が悪いやうだつて……」

「おーや、おや！　跛者の道具屋か！」

「ですから、すぐ來やうと思つたんですよ」

お民は、厚ぼッたい唇で乘り出して、「さうしたら、いま手紙を持つてつて貰ふから、それまで默つてろつて仰有つたからつて……」

「しようのない奴だなア。さうどうも先廻りに種をあかされちア、折角の苦心も水の泡だ。でも、どうです、なかく\うまかつたでせう？」

「えゝ、ちよいとよく出來てたわねえ。島田はつなんて、どうしてあの人の本名なんぞ御存知だつたの？」

「加島君に教つたんですよ」

「あら、どうして……？」

「どうしてつて、あんた自分でさう云つたんぢアないか」

「あゝ、さうく\」

その「あゝ、さうく\」は、それとは別なことを思ひ出しての「あゝ、さうく\」らしかつた。久保も、すぐに同じて、

「ねえ、それア、あゝ、さうく\ですよ」

「あゝ、久保さんも御存知なの？」

「御存知どころか？……」

「なに云つてるんだい！」

よほど以前に、ちよいとした話の種くらゐはあつたのだが、然しいくらてれ性の昌造でも、心に疚しくないことで、これはなんと嫐はれても平氣だつた。

やがて、ひと風呂あびて來て、みんなで一緒に食事にかゝらうといふところへ、東京から琴次と三平が着いて來て、一座は斷れ返るほど

の騒ぎになつた。もう一度また、昌造は、正體もなく醉ひ倒れて了つた。

四の六

肩先を揺られて、やつと昌造は目を醒した。お民だつた。

「うん？　なんだい？」

いつか寢鎭つて、廣い屋内に、一層沈々たる夜更の感は深かつた。寢惚眼に見廻すと、食事をした次の間で、隣りの寢床には、三平が彼方むきに丸くなつて寢てゐた。

「なんだい？」

「いらつしやいつて」

「どこに？」

「どこにつて……」

「あゝ、さうか」

「寢惚ちア駄目よ」

「まだ醉が醒めきらないんだ」

足もとは怪しく、暫く休ませてあつた挫折の箇所も痛んだ。

「あぶないわ」

お民に手を把られて、廣い廊下に出た。薄暗い玄關の横手の疊敷から、むく〳〵と首を擡げたのは、夜番の爺らしかつた。昌造は、有繋にきまりが悪く、目を逸して了つた。

「遠いのよ」

長い廊下を奥へ奥へと行つて、藏造の建物にはいつてから、二階へ、もう一つ三階へ、痛む足を運んだ。

襖をあけると、部屋ぢう眞赤だつた。――扱帯で部屋の隅に吊りよせた電燈を、あまつた部分でくるりと包んであつた。どこへでも片づけられる筈の飾臺を間に挾んで、二つの寢床が延べてあり、その床の間よりに　瑛龍はもう身を横たへてゐた。

「どうもこれア……、大へんだなア」

、、、調ひすぎてゐて、なんだかひどく擽つたかつた。

「寢てたの？」

「それアさうさ」

「呼んだぐらゐぢア、なか〳〵目が醒めないのよ。三平さんと二人で、ぐう〳〵つて鼾の掛合……」

「いろけがないのねえ」

「それに引きかへこゝはまたちつとありすぎるねえ」

「いゝことよ」

熱海でも、お民の寢床はすぐ近くにあつた。昌造は、なんの拘泥るところもなく、平氣で瑛龍の床にはいつた。そしてまた、例によつて、夜が明けるまで喋りつゞけた。

前の日の夕方一旦あがつたのが、また夜中にでも降りだしたか、翌日、高い三階から見晴らす雪景色はなか〳〵よかつた。昌造は、眺め

ながらゆつくり喫した卷煙草を、何氣なく灰皿に捨てゝ、その吸口が、紅に染つてゐることに氣がついた。——あんまり出來すぎてゐて、却つて身についた感じは薄く、すぐそれを他人の上に移して、小説の筋などが考へられるやうなものだつた。

　七つの金剛石を鏤めた瑛龍の指環に、旦那との間に經つて行つた七年といふ年月を記念する意味が含まれてゐると知つたのも、その日の午後のことだつた。湯あがりの化粧に、髮網にひッかゝる不便から、どちらもぬいて、鏡臺のはしに載せてあつた二つのうち、王冠型の爪でうけたの金剛石の裏側に、いつぱい白粉のたまつてゐる方が目についたので、しようことなしの時間つぶしに、ふと取りあげて、楊子の先に紙を捲いて掃除にかゝると、瑛龍が、何氣なく、けれども敏捷く、もう一つの、蒲鉾に、ぼつ〱と細なのを並べ植えた方を、そッと左の藥指にはめて了つた。はゝア、と思つたが、その時には、お民がうしろに立つて手をかしてゐたので、口尻に力を入れて、こみあげて來る微笑を押し殺して了ひ、あとで二人きりになつてから、それを云つて、

「隱すだけをかしいよ」

　と、嬲づてみた。

「隱すもんですか」

　負ん氣らしく、ちよつとむきになつて、「見たけれアいつだつて見せてあげますよ」

「いゝえ、何も別にさう」

「いーえ、いーえ、どうぞ、さう仰有らないで是非ごらんくださいまし」

　さう云つてぬいて見せた指環の裏側には、大正五年四月、それから、大河内三郎の頭文字、S・Oが刻んであつた。

「これね、毎年四月七日の紀念日が來ると、そのたんびに一つづゝ珠を殖して來たの。だから、去年で丁度七つになるわけでせう？」

「ふーん」

「まゐつた？」

「まゐつた！」

　さうかと思ふとまた、平氣で一緒に風呂にもはいつた。昌造が髭を剃つてゐると、

「すんだら、お序にちよつとお願ひしたいんですがねえ」

　などゝ、襟頸をさすつてみせたりした。かういふ濶達自在が、どうかすると、始末におえない莫連と思はせないこともなかつたが、たゞどんな場合でも、決して下卑た感じのないのが、昌造の心を安んじさせた。それと、年齢にそぐはない、まるで子供のやうな骨格だつた……

……。

　そのまた翌日は、いかにも、裸で洗濯と謂ふ雪のあしたらしい、ぽかぽかした上天氣だつた。みんな揃つて東京に歸ることになつたが普段着に宿屋の貸下駄を突つかけ、新聞の仕事に要るだけのものを風呂敷包にして、母の別莊の方へも知らせずに、ふら〱と出かけて來

て了つた昌造だけは、さすがさうもならなかつた。小田原で別れて、一人熱海に引き返すつもりで、兎も角も一緒に宿は出た。女は女同士で三人、土産の買物もあるからと、一足先に發つて行つた。

　久保や昌造は、宿の近くで、矢鱈にパチリ〱寫眞を撮つたりしてから自動車に乘つた。幌の間から吹き込んで來る風も、一昨日とはがらりとうつて變つて、春らしい土の匂ひなどが漂つてゐた。

「いゝ氣持だなア」

　思はず呟く昌造の顏を、間に久保を挾んでの彼方から、三平が、わざ〱覗き込むやうに乘り出して、

「それアさうでせうよ。それア貴方は、さだめしいゝお心持でせうよ。ねえ、久保さん、そのくらゐなこたアお互にもうようくお察し申してるんだ。ね、さうでせう？ それをさ、何も、さう、ねえ、……どうも、これが、昌公の病でしてね」

「それアさうだ！ どうも、今度ばかりは、俺も實に……」

「然し、貴方ア何も、云ふとかアないぢアござんせんか。うまらないなアあッしだよ」

「然しもう……」

　それには構はず、久保が、ちよつと昌造の方を顎で指して、「……でせうな」

「さア、それなんですがね、當人、今度はかりはいやに堅くなつてるやうなことを云ふんですがね……」

「無論さ。プラトニック・ラブだもの」

「何です、その、プラトニ倶樂部つてのは」

「うまい！ プラトニ倶樂部は傑作だね」

　久保は、手を拍つて囃しがつて、「ねえ、プラトニ倶樂部はいゝぢアありませんか」

「なんです、倶樂部ぢアないんですか」

「倶樂部だとも。知らないかね、あの、そら、丸の内の……」

「今度俺が會長になつたんだ。ちつと遊びにおいで」

「さうだ」

　調子で、一旦は同意した久保が、眼鏡の奥に、急に大きな目をむいて、「え？ 貴方が會長つてこたアないでせう。うん、さうだ、文吉さん！

　作者註。——文吉は、昌造等の長兄で、安城家の當主だ。

　文吉さんなら會長の資格もあるが、どうも、貴方ぢアねえ」

「ぢア仕方がない、平の會員で我慢しとくがね、兎に角俺はプラトニ倶樂部だよ」

「さうですか、ほんとですか」

「ほんとですとも！」

「今まではさうだつたかも知れないが、今度、この旅行中に……」

「それなんだ！ あたしも實はさう睨んでるんですがね」

「かう云つてる人があるとさ、——どんなに儲な手證を抑へられやう

と、現場を活動寫眞に撮られない以上、誰がなんと云つたつて、知らぬ存ぜぬで押し通してゐれば、仕舞には人が、ぢア矢つ張りさうぢアなかつたのかなア、と思ふもんだつて……」

「それで、貴方もそのでんでいかうつてんですか」

「あたしはさうぢアありませんさ。至つて惚話ッぽい性分で、一度でもそんなことがあれア、とても默つちアゐられませんよ」

「さア、どうですかね？ そんなことがずば〱云へるやうになつただけ……、ねえ、久保さん！」

「さうだ！ それにまた、今度のはちつと念が入つてるからね」

「さう〱！ こいつア、惡くすると活動寫眞もんですぜ」

「兎に角、ほんとはどうなんです」

「だから、ほんとにそんなこたアありませんよ」

「久保さん、あんたもまたお人がよすぎますよ。活動寫眞まで云はれてさ……、大抵わかるぢアありませんか」

「さうかね、ぢア、いよ〱……」

「およしなさいましよ！ そんなこと云やア、昌坊主を、いやが上にもいゝ心持にさすだけのこつてさアね」

「またかういふ術もあるね」

昌造は眞面目臭に、「ない〱」云つてゝ、その實ありさうに見せて、そのまた實は、ない、――ねえ、さういふのもあるでせう？」

「ある〱！ よくきざッぽい野郎が、おつうおさまつてからに……

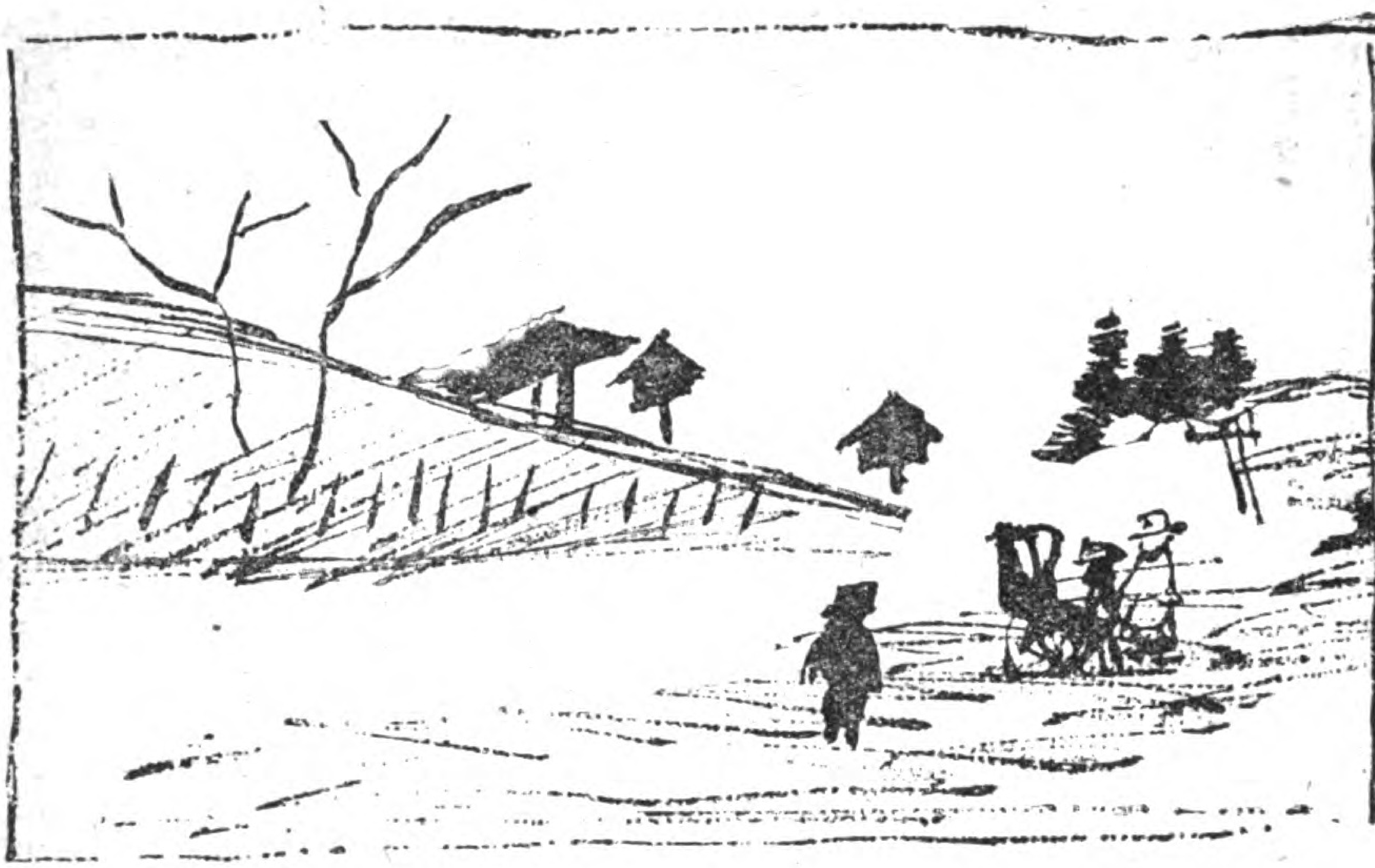
……」

云ひかけて、三平は、もう一度腰掛を乘り出し、「昌さん、氣を惡しちアいけませんぜ。何もあんたのことを云つてるわけぢアないんだから」

「いゝよ、斷らないたつて！ さうだと思ふやうな自惚の薄いんぢアないんだから。兎に角これで、のめ〱學校は卒業してるんだから」

そんな冗口を利き合つてゐるうちに、小田原へ來て了つた。ちよつとの迷つてゐたが、とてもそこから一人になつて、厄介な道中を、母のそばへ歸つて行く氣にはなれなかつたので、斷りの電報をうつて、ひとまづ逗子のうちに歸ることにした。――久振りで女房や子供たちのなかにはいつて、動き易くなつてゐる心持を、靜に落ちつけやうと思つた。大船で別れるぶんには、一人で行く間はいくらもないわけだつた。

やがて時刻が來て、みんなと一緒に、どや〱と上り列車に乘り込んで行つた。



償金四拾萬弗

眞山青果

文久二年八月二十一日。勅使大原左衛門督江戸ヲ發ス。公（島津三郎久光を云ふ）同ク發シテ生麥村ニ至ル。英人四名、馬上我カ列ヲ犯ス。從士麾キテ之ヲ避ケシム通ゼズ。乃チ刀ヲ拔テ之ヲ斫リ、一人ヲ殺シ、二人ヲ傷ク。横濱ノ英人之ヲ聞キ騷動セシモ、終ニ事ナカリキ。是ヲ生麥事件トス。是夜、公程ケ谷驛ニ宿ス。松方助左衛門ヲ急使トシ、變ヲ茂久公ニ報ゼシム。大原卿品川驛ニ留リテ發セズ。（後略）八月二十二日。公程ケ谷驛ヨリ人ヲ馳セテ、生麥異變ノ狀ヲ神奈川奉行ニ報ジ、又江戸邸留守居ヲシテ、之ヲ老中ニ具狀セシム。

神奈川奉行ニ報スルノ書ニ曰ク

島津三郎儀、昨二十一日東海道生麥村通行ノ節、先供近ク外國人乘馬ニテ向ヨリ參リ候處、横合ヨリ浪人體ノ者三四人、外國人ヘ何乎及二混雜一候體ニ付、三郎供方ノ者共引纒ヒ居候所、右浪人體ノ者、外國人壹人ヲ打果シ、其餘外人ハ逃去、浪人體ノ者モ行衞相知不申、三郎供方ノ者所業ニ及候儀ニハ決而無二御座一候。此段御屆申上置候。以上。

八月二十二日

島津三郎使者

國分市十郎

老中ニ具狀スル者ニ曰ク

島津三郎儀、昨日御當地出立仕候段ハ御屆申上候通ニ候。然ル處、神奈川宿手前

ニテ異人トモ四人馬上ニテ行列内ヘ乘込候ニ付、手槍ヲ以テ叮嚀相示候得共、無體ニ乘入候ニ付、無ㇾ是非一先供ノ内足輕岡野新助ト申者、兩人ヘ切付候處、右異人逃去候ヲ右新助追懸行越夫形何方ヘ差越候哉、行衛相知不ㇾ申候。猶精々探索致シ尋得次第、其節ノ時宜承屆、早速御屆可ㇾ申上ㇾ候得共、先早々御屆可ㇾ申上ㇾ旨、程ケ谷驛ヨリ申付越候。以上。

八月二十二日

松平修理大夫家來
西　筑右衞門

以上は島津久光公實紀、卷二（島津公爵家編輯所編纂）に據つて、所ゆる生麥事變の梗概を摘記したのであるが、後世の歷史家は殆んどこの記實を信用する者なく、外人殺傷の下手人は從士奈良原某、海江田某、久木村某その他の數名であつて、右殺傷の原因は島津三郎の使嗾に出でたものであらうとは、皆その研究に於て、一致の見解を有してゐるやうである。又、老中宛の屆書には足輕岡野新助なる者を表面の下手人としてゐるのみならず、一書「久光公記」のごときは更に進んで、「先年同藩を浪人したる足輕岡野新助といふものが、舊主の行列を拜まんとて、窃に此所に來りしが右の有樣（外國人無禮の狀を云ふ）を見て怒に堪へず、躍り出でゝ斬りたるなりと云へり。」との說まで揭げてゐるが、元より岡野新助なる者は架空の人物であつて、實際の殺傷者は久光扈從の前記數名であることは、明白なる事實として疑ふべき餘地がない。

拙作「償金四拾萬弗」は史上の亡是公たる這の岡野新助を擇んで殊更にこれを當時實在の人物と假定して主人公の位地に置き、その進退經歷に就いて作者は自由なる空想をめぐらしたところに、この脚本創作の動機をもつとゝもに、作者自身或種の興味を有するものである。隨つて劇中に展開する諸事實はすべて作者空想の所產に過ぎずして、到底史實的檢討に耐え得られべき性質の作品ではない。作者はたゞこの一篇によりて、些かなりとも當時或は現在思潮の一端に批評を加へ得るとゝもに、多少の諧謔をこの戲曲の讀者及び觀客に送り得ることが出來れば、それにて十分の滿足をなすべきものと思つてゐる。なほ作者として脚本の演出者俳優諸君に希望する一事は、この作品の性質上から云つて、極めて自由に、放膽に、時には寧ろ誇張的表現をも加へて、奔放なる演出を試みられんことである。

主要なる人物

岡野新助　放逐せられし島津家の足輕。
那珂原嘉左衞門　島津久光の近侍役。新助の從弟。
同　小五郎　嘉左衞門の親戚。
大久保市藏　薩摩藩士、御納戶役頭取。
中山尙之助　同上。
甲斐田原次　同上。
木崎篤之助　同上。

新助妻　楠緒　岡野家家つきの娘。
醫者　桃龍
その他、幕府役人、神奈川奉行所の下役、祇園の藝者、仲居、諸國勤王有志者、町人、百姓等——

第一幕

時——文久二年八月二十二日の午後。
處——東海道中、生麥村の休茶屋。

相模國生麥村字神明前に藤の茶屋と呼ばるゝ腰掛茶屋あり東海道の松並木に面するさゝやかなる小家屋にて、一膳飯、煮賣肴などを賣る。舞臺に見ゆるところは、その茶店の一部と庭先なり。上手寄りに緣側づき八疊ほどの休座敷あり、繩暖簾などかけたる土間を通りて見世先に出る。正面は低き生垣ありて、垣の外は街道なり。小さき潜り門あり、飛石づたひに休座敷に通ずる。

街道には並木の老松數幹を見せ、その間より秋日あかるき子安邊の海面を望む。庭のうちには八ツ手、黐の木などの立木あり、その下に牀几などを置く。

靜かに晴れたる日の午後。七ツ半時。(今の五時頃)

幕明く、あか〳〵と照りつくる西日をうけて神奈川奉行所定役並、鶴太十郎、三橋敬助、いづれも草鞋がけ出役姿にて、生麥村名主藤右衛門、茶屋の女房おふじ、隣家の女房およし、その夫德太郎、その他村の男女五六名を集めて當日の異變眞相を探査してゐる。されども村民等は不安恐怖のため、又後難を恐るゝところより、言語も澁滯して返答捗々しからず。

鶴　(役帳に要點を記入しつゝ)すると何んだな。異人連がこの前を下りの方へ通つたのは、八ツ時頃と云ふのだな。

ふじ　はい。八ツ時には少し……過ぎて居つたかも知れません。なあおよしさん、

よし　然うだな、あれでちよつと廻つてゐたかなあ……。

鶴　異人は何人連れだつた、どんな順序に通つた。

ふじ　異人さんは四人連れでございました。若い、三十恰好の男の人が眞ッ先に立つて、その後から大きな被り物をかぶつた女異人が馬に乘つて、それから後が二人、男の人でございました。

鶴　みな馬上だな、四人とも、馬に乘つてゐたな。

ふじ　然やうでございます。

三橋　それで、異人は道の何方側を通つた。街道の眞中か、それ、

ふじ　右左いづれかに片寄つて、馬を進めて行つたか。然うだねえ……なあ、およしさん。お前ッち見た時は、どつち側を通つてゐた。

よし　おら見た時は、濱側の砂除垣の方を通つてゐたよ。

ふじ　然うだなあ。おらも濱側の方を通つたやうに思ふよ。

鶴　濱側といふと、街道の向側だな。(垣の外を指差し)、下り道にすると右側だな、然うだな。(と帳面に記入し)それで、異人どもは、馬を一列にして通つたか、それとも街道に馬を並べて、互に話でもしながらでも通つたのか。

ふじ　この前を通る時には、馬は一匹づゝ通つたと思ひますよ。

よし　然うだよ。一二間づゝ離れて、段々つゞいて來たよ。

三橋　馬の足並は？

ふじ　あれが跎足とでも云ふのかね。パカ、パカ、パカ〱……この位の足取りでござりました。

鶴　別に、砂煙を立てるほどの……駈足ではなかつたな。

ふじ　へえ。至つてゆつくらでござりました。

鶴　(名主を見て)藤右衛門、調書と違ふではないか。島津家家來の書上げには、異人どもは街道一杯になつて、馬を一散に馳らせて來たやうにあるが、今聞けば、一向そんな模樣がない。

藤右　(當惑さうに口篭りつゝ)はい。それは……何んでござります。

鶴　例へ相手が薩摩侯にもせよ。何故そんな出鱈目な書取に、名主の裏判など捺すのだ。今にも外國公使の方から出張して取調べれば、すぐ嘘のはげることではないか。日本御役人の不念になるのだ。

藤右　はい。然し何分にも、島津樣御家來衆が……。

三橋　(齒痒さうに舌打)これ、今日の異變は、外國交際上容易ならぬ椿事だぞ。仕義によれば御國と英吉利と、合戰にも及ぶべき危急の場合なのだ。薩摩一藩が大事か、日本全國が大事か、お前達にしても考へさうなものだ。

藤右　はい、それは最う……。(と、手を擦りゐる)

鶴　高聲には云はれぬが、もと〱今日のことは、島津家に底企があつてのことなのだ。諸國浪人を煽り立てゝ尊王攘夷の説を沸騰させ、それを囮に京都方へ取入つて、關東御政治の邪魔をするのが、彼等の目的なのだ。今日海道に於て、罪なき外國人を斬つたのも、その爲めだ。幕府と外國との談判を紛亂させて、この上にも御政道を難澁に導かうとする謀略なのだ。現に見ろ島津家の屆書には、見す〱自分の家來に外國人を斬らせて置きながら、自分等供方の所業ではない、行列の横合から浪人體の者三四名顯はれて、何か外國人に對し混雜に及んだやうだなど〻、白々しい陳述をしてゐる。いかに朝廷の御威光を笠にきるとて、餘りと云へば無法極まる仕方だ。

藤右　(當惑さうに口篭りつゝ)御政治向の難しいことは、拙者ども

鶴　には分かりませぬが……

だから、現狀見た通りを正直に書上げればいゝのだ。薩摩方をかばつて、不正を助けるのが不都合なのだ。島津三郎が何んだ徳川家いかに微弱なりと雖も、眞逆に、薩摩の醜侍めらに致されるほど零落はしないのだ。

三橋　(遠く耳を澄して) 同役、喇叭のやうだぞ。居留地から英國兵が押し寄せたのではないか。

一同、驚きて耳を立つ。喇叭の聲、微かに聞ゆ。

鶴　(不安を抑へて) いや、外國人には國法がある。一應の外交談判もなく、無闇に出兵する筈はあるまい。

三橋　然うかなあ……。然し最前居留地人民の激昂ぶりでは、何んとも云へたものではない。おれが行つて、樣子を見て來る。

三橋、急がしく走り去る。

鶴　藤右衛門。兎に角この島津家來の書上は信用がならないのだ。異人連四名は街道を一列になつて、靜かに馬を進めたと云ふにみな聞取が一致してゐるから、外國人等は故意に薩摩の供先に割り入つて、無禮を働いたものとは思はれない。

藤右　はい。その時手前は……。土橋手前の並木路を警護いたして居りましたので、委細のところは……。

鶴　そんなら何故、書上げに署名などしたのだ。

藤右　はい、何分、その……薩摩樣御家來衆の、激しい劔幕でございましたので……。

鶴　困つた奴だ。(呟きつゝおふじに向ひ) それで、その下りへ通つた四人の外國人が、程なくバラ〳〵に別れて、遁げ歸つて來たと云ふのだが、その間には餘程の間合でもあつたのか。

ふじ　いゝえ、ほんの些つと、煙草二三ぷくの間でございました。本宮の立場あたりで、急に人聲が騒がしいから、はてと思つて見世先に駈け出して見ますと、その時、男の異人が一人と女の異人さんが夢中に何か叫びながら、馬の鬣に抱きつくやうにして、一散に神奈川宿の方へ駈けて行きました。

鶴　うむ、それがボルデール夫人とマーシャルと云ふ商人だ。(と役帳と照合しつつ) そして怪我の樣子は何うだつた、

ふじ　こちらも顚倒してゐるので、それには一向氣がつきませんでしたよ。それから間もなく、男の異人が二人、後先になつて、馬を馳らせて遁げて參りました。この家の前まで來て、ちよツと二人とも馬を止めて、何か早口に二言三言いふやうに思ひましたが、一人の異人は直ぐ馬を駈けつて宿の方へ遁げて行きますし、一人の異人はその並木の下で、轉ぶやうに馬から振り落されました。

鶴　遁げたのはクラークだ。落馬したのはリチヤードソンだ。うむ、それで何うした。

ふじ　馬は裸馬になつて、街道を上の方へ飛んで行きました。落され

た異人さんは、地べたを這ひずりながら、おらが方へ寄つて來て、手眞似で何か頼んでゐる樣子でございました。見ると左の脇腹からかけて……この邊まで深手を負つてゐます。片手に傷口を抑えて、片手でそこの垣根に縋るやうにして。低く、うん、うゝんと唸つて……最う虫の息でございました。

鶴　苦しまぎれに、水を求めたのだらう。それで――

ふじ　おらも然う思つたから、柄杓に水汲んで持つて出やうとすると下の並木の方にドヤ／＼と足音して、お侍達が四五人、押取刀で異人さんを追掛けて來ました。肩から血を浴びて、白刃を持つてる人もございます。おらあ、胴ぶるひして、足が出ましねえ。そこの葭簾の蔭に、顫えて……立つてゐました。

鶴　その侍は四五人か。薩摩侯の行列のうちだな。

ふじ　いゝえ、それは……分かりませぬ。何んでも、旅裝束の若いお人達でございました。

鶴　刀の鐺を見ても、薩摩侍は知れる筈だ。

ふじ　はい……でもわたしは、恐ろしさに動轉して……何も、一向……氣がつきは致しませんでした。

鶴　（隣家の女房に、嚴しく）お前もその時、見てゐる筈だ。その侍どもは島津家中に相違あるまい。僞りを申立てゝ、後が面倒だぞ。

よし　は、はい。いづれ、お大名家のお供衆とは思ひましたが……薩摩樣の御家來樣やら、どなた樣の御家來衆やら……その邊のところは、一向存じませぬ。

鶴　（舌打）然し、兎に角、その人數は薩摩侯の行列前をみだして、下並木の方から異人のあとを追掛けて來たのだらう。然うだらう。それに相違あるまい。

よし　は……はい。確か、そのやうに思つて居ります。

鶴　人數は四五名だな。中に一人、肩先から血を浴びて、拔刀を提へた者があると云つたな。こちらにも調べがとゞいてゐる。そやつが最初リチャードソンに斬りつけた那珂原嘉右衛門に相違ない。色白に、恰幅たくましい、二十二三歳の若侍であつたらう。

ふじ　はい、はつきりは覺えて居りませんけれど……。

鶴　これ。なぜ然う言葉を濁すのだ。今にも神奈川横濱の兩御役所から出張お取調べになれば、其方一統の儀にもなるのだ。御上に御手數をかけて、恐れ入つたことではないか。

　一同、畏まる時、喇叭の音。やや近く聞え來る。一同、不安さうに耳を立てる。三橋、戻り來る。

鶴　三橋、何うした。喇叭の音が近いやうだ。

三橋　いや別條はない。居留地の英國兵隊が、本覺寺の佛蘭西公使館へ、バッテイラを漕いでリチャードソンの死體を引取りに來たのだ。

鶴　然うか、それなら好い。作法を重んじる外國人が、奉行所に一應の掛合もなく、無闇に暴發するやうな筈はないと思つた。

三橋　然し、事によると街道筋には、英佛聯合の警備兵が出張して、外人保護の任にあたるかも知れないぞ。島津三郎が四人まで外國人を殺傷しながら、外國コンシユールに一言の挨拶もなく、行列を程ケ谷驛へ引上げたと云ふので、外國公使等は一同結束して、薩摩の亡狀無禮をひどく憤つてゐるさうだ。

鶴　薩摩の暴慢は飽まで幕府を苦しめやうとするのだ。

三橋　公武合體など、口には云ふが、彼は水戸の隱居と結托して、德川家に反逆を企てゝゐるのだ。いつその事、英國兵をけしかけて、程ケ谷の行列に、戰爭を開かせればいゝのだ。

鶴　不愼みな事云ふな。人が聞いたら何うする。

鶴、同役をたしなめて又村人を訊問せんとする時、垣の外俄かに騷がしく、宿役人次郎左衞門、神奈川奉行所の下役どもと共に薩摩藩士高崎三六、土師清兵衞の二人を無理に宥めつゝ、ふじの茶屋の木戸門より入り來る。高崎は二十七八歲。

高崎　（木戸に立ち、村役人を叱る）何故いけない。何故われ／＼に限つて、東海道の通行がならないのだ。

土師　奉行所よりの下知か、何人の差圖なのだ。

次郎左　いゝえ、然うではござりませぬが……、異人等は薩摩樣の御紋をよく存じて居ります。御通行は危險でござります。

高崎　（わざと恍けて、着衣の轡の紋を示し）御紋とはこの紋か。これが何んで、危險なのだ。

次郎左　（頸筋の汗など拭ひつゝ）今日この騷動のために、神奈川宿に集りました外國兵隊の騷動は一通りでござりませぬ。殊に御國御藩中の方と見ますると、砲發もいたしかねない劍幕でございます。萬一お怪我などなされては相濟みません。何うか英國兵隊の引上げますまで、御通行の儀は……。

高崎　（土師と顏を見合はせ、何か頷きつゝ）何、異人どもは我藩中と見ると發砲する。それや面白い、何故だ。

次郎左　へー？（呆れたやうに、對者の顏を見る）

高崎　薩摩藩士に限つて、異人どもが發砲すると云ふ意味が解せないではないか。何故異人はわが藩に敵對するのだ。

次郎左　はい……。

高崎　土師、面白いことを聞くもんだな。彼等が理不盡に打ち出すと云ふなら、悅んで打たれに行かうか。

土師　好からう、愉快だ。今われ等二人が理由もなく異人の銃砲に死んだら、諸國の浪人有志の輩が、必ず奮起して横濱居留地へ斬り込むだらう。

高崎　尊王の倡首、攘夷の急先鋒だ。行かう／＼。

土師、高崎、强ひて虛勢をはりて出て行かんとする。宿役

人同心等狼狽して、それを止むる。鶴佐十郎と三橋は訊問をやめて、兩藩士の傍若無人を苦々しさうに見る。
　この時薩摩藩を逐はれし元足輕岡野新助、三十三四歲、見窄らしき木綿縞の袷に長刀草履、腰に淺黄手拭をはさみ、手に玉子笊を下げ、生垣の外を悄然と通りかゝる。高崎等の高聲に罵るを見て悦び、內に入らんとして身を恥ぢ、木戶の外にうろ〳〵してゐる。

士師　（村役人を突き除け）なぜ止める。われ等は打れに行くのだ、

次郎左　もし、飛んでもない。お怪我があつてはなりません。

高崎　われ等は、島津三郎の家來だ。大手を振つて街道を通る。

次郎左　それも一時の間でござります。程なく外國兵は引上げます。

士師　えゝ、放せ。

　　鶴、見かねてツカ〳〵と兩人の方へ來る。

鶴　宿役人、何うしたのだ。（高崎等に向つて）お身様達もまた、宿役人がこれ程に申すのを、何故無法に通行さつしやるのだ。

高崎　貴公は何んだ。

鶴　神奈川奉行所の定役、鶴佐十郎と申す者だ。

高崎　無法に通行すると申しやつたが、天下の公道、通行を謂はれなく差止めるやつこそ、無法と云ふべきであらう。

鶴　お身達の安全をはかつて、差止めてゐるのだ。

士師　異人等は何の意趣あつて。われ等薩摩藩の通行を妨害するのだ。

鶴　何の意趣？　それをお身達は御存知ないのか。

高崎　（傲然と肩を聳かし）一向存ぜぬ、知らぬ。

鶴　然やうか。（苦々しげに冷笑）御存知なければそれ迄だが、今日街道には外國人殺害の大變事があつたのだ。折柄島津三郎どの御通行の行列前の出來事故、御家來のお身達なら御存知あるべき筈と思つた。（笑つて）然やうか御存知なかつたのか。

高崎　生麥村に於て外國人無禮の噂は、なる程聞いた。

鶴　聞いた？

高崎　われ等兩人は、上の御使者をうけたまはり、六郷村から引返して、江戶傳奏屋敷の大原三位卿に伺候して急御用をはたし、唯今行列の後を追掛けるところだ。街道筋の騷動など……もとより承知いたす筈はないのだ。

士師　異人を斬つたのは、浪人體の者と途中噂に聞いた。然るに何故異人等はわれ〳〵に敵對いたすのだ。

三橋　島津家の屆出には、なる程浪人體の者とある。然し、外國人方ではそれを信用いたさぬ。

高崎　何故信用しない。島津家の屆書を疑はれるか。

鶴　それは知らぬ。外國公使の料簡にあるのだ。

高崎　兎に角、われ等は通る、薩摩藩と名乘つて、堂々と通行する。

鶴　異人等に亂暴のおそれあれば、それを取締るは幕府の役目だ。

高崎　幕府の役目――？（苦々しげに口を噤む）

高崎　その取締もつかない癖に、幕府はなぜ異人交易を許したのだ。

士師　異人等が薩摩藩を今日の下手人と疑つてゐるなら猶更のことだ彼等を恐れてこゝに立停れば、ますく彼等の嫌疑に裏書することになる。高崎出掛けやう、

士師、高崎、木戸を出て行かんとする。

鶴　待たつしやい。

高崎　何んだ。

鶴　さてくお身達は……その無法が通るものと思ふか。(寧ろ呆れたるやうな態にて)又、それを通さうとなさるのか。

士師　何だ。

鶴　なる程、捨身の無法ほど強いものはない。お身達は薩摩一藩の意地のみ通さうとするが、今日の事件はそんなに小事と思はれるか。外國と日本の外交上、合戰にも及ぶべき危機存亡の場合なのだ。(嘆息して)お身たちには日本國全體の大事を考へ得られないのかな——、

高崎　外國人が罪なき薩摩を疑ふから悪いのだ。

三橋　では飽までも所書通り、今日の下手人は浪人どもの所業、薩摩は關係がないと主張さるゝのか。

高崎　無論だ。

鶴　然らか、それなれば是非に及ばない。(決然たる態度)われ等も反證を調べ上げて、公然御藩と相爭ふの外はあるまい。

高崎　反證——？反證とは何んの反證だ。

鶴　只今、取調中だ。

鶴、憤然として村民の方へ戻り來て、訊問にかゝる。士師と高崎、木戸を出かゝりしが流石に不安を感ずるものゝ如く鶴等の方を顧みつゝ、頷き合ふ。

岡野新助、編笠をとりておろくと出て來る。

新助　士師さま、高崎さま。岡野新助でござります。

士師、高崎、何か囁き合ふて見向きもせず。

士師　いつもながら御壯健にて、お目出度う存じます、今日は久々ぶりにて殿樣の御行列を拜して、思はず涙が流れました。三郎樣の御威光、さてく凛々しいことでござりまする。

士師　誰だ。(煩さげに振り向き、新助を見て)あゝ、犬か——。(相手にもせず、高崎と相談に耽る)

新助　今日品川の宿はづれより、御行列の後になり先になり附き從ひまして、朋輩、親類、知るほどの顔に縋り附つて嘆願しましたが、新助かと云つてくれる人もござりませぬ。元より自分が悪い、悪い……。何んと賤しめられても恥しめられても、それを無理とは思ひませぬが、みな勇ましく通り過ぎる御行列の後に立つて見送りますと……新助一人、生國薩摩にも見はなされて、身の置所もないやうに思はれます。

士師　(面膨らして、睨む)煩さいな、用談があるのだ。

新助　高崎どの、お手前と岡野の家とは、つながる縁もあることだ。新助の身はどうなつても厭はぬが、せめて岡野家の名跡だけも相立つやうに、お心添を頼みます。

高崎　(相談を終つて、鶴の方に聞かせる高聲にて) それでは兎も角一休みして行から。程ケ谷泊りならまだ日脚がある。

土師　然うだ、然うしやう。

兩人、木戸を入り來る。新助、その後を追ふて入る。

新助　あ、高崎どん、三六どん……。

高崎　(振返つて) えゝ、香がうつる。附くな〳〵。

新助、悄然として木戸を出で去る。兩人は緣側の方に來り腰掛けて手を叩く。

土師　おい、女どもはゐないか、女ども。諸白を持つて來い。

茶屋の女房おふじ、その劍幕に恐れて立たんとする。鶴と三橋、叱りつけて許さず。

土師　何うした、誰もゐないのか。おい、酒だ〳〵。

兩人、緣側に寢轉んで叫ぶ。鶴等、その粗暴を憤慨しつゝも、わざと穩和なる態度にて訊問をつゞくる。

鶴　ではお前達も云憎からうから、異人の後を追掛けて來た人數の藩名は問はずに置かう。然し、その時の模樣だけは取調べる。その時、その若侍等が驅けつけた時、異人リチャードソンはまだ落命してはゐなかつたのだな。

ふじ　はい、まだ……息は通つてゐました。(絶えず高崎を憚りつゝ) 苦しさうに手を振り廻はして、また何かしきつと叫ぶやうでございます。日本の言葉で。水、水……と云つたやうにも思ひました。

鶴　その時、若侍の一人が、いきなり拔刀をリチャードソンの身先につきつけて、末期の水にはこれが好いだらうと云つて、一同高聲に、どつと笑つたと云ふではないか。

ふじ　は、はい。何か云はしやつたやうには……。

三橋　無論その言葉には、國訛りがあつたらうな。

ふじ　え?

三橋　お前も東海道に茶見世を出してゐるのだ。その侍の國訛が中國筋か九州訛か、氣がつかぬ筈はなからう。

高崎　(威嚇的に立ちて) おい酒だ。酒は賣らないのか。

鶴　(高崎等を流し目に見つゝ) まあ好い、はゝはゝゝ、ではそれも問ふまい。で。一同は何かヒソ〳〵相談の上、無體にも、手どり足どり異人を前の芋畑に引摺り込んで、大勢にて一太刀づゝずた〳〵に斬つたと云ふではないか。お前、それは見てゐる筈だ。

ふじ　はい……。

鶴　リチャードソンの死骸の上にかけてあつたのは、お前の家の葭簀だ。知らないとは云はれまい。

ふじ　え、……

鶴　(並木の向側を指示し)その芋畑と云ふはあれだな。左衛門、現場の案内をしてくれ。

　　鶴、先に立つて木戸の方へ歩む。一同、仕方なく隨ふ。

士師　(おふじの前に立ち塞がり)おい、酒は何うしたのだ。

ふじ　はい……。

鶴　(屹として)お手前達は、取調の邪魔をなさるのか。

士師　酒が欲しいのだ。

鶴　酒なら外の茶屋にもある。御用中なのだ。

高崎　貴公は只今、われ〳〵の通行を禁じたではないか。この茶屋に休んだから、この茶屋で飲食するのだ。われ等は私用をもつて當街道を通行いたす者ではないぞ。勅命を帶びて、勅使大原左衛門督さまを警護する者だ。

鶴　例へ勅使警護にもせよ、われ等も幕府の……

高崎　言葉が過ぎる、幕府とは何んだ。大原三位卿はその幕府の因循を憎んで、國政改革のために關東下向あつたのだ。德川家に於ては將軍さへ、從來の規模を棄て、臣家茂と署名して、勅命を奉してゐるではないか。それとも貴公、勅使通行を妨げても差支なしと云はるゝのか。

鶴　これは迷惑な。拙者はたゞ御用によつて……。

高崎　交易差止、異人打拂は、京都禁廷の御趣意なのだ德川家に於て攘夷の御引受は、去年和宮さま御降嫁の時より動しがたき條件となつてゐる。例へ無禮の異人を斬り棄てたにしろ、それが何んで惡い。

鶴　近頃それは……暴論だ。萬國交際を斷絶の上は兎も角も、まだ國交を絶たぬ間は……。

士師　島津家に於ては、既に江戸屋敷發足の砌、若し途中東海道筋にて、異人無禮のあつた際には、遠慮なく斬り棄てべき旨を、老中方まで屆濟みになつてゐるのだ。

高崎　假りに、今日の下手人が薩摩藩士であつたとしても、當方には毛頭責任がない筈だ。外交談判が如何に及んでも、それは外國人の無禮を取締り得なかつた、貴公等奉行所の越度と申すものだ。島津家の存じたことではない。

鶴　(嘆息しつゝ)然やうでござるか。扨々もつて……。

士師　貴公も同じ王臣ではないか。勅命をないがしろにしてまで、禽獸同樣の異人の味方するといふ法はあるまい。同じく邪正理非べにも、日本國民としての態度がある筈だ。

鶴　……

　　劉喨たる進軍喇叭の音、突然間近くに聞えて、村民十數名喧騷して上の方より遁れ來る。一同、驚き騷ぐ。鶴等、制止しても聞かず、大半は顛動して逃げ去る。三橋、鶴、名主等、街道に出でゝ不安さうに見る。高崎と

士師、互に目を見合はせて、流石に恐怖の態あり。
村民の一群、また走り來る。岡野新助、その間に加はりてうろ〳〵狼狽して遁げ來る。

高崎　（刀の目釘など濕しつゝ）士師、こゝだぞ、好いか。

士師　（決死の覺悟）好し、心得た。

高崎　續いて來い。

高崎、士師、切死の覺悟にて街道に躍り出んとする時、岡野新助、それを見て周章して押止むる。
英國兵八九名、赤衣赤帽にて銃劍を肩にしつゝ、喇叭を吹き、下手の方に通り過ぎる。
高崎、士師、ホッと息づきて兵隊を見送る。

高崎　（初めて岡野に氣がつき）新助、まだうろついてゐるのか。

新助　異人兵隊の目にかゝると、お身樣たちの身が危い。（狼狽の口調にて）これから、裏道づたひに、臺の山のうしろを拔けて、お遁げ下さい。手前御案內‥‥御案內いたします。

高崎　餘計な世話だ。誰が遁げると云つてゐる。

新助　然し、外國人の激昂は一通りではござりませぬ。只今も本覺寺門前にて、外國方のお小人が一人、御家御家來と誤られて佛蘭西兵に擊たれ、大怪我を致したさうにござります。

高崎　（突然、高聲）えゝ、薩摩の知つたことではない。

新助　えゝ――？（高崎の顏を見る）

高崎　何を？何を、何を？（新助を睨みつけ、威嚇的に）貴樣、何を云ひ出すのだ。英國人を斬つた者は、わが藩中の者とでも云ふのか。島津家の迷惑を、お主招來したいのか。

新助　いや、決してわたくし……。

高崎　身の恥を知るものだ。犬！一門一族の業曝しめ。

新助　御前體お執成しを願ひます。いまお身方に見限られては、新助一生……お國との緣が切れて、佇むところもござりませぬ。

高崎　新助、お主その姿になつて、まだ死なれないのか。

新助　岡野の家を再興いたしたうござります。わたくし養子に參つたため、寄合並六百石の家柄を……足輕組までおとした上に、家名まで斷絕いたしては、養家祖先に對しても、申譯がござりませぬ。身の誤りはいかやうにもお叱りを受ける。せめて岡野の位牌所だけでも相立ちますやうに……

高崎　誰が、その家名を斷絕させたのだ。この春、伏見寺田屋の騷動の際、大久保どんが內々のはからひで、お主を討手の供方に加へたのは、その手柄をもつて朋輩どもから、岡野家お取立の嘆願をも致さうためなのだ。それをわれ、その場になつて、逐電するとは何事だ。那珂原、江夏、森岡‥‥上意をうけた友人八人のうち、五名は傷き一人は死んでゐるのだぞ。その恥を恥とも思はず、よくもうろ〳〵、この日の下に生きてゐられる。

新助　いや決して、逐電したのではござりませぬ。

高崎　茶漬屋の小女郎に名殘を惜しむうち、刻限に遲れたと云ふのか。その口上で、もはや澤山だ。（苦々しく笑つて）一族朋友も呆れはてゝ、貴樣を責める者もないのだぞ。

新助　（やゝ開き直つて）いや、それは違ひます。手前は……。

高崎　それが諄いのだ。（舌打）お主の酒の上は誰でも知つてゐる。それを今日まで無事にゐるのは、みな愛措をつかしきつてゐるのだ。供先の邪魔をせずと、歸れ〱。

新助　士師氏。聞けば大久保市藏どんは、此度京都表のはたらきをもつて、御小納戸頭取に拔擢され、君側をも勤めてゐるといふことだ。大久保どんとは、手前……年來、申交したこともある。是非貴所の取持をもつて、面談に願ひ申したい。

士師　大久保君も、貴樣の執拗には、持餘してゐるぞ。この度出府中もお主は毎日お屋敷に推參して、市藏どんに面會を迫るのみか、果は御玄關に泣き騷いで、動かなかつたと云ふではないか。

新助　（むッとして）市藏とおれとは、同じ加治屋町に生れて、同じ方限に共に文武を勵んだなかだ。竹馬の友だ。同じ兵兒二歳組だ。

高崎　（肩を立てゝ）面會を求めるに、不思議はないのだ。それを道理と、人が聞くと思ふか。（憫笑）うぬがその、そぼろ姿を見るがいゝ。（と木戸の外を見る）

士師　兎に角、今回の上洛は薩摩一藩必死の覺悟で、上下一統、みな寢食を廢して國事に盡瘁してゐるのだ。おのが一身の進退などは、誰に訴へても問題にはなるまい。足元の明るいうちと云ふことがある。江戸表に歸つて、身を立てるのが肝要だ。人に見られて、この上薩摩武士の恥を曝すではないぞ。

新助　（萎れて）然しそれでは新助……途方にくれます。國元に殘した妻子のことも……心にかゝつてなりませぬ。

士師　それも皆、心柄だ。人を恨むことではない。

新助　はい……。

高崎　士師〱。並木がくれに外國兵が戻つて來るぞ。（やゝ狼狽して）覺悟をしろ、用意をしろ。

士師　うむ、心得てゐる。

喇叭の聲、下の方より近づき來る。高崎、士師、興奮して防戰の用意などする。岡野新助、その間をうろ〱して、恐怖のなかにも士師に縋りて執成を頼む。高崎、怒りて新助の襟を摑み、木戸の外に突き出す。新助、悄然として去る。定役三橋礦助、名主藤右衞門及び宿役人等と共に、顏色を變へて走り戻り來る。

三橋　兩君〱、危險だ。裏山つたひにお遁げ下さい。

高崎　（ギヨツとしつゝも）何を――？　何んで遁げるのだ。

三橋　英吉利兵は街道に警備隊を出して、民家のなかまで搜索してゐます。薩摩藩士と見ると容赦がありません。早く、早く、間道

高崎　から……お引取り下さい。

士師　狼狽へるな。われ等決して、逃げる筈はない。亂暴に及ぶなら、われ等にも覺悟がある。

高崎、士師、わざとふてぐしく、縁側に腰かけて動かず。

藤右　旦那様、旦那様。それでは處の者の難儀になります。村方一同のため、どうかこの場は、穏便に、お引上げを願ひます。お願ひ申します、お願ひでござります。(土下坐して頼む)

高崎　うむ、然う云へば話が通る。(不承らしく立ち) 案内しろ。

藤右　はい。

高崎、士師、宿役人を先に立てゝ、虚勢を張りつゝ去る。三橋、街道に立ちて、上下の形勢を不安さうに窺ふ時、英國兵六七名戻り來り、茶屋の前に歩をとゞめ、指揮者の號令によりて、銃劔を路上に組んで休息する。鶴太十郎、慌しく入り來りて三橋の耳に何か囁く。互に不安さうに顔を見合せ、去る。外國兵等は警備のこゝろにて二三人づゝ分れて街道を徜徉す。

神奈川奉行所の調役稲丸權太郎、書役方岡文吉を連れ、島津藩御小納戸組頭大久保市藏(後の利通)とともに、殺傷現場の共同調査に入り來る。市藏、三十三四、旅行姿なり。幕府方役人の無能無力なるを蔑視して、何迄も傲然たる態度のなかに、機敏巧捷の性格を現はす。常に冷笑を含む。

大久保　返答に窮したのではない。恐らく返答にも及ばぬことゆゑ黙して居ります。

稲丸　然し、外國人公使らは斯樣に明細なる調書が出て居るのに、それを無下に拒まれると云ふは、些といかゞかと思ふ。

大久保　無下に拒みはしない。たゞお答の致しやうがないのに當惑して居ります。(生垣の木の葉などむしつて、笑ひゐる)

稲丸　お聞及びもあらうが、外國官吏は至つて推量を慎みます。堂々たる國際論判の文書に、虚構の事實など申し立てる筈はないと思ふ。貴藩當局に於ても、切に御再考を煩はしたい。

大久保　無論再考は致してゐる。然し、われ等の事實も事實だ。

稲丸　(憤りを抑へて) それでは今一應、英國代理公使よりの抗議書譯文の肝要箇條を讀みます。(調書を讀む) われ等の集め得たる確證について述れば、リチヤードソン一行は神奈川宿より道某地に達する間の街路にて、最初、第三または第四級に屬すると思はるゝダイミヤウの行列に出會したり。そのダイミヤウは約百人ほどの行列にして、一行の外國商人をば、道路の片側を沿ふて歩行することによりて、無事通行を許されたり――これは、貴藩行列の少し前に、この街道を通過されたる高取藩侯の行列と思ひます。

大久保　或は……御推察の通りかも知れませぬ。

稲丸　(また讀む) やがて英國人等の一行は、或る小川のほとりに

て、七百または八百の大數を引率する。或るダイミヤウの行列に出會せり。そのダイミヤウはその紋章行裝に於て、九州ダイミヤウ島津侯の同勢なること明白なり。行列の先頭には、巨大なる體軀の人ありて步行し、此者は一行の外人に向つて、道を引返すやう身振にて指圖したり――これは貴藩行列の先供の家と思はれます。外國人等の道を引返すやう、手眞似にて示したものと考へられる。

大久保　然やうかも知れませぬ。

　　大久保、木の葉などちぎり棄てつつ、冷淡に聞く。

稻丸（讀む）一行の中には一人の貴婦人ありしことゝて、他に取らん術もなかりし故、一行は命令のごとく神奈川へ歸途につかんとして、直ちに馬首を後方に廻らしたり――異人等は先供衆の制止によつて、穩かに馬を引返さうと致したものと見える。然るに貴藩の屆書には――然る處、神奈川手前にて異人とも四人馬上にて行列內へ乘込み候に付、手樣を以て丁寧相示し候へども、無體に乘込み候に付云々とあつて、いかにも外國人等が行列を冒し、亂暴狼藉でも働いたかに主張してゐられる。この事實の齟齬を何んとお考へなさる。われ〳〵は先づこの點から第一に、共同の取調を致したいと思ひます。

大久保　然やう、折角だが……御質問に應じかねる。拙藩に於ても、事實探索の上、實と信ずればこそ差出したる屆書だ。それを信用なさらぬとあれば、貴政府が島津家を信用せぬものと見なければならぬ。それでは最早や論議の要はないと思ふ。

稻丸　然し、第一回の屆書には、今二十一日東海道生麥村通行の節、先供近くへ外國人乘馬にて向ふより乘り候ところ云々とあつて、異人無禮のことは一言も記載してゐない。然るに第二回の屆書に及んで、急に外國人等の亂暴狼藉を眼目に書き立てられたのは、少しく辻褄が合はぬやうに、われ等には心得られます。

大久保（根付時計などを出して見つゝ）第一回の屆書は混雜怱卒の際ゆゑ、調査も行屆きませぬ。第二回の屆書はそれだけ最初の屆より、事實の取調が進行いたしたものと御覽なさるが好いのだ。屆書に辻褄の合はぬところに、却つて事實の眞相があります。

稻丸　然らば、最初の屆書には、外人殺傷の下手人は三郎供方の者の業では決してない。行列の横合より浪人體の者三四名躍り出でゝ刃傷に及んだのだと斷言しながら、後の屆書には前言を翻して、外國人の狼藉無禮を見かねて、先供足輕の何某が異人兩名に切り付けたと屆けてある。この前後不揃、首尾の相違は何んとなさるゝ、これも矢張り、取調進行の結果と見申すべきであるか。

大久保（ジロリと對手を見て、冷靜に）その前に一言、お尋ね申し

たい。

稲丸　はて。

大久保　拙者は只今、貴下の御訊問を受けて居るのか

稲丸　いや、無論訊問ではない。お手前は島津家のお使として、拙者は神奈川奉行所の命をうけて、共同取調を致して居ります。

大久保　島津家には自ら島津の式作法がある。例へ御公儀役人にもせよ、謂はれなき御訊問には應答いたしかねる。

稲丸　然し、この屆書の首尾不揃は何んとなさるゝ。

大久保　それは御判斷にあることゝ思ふ。當方はたゞ當方の眞實を申し立てたのだが、あながちに異人側の申分のみ信仰して、お聞取りなきうへは是非に及ばぬ。われ等は沈默して天下、有志者の正義に訴へるより外はない。時刻が移ります、お暇いたします。

稲丸　お待ち下さい。然しこの第二のお屆を見ると、貴藩に於ても殺傷者を貴藩行列中の者と認められてゐるやうだが、事實然やうでござりますか。

大久保　無論、その文面の通り。

稲丸　かほど重大の下手人を、たゞ先供のうち足輕組何某とのみあつて、姓名を御記載なきは何故でござります。如何に混雜の際とは云ひ條、大勢の人數のうちその見知人がないとは申されますまい。

大久保　それは、少しく思ふところあつて、わざと姓名を記さなかつた。

稲丸　然し外國公使方から下役人引渡しの談判をうけたら何んとなされます。人命を貴重する外國人の習慣として、かゝる亂暴をうけながら、泣寢入りになる筈はない。必ずその交渉があると思ひます。その時は如何いたさるゝ御料簡でござる。なる程、貴藩の者が切るは切つたが、姓名は知らぬと仰せられる氣か。正義卒直を眼目となさる御藩風にも似合はしからぬことゝ存じます。

大久保　お言葉中だが、公儀役人は異人方から下手人引渡しを要求されたる際には、阿容々々外人に引渡されるこゝろらしいが、その點われ等とは根本の趣意を別にしてゐる。（嘲笑的に云ふ）

稲丸　何んと云はるゝ。

大久保　薩摩方に於ては、今日の殺傷者を犯罪者とは見申さぬ。攘夷はもとより朝廷の御念願、御宸慮を奉體するは臣下の常道かと思ふ。屆書に足輕何某と記して署名を憚つたのは、拙藩當局の者が、時にとつて機宜のはからひを致したものと思ふ。貴公等は單に下手人の穿鑿のみなさるゝが、それよりも第一の要點は無禮の外國人を斬り棄てたは、果して罪惡であるか、それとも正義の發露か、先づ以てその詮議をなされべきと存ずる。根本を忘れて枝葉の論議は、拙者ども迷惑に思ふ

稲丸　いや、その根本を決定いたすには、猶更事實の調査が必要と存じます。殊に、然やうの重大問題は、自から擔任の御老中があつて、われ等づれ小吏の關り知ることではない。拙者はたゞ、命ぜられたる奉行の旨意をうけて、事實の取調べを致す分に過ぎませぬ。

大久保　では飽迄も、殺傷者の氏名を明かにせよと迫られるのか。

稲丸　當方より迫るまでもない。貴藩に於て飽迄公明を主張さるゝならば、事實の内容を明瞭にいたした上、しかも自說を貫徹されるのが當然かと思ふ。

大久保　萬一、當藩に於て、その發表を拒みましたる際は、貴方がたにては、いかゞ處置なさるゝか。

稲丸　是非に及びませぬ。江戸政府の差圖に從つて、事實の判明いたす迄は島津三郎どのに、お氣の毒ながら程ケ谷驛に、御逗留を願はねばなりますまい。

大久保　御老中職よりの、御判物が有りまするか。

稲丸　奉行所に御出頭くだされば、何時にても御覽に入れます。

大久保　然やうか――。(沈思)

稲丸　朝廷の御旨意は兎に角として、現在政治の御委任をうくる以上は、關東政治の綱領は日本全國を支配するものと心得て居ります。隨つて、島津侯に向つても、御服從を望まねばならぬ場合もあるかと思ひます。

大久保　致方がござりませぬ、不本意ながら文書をもつて、今日の殺傷者の姓名を、御老中までお屆け申しませう。

稲丸　それは千萬、忝なう存じまする。

行軍の喇叭、耳近く響き來る。(幕)

第二幕

時――前場と同じ日、夜。五ツ半時。(午後九時頃)

處――東海道程ケ谷驛、島津三郎の本陣。

旅舍桔梗屋利兵衞の奥座敷。平舞臺。今夜の宿舍にて役人用部屋に使用せらるゝ二室ほどの座敷。床の間つきにて、廊下に面す。庭園の一部を見る。

室内には御用行李旅荷物などを紛亂させて混雜を示し、廊下の長押衝立などには裸蠟燭を點して明をとり、庭の植込のかなたには篝火の焰など空にうつりて、嚴重なる警戒ぶり見ゆる。廊下には島津家の幕を張る。

部屋の一隅には未だ食せざる膳部三四人分、飯櫃などゝ共に積み重ねたり。

幕開く。夜廻りの拍子木の音のみにて、舞臺暫く空虚。

やがてガヤ〳〵と人聲聞えて、久光の近侍役那珂原嘉左衛門、朋輩の若侍木崎篤之助、下寺源三郎、谷山省吉などに護衞されて、押入れらるゝやうに入り來る。いづれも英國兵襲來の風聞に備へるところあり、旅裝を解かず、油斷なき態なり。

那珂原嘉左衛門、二十二三歳、國風の大髷、朱鞘の大小、色白く骨太く、飽迄たくましき恰幅なれども、應對態度何んとなく鄙なびて、世間馴れぬ樣子見ゆる。

那珂原　（やゝ興奮して、友人を見返りつゝ）何處へも出るんぢやない。外を眺めたんだ。（プリ〳〵して、座敷の中央にぶつ坐る）

下寺　落付けよ。何を然う、うろ〳〵するんだ。

那珂原　何時おれが、うろ〳〵した。（口を尖らす）

下寺　そんなら、お飯でも食つたらどうだ。

那珂原　（腕組み、激しく頭を振つて）欲しくない！

木崎　那珂原。御上も御心配になつてるぞ、嘉左衛門は少し上擦つてゐる。みな氣をつけて落付かせるやうにと、再々のお言葉だ。

那珂原　馬鹿を云へ。（强いて鼻先に笑はんと勉めつゝ）毛唐人ひとり斬つたとて、逆上するおれぢやない。

木崎　奉行所の取調で、お主の名が明かになつてるんだ。幕府がたの者に姿を見せると、事が面倒になるぞ。

那珂原　然し、隱れるのは厭だ。おれが斬つたのだ。英吉利兵隊が襲擊して來るなら、おれを下手人として突き出せばいいのだ。

下寺　またそれを云ふ。貴樣を引渡すなら、誰も苦勞しない。

木崎　島津家一藩の意氣地に換えても、ここは決して弱音をふくところぢやない。飽迄も頑張つて、關東役人を蒙昧させてやるのだ。

那珂原　然し、來るぞ。異人兵は必ず襲つて來るぞ。

下寺　その時はその時だ。宿中に鐵砲組を配置して、戰爭の手配は疾うについてるのだ。薩摩侍八百が、眞黑にかたまつて討死する分のことだ。騷ぐな、上下みなその覺悟でゐる。

那珂原　だが、御上の御身に萬一のことあつては……。

木崎　行つて御模樣を拜して來い。本陣に着くなり御酒を過ごされて、こゝろよく高鼾で寢てござらしやる。あの剛膽は、流石に御血統だ。お側もみな、舌を卷いてゐるぞ。はゝはゝ

那珂原　（突と立ちて）料紙はないか。國元へ書狀を認めたい。

（舌打）又騷ぐ、坐れ。お主の行つたことは、藩內共同の意志なのだ。決してお主ひとりの責任にはしない。大久保どんもわざ〳〵出張して、公儀役人と談判をしてゐるのだから、內輪から事を破つてはならないのだ。お主がうろたへて騷ぎ出すと、自然御上の御名まで出るのだぞ。分つたか、氣を落付けて、結果を待て。

那珂原　(溜息ついて、一箇所を睨む) うむ、分つた。

木崎　智慧者の大久保どんだ。決して幕府役人に踵をさらはれるやうな不間を働く氣遣ひはない。今にかならず、事を仕上げて歸つて來るに相違ないのだ。分つたか、分つたか。

那珂原　うむ、知つてゐる……分つた。

木崎　お主の身でも、お主の自由にはならないぞ、輕はずみなことして、御上の御迷惑になつては相濟まない。(那珂原の肩を叩いて) な、分つたか。騷ぎ出してはならないぞ。

那珂原　うむ分つた、分つた。

嘉左衞門、興奮のあまり怪しき涙に誘はるゝごとき心持あり。一點を凝視しつゝ、頻りに頷きゐる。

この時、庭園の方に激越せる詩吟の聲聞ゆる。詩は藤田東湖正氣歌の一節なり。

木崎　(ふと耳を立てゝ聞く) あの吟聲は、誰だ。

下寺　甲斐田のやつらしい。興奮して、又起き出したな。

木崎　(舌打ちして) 困つたやつだ。世話をやかせる。

木崎、下寺、共にその方へ出てゆく。嘉左衞門、漫せぐり來る涙に胸迫りて、腕組みのまゝ肘にて切りに目を拭ふ。

甲斐田源次、三十一二歳、少しく酒氣を帶びて、これも興奮しつゝ出て來る。脚絆甲掛、旅裝のまゝなり。

甲斐田　(歸の者に云ふこゝろにて) 醉つてるんぢやない、馬鹿な……この大事な夜を眠られるか。(嘉左衞門を見て) 那珂原、貴公も禁足されてゐるのか、馬鹿々々しいのう。

那珂原　(感傷心を紛らひつゝ) 皆こそ空騷ぎしてゐるんだ。おれは決して、逆上してるのぢやない。

甲斐田　殘念なことした。おれは只、一足おくれた。(胡坐を組みつゝ) おれは御用によつて、後供の者に今夜宿陣の差圖などしてゐると、お供先の方で、急に險しい人聲だ。それと云ふので駈けつけて見ると、お駕脇はみな白刄を拔きつらねて、何が何やら皆目見當がつかない。中山どんまでが目を吊るし上げて、兩手を振り廻はしながら、何か喚き立てゝゐるのだ。並木の松原を見ると、異人が二人、馬の頸に抱きついて、神奈川宿の方へ一散に逃げてゆく。これだなと思つたから、おれは夢中にその後を追掛けたのだ。すると、あの腰掛茶屋の前だ。

那珂原　(顏を上げて) 然うだつたかなあ……貴公もゐたのか。

甲斐田　あのリチヤードソンとか云ふやつの襟頭をとつて、芋畑に引摺り込んだのはおれだ。

那珂原　(漸く思ひ出して) うむ、然うだ。お主があいつの、リチヤードソンの腰車をかけて拂つたのだ。

甲斐田　それは菊村だ。おれの駈け付けた時は、やつもう瞳があかつて、茶屋の前に這擦り廻つてゐた。お主拔身の鋒を異人の鼻

那珂原　先に突きつけて、何か大聲に叫んでゐたではないか。今も皆に、それを云はれたが、おれには覺えがないのだ。異人のあとを追掛けたのさへ、夢中と云へば夢中だつた。

甲斐田　(膝を進めて、低聲)事實、お差圖があつたのか。

那珂原　(驚きて、甲斐田の顏を見詰め)ん――?

甲斐田　御駕のなかで、二度ほど窓緣をお叩きなされたとも云ふ。同時にお主が拔きはなして、異人に斬りつけたのだと云ふ噂もある。

那珂原　(急に激しく、首を振り)知らん〳〵、おれはそれ、知らないぞ。

甲斐田　(舌打ちして又立ち)上役ども、何してるんだ。今更評定が何んの役に立つ。最早や斷の一字あるのみだ。事を彌縫しやうとするから、いつも腰が据らないのだ。因循極まる。

那珂原　然うだとも。おれ一人を下手人にして、幕府方に引渡せばいゝのだ。兎に角おれは死ぬ、早く死にたいんだ。

甲斐田　(屹と詰咎めて)お主、何んで死ぬのだ。

那珂原　面倒だ。おれは只……死にたいんだ。

甲斐田　お主の今日の所作を、誰も非難してゐる者はないぞ。

那珂原　その善惡を云ふんぢやない。面倒なんだ。この騷動の責任者はおれだ。見てゐるのが苦しいんだ。甲斐田、賴む、介錯してくれないか。

甲斐田　馬鹿、何を血迷つてゐるんだ。死場所は外にある。

那珂原　(頭を抱へて)おらあ……死にたい、死にたい。

甲斐田　えゝ喧ましい。うぬの贅澤を云ふ時ぢやない。

那珂原　(廊下の人聲を聞き、彈かれし如く立ち上り)おゝ歸つて來た。市臧どんが歸つたやうだ。

甲斐田　(耳を澄して)いや、違ふ。土師の聲のやうだ。

源次、不安さうに唇を嚙んで待つ時、土師吉兵衞、上役に報告を終りて歸り來る。木崎、下寺等その後に付き來る。

土師　草臥れた〳〵、飯はないか。(座敷に入り、壁際の膳部を見て、)その前に胡坐)有難い、助かつた。誰のか知らんが、借りるぞ。

甲斐田　で、何うだ。異人兵隊は押寄せて來るか。

土師　それが、全く不明だ。(飯を手盛りにしつゝ)高崎は大膽に、居留地の方面を探索に行つたが、このところ何んとも云はれない。然し、外國人は餘に激昂してゐる。合戰の準備もしてゐる。

木崎　大久保どんに會はなかつたか。奉行所に出頭したのだ。

土師　いや、見なかつた。

甲斐田　やはり街道筋に、英吉利兵が警備してゐるのか。

土師　(飯を食しつゝ)うむ。太田新田から戸邊山のあたりは、みな

赤兵隊が劍付鐵砲で固めてゐる。仕方なくて、迂濶に寄りつけない。

木崎　戸邊山？　あんな邊まで出てゐるのか。

土師　油斷はならないぞ。うむ。

那珂原、話を聞きて興奮のさまにて、切りに甲斐田の袖を引き、何か囁く。甲斐田、頷きつゝ報告を聞く。

土師　それに、幕府方でも探索かとゞいてゐる模樣だ。無論こちの屆書などは信用しない。飽迄も非違を糾彈するつもりらしい。

甲斐田　それ見ろ、云ふ通りだ。大體あの屆書は誰の案文なのか、小刀細工に過ぎた。大藩の面目を傷けるものだ。發議者は大久保か、中山か、誰の智慧なのだ。

木崎　それを今調べて、何にする狼狽するな。

甲斐田　狼狽ぢやない。當局の無決斷を責めるのだ。

土師　それにな、旗本御家人の激昂、一通りぢやないぞ。（飯を盛りつゝ）役人どもに薩摩の始末がつかないなら、われ等八萬騎の武力をもつて暴徒を挫いて見せるなどと、土藏から襤褸鎧をかつぎ出して、力味かへつてゐる頑固黨もあるさうだ。

甲斐田　（人々の失笑するを睨めて）何が可笑しい。それが順序だ。關東にも三河武士の子孫が殘つてゐる筈だ。

土師　明日の馬入河か、酒匂が切所だ。若しわれ等を引止めるとしたら、この兩所を固めるに相違ない。油斷はならないぞ。

この對話の間も那珂原は頻りに興奮して、袴の紐を結び直し、刀劍の目釘などを檢め見ることあり。

甲斐田　木崎、下寺。これでも貴公等はおれを止めるか。

木崎　おれが止めるのぢやない。お上の下知だ。

甲斐田　大久保は、兎角おのが才智を鼻にかけたがる。彼等の辯口小才をもつて、この難關を凌ぎ得ると思ふか。あの策略ぶり……苦々しいことだ。中山を呼んでくれ、おれが談判する。

木崎　お主こそ、ぎやあ〱云ふな。中山氏はいま國元藩公へ宛てゝ機密の御用狀を認めてゐられる。

甲斐田　然し、その間に、若し英國兵が殺到したら何うする。貴公、その時、責任を持つか、持つか。

木崎　馬鹿なこと云ふな。何を云つてゐるんだ。

甲斐田　兎に角、役人に取次いでくれ。至急建言がある。

木崎　えゝ耳が、がん〱する。大久保どんの歸るを待て。

この時、同じ近侍菊村利助、激しき聲にて那珂原の名を呼び立てつゝ走り來る。

菊村　那珂原、那珂原。異人兵は清閑神社の邊まで押して來たさうだ。みな用意しろ、異人兵が寄せて來た。

一同、驚く。菊村の聲を聞いて、他の室よりも血氣の若侍六七名。廊下を踏み鳴らして、ドヤ〱と來り集る。

那珂原は、ふり落ちる涙を拂つて何か決心する體にて、

無言、驅け出す。甲斐田、それを見て那珂原の名を呼びつゝ、慌しく追掛ける。一同も不安さうにその後を追ふ。

舞臺暫く空虚。

大久保市藏、那珂原の腕をとりて叱りつけつゝ、入り來る。甲斐田、面膨らして不興氣にその後より來る。一同も戻り來る。

大久保　何を騷ぎ立てる。聖順公以來の御趣意を忘れたか。(那珂原を突き放し)今こそ上下必死の場合だぞ。お主たちの血氣を滿足させるために、空騷ぎする時ではないのだ。(憎惡とも見ゆる眼光にて對者を睨みつゝ)坐れ、何んの態だ。

嘉左衛門、大久保を恐れて不承々々に坐る。大久保、靜かに胴服を脱ぐ、坐す。

甲斐田　(怺えかねて、憤激の聲)大久保、大久保。

大久保　何んだ。

甲斐田　その、上下必死の場合に導いたのは誰だ。みなお主等の口才ぶりから、この結果になつたのだ。今は小策を弄する時ぢやない、果斷突進すべき時なのだ。袴の裾でも括り上げて、膽を据へろ。

大久保、答へず。煙草入など袖より出す。

甲斐田　幕府いかに無能でも、君等の辯舌に惑はされる筈はないのだ。今にも仕掛けて來たら、何うする氣だ。まだしも豫定通り神奈川に宿陣すれば、足場も廣く江戸との連絡がついてゐるんだ。それを狼狽して、こんな山間の宿場に逃げ込み、同勢を引ッ窄めてしまつたため、江戸屋敷との連絡も絶えて、何をするにも働きがならないのだ。初め一歩の臆病が、この結果になつたのだ。

大久保　(ヂロリと甲斐田を見て)疲れて歸つて來たのだ。飯は何うかとでも、聞いたら好いだらう。

甲斐田　おりやその、貴樣の、老成ぶりが氣に入らないのだ。

大久保　金銀が出て働いてゐるのだ。お主等のやうな步兵桂馬は、盤の上に躍り出す時ではない。默つて見てゐろ。

甲斐田　步兵桂馬、結構だ。お主のやうな尻腐れ銀にはなりたくない。

那珂原　(オツ〱進み出て)然し、斯く、外國兵と幕府と、腹背ともに兵をうけては、所詮遁れがたいところと思ふ。われ〱に百人の足輕をお遣し下さりたい。

大久保　(睨めて)又餘計なこと……。何を嘲ぜる。

那珂原　然し、先ずれば人を制し、後るれば人に制せらる。坐して彼等の來襲を待つよりは、横濱居留地に突擊して、一擧に、夷人打拂ひの事實を示したいと思ひます。何卒世公から、御上の御指令を申し願はれたうござります。

大久保　異人は押寄せて來ない。その段は氣遣ひない。
那珂原　でも只今の報告では、既に道中淺間神社の邊まで兵を出して、われ〱を威嚇して居ります。
大久保　(微笑) いや、大丈夫だ。わしは幕府役人の望み通り、立派に下手人の姓名を書けて、相當の手續きを踏んで來た。
那珂原　え、下手人――? (流石に顏色を變ずる)
　一同驚きて大久保を見詰める。
大久保　今日こそ、落魄の舊友に酬ゆる時が來た。はゝはゝゝ。みな誰だと思ふ。あの岡野の新助を、下手人に屆けて來たのだ。はゝはゝゝ。(快く笑つて、目の涙を拭ひつゝ) 何幕府の方はかまはない。誰にしろ下手人の名前さへあがれば、外國人に對する申譯が立つ氣でゐるのだ。誠意のない役人どもよ、德川家の命脈も先が見えてゐる。
土師　然し、萬一公儀から下手人の引渡しを迫られたら何うなさる。外國問題だけに、幕府もこのまゝにはゐるまい。
大久保　引き出した横車だ。押せるまで押して見るのよ。奉行所でも切りに下手人の引渡しを迫るから、新助ことは重々の不始末あつて、當春島津家を追放した者で、現在は脫藩浪人、何んの關係もないと、極端に突ツぱなしてやつたのよ。はゝはゝゝ。
甲斐田　その追放者が、何んで今日、行列のうちにゐるのだ。
大久保　(甲斐田を睨めて) 默つてゐろ。その足を擬はせるおれでもない。新助は落魄渇命のあまり舊主人に瞻顧のため街道に行列を出迎へたが、外人の無禮を見るに見かねて、怒りに耐へず、路傍より躍り出て異人兩名へ斬りつけたが、逃げ去る異人のあとを追掛け行き、それなり何方へ差越候哉、行衞相知れ申さず候。猶ほ精々探索いたし尋ね得次第、其の節の時宜を承り早速御屆け申上ぐべく候と、老中宛に屆け置きにして來た。先づこれで、事は濟んだ。はゝはゝゝ。
甲斐田　馬鹿な。(苦笑) 誰がその小刀細工を信ずるのだ。
大久保　誰が又、幕府に信じさせやうとした。薩摩は無理を言つてゐると、役人どもに知らしなれば、それでいゝのだ。(笑ふ) 那珂原、お主には從兄、困つたやつだが新助は、おれの幼友達だ。せめて文書の上ばかりでも、あいつを人間らしくしてやりたいと思つて、おれも陰ながら厚意をはこんだつもりよ。はゝはゝゝ、禍も三年といふが、新助もこれで、生來初めての忠義を島津家につくしたことになるだらう。
甲斐田　その子供騙し、嫌ひだ。(立上り) さ、那珂原。
那珂原　うむ。
大久保　甲斐田。おぬし又、わやくを入れるのか。(睨む)
甲斐田　坐つて敵を待つてはゐられない。居留地を襲へば、皆殺しだ。
大久保　御上に願ふまでもない、國元へぼい歸すぞ。

甲斐田　何だ。

大久保　年甲斐もない。先に立つて、何んの態だ。行つて寢ろ。

甲斐田　ちよツ、その策士ぶりが厭なのだ。結果を見てゐるぞ。

　源次、ぶつ〳〵呟きつゝ足音荒く去る。

大久保　那珂原。お主もまだ顛動してゐるぞ。攘夷は天下有志の輿論とは云ひながら、一國の存亡にも關係する大事件なのだ。既に事を擧げた以上は、靜かに經過を觀望して、最大善後の策をとらなければならない。この際にして、一歩を誤れば、薩摩は滅亡だ。最後まで、靜かに、最後まで靜かに――日新公の御格言を忘れてはならない。最後まで靜かに洞察を失はないのが、大丈夫の勇なのだ。御國人は兎角血氣にはやつて、大事を失するの嫌ひがある。

那珂原　(膝を摑んで、俯向き)は、愼しみます、愼みます。

大久保　中山氏はどれにゐらるゝ。お次の間か。

　大久保、靜かに立上がる時、下寺源三郎、急ぎ入り來る。

下寺　大久保氏。また岡野が尋ねて參りました。

大久保　岡野とは、新助のやつか。(流石に聲音を變へる)

下寺　火急の大事ゆゑ、是非大久保氏の膝を抱いて話したいと、式臺に坐り込んで動きません。

大久保　また醉つて、泣事をならべに來たのだらう。相手になつては際限がない。那珂原、貴公よろしくはからつて歸してくれ。

那珂原　そりや困ります。(面を膨らして)おれは、あいつの顏も見たくない。在江戸中も一度も面會いたしません。

大久保　貴公には、差渡しての從兄ではないか。おれは御用があるのだ。

那珂原　あいつと親類のため、どれだけ肩身をすぼめてゐるか知れない。誰か、餘人に應對さして下さい。

大久保　まあ好い、會つてやれ。人間はあの通りだが、酒が惡いのだ。たゞ生麥の一條は、まだ、彼の耳に入れては不可ないぞ。――少しおれに、考へがあることなのだ。今聞かせると、却つて彼のためにならない。

　大久保、去る

　那珂原、不平らしく後に殘りしが、仕方なく立上つて玄關の方へ行く。

　暫くして、岡野と那珂原、互に睨み合ひつゝ入り來る。從兄弟なかの隔てなき間なれば、口論は却て激烈に聞ゆる。

新助　あゝ、おれは犬だ。犬で結構だ。觸るな。

　新助那珂原を睨み〳〵廊下を來る。

那珂原　(その前に立塞がつて)だから、何用あつて來た。

新助　お主へ來たのではない。大久保に會ふのだ。

那珂原　市藏どんは、御用中だ。

新助　（落着き拂つて）待つてゐる。夜があけても大事ない。

那珂原　用を云へ。

新助　知らん。

那珂原　えゝ勝手にしろ

　新助、座敷の一隅に坐る。那珂原、憤然として足音高く立ち去る。やゝありて又出て來る。

那珂原　（廊下口に立ち。憎々しく）新助、貴樣はどこまで、一族親類に恥をかゝせたいのだ。

新助　人間でないおれに、親類はない筈だ。何が恥だ。

那珂原　國元の女房子は何う暮してゐる。

新助　おれも聞いてるぞ。おれが御追放以來、お主たち親類申し合せて、坊主が軒下に佇んでも……誰も見向いてくれる者はないさうだ。何が親類だ。おれは知つてる、知つてゐる。

那珂原　それは皆、誰の罪だ。六百石の家柄から足輕組に落されるさへあるに、大事の場合に卑怯を働き、阿房拂ひにまでなるとは何事だ。何んと云つてゐる、國元の沙汰を聞いて見ろ。

新助　肥柄杓の柄が拔けたものと思へ。觸るから手が汚れるのだ。

那珂原　こいつめ――

新助　この身に落ちて、なあ嘉左衞門、お主たち諸親類が集つて、新助ひとりを邪魔あつかひにする要愼ぶりを見ると、却つてこつちから、賤しめてやりたい氣がするよ。はゝはゝゝ。

那珂原　（赫として足踏み）用事を云へ。

新助　大久保に會ふのだ。

那珂原　何？

新助　市藏を呼べ。

那珂原　（齒を噛んで、口惜しがり）こいつ――引摺り出すぞ。

新助　何。

那珂原　何。

　那珂原、怺えず組み付く。新助抵抗してこれと爭へども、元より非力にして那珂原に組み敷かれる。大久保、復命を終りて戻り來る。

大久保　那珂原。御座の間近く、何んの眞似だ。

　兩人、叱聲に驚き手を放す。殊に新助は大久保を見るや困惑畏縮のさまにて、室の片隅に小さくなる。大久保、目くばせして嘉左衞門を去らしむ。

大久保　岡野、又困らせに來たのか。懲性のない男だ。

新助　（手拭にて額の汗を拭き）はい申譯もござりませぬ。

大久保　舊友としての情誼は、おれは既に盡してゐるつもりだ。この上おれに、何う働けと云ふのだ。西郷やおれの親切を、いつも君は自分から破つてゐるのではないか。

新助　身を悔むより外はござりませぬ。（俯向きて涙含む）

大久保　西郷と村田新八は、國事によつて又島流しになつたぞ。友人、同輩、みな身命を犧牲にして國家のために奔走してゐるの時、貴公はたゞ酒色のために身を持頽して、藩中の名譽まで傷けるとは何んたることだ。少しは膽に臍をしたら何うだ。

新助　はい……。

大久保　もはやおれも、意見も云ひ飽きた。岡野、よく考へるがいゝぞ。

新助　あ、待つて下さい。

大久保　何んだ。

新助　今日參つたのは、新助、一生の覺悟を極めて參りました。

大久保　それを聞いても、如何とも致しやうがないのだ。今夜は上下混雜してゐる、いづれ又——。（去らんとする）

新助　（涙を拂つて）大久保どの。今日はいつもの新助ではございませぬ。御芳情の段骨身に徹して感謝いたします。

大久保　（ハツとして、不安さうに）何——？

新助　（俯向いて、兩手に膝頭を掴みつゝ）正直に申せば、わたくし狼狽して、一度は川崎の橋の上まで遁げました。流れる水を見詰めながら、しみ〴〵と考へました。（ホロ〳〵と泣き）舊友、大久保どのなればこそ、この身に落ちた、新助に、死後の功名を立てさせて下さるのだと、身に染みて考へました。何うか、何うかわたくしを、生麥の下手人として、奉行所へお引渡し下さい。

大久保　（愕然として）何、岡野。何を云ふんだ。

新助　今日御老中宛に屆書の趣は、樣子あつて、奉行所下役の者から洩れ承はりました。御親切の程は、決して忘れません。

大久保　岡野、お主——それを聞いて來たのか。……

新助　江戸屋敷にて面會をことはられる度に、實は、實は……お怨みも致しました。然し、それは皆、新助が、わが身をはからぬ愚鈍ゆゑと、氣がつきました。決心して居ります。決して今度は……卑怯な眞似は致しません。何うか、わたくしを異人殺害の下手人に……。

大久保　然うか、お主それを聞付けたのか。（と仕方なく笑つて）それでも覺悟をきはめて名乘つて來たゞけは、貴公一生の大出來だらう。市藏、後々のために記憶して置きます。

新助　親類、一門、朋輩、もはや斯うまで見放されては、何處に立寄る瀬戸とてもございませぬ。女房子供に……死んで詫をする時はこの時と思ひました。死にます、死に……ます。その代りには何卒岡野の名跡だけはお立て置き下さるやうに、貴下よりくれ〴〵もお願ひ申し上げます。

大久保　折角だが岡野、あれは屆書の表面だけなのだ。決して下手人など差出す必要はないのだ。

新助　（顔を上げ、見る）え、何んでございまする。

大久保　はゝはゝ。必どころか、假にも下手人など幕府に引渡しては、後々とも薩藩の弱味になつて、迷惑しなければならない。たゞ關東役人が切りに泣きつくから、口から出放題に書出して來たのだ。後も先も、たゞあれだけで濟んだのだ。はゝはゝ。

新助　それなれば何も、權兵衞八兵衞でも――

大久保　差支はないのだ。けれども、貴公の姓名を書上げたについては、その時おれにも多少の考へはあつたのだ。いづれ分かることだから、まあ當分は忘れてゐてくれ。

新助　然し、關東方では飽迄も下手人引渡しを――。

大久保　まあ好いよ。そのことは吾輩にまかせて、貴公などの口を出すところではない。用が濟んだら、引取つて貰ひたい。

新助　いや然し……。

大久保　口を出しては困る。御國にとつても大久保一身にも、今日は乾坤一擲の大博打を打つてるのだ。御用が急く、それでは――。（と立つ）

新助　あ、大久保氏。

大久保　岡野。御用の妨げをしては困る。

新助　然し、拙者も折角身命を抛つて、一代の御奉公を勵む料簡にござります、何卒岡野の家名が復興いたしますやう、御上に御訴訟を願ひ上げます。

大久保　時節を待つがいゝ、いづれその時もあるだらう。然し、今日はその時ではない。

新助　然し、然し、大久保氏――

大久保　（急がしく懷中より小判三兩取出し）こゝに三兩ある。今日はこれをもつて、おとなしく歸るがいゝ。たゞ江戸中をうろつき廻つて、幕府に召取られるやうな事があつては、お身の損になるぞ。お家のために何等の手柄にならぬばかりか、お身の生命にもかゝはる次第だ。何れ何方にも身を忍ばせて、時節の來るのを待つが肝要だ。

新助　然し今日は、新助にとつて一世一代の大事の日にござります。大久保氏、何卒お執成しを……。

大久保　えゝ、諄い、歸らつしやい。

新助　大久保氏……大久保氏……。

大久保　歸らつしやい。

泣き縋る新助を突き飛して、大久保は去る。岡野新助、悄然として殘る。前に投出されし小判を眺めつゝ、悲しげに涙含む。

――幕――

（つゞく）

編輯だより

◇「現代日本文學全集」第二回募集につき「改造」讀者及全集第一次會員の熱烈なる御後援を感謝します。殊に本社の全國的講演について與へて下さつた御芳情をも併せて御禮申上げます。私どもは內容を絕對的のものたらしむる爲に精進奮鬪し、以つて文學的に重要な使命を果たし、且つ皆さんの御期待に副ひたいと思ひます。

◇八月號の「改造」ではこれ等地方へ旅していただいた文壇人總出の紀行文を滿載して綠蔭下の好伴侶としたいと思ひます。八月號からは一層誌面の改革に一大努力をいたします。

◇「現代日本文學全集」會員のため開催する夏季大學は六月下旬その日割、場所を發表します。信越、東京、九州、阪神地方、北海道のうち二箇所だけは場所も確定してゐますが、あとの三ヶ所と同時に發表します。上海、朝鮮、滿洲其の他各地より會場を提供するから開催せよとの希望も多いのですが、今回は豫定した場所だけでしか講演が出來ぬのを遺憾に思ひます。八月はまた夏季大學用で本社員も出張しますから宜しく。

◇本全集の六月配本は數日前第一次會員、第二次會員とも全部完了しました。七月配本は「有島武郎集」「有島生馬集」とします。第百二十八頁の大册で豫告內容より「惜みなく愛は奪ふ」「ドモ又の死」の二篇を追加しました。八月配本は「里見弴集」「佐藤春夫集」でこれまた五百頁を超過する大册で二千枚以上の原稿が這入ります。

◇それから「露伴集」に「五重塔」がはいることになりました。獨步氏の作品と葛西氏の代表作は本社の全集より他に這入りません。二葉亭氏の代表作「平凡」も前同樣本社に版權があります。本全集の特製會員に配付する書棚の工夫も漸く出來ました。何れ近く本社の一文學月報」で報告します。

◇今回本社から「勝海舟全集」「松瀨青々全集」を發行します。本社は全集もので聊か他の出版に遲滯を生じましたが、今月よりすべての點に於て整頓しましたから今後の我社は從前に數倍する飛躍を試みたいと思ひます。

◇夏の自然は朗かで快爽です、月下の瞑想、朝ぼらけの郊外にそぞろ生命の飛躍を思はせます。お互に少閑を得てはたのしい瞿寢も貪りませう。しかし意義ある事業をのこさんとするものにはその寸暇も汗だくつづけです。火中涼の修業です。

◇不平あらば訴へよ、泣きたくば泣けよ惡いことには節制も必要だか、自然の恩寵にそむいて神經衰弱なぞに冒されたまうな。私どもは何も遠慮するところなくこの樂しい夏の自然と戰ひたのしみたい。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	貳錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲御大數の時は他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

△外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和二年六月十八日印刷納本
昭和二年七月一日發行

（價五拾錢）

東京市麹町區內幸町一ノ三 幸ビルヂング
編輯兼發行人　山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷人

印刷所　秀英舍

發行所　東京麹町區內幸町一ノ三 幸ビルヂング一階
改造社
振替東京八四〇二
電話銀座一四五八
營業部一五〇四六
編輯部一七三三

『有島武郎集』の內容增加

◇現代日本文學全集會員諸君へ◇

本全集の第二回募集につきまして第一次會員諸氏の熱烈なる御聲援を感謝します。一々皆さんに懇篤なる御禮狀を差上ぐべきですが、私どもは皆さんに酬ゆる第一の道は內容を絕對的のものとするにあると思ひ此點に精進奮鬪します、內容も、頁數も茲に、一大英斷を斷行します。これで禮狀にかへたいと思ゐます。七月配本は「有島武郎集」「有島生馬集」といたします。內容は實に

一千百枚菊判五百二十頁

に達し

といふ堂々たる冊子となりました。「武郎集」は「小さき者へ」「カインの末裔」「生れ出づる惱み」「クララの出家」「或る女」等公約による全部を

「惜みなく愛は奪ふ」

一枚の抄錄もなく收容し、更に

「ドモ又の死」

の二篇を加へました。「生馬集」も既定のもの以外に「獅子ウブラジンとエレル老人」一篇を追補しました。尙ほ會員諸君から最新銳の文壇人の名作を追加するため數卷をふやせとの聲は我社の見と一致したるを以つて今回七八卷の增加を斷行することにした。しかしこれは文學史的に重要な問題であるがため、數旬以前より本社と文壇權威者たちと相談中であつたが、略ぼその案も決定するに至つた。此點も會員諸君の御諒承を願ふものである。尤も書架等の贈呈は三十七卷の完了と相俟つものである。

改造社

最新刊

吉田絃二郎著

旅人

喧囂たる我現文壇の中にあつて、一人曠野を歩む旅人にも似たる詩人！世の功名心をよそに、益なき鬪爭を後へに、一路人間性の深き探究へ！藝術的氣品の徹底へ、わが吉田絃二郎氏の筆は冴へた。氏の味ひ多き人生觀、脈々として盡きざる幽寂、人生のなげきやさびしさを漲らせて、委曲を盡す所氏の魂を移し、眞情の内に雄渾、典雅な氣魄を吐露して遺憾なし。本書は氏の最近の感想十九篇に加ふるに、戯曲「聚樂の人」及び小説「蔦」「霜夜」「或る男と女」「淺草の裏」「支那燈籠」の五篇を收め得たり。讀書子の要望旺んなり。

◆四六版上製 三七三頁
◆定價壹圓八拾錢 送料書留二十錢

▲ダビデと子たち ◆定價一圓八拾錢 送料二十錢

▲運命の秋 ◆定價二圓 送料二十錢

▲二人歩む ◆定價一圓八拾錢 送料二十二錢

▲芭蕉 ◆定價一圓六拾錢 送料十八錢

▲父 ◆定價一圓九拾錢 送料二十錢

發兌 東京市麹町區内幸町 幸ビルデイング一階 振替東京八四〇二番 改造社

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO COGIMACHI-KU, TOKIO.